

ありふれない天の鎖の 投影魔術師は世界最強

小説大工の源三

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

南陽高校3年の天野士郎はいつも通りの日常を過ごしていた。しかし突然その日常は崩れ去る。

日常に戻るため、使える物はなんだって使う！そう決意し異世界で過ごしていく！
タグは後で増やしていきます。

←作者のTwitterです

<https://mobile.twitter.com/ijigensanyu>

k

入り切らないタグ

ダンボール戦機

目次

設定

ステータス！ | 2

ステータス（ウルの後） | 10

異世界転移と奈落の底

異世界召喚なんてふざけやがって！

22

ステータスプレート、何これバグって

る!?! | 32

さあ訓練、馬鹿につける薬はない

41

月下の約束、ボク達は…… | 48

オルクス大迷宮 | 53

トラップ発動！ふざけやがっていい！

57

ベヒモスと義妹の決意 | 63

奈落の底で…… | 71

気絶していた5日間とその後 | 83

ドーピングだ！いいからドーピングだ

！ | 88

封印されし美しき吸血姫 | 92

ベヒモスに復讐だ……あれ？蹂躪？

101

奈落の最下層……神速を持って奴を斬

れ！ | 109

反逆者の住処と封印の真実と寄り添う

	二人の決意	126
	帝国からの使者	143
	奈落の底からの旅立ち	151
	樹海とウサギとライセン大迷宮	
	残念ウサギと遭遇	164
	シア・ハウリア	170
	帝国兵はやはりクソ	180
	ハルツィナ樹海	191
	フェアベルゲン	198
	ハウリアブートキャンプ！&シアの告	
	白！	221
238	劇的ビフォーアフター、ハウリア	

	ブルツクの町、ヨホホ！①	249
	幕間の物語 Part ① 恵里の救済	
	ブルツクの町、ヨホホ！②	271
	ポロポロの竜騎士とライセン大迷宮	
	279	
	セレディイイイイイイイ！違ったミレ	
	デイイイイイイイイ！	286
	ミレディ・ライセン	295
	重力魔法会得完了！	310
	さらばブルツクよ！こんにちはフユ	
	レン！あと依頼！	321
	魔物襲撃とパパ！？	

3	———	442
2	———	429
419	———	409
	———	400
	———	383
	———	373
	———	367
	———	355
	———	339

528	———	511
	———	495
	———	490
	———	472
	———	463
	———	457
	———	452

砂漠と火山と大海

砂漠って暑いし寒いから好ましい場所
じゃないよな。そんな所の事件って……

砂漠の国アンカジ	564
グリューエン大火山	577
大火山攻略でピンチ!?	587
大火山で再び魔族襲来	594
大火山からの脱出	604
母娘の再会	611

リーニヤの家族について

623

メルジーネ海底洞窟攻略

627

過去の真実

642

悪食討伐戦

652

叛逆者への刺客と終わりへと近づく大迷

宮攻略

母子との約束と異端者認定

667

王都侵攻 前編

683

王都侵攻 中編

698

王都侵攻編 後編

715

悲劇を起こさせはしない

720

さてさて、これから先どうなりますこ

とやら。

735

氷雪洞窟	893	追い詰められた者達と魔王	1013
雪山に向かうまで	883	最後の神代魔法	996
最後の大迷宮と神		光と闇の切り離し方	984
		!	969
昇華する魔法	875	今、光と闇が交わりセイバーに見える	
快樂と反転の試練	854	は自分だ。	955
樹海の大迷宮の試練	826	虚像は虚像であるがそれと同時にそれ	
帝国落ちる	811	嘘吐きの独占欲	943
791		tle	933
ハウリア族への一喝と皇帝への謁見		正に光と闇のEndless Battle	
帝都	771	913	
新生ハウリア!?	753	迷路って天国と地獄思い出すよね。	
教師と竜騎士	743	901	

選ばれたのは……

1026

鎖が最後に残したモノは……

1044

絶望と憎悪の狭間で少女は狂気に踊る

1059

神話決戦

反撃の会議

1076

ライセン迷宮、今度は楽々？

1091

竜人族の里へ

1103

オルクス迷宮攻略！

1122

反撃準備の休憩

1137

鎖を解き放つ魔法

1146

神話を創造するのは我々自身だ

1155

地上の猛戦

1167

陰陽の竜と騎士

1182

不死鳥は2度舞う

1197

創り癒し破壊する

1216

呪いの使い方

1241

愛する者を取り戻せ

1263

愛はきつと届くから。

1276

願いの対価は……

1293

ハッピーバレンタイン！

1308

神の終焉

1323

ただいまと言える場所

1345

設定

ステータス！

|||||

天野士郎 18歳 男 レベル：???

天職：天の鎖／投影魔術師

筋力：19637×α

体力：18762×α

耐性：18498×α

敏捷：17672×α

魔力：14388×α

魔耐：14620×α

技能：対魔力・変容「＋気温耐性」・投影／解析魔術「＋複製投影」ブローケンファンタズム「＋壊れた幻想」

「＋イメージ投影」「＋投影速度上昇」「＋消費魔力減少」「魔力効率上昇」「＋複数同時

発動」「＋解析眼」「＋結果記憶」・憑依継承「＋刀剣審美」「＋様物」・民の叡智「＋天の

鎖」「＋イメージ生成」「＋消費魔力減少」「＋魔力効率上昇」・魔力操作「＋魔力放射」「＋

魔力放出」「＋魔力圧縮」「＋遠隔操作」・狙撃「＋飛距離上昇」・回路接続・鷹の目「＋業の目」・完全なる形・心眼・強化魔術「＋永続強化」「＋消費魔力減少」・気配感知「＋大地感知」「＋魔力感知」「＋熱源感知」「＋特定感知」・気配遮断「＋幻踏」・胃酸強化・纏雷・天歩「＋空力」「＋縮地」「＋豪脚」「＋瞬光」・夜目・遠目・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・恐慌耐性・全属性耐性・先読・金剛・豪腕・威圧・念話・追跡・生成魔法・言語理解

容姿

中性的な顔つき、髪はドラクエ11の主人公くらいの長さ。色は白緑。

服はドラクエ11の勇者の服に謎のヒロインXオルタのコート。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：???

天職：錬成師

筋力：10950

体力：13190

耐性：10670

敏捷：13450

魔力：14780

魔耐：14780

技能：鍊成「+鈹物系鑑定」「+精密鍊成」「+鈹物系探查」「+鈹物分離」「+鈹物融合」「+複製鍊成」「+圧縮鍊成」「+肉体鍊成」「+地形鍊成」「+消費魔力減少」「+魔力効率上昇」・魔力操作「+魔力放射」「+魔力圧縮」「+遠隔操作」・胃酸強化・纏雷・天歩「+空力」「+縮地」「+豪脚」「+瞬光」・風爪・夜目・遠見・氣配感知「+特定感知」・魔力感知「+特定感知」・熱源感知「+特定感知」・氣配遮断「+幻踏」・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・恐慌耐性・全属性耐性・先読・金剛・豪腕・威圧・念話・追跡・高速魔力回復・魔力変換「+体力」「+治癒力」・限界突破・生成魔法・言語理解

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

清水幸利 17歳 男 レベル???

天職：闇術師

筋力：6852

体力：6263

耐性：5621

敏捷：5216

魔力：18523

魔耐：18462

技能：閻属性適正「+圧縮発動」「+放射発動」「+発動速度上昇」「+効果上昇」「+持続時間上昇」「消費魔力減少」「+魔力効率上昇」「+連続発動」「+複数同時発動」「+遅延発動」「+付加発動」・高速魔力回復「+瞑想」・魔力操作「+魔力放射」「+魔力圧縮」「+遠隔操作」・胃酸強化・纏雷・天歩「+空力」「+縮地」「+豪脚」「+瞬光」・風爪・夜目・遠見・気配感知「+特定感知」・魔力感知「+特定感知」・熱源感知「+特定感知」・気配遮断「+幻踏」・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・恐慌耐性・全属性耐性・先読・金剛・豪腕・威圧・念話・追跡・高速魔力回復・魔力変換「+体力」「+治療力」・限界突破・生成魔法・言語理解

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

白崎香織 17歳 女 レベル???

天職：治療師

筋力：10030

体力：11047

耐力：10600

敏捷：11510

魔力：27800

魔耐：26900

技能：回復魔法「+回復速度上昇」「+回復効果上昇」「+複数同時発動」「+イメージ補強力上昇」「浸透看破」「+範囲回復効果上昇」「+遠隔回復効果上昇」「+状態異常回復効果上昇」「+消費魔力減少」「+魔力効率上昇」「+連続発動」「+複数同時発動」「+遅延発動」「+付加発動」「+付加発動」
 効果上昇「+持続時間上昇」「消費魔力減少」「+魔力効率上昇」「+連続発動」「+複数同時発動」「+遅延発動」「+付加発動」
 射「+魔力圧縮」「+遠隔操作」
 「+瞬光」
 感知「+特定感知」
 属性耐性：先読・金剛・豪腕・威圧・念話・追跡・高速魔力回復・魔力変換「+体力」
 治癒力：限界突破・生成魔法・言語理解

八重樫雫 17歳 女 レベル???

天職：劍士

筋力：17120

体力：12561

耐性：11365

敏捷：14538

魔力：9548

魔耐：9482

技能：劍技「斬撃速度上昇」「+抜刀速度上昇」「+無拍子」・魔力操作「+魔力放射」

「+魔力圧縮」「+遠隔操作」・憑依継承「+刀剣審美」「+様物」・胃酸強化・纏雷・縮地

「+爆縮地」「+重縮地」「+振脚」「+無拍子」「+天歩」「+空力」「+豪脚」「+瞬光」・

風爪・夜目・遠見・気配感知「+特定感知」・魔力感知「+特定感知」・熱源感知「+特

定感知」・気配遮断「+幻踏」・隠業「+幻撃」・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・恐慌耐性・

全属性耐性・先読「+投影」・金剛・豪腕・威圧・念話・追跡・高速魔力回復・魔力変換

「+体力」「+治癒力」・限界突破・生成魔法・言語理解

|||||

|||||

園部優花 17歳 女 レベル???

天職：投擲師

筋力：10582

体力：12597

耐性：9582

敏捷：13598

魔力：8652

魔耐：8952

技能：投擲術「+投擲速度上昇」「+飛距離上昇」「+遠隔回収」「+遠隔操作」「+目標補足」「+自動追尾」・短剣術「+斬撃速度上昇」・火属性適正「+圧縮発動」「+放射発動」「+発動速度上昇」「+効果上昇」「+持続時間上昇」「消費魔力減少」「+魔力効率上昇」「+連続発動」「+複数同時発動」「+遅延発動」「+付加発動」・魔力操作「+魔力放射」「+魔力圧縮」「+遠隔操作」・高速魔力回復「+瞑想」・胃酸強化・纏雷・天歩「+空力」「+縮地」「+豪脚」「+瞬光」・風爪・夜目・遠見・気配感知「+特定感知」・魔力感知「+特定感知」・熱源感知「+特定感知」・気配遮断「+幻踏」・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・恐慌耐性・全属性耐性・先読・金剛・豪腕・威圧・念話・追跡・高速魔力回復・魔力変換「+体力」「+治愈力」・限界突破・生成魔法・言語理解



ステータス（ウルの後）

天野士郎 18歳 男 レベル：???

CV：小林ゆう

イメージソング：サザンクロス

天職：天の鎖／投影魔術師

筋力：19637×α

体力：18762×α

耐性：18498×α

敏捷：17672×α

魔力：14388×α

魔耐：14620×α

技能：対魔力・変容〔＋気温耐性〕〔＋五感強化〕〔＋身体変化〕・投影／解析魔術〔＋

複製投影〕〔＋壊れた幻想〕〔＋イメージ投影〕〔＋投影速度上昇〕〔＋消費魔力減少〕〔＋

魔力効率上昇〕〔＋複数同時発動〕〔＋複合投影〕・憑依継承〔＋刀劍審美〕〔＋様物〕・民

敏捷：5216 [＋最大9045]

魔力：18523

魔耐：18462

技能：閻属性適正 [＋圧縮発動] [＋放射発動] [＋発動速度上昇] [＋効果上昇] [＋持続時間上昇] [＋消費魔力減少] [＋魔力効率上昇] [＋連続発動] [＋複数同時発動] [＋遅延発動] [＋付加発動] [＋身体強化] [＋魔力操作] [＋魔力放射] [＋魔力圧縮] [＋遠隔操作] [＋胃酸強化・纏雷] [＋身体強化] [＋天歩] [＋空力] [＋縮地] [＋豪脚] [＋瞬光] [＋風爪・夜目・遠見・気配感知] [＋特定感知] [＋魔力感知] [＋特定感知] [＋熱源感知] [＋特定感知] [＋気配遮断] [＋幻踏] [＋毒性] [＋麻痺耐性] [＋石化耐性] [＋恐慌耐性] [＋全属性耐性] [＋先読] [＋金剛] [＋豪腕] [＋威圧] [＋念話] [＋追跡] [＋高速魔力回復] [＋瞑想] [＋魔力変換] [＋体力] [＋治療力] [＋限界突破] [＋生成魔法] [＋重力魔法] [＋言語理解]

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

白崎香織 17歳 女 レベル???

天職：治療師

筋力：10030

園部優花 17歳 女 レベル???

天職：投擲師

筋力：10582

体力：12597

耐性：9582

敏捷：13598

魔力：8652

魔耐：8952

技能：投擲術「+投擲速度上昇」「+飛距離上昇」「+遠隔回収」「+遠隔操作」「+目標補足」「+自動追尾」・短剣術「+斬撃速度上昇」・火属性適正「+圧縮発動」「+放射発動」「+発動速度上昇」「+効果上昇」「+持続時間上昇」「+消費魔力減少」「+魔力効率上昇」「+連続発動」「+複数同時発動」「+遅延発動」「+付加発動」・魔力操作「+魔力放射」「+魔力圧縮」「+遠隔操作」・胃酸強化・纏雷・天歩「+空力」「+縮地」「+豪脚」「+瞬光」・風爪・夜目・遠見・気配感知「+特定感知」・魔力感知「+特定感知」・熱源感知「+特定感知」・気配遮断「+幻踏」・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・恐慌耐性・全属性耐性・先読・金剛・豪腕・威圧・念話・追跡・高速魔力回復「+瞑想」・魔力変換「+体力」「+治癒力」・限界突破・生成魔法・重力魔法・言語理解

ユエ 3 2 3 歳 レベル 7 5

天職：神子

筋力：1 2 0

体力：3 0 0

耐性：6 0

敏捷：1 2 0

魔力：6 9 8 0

魔耐：7 1 2 0

技能：自動再生「＋痛覚操作」・全属性適正・複合魔法・魔力操作「＋魔力放射」「＋魔力圧縮」「＋遠隔操作」「＋効率上昇」「＋魔素吸収」・想像構成「＋イメージ補強力上昇」「＋複数同時構成」「＋遅延発動」・血力変換「＋身体強化」「＋魔力変換」「＋体力変換」「＋魔力強化」「＋血盟契約」・高速魔力回復・生成魔法・重力魔法

シア・ハウリア 1 6 歳 女 レベル 4 0

技能：劍術・格闘術・短刀術・氷属性適正・氷耐性・魔力操作〔＋魔力放射〕〔＋魔力
 圧縮〕〔＋遠隔操作〕・炎耐性・熱耐性・竜化〔十一部変化〕・気配感知・人竜一体〔＋融
 合〕〔＋技能融合〕〔＋ステータス融合〕・念話・変成魔法・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・
 重力魔法

メルリアン 30歳 雌 レベル59

擬竜種

CV：悠木碧

筋力：6830〔＋13818（融合時）〕
 体力：6540〔＋13432（融合時）〕
 耐性：7180〔＋14710（融合時）〕
 敏捷：5950〔＋14402（融合時）〕
 魔力：4690〔＋10036（融合時）〕
 魔耐：4870〔＋11084（融合時）〕
 技能：火炎放射〔＋圧縮放射〕〔＋弾丸放射〕・水流放射〔＋圧縮放射〕〔＋弾丸放射〕・

異世界転移と奈落の底

異世界召喚なんてふざけやがって！

「ここ南陽高校3年1組の教室にて、一人の男子生徒が欠伸をしていた。

「であるからして〜おつと今日はここまでだ、ちゃんと復習するように」

現代文の教師が授業を終え、教室から出ると同時にチャイムが鳴る。

欠伸をしていた男子生徒は席を立ち、弁当箱を2つ持つて教室から出ようとする。

「士郎〜また妹ちゃんのとこ行くのか？」

「うん」

「お前いい兄貴だよなあ。アタシんとこの兄貴なんかぐうたらだしよ」

「それをボクに言われても……それじゃ」

天野士郎、南陽高校3年1組の男子生徒。容姿は中性的な顔立ちの一人の男。そんな彼の運命は今日この日を持って大きく変わっていくこととなった。

士郎 side

ボクは自分の教室を出て隣の2年の教室に入る。

妹は友人と談笑している姿を見つけ、弁当箱を渡しに近くに歩く。

「はい恵里、今日の弁当」

「ありがとうお兄ちゃん」

天野恵里(旧姓中村恵里)、小学生の時に投身自殺をしかけた所を、偶然通りがかったボクが助けた。今では天野家の一員として生活している。元両親のその後なのだが母親の方は暴力を振るった父親よりは軽いものの罪はあるので刑務所にいるらしいが、父親の方は父さんからは何も聞いてはいない。

弁当箱を手渡したボクは空いている椅子に座り風呂敷を開いて弁当を食べる。

「オニーサンの弁当はいつも美味しそうですね」

「ひとつ何か食べる?しかし、天之河はハジメに絡んでるのか」

「わーい、じゃあ卵焼き貰います!」

「それだけじゃなくて、朝なんて檜山達が絡んで来たんだよ……」

「嫌われに来てるの?ハジメと香織は付き合っているというのに……」

やれやれとため息を吐く。

「士郎」

「幸利、ここ空いてる」

「ああ、邪魔する」

幸利はボクの隣に座り食べ始める。

彼と出会ったのはボクが中学3年生の頃で、漫画を買いに行った時に彼と意気投合し連絡を取り合うようになった。

出会った当初はかなりガリガリで、某名前を書いたら死ぬノートに出てくる○崎みたいな容姿だった。とにかく何か食べさせて標準体重まで戻して、そのせいなのか食事への関心に目覚めオタク心も相まって料理にハマった。実家が洋食屋の園部優花と最近料理について語り合っていると聞いた。一番好きなアニメは食戟の○ーマだそうだ。

「ごめんね天之河くんが突っかかって来て……」

「なんで天之河くんの許可があるんだろうね……私はハジメ君や士郎さんと食べたいのに」

「そばに香織を置いておきたいんじゃない？じゃないとあそこまで執着しないでしょ……」

優花はため息を吐く。

「雫も天之河あれの対応お疲れ様」

「慰勞してくれるのは士郎さんだけですよ……」

そう言いながら縋りついてくる。ボクは彼女の頭を撫でる。サラサラしてるなあ。

「んうう」

「雫さん気持ち良さそうだね」

彼女も天之河の暴走の尻拭いに疲れているのはここにいるみんなが知っている。しかし恵里は頬を膨らまし不満そうな顔をしている。撫でると気持ち良さそうに顔を綻ばせる。

「ハジメ、お前も毎度のように絡まれて大変だよな」

「うん、もう慣れたよ……」

「ハジそれは慣れちゃいけないよ!」

そうこう談笑し食事も終わって次の社会科担当の畑山先生が来たので、教室に戻ろうとした時だった。突然視界が眩しく輝き、クラスの人の足元には謎の魔法陣があった。

「皆!教室から出せ」

誰かが叫ぶも言い切る間もなく、眩い光に包まれ光が収まった頃、教室内には誰一人いなくなった。

(どこかに移動しているのか?なんだ頭に何か入って……ぐあああああああ!)

自分の頭の中に知らない情報が押し込まれていく。それによりボクに激しい頭痛が襲いかかる。締め付けるように突き刺さるその痛みが長い間続いた。

長い頭痛も治り、目を開けて最初に目にしたものは、大きな壁画だった。縦横10mは

越えていそうな大きさ、描かれていたのは長い金髪、うっすら微笑む中性的な顔立ちの人物だった。

おそらく崇拜されている者の絵画なのだろう。あまり関心を抱くのが嫌になる絵だ。更に周りを見ると大きな広間にいるようだ。造りは簡単に言えばどこかの神殿のような造りだ。そしてこの広間の最奥の台座の上にボクらは立っている。周りの人もおそらく昼の時間にいた人、つまりあの教室にいた人がこの場にいる。

そして少し背伸びをして台座の前を覗く。そこには祈りを捧げるように両手を胸の前で組み跪いていた。格好は金の刺繍がなされた法衣を纏っていて、いかにも異世界の神官か何かのようだった。

その内の1人がその場に置いてある錫杖を手にして顔を上げる。その顔はひび割れたようなシワがいくつも拡がり長い間生きていたことがわかる。歳は70くらいだろう。

そして落ち着いた声でボクらに話しかけた。

「ようこそトータスへ。勇者さま、そしてご同胞の皆様。歓迎致しますぞ。私は、聖教会にて教皇の地位についております、イシユタル・ランゴバルドと申す者。以後よろしくお願い致しますぞ」

金星のあかいあくまと同じ名前を名乗る老人は好々爺とした不気味な微笑みを見せ

た。

そしてこの老人を信用してはいけなないと、ボクの直感が告げた。

現在ボク達は長いテーブルがいくつも並ぶ大広間に場所を移していた。

おそらくここは晩餐会を開催する場所なのだろう。

ここに案内されている時、思ったより静かだったのは、状況の理解が追いついていないからだろう。移動中恵里がボクの腕にしがみついでいて震えていた。

後は事情をランゴバルドが説明すると言ったことや、天之河が持ち前のカリスマで場を鎮めたこともあるだろうが。

教師よりも教師らしく纏めている姿に畑山先生が涙目になっていたのは、なんというかいたたまれなかった。

全員が着席すると同時にメイドがカートを押しながら入って来た。

思春期男子な2年生は憧れの本物メイドに視線ががつつり向いていた。

メイド全員が不自然なほど美女、美少女だった。

(なるほどね……ハニートラップか、明らかに男子を釘付けにする為に揃ってる、男子チヨロ過ぎか……ハジメと幸利は警戒しているみたいだね。よかった……ってイタア！恵里に雫!?!なんてつねったの!?)

左右に座る2人に何故つねられたのか分からなかったがランゴバルドの説明を聞く。

内容は、この世界はトータス。トータスには人間、魔人、巫人の3種族。人間は北一帯、魔人は南一帯を支配し、巫人は東の樹海でひっそりと生きているらしい。

そして人間と魔人は長い間戦争をしている。人間は物量で、魔人は質量で拮抗していたのだが、魔人が魔物を使役し始めたらしく、拮抗が崩れて人間が追い詰められこのままだと滅びの危機を迎えているらしい。

なるほど異世界転生ものか……

「あなた方を召喚したのは『エヒト様』です。我々人間族が崇める守護神、聖教教会の唯一神にして、この世界を創られた至上の神。おそらく、エヒト様は悟られたのでしよう。このままでは人間族は滅ぶと。それを回避するためにあなた方を喚ばれたのです。あなた方はこの世界より上位にあり、例外なく強力な力を持っています。召喚が実行される少し前に、エヒト様から神託があったのですよ。あなた方という『救い』を送ると。あなた方には是非その力を発揮し、『エヒト様』の御意志の下、魔人族を打倒し我々人間族を救って頂きたい」

ランゴバルドは恍惚の表情をしながらそう訴えた。

老人の恍惚の表情なんて誰得だよ……気色悪い。

正直言ってボクはこの戦争に参加はしたくない。

そもそもその話、なんでボク達を呼ぶ力があるのに何故魔人を滅ぼさないのでないのか不思議でならない。その力があるなら簡単に滅ぼすことができるのだ。

裏があると思えない。

すると畑山先生が立ち上がってランゴバルドに対して声を上げる。

「ふざけないで下さい! 結局、この子達に戦争させようってことでしょ! そんなの許しません! ええ、先生は絶対に許しませんよ! 私達を早く帰して下さい! きつと、ご家族も心配しているはずですよ! あなた達のしていることはただの誘拐ですよ!」

しかし返って来た言葉は残酷なものだった。

「お気持ちは察します。しかし……あなた方の帰還は現状では不可能です」

生徒までもが凍りつく。

恵里も信じられない物を見る目をしている。

(まあそうだよね……帰れるなら異世界転生で帰ってるもんね……)

「ふ、不可能って喚ぶことが出来たなら帰せるでしょう!」

「先程も言ったようにあなた方を召喚したのはエヒト様です。我々人間には何も出来ません。あなた方が帰還出来るかどうかもエヒト様のご意志次第ということですね」

「そ、そんな……」

畑山先生は脱力して椅子に腰を落とす。

なるほど帰せるけど帰すか帰さないかはエヒト次第ということか。

「嘘だろ？ 帰れないってなんだよ！」

「いやよ！ 何でもいいから帰してよ！」

「戦争なんて冗談じゃねえ！ ぶぎけんなよ！」

「なんで、なんで……」

そこからは阿鼻叫喚というのだろうか周囲の生徒も騒ぎ始める。騒ぎ出した生徒を見るランゴバルドの顔は明らかにボク達の事を見下すように見ていた。恐らくエヒトに召喚されたのになぜ喜ばないのかがわからないといったものなのだろう。

ぶぎけたやつだな。勝手に喚んだのに有無を言わずなんて酷いやつだ。

そう思った時だった。『バン！』とテーブルを叩く音が響く。その音の元に視線が集まる。叩いたのは天之河光輝だった。彼は視線が集まるのを確認するとおもむろに話し始めた。

「皆、ここにイシユタルさんに文句を言っても意味がない。彼にだってどうしようもないんだ。……俺は、俺は戦おうと思う。この世界の人達が滅亡の危機にあるのは事実なんだ。それを知って、放っておくなんて俺にはできない。それに、人間を救うために召喚されたのなら、救済さえ終われば帰してくれるかもしれない。……イシユタルさん？ どうですか？」

「そうですね。エヒト様も救世主の願いは無下にはしませんまい」

「俺達には大きな力があるんですね?ここに來てから妙に力が張っている感じがするんです」

「ええ、そうですね。この世界の者と比べ物にならないほどの力を持っていると考えていいでしょうな」

「うん、なら大丈夫。俺は戦う。人々を救い、皆が家に帰れるように、俺は世界も皆も救って見せる!!」

握り拳を天高く掲げて戦争参加を宣言する天之河。

言っていることは立派なんだけど、そんな簡単に戦争に参加していいのか?ここに喚ばれた皆は人を殺した事さえないのに、そんなことが出来るのだろうか?

「ねえお兄ちゃん。お兄ちゃんは参加するの?」

震える声でボクに問いかける。

「ボクは参加しないよ。あまりにも突飛すぎて困惑してるし、でもここで参加しなかったら何されるかわかったもんじやないから参加表明だけはしておいたほうがいい」

「それじゃあ僕達の参加はしない、でも付いて行きはする、でいいんだね?」

「そうなるね……雫とハジメ達にも伝えてくれる?」

「わかったわ」

ステータスプレート、何これバグってる!?

戦争参加の言葉を口にした以上、ボク達は戦いの術を学ぶ必要がある。いくら規格外でも、平和な世界で暮らして来たボク達が戦うなんて無理がある。

その辺はきっちり予想済みらしく、老人曰く「神山」の麓にある「ハイリヒ王国」の受け入れが出来ているらしい。

王国の兵士がボクらを鍛え上げるのだろう。それは普通にありがたい。力の使い方がわからないまま戦場にほっぽり出されるのは嫌だからね。

この王国は聖教教会と密接な関係で教会の崇める神、エヒトの眷属であるシャルム・バーンという人物が建国したということだ。

ハイリヒ王国に行くためにランゴバルドに連れられて教会の正面門に来た。教会は神山の頂きにあり、荘厳な門を潜るとそこには雲海が広がっていた。高山病にならないのは魔法か何かで調整されているからだろう。

そのまま先に進むと、柵に囲まれた円形の大きな台座が見えた。大聖堂で見たのと同じ材質でできた回廊を進み促されるまま台座に乗る。

「彼の者へと至る道、信仰と共に開かれん、
「天道」

ランゴバルドが何か唱えると台座が動き出し、斜めに下り始める。初めて魔法を見た生徒達はキヤツキヤツと騒ぎ出す。

雲海を抜けると地上が見えてくる。眼下には町、いや、国が見える。そこからせり出すように建築された城と放射状に広がる町。ハイリヒ王国の王都だ。

台座の移動先は王宮と繋がっている高い塔の屋上に続いている。

まるで神の使徒が現れ、教皇が連れてきたという構図が出来上がっている。

戦前の日本も似たようなもので政治と宗教が密接に結びついていた時代もあった。恐らく宗教弾圧も起きているのだろう。

「あまり信用できなくなってきたな……」

ポツリと誰にも聞こえない声で漏らす。

その後は国王より教皇の方が偉いのがわかり、『神様絶対』なのもわかった。

そこからは国王陛下が自己紹介をしたり、王子であるランデルが香織に惚れ、恋人のハジメを敵視し、それに便乗してクラスの男子も睨む。

その後、晩餐会が開かれて異世界料理を堪能することになる。見た目は地球の洋食と変わらない。たまに色鮮やかなソースが出てきて驚いたが、美味かった。

食後には今後の予定、訓練の教官の紹介をされてそれぞれに与えられた部屋で寝ることとなった。

恵里とは同じ部屋になった。そうじゃないと部屋から出てボクの部屋に来ると思うし。(まあハジメと香織が同じ部屋になったとき、一悶着あったが。)

「ねえお兄ちゃん。僕達これからどうなっちゃうの……」

「わからない……だけど、聖教教会は中々信用ならない。昔の日本みたいだね」

「怖い怖い……」

「あまりここでは口にしない方が良さそう……聞かれる可能性もある」

「わかった」

そのまま寝た。疲れていたので沈むように寝た。

次の日

朝から訓練と座学が始まった。

集まった生徒に銀色のプレートが配られて

プレートの説明を騎士団長メルド・ロギンスがする。

「よし、全員に配られたな？こいつはステータスプレートと呼ばれる文字通り、自分の能力を客観的に数値化してくれるものだ。最も信頼できる身分証明書だ、失くすなよ？」

実にフランクな話術でこちらは気を緩める。

「プレートの一面に魔法陣が刻まれているだろう。そこに一緒に渡した針で血を一滴垂

らしてくれ。それで所持者が登録される。『ステータスオープン』と言えば自分のステータスが表示される。原理とか聞くなよ? 神代アーティファクトの類だ」

「アーティファクト?」

「アーティファクトっていうのは今じゃ再現できない魔法道具のことだ。まだ神やその眷属が地上にいた頃に創られたと言われている。ステータスプレートもその一つだ」

ステータスプレートは人によって色が違うらしい。ボクは黄緑色だった。ボクは血を一滴ステータスプレートに垂らしてステータスを確認する。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

天野士郎 17歳 男 レベル:1

天職: ■の■/ ■■魔術師

筋力: 100×α

体力: 150×α

耐性: 75×α

敏捷: 110×α

魔力: 60×α

魔耐: 50×α

技能: 対魔力・ ■■■■■ / 解析魔術・ ■■■継承・ ■の■■■・ 魔力操作・ 狙撃・ ■■■

■・鷹の目・■なる■・心眼・強化魔術・気配感知・言語理解

と表示された。

まるでゲームのキャラみたいだと思っよりもまず一言。

「なあにこれ？」

どこぞのフアラオのような声を漏らしたボクは悪くない。

技能のほとんどが見えない。壊れたのかな？ただ知ってる技能はあつたのが幸いだった。もしかしたら読めないやつはあれの能力とかかな？

「お兄ちゃんどうしたの……ってなにこれ？バグってるじゃん……」

「アーティファクトがバグるの？」

「お兄ちゃんが凄いなじゃない？僕のはこうだよ」

天野恵里 17歳 女 レベル1

天職：降霊術師

筋力：20

体力：15

耐性：15

敏捷：20

魔力：1000

魔耐：80

技能：降霊術適性・闇属性適性・全属性耐性・気配感知・魔力感知・高速魔力回復・言語理解

|||||

「普通の降霊術師だね」

「なんか、とんでもチートが来て欲しかったよ」

メルド団長からステータスの説明がなされた。

要約するとレベルは現在の強さで、鍛錬してステータスが上がりると同時に数値が上がる。魔力が高ければステータスの伸びも良いとのこと。

因みにこの世界の一般人のステータスは10らしい。

「したら恵里はボクより強くなるかもね」

「死にたくないからいいね」

ボクが今度は守られる番になるのかな？なんて考える。ハジメ達のステータスも気になるので皆を集める。

「みんなどうだった？」

ハジメが錬成師、幸利が闇術師、香織が治癒師、雫が剣士、優花が投擲師、鈴が結界師だった。幸利と香織、鈴は魔力方面が高く、雫と優花は筋力と敏捷が高かった。しかしハジメだけオールステータス100だった。

「まだ希望はあるよハジメ！エドワード・エルリックを思い出せ！」

「そうだハジメ！お前には憧れの手合わせ錬成ができる！」

「うん……そうだね、僕、頑張ってみるよ」

そしてステータス確認のためメルド団長に見せに行く。一番手は天之河だった。

|||||

天之河光輝 17歳 男 レベル1

天職：勇者

筋力：100

体力：100

耐性：100

敏捷：100

魔力：100

魔耐：100

技能：全属性適性・全属性耐性・物理耐性・複合魔法・剣術・剛力・縮地・先読・高

速魔力回復・気配感知・魔力感知・限界突破・言語理解

|||||

かなりのチートステータスだった。

自分だけチートじゃなくてよかった……恨まれかねないし、戦争参加が強制になるのは嫌だからね。

「ほおぐさすが勇者様だな。レベル1で既に三桁か……技能も普通は二つ三つなんだがな……規格外なやつめ！頼もしい限りだ！」

しばらく他の人も見せていき、ついにボク達の番なる。

「ふむふむ……所々読めないのは仕方ないがステータスは高いな！技能は読めないものもあるが多い、頼もしいぞー！」

「ありがとうございませす」

その場を去ろうとするメルド団長に腕を掴まれる。

「メルド団長？」

「二つ言っておく。お前さんの技能にある魔力操作、隠しておいてくれ。そいつは魔物しか持っていない技能だからな」

「わかりました」

ハジメの番になる。オールステータス10なのがショックなのかハジメのステータ

スプレートをコツコツ叩いたり光にかざす。

「錬成師か……非戦闘職なのか……まあ鍛冶が便利になる職業だ」

メルド団長の言葉を聞いて調子に乗る奴らが現れた。

「おいおい南雲。非戦闘職なのか？それでどうやって戦うんだよ？メルドさん、錬成師って珍しいんっすか？」

「……いや、鍛冶職の十人に一人は持つてる。お抱えの職人は全員持つてる」

「ギャハハ！お前どうやって戦うんだよ！」

すると幸利がハジメのところに向かう。

「お前みたいなバカには錬成師の真の力がわからないみたいだな」

「んだとこのキモオタ2号！」

「実写化されたのに覚えてないお前には無理だよ。行こうぜハジメ」

「うん」

その後畑山先生の天職が激レアの作農師だということがわかり。メルド団長が部下に指示を飛ばしていた。

このご時世、食糧問題も少なくはなく彼女の存在で大きく変わるとか。

さあ訓練、馬鹿につける薬はない

こうして戦闘員、総勢24人のメンバーと共に戦闘訓練を受けることになった。

最初畑山先生が参加しようとしていたのだが、ボクが先生にその力で権力を高めて欲しいと説得した。畑山先生は渋々作農師として動くことになった。

訓練メンバーはまず天之河、坂上、辻、吉野、野村の5人、檜山集団4人、ハジメ、香織、清水、優花、永山の5人、ボク、恵里、鈴、雫、遠藤の5人、玉井、仁村、相川、菅原、宮崎の5人に分けられた。団長曰く、メンバーの職業の相性やそれぞれの中の良さから決めたそうだ。

最初にやるのはそれぞれがペアを組んでの自由訓練だった。術師は繰り返し術を使うことで慣らしていく、詠唱はそれぞれメルド団長が詠唱が書かれた紙を渡しているのが問題はない。ハジメに関しては繰り返し地形を錬成するのが一番だと考え、ハガレンみたく出来るまで頑張っている。

一方のボクはというと雫と組み手をしていった。その際大切に使い込まれた訓練用の木剣を手にした途端様々な記録が流れ込んでくると同時にステータスプレートの中の伏せ字の一つが読めるようになっていた。

天野士郎 17歳 男 レベル：1

天職：■の■／■魔術師

筋力：100×α

体力：150×α

耐性：75×α

敏捷：110×α

魔力：60×α

魔耐：50×α

技能：対魔力・■／解析魔術・憑依継承・■の■・魔力操作・狙撃・■

■・鷹の目・■なる■・心眼・強化魔術・気配感知・言語理解

おそらく憑依継承の効果なのだろう。理由は雫にも木剣を渡すとボクと同じ反応をした為、彼女のステータスプレートにある共通の技能に憑依継承があったからだ。

座学では魔法についてなのだが、ボクには適性が一つもないのでメルド団長に相談、この世界の詳しい知識をハジメと共に覚えておきたいと頼む。それを聞き入れてくれたのか図書館に行かせてもらった。

欠点を伸ばすよりも、自分の長所を伸ばす方が効率が良いし
 皆の座学の時間が終わるまで本を読み続けた。

そして2週間が経過したボクのスータスは

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

天野士郎 17歳 男 レベル：10

天職：■の■／投影魔術師

筋力：200×α

体力：215×α

耐性：150×α

敏捷：180×α

魔力：100×α

魔耐：80×α

技能：対魔力・■・■・投影／解析魔術・憑依継承・民の叡智・魔力操作・狙撃・■

■・鷹の目・■なる■・心眼・強化魔術・気配感知・言語理解

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

と、また2つ技能が読めるようになり使えるようになった。『×α』が気になるが、

それは置いておこう。

完全にアレだなと分かったので民の叡智はある程度使い熟すのにはそう時間はかからなかった。この2週間で起きたイベントと言えば、まずハジメの派生技能が追加されたことや、リリイことリリアーナ王女と仲良くなったことだろう。

雫達にも派生技能はついたのだが1、2個で、ハジメは5個も増えていた。

リリイと出会った経緯は訓練休憩日の時に王宮の中庭で鳥と戯れていたところを見ていたらしく、珍しいと思いをかけてきたらしい。それからはハジメ達と話すようになり、今では全員名前呼びにまでなっている。その時に雫達にも敬語をやめるように話した。なんか他人行儀に感じて少し寂しかったし。

今日も訓練が始まるのだが、何処からか怒声が聞こえてくる。

ボクは嫌な予感がし、その声の元にいく。そこには四方八方に壁を作り檜山集団の攻撃に対応しているハジメの姿があった。

「クソ！なんだよこれ！すぐに壊れる癖に何度でも出てきやがる！」

「()に風撃を望む！『風球』！」

「()に焼撃を望む！『火球』！」

「『錬成』！」

攻撃魔法がハジメに襲いかかるが、ハジメは錬成で壁を作り攻撃を防ぐ。それにより檜山達の怒りのボルテージが上がる。

「キモオタの癖に調子乗ってんじや」「はい、ストップ」うがっ!」

ボクはそろそろ我慢の限界になり『民の叡智』で地面をせり上がらせて檜山の横っ腹を突き飛ばす。

「ハジメ大丈夫?」

「うん、士郎の言う通り錬成を頑張って練習して、派生技能が増えて対応出来るようになって良かった」

すると別の方から足音が聞こえる。どうやら香織達のような。

「ハジメ君!?大丈夫!」

「うん、怪我とかは特にないよ。ただ錬成のし過ぎで魔力がほとんどないけど……」

「士郎、こいつらどうする?」

幸利はボクの民の叡智で作った鎖で捕縛グルグル巻きにした檜山集団を指さす。

反省もしていないのか「ほどこきやがれクソが!」などとほざいている。

「とりあえずリリイ達に突き出そう。彼女なら公正な判断を下してくれるはず」

そして遅れて天之河がやってくる。

「なんで檜山達が縛られているんだ!」

「それはボクがやった。ハジメのこと一方的にリンチしようとしてたみたいだからね」

「その南雲は怪我をしてないが?」

「そりやそうだろ？ ハジメは錬成を駆使して防御したからな」

「ならなんで檜山達を縛ったんですか？」

「ハジメの魔力が尽きたら危ないからね。怪我する前に止めた」

「なら縛る必要はないでしょう！ 話せばわかってくれるはずですよ！」

「アホかお前。それが出来るなら、こっちに出来る前からのこいつらのハジメに対する行動も止まってるだろうが」

話をするのも無駄だと思ったので雫を呼ぶ。

「雫、メルド団長を呼んできて、リリーの所に突き出そう」

「分かったわ」

「さて雫、話は」

その後、檜山集団はメルド団長達に引きずられて王宮に連れていかれ、処罰を受けることになった。

牢屋行きにはならなかったもののハジメ達に近づくことを禁じられた。

どうせなら牢屋行きになって欲しかったが、流星に神の使徒が牢屋行きになるのは教会の尊厳に関わるのだろう。

「ちえつ、そのまま捕まればよかったのに……」

「舌打ちしても仕方ないよ」

「エリリン残念そー」

不満そうに頬を膨らませ不貞腐れる我が義妹。

このまま訓練も終わり、部屋に戻ろうとするとメルド団長から報告があるらしい。

「明日から実戦訓練の一環として『オルクス大迷宮』へと遠征に行く！必要な物は此方で用意してあるが、今までの王都での訓練とは一線を画すと思ってくれ！まあ要するに気合を入れろって事だ！今日はゆっくり休めよ！では解散！」

月下の約束、ボク達は……

オルクス大迷宮。それは神代の時代において神への反逆を企て、世界を滅ぼそうとした者たちが作り上げた『七大迷宮』の一つとされる。ハイリヒ王国の南西に存在、100階層からなると言われているこの迷宮は下に進むほど魔物が強くなるという特性から実力を測りやすい事と、良質な魔石が手に入る事から冒険者や傭兵、新兵の訓練場として人気が高く、それは周辺に設けられたホルアドという宿場町の賑わいからも明白である。

王都からずっと馬車で揺られていたハジメが「乗り物が欲しくなる、バイクとか車とか」なんて言っていたが。やがて一行はメルド率いる騎士団員複数名と共にそのホルアドに到着、王国直営の宿屋に宿泊する事となった。

まだ夕方の時刻なのでボクとハジメと幸利は町の外れでハジメの製作品の完成を見ることになった。

「それでハジメ、遂に出来たって何がだ？」

「幸利、それは『銃』だよ」

「まじ!？」

「試行錯誤の繰り返しで完成したんだ」

ハジメの技能にある錬成の派生技能に『複製錬成』が追加されていたので数丁複製したらしい。

「とりあえず六発装填のリボルバー式にしたよ」

そして弾を詰め、ボクが作った仮想敵を撃つ。勢いよく放たれた弾丸は中心に当たる。

「おお〜」

「とりあえず香織達の方も作ったけど、材料が足りなくなつて4丁しか作れなかったよ」
「ハジメそれをよく見せて」

「うん」

ボクはリボルバー銃を解析魔術で調べる。解析が終わわりハジメに返す。そして右手を前に突き出し、左手を肘に添えて、詠唱を一言告げる。

『トレース・オン投影・開始』

するとボクの右手にはハジメが作ったリボルバー銃そっくりの銃が現れる。

「よし、成功だ」

「それ僕が作った銃と同じ物？」

「ああ、まあハジメが作らなきや投影出来なかったけど。あと何丁欲しい？」

「うーんとりあえず人数分欲しいからあと3つ」

「了解！『投影・開始』！」

それから『投影／解析魔術』の派生技能『複製投影』で3丁投影する。

「とりあえず今手持ちにある2丁は幸利に渡しておくね銃弾も三十六発、優花と分けてね。士郎も恵里や雫達の分七十二発分」

「サンキュー優花に渡しとく」

「ありがとう」

そろそろ寝る時間になるのだが、ボクは中々寝付けないので眠気が訪れるまで本を読んでいる。恵里は疲れたのかすぐにベッドの上に横になる。「スウ……スウ……」と寝息が聞こえてくる。落ちていて寝ている姿を見るととても愛おしく思える。

ここに来てからかなりの時間が経った。最初は訳もわからず呼び出され、戦えと言われた。ボク達にとっての日常から崩壊して困ってしまったが、どうにか上手くやっている。

そろそろ寝ようと思えばベッドの方を見ると、寝ていた筈の恵里が起きていた。しかし様子がおかしかった。息を切らし額には汗が浮き出ており何か良くない夢を見たようだ。

「お、お兄ちゃん……？お兄ちゃん！」

突然ボクに抱きついてくる。抱きしめる力はすぐ何かに怯えているようだった。

「恵里、どうしたの？何か悪い夢でもみたの？」

「うん……みんなを呼んで……早く！」

「みんなって言うのはいつものメンバーでいいんだね」

そう確認すると、ボクはハジメ達を部屋に呼び出す。少し眠そうなのは悪いのだが恵里が必死に訴えたので集まってくれた。

「それでエリリン、話って？」

「明日の訓練、みんな国に残って欲しいんだ！教官達も僕が頑張って説得するから！お願い！」

勢いよく頭を下げ、頼み込む恵里。

「待って、恵里、なんで突然そんなこと言うの？私達にわかりやすく説明して貰えるかしら」

「檜山達の件だったら別に団長が対応していたでしょ？」

「そういうのじゃないの！こうもつと曖昧だけど無駄に現実的な夢を見たの！」

「一体どんな夢なんだ？話してくれ、もう夢だと否定出来る世界じゃないから……」

「うん、もちろん話すよ。大事な部分だけ言うね……ここにみんなが僕と鈴の前に

いるんだ。何度も何度も声をかけるんだけど振り返りも反応もしてくれない、そして最後には消えちやうんだ……」

長い沈黙。

「なんか、ごめんね……でもみんな国に戻って！それで残って！お願い……！」

「それは出来ないだろうね……」

「えっなんで……」

「戦争参加の意思を示したからには戦わなきゃならないだろうし。団長が容認しても、聖教会の連中はいい顔をしないでだろう。それで何を命令されるかわからない」

「そっか……」

「でも……みんなでみんなを守ろう。そしたらその夢も覆せるかもしれない」

ボクは手を前に出す。全員ボクのしたいことがわかったのかすぐに手を重ねる。そして手をグーにしてコツンとぶつける。

「ボク達は生きて帰るぞ！」

「「おおー！」」

オルクス大迷宮

翌朝ボク達はオルクス大迷宮の入り口の広場に居た。その入り口にはゲートのような物もあり、まるで観光名所みたいだ。正直に言って信じられなかった。ゲート以外には祭りの屋台のような露店もあり、これから危険地帯に行くとは想像も出来ない。むしろ鍾乳洞を観に行くと言った方が正しいと思える賑やかさだ。ゲートに関してはステータスプレートを確認して死亡者を把握するのはわかるし、露店も武器屋に魔道具屋があるのもわかる。だがスイーツの屋台があるのはおかしい。国がここに施設を設置した理由として、この迷宮に命知らずが来たり犯罪者が拠点にする可能性もあるかららしい。

もうこれ以上は考えるのはやめにした。

メルド団長達騎士が迷宮入りしていくのでその後を付いていく。

ボク達はホルアドに向かう前に国から支給されたアーティファクトで身を固めているのだが、雫は刀がないらしくとりあえず適当な剣を貰おうとしたのだが、ボクが『投影魔術』で刀を投影出来るのでそれを渡した。刀の銘は特にないがサイズ等は確かめがある。強化魔術の派生技能、永続強化を付与しているのでそう簡単に刃こぼれはしない

し、雫ほどの使い手ならば尚更だ。ボクも気に入った武器がないので軽い布防具のアーティファクトをもらって、武器は適当に投影した。手元には白と黒の双剣。何故これが投影されたのかはわからないが、とてもしつくり来たのだ。

ハジメは錬成の補助をしてくれる手袋を、恵里達魔法使い組は魔法使用時に魔力消費軽減のある杖を、優花は自動回収効果のある腕輪を貰っていた。

ついでに恵里の杖を強化魔術で強化しておいた。特に意味はないが、もし接近戦になった時の為に身を守る手段は多い方がいい。転ばぬ先の杖ってやつだ、杖だけに。

しばらく歩いている内に壁の隙間から灰色の毛玉が大量に出てくる。

「あれはラットマンという魔物だ！すばしっこいが大して強くないから落ち着いて戦えば大丈夫だ！まずは光輝達、お前らだ。冷静に行けばなんとかなる」

天之河達のパーティが前に出る。

ラットマンに天之河は剣を振るい一撃で倒す。同じように、坂上も衝撃波の出る小手のアーティファクトで蹴散らす。

妨害もなかったので後ろの待機していた3人は安全に詠唱出来たので魔法を放つことができたのだが、余りにも過剰火力でラットマンを魔石ごと焼き尽くしてしまった。やり過ぎだと団長に咎められてはいたので今後は調整もできるだろう。

次に檜山達、その次にハジメ達の番になる。

ハジメが錬成でラットマンの動きを封じ動けなくなつたところを清水達が銃で眉間を撃ち抜く。『バアン!』と銃声が迷宮に響く。3人の銃口からは煙が揺らぐ。その光景に周りは唾然とする。

「流石ハジメ君!ばっちり撃てるよ!」

「これだけはこの世界でもハジメしか出来ないことだな」

メルド団長が製作者のハジメに近寄る。

「坊主もしかしてこいつはお前さんが?」

「はい……ボク達達の世界の武器です。でも作るのに苦労して4丁しか作れませんでした……」

「そうか、ならこの訓練が終わり次第材料を調達しよう」

「ありがとうございます」

ここでハジメが自分が作った数しか言わなかったのは、ボクの投影魔術のことだ。これと同じアーティファクトを量産出来ると判明した時が面倒だからだ。自己保身なのは否定出来ないが投影魔術の限界がわからないので、流石に無理強いされるのはキツイ。

「次は士郎、お前達の番だ」

ボク達は武器を構える。

「みんな作戦通り行くよ」

「了解」

ラットマンの集団がやってくる。ボクと雫が剣で斬りかかり、ラットマンの身体が二つに別れる。

恵里から闇魔法『暗球』が放たれラットマンの頭を吹き飛ばし、首のない姿になる。あまりの状況に怯え始めた生き残りは、敏捷の高さを生かした遠藤が背後に周り首を刎ねる。

「うむ、上出来だ。これからも頼むぞ」

この調子でボク達はオルクス大迷宮を進んで行くのだった。

トラップ発動!ふざけやがって!

あれから何層も降っていき、ついにボク達は二十層まで来た。

ここに至るまでにハジメの地形錬成が猛威を振るい、王国騎士団は錬成師の有能性を考えるようになった。おまけに新たに追加された派生技能、「+肉体錬成」で魔物の金属成分を利用して倒していたのだ。前まで散々無能無能言っていた生徒達はハジメのことを少しずつ認めていった。はつきりとそれが表立っていたのが坂上だった。

ハジメの錬成技に驚きその後「なんだよ南雲、お前やつぱりすごい奴だったんだな!」と肩をバシバシ叩きながら笑う。

それでも檜山集団などハジメを認めようとしないうちにもいる。

そんな嫉妬するくらいなら努力したらどうなのだと思うし、視線だけで訴えるとかみみつちいと思う。

ボクの技能も着々と解放されていく。つい先ほど解放されたのは『完全なる形』というもので、自動発動型の再生スキルなのだろう。傷がすぐに回復していく。

そしてメルド団長が止まる。

「よし、お前達。此処から先は一種類の魔物との戦闘だけじゃない、複数種類の魔物が混

在したり、連携を組んで襲い掛かったりして来る。今までが楽勝だからと言ってくれぐれも油断するなよ！今日はこの二十階層で訓練して終了だ！」

改めて気を引き締める一行のだが、それでも先程までの余裕ムードのせいで気がすぐに緩む。その上なんの滞りなく進む。するとメルド団長が足を再び止める。

「擬態しているぞ！周囲を良く注意しろ！」

せり出していた壁が変色しながら動き出す。起き上がった身体は褐色に変化して2本の足で立ち上がりゴリラのドラミングするかのように胸を叩き出した。

「ロックマウントだ！2本の腕に注意しろ！剛腕だぞ！」

ロックマウントの剛腕が振り下ろされるが坂上がそれを弾き飛ばし隙だらけになる。

天之河が背後に回ろうとするものの、地形が邪魔して中々思うように動くことが出来ない。

ごり押しが不可能と悟ったのか、ロックマウントは後ろに下がり息を大きく吸い込み、雄叫びを上げる。

『グガアアアアアアアアアアア！』

「ぐっ！」

「うぐっ！」

部屋全体が振動する咆哮に天之河達の動きが止まる。

その隙を突いて突撃するかと思いきや、横にある大岩を後衛の魔法使い組に投げる。しかも投げてきたのは別のロックマウンツだったのだ。

迎撃しようと魔法を唱えようとしたのだが、

「ヒイツ!」

飛び込むフォームがルオンダイブ。おまけに目を血走らせ鼻息を荒くしているのも相まって気持ち悪さが倍増。男でも怯んでしまう。

「(ハ)ら(ハ)ら、戦闘中だぞ何している!」

そのロックマウンツはメルド団長によって切り捨てられる。

魔法使い組は「す、すいません!」と謝る。

そこまではよかったのだが、気色悪さに顔色を青くしている女子陣を何を勘違いしたのか、死への恐怖だと思いきみ、団長の制止も無視して広範囲技でロックマウンツを倒す。そして「大丈夫だよ! (キラツ)」と言うのだが、後ろからツカツカと歩いてくる団長におもいつきり拳骨を食らう。

「へふう!」

「この馬鹿者が! こんな狭いところで使う技じゃないだろうが! 崩落でもして、生き埋めにでもなったらどうするつもりだ!」

「尤もな叱りを受ける天之河。」

毎度のことと思うが、彼は目の前の問題しか対応しない癖がある。その後のことを考えないで、目先の問題ばかり解決してその後の事をほっぽり出す。恵里が彼に助けられていたらと思うとゾツとする。自分の方法が最適解とは言わないが、相当やばい状態になっていたかもしれないと思うと、ボクは無意識のうちに恵里を抱きしめていた。

「お兄ちゃん？」

「ああ、ごめん」

「何かあったの？」

「なんでもないよ」

ふと、香織が崩れた壁を見る。

「……あれ、何かな？キラキラしてる……」

その言葉に、全員が香織の指先の方角を見る。

そこには青白く発光する鉱石が壁から生えていた。女性陣はその美しい光に見惚れていた。

「ほお、あれはグランツ鉱石だな。大きさも中々だ。珍しい」

団長はグランツ鉱石についての説明をする。

なんでも宝石ランキングのトップスリーに入るほどレア物らしい。

口には出さないが、投影してしまえば元も子もないのだが。

「素敵……」

そのまま香織は頬を染めながらさらにうっとりする。

さしずめハジメに結婚のプロポーズをされる未来でも想像しているのだろう。

近くにいる恵里達もうっとりしていた。

正直に言うとはボクも結構見惚れていた。がめつい訳ではないけれど綺麗な物は好きだ。

「だったら俺達で回収しようぜ!」

何を思ったか、今までトラップもなかったので調子づいた檜山が壁を登る。

団長の制止も聞こえないふりをしてだ。

すると騎士の1人が顔を青褪めさせる。

「団長!トラップです!」

その警告も遅く、檜山がグランツ鉱石に触れる。その瞬間、鉱石を中心に魔法陣が広がる。グランツ鉱石の輝きに魅せられた愚か者への罰とでも言うのだろうか。

檜山は俗に言う『ドラク〇IIのピラミッドで不用意に宝箱を開けて、人食い箱に食い殺される初心者』その者だった。

魔法陣からものすごい光が溢れる。当然ボク達はその光に巻き込まれる。団長の指示もあつたのだが全てが遅すぎたのだった。

謎の浮遊感に包まれる。そして光が収まると同時に地面に叩きつけられる。

先の魔法陣は転移させるものだったらしい。

おのれ檜山、絶対に許さん。

転移した場所は、石造の橋の上だった。おそらく百メートルはありそうだ。天井も高い。

するとメルド団長が声を上げる。

「お前達、直ぐ階段の所まで走れ！急ぐんだ！」

その声に驚きつつもわたたと動く生徒達。

しかし第二のトラップが発動し、階段側の魔法陣から大量の魔物が現れる。更に通路側からも先の魔法陣よりも巨大な魔法陣が出現する。そこから巨大な魔物が現れ、メルド団長のうめくような声が聞こえて来た。

——まさか……ベヒモス……なのか……

ベヒモスと義妹の決意

ベヒモスが現れる。団長は絶望した表情を一瞬作るのだが、すぐに立て直し指示を出す。とにかく階段の所に向かえと、しかし階段側には骸骨兵がわんさか湧く。さながらモンスターハウスだ。

最初はベヒモスに向かって士郎達はハジメから貫った銃でベヒモスを撃つたのだが、強固な皮膚に阻まれダメージすら与えることが出来なかった。無駄だと分かった途端すぐに逃げる。

しかし、天之河がメルド団長を捨てて逃げれないと叫ぶ。その団長は自分達騎士が相手を務めると言う。そしてベヒモスが雄叫びを上げ、突撃しようとする。

「『全ての敵意と悪意を拒絶する、神の子らに絶対の守りを、ここは聖域なりて、神敵を通さず——『聖絶』!!』」

騎士達が全力の障壁を貼る。その障壁にぶつかり部屋全体が大きく揺れる。逃走中の生徒達から悲鳴が聞こえ、その揺れにより転倒する者も相次ぐ。骸骨兵——トラウムソルジャーが剣を振りかぶろうとするも優花が持っている銃で射撃してトラウムソルジャーを怯ませる。その隙にハジメが『地形錬成』でトラウムソルジャーの一团を奈落

に突き落とす。

ほとんどの生徒が恐慌、パニック状態に陥り、我先にと階段へ走る。騎士の一人アランが声を上げて指示するものの生徒達には聞こえない。

ここで必要になってくるのは突破力とカリスマ性を合わせ持つ人物だ。

残念ながら士郎にカリスマ性はないし突破力もない。あるのは手数だけである。

「皆、トラウムソルジャーの相手お願い！僕は天之河君を呼んでくる！」

ハジメはそう言うのとベヒモスの所まで走る。そう、この場には天之河光輝の存在が必要なのだ。

士郎達はその声に應えるために、トラウムソルジャーの相手を務める。白と黒の剣を使いトラウムソルジャーの攻撃をいなし隙を作っては仲間の攻撃でダメージを与え。雫も同じように刀で攻撃を弾いて流れるように攻撃を当てる。

何度も打ち合っているとついに剣が砕け散る。それを見たトラウムソルジャーは剣を勢いよく振り下ろす。

士郎の両手には新たな剣が握られ、トラウムソルジャーの剣を受け止める。何が起きたのか理解出来ず「ガッ!？」とマヌケな声が漏れる。その隙に士郎は攻撃をしてトラウムソルジャーを倒す。

すると後ろから一人の声が聞こえて来た。

「——『天翔閃』！」

極光が迸り、トラウムソルジャー集団が吹き飛ばす。

「皆！諦めるな！道は俺が切り開く！」

そんな声にと共に再び『天翔閃』が敵を吹き飛ばす。

「お前達！今まで何をやってきた！訓練を思い出せ！連携をさっさととらんか！」

団長の一撃で再び敵が吹き飛ばす。

そこで土郎は疑問に思った。ベヒモスはどうなっているかと。振り向いたらハジメが一人でベヒモスを抑えていた。流石にハジメ一人では危険だと思ったのか、土郎は反射的にハジメの所まで飛び出した。

それに釣られるように、はたまた自分で動いたのかわからないが幸利もハジメの所まで走り出す。

「ハジメエー！」

そう叫びながら土郎は3対6刀投影した剣をベヒモスに投げつける。深くとは行かなかったもののベヒモスの硬い皮膚に刺さる。そして指を『パチン！』と鳴らす。それに共鳴するように白と黒の剣が爆散してベヒモスに僅かだかダメージを与える。

「土郎!？」

「俺もいるぞー！(ハハ)に暗撃を望む！『暗球』！」

死角から放たれた幸利の暗黒の塊がベヒモスを怯ませる。

彼等は手に持つ銃を駆使してベヒモスの足止めを続ける。その時後ろから火属性の魔法が放たれベヒモスに当たる。だが、一つの火球がハジメの方に曲がる。

それにいち早く反応したのは幸利だった。彼はハジメの前に出て彼を庇う。しかし、衝撃に耐えきれずハジメと共に戦闘によつて出来た大穴に落ちる。その時だった、士郎の横をものすごい速さで走ってくる人影が二つ、香織と優花だ。香織はハジメを優花が幸利の手を掴み落ちるのを止める。

「大丈夫？ハジメくん！」

「幸利！捕まつてなさいよ！」

「ありがとう……！」

ボクは地面から鎖を2本放ちハジメ達を縛り、引つ張る。後ろから雫も走つて来て、引つ張る。

するとベヒモスの咆哮が響き、こちらに向かつてくる。

しかし既に脆くなった地面にベヒモスのような巨体が『ズシンズシン』と音を立てながら歩いてくるとどうなるか。

「しまった！橋が！」

そう崩れるのだ。そのまま士郎達は重力に引つ張られ、ベヒモスと共に奈落の底に消

えていつてしまった。

恵里 side

檜山の独断専行でトラップが発動して、僕達はどこか別の場所に転移してしまった。そして橋の方にはベヒモスが、階段側には骸骨兵——トラウムソルジャーが現れる。パニック状態になった生徒達は我先にと階段へ走る。トラップを発動させた無能の檜山もだ。

お兄ちゃん達は僕達に指示を出して的確に迎撃していく。すると突然ハジメがベヒモスの方へ駆け出す。どうやら天之河を呼びに行ったようだ。僕達は彼が天之河を連れてくる時間を稼ぐ。

そして天之河が天翔閃を使いトラウムソルジャーを倒す。お兄ちゃんがベヒモスの所に走る。幸利もだ。

そして銃声とお兄ちゃんの攻撃、幸利の魔法がベヒモスの動きをその場にとどめる。ベヒモスが隙だらけなのでハジメ達を援護すべく魔法が放たれた。しかしそのうちの一つがハジメに向かって曲がる。僕はその火球を放った人物を最初から見ている。その張本人を僕は偶然にも視界に捉えていた。それは檜山だった。

幸利が庇うも衝撃に耐えられずハジメと共に落ちる。それを香織と優花が掴み、お兄

ちやんと雫が鎖を使って引き上げようとする。しかしベヒモスの体重により、橋が崩れ落ちていきお兄ちゃん達も奈落の底に落ちていった。

「待って！お兄ちゃん！お兄ちゃん！」

僕はお兄ちゃん達が落ちた穴に向かおうとするもメルド団長に引き止められる。

「嘘……………南雲達が……………」

坂上くんは絶望して跪く。

「やめろ恵里！これ以上死人を出すわけにはいかん！」

「離せ！お兄ちゃんが死んじゃう！」

僕は穴の所に行くのを諦め、犯人である檜山を問い詰める。

「お前が……………お前がハジメ達を落とした！」

「な、なんのことだよ！」

「とぼけるな！お前が魔法をハジメの所に曲げなければお兄ちゃん達は落ちずに済んだんだ！」

僕は息を荒くしながら杖を力いっぱい握る。

「……………してやる……………殺してやる!!」

僕は怒りに任せて杖を振りかぶろうとした時。僕の意識は刈り取られ、目の前が真っ暗になった。

そして僕が目覚めたのは5日後だった。

その5日間に何があったか、鈴と坂上くんから聞いた。

まず檜山が無罪放免となり、お兄ちゃん達が落ちたのは事故だと言うことにされた。その時に鈴と坂上くん、遠藤が反対していたのだが、覆ることはなかった。しかも檜山の無罪を主張したのは天之河だった。

その上ハジメは無能扱いを受けて、香織達を道連れにしたとまで言われるようになってしまった。天之河はそれを一度は反対したのだが。

鈴達は何も出来なくてごめんと謝って来た。彼らは悪くもないのにだ。

正直に言うとな僕は怒りが込み上げて来た。犯罪者を無罪にし、錬成師として新たな道を切り開いたハジメの無能扱いを取り下げなかつたりした天之河にだ。

僕はあることを思い出した。それは国から支給された杖だ。その杖を坂上くんから受け取ると、そこには青く発光する線がある杖だった。

「鈴、坂上くんお兄ちゃんは生きてる……」

「恵里？なんで分かるの？」

「だってこの線、お兄ちゃんが生きてるから光ってるんだ。前にお兄ちゃんが言ったんだ、これはお兄ちゃんが解除するか死ぬかじゃないと解けないって」

「そうなのか……」

「だから僕、強くなる……お兄ちゃんが安心してくれるように。だから鈴、坂上くん手
伝ってくれる？」

「うん！ 恵里がそうしたいなら鈴は手伝ってあげる！」

「俺も微力ながら協力するぜ」

「ありがとう！」

奈落の底で……

ザアーと水が流れる音にボクは目を覚ます。何が起きたのか起きかけの頭で考える。「そうだと落ちたんだボク達。それで……そうだとハジメ達は!？」

あたりを見渡すもそばにいたのは雫だけだった。落ちる前に握っていた鎖も手元にはなく、ハジメ達とは完全に逸れてしまったようだ。

「つて早く水から雫を引き上げないと」

ボクは雫を地下水から引き上げる。

「魔法陣がないから火属性魔法使えない……そうだと、こんな時のための投影魔術だ!」

ボクは木材と火打ち石を投影して簡易的な焚き火を作る。

火の付いた木材から『パチパチ』と音を立てる。揺らぐ炎とその音にボクは少し焦る心が落ち着く。

「う……ん……? (こ)は?」

「雫、目が覚めたんだね」

「土郎さん……?」

「痛い所とかない?」

「ええ、何も負傷してないわ……」

「よかった……これからハジメ達の捜索に出るけど雫、君はどうする？」

「私も行くわ。早くみんなに会いたいもの」

「わかったけど、武器手元にある？」

「……ないわ」

「それじゃあ投影するね」

ボクは刀を一振り投影する。脳内にその刀の使い方が入って来る。握ってもいないのにだ。刀の銘は空也とした。村正が打った刀の一つだ。骨だろうが空を切るような切れ味を誇る名刀だ。

「はい」

「ありがとう」

自分の双剣も投影して自身の気配感知を頼りに捜索を始める。

しばらく進むと人の反応が遠くに2人、多数の獣の気配を近くに感知する。壁から顔を覗かせるとウサギ1羽と狼が3匹いて、狼がウサギを囲んでいる異様な光景に驚く。これを見るにウサギの方が狼より強いことがわかる。そのウサギの足は筋肉が盛り上がっていて心臓あたりから赤い血管のように浮き出ている。某聖杯をめぐる戦うマスターの回路のようだった。

ウサギは1羽だけで狼を蹴り倒してしまっていた。今はここから離れようとした時だった、小石を蹴飛ばしてしまい居場所がバレてしまった。外見通り耳がいいのだから、すぐさまこちらに走って来る。

「雫！戦闘準備！来るよ！」

「わかった！」

ウサギは勢いよくこちらに飛んで来て蹴りを入れようとする。

これを受け止めるのは確実にまずい、双剣で勢いを利用して自爆させるのが一番。軌道上に剣を構えるのだが、空中を踏み込み後ろに回り込む。さっき見たことを忘れるほどボクはバカではない。もう片方の剣でウサギを切り裂く。そのウサギは2つに別れる。

「とんでもない魔物だな……雫大丈夫？」

「ええ」

「それじゃあ進もう」

再び人の反応がする場所に向かう。着いたところには一つ暗闇が濃い場所があった。そこから2人の反応がある。恐らくあの黒いのは幸利の魔法なのだろう。

「幸利！ボクだ！士郎！」

「士郎……なのか……？」

暗闇から出てきたのは幸利と優花だった。優花は気を失っているのかわからないが目を閉じたままだった。

「助かった……化け物の唸り声が聞こえて咄嗟に認識阻害魔法の『暗識』を唱えなかったら食われてた」

「ナイス判断ね幸利、優花は大丈夫なの？」

「優花は寝てるだけだ。疲れちゃったからな……ハジメと香織は!?」

ボクは首を横に振る。

「そうか……俺達も探す」

「わかったけどとりあえず魔力が回復するのを待とう」

「そう……だな……『暗識』は魔力消費が少ないとは言えかなり長い間使ってたからな。魔力が半分もない」

幸利の魔力が回復するのを待つ。ボクはその間に自身の能力を確認していく。投影魔術で出来る物を脳内でイメージする。出てくるのは主に剣ばかりだ。かの守護者が投影している物ばかりだが、今回は使える物ばかりで助かった。

幸利の魔力も回復し、優花も目を覚ましたので気配感知を使って再び搜索する。しかし中々見つからない上に反応もない。階層が違うのかそれとも遠すぎてハジメと香織の場所が見つからない。2人が見つからないまま一週間が過ぎようとしている。遠い

ところに2人の反応を感知した。すぐさま幸利に認識阻害の魔法をかけてもらいハジメ達のところへ急ぎ足で向かう。道中、地面が赤く水滴が落ちたように染まっかけていて、もしかしたら2人の身に何かあったのではないかと焦る。2人の気配のある壁の前に着く。そこには不自然にまん丸い穴があり、錬成痕もあつたのでわかりやすかつた。

「ハジメ！生きてる!?!」

ボクは壁を叩く。すると唸り声が聞こえてくる。

『士郎……?』

「ああ！そこに香織もいる?」

『うん、疲れて寝てる……士郎こそ大丈夫?』

「ボク達は大丈夫、入っても大丈夫?」

『うん、今やるよ』

「いや、ボクが開ける」

『気をつけて……血の海になってる……から……』

ボクはまず壁に穴を開けて血を流す、その後扉のように変化させてみんなが入れるような大きさに広げる。中にはハジメと蹲るように寝ている香織の姿があつたのだが、ハジメの左腕がなかったのだ。

「ハジメ、お前左腕はどうした!?!」

幸利が慌てる声で聞く。

「喰われた……幸いここには神水があつたから水分もとれて魔力も回復したし傷も塞がったけど、幻肢痛が辛い……」

「そんな……ハジメは何に喰われたのよ!？」

「名前はわからないから仮称で言うけど、爪熊にやられた。香織はダメージを受けなかったけど、奴の腕が奮われた時にはもう……」

「鎌鼬みたいなものね……2人とも生きててよかつたわ……」

すると香織がもぞもぞと起き上がる。ボク達の姿を確認すると雫に抱きついて、泣き出してしまった。

彼女が泣き止むまで待つ。

「ごめんね雫ちゃん服汚しちゃった……」

「これくらいなんともないわよ……それよりも2人が生きていて良かったわ」

「とりあえずこれからどうするかだな。水はその水を飲むとして、問題は食糧だ」

全員携帯食糧なんて持っていないかった。ボク達はこのままだと飢えて死んでしまう。

「その神水って毒も治せるんだよね？」

「うん、僕が読んだ本だとありとあらゆる傷と病を治すって書いてあったから」

「ねえ士郎アタシ嫌な予感がするんだけど……」

「奇遇ね優花、私もよ」

「2人の予想通り魔物肉を食べる」

「「「いやいや！死ぬよ！」」」

「なるほど……最終手段としてはそれしかないな」

「ちよつと！幸利はなんで納得してるの!?!」

「かなりの激痛が走るが、神水の回復効果で治るその繰り返しで強くなれる可能性がある。高速で超回復が出来る」

「なに理屈っぽく言ってるのよ！確かにそれならいいと思うけどさー！」

「覚悟は必要になるね……」

「ただ神水に限りがあるから、ボクは使わないよ」

「それは無謀よ！士郎さんも飲んだ方がいいわよ！」

雫が反対する。それも当たり前だ、死ぬかも知れないことを防げるのにそれをしないのだから。それでもボクは使わない。代用か効くのならそれで代用して限りある物を長続きさせるのがいい。ボクはみんなをなんとか説得して神水を使わないことになった。万が一の場合は飲むことで落ち着いた。

「とりあえず狼から食べよう。強さ的にはこれが一番弱いからね」

「血抜きは俺がやったし火も優花が通した」

「それじゃあ……」

「「「「いただきます！」「」」」」

全員肉にかぶりつく。酷い味だ、全員不味い不味い言っている。生で食べていたら飲み込めてすらいなかっただろう。

飲み込んだらすぐに神水を飲む。

「アガあ!?ぐおあああああああああ!?!」

「いだい”い”い”い”い”!?!」

「か、がら”だ”だ”だ”だ”だ”だ”!?!」

「あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”!?!」

「死”ぬ”う”う”う”う”う”う”う”う”!?!」

絶叫、洞穴の中で土郎達の叫び声がこだまする。バキバキと身体が作り替えられていく。筋肉は何度も千切れては再生し千切れては再生を繰り返す、骨は砕け治る。恐らく神水を飲んでいないからなのだろう、気配感知でハジメ達の骨が砕ける気配は無かった。皆は神水を飲んで、土郎は『完全なる形』で猛毒による破壊を治す。

皆の髪から色素が抜けていく、黒かった髪は白くなり筋肉や骨格は太くなり、身体つきが大きく変わっていく。男性陣は筋肉が大きく発達し、女性陣は胸の出るところは出て引つ込むところは引つ込む、女性として魅力的な身体つきに、雫は男性陣と同じように筋肉もついていた。髪に關しては痛みによるストレスで抜け落ちたのかは定かではないが、ハジメと幸利は黒から白へ香織はシルバーに雫は空色に優花はピンク色になった。

変質した魔力によつて魔物は身体能力が脅威的なものになり頑丈にする。

その変質した魔力が人間には猛毒なのだ。

あれから数分、士郎達にとつては永遠にも近い時間の激痛が治る。そこからさらに激痛が始まる。

「皆……生きてる?」

「な、何とか……」

「死ぬかと思つた……」

「これで何か得られていればいいがな……」

「士郎さんは……!?!」

しかし士郎は神水より効果値の低い技能で回復しているので復活が遅い。声も叫べる余裕がないのか声もぐぐもっている。

「はあっ……！はあっ……！死ぬかと……思ったよ……」

「当たり前じゃない！」

それに対して苦笑する士郎。そんな彼の髪は白緑色になっていた。

「なんだろう、どんどんエ〇キドウになっていく感じがする……そうだステータスプレートはどうなった!?!」

士郎はステータスプレートを確認する。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

天野士郎 17歳 男 レベル：15

天職：■の■／投影魔術師

筋力：505×α

体力：520×α

耐性：455×α

敏捷：490×α

魔力：410×α

魔耐：400×α

技能：対魔力・変容「+気温耐性」・投影／解析魔術「+複製投影」「+イメージ投影」・

憑依継承「+刀剣審美」「+様物」・民の叡智「+■の■」「+イメージ生成」・魔力操作・

狙撃・■■■■・鷹の目「十業の目」・完全なる形・心眼・強化魔術「十永続強化」・気配感知・胃酸強化・纏雷・言語理解

レベルが1上がったただけなのにステータスが恐ろしく上昇していた。恐らく成長限界が伸びたのだろう。

全員で纏雷の確認をする。それぞれの雷の色も違っていった。土郎が緑、ハジメが灰色、幸利が黒、香織が銀色、雫が水色、優花が赤だった。

その後ウサギ肉も食べて新しい技能、『天歩』派生技能「十空力」「十縮地」が追加された。

天歩の技能を確認すると空中を歩くことができるようだ。縮地は雫から教えてもらい。ハジメの左腕を喰らった爪熊を討伐するために探すことにした。

その際、ハジメが銃を作り爪熊への復讐心がものすごく高いのがわかった。笑いながら銃を作っていたので正直、土郎達は引いていた。優花には投擲用のナイフを大量に鍊成し、短刀術用に土郎が短刀を投影する。ハジメが作った銃の名前はドンナー、香織用の銃はスヴェートとジーズンとなった。

「よし！あの熊公を撃ち殺しに行きますか！」

「そうだねハジメくん！ハジメくんの腕を食った熊にお返ししないと！」

流石ハジメ至上主義の香織、思考回路が似てきている。

士郎の気配感知を頼りに熊を探し出す。

「いたよ……」

「よし、僕と香織だけで仕留める。皆はそこで待つてて」

右腕だけのハジメと2丁拳銃の香織が爪熊に向かつて歩き出す。

ハジメと香織の復讐劇が始まる。

ハジメのドンナーからドパン！と炸裂音を響かせ弾丸が熊に襲いかかる。それを避けるのだが、その先には香織が撃った弾丸が熊の目に当たる。そのまま熊は片腕で撃たれた目を抑える。その隙に縮地で近づいたハジメが、肉体錬成で下半身を破壊、倒れ込んだ上半身を再び肉体錬成で息の根を止めた。

「呆気なかったね」

「うん、あれだけわたしとハジメくんを追い詰めたのに」

この時4人の心が一つになった。「ハジメと香織を怒らせてはならない」と。

倒した熊の肉を食べると、再び、激痛が襲いかかったのは驚いたもののすぐに神水を飲んで事なきを得た。神水なのだが士郎が周りの壁を掘っているとゴロゴロ出てきた。その為士郎も飲む事を強制された。

気絶していた5日間とその後

大迷宮から無事脱出できた勇者一行は王国に今回の件を報告しなければならぬ。メルドは報告内容を考えると憂鬱になり顔を顰めた。

王国に戻ると全員が全員死への恐怖で体が震えている。勇者である天之河と同等のスペックを持ち、数少ない年上の1人を失ったのだ、絶望するなと言う方が無理だ。

メルドが王国に報告する。上層部の貴族達は死んだ内の1人が無能のハジメで良かったなどと言い出したのだ。まだ国王やイシュタルは分別のある人だったのだろう。上層部連中はハジメが士郎達を道連れにしたなどと言い、さらには香織達に嫉妬した女性貴族達が彼女等を罵り始めたのだ。

天之河に龍太郎はそれに対して抗議したのだが、ハジメを庇う心優しい人物だと逆に株をあげることになってしまった。しかしそんなことで龍太郎は納得するような男ではなかった。

「ふざけんなあ！」

龍太郎は貴族の数人を叫びながら殴り飛ばしてしまった。暴走した龍太郎を止める者はこの場にいない、ハジメ達を罵った貴族の数人の顔が腫れ上がる。

「テメエらが南雲の努力を馬鹿にすんじゃないやねえ！白崎達に嫉妬するくらいなら努力しやがれえ！」

「やめるんだ！龍太郎！」

「離せ光輝！こいつ等はボコボコにしねえと俺の気がすまねえ！」

その後団長も加わり龍太郎は鎮められた。

流石に今回の件は貴族側が悪いことになり龍太郎は罪に問われなかった。

彼の他にも土郎達の死を知って落ち込んでしまった者がいた。まず畑山先生だ。教え子が死んだと言う事実にはショックを受けない彼女ではない。他にはリリアーナとラッデルの2人だ。リリアーナは以前から土郎達と話す仲なのはともかくラッデルは最初、リリアーナと話している土郎達に詰め寄って来たのだが、リリアーナが説明すると納得し、ハジメの錬成などの様々な話をしていくうちに彼とも仲を深めることが出来たのだ。ラッデルの初恋は儂く散ってしまったが、土郎達のことを兄、姉のように慕うようになった。その理由は後々語ることになるが、そんな彼等が死んでしまったという話しを聞かされ、2人は初めて出来た兄、姉のように慕う存在を失った喪失感が予想よりも大きく、食事が喉を通り辛くなってしまったのだ。

それからハジメ達に向けて魔法を放った疑いのある畑山を尋問しようとしたのだが、突然人が変わったように畑山は土下座をして罪を認めたのだ。

天之河はその姿を見て檜山を許そうと王国に掛け合い無罪判決が出る。その際鈴、龍太郎、遠藤が猛抗議したのだが判決は覆らなかつた。

何故無罪にしたのか龍太郎達が天之河に問い詰める。

「光輝、なんであいつを無罪にしたんだ!」

「そうだよ檜山くんはワザと当てたんだよ!」

「でも彼はきちんと反省したんだ。だから大丈夫さ」

「天之河……それでもあいつにはきちんと罰を受けて貰いたいんだが」

「遠藤、あれは檜山のミスで真つ直ぐ撃つはずが曲がつてしまったんだ。あれは不幸な事故だ。だから彼は悪くないし、罰を受ける必要はないさ」

そう言つて天之河はそのまま自室に向かつて行く。その後姿を3人は信じられないものを見る目で見ていた。

「鈴、遠藤……俺もうあいつのこと信じられなくなつてきちまつた……」

「龍太郎くん、それは鈴もだよ。ハジが落ちた原因は檜山くんの自分勝手な行動の所為なのに、それで皆が命の危険に晒されたのになんで許せるのかな?もうわからないよ……」

「俺もだよ……あの時南雲が身体を張つてベヒモスを止めていたのに、恩を仇で返すよ
うなやつを許すなんて頭おかしいだろ……」

3人はこれから自分達はどうしたらいいのかわからなくなっていた。

龍太郎と鈴は恵里にどう説明したらいいのか、そもそも報告してもいいのか悩み、遠藤は天之河の思考を理解出来ない。

「恵里になんて伝えたらいいんだろう……恵里が一番檜山くんのこと恨んでるから」「正直に伝えるしかねえだろうな……」

それから5日が経過して恵里が目を覚ます。

鈴と龍太郎はこの5日間に何があったのかを伝える。恵里は元から信頼などしてはいなかったが2人の評価が地獄の底まで落ちたの言うまでもない。恵里が使っていた杖を確認すると、まだ強化魔術の効果が残っており、士郎達が生きることがわかった。強くなることを決意したはいいが士郎達が生きていることを誰に伝えるか相談する。

「とりあえず天之河や檜山達には知らせないのは当然として……畑山先生にリリイとラッデル、団長の3人には教えよう」

「天野、お前いつの間に王女、王子と仲良くなったんだよ……」

「それはいつか説明するよ」

彼等に時間を選んで説明することにした。

まずメルド団長に説明する。納得した表情を作った彼はこのことを世に公表するこ

とをしないことを約束したのだった。

次にリリアーナとランデルの2人に説明すると、2人は喜んだ顔になりいつ彼等が帰ってきてもいいように居場所を残しておく為に行動することとなった。無論、彼等が生きていることは内密にすることを約束してだ。

最後に畑山先生にも公表しないよう説明する。

恵里達4人は士郎達にいつ再会出来てもいいように訓練により一層打ち込むようになった。

その際天之河だけ、士郎達の死を乗り越えたと勘違いしていたが。

ドーピングだ！いいからドーピングだ！

あれからボク達は登る階段を探しているのだが一向に見つからなかった。結局見つけたのは降りる階段のみだった。

「これは不思議なダンジョン定番の最下層で脱出できるタイプだね……残念ながらリレミトの巻○はないから降りるしかなさそうだ」

「何階層あるのかな？」

「百層びったりだったりしてね」

「盗賊○の大宮殿？それとも竜骨の宝物○かしら？」

「一部の人しか分からないネタ出してこないでよ……」

「アレ全然クリア出来なかった……不思議なダンジョン系苦手なんだよね僕……」

「わかるぞハジメ、俺もだ……」

そんなこんなあったもののボク達は階段を降りる。その階段は実に雑な造りで、歩きづらい。

階段を降り終えるとそこはとても暗かった。幸利の暗視魔法で行くのもよかったのだが、流石に魔力が勿体無いので緑光石を灯りにして進む。その際片腕を塞ぐのは危険

なので腕に巻いておく。

しばらく進むと通路の奥で気配感知に反応を感じとり、警戒する。灯りを向けるとそこには2メートル程の大きさのトカゲがいた。そのトカゲは金色の瞳でボク達を睨む。すると突然身体がビキビキ音を立てながら石化していく。

「みんな神水をかけるんだ!」

その指示通り神水をかけると、石化は治る。ハジメがポーチから何かを取り出してトカゲに投げつける。

「くらえ!」

そう言いながら投げつけたのは閃光手榴弾だ。その眩しい光に怯んだトカゲに向けてボクは弓と細剣を投影し、弓に矢を番るように剣をセットし放つ。

「ソゲキツ!」

放たれた細剣はトカゲの脳天を貫通して岩壁に突き刺さる。

「すごい威力だな……」

「ハジメ、いつか高威力の弓作ってくれる?」

「もちろん任せてよ。一番いいの作るよ」

トカゲから肉を剥ぎ取り、カバンの中にしまう。どれくらい歩いたのかわからないがおおよそ十時間以上は歩いた。それなのに階段は一向に見つからない。それでも道中

でたくさんのお鮫石に魔物の肉を手に入れる事が出来たので、適当に拠点を作りそこで肉を焼き食べる。今回の肉は石化トカゲ、フェザースコールのフクロウに6本足の猫だ。

もちろん激痛が走るので神水を飲む。

今回追加された技能は石化耐性、夜目、気配感知だ。気配感知に関しては既に持っていたので、派生技能として大地感知というものが追加された。

残念ながら石化の魔○は手に入らなかったが夜目のお陰で緑光石なしでも暗闇を見渡せるようになった。それぞれの得意技能もメキメキと成長していく。ボクの投影魔術はベヒモスにも使った『壊れた幻想』ブロックファンタズムが派生技能に追加されしかも威力上昇して戦闘に大きく影響していく。

さらに歩いていくとようやく次の階段を見つけた。躊躇いなく降りていく。次の階層は地面がぬかるんでおり、中々思うように歩けない。空力で移動して探索を続ける。

「マジか……火器厳禁か……」

「ハジメくん、何が出たの？」

「フラム銃石って言って、簡単に燃えるんだ……」

「銃使えないのね」

「アタシも魔法使えないのね……」

さらに進んでいく。すると『ザバツ』と音がするので全員その場を縮地で離れる。そ

ここにいたのはサメだった。そのサメはタールの中に『ドボン』と音を立てながら入る。しかもそのサメは……

「気配感知に反応しない!？」

そして再びサメが飛び出す。狙われたのは香織だった。香織は咄嗟に避け、光魔法を放つ。

「『光集』！」

光魔法の一つでワールド○リガー風に言うならばスタ○メーカーだ。

幸利は手を銃のように突き出して叫ぶ。

「そこだ、『暗黒波・集』！」

指先から黒紫色のレーザーが放たれる。

暗黒波、闇魔法を波動のように放ち攻撃する。それを集中させてレーザーのように放つのが暗黒波・集だ。

しかしその攻撃は貫通はしなかった。当たりはしたものの、血はほとんど出なかったのだ。

再び飛び出して来たサメを優花の投擲と雫の剣撃により倒すことに成功した。そしてそのサメを喰らい、気配遮断の能力を得ることに成功した。

封印されし美しき吸血姫

三人称 side

タールザメのいる階層からさらに50層ほど進んだ。おおよそ二ヶ月は過ぎただろうか、ここに来るまで色々な魔物を食べ、技能や戦闘能力を磨いた。毒を吐く虹色カエル、痺れ粉をばら撒くモ〇ラ擬きだ。それにより毒耐性、麻痺耐性を得ることができた。ちなみにカエルよりモ〇ラ擬きの方が美味しかったのは色々と複雑だ。

それからどこぞのGのように現れるデカムカデを倒した。さらに迷宮なのに密林のような場所に出るとそこにはトレント擬きが現れた時は久々の肉以外の食料、しかも果実だとわかった途端女性陣の目つきが『ギロリ』と変わり、どこぞの錬金術師の漫画のような目になっていた。男性陣は久々に恐怖を感じたのだった。結果トレント擬きは全滅し、立っていたのは果実を沢山抱え込み素晴らしい笑顔を浮かべる女性陣の姿だった。

「やばいの見たな……」

「そうだね、女性ってあんなことできるんだ……」

「僕、みんなを怒らせないようにするよ」

3人の目は死んでいた……のだが幸利と士郎は別のことも考えていた。

(いや、ハジメはブーメランだぞ!?)

と考えただけで、2人は口に出さなかった。

手に入れた果実は幸利と優花がジャムなどに加工し何か塗って食べれるものが出てくれば使うことにした。ちなみそのジャムはとても甘かった。

特訓はハジメの作った銃を使いながら魔法や剣技、格闘術を使い分けることだ。この50層でかなり鍛錬を積んだので使いこなすことが出来る様になった。何故この層で鍛錬を積んでいるのかと言うと、階段が見つかからないわけではなく、散策途中に気になる扉があった。その扉には大きな一つ目巨人の彫刻が二つ掘られていた。だからこそ何があってもいいように強くなっておく必要があったのだ。その際にみんなに『^ル破^ル戒^スべき^レ全^イての^カ符』を投影して渡してはいる。魔力はそれなりに使ったものすぐに回復したので問題はない。

「それじゃあみんな扉を開くよ」

士郎が扉に近づくと、遠目ではよくわからなかったものの、その扉には豪華な装飾が施されていた。扉には取手はないが何かを嵌め込む窪みが中央に二つ、しかも魔法陣が描かれていた。見たこともない物なのでとりあえず解析する。解析結果は全く出なかった。否、解析が出来なかったと言った方が正しい。念のため押したら引いたりしたのだ

がビクともしなかった。

「うーむ、ハジメ錬成で開けられる？」

「わかったやつてみる」

ハジメが錬成を行使しようとした途端、だった

『バチイ!!』

「うわっ!!」

「ハジメくん!!大丈夫?!」

扉から赤い放電が迸りハジメの手を弾き飛ばす。彼の手から煙が吹き上がり火傷を負う。その傷を香織が駆け寄り無詠唱で回復させる。その直後だった。

——オオオオオオオオオ!!

突然野太い声が部屋一体に響き渡る。

全員扉から飛び退き戦闘態勢を取り周囲を気配感知で警戒する。

声の正体は扉の左右にいた一つ目巨人の彫刻だったのだ。

「なんかベタと言えばベタね……」

優花が苦笑する。

一つ目巨人は周囲の壁を砕きながら現れる。壁と同化していた灰色の肌は暗緑色に

変色していく。

一つ目巨人の容貌は国民的RPGに出てくる一つ目で暗黒神の怒りから生まれた魔物のようだった。違う点は何処から出したのかわからないが、4メートルはある大剣だ。

侵入者を見るために視線を士郎達に動かしたその時だった。

「待つてる暇はないんだ、ごめんね」

「空気を読んで待つていれるほど時間はないんでな『暗黒波・球』!」

士郎は貫通力の高い細剣を弓で放ち、幸利が手を突き出す。掌には闇魔力の塊が現れ、それを放ち巨人の目を狙う。

そのまま剣は眼球を貫き、暗黒弾は頭部を破壊する。

巨人達は内心、「やつと出番が来たと思つたらすぐに殺されるとか聞いてないんですけど!」と思つていたのでろう。死に方がそれを感じさせる。

今まで幸利の戦闘方法に疑問を覚えた雫が彼に質問する。

「今思つただけで幸利の闇魔法つてデバフ特化魔法よね? さつきから攻撃魔法しか使つてないけど、その辺どうなのよ?」

「二応使えるけど魔物を喰らうのに妨害魔法使うか? 俺は使わないぞ」

「確かにデバフは耐性によつて効いたり効かなかったりするからね……」

士郎 side

解体ナイフをボクは投影し、ハジメは錬成で作り一つ目巨人を切り裂いて魔石を取り出す。その魔石を扉の窪みに嵌め込む。その魔石はピッタリハマる。直後、魔石から赤黒い光が迸り、魔法陣に魔力が注ぎ込まれパキャンという何かが割れた音が響き、光が収まり周囲の壁が発光する。

ハジメが扉を開く。中は聖教教会の大神殿で見た大理石のような石造りで出来ており、規則正しく柱が2列に並んでいた。その奥には巨大な立方体が置かれており、差し込んだ光に反射して、光沢を放っていた。その立方体の前面の中央から何かが生えていた。ハジメはそれを凝視する。その生えている何かはゆらゆらと動き出す。

「……………だれ？」

掠れた弱々しい女の子の声だ。

「人……………なのか？」

下半身と両手を立方体の中に埋められたまま、顔だけが出ており、長い金髪は貞〇のように垂れ下がり少し不気味だ。その髪の間隙から、月食の月を思わせる紅い瞳が覗いている。歳の頃は12、3歳だろうか。随分とやつれてはいるが、それでも10人中1

0人が美しいと答えるほどの容姿だということがわかる。

「女の子？君は一体何者なんだ？」

「私、先祖返りの吸血鬼、凄い力を持つてる、だから国のために頑張った……けど突然家臣の皆が『お前はもういらぬ』って『これからは私が王だ』って言った。それでも私は良かった……でも私は凄い力のせいで殺せないから封印された……」

「国の為ってことは、君はどこかの王族なのかい？それに殺せないってどういう事なんだ？」

「勝手に治る。怪我も直ぐに、首を落とされてもその内治る」

（なるほど……ボクと同じ力か？それは後にしようか）

「不死身ってことは歳も？」

「うん、魔力も直接操作できる。陣も何もいらぬ」

ここで一つ疑問に思ったことがある。

何故彼女が、このような豪華で衛生面もしっかりしてそうな部屋に封印されていたことだ。害意を持つて封印するならもつと粗悪な部屋にするだろうし……今考えても無駄だな……

「たすけて……」

「ハジメ任せる。ボクは部屋の中を警戒するから」

「わかった」

ハジメは女の子を封印している立方体に手をかける。魔力を直接操作する。

『錬成』！ぐっ！抵抗が強い！』

錬成でこじ開けるのをやめ、懐から歪な形をした短剣を取り出す。その短剣を立方体に突き刺す。すると立方体から赤黒い光りが溢れる。その光が収まると立方体がどろりと融解した。

何かイケナイ気がしてボクは顔を背けた。

「ハジメくん！大丈夫!? 凄い光が出てたみたいだけど」

『破戒すべき全ての符』で解除したから問題ないよ。それと香織の服を一着彼女に渡し
といて。流石に素っ裸だと顔も見れないし……」

「……エッチ」

「ハジメくん……?」

「なんでやねん、今のは不可抗力やろが……」

ハジメ達の様子を伺うと香織と女の子がバチバチ視線を交わしていた。

なんだなんだ、何があったんだ?

ボクはしばらくこの部屋を散策する。それなりに広い部屋だ。魔力感知で部屋中を調べる。二つ反応があった。一つはハジメ達の足元。もう一つはハジメ達の真上の方

から何かが来る気配も感知した。おそらくハジメが女の子の封印を解いたからだろう。「ハジメ！2人を連れてそこから離れて！」

ボクはハジメ達に向かって叫ぶ。ハジメ達も何かの気配を感じとったのか、ボクが叫ぶよりも早く飛び退く。

『ドスン！』と落ちて来たのは腕が4つ、足が8本に、尾が2本の蠍のような姿をした魔物だった。

気配を感知したのが女の子の封印を解いてからだだった。つまり彼女を逃がさないための魔物か何かなのだろう。

蠍は尻尾から紫色の液体を勢いよく噴射する。かなりの速度でやってくるそれをかわす。液体がかけられたところからは『ジュワー』と音を立てながら床を一瞬で溶かしていった。

ハジメと香織がドンナーとスヴェートで蠍を撃つも硬い外殻に守られた腕に阻まれ弾丸が弾かれる。2人とも顔を狙っていたので腕は視界を塞いでいる。ボクは足元から鎖を出現させた蠍の身体を縛る。動けなくなったところを優花の纏雷を付与した投げ槍が奴の身体を貫いた。

「ふう……これだけ人数がいれば楽だね……」

「士郎の鎖が便利すぎる……」

「今は時間をかけないようにしてるから使うけど、その内緊急時以外は使わないようにしよう」

「じゃないと鎖が使えない時どうしたらいいのかわからなくなるよ。」

「……助けてくれてありがとう」

「どういたしまして。ユエ、紹介するよ僕の仲間で友達だ」

「どうやら女の子の名前はユエというらしい。」

「ボクは天野士郎。よろしく」

「俺は清水幸利。よろしくな」

「私は八重樫雫よ。よろしくね」

「アタシは園部優花。よろしくね」

「……士郎、幸利、雫、優花、よろしく。私はユエ、ハジメの『女』」

その一言にボク達4人は吹き出してしまった。

「違うでしょ!？」

「……まだ、だけどいつかは」

「させないよ!？」

迷宮脱出にユエという吸血鬼のお姫様が仲間に加わった。

べヒモスに復讐だ……あれ?蹂躪?

士郎達がユエの封印を解き、蠍の化け物を倒した頃。地上では勇者達がベヒモスと相対していた。

あの後士郎達の生存報告を聞いた者以外は死んだと思っただけのため、戦場に立つことが出来なくなっていました。武器を持つどころか見るのでさえダメになってしまったのだ。その生徒達を無理やり戦場に立たせようと教会の連中が押しかけて来たのだが、それをさせまいと畑山先生が反対したのだ。最初はそんなの知ったことではないと教会は言ったのだが、作農師としての力を奮わないと言うと、それは困ると教会は彼女の意見を汲み取り入れ、戦いたくない生徒を率いて作農師の仕事の続けることになった。

この時彼女は士郎の頼みを聞いてよかったと思ったのだ。

戦う為に残った生徒達は訓練を受けている。その中で著しく成長したのが恵里、龍太郎、鈴、浩介だった。

恵里は降霊術と闇魔法の発動速度、効果の範囲、威力上昇。派生技能が追加された。ステータスも魔力と魔耐が大きく上昇、敏捷も前衛職程ではないものの後衛職とは思えない程上昇した。

龍太郎は筋力、体力、耐性が大きく伸びこの三つは勇者である天之河をも上回る。

鈴は結界魔法が強力になり、集中すればメルドの全力攻撃を完全に無効化し、天之河の神威の衝撃が少し入るだけで済むほどだ。その大きさは直感1メートル半だが、杖先で場所を移動できるようにもなった

浩介は隠密能力が上昇し気配感知を持つ者でも見つけることが出来なくなった。ステータスは敏捷がトップクラスにまで上昇、筋力もそれなりに上がった、彼の敏捷を超える者はハイリヒ王国にはいない。

ここまで彼等が成長したのは、土郎達を落とす原因の一つとなったベヒモスを倒す為、そして檜山達の裏切りから身を守る為だ。

オルクス大迷宮の攻略メンバーは、勇者である天之河光輝は当然として天野恵里、坂上龍太郎、谷口鈴、遠藤浩介、中野信治の6名のパーティ、永山重吾、野村健太郎、辻綾子、吉野真央、近藤礼一、斉藤良樹の6名パーティと団長を含めた数人の王国騎士団が参加している。檜山大介は独断専行などの自分勝手な行動が多く見られた為不参加となった。

「さて、そろそろお兄ちゃん達を落としたベヒモスがいた階に来たよ……」

「あの時は俺達が未熟だった所為で天野先輩を始め6人が落ちちまった」

「でも鈴達は先に進む為に強くなった」

「だから南雲達を見つけるんだ」

恵里達は手を重ねて気合いを入れ直す。仮にベヒモスがいたとしても彼等には作戦があつた。

そこから一行は問題なく六十五階層にたどり着く。

「気を引き締めろ!ここはまだ不完全なマップだ。何が起こるかわからんからな!」

さらに道なりに進んだ彼等は大きな広間に着く。如何にもボス部屋らしい雰囲気の間だ。

その広間に侵入すると同時に見覚えのある魔法陣が輝く。

そして現れたのは――

「ま、まさか……やつなのか!」

ベヒモスだった。

「やつぱり生きていやがつたか!」

「ドラク○の宝の地図のボスも何度でも蘇るから薄々考えてはいたけど最悪だね……」

恵里は齒噛みしたような顔をしてベヒモスを睨む。そして詠唱を始めたのだつた。

「闇よ目の前の脅大な力を沈黙させよ『暗落』!」

暗落、相手の意識を落とす魔法だ。落ちる時間は相手によるが、それでもベヒモス相手に3秒効いた。それによりベヒモスの初動をキャンセルさせる。突進が来なかつた

ことにより、クラスの二大巨漢が攻撃出来る隙が生まれる。

「『猛り地を割る力をここに！』『剛力』！」

永山がベヒモスの腹部を二発殴る。その衝撃に怯んだところをさらに二発。すぐに永山は離脱して龍太郎がベヒモスの角の一本を手刀で殴る。

「切り裂け我が手は剣の如く！』『剛断』！」

手刀の威力を上げる魔法を唱え、ベヒモスの角の一本にめり込む。さらにもう一発入れようと思ったのだが深追いは危険なので離脱する。めり込んでひしゃげた所に強烈な一撃が迫る。

「万翔羽ばたき天へと至れ『天翔閃』！」

最初は神威ですらダメージを与えることが出来なかった天の河の一撃はひしゃげた角を切断し、もう一本の角にダメージを入れる。

「行ける！俺達は確実に強くなった！龍太郎と永山は左側！近藤と遠藤は背後から！メルド団長達は右側から！後衛は魔法準備！上級を頼む！」

「迷いのない良い指示だ。お前たち聞いたな？総員光輝の指示で行くぞ！」

光輝の指示通りベヒモスを包围する。

「迷い迷えこゝは惑いの地『幻影闇』！」

ベヒモスの顔に紫色の煙玉が当たる。そしてベヒモスの視界には先程までいた敵の

姿が忽然といなくなっていた。

恵里の幻を見せる魔法だ。やり方によっては敵より強い化け物の姿を見せることも可能なのだ。

後衛の魔法が飛来し命中する。ベヒモスは魔法が当たった方向を向き、爪をがむしやうらに振る。しかし誰もいないので全く手応えが無い。誰もいないとわかり振り向き様に爪を振ろうとする。

「()は聖域なりて、神敵を通さず『聖絶・集』!」

直感1メートル半のバリアがベヒモスの腕に現れ、初動が潰される。

「龍太郎に力の入る瞬間を教えてもらって正解だったよ!」

さらに誰もいないところから突然何かベヒモスを切る。さらにまた斬撃が何度も何度も襲いかかる。

暗殺者の浩介だ。メルド団長達にも姿は見えてはいないがやっていることはわかっている。全員攻撃を再開する。

するとベヒモスは浩介の身体に爪を当てる。彼の身体から血が出る。紙耐久の彼には少くないダメージだ。

「ぐあっ!」

激痛が彼の身体を走るも、それは一瞬のことだ。

「天恵よ彼の者に今一度力を『焦天』」

辻が浩介の傷を回復させる。

隣で地を手をつけている男、野村がいた。

「『造形』！」

ベヒモスの足元がへこみ、周囲から地面がおぶさりベヒモスの動きを阻害する。

「あの時の南雲がやってたんだ！俺だつて！」

野村が叫ぶとベヒモスを押さえつける魔法に力が入る。

「下がって！」

恵里の叫び声が響く。その声通り前衛は後ろに下がりベヒモスから離れる。それを確認し、後衛がそれぞれの適性魔法の上級を放ちベヒモスを焼き尽くし、切り裂く。ベヒモスの叫び声が洞窟内に響き渡り、聞こえなくなる。炎がなくなると、そこにはベヒモスの姿はなかった。

「か、勝ったのか……？？」

「勝ったんだよな……？？」

「勝つちまつたよ……」

生徒達が一齐に声を上げる。

呆然としていた光輝が、我を取り戻し背筋を伸ばして聖剣を頭上に掲げる。

「俺達がやったんだ!」

光輝が勝利宣言をする中、恵里はベヒモスのいた場所を眺めていた。

「エリリン?」

「鈴。……ううん、なんでも無いよ。ただやつとここまで来たって思ってただけだから」

「ホントここまで長かったね〜!」

「ああ、まだまだ先があるとはいえ今は自分達を褒めたいぜ」

「今だけは誇らしく思えるよ……」

そう感傷に浸る4人の元に光輝が歩いてくる。それに気づいた恵里は一瞬、嫌な顔を作るもすぐに戻す。

「皆無事か? 恵里、素晴らしい作戦だったよ! ベヒモス相手に大きな被害がなかったからね。それに鈴も境界良かったよ! 龍太郎もいつの間にあんなことが出来るようになったのか。遠藤も見えないくらい早かった」

作戦を考えたのは恵里だった。

内容はベヒモスに何もさせないで討伐することだ。負担がかかるのは恵里と鈴の2人だ。ベヒモスの動きを見極めて、タイミングよく魔法を使い、動きを阻害せねばならないのだから。最初は鈴にも負担がかかるので躊躇ったのだが、鈴が頑張ると言いそれを信じて実行した。

「うん、皆生きててよかったよ」

「死んだら元も子もないからね」

「俺はそれしか脳がねえからな」

「怪我したからあまり褒められたわけじゃないけどな……」

苦笑しながら返す4人。しかし次ぐ光輝の言葉は恵里の心を苛立たせた。

「これで南雲達や天野先輩も浮かばれるな。自分達を突き落とすとした魔物を自分達が守ったクラスメイトや後輩たちが討伐したんだからな」

龍太郎達は言葉が出なかった。恵里に関しては冷たい視線を向けている。

「どうやら彼の中ではベヒモスが落とすことになっているようだ。あながち間違いではないのだが、そもそもの話、檜山が勝手な行動を取ったり、魔法さえ撃たなければこんなことは起きなかったのだから。」

「話はそれだけ？ 私に行くよ」

「そう言つて恵里は一足先に帰路に着く。」

龍太郎達もその後が続くのであった。

奈落の最下層……神速を持って奴を斬れ!

士郎 side

一度蠍と一つ目巨人の肉と素材を拠点に持ち帰り、蠍の外殻を調べる。

外殻はシユタル鉱石というらしく、魔力を込めるとその分だけ硬度が増すと言ったものらしい。ハジメはこれを使った武器や防具を作ることにした。

これから巨人とサソリを食べようと思ったのだが。

「ユエって食べる物どうするの?」

ハジメが質問する。

「食事は必要ない」

「そう言えば吸血すればいいのか……で誰の血を吸うの?」

「……ハジメ」

「ダメだよ?何を言ってるのかな?かな?」

「といふかなんで僕なの?魔物の肉食べてるから不味いと思うんだけど……」

「……ん。熟成の味」

彼女曰くじつくりコトコト煮込んだスープのような物らしい。しかもなんか恍惚と

してるし……それもそうか300年以上も何も食べることもできなかったところに高級スープを飲んだのだから。

いつ吸ったのかと聞くと蠍と戦っている間にらしい。魔力が回復すれば倒せると思ったのだが、優花の投げ槍で倒したので出番がなかったという。

ユエがハジメの血を吸っている間にボクは幸利を連れてユエの足下にあった魔力反応を調べに行く。

「……だよ幸利。解析魔術で調べただけで開け方が分からなくて……ルルブレ使おうと思ったけど、中の物まで影響あったら困るし」

「なるほど。俺の闇魔法でピッキングしろと」

「そう言うこと」

「任しとけ」

幸利は魔力反応のあったところに手を当てて魔力を流し込む。しばらくすると成功したのか魔力を流し込んでいたところから、金属同士が擦れる様な音と共に周囲の床がせり出して来た。

良く見るとそれは直径30cm程の石柱、それが屈んでいた幸利程まで上がって来た所で止まり、側面が扉の如くパカッと開いた。

その中を見ると其処にはダイヤモンドの如き透き通った輝きを放つボール状の鉱石

が安置されていた。

「なんだこれ?」

「ちよつと待つてね……」

ボクは解析魔術で調べる。どうやら記録映像が保存されているようだ。

「迷宮を作った人のものか?」

「いや……その人のものならここじゃなくて最深部に置くと思う。おそらくユエの家族の物だと思う……」

「そうなのか……」

「見るのは後にしよう」

ボクと幸利は拠点に戻った。

「ユエはこの出口とかわかる?」

「……わからない。でもここは逆逆者が作ったと聞いている」

「逆逆者?」

聞き慣れない単語に優花はユエに聞き返す。

「神代に神に逆逆した神の眷属のこと。……世界を滅ぼそうとしたって聞いた」

逆逆者は神への逆逆に失敗した後、世界に散り散りになり隠れ家を作ったらしい。このオルクス大迷宮もその一つらしい。

「そういえばみんなのこと知らない。だから教えて」

確かにさつきまで戦つてたりで話せていなかったな。

ボク達は何故ここにいるのか、そしてユエと出会うまでのことを話した。

突然ユエが泣き出してしまった。

「ユエちゃん!?!」

「だ、大丈夫?」

「……みんな、辛い、わたしも、辛い」

どうやら、ボク達の境遇に共感して泣いてしまったようだ。優しい子だな……

するとハジメと香織がユエの頭を撫でて抱きしめる。

「ありがとうユエ」

「ユエちゃん……」

「でも、もう慣れたし。クラスメイトのことは割り切った。復讐なんてくだらないし、それよりもここで生きる術を磨くこととこの世界から帰る方法を探すことが優先だし」

「帰るの?」

「うん、早く帰りたいからね」

「……わたしはもう帰る場所がない」

顔を俯ける。彼女のいた国はもう既に滅んでしまった。仮に滅んでいなくとも戻れ

「ば再び封印されるか、その力を搾取されるだけだ……」

「ならば、ユエちゃんも私達の世界にくる?」

「え?」

「そうね、アタシもそれがいいと思うわ。帰る場所がないなら作ればいいし」

「いいの?」

「うん、ユエが嫌じゃなければけど」

「行く! ハジメ達の故郷も気になる」

ユエの表情が綻び、ハジメと香織に抱きつくのだった。

巨人の肉を食べると『金剛』という技能か追加された。

防御力を格段に上げる技能らしい。

「これボクの変容と合わせたらとんでもない防御力になるね……」

ボクの技能『変容』はステータスの数字の後ろにある『α』の数値によってステータスを倍増させることができる。

変容の倍率詳細は

E || 1

D || 5

C || 1 0

B || 5 0

A || 1 0 0

A || 5 0 0

A || 1 0 0 0

で

変容のステータス倍増に必要な数値が

E || 3

D || 4

C || 5

B || 6

A || 7

A || 9

A || 1 2

である。

現在レベルが51（巨人を食した時）なので変容で割り振れる変容値は30なので今

は全ステータスに割り振ることにした。

それでも化け物スペックなのだが……

ハジメはシユタル鉱石を使い超電磁砲のシユラーゲンを作り、幸利には理力の杖を作った。因みに最初は光魔の杖を作ろうとしたのだが、そもそも光のブレード部分をどうやって作るのかわからないので、魔力を込めて攻撃力を上げる理力の杖を作った、そもそも幸利の護身用の杖なのだが。優花の王国で貰った投げナイフはタウル鉱石と合成させることもした、最初は投げナイフではなく、槍などを投げていたのだがナイフの方が取り回しが良いので貫通力等を強化した。ボクの干将・莫耶を強化することにも成功した。最初にボクが投影した二刀を錬成でタウル鉱石と合成、それをボクが再び投影、複製することが出来た。干将・莫耶の特性もそのまま強化出来たのがよかった。服も色々と拘り、ハジメはそれぞれの要望に応えた。

ボクは普通に邪魔にならない程度のコートを作って貰った。コート内には先程の干将・莫耶を何本か挿している。

それからさらに下に降りていくと、他の生物に寄生させて操るアラクネもどきがいる、それに操られた魔物に追いかけて回され、さらにはユエが寄生されてその頭に咲いた花をドンナーでぶち抜いたりした、その時はユエが不満顔を作っていたが彼女が撃つてと言ったからなのでお相子なのだが。ボク達は魔物の肉を食べ続けているのだが一つ

変化があつた。ステータスが伸びているのだが、技能が初めての物以外は追加されなくなつてしまつたのだ。おそらく強くなり過ぎたのだろう。

拠点で眠るのだが最近、変わった夢を見るようになった。ボヤけているものの白髪褐色肌の男が何か言っている夢だ。おそらくエミヤなのだが、何故ボクが彼の姿を夢で見ることかわからない。考えられる理由はおそらく投影魔術なのだろうけど。

そんなこともあつたがボク達は100層に到達したのだった。

三人称 side

「進んで大丈夫だよ」

士郎が気配感知で魔物の気配がないことを確認して先に進む。

この階層は石柱や壁に刻まれた紋様などの装飾が綺麗でまるで神殿のようだ。例えるならゲームで言うところのラスボス前の部屋のようなだ。

「……士郎、慎重」

「まあ……」が100層だからね……しかも反逆者の住処らしき前だし……確実に今までよりもずっと強い魔物だ。消耗は避けたい」

そして扉の前に行くために最後の柱を通過すると、士郎達と扉の間に巨大な魔法陣が現れる。大きさはベヒモスの時の魔法陣の3倍くらいだ。そしてそれは光り輝く。

「おいおい、デカ過ぎるだろ……」

「やっぱりラスボスね……」

そう言いながら雫は刀を抜く。ハジメと香織も腰のホルスターからドンナーとスヴェートとジーズンを構える。幸利は理力の杖を持つ。優花は投げナイフを抜く。

士郎も干将・莫耶をコートから抜刀して構える。変容の割り振りを筋力がA、耐性と敏捷、魔力をB、それ以外をCにする。

光が収まり魔法陣から現れたのは、体長30メートル、6つの頭と蛇のような体躯、長く鋭い牙に赤黒い眼の化け物だった。それは神話に出てくる怪物、『ヒュドラ』のようだった。

「ククルウアアアアン!」「クク」

不思議な音色の絶叫を上げる。

殺気がこの部屋の侵入者達を襲う。それと同時に赤いヒュドラが火炎放射を口から噴き出す。

「不味い!」「熾^{ロウ}天覆^アう七^イつの円環^ア!」

咄嗟に干将・莫耶を消して左手を肘辺りに当てて右手を前に突き出す。薄桃色の7枚の盾が現れる。炎は盾に阻まれこちらには届かないが恐ろしい程の熱量が襲いかかる。

床はその熱で融解する。

『ドパンツ!』と射撃音が部屋に響く。ハジメの持つドンナーから電磁加速されて放たれた弾丸は赤いヒュドラの頭を吹き飛ばす。しかしその赤いヒュドラを白い光りが包む。

すると、まるで逆再生でもしたかのように修復されて行く。

「『緋槍』」

ユエの手元から円錐状の赤い炎の槍が放たれる。中級の攻撃魔法なだけあって緑のヒュドラの頭を吹き飛ばすのだが、先程と同じように修復される。

『先に回復役の白いヒュドラを落とす! 幸利! 優花! 攻撃を通す隙を遠距離攻撃で作って! 雫はボクと他の頭を攻撃して白いヒュドラの気を散らす! ハジメと香織とユエは白いヒュドラを頼む!』

『了解!』

『わかった!』

『わかったわ!』

『任せて!』

『んっ!』

士郎は縮地で青いヒュドラに接近する。干将・莫耶に魔力を流し込み干将・莫耶オー

バーエツジへと変化させ首を切り落とす。

雫も赤いヒュドラの首を空也で切り落とす。すると白いヒュドラが回復させる。そのヒュドラに向かって投げナイフと闇魔法の塊が放たれる。

回復を中断して『聖絶』らしき結界に防がれる。

さらに弾丸が三発、氷の槍が白いヒュドラに向かって放たれる。今度こそ倒せると思った矢先、黄色いヒュドラが割り込みその頭を肥大化させ弾丸と氷の槍を防いでしま

う。
「盾役までいるなんて、バランスがよすぎでしょ!」

ハジメが声を上げながら、その場を引く。すると黒いヒュドラが目を妖しげに輝かせる。

「いやあああああ!」

突然ユエが悲鳴を上げる。頭を抱えその場に蹲る。

「ユエ(ちゃん)!!」

ハジメと香織がユエの側に駆け寄ろうとするもいつの間にか再生していた赤いヒュドラと緑のヒュドラがそれを邪魔する。

「邪魔をするなあああ!」

「今あなたに構っている暇はないの!」

ハジメと香織が赤いヒユドラと緑のヒユドラを銃で吹き飛ばす。

『幸利、優花！ハジメ達の援護！』

再び念話で指示を出す。

ハジメと香織はユエの側にたどり着き、声をかける。

「ユエしつかりして！大丈夫!？」

「ユエちゃん!？何があつたの!？」

2人の呼びかけに全く反応せず青ざめた表情でガタガタと震える。念話でも激しく呼びかけるも変化はない。神水を飲ませてしばらくすると、虚なユエの瞳に光が戻る。

「……ハジメ?……香織?」

「うん、ハジメに香織だよ。何があつたの?」

パチパチと瞬きをしてユエは2人の存在を確かめる。小さな手を伸ばしてハジメの顔に触れる。次に香織の顔に触れる。それでようやく2人の存在を実感したのか安堵の息を漏らし、涙を流し始める。

「……よかつた……見捨てられたかと思つた……また暗闇に1人で……残されたかと……」

ユエが見たのは、突然強烈な不安感に襲われて気がつけばハジメ達に見捨てられて再び封印される光景が頭の中に浮かび、恐怖で何も考えられなくなり動けなくなつてし

まったという。

「ユエ……大丈夫、僕達は君を裏切ったりしない」

「ハジメくんの言う通り、私達はユエちゃんを1人にしないから」

2人はユエをちからいっぱい抱きしめる。その温もりに恐怖で固まった身体が解けたかのように動く。

一方で土郎達はヒュドラの激しい攻撃を避けつつ黄色いヒュドラを攻撃する。しかし堅い防御になす術がなく防がれる。

(偽・螺旋剣カラドボルグ・ユーなら貫けるけど、奴の防御を貫くために魔力を込める隙がない!それにヒュドラならアレをやればすぐに倒せるのに!)

歯噛みしながら土郎は弓を背中に背負い、適当な剣を投影してヒュドラに突き刺しそれを『壊れた幻想』で起爆する。しかしそれもすぐに修復されてしまい、いたちごっこが続く。

『緋槍、砲皇、凍雨』!」

突如、矢継ぎ早に引かれる魔法のトリガー。それにより黄色いヒュドラがズタボロになる。

『皆!10秒だけ時間を稼いで!ヒュドラを一気に仕留める!』

念話で叫び土郎は左手を上に掲げて、彼の得意魔法を唱える。

「『トリース・オン投影、開始』……」

彼の頭に様々な光景が浮かび上がる。それは自身が経験のしたことのないものだった。

士郎の時間を稼ぐ為に幸利が妨害魔法の『暗落』を唱え、一瞬ヒュドラの意識を奪う。さらに優花の投げナイフが白いヒュドラに『聖絶』を発動させて動きを止める。ハジメと香織の銃撃が赤いヒュドラの喉を貫く。ユエの魔法が緑のヒュドラを吹き飛ばす。雫が青いヒュドラの嘴みつき攻撃を避けつつ刀を突き刺す。

そして士郎の左手にはとても大きな斧剣が現れる。突然士郎の左腕が焼けたように煙が噴き出る。

「ぐっ……」
——トリガー・オフ 投影、装填

さらに腕が黒く焼けていく。熱い——それでもあのヒュドラを倒さねば士郎達は先に進むことが出来ない。地上に出ることが叶わない。腕が焼けるのは投影の負荷なのだろう。これをやるには相当な負担がかかる。今までこの投影はしたことがない。

士郎は時間を稼いでいる仲間達に準備が出来たこと告げるために叫ぶ。

「皆！散れ！」

言葉通り仲間達は散開する。それを見た士郎は手に持つ斧剣を神速のスピードで振

るう。

「全工程投影完了」——セツト——ナインライフズ・ブレイドワークス是、射殺す百頭……!」

黄色いヒュドラがその一撃を防ぐ、士郎はわかっているかのようにもう一撃加えて黄色いヒュドラの首を切り落とす。あまりの速さにヒュドラはなす術もなくやられる。続いて白いヒュドラ、『聖絶』を貼るも凄まじいスピードの2つ斬撃が『聖絶』を破壊し白い首を落とす。続いて赤、青、黒、緑を一撃でそれぞれ落とす。振るつたのは合計八撃だ。ヒュドラの首を全て切り落とす。

ここにいる全員が終わったと思った。勿論士郎も倒したと思った。だけど士郎の中の警報が鳴り止まない。

ヒュドラの胴体から銀色に輝く七つ目の頭が現れる。

士郎はそれが攻撃する前に残りの一撃に全てを込めて根本から切り落とす。

「おおおおおおお!」

ザシュ!

「グウルアアア!」

ヒュドラが絶叫しその命を落とす。

「はあっ……! はあっ……! やっぱり……まだ死んでなかった……!」

士郎の息が荒く、過呼吸状態だ。脳に酸素を送ろうにも肺が上手く働かない。呼吸を

するのも辛い。むしろ息を止めている方が楽と思える程だ。

遠くから雫が士郎の名前を呼びながら駆け寄ってくる。その姿は霞んで見えた。振り向こうとしたその時、士郎の身体はドサリとヒュドラの血で出来た血溜まりに倒れ込んでしまった。

雫 side

私達はこのオルクス大迷宮のラスボスであるヒュドラを倒すことができた。

私は嬉しさのあまり、ヒュドラの死体の前にいる士郎さんの所まで駆け足で向かう。

「士郎さん！」

彼の名前を呼ぶもピタリと動かない。

動いたと思ったその時、彼は糸の切れたマリオネットのように血溜まりにドサリと倒れた。

「士郎さん!?!」

血溜まりに倒れ込んだことにより、着ている服がどんどん赤く染まる。私は士郎さんに急いで神水をかける。しかしピクリとも動かない。

「香織！皆！士郎さんが！」

皆が士郎さんのところに駆け寄る。

私は彼に声をかけるも動く様子がない。

「雫ちゃん! とりあえず今は扉の奥に入ろう! そこに何かあるかもしれない」

「……そうね」

私は士郎さんを背負い、オルクス大迷宮の最奥へ歩いていく。

扉をくぐると眩い光が私達を襲う。しかしその光はとても暖かく心が安らぐようだ。

ぼうつとしてしている場合ではない。背中に背負う彼を安全なところに移動させないといけない。

(今更だけど士郎さん背負っているから、顔が近い! / /)

心臓がバクバクと早く鼓動する。顔も熱くなり、今私の顔は林檎のように赤くなっているだろう。

香織が寝かせられる場所を見つけたのでそこに彼を寝かせるのだった。

反逆者の住処と封印の真実と寄り添う二人の決意

士郎 side

ボクは身体が何かひんやりとした布に包まれているのを感じる。とても懐かしい気分だ。日曜日の朝を思い出す。今ボクがいるのはおそらくベッドなのだろう。

ん？ベッド？

「ぐぐつ……ここは!？」

ボクは激痛と倦怠感の両方を感じつつ身体を起こそうとするものの中々身体が動かない。

そこは天幕のあるとても高級感あふれるベッドだった。純白のシートに吹き抜けテラスのような場所、一段高い石畳の上にいるようだ。そして爽やかな風がボクの頬を撫でる。

そしてシートの感触が身体全体にあることを段々と理解していく。

(もしや今ボク裸!? しかも上半身だけ!?)

そして左腕だけ何か暖かい温もりを感じる。それと同時に手放したくないほどの柔らかなさを感じる。

ん？柔らかさ？視線を左腕にやる。そこには空色のポニーテールの少女が自身の左腕を抱き締めていた。

つまりボクの左腕に感じられている柔らかさは、おそらく雫の胸だ……ラッキースケベなんて何処の主人公だよ……

「雫……起きて……起きてっば……」

左腕を出来る限り揺さぶり、雫を起こそうとする。

「んう？……土郎さん？」

「雫、おはよう」

「っ！土郎さん！」

雫は飛び上がり、ボクを抱き締める。

「よかった……もう目が覚めないのかと思ったわよ……！」

「ごめん……無茶し過ぎた……」

彼女を抱き締め返そうと思ったのだが、身体が思うように動かない。

「身体、大丈夫なの？」

「全然だよ……腕……特に左腕に激痛が走ると、身体全体の倦怠感でまともに動かない」

「もう少し安静にしないとイケないわね……」

「それよりここは？もしかしくなくても反逆者の住処？」

「ええ、ハジメ曰く反逆者じゃなくて解放者らしいわ」

「何か訳がありそうだね……」

ボクはボロボロの身体に鞭を打つように動かす。

「ちよつと！まだ全快してないんだから安静にしないと……」

「それよりも知らないといけないこともある……まず雫、ボクなんで半裸なの？」

「えつと、身体汚れてたから拭くのに脱がしたわ……。それに服はボロボロで使い物にならなかつたから捨てて、新しい服がそこに置いてあるわ」

雫が指差した所には白い服が畳まれて置かれていた。それを取ってもらい着る。かなり着心地が良い。

「……肩貸してくれるかな？」

「しようがないわね……。嫌って言うっても這つても行くつもりでしょ？」

そう言いながら雫に起き上がらせてもらう。そして肩を借りながら移動する。

道中自分が寝てから何日経ったのか聞くとそんな時間に時間は経っておらず、3日で目が覚めたらしい。

その3日間、彼女はボクに神水を使い続けてくれたのだ。そのことにボクはとても感謝した。

「すごい心配したんだからね……」

「ごめんね……ここでアレをしないと不味いと思ったからさ……」

広間に着く。そこには色とりどりの料理が食卓らしいテーブルに並んでいた。皆も椅子に座っていた。

「「「士郎（さん）!?!」」」

「おはよう皆。それと心配かけた」

「士郎、腹減つてないか？一応料理は雫から報告を聞いて作ったから結構あるが」

「うん、3日間何も食べてないからね……お腹空いて死にそう……」

ということでボクは出された料理を食べた。ハジメ達はヒュドラの肉を食べていたらしいので、頼もうとしたら「怪我人が喰うもんじゃねえ！」って皆に怒られてしまった。当たり前だね。

身体の倦怠感是完全なる形で修復する際に体力と魔力をこつそり使っているからなのはわかるが。何故左腕の激痛が治らないのかがわからなかった。

左腕を見ると不規則に黒くなっていた。おそろくだが是、射殺す百頭を使った反動なのだろう。心当たりがそれしかない。

調べてみると身体の倦怠感に変容の反動、左腕は投影魔術が原因だった。ステータスプレートにこう書いてあった。

変容について

限界突破の亜種技能

変容で上げたステータスはランクによって上がる時間と切れた後の反動の時間が変わる。

完全なる形でも修復不可

効果時間

E || 増えないので無し

D || 5分

C || 3分

B || 1分

A || 30秒

A + || 15秒

A + + || 10秒

反動

E || 増えないので無し

D || 限界突破と同じ

場所に連れて行ってもらおう。

魔法陣の中心に行くくと、ボクの目の前に骸と同じ黒衣を来た青年が現れた。

「試練を乗り越えよくだどり着いた。私の名はオスカー・オルクス。この迷宮を創った者だ。反逆者と言えばわかるかな？ ああ、質問は許して欲しい。これはただの記録映像でね、生憎君の質問に答えられない。だが、この場所にたどり着いた者に世界の真実を知る者として、我々が何のために戦ったのか……メッセージを残したくてね。このような形を取らせてもらった。どうか聞いて欲しい。……我々は反逆者であつて反逆者ではないということ。」

そうして始まった大迷宮の創造者、オスカーの話。

それはボク達を知っている歴史やユエから聞いたものとは全くの別物だった。

狂った神とその子孫の戦いの物語。

神代は少し後、人間と魔人、様々な亜人は絶えず戦争を続けていた。争う理由は地球と変わらないものだった。その中でも一番の理由は『神敵』だから。というものだった。遙か昔種族も細かく分かれていてそれぞれが信仰する神がいた。その神の神託で戦争を続けていた。

それに終止符を打たんとする者——それが『解放者』という集団だった。

彼らには共通の繋がり、神々直系の子孫だと言うことだった。そのため解放者のリ—

ダーは偶然にも神々の真意を知ってしまった。

何と神々は、人々を裏で巧みに操り戦争を促していたのだった。しかもそれは人を駒とした遊戯としてだ。耐えられなくなった解放者のリーダーは同じ志の人を集めた。

そして神域とも呼ばれる神々のいる場所を突き止めることに成功し、解放者の中でも先祖返りの強力な力を持つ7人を中心に神々に戦いを挑んだのだ。

しかしその目論見は破綻してしまふ。何と、神は人々を巧みに操り、解放者達を世界を破滅させる存在『反逆者』だと認識させ、人々自身に相手をさせたのだった。次々と解放者は討たれていき、遂に残ったのは中心の7人だけになってしまった。

彼等は今もう神々を討つことが出来ないかと判断し、大陸の果てに散り、迷宮と試練を作り、それを乗り越えた者達に自分達の力を譲り、いつかこの神々の遊戯を終わらせることを願って。

長い話も終わり、オズカーは穏やかに微笑む。

「君が何者で何の目的でここにたどり着いたのかはわからない。君に神殺しを強要するつもりもない。ただ、知っておいて欲しかった。我々が何のために立ち上がったのか。……君に私の力を授ける。どのように使うも君の自由だ。だが、願わくば悪しき心を満たすためには振るわないで欲しい。話は以上だ。聞いてくれてありがとう。君のこれからが自由な意志の下にあらんことを」

そう話を締めくくり記録映像はスツと消えてしまった。同時にボクは頭に何かが入ってくる。それはまるでボクが初めてトータスに来た時のように。

神代魔法のようだ。生成魔法、物質に特殊性を持たせる魔法。オスカー・オルクスが得意とした魔法だ。

今ボクが地上に出たら、ハジメを無能扱いしていた連中に対して凄く嫌味な笑みを浮かべているだろう。なんせここで手に入る神代魔法はハジメ向きだったのだから。

ボクは魔法陣から出てみんなの所に行く。雫から聞いたのだが現在自分の力を上手く使う為に訓練をしているという。

「とんでもないことを知っちゃったね」

「ええ……貴方はどうするのかしら？」

「そうだね……みんなを集めてから言う。考えはまとまっている……雫は？」

「私は……早く帰りたい……お父さんもお母さんも心配してるだろうし……」

「そっか……」

訓練場に連れて行ってもらおう。そこには皆が特訓をしている姿が見えた。

「士郎……その様子だと入手出来たみたいだね」

「ああ……それでみんなに話したいことがある。いつが良い？」

「夕食後だね……今は特訓していたいし」

「わかった……ボクも明日参加するよ。それと一つ聞きたい事がある」

「何？」

「その左腕……どうした？」

「ああこれ？実は――」

ハジメ曰くオスカー・オルクスの工房にあった義手の設計図から、ハジメのアレンジを加えて制作した物らしい。

「完全にハガレンのエドじゃん……」

「言わないで……」

「今度フラメルの十字架の赤いコート、投影しようか？」

「やめて！」

その後夕食を取りボクはみんなにオスカーの話を聞いたうえで、今後の方針をどうするかを話す。

「これからどうするかなんだけど……正直言つてこの世界の為にエヒト……邪神を討つ事はしない。けれどこの世界から地球へ帰る為には邪神と戦うのは避けて通れない道だ」

「やっぱりか……」

「だから、今はここで出来ることをしよう。既にやってるけれど、この世界の誰よりも強

くなって、誰も止められないようになる。そして大迷宮を攻略して、全ての神代魔法を手に入れる。それでいいね」

全員が同意するようにうなづく。

「頑張るぞー！」

「」「」「おー！」「」「」

身体も治り、ボクも本格的に鍛錬を始める。食事にはヒュドラの肉を毎食食べ、ステータスの強化をする。次に派生技能習得や魔法の使い方を独学で慣らす。最後にハジメと幸利と武器の開発に取り組み。

そうしている間にふと思いついた、ユエが囚われていた部屋に隠されていた記録石のことだ。

「ねえハジメ。今日は見たい物があるんだ」

「何？」

ボクはカバンに入れてある鉱石を見せる。

これに記録映像が残されていることと、おそらくユエの家族の誰か……彼女の叔父が残した物であろう物だと説明する。

ボクは鍛錬中にユエの固有魔法『自動再生』について聞いた時に、ユエの叔父は本当に権力目当てで彼女を封印したのか疑問に思ったのだ。

クーデターを起こし彼女を殺すならばあの蠍や一つ目巨人を使い再生出来なくなるまで殺せばいいのだから。

だからボクは今日夕食後再びみんなを集めて、この記録映像を見ることにした。

「それと一つ質問したいことがあるんだ」

「何、今度は？」

「ユエとも付き合っただの？ 妙に前より距離が近いみたいだけど」

ハジメはギョツとした顔を作る。

「うん……香織とユエと相談して付き合う事にした」

「そっか……ならちやんと2人を大切にね」

「勿論だよ」

武器を作り終えて、夕食を食べ終えた。ボク達は記録映像を見る。

映し出されたのは、ユエに似た姿の壮年の男だった。

「叔父様……？」

「やっぱりか……」

映し出されたのはやはり、彼女の叔父だったようだ。

『アレーティア……久しい、と言うのは少し違うかな。君は、きつと私を恨んでいるのだろうか。……いや、恨むなんて言葉では足りないのだろうか……私のしたことは……ああ、違う。こんなことを言いたい訳じゃない。沢山考えて来たと言うのに、いぎ遺言を残すとすると上手くまとまらないな……』

自嘲するように苦笑いを浮かべながら、彼は気を取り直すように咳払いをしてから話し出した。

『まずは礼を言わねばならないな……アレーティア。きつと君の側には君が心から信頼する誰かがいるのだろうか。少なくとも、変成魔法を手に入れることが出来、真のオルクス大迷宮に挑める強者であつて、私の用意したガーディアンから君を見捨てず救い出した者が』

ボク達は息をするのも忘れるほど、彼の話に聞き入っていた。

『……私の愛しい姪に寄り添う君よ。君は男性？それとも女性なのかな？アレーティアにとつて、どんな存在なのかな？恋人、親友あるいは家族だったり、何かの仲間だったりするのだろうか？直接会つて礼を言えない事は申し訳ないがどうか言わせてくれ……ありがとう。その子を救い出してくれて、寄り添ってくれて、ありがとう。私の生涯で最大の感謝を告げる』

ユエ、この場合はアレーティアと呼ぶ方が正しいのだろうか。彼女の隣に座るハジメと香織は、アレーティアの手を優しく握る。

『アレーティア。君の胸中は疑問で溢れているだろう。それとも、もう真実を知っているのだろうか。私が何故あの日、君を傷つけてまであの暗闇の底へ沈めたのか。君がどういう存在で、真の敵が誰なのか。君に真実を話すか否か、あの日の直前まで迷った。だが奴等を確実に欺くためには話すべきではないと判断した。私を憎めばそれが生きる活力にもなると思ったのだ』

本当は話したかったのだろう。あの部屋に長く居れば、彼女を封印した意味がなくなってしまう。それ故に王城でユエを弑逆したと見せかけ、話す時間もなかったに違いない。

その選択がどれほどの苦渋に満ちた物なのか、映像に映る彼の拳が血が出るのではないかと思うほど握られていた。

『それでも君を傷つけた事に変わりはない。今更許せなどとは言わない。だが、これだけは信じて欲しい。知っていて欲しい。愛してる。アレーティア。君を心の底から愛している。煩わしく思ったことなど一度もたりともない。それに君の事を私は——
—娘のように思っていたんだ』

苦しげな泣き笑いのような表情には、とても優しげで、慈愛に満ち、それと同時に、ど

うしようもない程のやるせなさ、悲しみに満ちた表情になって発せられていた想いを聞き、ボク達は涙を流さずにはいられなかった。

『守つてやれなくて済まなかった。未来の誰かに託すことしか出来なくて済まなかった。情け無い父親役で済まなかった。』

彼の目尻には光る物が映るもそれを流すことはしなかった。グツと堪えながら、愛娘へ想いを一心に言葉で紡ぐ。

『傍に居て、いつか君が幸せを掴む姿を、その瞬間を見たかった。君の隣に立つ男を一発殴つてやるのが密かな夢だった。その後、酒でも飲み交わして頼むんだ「どうか娘をお願いします」と。アレーティアの選んだ相手だ。きつと、真剣な顔をして確約してくれるに違いない』

夢を見るかのように映る彼はどこか遠いところに眼差しを向ける。もしかしたらそこには昔の綺麗な服をまとった過去のアレーティアが、その隣にはハジメと香織と思わしき存在がいるのかもしれない。

『そろそろ時間だ。もつと色々話したい事が、伝えたい事があるのだが……私の生成魔法では、これ位のアーティファクトしか作れない。もう、私は君の傍にはいられない。だが、例えこの命が尽きようとも祈り続ける。アレーティア、最愛の娘よ。君の頭上に、無限の幸福が降り注がん事を。陽の光よりも温かく、月の光よりも優しい、そんな人生

を歩めますように』

彼の想いを込めたアーティファクトもあと少しとなつてしまったのか、別れの言葉を紡ぐ。

その直後、彼の視線が彷徨うように左右部屋に動いた。どうやら隣に寄り添う者にも伝えたい事があるのだろう。

『私の最愛に寄り添う君よ。お願いだ。どんな形でもいい。その子を世界で一番幸せ者の女の子にしてやってくれ。どうかお願いだ』

「はい……………必ず彼女を幸せにします……………」

「うん……………幸せにするよ……………」

遂にハジメと香織は声が漏れ出てしまった。

その声は涙で掠れてしまっていたが、2人の確固たる決意と意志が込められていた。

『さようならアレーティア。君を取り巻く世界の全てが、幸せでありますように』

映像の中の存在、2人の言葉届く筈もないのだが、彼は確かに満足そうに微笑み、虚空に溶けるように消えて行つた。恐らくは遠い未来で自分の言葉にどう答えるか確信していたのかもしれない。此処は彼女の叔父といつたところだろう。

「ヒッグ……………叔父様……………デイン叔父様あ……………」

ユエはかつて裏切られたと思つた叔父の真意を知り、自身が愛されていた事に涙を流

さずにはいられなかった。そしてハジメと香織と抱き合う。

ボクは彼の悔しさとユエへの想いに拳を力強く握る。雫も幸利も優花も声を漏らしながら泣く。

「みんな……前にエヒト討伐は帰る為のついでだつて言ったよね……前言撤回だ……」

自分でも驚くような低く重い声が口から出る。そしてボクはあの時の方針をぐると変える。手のひら返しだと言われても構わない。それだけボクの心はざわついていた。声色も変えずに続きを言う。

「エヒトのやつを……ぶち殺してから地球に帰る……！ そうでなきやオレは後悔する！」

「ああ！ 士郎、俺もあのクソ邪神を許す事が出来ねえ！」

「ユエの家族の……一族の未来を奪った邪神は絶対倒す……！！」

ボク^{オレ}達は新たな決意と覚悟を胸にさらなる特訓と開発を進める事にした。

帝国からの使者

ベヒモスを倒した日から少くない日時が経過した。かつての悪夢を乗り越えた僕達は一度迷宮から城に戻った。今までは不完全なもの地図があったのだが、これからは地図が出来ていない全くの未知の領域なのだ。

今は疲労回復の為に一時帰還する事になったのだ。ただ休憩するならホルアドでも良かったのだが、王国からの迎えが来たから僕達は王国に戻ったのだ。

話によると勇者一行と謁見する為に、ヘルシャー帝国から使者が来るそうだ。

因みに帝国との顔合わせが遅れていたのは、まず僕達が召喚されるまで時間も無く、帝国に知らせが間に合わなかったこと。そして帝国は実力主義だからだ。

そのため僕達一行とすぐに顔合わせしても軽んじられる事があるかららしい。だが僕達は六十五層のベヒモスを倒したので、興味を持った、ということだ。

そんな話を馬車の中で聞いたのだが。

正直に言えば『どうでもいい』の一言だ。今僕はそんな事をするくらいなら強くなることの方が有意義だと思っている。

馬車から降り王宮で待つ待機組の生徒達の所に到着した。

全員が馬車から降りると王宮の方から一人駆けてくる一人の少年——ランデル王子が視界に入った。

「皆の者良く帰った！ベヒモス討伐の知らせ、聞いたぞ！余は誇らしく思う！」

最初に会った時よりかなり丸くなっているのを僕と鈴は実感している。何せお兄ちゃんがランデル王子にドラク○に出て来る嫌われ王子の話をしたのだから。

経緯としては、僕達の世界の王子はどのような者なのか聞いてきたのがきっかけだった。その時に7番目と8番目に出て来る王子の話をしたら、彼が少し不安になってしまい、どうしたら良い王子になれるのか聞いて来たのだが。当然お兄ちゃんは王族でもない、でもない、何を言ったらいいかわからなかった。なので『権力を盾に我儘は言わない』とか『民の事をよく知り、悪い所ばかりを見ない』などを言ったのだ。それを心に刻んだのか、態度を改めたり、国の書類作業を見て学ぶようになったのだ。リリイも最初こそ驚いたものの、すぐにランデルの心意気を汲み自身の仕事を教えている。いつか立派な王になれるといいね。

「お帰りなさいませ。皆さまの無事の帰還、心から嬉しく思います」

そう言う、リリイはふわりと微笑んだ。

クラスメイト達は挙って頬を赤く染める。香織達のような美少女が身近にいるとはいえ、彼女達にはない王族としての洗練された気品や優雅さには太刀打ち出来なかった

模様。

無論ハジメ、幸利も出会った当初は赤くなっていた。打ち解けたのは3、4番目だ。1番最初に打ち解けたのはこの男だ。

「ありがとうリリイ。君の笑顔で疲れも吹っ飛んだよ。俺も、君にまた会えて嬉しい」
さらりとキザなセリフを言う天之河。下心無しでこのセリフが浮かぶのだからすごい。

「えっ、そ、そうですか？え、えっど……」

王女である以上、お世辞混じりの褒め言葉を貰うのは慣れている彼女は、笑顔の仮面の下にある下心を見抜く事が出来るのだが、今回の場合は下心のない素の状態で言われてしまったので、どう反応したらいいかわからなくなってしまう、オロオロしている。

一方の天之河は相変わらずニコニコしている。

やはり自身の言動が及ぼした事を理解していないようだ。雫がいたらため息を吐きそう。

その後リリイが精神を立て直してこれからの事を説明してくれた。

僕は3日間で魔力幻影のレパートリーを増やす事にした。

そして3日が経ち、帝国の使者が訪れた。

謁見の間には迷宮攻略に赴いた面々、国の重鎮、イシユタル率いる司祭数人が勢揃いし、使者5人を出迎えている。

「使者殿、よく参られた。勇者様方の至上の武勇、存分に確かめられるが良からう。光輝殿前へ出てくれるか？」

「はい」

勇者である天之河を筆頭に迷宮攻略のメンバーが紹介されていく。

「ほう、貴方が勇者様ですか。随分とお若いようで……失礼ですが、本当に六十五層を攻略したので？あそこには確かベヒモスという化け物が出るそうですが……」

使者の一人は天之河を観察するように見やると、若干疑わしそうな眼差しを向ける。

一応証拠として坂上くんとな天之河の攻撃で得た角があるので、天之河はそれを見せようと提案したのだが、護衛の1人と模擬戦をすることで判断することとなった。

「これ、時間かかりそうだね……」

僕は早く訓練したいので、なるべく天之河か使者のどちらかが瞬殺されるのを望んでいる。どちらかと言うと天之河が瞬殺されてくれればなあと思っっているが。

出てきた護衛の姿は何処にでも居そうな雰囲気を感じていて、特徴という特徴がない。人混みにすぐ紛れ込みそうなほどだ。

構えらしい構えも取らず剣をだらりと下げている。

ただ少し不思議に思った。いくらヘルシャー帝国と言えども、人智を超えたような強さを持つ天之河に対して模擬戦をいきなり挑むなんて、少し違和感を覚える。僕は直感で護衛の正体を察する。

「坂上くん、相手はおそらくメルドさん級だよ」

「やっぱりか……隙がねえと思っただらそういう事かよ……」

「一応『強敵だ』って教えといて……」

「わかった」

坂上くんは天之河に注意した。

そうして模擬戦が始まった。

『縮地』によって高速で踏み込む。並の戦士なら視認することすら困難なものだ。しかし護衛の男はそれにカウンターをかけたのだ。

天之河は一撃目こそ防いだものの、続く第二撃目は防げず、前蹴りで吹き飛ばされてしまったのだ。

「おいおい、勇者つてのはこんなもんか？まるでなつちやいねえ。やる気あんのか？」

平凡な顔に似合わない乱暴な口調で呆れた視線を送る護衛の男。

その表情には、失望の色が浮かんでいた。

確かに、護衛の男を見た目で判断して無造作に正面から突っ込んでいき、あっさりと

返り討ちにあつたというのが今の構図だ。失望されたとしても仕方がない。

「すみませんでした。もう一度お願いします」

「戦場に次はないが……まあいい、かかってこいよ」

天之河は今度は油断なく攻撃する。超高速で剣を振るうその姿はまるで嵐のようだった。しかしそれを躲し、捌き、避け、反撃を入れる。

力で押す天之河に対して護衛の男は技量で天之河を押す。

一度天之河が護衛の男に吹き飛ばされ、剣をくらいかけるも『限界突破』の技能で吹き飛ばす。そしてしばらく言葉を交わした後に殺気で動けなくなった天之河の前に光壁が現れ模擬戦は終わった。

「それくらいにしましょうか。これ以上は、模擬戦ではなく殺し合いになってしまますのでな。……ガハルド殿もお戯れが過ぎますぞ?」

「……チツ、やはりバレていたか。相変わらず食えない爺さんだ」

護衛の男が右耳につけていたイヤリングを取ると、周りの空気が霧がかかったかのようになくぼやけていき、それが晴れると全くの別人が現れた。

短く切り上げた銀髪に鋭い碧眼、スマートだが極限に鍛えられ肉体を持つ偉丈夫。齢にして四十代……いや、三十代後半でも通用する野性味溢れる男。

その姿を目にした瞬間、周囲が一斉に喧騒に包まれた。

「ガ、ガハルド殿!？」

「皇帝陛下!？」

「これはこれはエリヒド殿。碌な挨拶もせず済まなかった。ただ、どうせなら自分で判断したかったからな。一芝居打たれてもらった。今度の戦争にも関わる重要なことだ。無礼は許していただきたい」

謝罪すると言いながらまるで反省の色がない皇帝ガハルド。それに溜息を吐きながら、「もうよい」と頭を振る国王エリヒド。

「それで結果なんだが……そのガキを上立つ人間として認めるつもりはない」「なっ!?! どうしてですか!?!」

「人を殺す気のない奴が魔人族との戦争で何が出来る?」

皇帝陛下の言葉に天之河が目を見開く。しかし、反論の言葉を口にするよりも先に、皇帝陛下は勇者一行に目を向ける。

ん? あれ? これって僕のこと見てる?

「坊主のことなら兎も角として、その女なら話は別だがな」

一応後ろを振り向く。僕じゃないかもしれないからね。

「その後ろ振り向いてるちっこいのだ」

「僕ですか?」

「おう。その勇者よりもよほど見所がある。何なら俺の妻に迎え入れたいくらいだ」
「なっ!?!ちよ!?!恵里を妻にするう!?!」

あまりにも突飛な話に鈴は理解が追いつかない。

「陛下の申し立てはお断りさせていただきます」

幸利なら『だが断る!』なんて言いそうな雰囲気だなあ

「つれないな。だが、そうでなくちゃ面白くない。元の世界よりも、俺がいいと言わせてやろう。その顔が赤く染まる日が楽しみだ」

「そんな日は絶対に来ないよ。だって——」

僕は一呼吸置いて理由を話す。

僕は付き合っている人がいるからね」

その一言でクラスメイト達が騒ぎ出したのは言うまでもなかった。

奈落の底からの旅立ち

ユエの叔父の遺言を聞いたボク達はより一層鍛錬に励み、武器の開発もした。

干将・莫耶

アザンチウム鉱石を融合させて切れ味と硬さを強化。今後、投影される物がこれになる。

干将・莫耶（銃）。

こちらもアザンチウム鉱石使っている。エミヤ・オルタの武器だ。
ブローケンファンタズム
壊れた幻想専用についた針。

物理的な攻撃力は殆どないが、刺されれば壊れた幻想を発動してダメージを与えることが出来る。名前はファンタズムニードルと命名した。

星砕き

一対一を想定した武器。魔力を込めると叩きつける部分が開きエネルギーを放出する。それを利用して放出した際の推進力で反対にあるトゲの部分で勢いよく殴る。

ブラックロッド

幸利の杖で、魔力を込めて様々な形に変形することが出来る。

熾天覆う七つの円環

これも展開時に『金剛』を付与することで今まで以上に硬くなる。ハジメが義手の全力で殴つても一枚も割れることがなかった。

ハジメも「うっそ」とピンク髪の鍛冶屋のような声を漏らしていた。

干将・莫耶達は腰とコートに着けて、針も同じように装備した。弓もハジメが作った物を使う。仮に壊れたら投影する。

雫には刀を投影した。これには様々な刀を混ぜて、使い手の記憶を束ねているので彼女の『憑依継承』が生きる。アザンチウムは勿論使っている。

ハジメの右目には神結晶を使って作った魔眼鏡という魔力を視認出来るモノクルだ。

その他のメンバーも装備を一新した。

作つて持ち歩けない物などはオスカーが保管していた指輪、『宝物庫』にしまった。

更に魔力駆動二輪と四輪を開発。かなりの大ききでボク達が全員乗つてもスペースがあるくらいだ。更に近代兵器を盛り込んだので車に乗つていてもある程度対処できるようになった。

更にハジメと香織の恩人ならぬ恩石が大量に手に入ったり、香織の回復魔法のおかげで神水を入れた試験管は100を超える事になり。おまけにまだ神水が出るので、尽きる事はほばないだろう。

服は全員側から見たらコスプレ集団にしか見えなくなってしまう、ハジメと幸利なんかは1日寝込んでしまった。

ボクはドラクエIIIの勇者の服に黒いコートを羽織っている。

特訓もしてさらなるパワーアップを遂げたステータスカこれになる。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

天野士郎 18歳 男 レベル：???

天職：天の鎖／投影魔術師

筋力：19637×α

体力：18762×α

耐性：18498×α

敏捷：17672×α

魔力：14388×α

魔耐：14620×α

技能：対魔力・変容「＋気温耐性」・投影／解析魔術「＋複製投影」ブローケンファンタズム「＋壊れた幻想」

「＋イメージ投影」「＋投影速度上昇」「＋消費魔力減少」α「魔力効率上昇」「＋複数同時

発動」「＋解析眼」「＋結果記憶」・憑依継承「＋刀剣審美」「＋様物」・民の叡智「＋天の

鎖」α「＋イメージ生成」α「＋消費魔力減少」α「＋魔力効率上昇」α・魔力操作「＋魔力放射」α「＋

技能：闇属性適正「+圧縮発動」「+放射発動」「+発動速度上昇」「+効果上昇」「+持続時間上昇」「消費魔力減少」「+魔力効率上昇」「+連続発動」「+複数同時発動」「+遅延発動」「+付加発動」・高速魔力回復「+瞑想」・魔力操作「+魔力放射」「+魔力圧縮」「+遠隔操作」・胃酸強化・纏雷・天歩「+空力」「+縮地」「+豪脚」「+瞬光」・風爪・夜目・遠見・気配感知「+特定感知」・魔力感知「+特定感知」・熱源感知「+特定感知」・気配遮断「+幻踏」・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・恐慌耐性・全属性耐性・先読・金剛・豪腕・威圧・念話・追跡・高速魔力回復・魔力変換「+体力」「+治療力」・限界突破・生成魔法・言語理解

白崎香織 17歳 女 レベル???

天職：治療師

筋力：10030

体力：11047

耐性：10600

敏捷：11510

魔力：27800

魔耐：26900

技能：回復魔法「+回復速度上昇」「+回復効果上昇」「+複数同時発動」「+イメージ補強力上昇」「浸透看破」「+範囲回復効果上昇」「+遠隔回復効果上昇」「+状態異常回復効果上昇」「+消費魔力減少」「+魔力効率上昇」「+連続発動」「+複数同時発動」「+遅延発動」「+付加発動」・光属性適正「+圧縮発動」「+放射発動」「+発動速度上昇」「+効果上昇」「+持続時間上昇」「消費魔力減少」「+魔力効率上昇」「+連続発動」「+複数同時発動」「+遅延発動」「+付加発動」・高速魔力回復「+瞑想」・魔力操作「+魔力放射」「+魔力圧縮」「+遠隔操作」・胃酸強化・纏雷・天歩「+空力」「+縮地」「+豪脚」「+瞬光」・風爪・夜目・遠見・気配感知「+特定感知」・魔力感知「+特定感知」・熱源感知「+特定感知」・気配遮断「+幻踏」・毒性・麻痺耐性・石化耐性・恐慌耐性・全属性耐性・先読・金剛・豪腕・威圧・念話・追跡・高速魔力回復・魔力変換「+体力」「+治療力」・限界突破・生成魔法・言語理解

八重樫雫 17歳 女 レベル???

天職：剣士

筋力：17120

体力：1 2 5 6 1

耐性：1 1 3 6 5

敏捷：1 4 5 3 8

魔力：9 5 4 8

魔耐：9 4 8 2

技能：劍技「斬擊速度上昇」「＋拔刀速度上昇」「＋無拍子」・魔力操作「＋魔力放射」
 「＋魔力圧縮」「＋遠隔操作」・憑依継承「＋刀劍審美」「＋様物」・胃酸強化・纏雷・縮地
 「＋爆縮地」「＋重縮地」「＋振脚」「＋無拍子」「＋天歩」「＋空力」「＋豪脚」「＋瞬光」・
 風爪・夜目・遠見・氣配感知「＋特定感知」・魔力感知「＋特定感知」・熱源感知「＋特
 定感知」・氣配遮断「＋幻踏」・隱業「＋幻擊」・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・恐慌耐性・
 全属性耐性・先読「＋投影」・金剛・豪腕・威圧・念話・追跡・高速魔力回復・魔力変換
 「＋体力」「＋治療力」・限界突破・生成魔法・言語理解

園部優花 17歳 女 レベル???

天職：投擲師

筋力：1 0 5 8 2

体力：12597

耐性：9582

敏捷：13598

魔力：8652

魔耐：8952

技能：投擲術「+投擲速度上昇」「+飛距離上昇」「+遠隔回収」「+遠隔操作」「+目標補足」「+自動追尾」・短剣術「+斬撃速度上昇」・火属性適正「+圧縮発動」「+放射発動」「+発動速度上昇」「+効果上昇」「+持続時間上昇」「消費魔力減少」「+魔力効率上昇」「+連続発動」「+複数同時発動」「+遅延発動」「+付加発動」・魔力操作「+魔力放射」「+魔力圧縮」「+遠隔操作」・高速魔力回復「+瞑想」・胃酸強化・纏雷・天歩「+空力」「+縮地」「+豪脚」「+瞬光」・風爪・夜目・遠見・気配感知「+特定感知」・魔力感知「+特定感知」・熱源感知「+特定感知」・気配遮断「+幻踏」・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・恐慌耐性・全属性耐性・先読・金剛・豪腕・威圧・念話・追跡・高速魔力回復・魔力変換「+体力」「+治癒力」・限界突破・生成魔法・言語理解

とヒュドラの肉を食べ続けてステータスが化け物と化した。おまけにレベルは変質しなくなり、遂には非表示になってしまった。別に気にする必要もないが。

鍛錬を積み、地上に出ると決めた日の3日前

ボクはいつも通り鍛錬を行おうと鍛錬場に行こうとしたのだが、雫から大事な話があると知られて、誰もいない場所につれてこられた。

「それで大事な話って何？」

雫は深呼吸をして俯いた顔を上げる。

「私は土郎さん、あなたのことが好きです。付き合ってください」

やはりか……

薄々勘づいてはいたが、まさか告白されるとは……

「雫、ボクには恵里がいる」

「知ってるわ。それでもというより恵里本人がいいよって」

ちよつとおお!?聞いてないよ!?

「なんで恵里が……」

「私があなたに恋心を抱いたのいつかわかる？」

「ごめん、わかんない……」

「小学生の頃覚えてる？私のぬいぐるみが学校の女の子達にめちゃくちゃにされて泣いてたの」

「うん」

恵里がボクの家族になってから。3年が経って小学生6年生の頃、恵里と図書館から帰る時に雨が降っていた時の日だった。

雫が路地裏で泣いていたのだ。

それから雫を一度家に連れて帰り、恵里と話を聞いた。

簡単に説明すると虐めを受けて天之河に相談したが中途半端な対応しかしてくれなかったので、虐めが悪化してしまったという。

その後には彼女の虐めの現場を撮り学校に提出して虐めをしている奴等に罰を与えた。

その後香織とも知り合いハジメを紹介したのだった。

「その時からあなたのことが夢中になって、中学生の頃に好きになったわ。でもその時には恵里と付き合っていたのを知って、諦めた。でも恵里は良いよって言ったから、私は諦めなかったわ」

「そっか……」

彼女の話聞いてボクは決意する。

「これからよろしくね雫」

ボクは彼女を抱き締めて頭を撫でた。

今日ボク達は地上に出る。

外に出る魔法陣は隠れ家の3階にあり、それを使えば地上に出れる。

ボクはそれを起動しながら、みんなにこれから起こり得ることを話す。

「みんな、ボク達は今日ここを発つ」

「長く苦しい戦いだった……」

「ん」

「ボク達の武器や力は、はっきり言つて異端だ。教会の奴らや各国の人々が黙つて見る事はほぼない」

「特にハジメくんの作った物はね……」

「それを寄越せとか言われたり。戦争に強制参加させられるかも知れないわ」

「それだけじゃなく、教会や国だけでなくこの世界を支配する邪神とも敵対することになる。しくじれば解放者同様に世界を敵に回す。命の安全は保証できない」

「今更だな、俺達はそのために力をつけた」

「地球に帰るには邪神との敵対は避けて通れないからね」

「よし……行くよ、みんな！」

「」「」「」「」「」「」

ボク達は魔法陣の光に吞まれ、隠れ家から転移した。

樹海とウサギとライセン大迷宮

残念ウサギと遭遇

眩しい光が収まり、目を開くとそこは――

「洞窟……」

ハジメが期待していた光景と違い落ち込んだ声を漏らした。

「秘密の通路……隠すのが普通……」

「まあ、転移で洞窟から脱出するのは私達の世界だとお決まりだったから、ハジメくんが期待しちやうのもわからなくないよ」

いくつかのトラップがあったものの、オスカーの指輪に反応してトラップは解除されていったので、さほど時間もかからず外に出ることができた。

数ヶ月ぶり、ユエにとつては300年ぶりの太陽の光を見る。

「やつと外に………出たぞおー……」

「まっぶしいー……」

「シャバの空気はうめえゼエー……」

「久しぶり太陽!!」

「二度とこんな目に遭いたくなーい!!」

「地底の底からおさらばだあー!!」

「んー!!」

ボク達はそれぞれ思い思いの言葉を叫ぶ。幸利に関しては刑務所から出所した人だ。それからボク達は騒ぎ散らす。転んだりもしたがそれも笑いに変わり、なんだか小学生の気分だ。

いつのまにか魔物に囲まれていたのだった。

「全く……無粋な奴らだなあ」

ハジメがドンナーを抜く。

「そういえばここって魔法が使えないんだっけ？」

「みたいだな……理力の杖で殴るか……」

するとユエが炎の魔法を使う。

「……分解される。でも問題ない」

「ちなみにどれくらい魔力を使うの？」

魔法を使える優花が魔法を強引に使うユエに聞いた。

「……ざっと10倍」

「もしかしくなくてもユエって脳筋よね……」

刀を抜刀したため息を吐く雫。幼馴染にも脳筋があるので対応が手慣れている。

ボクも試しに投影魔術を使って偽・螺旋剣を投影する。構築するのに魔力が分解される。

「ホントだ……こりや物理で殴る方がいいや」

「……しようがないから杖を使う」

そう言つて背中に吊るしたマジカルステッキを取り出す。能力は理力の杖と同じだが、理力の杖は斬撃に対しマジカルステッキは打撃だ。

原作と違い威力上昇限界はないのだ。

そして10分もしないうちに魔物は全滅したのだった。

「弱い……」

「逆だ。ボク達が強すぎるんだ……」

「奈落の魔物が強すぎるから、相対的に私達も強くなったのよね……」

奈落の魔物に比べてしまうとこの魔物はあまりにも弱かったのだった。

ハジメが宝物庫から車を取り出してボク達はそれに乗り込む。今回運転するのはハジメだ。

「とりあえず樹海側に向かおう」

「……なんで樹海側？」

「溪谷抜けるのに砂漠は面倒でしょ?」

「なるほど……」

道を錬成機能で整地しながら走る。

ボクはせっつかくなのでバイクを出してもらい走り出す。その後ろに雫も乗る。

地球にある物と違って魔力で動くので、環境に良いし音もしない。ただライセン大溪谷だと魔力効率が悪いので長時間使うことは出来ないのだが。

ライセン大峡谷は基本的に東西に真っ直ぐ伸びた断崖だ。そのため脇道などはほとんどなく道なりに進めば迷うことなく樹海に到着する。ハジメもユエも、迷う心配が無いので、迷宮への入口らしき場所がないか注意しつつ、軽快に魔力駆動二輪を走らせていく。車体底部の錬成機構が谷底の悪路を整地しながら進むので実に快適だ。

しばらく走っていると『ズシンズシン』と何か大きな生物が走っている音がする。それもどンドン近づいてきているようだ。その音の正体が現れる。

頭が二つあるティラノサウルスのようだ。足元ではびよんぴよん跳ねながら逃げるウサミミの少女が見えた。

兎人族のようだが、髪が白だったことに不思議に思った。

兎人族の少女は顔が涙でぐちゃぐちゃになっていた。

「やっと見つけたあ! だずげでえええ! 死んじやうよおお!」

兎人族の少女が何か気になる言葉を発した。

やっと見つけた？ どういう事だ？ 彼女と出会った事はないのだが……もしかすると
未来視系統の能力を持っているのか？

「雫、シユタイプの操作任せるよ」

「わかったわ」

操作を交代してボクは先程投影した、偽・螺旋剣を魔力を込めながら弓につがえて双
頭テイラノを狙う。その際に形を細く貫きやすいように変化させる。

「その兎人族！ 伏せて！」

「！は、はいいい！」

偽・螺旋剣！
カラドボルグ・ユー

偽・螺旋剣は双頭テイラノの真ん中を貫き、偽・螺旋剣の特性で貫かれた所が抉られ
ていき、身体が二つに分かれた双頭テイラノは絶命した。

「す、すごい……ダイヘドアが、い、一撃で……」

兎人族の少女は先程の双頭テイラノの死骸を見て驚いていた。

ボクは怪我がないか確認を取るために、シユタイプから降りる。

「その君、怪我とかない？」

「へ？あ、はい！大丈夫です！助けていただきありがとうございます！」

「どういたしまして。怪我とかなくてよかったです……」

「士郎さん。彼女、怪我とかは？」

「ないみたい」

それを知ると雫はホッと息を吐く。

「ボクは士郎、天野士郎」

「私は八重樫雫よ」

「わたしは兎人族ハウリアの一人、シア・ハウリアと言います！それとわたしの家族も助けてください！」

この兎人族の少女シア・ハウリアは凶々しくそして、凶太い精神を持っていたのだった。

シア・ハウリア

ハジメ達に乗っていた車もこちらに停まり降りる。

「士郎、どうしたのその子？」

「魔物に追われていたから助けた」

「相変わらずのお人好しだな……」

「それで君はなんであの魔物に追われていたんだ？ 亜人族は樹海に住んでいて魔物に追われるような事がほとんどないはずだけど……」

「実は……」

シアの話によると。

シア達、ハウリアと名乗る兎人族達は「ハルツィナ樹海」にて数百人規模の集落を作りひっそりと暮らしていた。兎人族は、聴覚や隠密行動に優れているものの、他の亜人族に比べれば戦闘能力は皆無らしく、突出したものがなないので亜人族の中でも格下と見られる傾向が強いらしい。性格は総じて温厚で争いを嫌い、一つの集落全体を家族として扱う仲間同士の絆が深い種族だ。また、総じて容姿に優れており、エルフのような美しさとは異なった、可愛らしさがあるので、帝国などに捕まり奴隷にされたときは愛玩

用として人気の商品となる。

そんな兎人族の一つ。ハウリア族に、ある日異常な女の子が生まれた。兎人族は基本的に濃紺の髪をしているのだが、その子の髪は青みがかった白髪だったのだ。しかも、亜人族には無いはずの魔力まで有しており、直接魔力を操る術と、とある固有魔法まで使えたのだ。

当然、一族は大いに困惑した。兎人族として、いや、亜人族として有り得ない子が生まれたのだ。魔物と同様の力を持つているなど、普通なら迫害の対象となるだろう。しかし、彼女が生まれたのは亜人族一、家族の情が深い種族である兎人族だ。百数十人全員を一つの家族と称する種族なのだ。ハウリア族は女の子を見捨てるという選択肢を持たなかった。

しかし、樹海深部に存在する亜人族の国「フェアベルゲン」に女の子の存在がばれれば間違いなく処刑される。魔物とはそれだけ忌み嫌われており、不倶戴天の敵なのである。国の規律にも魔物を見つけ次第、できる限り殲滅しなければならぬと有り、過去にわざと魔物を逃がした人物が追放処分を受けたという記録もある。また、被差別種族ということもあり、魔法を振りかざして自分達亜人族を迫害する人間族や魔人族に対してもいい感情など持っていない。樹海に侵入した魔力を持つ他種族は、総じて即殺が暗黙の了解となっているほどだ。

故に、ハウリア族は女の子を隠し、十六年もの間ひっそりと育ててきた。だが、先日とうとう彼女の存在がばれてしまった。その為、ハウリア族はフェアベルゲンに捕まる前に一族ごと樹海を出たのだ。

行く宛もない彼等は、一先ず北の山脈地帯を目指すことにした。山の幸があれば生きていけるかもしれないと考えたからだ。未開地ではあるが、帝国や奴隷商に捕まり奴隷に墮とされてしまうよりはマシだ。

しかし、彼等の試みは、その帝国により潰えた。樹海を出て直ぐに運悪く帝国兵に見つかってしまったのだ。巡回中だったのか訓練だったのかは分からないが、一個中隊規模と出くわしたハウリア族は南に逃げるしかなかった。

女子供を逃がすため男達が追っ手の妨害を試みるが、元々温厚で平和的な兎人族と魔法を使える訓練された帝国兵では比べるまでもない歴然とした戦力差があり、気がつけば半数以上が捕らわれてしまった。

全滅を避けるために必死に逃げ続け、ライセン大峡谷にたどり着いた彼等は、苦肉の策として峡谷へと逃げ込んだ。流石に、魔法の使えない峡谷にまで帝国兵も追って来ないだろうし、ほとぼりが冷めていなくなるのを待とうとしたのである。魔物に襲われるのと帝国兵がいなくなるのとどちらが早いかという賭けだった。

しかし、予測に反して帝国兵は一向に撤退しようとはしなかった。小隊が峡谷の出入

り口である階段状に加工された崖の入口に陣取り、兎人族が魔物に襲われ出てくるのを待つことにしたのだ。

そうこうしている内に、案の定、魔物が襲来した。前門の虎後門の狼状態でもう無理だと帝国に投降しようとしたが、峡谷から逃がすものかと魔物が回り込み、ハウリア族は峡谷の奥へと逃げるしかなかった。そうやって、追い立てられるように峡谷を逃げ惑い……

「……気がつけば、六十人はいた家族も、今は四十人程しかいません。このままでは全滅です。どうか助けて下さい！」

正直に言えば、ボクは彼女の家族を助けてあげたい。だが、今はそんな余裕もないのだ。いつエヒト邪神がこの世界に飽きて、地球に攻め込むかわからない。そんな中で彼女達の問題に関わってられない。

「仮にボク達が助けたとして、君達は何を報酬にする？」

「え、えつと……」

「帝国に追われているわ、国から追い出されているわ。僕らにも目的があるからそんな時間も取れないんだ」

「そんな……でも、守ってくれるって見えたのに！」

「さつきも見えたって言ってたんだけど。もしかして君は未来視の能力を持つてるの？」

「え、はい！土郎さんの言う通りわたしは『未来視』と言いまして、仮定した未来が見えます。もしこれを選択したら、その先どうなるか？みたいな……あと、危険が迫つているときは勝手に見えたりします。まあ、見えた未来が絶対というわけではないですけど……そ、そうです。私、役に立ちますよ！『未来視』があれば危険とかも分かりやすいですし！少し前に見たんです！貴方が私達を助けてくれている姿が！実際、ちゃんと貴方に会えて助けられました！」

シアの説明する『未来視』は、彼女の説明通り、任意で発動する場合は、仮定した選択の結果としての未来が見えるというものだ。これには莫大な魔力を消費する。一回で枯渇寸前になるほどである。また、自動で発動する場合もあり、これは直接・間接を問わず、シアにとって危険と思える状況が急迫している場合に発動する。これも多大な魔力を消費するが、任意発動程ではなく三分の一程消費するらしい。

どうやら、シアは元いた場所で、土郎達がいる方へ行けばどうなるか？という仮定選択をし、結果、自分と家族を守る土郎の姿が見えたようだ、そして、土郎を探すために飛び出してきた。こんな危険な場所で単独行動とは、よほど興奮していたのだろう。

彼女はポロポロなのでひとまず適当なコートを投影して渡す。

これは普通にボクは驚いたと同時に疑問が一つ浮かんだ。

「未来視があるのになんでこんな状況になったのさ？危険を察知出来るならフェアベルゲンの人たちに追われる心配なんてなかった筈でしょ？もしかして自分で使った場合は、しばらく使えないとかあるの？」

ボクの指摘にシアは「うっ」と唸った後に目を泳がせてポツリと漏らした。

「はい……」

「で何に使ったんだ？」

「友人の恋路が気になって……」

「使い方あ！貴重な魔法をなに出歯亀に使ってるのさ君！」

「ううう猛省しております」

「残念ウサギだな……」

それで彼女の家族を助ける事なのだが、一度シアに話し合おうと告げて、相談することにした。

「それでどうする？」

「僕はあまり乗り気じゃないね……」

「やっぱり面倒事は背負えないから？」

「うん」

「ボクは彼女の家族を助けて、樹海を案内して貰おうと思う」

「……私も士郎と同じ意見」

「士郎、彼女達はフェアベルゲンの連中に追われてるんだぞ」

「正直言つて敵じゃないでしょ？」

「まあそうね。アタシ達より強いやつなんてそんなにいないと思うし」

「それに……」

チラリとボクはさつきから何も喋らない雫を見る。おそらくシアのウサミミを見ているのだろう。

「ここで見捨てたら雫が何言うかわからないし……」

「雫ちゃん、可愛い物好きだからね……」

ボクはシアに向き直る。

「とりあえず君の家族を助けたら、樹海の案内を頼みたいんだけど。いいかな？」

「はい！ありがとうございます！うう、よがっただあぁ、よがったよおぉ」

ぐしぐしとシアは嬉し泣きをする。それもそうだ。仲間を助けてもらえると安心したのだから。

いつまでも泣いてはいけなないと、すぐに泣き止み移動の準備をする。

「雫もボケつとしてないで行くよ」

「へ？あ、うん」

「あの、よ、よろしくお願ひします……皆さんの事はなんと呼べば良いのでしょうか？」
「そういえば名乗ってなかったね。ボクは士郎、天野士郎」

と順番に自己紹介していく。

ユエのことをちやんづけで呼んだ時に「……さんをつけろ、残念ウサギ」と怒られた。おそらく外見でユエの年齢を判断したのだろう。吸血鬼で遙かに年上だと聞くと勢いよく土下座したのだった。

シアに車とシユタイフのどっちに乗るか聞いた所、シユタイフに乗ると言ったので、ボク、雫、シアの順番で乗ることとなった。

「あの……逃げるのに必死でつい流してしまっただけですけど、士郎さんこの乗り物何ですか？あとあの狙撃、何をしたんですか？普通の狙撃ならダイヘドアがあんなことにはならないでしょうし……」

「それについては道中で話すよ」

そう言ってシユタイフに魔力を込めて、走り出す。

悪路をもともせずに走るシユタイフに「きやああああ〜！」と悲鳴をあげていたのだが

途中から慣れたのか、岩を避けるためにカーブした時にテンション高めの声できやつ

きやつしていた。

道中、シユタイフや車の事やここに来るまでの事、ハジメとボクがアーティファクト作れる事を簡潔に話した。するとシアは目を見開いて驚愕した顔になる。

「え、それじゃあ皆さんも魔力を直接操作出来て固有魔法が使えると……」

「そうだね」

「案外悪いことじゃないわよ」

しばらく呆けていたシアは何かを堪えるように雫の肩に顔を埋めた。そして突然泣き出してしまった。

「シア?どうしたのよ?」

「……わたしだけじゃないってわかって……」

シアは家族に嫌悪される事なく守られ、愛されてきたとはいえ、自分一人だけ『他の人と違う』ことに何処か寂しきを感じていたのだろう。ボク達のような人が現れたことで自分以外にもいたと安心したのだろう。

すると遠くで魔物の鳴き声が聞こえてきた。それもそれなりの数だ。

「!土郎さん!もうすぐ父様達がいる場所です!……魔物の声が近いです!父様達がいる場所に近いです!」

「それなら急がないと！ 雫！ 魔力借りるよ！」

「ええ！ 持つていきなさい！」

ボクは回路接続で雫の魔力を借り、シユタイフのスピードを上げてシアの家族のところでまで急ぐ。

帝国兵はやはりクソ

ライセン大溪谷に怒号と悲鳴が響く。

ウサミミを生やした人影が岩陰に逃げ込み必死に体を縮めている。あちこちの岩陰からウサミミだけがちよこんと見えており、数からすると二十人ちよつと。見えない部分も合わせれば四十人といったところだ。

そんな怯える兎人族を上空から睥睨しているのは、奈落の底でも滅多に見なかつた飛行型の魔物だ。姿は俗に言うワイバーンというのが一番近いだろう。体長は三〜五メートル程で、鋭い爪と牙、モーニングスターのように先端が膨らみ刺がついている長い尻尾を持っている。

「ハ、ハイベリア……」

肩越しにシアの震える声が聞こえた、あのワイバーンモドキは『ハイベリア』というらしい。ハイベリアは全部で六匹はいる。兎人族の上空を旋回しながら獲物の品定めでもしているようだ。

そのハイベリアの一匹が遂に行動を起こす。大きな岩と岩の間に隠れていた兎人族の下へ急降下すると空中で一回転し遠心力のたっぷり乗った尻尾で岩を殴りつけた。

轟音と共に岩が粉碎され、兎人族が悲鳴と共に這い出してくる。

ハイベリアは「待ってました」と言わんばかりに、その顎門を開き無力な獲物を喰らおうとする。狙われたのは二人の兎人族。ハイベリアの一撃で腰が抜けたのか動けない小さな子供に男性の兎人族が覆いかぶさって庇おうとしている。

周りの兎人族がその様子を見て瞳に絶望を浮かべた。誰もが次の瞬間には二人の家族が無残にもハイベリアに無惨に喰われるところを想像しただろう。しかし、そんな結果は起きない。

なぜなら、ここには彼等を守ると約束した、奈落の底より這い出た化物達がいるのだから：

士郎はコートから2丁の銃剣を取り出し構え、照準をハイベリアの頭に当てる。

ドパンツッ！ドパンツッ！

黒と白の銃剣から放たれた弾丸は見事に頭を撃ち抜き、その威力で頭蓋を吹き飛ばす。

頭のなくなったハイベリアは地面に叩きつけられるように落ちる。

さらに後方から銃弾が放たれ、残りのハイベリアも息絶える。

「父様〜！みんなあ〜！助けを呼んで来ましたよお〜！」

「「「「「シアア!?!」」」」」」

シユタイプから手を振るウサミ少女が兎人族達の視界に映る。

ボロボロの衣服の上にマントを羽織っているが、髪とウサミでシアとわかり、止めたシユタイプにわらわらと集まる。

「シア無事だったのか！それでそちらの方々は……？」

「わたし達を守ってくれると言ってくれた士郎さん達です」

その後シアが士郎達のことを説明する。

「士郎殿と言いましたな。私の名前はカム・ハウリア、シアの父にして、一族の族長をしています。この度はシアを一族を助けていただきありがとうございます。しかも脱出の手伝いもしてくださるとは……」

「いえ、ボク達は偶然ここに来ただけです。ボク達の所までたどり着いたシアさんを褒めてください」

「しかし、すぐに信用するんだな。亜人族は人間族にいい印象を持ってないはずなんだが」

「シアが信用する相手なのです。家族である我等が信用しないでどうするのです」

「そっか……いい家族の元に生まれてよかったねシア」

士郎はハウリアの家族愛に納得したように呟いた。

そして自然とシアの頭を雫と一緒に撫でていた。

士郎には恵里のような前例があるため、余計にそう感じていた。

このまま留まって魔物に再び襲撃されるのは困るので急いでこの場を後にした。

士郎達は兎人族四十二人をぞろぞろと連れて渓谷を抜ける道を歩いていた。

それを見逃すような魔物はおらず、数多の魔物が襲いかかってくるのだが。それら全てが士郎達の手によって倒されていき、兎人族に被害が出ることはなかった。

士郎達が魔物を倒す光景を大人達は畏敬の念を抱き、子供達はキラキラとつぶらな瞳をキラキラさせながら士郎達を見ていた。

「ふふふ、士郎さん子供達が見てますよ。手を振ってあげたらどうですか？」

「ボクはヒーローじゃないんだけどなあ。まあいいか」

そう言つて士郎は振り向き手を振る。それを見て子供兎人族はきやつきやつと騒ぐ。

彼は子供には優しいのだ。地球でも、近所の子供達の人気者だったので、その手の相手は上手い。

それからしばらく進んでいると、シアが気になったことがあるのか士郎に質問する。

「士郎さん達に一つ聞きたいことがあります」

「?何、聞きたいことって?」

「この先には帝国の兵士がいます。遭遇したらどうするのですか？」

シアはこの先士郎達が帝国と遭遇したらどうするのか不安になり質問した。

亜人である自分達を守るために同族に武器を向けるつもりなのか？と。

それに対する士郎の答えはあつさりしていた。

「どうするって普通に敵対するよ」

「同じ人間なのにあつさりしてますね……」

「そもそも私達、この世界の人達と敵対してでもやらなきゃいけないことがあるの、一々

敵対相手を選んでたら面倒だわ」

「そうなんですか……」

「それに君はボク達が帝国と敵対したのを未来視で視たんでしょ？」

「はい……それでも確認したくて」

「だったらそういうこと。君が「自分の所為で」って気に病む必要はないよ」

「なるほど、分かりやすくもいいですな。ならば、樹海の案内は任せてください」

大渓谷の出口である階段の前にまでたどり着いた。

士郎達を先頭に階段を登る。帝国兵からの逃亡を含めて、ほとんど飲まず食わずだつ

たはずの兎人族だが、その足取りは軽かった。亜人族が魔力を持たない代わりに身体能

力が高いというのは嘘ではないようだ。

そして、遂に階段を上りきり、士郎達はライセン大峡谷からの脱出を果たす。

その先には……

「おいおい、マジかよ。まだ生き残っていやがったのかよ。隊長の命令で仕方なく残っていたんだが、こりやいい土産話が出来るな」

およそ三十人ほどの帝国兵がたむろしていたのだ。周りには大型の馬車が数台に野営跡があつた。全員がカーキ色の軍服に剣や槍、盾を携えていて、士郎達を見て驚いている。

直ぐに喜色の色を浮かべ、品定め遠するように兎人族を見渡す。

「小隊長！白髪の兎人もいますよ！隊長が欲しがってましたよね？」

「おお、ますますツイテルな。年寄りには別にいいが、あれは絶対殺すなよ！」

「小隊長おく女も結構いますし、ちよつとくらい味見してもいいつすよねえ？こちとら、何もないとこで三日も待たされたんだ。役得の一つや二つ大目に見てくださいいよおく」
「つたく。全部はやめとけ。二、三人なら好きにしろ」

「ひやつほく流石、小隊長！話がわかる！」

どうやら、帝国兵は兎人族を獲物としか認識しているようで、戦闘態勢を取らず、下卑た笑みを浮かべ舐めるような視線を女性の兎人族に向ける。その視線に兎人族は震えていた。

「そうこう騒いでいるとようやく小隊長と呼ばれた男が士郎達の存在に気が付いた。

「あん？お前誰だ？兎人族……じゃねえな？」

「そうだね、人間だよ」

「はあく？なんで人間が兎人族と一緒にいんだよ？しかも溪谷からさあ？もしかして奴隷商か？情報掴んで追いかけたとか？そいつあまた商売根性逞しいねえ。まあいい、そいつら全員置いてけ。国うちで引き取るからな」

勝手に推測し、勝手に結論づけた小隊長は、さも自分の言う事を聞いて当たり前、断られることなど有り得ないと信じきった様子で、そう士郎に命令した。

当然士郎は従わない。

「丁重にお断りする」

「……今なんていった？」

「断るって言ったんだよ？もしかして聞こえなかつたの？その耳は飾り？それともその中に糞でも詰まつてるのかな？とりあえず諦めて荷物まとめて国に帰れ」

聞き間違いかと聞き返し、返つて来たのは煽りと不遜な物言い更に指差しだ。小隊長の額に青筋が浮かぶ。

「……小僧、口の利き方に気をつけろ。それとも俺達は何者かすらわからないほど馬鹿なのか？」

しかし士郎は更に煽る。

「勿論わかっているよ。君達に馬鹿なんて言われるのはやだなあ。頭の中発情期の猿みたいな人にさ」

士郎の煽りにスツと表情が消す小隊長。周囲の兵士も士郎を剣呑な雰囲気で見つめる。すると後ろにいる雫に気づいた。出る所は出て引つ込む所は引つ込んでいるスタイル、そのスタイルから溢れる色気に下卑た笑みを再び浮かべる。

「なるほどなるほど。よおしくわかったよ。テメエが世間知らずのクソガキたつてことかなあ。世の中の厳しさを俺達が教えてやるよ。くつくつくつ、その嬢ちゃんえらい別嬪じゃねえか。お前の四肢を切り落として、目の前で犯してやるよ」

「つまり敵でいいんだね？」

「ああ？状況から理解出来てねえのか？テメエも震えて許しをこッッ!？」

パチンッ!

士郎が指を鳴らす。それと同時に小隊長の頭が破裂し、後ろに吹き飛ぶ。

種明かしをすると士郎が指差した時にファンタズムニードルを小隊長の額に投げたのだ。

更に後ろから弾丸が4発、投げナイフが奥の5人の額を撃ち抜く、雫の斬撃が近くの1人を真っ二つに両断する。

更に奥の兵士3人の首を伸びた杖が撥ね、もう一本の杖が頭を打ち砕く。そしてハジメが破片手榴弾を投げ、1人を残して爆殺される。

「うん、やっぱり纏雷はいらないね」

「これなら周りの建物も巻き込まなくて済むねハジメくん」

2人は物騒な事を話し出す。

兵士はビクツと体を震わせて怯えをたつぷり含んだ目を士郎達に向ける。士郎はコツコツとわざと足音を立てて近寄る。黒いコートを靡かせて歩み寄るその姿はさながら死神。目の前には絶望か迫り来る、少なくともこの兵士にはそう見えた。

「く、来るなあーい、嫌だ。死にたくない。だ、誰か助けてくれー!」

命乞いをしながら後ずさる兵士。その顔は恐怖に歪み股間は液体が漏れてしまっている。それを士郎はゴミを見るような目で見る。

「た、頼む! 殺さないでくれえ! な、なんでもするから! 頼む!」

「そっか、なら他の兎人族がどうなったか教えて貰うよ。結構な人数がいたはずだけど……帝国に全員移送済みか? 洗いざらい全部話せ」

士郎が質問した理由は移送には時間がかかると思ったからだ。まだ近くにおいて助けるなら助けたいからだ。

「……は、話せば殺さないか?」

「……質問を質問で返すな、自分の立場を考慮ろ」

「それとも直ぐに死にたい？」

ユエとハジメが杖と銃を向ける。

「ま、待つてくれ！話す！話すから！……多分、全員移送済みだと思う。人数は絞ったから……」

『人数』を絞った。つまりそれは、老人など売れない兎人族を殺したということだ。その言葉に兎人族は悲痛な表情を浮かべる。士郎は、その様子を見て直ぐに視線を兵士に戻し、手を振り上げる。

「待て、待つてくれ！他にも話すから！帝国のなんでも！だから！」

士郎が腕を振るい兵士の男は吹き飛ぶ。

「お前は用済みだ。失せろ」

そう言うのと兵士の男は不恰好に走り出す。

「それじゃあ行きますか」

「ねえあの馬車使おう。アレに乗れば車で引つ張れるし」

「そうだね優花ちゃん」

帝国兵の死骸はユエの風魔法で谷底に落とした。血溜まりはハジメの錬成で消した。

兎人族を乗せた馬車を車で引つ張り、走り出す。

何処かで爆発する音が聞こえたが、それはどうでもいいことだ。

ハルツィナ樹海

七大迷宮の一つ、「ハルツィナ樹海」を前方に見据えて、兎人族の乗る馬車をハジメが車で牽引しそれなりに早いペースで進んでいた。

士郎の乗るシュタイフには雫とシアが乗っていた。

最初は馬車に乗るか提案したのだが、話がしたいと言い、雫もシアと話たかったので3人乗りして向かっている。

シアとしては初めて出会った、『同類』ともっと色んな話をしたかった模様。

初の人殺しはハジメと香織は何も感じなかった、他も似たような感じだった。

「あの、あの！皆さんのこともっと教えてくれませんか？」

「？ボク達のこととはもう話したけど？」

「いえ、能力とかそう言うことではなくて、何故奈落？と言う所にいたのとか、旅の目的って何なのか、今まで何していたとか、皆さん自身の話が知りたいです」

「この会話はハジメ達の乗る車に通信で繋がっているので聞こえている。」

『……聞いてどうするの？』

「どうするというわけではなく、ただ知りたいだけです。……わたし、この体質のせいだ

家族には沢山迷惑をかけました。小さい時はそれがすごく嫌で……もちろん、皆はそんな事ないって言ってくれましたし、今は、自分を嫌ってはいませんが……それでも、やっぱり、この世界のはみだし者のような気がして……だから、わたし、嬉しかったのです。お二人に出会って、わたしみたいな存在は他にもいるのだと知って、一人じゃない、はみだし者なんかじゃないって思えて……勝手ながら、そ、その、な、仲間みたいに思えて……だから、その、もつとお二人のことを知りたいといえますか……何といえますか……」

シアは話の途中で恥ずかしくなったのか、次第に声が小さくなり、雫の背に隠れるように身を縮こまらせた。出会った当初も随分と嬉しそうな顔をしていたと士郎と雫は思い出す。色々ゴタゴタがあつたのでちよつとしか話せていなかった。

確かに、この世界では、魔物と同じ体質を持った人なんて受け入れ難い存在だ。仲間意識を持つのも無理はない。樹海まで時間があつた、それまで暇なので士郎はこれまでの経緯を語り始めた。

その結果……

「うえ、ぐすつ……ひどい、ひどすぎますうう、ハジメさんなんかは香織さんがいるにしても、幸利さんもユエさんもがわいぞうですう。そ、それ比べたら、わたしはなんでもぐまれて……ううう、自分がなげけないですう」

号泣してしまった。滂沱の涙を流して「わたしは、甘ちゃんですう」、「もう弱音を吐かないですう」と呟く。その涙を士郎が渡したマントで拭いていた。どうやら士郎達の境遇が自分以上だったことを知り、不幸顔していた自分が情けなく感じたようだ。

メソメソしていた彼女は突如決然とした表情でガバツと顔上げ、拳に握り元氣よく宣言する。

「皆さん！わたし、決めました！皆さんの旅に着いていきます！これからは、このシア・ハウリアが陰から日向にお二人を助けて差し上げます！遠慮はいりませんよ！わたし達は指で数えられる仲間！共に苦難を乗り越えて、望みを果たしましょう！」

一人盛り上がっているシアにハジメが通信越しに冷たい声で答える。

『現在進行形で守られている君が何言ってるのさ。完全に足でまといだよ』

『……さりげなく《仲間みたい》から《仲間》に格上げしてる……厚皮ウサギ』

「な、なんて冷たい声なんですか……心にヒビが入りそう……」

意気込みに反して冷たい反応をされたシア。そんな彼女に士郎は追い討ちをかける。

「シアはさ、単純に旅の仲間が欲しいんでしょ？」

「!?」

士郎の言葉にシアはビクツと体が跳ねる。

「一族の安全が一先ず確保出来たら、君は彼等から離れる気なんでしょう？そこに丁度『同

類』のボク達が現れたから、これを幸いに一緒に行くことでしょ？そんな珍しい髪色の兎人族なんか、一人で旅は出来るとは思えないからね」

「……あの、それは、それだけでは……わたしは本当に皆さんを……」

どうやら凶星のようで、しどろもどろになるシア。実はシアは既に一族の元から離れることを決意していたのだ。何としてでも土郎達の協力を得て安全の確保をして、自分は家族の元を離れようと。自分がいる限り、一族は常に危険にさらされる。今回も多くは家族を失った。次は、本当に全滅するかもしれない。それだけは、シアには耐えられそうになかった。もちろん、その考えが一族の意に反する、ある意味裏切りとも言える行為だとは分かっている。だが『それでも』と決めたのだ。

最悪、一人で旅立とうともしていた。それだと心配性の家族は追ってくる可能性が高い。しかし、圧倒的な強さを持つ土郎達に恩返しとして着いて行けば、割りかし容易に一族を説得出来て離れられると考えたのだ。見た目の言動に反して彼女は今も、『必死』なのだ。

勿論シア自身が、土郎達に強い興味を惹かれているというのも事実。土郎の言う通り、『同類』である土郎達に、理屈を超える強い仲間意識を感じていた。一族のことを考えると彼女にとって土郎達に出会ったのは運命的だったのだ。

「別に責めてる訳じゃないよ。それに君の優しさを否定するつもりはないし、嬉しい。

でもね変な期待はしないで。ボク達の目的は七大迷宮を攻略すること。確実に奈落の奥は化物揃い。君じゃ瞬殺されて終わり。君の命を考えても同行はさせない」

「……」

士郎の容赦のない言葉にシアは落ち込んだように黙り込んでしまった。

シアはそれからの道中、大人しく後ろに座りながら、何かを考え込むように難しい表情をしていた。

それから数時間して、遂に「ハルツィナ樹海」と平原の境界に到着した。樹海の外から見ると、鬱蒼とした森にしか見えない。一度入ると直ぐに霧に覆われてしまいうらい。

「それでは皆さん、中に入ったら決して我等から離れないでください。皆さんを中心に進みますが、万一逸れると厄介ですから。行き先は大樹の下で宜しいですか？」

「うん、聞いた限りだと、そこが本当の大迷宮と関係があるらしいからね」

当初、ハジメは「ハルツィナ樹海」その物が大迷宮かと思っていたのだが、よく考えたら、奈落クラスの魔物が彷徨っていることになり、亜人が暮らせる場所ではなくなってしまう。なのでオルクス大迷宮と同じように、何処かに真の迷宮の入り口があると推測したのだ。カムから聞いた『大樹』が怪しいと一行は踏んだのである。

「皆さん、出来る限り気配は消して貰えますかな。大樹は神聖な場所とされておりまして、近づく者はさほどおりませんが、特別禁止されている訳ではありませんので、フェアベルゲンや他の集落の者達と遭遇してしまいかも知れないので。我々はお尋ね者なので見つかるかと厄介です」

「承知してる」

士郎達は『気配遮断』をユエは奈落で培った方法で気配を薄くした。

「ッ!?これは、また……出来ればユエ殿位にしていただけですか?我々でも見失いかねないとは……全く、流石ですね!」

元々、兎人族は全体的スペックが低い分、聴覚による索敵や気配を断つ隠密行動に秀でている。地上にいながら、奈落で鍛えたユエと同じレベルと言えば如何に凄いかわかるだろう。士郎達の気配遮断はその上を行ったのだ。

シアはその実力差を見せつけられ複雑そうな顔をしていた。

「それでは行きましょうか」

カムの号令で一行は、樹海に入り道なき道を進む。道中で魔物が襲いかかるも士郎達の手によって倒されていく。

「あ、ありがとうございます、ハジメさん、幸利さん」

「お兄ちゃん達、ありがとう!」

その後も進み続け、数時間が過ぎた頃、今までにないほどの無数の数に囲まれ、士郎達は歩を止める。数も殺気も、連携の、練度も比べ物にならなかった。カム達も忙しくウサミミを動かす。

そして何かを掴んだのか、苦虫を噛み潰したような表情を見せ、シアに至っては、その顔が青ざめさせている。

士郎達も相手の正体に気づいたのか、身構える。

その相手の正体は……

「お前達……何故人間という！ 種族と族名を名乗れ！」

虎模様の耳と尻尾を付けた、筋骨隆々の亜人だった。

フエアベルゲン

樹海の中で人と亜人が一緒に歩いている。そんなあり得ない光景に虎の亜人は驚きを隠せない。そして人をここに立ち入らせたことに苛立ち、さつきを人を案内する兎人族の族長である、カムを鋭い殺気で睨みつける。

「何故ここに人間を入れた!」

「あの、私達は……」

カムが何か弁明しようとしたのだが、虎の亜人は近くにいる白髪の——シアの存在に気づくと、目を大きく見開いて声を上げる。

「白い髪の兎人族……だと?……貴様ら……報告のあつたハウリア族か……亜人族の面汚し共め!長年、同胞を騙し続け、忌み子を匿うだけでなく、今度は人間族を招き入れるとは!反逆罪だ!もはや弁明など聞く必要もない!全員この場で処刑する!総員かッ!?!」

ズガンッ!

虎の亜人が問答無用で攻撃命令を下そうとしたその時、土郎の指先から魔力の塊——『サイコショット』を放ち虎の亜人の頬を掠め、後ろに立つ樹木を抉り飛ばす。

あまりの破壊力とスピードに虎の亜人は驚愕して、動けなくなってしまった。

「今の攻撃は、君達が瞬きする間に皆殺しにできるほど撃てる。周囲を囲んでいる奴らも射程範囲。つまり君達がいる所はキルゾーンだ」

「な、なっ詠唱が……」

詠唱もなく見たことのない強力な攻撃を連発出来る上に、味方の居場所も把握されている。そう告げられて吃るしか出来ない虎の亜人。それを証明するように、士郎の指先は彼の腹心に奇しくも向けられていた。

「兎人族を殺すというのなら、ボクは容赦なく、君達を殺す。当たり前でしょ？ 殺そうとしたんだから殺される覚悟があるんでしょ？」

士郎は身内に甘い分、敵対者には容赦がない。

さっきの発言なんかはほぼ脅しだ。

鋭い殺気を威圧と共に士郎は放ち始める。あまりにも濃厚なそれをぶち込まれている虎の亜人は冷や汗が滝のように流れる。それでもフェアベルゲンの戦士なので、恐慌に陥りそうな自分を押さえつける。

(冗談だろ！こんな化け物が人間だと言うのか!?)

「まあ敵対しないで帰るんだったら、ボクは何もしないよ。敵じゃないなら殺しはやらない主義だからね。どうする？」

虎の亜人は確信した。自分が攻撃命令を下せば、自分だけでなく周りの仲間達も逃げられることなく殺すことができる。

虎の亜人は、フェアベルゲンの第二警備隊長だった。フェアベルゲンと周辺の集落間における警備が主な仕事で、魔物や侵入者から同胞を守るというこの仕事に誇りと覚悟を持っていた。その為、例えば部下共々全滅を確信していても安易に引くことなど出来なかった。

「その前に、一つ聞きたい……」

「？」

「何の為にここに来た……」

「大樹の下に行きたいだけだよ」

「大樹だと……？」

「そこに本当の迷宮があるかもしれないからだ。この樹海が迷宮と言うにはあまりにも、簡単過ぎる。亜人が迷わないで出歩けるなら『解放者』の試練にはならないからね。それに【オルクス大迷宮】の魔物はここにいる魔物よりずっと強い」

士郎の話を聞き終え、虎の亜人は困惑を隠せなかった。士郎の言ってることがわからないからだ。樹海の魔物が弱いと言ったことも、【オルクス大迷宮】の奈落の底、『解放者』のことも聞き覚えのないことばかりだ。普段なら『戯言』と言って切りすてただろ

う。

しかしこの場で士郎が嘘をつく意味がないのだ。圧倒的な優位を持つ彼が嘘をつく必要はない。フェアベルゲンに興味がなく、大樹自体が目的なら、部下の命を無駄にするより、目的をすぐに果たさせた方がいい。

「お前たちが同胞や国に危害を加えないのなら、俺は大樹の下に行くことくらいは構わない。だが一警備隊長ごときの俺が独断で判断できない。だから一度本国に話を聞く。お前の言ったことを知る者がいるかもしれない。お前たちが我々に危害を加えないと言うなら、一度伝令を見逃し俺たちとここに待機しろ」

彼にとつて限界ギリギリの譲歩だった。

ここで人間を見逃すのは初めてのことで、周りの仲間達もザワザワと話し出す。

「それで構わないよ。その言葉曲解せずにきちんと伝えてよ?」

「無論だ。聞こえたなザム!長老様方に余さず伝えろ!」

「了解!」

気配が一つ遠ざかるのがわかった。

士郎は手を下ろして、威圧を解く。空気が弛緩する。ホッとすると同時に、他の亜人が戦闘態勢を取る。まだ警戒しているのだろう。

「いいね君。よく理性的な判断が出来た。気に入ったよ」

「……お前たち人間に気に入られても嬉しくない」
「連れないねえ……」

それからしばらくしてエルフ耳の亜人がやってきた。

「ふむ、お前さんが問題の人間族か？名はなんという？」

「士郎、天野士郎。貴方は？」

「私は、アルフレリック・ハイピスト。フェアベルゲンの長老の座を一つ預からせてもらっている。さて、お前さんの要求は聞いているのだが……その前に聞かせてもらいたい。『解放者』とは何処で知った？」

「オルクス大迷宮の奈落の底、解放者の一人、オスカー・オルクスの隠れ家だよ。証拠なら……そうだ、ハジメ、オスカーの指輪とヒュドラの魔石出してくれる？」
「わかったよ」

ハジメは『宝物庫』から指輪と魔石を取り出し、アルフレリックに見せる。魔石見たアルフレリックと虎の警備隊長は驚く。

「こ、これは……こんな純度の魔石は初めて見た……こちらの指輪も……お前さん方は確かにオスカー・オルクスの隠れ家にたどり着いたようだ。他にも色々気になるところ

はあるが……よかろう。取り敢えずフェアベルゲンに来るがいい。私の名で滞在を許そう。ああ、もちろんハウリアも一緒にな」

アルフレリックの言葉に周囲の亜人族は驚き、カム達ハウリアも同じように驚いた。

フェアベルゲンには人間が招かれたことがなかったのだから。

「彼等は、客人として扱わねばならん。その資格を持っているのでな。それが、長老の座に就いた者のみ伝えられる掟の一つなのだ」

アルフレリックが厳しい表情で周囲の亜人達を宥める。

「待つて？ボク達は大樹の下に行きたいんだけど……もしかして今はまだ行けないのか？」

「うむ、その通りだ。いま大樹の周辺は霧が濃い時期でな、我々亜人ですら道に迷う。霧が晴れるまで10日かかる。亜人族なら誰でも知ってるはずなのだが」

ハジメと香織、ユエがギギギと首を動かしてカム達を見る。

「ねえカム？行けるんじゃないの？」

「任せてついていたよね？よね？」

「……まさか忘れてた？」

その後カムか言い訳して、家族にまで責任を押し付けて、ユエの風魔法で吹き飛ばされたのだった。

「ホント残念ウサギ達だな……」

「ええ……」

「……」

幸利は頭を押さえて眩き、優花はため息を吐いた。雫は何も言えなくなっていた。その後シア達ハウリア族に手出ししないことを約束して進む。

虎の巫人である、ギムの先導の元、士郎達はフェアベルゲンに向かう。

既に1時間以上は歩いている。ザムという伝令は相当な俊足だったようだ。

突然霧が晴れた一本道が現れる。足下に誘蛾灯のように青白い鉱石が埋め込まれている。解析魔術で調べると、どうやらこれが霧を晴らしている物らしく、魔物も寄り付くこともないようだ。

アルフレリックが足元の鉱石——フェアドレン鉱石のことを説明する。

そうこうしてる内に巫人族の国「フェアベルゲン」に着く。

樹木で出来たアーチに30メートルを超える、防壁にボク達は驚く。門を潜るとそこは別世界のようなだった。直径数十メートル級の巨大な樹が乱立しており、その樹の中には住居があるようで、ランプの明かりが樹の幹に空いた窓と思しき場所から溢れている。

人が優に数十人規模で渡れるであろう極太の樹の枝が絡み合い空中回廊を形成している。樹の蔓と重なり、滑車を利用したエレベーターのような物や樹と樹の間を縫う様に設置された木製の巨大な空中水路まであるようだ。樹の高さはどれも二十階くらいありそうである。

ボク達はその光景にポカンと口を開ける。

「すつ……………い……………」

「綺麗……………」

「わあ……………」

女子陣は声を漏らす。それほど美しい光景なのだ。

「ふふ、どうやら我らの故郷、フェアベルゲンを気に入ってくれたようだな」

アルフレリックの表情が嬉しげに緩んでいる。周囲の傭人達やハウリア族の者達も、どこか得意げな表情だ。ハジメは、そんな彼等の様子を見つつ、素直に称賛した。

「うん、こんな綺麗な街を見たのは始めてだよ。空気も美味しい、自然と調和した見事な街だね」

「ん……………綺麗」

「俺達の故郷は空気が汚いから、それも相まって空気が綺麗なのがわかる……………」

「一度でいいから住んでみたい場所だよ……………」

故郷を褒められたのが嬉しいのか、皆、ふんつとそっぽを向きながらもケモミミや尻尾を勢いよくふりふりしている。

「……なるほど。試練に神代魔法。それに神の盤上か……」

現在士郎達は、アルフレリックと向かい合って話をしていた。内容は、ハジメがオスカー・オルクスに聞いた『解放者』のことや神代魔法のこと、自分が異世界の人間であり七大迷宮を攻略すれば故郷へ帰るための神代魔法が手に入るかもしれないこと等だ。

アルフレリックは、この世界の神の話の聞いても顔色を変えたりはしなかった。不思議に思っただけでハジメが尋ねると、「この世界は亜人族に優しくはない、今更だ」という答えが返ってきた。神が狂っていいようがないが、亜人族の現状は変わらないということらしい。聖教教会の権威もないこの場所では信仰心もないようだ。あるとすれば自然への感謝の念だという。

士郎達の話聞いたアルフレリックは、フェアベルゲンの長老の座に就いた者に伝えられる掟を話した。それは、この樹海の地に七大迷宮を示す紋章を持つ者が現れたらそれがどのような者であれ敵対しないこと、そして、その者を気に入ったのなら望む場所に連れて行くことという何とも抽象的な口伝だった。

「ハルツィナ樹海」の大迷宮の創始者リューティリス・ハルツィナが、自分が「解放者」という存在である事（解放者が何者かは伝えなかった）と、仲間の名前と共に伝えたものなのだという。フェアベルゲンという国ができる前からこの地に住んでいた一族が延々と伝えてきたのだとか。最初の敵対せずというのは、大迷宮の試練を越えた者の実力が途轍もないことを知っているからこそその忠告だ。

そして、オルクスの指輪の紋章にアルフレリックが反応したのは、大樹の根元に七つの紋章が刻まれた石碑があり、その内の一つと同じだったからだそうだ。

「それで、ボク達は資格を持っているというわけか……」

アルフレリックの説明により、人間を亜人族の本拠地に招き入れた理由がわかった。しかし、全ての亜人族がそんな事情を知っているわけではないはずなので、今後の話をする必要がある。

男子陣とアルフレリックが、話を詰めようとしたその時、何やら階下が騒がしくなった。士郎達男子陣のいる場所は、最上階にあたり、階下には女子陣とシア達ハウリア族が待機している。どうやら、彼女達が誰かと争っているようだ。男子陣とアルフレリックは顔を見合わせ、同時に立ち上がった。

階下では、大柄な熊の亜人族や虎の亜人族、狐の亜人族、背中から羽を生やした亜人族、小さく毛むくじやらのドワーフらしき亜人族が剣呑な眼差しで、女子陣を睨みつけ

ていた。部屋の隅で縮こまり、カムが必死にシアを庇っている。

「ねえ？これはどういうことかな？説明してくれる？」

その光景に士郎がキレるの当然だった。

「士郎さん実は……」

雫の説明によると、シア達に因縁を付けて、殴りかかろうとしたらしい。雫達がそれを防いで、言い争いになったという。

「アルフレリック……貴様、どういうつもりだ。なぜ人間を招き入れた？こいつら兎人族もだ。忌み子にこの地を踏ませるなど……返答によつては、長老会議にて貴様に処分を下すことになるぞ」

必死に激情を抑えているのだろう。拳を握りわなわなと震えている。やはり、亜人族にとつて人間族は不倶戴天の敵なのだ。しかも、忌み子と彼女を匿った罪があるハウリア族まで招き入れた。熊の亜人だけでなく他の亜人達もアルフレリックを睨んでいる。

しかし、アルフレリックはどこ吹く風といった様子だ。

「なに、口伝に従つたまでだ。お前達も各種族の長老の座にあるのだ。事情は理解できるはずだが？」

「何が口伝だ！そんなもの眉唾物ではないか！フェアベルゲン建国以来一度も実行されたことなどないではないか！」

「だから、今回が最初になるのだろう。それだけのことだ。お前達も長老なら口伝には従え。それが掟だ。我ら長老の座にあるものが掟を軽視してどうする」

「なら、こんな人間族の小僧共が資格者だとしても言うのか！ 敵対してはならない強者だと！」

「そうだ」

あくまで淡々と返すアルフレリック。熊の亜人は信じられないという表情でアルフレリックを、そして士郎を睨む。

「……ならば、今、ここで試してやろう！」

いきり立った熊の亜人は、突如士郎に向かって突進した。アルフレリックもいきなり襲いかかるとは思わなかったのか、目を見開いている。

亜人の誰もが士郎が吹き飛ばされた光景を想像しただろう。

しかし、その想像は覆された。

あっさりとして士郎は熊の亜人の豪腕を受け止める。そして右手に握られる。

「温い拳だね……」

「ぐっ……は、離せ！」

「殴るってことは殴られる覚悟してるんだよね？ 殴られても文句は言わないですよ？」

そう言って士郎は拳を振りかぶり、熊の亜人を吹き飛ばす。

吹き飛ばされたのだった熊の亜人は壁にめり込んだ。

ただ関係を悪くしないように、土郎は手を抜いたようだ。

「安心して、気絶させたただけだから。これからの話し合いにそいつは不合理だ」

現在、当代の長老衆である虎人族のゼル、翼人族のマオ、狐人族のルア、土人族（俗に言うドワーフ）のグゼ、そして森人族のアルフレリックが、ハジメと向かい合って座っていた。土郎の傍らには雫とカム、シアが座り、その後ろにハジメ達とハウリア族が固まって座っている。

長老衆の表情は、アルフレリックを除いて緊張感で強ばっていた。戦闘力では一、二を争う程の手練だった熊の亜人（名前はジン）が、文字通り手も足も出さず瞬殺されたのであるから無理もない。

「で？君達はボク等をどうしたいんだ？ボクは大樹の下へ行きたいだけで、邪魔しなければ敵対することもないんだが……亜人族としての意思を統一して欲しいな」

「こちらの仲間を攻撃しておいて、第一声がそれか……それで友好的になれるとでも？」

グゼが苦虫を噛み潰したような表情で呻くように呟いた。

「ん？ボクはシア達を守っただけだよ？先に手を出したのはそつちじゃないか。文句言われるのは筋違いだよ？」

「ぐっ……」

「グゼ、気持ちにはわかるが彼の言っている事は正論だ」

「この少年は、紋章の一つを所持しているし、その実力も大迷宮を突破したと言うだけのことはあるね。僕は、彼を口伝の資格者と認めるよ」

そう言ったのは狐人族の長老ルアだ。糸のように細めた目でハジメを見た後、他の長老はどうするのかと周囲を見渡す。

その視線を受けて、翼人族のマオ、虎人族のゼルも相当思うところはあろうだが、同意を示した。代表して、アルフレリックが士郎に伝える。

「天野士郎。我らフェアベルゲンの長老衆は、お前さんを口伝の資格者として認める。故に、お前さんと敵対はしないというのが総意だ……可能な限り、末端の者にも手を出さないように伝える。……しかし……」

「絶対じゃない……か?」

「ああ。知つての通り、亜人族は人間族をよく思っていない。正直、憎んでいるとも言える。血気盛んな者達は、長老会議の通達を無視する可能性を否定できない。特に、今回殴り飛ばされた熊人族は抑えきれない可能性が高い。人望も厚かったからな」

「つまり?」

「お前さんたちを襲った者達を殺さないで欲しい」

「……殺意を向けてくる相手に手加減しろと?」

「そうだ。お前さんの実力なら可能だろう?」

「まあ出来るし、やるつもりだけど。懲りないんだつたらそれ相応の対応するよ」

「ならば、我々は、大樹の下への案内を拒否させてもらう。口伝にも気に入らない相手は案内する必要はないとあるからな」

「別に元からハウリア族にお願ひするから別にいらなないけど?」

「ハウリア族に案内してもらえとは思わないことだ。そいつらは罪人。フェアベルゲンの掟に基づいて裁きを与える。何があつて同道していたのか知らんが、ここでお別れだ。忌まわしき魔物の性質を持つ子とそれを匿った罪。フェアベルゲンを危険に晒したも同然なのだ。既に長老会議で処刑処分が下っている」

ゼルの言葉に、シアは泣きそうな表情で震え、カム達は一様に諦めたような表情をしている。この期に及んで、誰もシアを責めないのだから情の深さは折紙付きだ。

「長老様方!どうか、どうか一族だけはご寛恕を!どうか!」

「シア!止めなさい!皆、覚悟は出来ている。お前には何の落ち度もないのだ。そんな家族を見捨ててまで生きたいとは思わない。ハウリア族の皆で何度も話し合つて決めたことなのだ。お前が気に病む必要はない」

「でも、父様!」

土下座しながら必死に寛恕を請うシアだったが、ゼルの言葉に容赦はなかった。

「既に決定したことだ。ハウリア族は全員処刑する。フェアベルゲンを謀らなければ忌み子の追放だけで済んだかもしれない」

ワツと泣き出すシア。それをカム達は優しく慰めた。長老会議で決定したというのは本当なのだろう。他の長老達も何も言わなかった。おそらく、忌み子であるということよりも。そのような危険因子をフェアベルゲンの傍に隠し続けたという事実が罪を重くしたのでだろう。ハウリア族の家族を想う気持ちが悪化の悪化を招いたとも言える。何とも皮肉な話だ。

「そういうわけだ。これで、貴様が大樹に行く方法は途絶えたわけだが？ どうする？ 運良くたどり着く可能性に賭けてみるか？」

すると今まで口を閉じていた雫が喋り出す。顔を見ると、もう我慢の限界のようだ。

「本当くだらない……」

「……なんだと？」

「くだらないって言ったのよ。貴方達がやってる事は、貴方達が嫌う私達人間がやってる事と変わらないのよ」

「我々が人間と同じだと!?!」

「そうだね……同じ事思ってたよ。ボクだって魔力操作を最初から持ってたんだよ。そ

のせいで教会に追われそうだったんだからね。まあボクには味方がいたからよかったけど」

一呼吸置いて士郎は続ける。

「もとからボクは君達に頼まないし、最初からハウリアに頼むつもりだ。それに……彼らの命を奪おうというのなら……ボク達は全力でお前達をぶちのめす……」

士郎は泣き崩れるシアの頭に手を優しく置いて、長老衆を睨む。つまり士郎はフェアベルゲンと敵対しても構わないと言ったのだ。

彼の言葉にハジメ達は頷く。

「本気かね？」

「勿論本気だよ」

士郎はアルフレリックの目を真っ正面から見る。そこに不退転の決意が見て取れる。

「フェアベルゲンから案内を出すと言ってもか？」

「何度も言わせないで欲しいね。ボク達の案内はハウリア族だけだ」

「なぜ、彼等にこだわる。大樹に行きたいだけなら案内人は誰でもよからう」

士郎はシアを一度チラリと見てからアルフレリックを再び見る。先程から、ずっと士郎を見ていたシアはその視線に気づき、一瞬だけ目が合う。その時、彼女の心臓が僅かに跳ねるのを感じた。彼女の鼓動の高鳴りは止まらない。

「約束したからね。案内時引き換えに『助けてやる』ってね」

「……約束か。それならもう果たしたと考えてもいいのではないか？ 峡谷の魔物からも、帝国兵からも守ったのだろう？ なら、あとは報酬として案内を受けるだけだ。報酬を渡す者が変わるだけで問題なかるう」

「むしろ問題しかないね。案内するまで身の安全を保障するって、約束したんだ。それで途中から良い条件が出て鞍替えするなんて……カッコ悪いじゃないか」

士郎に引く気がないと悟ったのか、アルフレリックが深々と溜息を吐く。他の長老衆がどうするんだと顔を見合わせた。しばらく、静寂が辺りを包み、やがてアルフレリックがどこか疲れた表情で提案した。

「ならば、お前さんの奴隷ということにでもしておこう。フェアベルゲンの掟では、樹海の外に出て帰ってこなかった者、奴隷として捕まったことが確定した者は、死んだものとして扱う。樹海の深い霧の中なら我らにも勝機はあるが、外では魔法を扱う者に勝機はほぼない。故に、無闇に後を追って被害が拡大せぬように死亡と見なして後追いを禁じているのだ。……既に死亡と見なしたものを処刑はできない」

「アルフレリック！ それでは！」

完全に屁理屈である。当然、他の長老衆がギョツとした表情を向ける。ゼルに到っては思わず身を乗り出して抗議の声を上げた。

「ゼル。わかつているだろう。この少年が引かないことも、その力の大きさも。ハウリア族を処刑すれば、確実に敵対することになる。その場合、どれだけの犠牲が出るか……長老の一人として、そのような危険は断じて犯せん」

「しかし、それでは示しがかん！力に屈して、化物の子やそれに与するものを野放しにしたと噂が広まれば、長老会議の威信は地に落ちるぞ！」

「だが……」

ゼルとアルフレリックが議論を交わし、他の長老衆も加わって、場は喧々囂々の有様となった。やはり、危険因子とそれに与するものを見逃すということが、既になされた処断と相まって簡単にはできないようだ。悪しき前例の成立や長老会議の威信失墜など様々な思惑があるのだろう。

「とりあえず、シア達には手を出さないんだね？」

「ああ、そういうことだ」

「ボクは大樹に行ければいいんだ。彼らの案内でね。文句はないよ」

「……そうか。ならば、早々に立ち去ってくれるか。ようやく現れた口伝の資格者を歓迎できないのは心苦しいが……」

「気にしないで。全部譲れないこととは言え、相当無茶言ってる自覚はあるんだ。むしろ理性的な判断をしてくれて有り難いくらいだよ」

士郎の言葉に苦笑いするアルフレリック。他の長老達は渋い表情か疲れたような表情だ。恨み辛みというより、さっさとどっか行ってくれ!という雰囲気である。その様子に肩を竦める士郎は雫やハジメ達を促して立ち上がった。

ユエは終始ボーとしていたが、話は聞いていたのか特に意見を口にすることもなく士郎達に合わせて立ち上がった。

しかし、シア達ハウリア族は、未だ現実を認識しきれていないのか呆然としたまま立ち上がる気配がない。ついさっきまで死を覚悟していたのに、気がつけば追放で済んでいるという不思議。「えっ、このまま本当に行っちゃっていいの?」という感じで内心動揺しまくっていた。

「いつまでボーツとしてるの?行くよ」

「あ、あの、わたし達……死ななくていいんですか?」

「?もしかしてまだ信じられないの?」

「い、いえ、……その、何だかトントントン拍子で窮地を脱してしまったので実感が湧かないといえますか……信じられない状況といえますか……」

周りのハウリア族も同様なのか困惑したような表情だ。それだけ、長老会議の決定というのには亜人にとって絶対的なものなのだろう。どう処理していいのか分からず困惑するシアにユエが呟くように話しかけた。

「……素直に喜ばばいい」

「ユエさん？」

「……土郎に救われた。それが事実。受け入れて喜ばばいい」

「……」

シアは、肩を震わせる。樹海の案内と引き換えにシアと彼女の家族の命を守る。シアが必死に取り付けた土郎達との約束だ。

元々、『未来視』で土郎達が守ってくれる未来は見えていた、だが、それで見える未来は絶対ではない。シアの選択次第で、いくらでも変わるものなのだ。だからこそ、シアは土郎の協力を取り付けるのに『必死』だった。相手は、亜人族に差別的な人間で、シア自身は何も持たない身の上だ。交渉の材料など、自分の『女』か『固有能力』しかない。しかし、それすら使わずに彼は、家族を助ける約束をしてくれた。

道中話している内に何となく、土郎なら約束を違えることはないだろうと感じていた。それは、自分が亜人族であるにもかかわらず、差別的な視線が一度もなかったことも要因の一つだろう。だが、それはあくまで『何となく』であり、確信があったわけではない。

だから、内心の不安に負けて、『約束は守る人だ』と口に出してみたり『人間相手でも戦う』などという言葉を引き出してみたりした。実際に、彼等は何の躊躇いもなく帝国

兵と戦ってくれた時、どれほど安堵したことか。

だが、今回はいくら士郎でも見捨てるのではという思いがシアにはあつた。帝国兵の時とはわけが違う。言ってみれば、帝国の皇帝陛下の前で宣戦布告するに等しいのだ。にもかかわらず一步も引かずに約束を守り通してくれた。例えそれが、士郎自身の為であつても、ユエの言う通り、シアと大切な家族は確かに守られたのだ。

先程、一度高鳴つた心臓が再び跳ねた気がした。顔が熱を持ち、居ても立つてもいられない正体不明の衝動が込み上げてくる。それは家族が生き残つた事への喜びか、それとも……

シアは、ユエの言う通り素直に喜び、今の気持ちを衝動に任せて全力で表してみることにした。すなわち、士郎に全力で抱きつく。

「士郎さくん！ ありがとうございませう〜！」
「おっと……やれやれ……」

泣きべそを掻きながら絶対に離しません！とでも言う様にヒシツとしがみつき顔をグリグリと士郎の肩に押し付けるシア。その表情は緩みに緩んでいて、頬は真っ赤に染まる。

喜びを爆発させ士郎にじゃれつくシアの姿に、ハウリア族の皆もようやく命拾ひしたことを実感したのか、隣同士で喜びを分かち合っている。

それを何とも複雑そうな表情で見つめているのは長老衆だ。そして、更に遠巻きに不快感や憎悪の視線を向けている者達も多くいる。

士郎達はその全てを把握しながら、ここを出てもしばらくは面倒事に巻き込まれそうだと苦笑いするのだった。

ハウリアブーツキャンプ!&シアの告白!

フェアベルゲンを出て、士郎達はハジメがフェアドレン鉱石を使って、霧のない空間を作り、士郎はハウリア族に話し始める。

「これから10日間君たちには戦闘訓練を受けてもらいます」

「え、えつと、士郎さん。戦闘訓練というのは?」

ポカンとするウサミミの代表としてシアが聞き返す。

「いつまでもボク達君らを守り続ける事はできない。だから君達自身で身を守れるようにしてもらおう」

「お前等に逃げ場はない。隠れ家も庇護もない。だが、魔物も人も容赦なく弱いお前達を狙ってくる。このままではどちらにしろ全滅は必定だ……それでいいのか?弱さを理由に淘汰されることを許容するか?幸運にも拾った命を無駄に散らすか?どうなんだ?」

1人のハウリア族がポツリとつぶやいた。

「そんなのいいわけない……!」

「そう、良いわけがないんだよ……だから強くなるんだ。僕は奈落に落ちる前……この

世界に来たばかりの頃は最弱だった……ステータスも一般人と変わらなかった。けど努力してここまで強くなるなった。君達の状況は前の僕と同じだ……どうする？」

ハウリア族達は直ぐには答えない。いや、答えられなかったというべきか。自分達が強くなる以外に生存の道がないことは分かる。士郎は、100%の正義感からハウリア族を守ってきたわけではない。故に、約束が果たされれば見捨てられるだろう。だが、そうは分かっている、温厚で平和的、心根が優しく争いが何より苦手な兎人族にとつて、士郎の提案は、まさに未知の領域に踏み込むに等しい決断だった。士郎達の様な特殊な状況にでも陥らない限り、心のあり方を変えるのは至難なのだ。

黙り込み顔を見合わせるハウリア族。しかし、そんな彼等を尻目に、先程からずっと決然とした表情を浮かべていたシアが立ち上がった。

「やります。わたしに戦い方を教えてください！ もう、弱いままは嫌です！」

樹海の全てに響けと言わんばかりの叫び。これ以上ない程思いを込めた宣言。シアとて争いは嫌いだ。怖いし痛いし、何より傷つくのも傷つけるのも悲しい。しかし、一族を窮地に追い込んだのは紛れもなく自分が原因であり、このまま何も出来ずに滅ぶなど絶対に許容できない。とあるもう一つの目的のためにも、シアは兎人族としての本質に逆らつても強くなりたかった。

不退転の決意を瞳に宿し、真つ直ぐ士郎達を見つめるシア。その様子を唾然として見

ていたカム達ハウリア族は、次第にその表情を決然としたものに変えて、一人、また一人と立ち上がっていく。そして、男だけでなく、女子供も含めて全てのハウリア族が立ち上がったのを確認するとカムが代表して一步前へ進み出た。

「士郎殿……皆さん、よろしくお願ひします」

言葉は少ない。だが、その短い言葉には確かに意志が宿っていた。襲い来る理不尽と戦う意志が。

「わかった……妥協は許さないし手も抜かない、とことん厳しくいくからね。ちゃんとついて来なよ? 生か死の二択だ」

10日間のハウリア族、地獄の強化トレーニングが始まった。

「はい、これ使って訓練してね」

士郎はハウリア族を訓練するにあたって、小太刀を大量に投影し、渡す。そして、その武器を持たせた上で基本的な動きを教える。もちろん、士郎に武術の心得などない。あってもそれは漫画やゲームなどのにわか知識に過ぎず他者に教えられるようなものではない。教えられるのは、奈落の底で数多の魔物と戦い磨き上げた《合理的な動き》だけだ。それを叩き込みながら、適当に魔物をけしかけて実戦経験を積ませる。ハウリア族の強みは、その索敵能力と隠密能力だ。いずれは、奇襲と連携に特化した集団戦法を

身につければいいと思っていた。

カム達にはボク、雫、幸利、優花で教える。

雫に小太刀の振り方を教えさせようと思ったのだが……

「あの〜これ痛そうなのですが……」

「当たり前だよ？ だって敵を殺す物だからね」

そう言うのと士郎はシアとユエ、ハジメ、香織を連れて別の場所に移動する。

「あの士郎さん、なんでわたしだけここに？」

「シアはボク達について行きたいんでしょ？ だったらボクの出す条件を満たして欲し

い」

「……それでなんで私とハジメと香織を？」

「シア、ボクが出す条件は二つある。一つ目は一度でもいいからユエにダメージを与えること。二つ目はボクを説得することだ」

「わ、わかりました！」

「士郎、なんでユエなの？」

「この中でユエが一番肉弾戦弱いから。シアよりは強いけど、ボク達と比べるとね。ユエの間合い管理の特訓も兼ねてね。ハジメは審判役、香織は治療をお願い。メニユーは

そっちで決めて」

「わかった(よ)」

「それとシア、カム達に話しはしたの?」

「はい、父様達も了承は得ました。わたし自身が付いて行きたいと本気で思っているなら構わないって…」

「わかった」

士郎はハウリア族のいる場所に戻る。

雫に小太刀の振り方を教わっている。次に魔物を殺させているのだが……

「ああ、どうか罪深い私を許してくれえ〜」

それをなしたハウリア族の男が魔物に縋り付く。まるで互いに譲れぬ信念の果て親友を殺した男のようだ。

ブシュ!

また一体魔物が切り裂かれて倒れ伏す。

「ごめんなさいっ!ごめんなさいっ!それでも私はやるしかないのお!」

首を裂いた小太刀を両手で握り、わなわな震えるハウリア族の女。まるで狂愛の果て、愛した人をその手で殺めた女のようだ。

バキッ!

瀕死の魔物が、最後の力で己を殺した相手に一矢報いる。体当たりによって吹き飛ば

されたカムが、倒れながら自嘲気味に呟く。

「ふっ、これが刃を向けた私への罰というわけか……当然の結果だな……」

その言葉に周囲のハウリア族が瞳に涙を浮かべ、悲痛な表情でカムへと叫ぶ。

「族長！そんなこと言わないで下さい！罪深いのは皆一緒です！」

「そうです！いつか裁かれるときが来るとしても、それは今じゃない！立つて下さい！

族長！」

「僕達は、もう戻れぬ道に踏み込んでしまったんだ。族長、行けるところまで一緒に逝き

ましようよ」

「お、お前達……そうだな。こんな所で立ち止まっている訳にはいかない。死んでし

まった彼（小さなネズミっぽい魔物）のためにも、この死を乗り越えて私達は進もう！」

「「「「族長！」「」」」」

いい雰囲気のカム達。そして我慢できずに突っ込む幸利&優花。

「だぁもおう！やかましいわ！何なんだよその三文芝居は！魔物に向かって彼とか気持ち悪いだろうが！」

「黙って殺せないの!?!」

そう、ハウリア族達が頑張っているのは分かるのだが、その性質故か、魔物を殺すたびに訳のわからないドラマが生まれるのだ。この二日、何度も見られた光景であり、土

郎達もまた何度も指摘しているのだが一向に直らない事から、いい加減、堪忍袋の緒が切れそうなのである。

幸利の怒りを多分に含んだ声にビクツと体を震わせながらも、「そうは言っても……」とか「だっていくら魔物でも可哀想で……」とかブツブツと呟くハウリア族達。

更に幸利の額に青筋が量産される。

見かねたハウリア族の少年が、幸利を宥めようと近づく。この少年、ライセン大峽谷でハイベリアに喰われそうになっていたところを間一髪士郎に助けられ、特に懐いている子だ。

しかし、進み出た少年は士郎に何か言おうとして、突如、その場を飛び退いた。

訝しそうな士郎が少年に尋ねる。

「?どうしたの?」

少年は、そつと足元のそれに手を這わせながら士郎に答えた。

「あ、うん。このお花さんを踏みそうになって……よかった。気がつかなかったら、潰しちゃうところだったよ。こんなに綺麗なのに、踏んじやったら可愛そうだもんね」

優花の頬が引き攣る。

「お、お花さん?」

「うん! 士郎兄ちゃん! 幸利お兄ちゃん! 僕、お花さんが大好きなんだ! この辺は、綺麗

なお花さんが多いから訓練中も潰さないようにするのが大変なんだ」

ニコニコと微笑むウサミ少年。周囲のハウリア族達も微笑ましそうに少年を見つめている。

幸利は、ゆっくり顔を俯かせた。元から長い白髪の前髪が垂れ下がり幸利の表情を隠す。そして、ポツリと囁くような声で質問をする。

「……時々、お前等が妙なタイミングで跳ねたり移動したりするのは……その《お花さん》とやらが原因か？」

幸利の言う通り、訓練中、ハウリア族は妙なタイミングで歩幅を変えたり、移動したりするので。気にはなっていたのだが、次の動作に繋がっていたので、それが殺りやすい位置取りなのかと様子を見ていたのだが。

「いえいえ、まさか。そんな事ありませんよ」

「はは、そうよね？」

苦笑いしながらそう言うカムに少し頬が緩む優花。しかし……

「ええ、花だけでなく、虫達にも気を遣いますな。突然出てきたときは焦りますよ。何とか踏まないように避けますがね」

カムのその言葉に土郎の表情が抜け落ちる。幽鬼のようにゆらゆらゆらりと揺れ始める幸利に、何か悪いことを言ったかとハウリア族達がオロオロと顔を見合わせた、

幸利は、そのままゆっくり少年のもとに歩み寄ると、一転してっこりと笑顔を見せる。少年もにつこりと微笑む。

そしてノールックで闇の塊（非殺傷性）をカムに向けて放った。塊が顔に当たり、吹き飛ばす。さらにナイフを優花が数人の女性ハウリアに投げつける。「ぎゃん!」と悲鳴をあげる。

「幸利殿!?!優花殿!?!いきなり何を!?!」

「今俺と優花が放った攻撃はお前達なら避けれる物だ。それなのに何故お前達は当たったかわかるか?」

「そ、それは……」

「貴方達が花や虫に気を取られてるからよ」

2人の言葉に黙るハウリア族。

「だけど、君達の優しさを否定するわけじゃない。むしろそれは大切にすべきものだ」
「だが、それを家族ではない草木や虫にも向けるのは、はつきり言って、優先することじゃないわ」

「草木の心配するよりも、まず自分、そして家族だ。お前達は草木や虫を心配出来るほど強くない。そんなに大切にしたいなら、まずは強くなれ。いいな?」

「「「「はい!」」」」」

「よし、それじゃあ訓練再開だ」

一方、シアの訓練

ズガンツ！ドギヤツ！バキツバキツバキツ！ドグシャツ！

樹海の中、凄まじい破壊音が響く。野太い樹が幾本も半ばから折られ、地面には隕石でも落下したかのようなクレーターがあちこちに出来上がっており、更には、燃えて炭化した樹や氷漬けになっている樹まであった。

この多大な自然破壊はたった二人の少女によつてもたらされた。そして、その破壊活動は現在進行形で続いている。

「でえやあああ!!」

裂帛の気合とともに撃ち出されたのは直径一メートル程の樹だ。半ばから折られたそれは豪速を以て目標へと飛翔する。確かな質量と速度が、唯の樹に凶悪な破壊力を与え、道中の障害を尽く破壊しながら目標を撃破せんと突き進む。

「……『緋槍』」

それを正面から迎え撃つのは全てを灰塵に帰す豪炎の槍。巨大な質量を物ともせず触れた端から焼滅させていく。砲弾と化した丸太は相殺され灰となって宙を舞った。

「まだです!」

『緋槍』と投擲された丸太の衝突がもたらした衝撃波で払われた霧の向こう側に影が走ったかと思えば、直後、隕石のごとく天より丸太が落下し、轟音を響かせながら大地に突き刺さった。バックステップで衝撃波の範囲からも脱出していた目標は再度、火炎の槍を放とうとする。

しかし、そこへ高速で霧から飛び出してきた影が、大地に突き刺さったままの丸太に強烈な飛び蹴りをかました。一体どれほどの威力が込められていたのか、蹴りを受けた丸太は爆発したように砕け散り、その破片を散弾に変えて目標を襲った。

「ッ! 『城炎』」

飛来した即席の散弾は、突如発生した城壁の名を冠した炎の壁に阻まれ、唯の一発とて目標に届く事は叶わなかった。

しかし……

「もらいましたあ!」

「ッ!」

その時には既に影が背後に回り込んでいた。即席の散弾を放った後、見事な気配断ちにより再び霧に紛れ奇襲を仕掛けたのだ。大きく振りかぶられたその手には超重量級の大槌が握られており、刹那、豪風を伴って振り下ろされた。

『風壁』

大槌により激烈な衝撃が大地を襲い爆ぜさせる。砕かれた石が衝撃で散弾となり四方八方に飛び散った。だが、目標は、そんな凄まじい攻撃の直撃を躲すと、余波を風の障壁により吹き散らし、同時に風に乗って安全圏まで一気に後退した。更に、技後硬直により死に体となっている相手に対して容赦なく魔法を放つ。

『凍極』

「ふえーちよつ、まっつ！」

相手の魔法に気がついて必死に制止の声をかけるが、聞いてもらえない訳もなく問答無用に発動。襲撃者は、大槌を手放して離脱しようとするも、一瞬で発動した水系魔法が足元から一気に駆け上がり……頭だけ残して全身を氷漬けにされた。

「づ、づめたいい、早く解いてくださいよ、ユエさくん」

「……私の勝ち」

そう、問答無用で自然破壊を繰り返していたこの二人はユエとシアである。二人は、訓練を始めて十日目の今日、最終試験として模擬戦をしていたのだ。内容は、士郎の出した条件であるシアがほんの僅かでもユエを傷つけられたら勝利・合格というものだ。その結果は……

「うう、そんならつて、それ！ユエさんの頬っぺ！キズです！キズ！わたしの攻撃当たってますよ！あはは、やりましたあ！わたしの勝ちですう！」

ユエの頬には確かに小さな傷が付いていた。おそらく最後の石の礫が一つ、ユエの防御を突破したのだろう。本当に僅かな傷ではあるが、一本は一本だ。シアの勝利である。それを指摘して、顔から上だけの状態で大喜びするシア。体が冷えて若干鼻水が出ているが満面の笑みだ。ウサミミが嬉しきでピコピコしている。無理もないだろう。彼女は自分が着いて行きたい人にOKを出される条件をクリアしたのだから。

「……見事だったシア。正直、私も驚いてる」

そう言いながら、シアの氷を溶かす。

「えへへ、これであとは士郎さんを説得するだけですう!」

「士郎には自分の覚悟と想いを伝えるといいよ。士郎そういうの弱いから」

「それにしてもシアちゃんの身体能力はすごいね。ハジメくんが作った戦鎚を軽々振り回すなんて」

「香織さんありがとうございます。ハジメさんもこれを作っていたいただきありがとうございます。さいますう」

シアが自身の拳だけではユエに勝てないと思い、ハジメに超重量の大槌を頼み、作ってもらい、それを駆使してユエに掠りキズをつけることが出来た。シアが、真剣な表情で、ユエに勝ちたい、武器が欲しいと頼み込んできたのは記憶に新しい。ユエ自身も特に反対しなかったことから、ハジメは作った。

これを作ったハジメは当初、これを作ったところでユエにダメージを与えられるとは思わなかった。

しかしシアはハジメの思惑を覆し、ユエにダメージを与えたのだった。ハジメ達はカムに達の訓練をしている所に向かう。

「士郎さん！士郎さん！聞いて下さい、わたし、遂にユエさんに勝ちましたよ！大勝利ですよーいやあ士郎さんにもお見せしたかったですよお私の華麗なる戦い振りを！」

「そっか、おめでとう。3人共、シアの魔法適性は？」

「ハジメくんと同じ位だよ」

「あーら、せっかく魔力も持ち腐れかな？でもユエに勝ったってことは何かあるの？」

「身体強化に特化してる。強化してない僕の6割」

「おおう……それまたすごいね……勿論それは最大値だよね？」

「……ん、鍛錬次第では上がる」

「わぁお……」

士郎はハジメ達から聞いた、シアのチートっぷりに驚く。

強化していないハジメの六割と言えば、本気で身体強化したシアはほとんどステータ

スが6000を超えるということだ。これは、本気で強化した勇者の二倍の力を持っているということでもある。まさに『チートレベル』だ。

シアは早く気持ちを必死に抑えながら真剣な表情で士郎のもとへ歩み寄った。背筋を伸ばし、青みがかった白髪をなびかせ、ウサミミをピンツと立てる。これから一世一代の頼み事をするのだ。いや……むしろ告白と言っていいだろう。緊張に体が震え、表情が強ばるが、不退転の意志を瞳に宿し、一步一步、前に進む、そして、訝しむ士郎の眼前にやって来るとしつかり視線を合わせて想いを告げた。

「士郎さん！わたしをあなたの旅に連れて行って下さい。お願いします！」

「一応聞くけど、何で付いて行きたいの？今なら一族の迷惑になるどころか一族の守護者になりえる、カム達の負担どころか役に立てるんだよ？それを投げうってまで何故ボク達に？」

「で、ですからあ、それは、そのお……」

士郎は察した。この雰囲気は……

「士郎さんの傍に居たいからですう！しゆきなのでえ！」

言っちゃった、そして嘸んじやった！と、あわあわしているシアを前に、士郎は頭を抑えている。

「そうなるのかあ……」

士郎の後ろにいる雫は納得したような顔をして、少し複雑な顔をしている。

恵里にどう報告しようか考えているようだ。それでも彼女ならなんとかしらうだと、思った。

「前に話したと思うけどボクには雫以外に、恋人が1人いる」

「それは承知の上です。なら逆に考えました。2人いるなら自分が加わっても良いよね？」

「ボク達はこの世界の神を殺す為に戦っている」

「化け物でよかったです。お蔭で皆さんの足手纏いになりません」

「ボク達の望みはこことは違う世界にある故郷に帰ることだ。ハジメ達は同じ故郷で、ユエは帰る場所がなくなってしまったから一緒に来ることになったけど、君は家族がいる。それを捨てることになるんだよ？」

「それも話し合いました『それでも』です。父様達もその事も納得してくれました」

「ボク達の故郷は、魔力すらない世界で。ウサミミを着けたまま歩いていると、騒がれる世界。窮屈なものだよ」

「何度でも言います『それでも』です」

士郎は様々な言葉を使ってシアを思い留まらせようとする。

既に2人いる恋人上に、危険な旅、ずっと守ってくれた家族との別れ、様々な問題を

話したのにもかかわらず、彼女の想いは止まらなかった。

「……降参だよ。君の気持ちは受け取った。これからよろしくね、シア」

笑みを浮かべながらそう言つて、土郎はシアを抱きしめて、頭を撫でる。

その行動にシアの顔は熟れた林檎のように赤く染まり、目にハートを写して飛び上がった。

「はい！お任せください！土郎さんの為ならどこへだつて着いて行きますう！」

シアの想いは溢れ出て、暴走状態になるのだった。

劇的ビフォーアフター、ハウリア

「えへへえ〜くふふふう〜うへへへえ〜！」

「流石にやりすぎちゃったね……」

「士郎さん……あのまましばらく戻って来ないわね……」

「正直、あの状態のシアには近寄りたくないわ」

「私も同感だよ優花ちゃん……」

「……キモイ」

それから数分後、興奮が冷めないのか上機嫌な様子で、奇怪な笑い声を発し緩みつぱなしの頬に両手を当ててくねくねと身を振らせるシアの姿に誰もがドン引きしながら、他のハウリア族一同の帰りを待っていた。

流石にユエのストレートな罵倒は、ぼそつと呟いた小さい声であつても聞こえた様
で、

「ちよっ!? キモイって何ですか、キモイって！ 嬉しいんだからしようがないじゃないですかあー！ ニコポに頭撫で、そこから抱き締められたんですよ！ 3連コンボ！ ユエさんもハジメさんにされたらわたし程じゃないでしょうけど、興奮しますよね!？」

「……そう言われると否定出来ない」

と未だ溢れんばかりの愛に酔っぱらってはいるものの反論、それを聞いたユエは、士郎がシアにやったことを、ハジメにされたらという想像をして、納得してしまった。

ついでに香織もしていた。雫は自身が告白した日のことを思い出して、顔を染めていた。

「それで士郎、カム達はどうなの？」

「強くなれたけど……少し問題がね……」

「何したの？」

「魔物を殺す度に三文芝居し始めるからさ……説教した後には、心構えを教えるつもりがね……」

「本当に何したのよ……」

幸利がいる所までつくど、何やらすごく落ち込んでいる様子の幸利がいた。

「発症しなければいいんだが……」

「幸利あんたアタシ達が目を離れた時に何したのよ……」

沢山の足音が聞こえてきた。

どうやらカム達ハウリアが戻って来たようだ。

「教官。御指定の魔物の討伐、滞りなく完遂しました」

その中にはカムもいたので、色々と報告をしようとするシアだったが、その纏う気配に違和感を覚えた為か声を掛ける事が出来なかった。

そんな愛娘に気付いていたか一瞥し微笑んだカム、だが直ぐ幸利に向き直り、報告をするのだが……

「ご苦労と言いたいが、俺達は一匹でいいと言ったんだが？」

「はっ！その予定でしたが、狩猟の最中に増援を呼ばれたので、それすらも狩猟したままで。棟梁方のように一瞬で絶命させられなかったのは残念です」

「いい判断だね、素早い狩猟は今後の課題として、遅れを取らなかったのは良くやった。戦術に磨きをかけること。君達の強みは気配の扱いなんだからね」

「「はっー」」

士郎の言う通り、指定したのは上位の魔物を1グループにつき1体討伐する事、だが剥ぎ取られた魔物の部位を見る限り、其々十体分はありそうだ。

士郎の質問に対してカムはそれを誇示するでもなく。寧ろ迅速且つ効率的に出来なかった反省の弁を述べながら、事の顛末を報告していた。

その口調は、優しく争いを好まない気質のハウリア族とは色んな意味で程遠かった、敢えて言うなら軍人と言えはいだろうか？

「と、父様？何だか随分と雰囲気が変わった様な……」

「シア、我々は団長から大切な物を学び、変わったのだ。花や虫、果ては魔物を気遣える優しさも大事だが、それはまず自分、家族を優先しろと」

「嘘おおおん!?!いや、幾ら何でも変わり過ぎですよおおお!」

ハウリア族の本質である優しさこそ変わっていない様だが、表面的には余りにも変わり過ぎなその姿に、ただただ驚くしかないシアだった。

それからしばらくして、大樹の所まで移動する。すると士郎の『大地感知』に数人の気配を感じ取った。大きさからして熊人族ようだ。

「あらら、熊人族が大樹の前で待ち伏せしてるみたいだ」

「とりあえずぶっ飛ばすか」

「幸利、あんた血の気多いわねここに来てから特に」

「色々ストレスがな……」

そうこう言っていると、1人のハウリア族の少年——パルが士郎に話す。

「団長、教官!今回は我々にお任せ願えないでしょうか!」

「……カムは?パルはこう言ってるけど」

「お任せいただけるのなら、喜んで。団長達に教わり、身につけたこの力、存分に奮いたい所存です」

士郎は少し考える素振りを見せる。

「それじゃあ任せるよ。無様な戦いはしないように」

「力に溺れるなよ?」

「勿論です」

「ではゆけ!勇敢なる新生ハウリア族よ!」

「はっ!」

そう言うのと、カムとパルが跳んだのを皮切りに、他のハウリア族達も、跳んでいく。

素早い身のこなしで、木の枝と枝飛び移りながら進む。

「あわわ……士郎さん……みんな変わってしまいました……」

「シア……これは彼等が望んだことなの……私達もそれに応えただけなの……」

士郎と幸利はこの状況はとても安心していた。

なぜなら、恐ろしい心の病を発症していないからだ。

しばらくして、1人のハウリア族から伝達役としてやってきて、熊人族を無力化した

と報告され、士郎達は現場に向かった。

着いたところにはカム達に縛られている、熊人族がいた。

「団長!無力化成功しました!」

「よくやった。それじゃあボクが話を聞くから下がっていいよ」

士郎は縛られた熊人族の方に向き直る。

「さて……戦士として死ぬのと、これからのことを考えて、生きる為に恥を晒して帰るか。どっちがいい？」

「……どういうことだ。我々を無償で帰すというのか」

「まさか？ 待ち伏せして邪魔しようとしてたんだから。条件付きでだけど？」

「……条件？」

「そ、『貸し一つ』って長老衆に伝えろ。いいね？」

「……なっ!？」

「どうする？ このまま戦士として死んで、恥を晒す？ 君の判断で部下の戦士としての命がうしなわれるからね？」

「わかった……我等は帰還しその条件を呑もう」

「……よし、じゃあ帰って良いよ。ハウリアに負けたこともきちんとね」

士郎がそういうと、熊人族達は帰って行った。

そのまま深い霧を進む。カムを先頭に奥まで歩いていくと、霧が晴れて大樹の姿が現れる。

大樹の姿を見た士郎の一言は

「なにこれ……？」

という驚き半分、疑問半分といった感じのものだった。ハジメ達も、予想が外れたのか微妙な表情だ。大樹についてフェアベルゲンで見た木々のスケールが大きいバージョンを想像していたのである。

しかし、実際の大樹は……見事に枯れていたのだ。

大きさに関しては想像通り途轍もない。直径は目算では測りづらいほど大きい。直径五十メートルはあるのではないだろうか。明らかに周囲の木々とは異なる異様だ。周りの木々が青々とした葉を盛大に広げているのにもかかわらず、大樹だけが枯れ木となっているのである。

「大樹は、フェアベルゲン建国前から枯れているそうです。しかし、朽ちることはない。枯れたまま変化なく、ずっとあるそうです。周囲の霧の性質と大樹の枯れながらも朽ちないという点からいつしか神聖視されるようになりました。まあ、それだけなので、言ってみれば観光名所みたいなものですが……」

とカムが解説を入れる。

すると、大樹の根元に石版があつたので土郎は近づいて調べる。

そこにはオルクスの紋章と同じものが刻まれていた。

「どうやったら入れるんだ？」

「ハジメくん、オスカーさんの指輪で何か出来ないかな？」

「指輪を窪みに入れてみるよ」

ハジメが指輪を同じ紋章の所に嵌め込む。

すると……石板が淡く輝き出した。

何事かと、周囲を見張っていたハウリア族も集まってきた、しばらく、輝く石板を見ていると、次第に光が収まり、代わりに何やら文字が浮き出始める。そこにはこう書かれていた。

『四つの証』

『再生の力』

『紡がれた絆の道標』

『全てを有する者に新たな試練の道は開かれるだろう』

「……どういう意味？」

「……四つの証は……たぶん、他の迷宮の証じゃないかしら？」

「……再生の力と紡がれた絆の道標は？」

頭を捻るハジメにシアが答える。

「うーん、紡がれた絆の道標は、あれじゃないですか？ 亜人の案内人を得られるかどうか。亜人は基本的に樹海から出ませんし、土郎さん達みたいに、亜人に樹海を案内して貰える事なんて例外中の例外ですし」

「……なるほど、それっぽいね。あとこの迷宮のコンセプトなのかもしれない」
「……あとは再生……私？」

「いや、再生魔法って感じの名前の神代魔法がいるんだろう」

「とりあえず、迷宮を四つクリアかつ必要な神代魔法を習得しないとイケないのね……」

士郎達はこれからの方針を決める。

まず再生魔法を探しつつ、大迷宮を最低四つクリアする。

今すぐにも士郎は恵里達に会いたかったが、その時間も取れない可能性もあるので、先に進むことを優先した。

樹海の入り口までカム達案内してもらおう。

シアカム達に向き直り、ピシッと敬礼する。

「それでは父様、皆さん、わたし士郎さん達に着いていきます！」

「うむ、団長、シアのことよろしく頼みます！」

「士郎お兄ちゃん！シアお姉ちゃん！行ってらっしゃい！」

こうして士郎達はシアを仲間に加えて、カム達に見送られながら樹海を後にする。

「それじゃあさつき知った通り、ボク達は大迷宮を攻略し、再生魔法を手に入れる。次の目的地は峡谷にあるライセン大迷宮を目指す。クリアしたらそのまま大火山に行く」

「序でに行くみたいないな感覚ですね……」

樹海を後にした士郎達、次なる目的地を何処にするかハジメが自らの考えを発表したのだが、その内容にシアの顔が引きつった。

現在公式に確認されている七大迷宮は、既にシア以外の全員が攻略したオルクス大迷宮と、入れず仕舞いとなったハルツィナ樹海を除けば、グリユーエン大砂漠の大火山とシユネー雪原の氷雪洞窟の2つ、後あやふやではあるがライセン大峡谷にもあると言われている。

確実に行くなら火山と雪原に行くべきなのだが、あやふやな情報で、この世の地獄とも処刑場とも言われている場所を、一族が全滅するかもしれない危機に見舞われた場所を探し回りながら横断するという考えにシアは動揺しそれが不安へと変化していった。

「まあ峡谷じゃあ魔法が使えないから、シアが適任だ。それにユエに一度ダメージを与えたんだ、自信を持って良いよ」

そう言いながら士郎はシアの頭を撫でる。過去に恵里の頭からを撫で続けた実力は伊達ではない。シアはフニヤリと顔を緩ませ、自身の不安が解ける。

「士郎さんありがとうございませう！シア・ハウリア、頑張ります！」

「それでこの後すぐ向かうの？」

「いや、近くにブルツクの町があるから、そっちに向かう」

「たしかに調味料とか揃えたいな」

「食糧も尽きそうだしアタシも賛成よ」

士郎と雫とシアの3人はシュタイフに、魔力駆動4輪には残りのメンバーが乗り、ブルツクの町に向けて出発するのだった。

ブルックの町、ヨホホ!①

遠くに町が見えてくる。周囲を堀と柵で囲まれた小規模な町だ。街道に面した場所に木製の門があり、その傍には小屋もある。おそらく門番の詰所だろう。小規模といっても、門番を配置する程度の規模はあるようだ。それなりに、充実した買い物が出来そうだと士郎は頬を緩めた。

門番に見られる前に、乗り物を『宝物庫』にしまう。見られた時に質問責めに遭うのは考えるまでもない。

「止まってくれ。ステータスプレートを。あと町へ来た目的は？」

「旅の途中でね。町へは物資の補給を」

ふくと気のない声で相槌を打ちながら門番の男が士郎達のステータスプレートをチェックする。

きちんとステータスの主な物は幸利の闇魔法で隠蔽してある。

「その彼女のステータスプレートは魔物の襲撃で紛失しちゃってね……で兎人族の彼女は……言わなくてもわかるよね？」

「成る程奴隷か。それにしても随分と綺麗所を手に入れたな。白髪の兎人族なんて相当

レアなんじゃないか？あんたら意外と金持ち？」

ステータスプレートのないユエとシアに関して、前者は紛失、後者は奴隸という形で納得させる。土郎としては仲間で恋人を奴隸呼びされるのは、あまり好まないが致し方ない。

門番の問いには肩をすくませるだけで土郎は答えなかった。

「まあいい。通れ」

「そうだ、素材の換金所……あとこの町のギルドってどこにあるか教えて欲しいな」

「それなら、中央の道を真っ直ぐ行った所にある。換金所の場所はそこのギルド職員に聞くと良い。そこでこの簡易的な地図をくれるから」

「おお、それは助かるな」

門番から情報を聞き、門を潜る。

ブルツクの町、『ヨホホ』と笑う骸骨を連想する町の名前だ。

町中は、それなりに活気があった。かつて見たオルクス近郊の町ホルアドほどではないが露店も結構出ており、呼び込みの声や、白熱した値切り交渉の喧騒が聞こえてくる。すると後ろでシアがプルプル震えながら土郎をジト目で睨んでいた。

「あの、土郎さん……」

「何、シア？」

「これです！この首輪！これのせいで奴隷と勘違いされたじゃないですか！うう酷いですよおくわたし達、仲間じゃなかったんですかあゝ」

「あのね？奴隷でもない亜人族、それも愛玩用として人気の高い兎人族が普通町で歩けないからさ。君の容姿とスタイルは抜群だ。人攫いにでもあつたら……つてなにクネクネしてるの？」

言い訳があるなら言つて見ろやゴルア！と言いたげに睨んでいたシアだったが、その訳を聞く内に照れた様に頬を赤らめながらイヤンイヤンと言いたげに身体をくねらせ始めた。

毎度の事ながら始まった愛の暴走振りに香織達が冷めた目を向けたのは言うまでも無い。

「も、もう、士郎さん、こんな公衆の面前でいきなり何を言い出すんですかあ。そんな、容姿もスタイルも性格も抜群で、世界一可愛くて魅力的だなんて、恥ずかしいでイタア！」

「……公衆の面前。静かに」

「……ハイ、ズミマセン」

ユエが暴走したシアの脇腹を振り咎めるのだった。

「それとその首輪、『民の叡智』^{エイジオブパレロン}で特定石と念話石を使用して作ったから。どこにいても

ボク達と会話が出来るし魔力を流せば外せるから」
「わかりました！わたしと話したい時はいつでも良いですからね！」

ギルドは荒くれ者達の場所というイメージから、ハジメと幸利は、勝手に薄汚れた場所と考えているのだが、意外に清潔さが保たれた場所だった。入口正面にカウンターがあり、左手は飲食店になっているようだ。何人かの冒険者らしい者達が食事を取ったり雑談したりしている。

士郎達がギルドに入ると、冒険者達が当然のように注目してくる。最初こそ、見慣れない三人組ということできさやかな注意を引いたに過ぎなかったが、彼等の視線が女性陣に向くと、途端に瞳の奥の好奇心が増した。中には「ほう」と感心の声を上げる者や、門番同様、ボーと見惚れている者、恋人なのか女冒険者に殴られている者もいる。

テンプレ宜しく、ちよっかいを掛けてくる者がいるかとも思ったのだが、意外に理性的で観察するに留めているようだ。足止めされることなく士郎達はカウンターへ向かう。

カウンターには笑顔を浮かべたオバチャンがいた。恰幅がいい。横幅がユエ二人分くらいある。いや、ユエが細いだけかも知れない。どうやら美人の受付というのは幻想のようだ。地球の本職のメイドがオバチャンばかりという現実と同じだ。世界が変

わっても現実はいつも非情だ。ちなみに、士郎は美人の受付なんて期待していなかった。人が良ければいいと考えていた。ハジメと幸利はどうか知らないが。

「おやおや、男女比率が傾いてるわね?」

「あはは。そういうの、考えたこともなかったや」

「愛想尽かされないように、シャンとしなさいよ?」

「肝に命じておきます」

まさか初対面で説教されるとは思わなかったのか面くらいなながらも応じたハジメの返答に「あらやだ、年取るとつい説教臭くなっちゃってねえ、初対面なのにゴメンね」と謝ったおばちゃんという、何処かほっこりするやり取りが繰り広げられはしたが、即座に仕事モードに切り替わるのは流石にプロか。

「さて、じゃあ改めて。冒険者ギルド、ブルック支部によるこそ。ご用件は何かしら」

「素材の買取を頼めるか?」

「素材の買取だね。じゃあ、まずステータスプレートを出してくれるかい?」

「「「「?」」」」

「ああ、そういうえば冒険者だとかよつと買取価格上がるんだっけ。登録するから買取価格から、差っ引いてくれるかな?」

「可愛い子達がいるのに文無しなんて何やってんだい。ちゃんと上乘せしといてあげる

から、不自由させんじやないよ?」

オバチャンがかっこいい。士郎は、有り難く厚意を受け取っておくことにした。ステータスプレート所持者は登録する為にプレートを差し出す。ユエとシアのはないので登録は出来なかったのだが。

2人の技能が見てみたいが、公になるのはあまり望ましくないので、ステータスプレートの発行はやめた。

戻ってきたステータスプレートには、新たな情報が表記されていた。天職欄の横に職業欄が出来ており、そこに『冒険者』と追加されていた。

「ギルドと提携している宿や店は一〜二割程度割引してくれるし、移動馬車を利用する時も高ランクなら無料で使えたりするから、頑張りなさいよ?」

「なるほど……ありがとうございます」

「男なら黒ランク目指しなさいよ?お嬢ちゃん達にカッコ悪いところ見せないようにね?」

「勿論だ。それで買取はここで出来るのか?」

「構わないよ。あたしは査定資格も持つてるから見せてちょうだい」

どうやら受付だけでなく、買取もできるようだ。優秀なおバチャンに士郎達は驚く。ハジメは、あらかじめ宝物庫から出してバックに入れ替えておいた素材を取り出す。品

目は、魔物の毛皮や爪、牙、そして魔石だ。カウンターの受け取り用の入れ物に入れていく素材を見て、再びオバチャンが驚愕の表情をする。

「い、これは……」

恐る恐る素材を手取る。隅から隅まで丹念に確かめたオバチャン、緊張しきりな感じで顔を上げながら士郎に尋ねた。

「とんでもない物を持つて来たね。これは、樹海の魔物だね？」

「ああ、どうやって入手したかは……分かるでしょ？」

金目当てなら最もレアな大迷宮最深部に住む魔物の素材を出してそれに驚いた受付がギルド長を呼び出し、高額買取&即高ランク認定で大騒ぎ、となるだろうが流石にそれは無理がある。

何しろ『表向き』のオルクス大迷宮六十五階層に住まうベヒモスですら伝説の魔物扱いされているのだ、其処から更に奥深くに住まう魔物なぞ見た事も無ければ聞いた事も無く、文献にも掲載が無いに違いない、その強大さと未知さに即未確認生命体扱いされ、ドナドナされて終わりで済めば良いが、下手したら魔人族の手によって強大化した魔物扱いされた挙句、魔人族サイドのスパイとして捕まりかねない、魔力操作があるから余計にだ。そうでもなつたらユエとシアの素性がバレるなんて次元では済まなくなる。

尤も樹海に住まう魔物も厄介極まりない存在、その素材も相当なレア物なのでどうし

た物かと一瞬躊躇したが、其処はシアの手助けがあったからと言いつくすれば問題ない。「樹海の素材は良質なものが多いからね、売ってもらえるのは助かるよ」

オバチャンが何事もなかったように話しを続けた。オバチャンは空気も読めるらしい。良いオバチャンだ。そしてこの上なく優秀なオバチャンだ。

「やっぱり珍しいか?」

「そりゃあねえ。樹海の中じゃあ、人間族は感覚を狂わされるし、一度迷えば二度と出てこないからハイリスク。好き好んで入る人はいないねえ。亜人の奴隷持ちが金稼ぎに入るけど、売るならもつと中央で売るさ。幾分か高く売れるし、名も上がりやすいからね」

オバチャンはチラリとシアを見る。おそらく、シアの協力を得て樹海を探索したのだと推測したのだろう。樹海の素材を出しても、シアのおかげで不審にまでは思われなかったようだ。

それからオバチャンは、全ての素材を査定し金額を提示した。買取額は四十八万七千ルタ。結構な額だ。

「これでいいかい? 中央ならもう少し高くなるだろうけどね」

「この額で大丈夫です」

士郎は五十一枚のルタ通貨を受け取る。この貨幣、鉱石の特性なのか異様に軽い上、

薄いので五十枚を超えていても然程苦にならなかつた。もつとも、例え邪魔でも、士郎達には宝物庫があるので問題はない。

「そうだ、門番の彼に、この町の簡易な地図を貰えると聞いたんだが……」

「ああ、ちよつと待つといで……ほら、これだよ。おすすめの宿や店も書いてあるから参考にしなさいな」

手渡された地図は、中々に精巧で有用な情報が簡潔に記載された素晴らしい出来だつた。これが無料とは、ちよつと信じられないくらいの出来である。

その地図を士郎は解析魔術で解析し『結果記憶』で記憶する。

「いいんですか?こんな立派な地図を無料で。十分金が取れるレベルだと思うんですが……」

「構わないよ、あたしが趣味で書いてるだけだからね。書士の天職を持つてるから、それくらい落書きみたいなもんだよ」

オバチャンの優秀さがやばかつた。この人何でこんな辺境のギルドで受付とかやってんの?と総ツツコミを入れたくなるレベルである。

「なら、ありがたく貰つとくよ」

「いいつてことさ。それより、金はあるんだから、少しはいいところに泊りなよ。治安が悪いわけじゃあないけど、その二人ならそんなの関係なく暴走する男連中が出そうだから」

らね」

オバチャンは最後までいい人で気配り上手だった。士郎は苦笑いしながら「そうするよ」と返事をし、入口に向かって踵を返した。食事処の冒険者の何人かがコソコソと話し合いながら、最後まで女性陣を目で追っていた。

「ふむ、いろんな意味で面白そうな連中だね……」

後には、そんなオバチャンの楽しげな眩きが残された。

幕間の物語 part ① 恵里の救済

「♪早く帰って読もうっと」

とある夏の日、髪が少し長めに伸びている1人の少年が駆け足でカバンを背負い、帰路を辿っていた。

少年の名前は天野士郎。

この日は図書館で本を借り、その帰りなのだ。

いつも通る橋を渡ろうとしたその時、彼の目に1人の少女が橋の手摺りに乗り上げていた。

前日まで大量の雨が降り、川の流れは濁流になり、小学生が入れば流れに吞まれたちまちま溺れてしまうだろう。

そして、飛び降りた。

「ちよっ！」

士郎は急いで駆け寄り、少女の手を掴み落下を止める。

手を掴まれた少女は忌々しそうに士郎を睨む。

存外軽い少女を橋の上まで引っ張り上げる。

「なんで助けた……」

「だって落ちたら危ないでしょ?」

「僕は死にたかつたんだよ!」

士郎はその一言に衝撃を受けた。それと同時にこの子を一人にしてはいけないこと、一度家に連れ帰った方がいいと思つた。

少女の手を引つ張り、無理やり家に連れて行つた。

今日は土曜日なので両親共に家にいる。

最初は驚かれたが、少女が自殺しようとしたことを伝えると、カウンセリングの資格を持つ母——天野眞姫^{まき}那^なが少女に質問をする。

「お名前、なんていうのかな?」

「……中村恵里」

「恵里ちゃんか。私は天野眞姫那よろしくね」

それから恵里と話をして色々聞いて、わかつたことは、大きく分けて二つ。一つ目は家庭環境が荒れていること。二つ目はそれに耐えきれず、自殺を決心したことだった。

士郎は恵里の境遇に驚き、彼女を抱き締めようかと思つたのだが、流石にダメだと思ひ留まり、彼女を守る決心をしたのだつた。

それから父——天野悠次郎^{ゆうじろう}は知り合いの警察に電話をして、恵里の両親は逮捕される

のだった。

それから1年が経った頃。

恵里は天野家に養子として引き取られた。

「僕に構わないでつて言つてるでしょ！」

未だに天野家に馴染めない彼女は土郎達と言い合いになつてしまい、勢いに任せて家を飛び出してしまった。

「ちよつと恵里！」

その後を土郎が追いかける。

「やっぱり、まだ馴染めていないのね……」

「無理に引き取ったのもあるだろうし、彼女自身人間不信に陥つてしまつているからな……」

難しい顔をする2人。

恵里はまだ学校に行こうとしていない。学校で虐めもあつたらしく、頑なに行こうとしない。

天野夫妻も彼女自身が行きたいと言わない限りは行かせないつもりだ。

土郎は恵里のことが心配でいつも早く帰つて来ている。

ふと悠次郎がテレビをつけるとそこには男が刑務所から脱獄したと速報で報道されていた。しかもその男は去年逮捕された、恵里の義理の父親だったのだ。

「あなた、この男……」

「ああ……2人は!?!」

「恵里が出て行ったのを土郎が追いかけていったわ!」

「マキ、今すぐ警察に電話してくれ」

一方の恵里は、少し離れた誰もいない公園で1人ブランコに乗り、俯いていた。

「はあ……なんであの家の人達は僕に構うんだ……どうせいつか裏切るのバレてるのに」

『キイ……キイ……』と金属が擦れる音が公園に響く。

すると突然人の足音が近づいてきて、公園の草を『シヤクシヤク』と踏む音がだんだん近づいてくる。恵里が後ろを振り向くと、そこには逮捕された筈の義理の父親が立っていたのだった。

「……へ、へへへよくも通報させやがったなこのクソチビ……」

清潔にしていなかったのか所々服が破け、髭は汚く生え、眼球は血走っていた。

「ヒッー!」

「今すぐお前を犯さねえと気がすまねえ！だから犯させろおおお！」

「キヤア！」

男が飛びかかってくるが、恵里は間一髪身を翻して避ける。

「避けるんじやねええええええ！」

（嫌！誰か！助けてえ！）

振り向く顔は気持ち悪い表情をしていた。その顔に恵里は怯んでしまい、蛇に睨まれた蛙のようだった。

恵里が目を瞑り諦めたその時、男から「グアッ」と声が聞こえ、目を開けた時には何者かが自分の手を取りその場を連れ出していた。

連れ出した者は自身の義理の兄、天野士郎だった。

士郎が何故恵里の所において、男から恵里を引き離す隙を作れたのか、解説すると。

士郎がその場にあった手頃な石を男の頭に投げつけ、男がこちらに振り向く前に恵里の所まで走り、再度恵里の方を振り向く前にその場を離れるという、小学生が思いつきもしないことを咄嗟の判断で行動し、成功したのだ。

「早くー！」

「う、うん……」

士郎は恵里の手を引いて闇雲に逃げる。先程の試みが成功して、思い描いた逃走ルートを忘れてしまったのだ。

(しまった！帰り道がわからない！早く恵里を家に帰さないといけないのに！)

士郎は周りを見ながら先程の公園から離れるように手を引きながら走る。

しかし、いくら刑務所にいたとはいえ相手は大人。いつの間にか追いつかれていたようだ。

「そのクソガキ……お前が邪魔しやがったのか……ならまずは……」

男は一呼吸置いて、ポケットから何やら短くて細い棒を取り出す。士郎はゾワリと背筋に悪寒が走る。

それが何か確認する前に駆け出す。

「はぁ……はぁ……」

士郎達は路地裏の細い道に隠れた。ここに隠れるところも見られていないので、見つかかることはほとんどない筈だ。

「なんで……なんでボクだけこんな目に遭わなきゃいけないのお……」

恵里は恐怖で身体をガタガタと震わせ、涙を溢している。あの男に追われてしまった所為で情緒が不安定になってしまったようだ。士郎は恵里を安心させようと抱きしめる。

それから十数分が経過した。

不幸は突然やってくる。首輪をつけられたリードの繋がれていない犬が、こちらに来て吠えだしたのだ。

（止める！吠えるな！あっちへ行け！）

士郎の念が通じる訳もなく、犬は吠え続ける。そしてゆらりと人影が一つやってくる。

「なんだ……ここにいたのか」

男だ。ナイフを持った男が士郎と恵里を見下ろす。

「おい、クソガキ。今すぐそこから退くなら何もしねえぞ？」

士郎の答えは――

「嫌だ。彼女を守るって決めたんだ。だから守らなくちゃならないんだ！」

拒否だった。

「そうかよ、ならお前を動けないようにして、その目の前で犯してやるよ」

男がナイフの刃を出して振り下ろす。士郎の背中に激痛が走る。

「グっ……！」

「嫌あ！」

痛みを噛み殺すが、深く入ったのか、それとも安物のナイフだからなのか、士郎の背

中の肉が抉れるように切り裂かれ、血が出てくる。

恵里は士郎が切られたことに悲鳴をあげる。

「おらあ！早く退きやがれえ！」

「ぐっ……アグっ……」

「やめて！やめてよお！僕はどうなつてもいいからあ！」

「ほらあ？クソチビは俺に犯されることを望んでいるぞ？」

「……あ”あ”あ！”」

ひとときわ大きい士郎の苦しみ声が響く。それと同時に大人の声が聞こえた。

「そこまでだ！」

士郎は声の主を見る。どうやら警察官のようだ。

激痛が背中を走るが、それを堪えて恵里の手を取り走る。男は警察官に気を取られ土

郎と恵里を取り逃す。

2人は警察官に保護され、士郎に至つては背中への傷の治療の為に病院に連れて行かれた。

翌日、士郎は経過観察として数日病院で過ごすこととなった。

家では恵里が部屋に籠っていた。

恵里の許可が出たので士郎は部屋に入る。

彼が最初に目にしたのは、布団の中で蹲る、義妹の姿だった。

「恵里……おいで?」

「いいの?」

「何遠慮してるのさ?」

恵里は布団から出てくると同時に、勢いよく士郎に抱きついた。

「お兄ちゃん!ごめんなさい!ごめんなさい!僕があんなことしなければ!お兄ちゃんが怪我しなくて済んだのに!」

「大丈夫……大丈夫だよ。ボクはこうして恵里の前にいるから」

士郎はわんわんと泣く恵里の背中をトントンと撫でながら抱きしめる。

恵里の心は士郎を求めていた。自分を守ってくれる人を心のどこかで探していたのだ。しばらくして泣き止んだ恵里は士郎の胸の中で寝てしまっていた。この日の夜は恵里は士郎に我儘言つて同じ布団で寝ることになった。

「ねえお兄ちゃん。背中見せてくれる?」

「別にいいけど、傷痕見ても面白くないよ?」

「いいの」

士郎は服を脱ぐ。恵里の視界に映ったのは痛々しく残った傷痕だった。それを優し

く撫でる。

(この傷はお兄ちゃんが僕を守る為に付けた傷……僕の為……えへ……)

恍惚とした表情で傷痕を見る。

このまま傷痕を見て寝ていたいと思い、土郎が寝静まったあとも、恵里は服を捲り、先程と同じように恍惚とした表情で背中を見ていた。時折頬擦りしたり舐めたりもしていた。

それから一か月が経過して、恵里の中で一つの想いが溢れてしまった。

「お兄ちゃん……大事な話があるの」

「?どこで話す?」

「今日の夜、僕の部屋に来て」

「わかったよ」

そう、学校の休み時間には約束する。それからしばらくしていつもの時間を過ごし、夜になる。言われた通り土郎は恵里の部屋に入る。

「恵里、それで大事な話って?」

恵里は一呼吸置き想いを告げる。

「僕はお兄ちゃんのことを男の子として好きです!付き合ってください!」

士郎は少し悩んだ。彼自身も恵里のことが好きだ。妹という壁があったが、そんなことはどうでもいいと思いつぐ受け入れた。

「(ち)ち(ら)そよろしくね」

想いが届いて嬉しくなったのか、恵里は飛び上がって士郎に抱きつく。

そしてそのままキスをする。しかも舌を絡める大人のキスだった。士郎はこれをどこでいつ知ったのか聞くことすら出来なかった。

「んっ……むう……んむ……」

「れろ……んちゅ……んれ……」

恵里の小さな舌は士郎の口内を舐め、士郎の舌を見つけると絡ませてくる。

「ぶはっ……お兄ちゃん、お兄ちゃん！」

「わわっ！恵里？」

「好き……大好きい……」

ブルックの町、ヨホホ!②

オバチャンから渡された地図で決めた宿『マサカの宿』。そこに土郎達は訪れていた。その地図も、もはや地図というよりガイドブックと言っても問題ない。

料理が美味しく防犯もしっかりしており、何より風呂に入れるという。最後が決め手だ。その分少し割高だが、金はあるので問題ない。若干、何が『まさか』なのか気になったというのもあるが……

「宿の中は一階が食堂になっているようで複数の人間が食事をとっていた。土郎達が入ると、お約束のように女性陣に視線が集まる。それらを見無視して、カウンターらしき場所に行くと、十五歳くらい女の子が元氣よく挨拶しながら現れた。

「いらっしやいませー、ようこそ『マサカの宿』へ! 本日はお泊りですか? それともお食事だけですか?」

「宿泊。このガイドブック見て来たんだが、記載されている通りでいい?」

ハジメが見せたオバチャン特製地図を見て合点がいったように頷く女の子。

「ああ、キャサリンさんの紹介ですね。はい、書いてある通りですよ。何泊のご予定ですか?」

女の子がテキパキと宿泊手続きを進めようとするが、ハジメと幸利は何処か遠い目をしている。2人的に、あのオバチャンの名前がキャサリンだったことが何となくシヨックだったらしい。土郎がチョップを入れると、ハツと意識を取り戻した。

「一泊で。食事付きで、あと風呂も」

「はい。お風呂は十五分百ルタです。今のところ、この時間帯が空いてますが」

女の子が時間帯を見せる。なるべくゆつくり入りたいたので、男女で分けるとして3時間は確保したい。その旨を伝えると「えっ、3時間も!？」と驚かれたが、日本人たる土郎達としては譲れないところだ。

「え、えくと、それでお部屋はどうされますか? 2人部屋と3人部屋が空いてますが……」

ちよつと好奇心が含まれた目でハジメ達を見る女の子。そういうのが気になるお年頃だ。だが、周囲の食堂にいる客達まで聞き耳を立てるのは勘弁してもらいたいと思う土郎。

女性陣も美人が多いので視線が集まるのは当然だった。

「とりあえず3人部屋を2つ2人部屋を1つ」

「土郎さん部屋割りはどうするんですか?」

「え? 普通に男女b……」「ちよつと待った!」 ええ……」

「私はハジメくんとユエちゃんどだよ!」

「……ん、香織の言う通り」

「なら私は士郎さんとシアとね」

「アタシは幸利とになるのね」

「久々に料理談議が出来るな」

「……という事でお願ひします」

「つ、つまり3人で? す、すごい……はつ、まさかお風呂を三時間も使うのはそういうこと!? お互いの体で洗い合ったりするんだわ! それから……あ、あんなことやこんなことを……なんてアブノーマルなっ!」

女の子はトリップしていた。見かねた女将さんらしき人がズルズルと女の子を奥に引きずっていく。代わりに父親らしき男性が手早く宿泊手続きを行った。部屋の鍵を渡しながら「うちの娘がすみませんね」と謝罪するが、その眼には「男だもんね? わかっているよ?」という嬉しくない理解の色が宿っている。

ドラクエ定番の、翌朝になれば「昨晩はお楽しみでしたね?」とか言うタイプだ。

何を言っても誤解が深まりそうなので、急な展開に呆然としている客達を尻目に、士郎は女性陣が言った部屋割りに分かれて荷物を整理する。この日宿を確保に成功したのだった。

数時間ほど眠ると、夕食の時間になったように雫に起こされた士郎は他の部屋の者も呼び階下の食堂に向かった。何故か、チェックインの時にいた客が全員まだ其処にいた。

ハジメは一瞬、頬が引き攣りそうになるが、冷静を装って席に着く。すると、初っ端からめちやくちや顔を赤くした宿の女の子が「先程は失礼しました」と謝罪しながら給仕にやって来た。謝罪してはいるが瞳の奥の好奇心が隠せていない。注文した料理は確かに美味かったのだが、せっかく久しぶりに食べたまともな料理は、もう少し落ち着いて食べたかったと、士郎達は内心溜息を吐くのだった。

風呂は風呂で、男女で時間を分けたのに結局雫とシアが乱入し、その豊満な身体で洗おうとしてくるのを回避する。

疲れた顔をして風呂場から士郎が出てくるのを幸利は遠い目をして眺めていた。

夜寝る時もハジメは『アーアーツ』な展開に襲われ、士郎は豊満な胸を持つ2人が左右から抱きついて中々眠れない夜を過ごした。

幸利と優花は料理談議で夜更かしをした。

その後士郎はハジメの部屋に行き、女性陣は外で衣類などを、幸利は食材を買いに行く。

士郎はこれから向かう迷宮に向けて新たな武器を投影する。

今回の投影は難易度が高い。樹海で挑戦していたが中々成功しなかった。しかしコツは掴んでいる。

まず民の叡智で素材となる鉱物で武器を作る。さらにそれを解析して投影可能にする。

それを投影すると同時に他の武器を投影する。

派生技能「+複合投影」で1つの剣に複数の特性を着けることが出来る。

そして出来た武器の詳細がこれだ――

「+増幅」「+不壊」「+竜殺し」「+サイズ変換」「+魔力強化」「+魔力放出」「+魔力保管」

の8つだ。

憑依継承の能力を活かす為に様々な武器の使い方情報を刷り込む。

見た目は

とこんな感じだ。型にクラレントを使用した。

「うわあ――――――――――！」

「なにになに!？」

「女性陣が荒れてるみたいだね……」

大地感知で叫び声の正体と元凶を軽く探った土郎。おそらくナンパされたのだと思
い、武器の製作に戻る。

「そういえばさ、この世界での僕達のチーム名？まだ決めてなかったね」

「そうだけど、何かいい案でもあるの？」

「フェアビンデン。ドイツ語で意味は繋がる」

「？なんで？」

「大分前に幸利と話してたことがあってね。僕達って土郎が中心に出会って
いるって思ったんだよ」

「そんなこと考えてもみなかった。……けどなんでボクが中心なのさ？」

「まず僕は幼馴染、恵里と雫は土郎が助けて、幸利とは書店で意気投合、雫
関連で香織と出会って、ウイステリアで優花で出会って、恵里が鈴と友達にな
った。ユエもシアもそんな感じだからさ」

「なるほど……」

それからオルクス大迷宮で作った、星砕きを改造する。

平たい所が開くようにして、魔力を込めるとそこから勢いよく、魔力が放
出され、とつともない推進力が発生し、その勢いで尖った部分を叩きつける。
バトルロードの『地

殻変動』を再現したものだ。持ち手を捻れば弾丸も発射出来るので、遠近が安定している。

しばらくして買い出し組が帰って来た。

「おかえり、で昼間の叫び声はなにごと?」

「何でもないよ?」

「そうね何もなかったわ」

「……問題ない」

「2人とも気にしたら負けだ」

幸利が強く言うので、それ以上の追求はやめることにした。

「とりあえずシアにはこれ」

そう言って土郎はシアには星砕きを渡す。

予想以上の重さだったのか、落としかける。

「わわっ!何ですかこれ!凄いいゴツイですう!」

「色々と仕組みがあるから説明するね」

土郎は星砕きの説明をする。

「土郎さんわたし頑張りますう!」

そう気合を入れるシア。フンスと胸を張るので、雫達にも負けず劣らずの豊満なそれ

がより強調される。

溪谷にある迷宮に向かう準備を終えた土郎達は、ブルツクの町を立つのだった。

ポロボロの竜騎士とライセン大迷宮

魔物の死体がライセン峡谷にばら撒かれている。その死体は炎により炭化していたり、頭部がひしやげていたり、上半身がなかったり様々な死体が出来上がっていた。

「魔物がウザい！」

「一撃必殺ですう！」

「でやあー！」

士郎達は次々と襲いかかる魔物を蹴散らす。それでも性懲りも無く魔物は次々と襲いかかる。

士郎達はシユタイプや車で進み続ける。魔力が分散されるのもお構いなしだ。

シユタイプには士郎、雫、シアが乗り、それ以外は車に乗っている。

遠めの魔物はハジメ、香織、士郎の銃、優花の投げナイフやクナイが、至近距離の魔物は魔力に物を言わせたユエと幸利の魔法、雫の刀、シアの戦鎚が魔物を片手間に葬り去る。

『うーんやっぱりライセンの何処かにあるって言う情報だけじゃわからないや』

『士郎、大地感知に何か引つかかっているか？』

「それらしき物も見つからないよ」

「大火山に向かうついでなんですし、見つければ儲けものと考えていきましょう。大火山の迷宮を攻略すれば手がかりも見つかるかもしれないし」

「そうだといいいけれど……」

『ん……魔物が多い』

『ユエちゃんと幸利くんにとって向かない場所だもんね』

『アタシも投げナイフでしか攻撃出来なくて、少し面倒ね』

しばらく走っていると、何かが蹲っている姿が見えた。

「みんな止まって！」

車を止め、蹲っている物の正体はどうかやらボロボロの男性と少し大きめのトカゲだった。人の髪色は赤銅色で褐色の肌。特徴は魔族と瓜二つだった。

「どうするの？」

「とりあえずロープで捕縛しておいた方が良さそうだね」

ハジメがロープで魔族の男の手足を縛り、トカゲを檻に入れる。トカゲは意外と大人しく檻に入った。

しばらくすると男が目を覚ます。

「ぐっ……ここは……？何故縛られて……人間……!?メル！」

「とりあえず落ち着いてくれ、そのメルとやらもここにいろ」

「幸利はトカゲの入った檻を見せる。」

「そうか……私達はここまでか……」

「いくつか質問していいかな？」

「……なんだ」

警戒混じりの視線をこちらに向ける。

「何でそんなにポロボロなのか、仲間はどうしたのか」

「仲間は別の所だ……魔人族の異端者として私は魔人領を追い出された」

男は悔しそうな表情で、顔を顰める。

「それもここまでか……解放者達の意志を引き継いだのだがな……」

「待って！今、解放者って」

「……なんだ知っているのか？」

「ああ、俺達も解放者のことを知っている」

「そこから彼等は情報共有を始める。」

「彼の名前は、『ヴェアベルト・ハリス』という魔人族の隊長の1人らしい。トカゲの名前は『メルリアン』。」

「彼はこの世界全ての種族が共に手を取り合い支え合う世界を作りたいと考えている。」

魔人族が何故人間より優位に立ったのか。

魔物の使役は魔人領にある迷宮で手に入れた神代魔法『変成魔法』を使うことで可能になった。

彼はそこで解放者の意志と世界の真実を知った。仲間は一笑に伏したのだが、彼はしつくりきたのだという。

その事を魔人族を束ねる魔王に話したのだが、却下され納得いかず何度も言う内に異端者登録され、領を追われたのだという。部下も彼の理想に従っていたので、異端者に含まれてしまった。彼等を逃し、後は自分だけになった所で追手に見つかりメルリアンと共に命辛々生き延びてここにいますという。

「なるほど……」

「お前達は何者なのだ？」

「ボク達は、異世界から連れてこられた人間です。元の世界に戻る為に神代魔法を探しています」

「なるほど……目標は違えど目的は同じなのか……ならば私も同行させてもらえないだろうか。信じてもらえるとは思ってはいないが……」

士郎達は彼の話を聞いてしばらく考え込む。

今は戦力が欲しいのだが魔人族をすぐに信用するのは難しい。彼は士郎の目をじっ

と見て話しをていたので、嘘を言っているようには見えなかった。

しばらく仲間内で相談し、結論が出たので士郎はヴェアベルトに向き直る。

「一先ずボク達は貴方達を仲間に加えます。それでこれから貴方を信用していこうと思います」

「わかった……ならば我等の剣は貴君等に捧げよう」

その声にメルリアンも「クワアン！」と鳴く。

新たにヴェアベルトを仲間に加えた。

ブルツクを出てから丸3日が経過した。ライセン大迷宮の手がかりも何も見つからない。

日も暮れて、月が出ているので野営の準備を始める。

テントの骨組みに気配遮断を付与した鉱石、気断石を使い、魔物に見つかることはほぼなく、冷房石、暖房石が温度は常に快適にしてくれる。

改めて思うこと……神代魔法超便利。

調理器具にまで使用しているのでその便利さがわかるだろう。

今日の夕食担当はシアだ。

献立はククルー鳥のトマト煮である。ククルー鳥とは、空飛ぶ鶏のことだ。肉の質や味はまんま鶏である。この世界でもポピュラーな鳥肉だ。とてもおいしかった。

鶏が空を飛んでいるのを見た土郎達は信じられない物を見た気分だった。

この日の見張り番は土郎だった。

雲一つない空を見上げている。とても綺麗だ。この世界にも流れ星があるようだ。月は三日月でもとても美しく、ハジメがユエと名付けた時の話を連想する。

するとテントの中からウサミミがひよこつと出てくる。

「シア？まだ見張り交代の時間じゃないけど……」

「あの……その……お花を摘みに……」

「わかったよ。気をつけね？」

再び夜空を眺めようとして上を見ようとしたその時、シアの声が聞こえてきた。

「し、土郎さくん！来てください！大変ですう！」

何事かと土郎はシアのところまで駆け寄ると、そこには、巨大な一枚岩が谷の壁面にもたれ掛かるように倒れおり、壁面と一枚岩との間に隙間が空いている場所があった。シアは、その隙間の前で、ブンブンと腕を振っている。その表情は、信じられないものを見た！というように興奮に彩られていた。

「こつち、こつちですう！見つけたんですよお！」

「わかったから、引つ張らないで」

士郎が壁に何か書かれているのを見つけ、目を凝らしてその文字を読む。

『おいでませ！ミレディ・ライセンのドキワク大迷宮へ♪』

『！』や『♪』のマークが妙に凝っている所が何ともウザさを表している。

「よく見つけたね」

「おトイ……ゴホッソ、お花を摘みに来たら偶然見つけちゃいました。いや、ホントにあつたんですねえ、ライセン大峽谷に大迷宮って」

「とりあえず、名前に『ミレディ』って入ってるから本物だろう。シアは用を済ませてないなら済まして来なさい。ボクはみんなを起こしてくるから」

「わかりました！」

シアが偶然にも見つけた大迷宮の手がかり、その近くにおそらく入り口もあるのだろう。士郎は解析眼で探る。一つだけ四角く、忍者屋敷の回転扉のような物があつた。そこが入り口なのだろう。

それからみんなを起こして、大迷宮を攻略することとなった。

セレ デイイイイイイイ！ 違つたミレ
デイイイイイイイ！

士郎はテントの中にいるハジメ達に報告して、翌日にするか相談したのだが、直ぐに探索すると決まる。

ライセンの大迷宮は想像以上に厄介な場所だった。

まず、魔法がまともに使えない。谷底より遥かに強力な分解作用が働いているためだ。魔法特化のユエや幸利にとっては相当負担のかかる場所である。何せ、上級以上の魔法は使用できず、中級以下でも射程が極端に短い。五メートルも効果を出せれば御の字という状況だ。何とか、瞬間的に魔力を高めれば実戦でも使えるレベルではあるが、今までのように強力な魔法で一撃とは行かなくなった。

また、魔晶石シリーズに蓄えた魔力の減りも馬鹿にできないので、考えて使わなければならぬ。それだけ消費が激しいのだ。魔法に関しては天才的なユエ、大量の魔力を持つ幸利だからこそ中級魔法が放てるのであって、大抵の者は役立たずになってしまうだろう。

士郎達にとっても大きな影響が出ている。士郎の十八番である投影魔術はおろか、風

爪や空力などいつもの消費魔力で使えなくなってしまうていた。無理矢理ならば投影魔術は可能なので、前に作った複合投影剣ソスタンボイで基本的な敵を切るつもりだ。

ハジメと香織の銃の威力も半分以下になってしまっている。

雫は攻撃魔法を使わないので、そこまで苦ではない。シアも身体強化なので魔力が霧散することは無い。

「シア、ここでは君の身体強化が活きる。頼むよ」

「わかりました!」

それからしばらく進むのだが、魔物はおらずトラップだらけのだ。しかも物理トラップばかりなのでハジメのモノクルのほとんどの機能が反応しない。

解析眼でトラップがないか確認しつつ進む。

すると『ガコン!』と音が鳴る。

「ハジメ……」

「ごめん……」

壁から回転ノコギリが二枚出現し、こちらに襲いかかってくる。一つは首、もう一つは腰あたりだ。

「総員回避イ!」

士郎がそう叫ぶと同時に全員でマ○リックス回避する。

「はわわわわわわ、ついてますか!?!わたしのウサミミ着いてますかあ!?!」
「危うく饅頭になるところだったわね……」

「おはこんばんちはゆつくり優花ですとか笑えないわよ……」

「R—18Gにならなくてよかったよ……」

「やはり解放者の試練はどこも容赦ないのだな……」

「キユウ……」

トランプに気をつけながら迷宮を進む。

「この迷宮は魔物は出ないみたいだね」

「何故そんなことが言える?」

「ここは物理トランプばかりだからが一番の理由だね」

「なるほど……魔物が踏んで自滅しないようにか」

「それなら魔物がでないのも納得だな……」

「ただ自律人形系はいる可能性はあるよ」

「……トランプの位置に行かないように設定していれば踏むこともない」

「なるほど……流石ですね士郎さん!」

さらにしばらく進んでいくと、再び突然『ガコン!』とハジメがスイッチを踏み抜いた時と同じ音がしたのだ。

「……シア?」

ユエはジト目で音の元凶であるシアを睨む。

「ごめんなさいですう!」

いきなり階段から段差が消えた。かなり傾斜のキツイ下り階段だったのだが、その階段の段差が引つ込みスロープになったのだ。しかもご丁寧に地面に空いた小さな無数の穴からタールのようなよく滑る液体が一気に溢れ出てきた。

「「「うわあああああ!!」」」

「「「「きやあああああ!!」」」」

士郎達はそのまま滑り落ちていく。ハジメは香織とユエを抱え、スパイクを立てて止まろうとするものの、雫を受け止めた士郎がシアを受け止め損ねてそのままハジメ達に激突、そのままその下で理力の杖でぶら下がっていた幸利と優花にもぶつかり落ちていく。

「ごめんみんな!」

「今はここをどう切り抜けるか考えないと!」

士郎は滑り落ちる先を見る。穴になっていてそこに大量の鋭い棘が配置されていた。「全員飛んで！」

士郎は強化魔術を腕と脚に使い雫とシアを抱えたまま穴を飛び越える。

「よつと……ハジメ達は……つてええええ!?!」

士郎がハジメ達の方を見ると驚いた声を上げる。

それもそのはず、ハジメ達はワイヤー、幸利と優花は杖でぶら下がっているのに対して、ヴェアベルトは何処から現れたのかわからない飛竜に乗っていたのだ。

「ヴェアベルトさんそれどこから現れたんですかあ!?!」

「こいつはメルリアンだ」

「メルリアンがデカくなった!?!」

幸利は驚愕の声を上げる。

メルリアンの能力を改めて教えてもらう。それを紙にまとめる。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

メルリアン 雌

擬竜種

技能：火炎放射「+圧縮放射」「+弾丸放射」・水流放射「+圧縮放射」「+弾丸放射」・

氷結放射「+圧縮放射」「+弾丸放射」・魔力操作「+魔力放射」「+魔力圧縮」「+遠隔操作」・念話・石化魔眼・身体拡張・擬竜の鱗・気配感知・魔力感知・気配遮断・人竜一体「+融合」「+技能融合」「+ステータス融合」

「この人竜一体ってのは？」

「これは私とメルのとっておきだ」

ヴェアベルトはとっておきについて話す。士郎は今後それをどう連携に組み込むか考える。

ハジメ達も着地して先に進み、広い空間に出るとそこには石版が立っていて、文章が刻まれていた。メルリアンが念話で話せるのを知った士郎達は彼女?に話しかける。

会話はまだ辿々しいものの伝えたいことがわかるので問題はなかった。

『焦ってやんの~~~~ダツサ~~~~イ!』

『この位で疲れるようじゃ先が思いやられるねー、ププツ』

見事に神経を逆撫でされる文章が浮かび上がる。シアがその石版を叩き潰す。しかしその下にも文章が書かれていた。

『この程度でキレてやんの~~~~! プツ♪』

『最近の若者は短気でイカンな~~~~~♪』

『や〜い、短気短気〜！プ〜クスクス！』

「ムキイーーーーー！」

シアがさらにブチギレて何度も何度も叩き潰す。

「これはミレデイ生きてるね……」

「なんでそう思うの？」

「明らかにこちらの様子を言い当ててる」

「……でもミレデイは人間だってオルクスの手記に書かれてた」

「自律人形に自分の魂を定着させたか何かしたんだらうね。魂は人の寿命より長いと思うし」

シアが叩き潰した跡を見ると、一瞬だが『彘』と浮かんでいた。

「動揺したみたいだし先に進もう」

士郎の考察に呆気に取りられるのだった。

それから迷宮を進んでいく士郎達。

道中にトラップを避けた先にウザい文章が何度も書かれていた。シアは色々悔しいのか文章に八つ当たりをしていた。どうやら開き直って再びおちよくり始めたようだ。

鉄球が転がって来た時は士郎とハジメが思いつきり殴り、粉碎したと思いきや、色々溶かす液体を噴出する鉄球が転がってくる二段構えに一行は逃げることを選択。逃げた先は溶解液のプールだった。空力すら使えないので士郎は鎖を、ハジメはワイヤーを、幸利は杖を、ヴェアベルトはメルリアンに乗り全員の着水を避けるのだった。そして出た先は……

「……入り口？」

小さな声で誰かが呟いた。

石版が立っていた。

『ねえ今どんな気持ち？』

『お察しの通りここはスタート地点です！』

『苦労して進んだ部屋が最初の部屋なだけで今どんな気持ち？』

『ちなみに来た道に戻ろうとしても無駄だよ！』

『この迷宮は一定時間ごとに変化してるから！』

『ねえねえ今どんな気持ち？』

全員沈黙。

「……………」

士郎とヴェアベルト以外は怒りがふつつつと湧き上がる。

ミレディ・ライセン

入り口に戻されて再び迷宮が探索する土郎達。土郎とハジメの解析眼とマーキングにより3日でボス部屋前の所までたどり着いた。

壁際には甲冑がずらりと並んでおり、今にも動き出しそうだ。

数歩進むと甲冑が動きだす。

「シア、君は強い。だから思いつきり暴れてこい」

「はーい」

元気よく返事をすると同時に星砕きを甲冑ゴーレムに叩きつけ、一撃で仕留める。

シアの攻撃を皮切りに、土郎達も一斉に攻撃し始める。

ハジメと香織の銃が的確にゴーレムの核があるであろう場所を撃ち抜く。

しかしゴーレムは止まらず攻撃を続ける。

土郎が解析する。

「こいつら核がない!?!」

「つて事は遠隔操作されてるのか」

「土郎さん、さっきシアが星砕きで叩き潰したゴーレムの残骸がないわ」

「つて事は再生したか何かあったのか？」

「士郎！鑑定結果が出たよ！『感応石』つて言つて魔力で直接操作出来るみたい！」

「どうやら魔力の直接操作で再生しているようだ。士郎は一度考え、ハジメにあるものを出してもらおう。」

「ハジメ！ツーを出して！」

「わかった！」

士郎の手元の一つのドリルのような剣——贗・螺旋剣ⅠⅠと弓を呼び出す。

それを弓につがえて扉に向けて放つ。

偽・螺旋剣ⅠⅠの概念効果はこの迷宮でも遺憾無く発揮され、甲冑ゴーレムを蹴散らし扉を破壊する。魔法による破壊がないと思っていたのだろう。あっさり壊れた。

「みんな！急いで扉の奥に！」

全員全力ダッシュで扉の奥まで走る。

その先は足場が途切れていて、空中に四角いブロックの足場が浮いていた。

「不思議な空間……」

「なんだが常識を疑いたくなるよ……」

シアが唐突に叫ぶ。

「避けてえ！」

何と問わずに全員、その場から別の足場に飛び移る。

士郎達がいた場所に隕石のようなものが落下して来たのだ。

「助かったよシア……」

「ええ、お手柄よ」

「えへへ……未来視が発動してよかったです。そのかわり、魔力をこっそり持っていていられましたか……」

そして上の方から何かが飛来し、士郎達の前でピタリと止まる。止まったそれは、

先程の甲冑ゴーレムの親玉のような姿だった。

兜の奥からギリリとこちらを睨む。

「なるほど、君がミレディ・ライセンかな？」

「「「「「え？」」」」」」

『緑髪君の言う通り！私がミレディ・ライセンだよー！』

「「「「「は？」」」」」」

ハジメ達の驚いた声が広い空間に響いた。

確かにオスカーの手記に彼女は人間と書かれていたので、信じられないのだろう。

『挨拶しないのかなあ？最低限の礼儀だよ？全く、これだから最近の若者は……もっと常識的になりたまえよ』

「それはすまない。君が人間の女性だとオスカーの手記に書かれていたからね」
『オーちゃん迷宮を攻略したのかな?』

「ああ、だからここの神代魔法を会得する為に攻略しに来たのさ」
「待つて待つて！」

「何普通に会話してるの!?!」

「あ、お帰り」

『それじゃあ続けるよ〜!』

何事もなかったのように会話を続ける2人。

『君達は何のために神代魔法を求めてる?』

その質問に士郎はあの迷宮で決めたことを伝える。

「あの邪神を殺す為さ。そうじゃないとボク達は帰れないからね」

『ふーん、あのクソ野郎を倒してくれるんだ』

「次はボクからの質問だ。神代魔法の中に世界を……それこそ別世界へと行ける魔法はあるか?」

『それはねえ〜』

教えてあげない!』

「なるほど、つまりあんたを倒せば教えてくれるんだな?」

幸利は腰のブラックロッドを手に持ち、構える。

『その通り! さあいつでもかかって来なさい!』

解放者の一人ミレディ・ライセンとの戦いの火蓋が切つて落とされた。

士郎とハジメ、香織は銃でミレディ・ゴーレムを射撃、メルリアンの火炎ブレスで攻撃する。

「やりましたか!？」

「……シア、それはフラグ」

全くダメージが入っていないミレディ・ゴーレム。今使った銃が効かないことが分かると、銃での攻撃をやめ、飛び蹴りを喰らわす。

『わわわ！いきなり攻撃とか卑怯じゃないの？』

「これは戦いだよ？」

「隙に攻撃をするのは普通でしょ？」

ミレディ・ゴーレムは腕を振るい、士郎達を吹き飛ばす。更に後ろから幸利が魔力を込めたブラツクロッドで殴ろうとする。しかし突然現れた何かに足場へと殴り落とされる。

「チツ！さっきのゴーレムか！」

幸利の上には先程通路で蹴散らした、無限再生する甲冑ゴーレムが浮遊していた。

『そうだよ！これが私の神代魔法。空飛ぶゴーレムは見たことはあるかな？』

ミレディ・ゴーレムの背後に大量の甲冑ゴーレムが浮遊していた。

『これが君達に一齐に襲い掛かるわけ！どう？ビビった？今謝ったら……』

得意げにミレディは語るがすぐにゴーレムが細切れにされる。

『あれ？』

「浮いてるだけなら只の的。あといちいちうるさい……」

ユエがそういう。

彼女が両肩から下げられた巨大な水筒の中には大量の水が入っており、それを介して魔法を使うこと……魔力消費を抑えることができる。

『いや〜怖いねえ。話してる最中にやるなんて』

士郎は解析眼を使用してミレディ・ゴーレムを解析する。ちょうど心臓部分にある核を見つける。

「ちゃんと君にも核があるんだね。みんな！核は心臓部分だ！」

『な、なんなの君達!?!ここって魔法が使えない筈なんですけど!?!』

「なんなのって？それは〜教えな〜い！」

そう笑いながら士郎はミレディ・ゴーレムの右腕を殴り飛ばす。その威力に腕が砕け散る。更にシアも星砕きで殴りかかる。それをミレディ・ゴーレムはトゲ鉄球のメイスで受け止める。そのまま押し切ろうとするも力負けして、ぶっ飛ばされる。

『はい、残念また挑戦してね〜』

シアと入れ替わるように、雫と優花、ヴェアベルトがナイフと刀、剣で振われた腕を切り落とそうとするも、ミレディ・ゴーレムは突然急激に左に動いてかわす。まるで左に落ちたようにだ。

「んな〜！」

「ものすごい勢いで移動した!?!」

「こいつはまさか重力系統の魔法なのか!?!」

空中に浮かぶ足場が突然何かに引っ張られるかのように動き、3人に襲いかかる。ど

うやら重力を操作して落として動かしているのだろう

『正解だよお！ただねえ、動かせるのは騎士だけじゃないよ？』

「重力魔法とか厄介だな……」

「ひとまずこれを破壊してから次の手を考えよう！」

しかしその足場もハジメの義手のギミックと幸利のブラックロッドにより砕ける。

更にハジメは宝物庫からシユラーゲンをだし、ミレデイ・ゴーレムの核の位置に放つ。とてつもないその威力にミレデイ・ゴーレムが後ろに後退する。

煙が晴れて現れたのは無傷のミレデイ・ゴーレムだった。当たった部分には最初の装甲とは違う黒い装甲が露わになる。

「アザンチウム鉱石か……」

『正解！いや、大したもんだね？ちよつとヒヤツとしたよお。分解作用が無くて、そのアーティファクトが本来の力を発揮していたら危なかったかもねえ、うん、この場所に苦勞して迷宮作ったミレデイちゃん天才!!』

自画自賛するミレデイ。

『それに、重力を操ればこんなことも……出来るんだよ！』

ミレデイ・ゴーレムの持つトゲ鉄球が放たれる。メイスに見えたそれは内部に鎖で繋がられたモーニングスターだったのだ。

正確にはハジメへと落ちるように襲いかかる。

士郎はそれを剛腕を込めて殴り、受け止める。

「つぐつ……………おとおお！」

『マジ？これを受け止めるとか？』

更にハジメと幸利が後ろからものすごい速さで飛んで、鉄球を踵落としとブラックロッドで叩きつける。

「今だ！全員登れ！」

士郎達は左腕を登る。

『く、来るなあ！』

登ってくる士郎達をミレディ・ゴーレムは再生された右腕で薙ぎ払おうとする。

「させません！どおりやあああああつ!!」

先程は吹き飛ばされたシアだが今回は違う。彼女の戦鎚がその腕を受け止める。これには訳がある。

士郎が踵落としをする前に一度試してみたいことがあり、それをシアに実行した。

それは強化魔術を他者に行うということ。前にもハジメに試したのだが中々上手くいかなかったのだ。そこで今回は『回路接続』と併用して使ってみることにしたのだ。結果は大成功、シアの身体能力はハジメクラスにまで上昇し、右腕を余裕で受け止める

ことが出来たのだ。

「ナイスだシアア！そのまま受け止め続けて！」

「はいですう！」

更に士郎は背中中の剣を抜きミレディ・ゴーレムの右腕を切り落とす。

ユエが『破断』を、メルリアンが水流ブレスを放ち、更に片腕を切り落とす。

「うりやあああああああ！」

両腕がなくなったミレディ・ゴーレムを足場に叩き落とす。

『や、やるじゃないか……でも、こんな事しても無駄だよ。私もゴーレムだって事忘れてないよね？核が破壊されない限り素材があれば何度だって再生できるんだよ？』

「『そうはさせない（サセナイ）／させん』」

再生しようとは始めようとしたその時、パキパキと音を立てながらミレディ・ゴーレムの身体が凍っていく。

ユエとヴェアベルトの『凍枢』、メルリアンの氷ブレスでミレディ・ゴーレムの大半が凍りつけにされる。

『嘘!?どうしてここで上級魔法が使えるのさ!?!』

「今まで水属性の攻撃をし続けたからだ……はあ……はあ……大分魔力を使ったがこれで動けないだろう」

しかし、まだ終わらなかつた。

何かを察知したメルリアンはヴェアベルトを抱えてその場を離れる。

彼女も本来なら他の人も抱えたかつたのだが時間もなく、ヴェアベルト一人しか抱えられなかつた。

「みなさん！ 『未来』 が視えました！ 上から何か降つて来ます！」

「ちよつと……これはシャレにならないでしょ……」

士郎達は目を見開いて天井を見上げる。

『……ふふふ、とつておきのお返しだよ。今からこの部屋の天井全てを、君達の頭上に《落とす》これだけなら数百単位でいけるからね〜』

天井が正方形のブロックに分かれて落下を始めた。

この部屋の天井は重力魔法によって支えられていた物の様だ。

『さあ、これを凌いで見せてよ』

ミレディは楽しそうに言った。

その時士郎は近くにいた幸利と優花をヴェアベルトとメルリアンのところに投げ飛ばす。

「香織！ ユエ！ 僕のところ！」

「雫！ シア！ こつちだ！」

ハジメは香織とユエを、士郎は雫とシアを抱えて飛ぶ。

かなりの魔力を消費して偽・螺旋剣を投影、そして蹴飛ばして、道を作る。

ハジメもオルカンからロケット弾を発射してブロックを破壊する。

別の場所にいる、幸利達にも天井ブロックの一部が襲いかかる。

幸利は魔力を込めたブラックロッドを優花は槍を扇風機のように回して防御する。

「うおおおおお！」

「やあああああ！」

ハジメは『限界突破』士郎は『変容』、そして『瞬光』を発動してブロックの隙間を通

る。

「うひひひひ！」

シアはスレスレで通り過ぎていくブロックに驚く。

この状態の2人の身体への負担は半端ではない。

魔物の血肉を食べたからこそ、この無茶が出来る。

時折襲いかかる破片を香織が銃で逸らし、シアが星砕きで粉碎する。

士郎達がブロックを乗り越えようとしている隙にミレディ・ゴーレムは修復を開始す

る。

ブロックが大量に積まれる頃には完全復活をする。

『ミレディちゃん復活！』

士郎達が巨石群に呑まれたかと思ひ、重力魔法を解除する。

『うくん、やっぱり、無理だったかなあ〜でもこれくらいは何とかできないと、あのクソ野郎共には勝てないしねえ〜』

「誰がやられたって?」

誰かの声が聞こえた。

ブロックが破壊され、そこから現れたのは士郎達だった。士郎とハジメは目や鼻から血を垂れ流していた。

更に背後からも爆発音がしてミレディ・ゴーレムが振り向く。

「だああああ! 身体強化が派生技能に追加されなかったら死んでた!」

「ホントギリギリのタイミングね……」

「危機一髪だったな……」

『タスカッタ……』

『うっそお』

「あんまり僕等を舐めないで欲しいね……」

「次は私達の番だよ……」

「……覚悟して」

「その腕また切り落としてあげるわ」

「ぶっ潰してやるですう！」

ユエ、ヴェアベルトの『破断』と土郎、雫の剣撃により再びミレディ・ゴーレムの両腕を切断。一瞬の隙にハジメがパイルバンカーを取り出して、ミレディ・ゴーレムの核に向けて突き刺す。

「存分に喰らえ！」

『キユイイイイ！』と音を立てながらミレディ・ゴーレムの装甲を抉る。

しかし、挟まっている最中に足場の一つがハジメに飛来してパイルバンカーの作動部分が破壊され、杭だけが残る。

二つ目が飛来するも、幸利がブラックロッドでハジメを回収する。

『ハ、ハハ。どうやら未だ威力が足りなかったようだねえ。だけど、まあ大したものだよお？ 四分の三くらいは貫けたんじゃないかなあ？』

「そんなに削れたなら問題ない！」

土郎とシアは飛び上がる。そして土郎がシアに足を向けて互いの足を重ねてシアを突き飛ばす。キャプ○のスカイ○ブハリ○ーンだ。

そのままシアは星砕きの特殊機能を発動、高速回転しながら杭に向かって行く。

「やれ！ シア！」

重力魔法会得完了！

辺りにはもうもうと砂埃が舞い、杭を叩きつけたシアは肩で息をしながらフラフラと後ろに倒れ込む。回転しながら叩きつけたので、目が回ってしまったようだ。

「おっと」

「士郎……さん……わたし……やったですう……惚れ直しましたか？」

「勿論だよシア」

「えへへ……」

士郎はそう言いながら倒れ込んだ彼女の頭を撫でる。気持ちよさそうに目を細め、ウサミミをパタパタと揺らす。尻尾もフリフリしていて、とても可愛らしい。

「雫もお疲れ様」

雫の頭も士郎は撫で始める、彼女もシアと同じように目を細める。

周りでもハジメと香織、ユエがイチャついていたり、幸利と優花が拳をぶつけていたり、ヴェアベルトがメルリアンの喉を撫でる。

『あのく勝利の余韻に浸ってる所悪いんだけど。そろそろヤバいんで、ちよつといいかな？核に残った力で喋っているからさ』

士郎は2人を撫でるのをやめて、ミレディに向き直る。

『これから君達は迷宮を攻略して行くんでしょ?ならちやんと1人でも全部習得するこ
と。そしたら君達のやりたいことが叶うから』

「なら、迷宮の場所を教えてください?ほとんど失伝していて、場所がわからないから」
『そっか……そんなに時がたって……いたんだね……教えるよ、場所はね……』
ぽつりぽつりと残りの七大迷宮の所在を語っていく。

忍耐の試練

グリューエン大火山

狂気の試練

メルジーネ海底遺跡

意志の試練

神山

絆の試練

ハルツィナ樹海

心の試練

氷雪洞窟

と中々に考えられた場所に作られ、試練の内容も厳しそうだ。

『……………以上だよ。頑張つてね』

「随分としおらしいな。あのウザい口調はどうした？」

『あはは、ごめんね〜でもさ……………あのクソ野郎共つて……………ホントに嫌なヤツらでさ……………嫌らしいことばかりしてくるんだよね……………だから、少しでも……………慣れておいて欲しくてね……………』

「そうか……………」

ミレディ・ゴーレムの身体は燐光のような青い白い光に包まれていた。その光が螢火の如く、淡い小さな光となって天へと登つていく。死した魂が天へと召されていくようだ。とても、とても神秘的な光景である。

その時、おもむろにユエがミレディ・ゴーレムの傍へと寄つて行つた。既に、ほとんど光を失っている眼をジッと見つめる。

『なにかな？』

「……………お疲れ様。よく頑張りました」

『……………』

労いの言葉。たった一人、深い闇の底で希望を待ち続けた偉大な存在への、今を生きる者からのささやかな贈り物。本来なら、遙かに年下の者からの言葉としては不適切かもしれない。だが、やはり、これ以外の言葉を、ユエは思いつかなかつた。

ミレデイにとっても意外な言葉だったのだろう。言葉もなく呆然とした雰囲気を漂わせている。やがて、穏やかな声でミレデイがポツリと呟く。

『……ありがとね』

「……ん」

『……さて、時間の……ようだね……君達のこれからが……自由な意志の下に……あらんことを……』

オスカールと同じ言葉を士郎達に贈り、『解放者』の一人、ミレデイは淡い光となって天へと消えていった。

辺りを静寂が包み、余韻に浸るように女性陣が光の軌跡を追って天を見上げる。

「……最初は、性根が捻じ曲がった最悪の人だと思っていましたんですけどね。ただ、一生懸命なだけだったんですね」

「……ん」

「長い時をここで一人で過ごしたんだよね……」

「アタシなら耐えられないわ……」

そのまま士郎達は奥の扉に進んで行く。

浮遊ブロックが士郎達を案内する様に動き出す。

「わわっ、勝手に動いてますよ、これ。便利ですわねえ」

「……サービス？」

勝手に士郎達を運んでくれる浮遊ブロックにシアは驚き、ユエは首をかしげる。

香織達他女性陣も声には出さないが驚いていた。一方の男性陣は絶対何かあると、疑っていた。

十秒もかからず光る壁の前まで進むと、その手前五メートル程の場所でピタリと動きを止めた。すると、光る壁は、まるで見計らったようなタイミングで発光を薄れさせていき、スつと音も立てずに発光部分の壁だけが手前に抜き取られた。奥には光沢のある白い壁で出来た通路が続いている。

士郎達の乗る浮遊ブロックは、そのまま通路を滑るように移動していく。どうやら、ミレディ・ライセンの住処まで乗せて行つてくれるようだ。そうして進んだ先には、オルクス大迷宮にあったオスカアの住処へと続く扉に刻まれていた七つの文様と同じものが描かれた壁があった。士郎達が近づくと、やはりタイミングよく壁が横にスライドし奥へと誘う。浮遊ブロックは止まることなく壁の向こう側へと進んでいった。くぐり抜けた壁の向こうには……

『やつほー、さつきぶりー！ミレディちゃんだよ！』

ちっこいミレディ・ゴーレムがいた。

「やつぱりね……」

「そもそもミレデイがいなくなったら、誰がここの試練を担当するんだよ」

言葉もない女性陣。男性陣は予想がついていたようでウンザリした表情をしている。

『あれえ?あれえ?テンション低いよおく?もつと驚いてもいいんだよおく?あつ、それとも驚きすぎても言葉が出ないとか?だったら、ドッキリ大成功おくだね☆』

ちっこいミレデイ・ゴーレムは、巨体版と異なり人間らしいデザインだ。華奢なボディに乳白色の長いローブを身に纏い、白い仮面を付けている。ニコちゃんマークなところが微妙に腹立たしさを表す。そんなミニ・ミレデイは、語尾にキラツ!と星が瞬かせながら、士郎達の眼前までやってくる。

「さ、さっきのは?」

『さっきの?あくもしかして消えちゃったかと思つた?ないない!』

「で、でも光が登っていったわよ!」

『中々の『演出』だったでしょ?ミレデイたんつてば演技派!』

ミレデイが死んだかに思えたあの行動に、女性陣の怒りか爆発してしまった。

香織は銃を、雫は刀を、優花は槍をそれぞれの武器をミニ・ミレデイに向ける。

『え、えくと。テへ、ペロ☆』

「お前を殺す」

「「……死ね」」

「死んでください」

『ま、待つて！ちよつと待つて！このボディは貧弱なお！これ壊れたら本気でマズイからあ！落ち着いてえ！謝るからあ！』

しばらくの間、ドタバタ、ドカンバキツ、『いやあー』など悲鳴やら破壊音が聞こえていたが、男性陣はミレディの自業自得だと、無視していた。

そしてそのまま士郎を盾にするように後ろへと隠れる。

「士郎さんどいて、そいつ殺せない」

「士郎さん、そいつは今ここで殺りますう」

「まさか異世界に来てそのセリフを聞くことになるなんてね……」

「とりあえず、神代魔法貰おう。ミレディの事は後だ」

士郎達は魔法陣の中に立ち、神代魔法を会得する。士郎達はオスカーの迷宮で、ヴェアベルトはヴァンドルの迷宮で神代魔法を会得していたので、記憶の中を弄られるような感じはなかったが、シアは初めてだったのでビクンツと身体を震わせる。

ものの数分で刻み込みも終わる。

『この中で一番適性があるのは金髪ちゃんかな、次いで緑髪くん、杖の白髪くん、魔人くん、銀髪ちゃんとピンクちゃんは同じくらいで残りの3人は適性なしだね』

「うっさい、僕には生成魔法がある」

拗ねたようにハジメが呟く。

そしてミレディは士郎に何かを投げつける。投げられたそれを士郎はキャッチする。
「おっと……これは?」

『それはミレディちゃんの迷宮の攻略の証だよ』
すると士郎の後ろからゆらゆらと現れる。

「これだけ?」

『え?』

「攻略報酬だよ?」

「……オルクスはもつとくれた」

「これだけなのかな? かな?」

その後ハジメ達はミレディを恐らく……交渉して、様々な鉱石を入手した。ハジメはどんな新しい兵器作ろうかを考えていてワクワクしていた。

「ミレディ、一つ聞きたいことがある」

『? 何かな?』

「オスカーの迷宮は七大迷宮で何番目に行くのが正しいんだ?」

『え、最後だけど？ミレデイたんも驚いたよ。オーちゃんの迷宮をまさか最初に攻略しちゃうなんてね〜』

「そうか……」

『で、やることはもう済んだ？』

「そうね」

『オツケー☆それじゃ、とつとと出ていってね♪』

いつの間にかミレデイの横に垂れて来ていたロープを引っ張った。

すると、スルスルとミレデイがロープに引っ張られて宙に浮くと、突如としてこの部屋に水が流れ込むと同時に部屋の中央に穴が開く。

「まさかこれは!？」

『嫌なものは水に流すに限るね!』

ロープで空中に退避していた気楽な声で言う。

「覚えてなさいミレデイ!」

「次会った時は破壊してやるですう!」

士郎達はトイレに流されるが如くライセン大迷宮から排出されたのだった。水中で人面魚がいた。士郎は一瞬息を全部吐きそうになった。

水流に揉みくちやにされ、出て来た場所はブルックの街のはずれの泉だった。

「酷い目に遭った……」

「溺れるかと思つた……」

水流に揉みくちやにされた士郎達は先程の戦いの疲れもあいまってか、疲労感がどつと襲いかかつてきた。

士郎はこの状況なら色々文句を言いそうなシアが静かなのが不思議に思えたので、様子を伺うとぶかぶかと泉に浮かぶシアの姿が視界に映つた。

「シア!？」

急いで士郎はシアを鎖を使って泉から引つ張り上げる。

地上に引つ張り上げ、仰向けに寝かせる。顔は青白く、目も白目を向いており呼吸と心臓も止まり何か嫌なものでも見たのか、表情が引き攣つていた。

すぐに士郎は急いで心肺蘇生を行う。胸骨圧迫30回と人工呼吸を繰り返し行くと、遂にシアが水を吐き出した。

「……ゲホ……士郎さん?」

「よかつた……目を覚ましたんだね……死んだらどうしようかと……んむう!」

ホツと一息吐こうとした時だった。ボーツとボクの方向を見ていたシアが突然士郎に抱きつき、そのままキスをしました。しかも舌を絡めてだ。

「あむつ、んちゅ、れろ、むちゅ」

引き剥がそうにも身体強化を使っている上に、変容の反動で上手く力が入らない。

この状況で浮かんだ方法が……シアをキスで墮とすことだった。この時士郎もなんでもこんなことしか浮かばなかったのか、当時の士郎の判断力はクソだった。

しばらくする内にシアが堕ちて、士郎が解放されるのだった。

ちなみにその光景を見ていた側はと言うと。香織とユエはハジメを襲い（アーツな展開にはならなかったが）幸利と優花は呆然としていた。

雫はと言うと、少し羨ましそうに見ていた。彼女も迷宮に入ってからしばらくしていなかっただからだ。

「ぶはっ……それじゃあ宿に……ってみんなどうしたの？」

「なんでもないさ……とりあえず、早く宿に泊まろう……疲れてきた……」

「うむ、私も早く寝たい……」

「アタシも……」

さらばブルックよ!こんにちはフューレン!あと依頼!

マサカの宿にて風呂を3時間とり、身体の疲れをとる。その際、宿娘に色々勘違いされたり覗かれたりさらには街で色々騒ぎがあったりしたのだが、それは置いておこう。

ブルックにいる間は、必要な物を買込み、色々イチャついたりして街を出るのだった。

数日後、士郎達はギルドを訪ねる。

「おや?いつぞやの坊や達じゃないか。今日はどんな用事だい?」

「グリューエン大火山の迷宮に行きたくてね。何か情報はないかなって」

「はいはいちよつと待ちな」

おばちゃんが資料を取り出して、パラパラと捲り始める。

「そういえば、この間冒険者登録したよね?とすると今のランクは青だね」

「何?そのランクってのは?」

「冒険者の実力や価値の判断基準のことさね。ルタの価値の高さは色と同じ、覚えときな」

つまり一番高いのは金だと言うことだ。

「……と待たせたね、大火山の情報だよ。これを見てみな」

おばちゃんが資料をカウンターに乗せて見せる。

「グリューエン大火山は大陸を西に進んだ大砂漠の中にある。迷宮に挑戦するならしっかり準備をする必要があるよ。おすすめは途中の『フューレン』って所に寄ることだね。大陸一の商業都市だから、大体の物は何でもそろおうはずさ。今ならフューレンへの護衛の依頼が一件あるね。馬車で移動できるから丁度いいと思うよ。どうするかい？」

「んー……乗り物はあるから移動手段には困ってないけど……」

「なら2つに分かれて、一部は先に向かつて、一部は依頼を受けて向かうでいいかな？」

「そうですねえ他の冒険者さんと情報交換も出来るかもですし」

「そうですね、急ぐ旅でもない訳だし」

という事で、グループ分けした結果、ハジメ、香織、ユエ、ヴェアベルト、メルリアンが先に向かい、土郎、雫、シア、幸利、優花が依頼を受けることとなった。

「それじゃそのまま正門へいっとくれ……あ、ちよつと待ちな」

おばちゃんが土郎達を呼び止め、何かを一筆サラサラと書き始めた。

すると、それに封をした。

「あんだ達には見込みがありそうだからね」

そう言いながらそれを渡してきた。

「これは?」

「手紙だよ。他の町でギルドと揉めた時はそれを見せな。おっと、詮索は無しだよ? イ女には秘密が付き物さね」

「ホント何者なんだか……」

この時、ヴェアベルト以外は同じ事を考えていた。

翌日の朝一、ハジメ達は車で先にフューレンに向かい、士郎達は正門にいる、護衛の主である人物がこちらに歩み寄ってくる。

「私の名前はモットー・ユンケル。この隊商のリーダーをしている。キャサリンさんからは大変優秀な冒険者と聞いている。護衛の方よろしく頼むよ」

「よろしく、期待は裏切らないと思うよ」

そう名乗る初老の男と士郎は握手をする。

「……早速で悪いが、君に相談がある」

モットーはまるで物を見るような目でシアに視線を向ける。

「その兎人族………売るつもりは無いかね?」

その言葉を聞いた瞬間、士郎達のメンバーから非難する視線がモットーに向けられる。しかし慣れているのか何処か吹く風だ。

「シアを売る気は無いかだって……?」

「ええ。珍しい白髪に美しい容姿の兎人族。これほど美しい商品は初めて見るものでして」

『商品』と言った時点で非難の目が一層強くなる。シアは土郎の後ろに隠れるように移動した。

「見れば随分と懐かれている様子。それなりの額を出しますが……いかがかな?」

その言葉にシアは不安そうにしている。

「そうだね……」

土郎はそう言いながらシアの肩に手を回し抱き寄せて、

「何処ぞの神が欲しがっても……絶対にわたさない」

そう言い切った。

シアの顔は真っ赤に染まった。表情はまるで恋する乙女だ。

「……そこまで言われたら仕方ない。一先ず今は引き下がるとしよう」

あつさり引き下がり、自身の馬車へと戻るのだった。

その間、シアの顔がゆるゆるに緩んでいた。

「ではそろそろ出発しますよ。護衛の程よろしくお願いしますよ」

商業都市フューレンに向けて一行は出発するのだった。

やがて陽が沈み、野營の準備をしている。

「今日はどれくらい進んだんだ?」

幸利がモットーに問いかけた。

「大体三分の一という所ですな。順調に行けば、後4日程で着くでしょう」

「結構かかるのね……」

ハジメ作の車なら1日で着く距離だ。

「それで食事はどうするつもりで? 一応食料の販売もしていますが……」

「いや、持って来てるから問題ないよ」

幸利の背負っているリュックの中にある食料を取り出す。

それから料理を作り始めるのだった。

日の出前に出発し、日が沈む前に野營の準備に入る。それを繰り返すこと三回目。土郎達は、フューレンまで三日の位置まで来ていた。道程はあと半分である。ここまでは特に何事もなく順調に進んで来た。土郎達は、隊の後方を預かっているのだが実にはどかなものである。

この日も、特に何もなまま野營の準備となった。冒険者達の食事関係は自腹であ

る。周囲を警戒しながらの食事なので、商隊の人々としては一緒に食べても落ち着かないのだろう。別々に食べるのは暗黙のルールになつてゐるようだ。そして、冒険者達も任務中は酷く簡易な食事で済ませてしまふ。ある程度凝つた食事を準備すると、それだけで荷物がが増えて、いざという時邪魔になるからなのだという。代わりに、町に着いて報酬をもらつたら即行で美味いものを腹一杯食うのがセオリーなのだから。

そんな話をこの二日の食事の時間に士郎達は他の冒険者達から聞いていた。士郎達
が用意した豪華なシチューモドキをふかふかのパンを浸して食べながら。

「カッターうめえ！ ホント、美味いわあく流石シアちゃん！ もう、亜人とか関係ないから俺の嫁にならない？」

「ガツツガツツ、ゴクンツ、ぷはつ、てめえ、何抜け駆けしてやがる！ シアちゃんは俺の嫁！」

「はつ、お前みたいな小汚いブ男が何言つてんだ？ 身の程を弁えろ。ところでシアちゃん、町についたら一緒に食事でもどう？ もちろん、俺のおごりで」

「なら俺は優花ちゃんだ！ 優花ちゃん、今度俺と食事に！」

「乖ちゃんが使つたスプーン……ハアハア」

最初は士郎達だけで作つた料理を食べていたのだが、あまりにも美味しそうだったので、冒険者達が涎を滝のように流していたので、こちらのメンバーが作つた料理をお裾

分けすることになった。

それからこの反応する冒険者連中に士郎と幸利は軽く威圧を放つ。

「お腹の中空っぽになりたい人、手を挙げて?」

「今なら痛みもなく出来るぞ?」

「「調子に乗ってすんませんっしたー」」

見事なハモリとシンクロした土下座で即座に謝罪する冒険者達。彼等のほとんどは、士郎よりも年上でベテランの冒険者なのだが、そのような威厳は皆無だった。2人から受ける威圧が半端なかった。

それから二日。残す道程があと一日に迫った頃、遂にのどかな旅路を壊す無粋な襲撃者が現れた。

最初にそれ気がついたのはシアだ。街道沿いの森の方へウサミミを向けピコピコと動かすと、のほほんとした表情を一気に引き締めて警告を発した。

「敵襲です!数は百以上!森の中から来ます!」

その警告を聞いて、冒険者達の間一気に緊張が走る。現在通っている街道は、森に隣接してはいるが其処まで危険な場所ではない。何せ、大陸一の商業都市へのルートなのだ。道中の安全は、それなりに確保されている。なので、魔物に遭遇する話はよく聞くが、せいぜい二十体前後、多くても四十体くらいが限度のはずなのだ。

「くそつ、百以上だと？最近、襲われた話を聞かなかつたのは勢力を溜め込んでいたからなのか？つたく、街道の異変くらい調査しとけよ！」

護衛隊のリーダーであるガリティマは、そう悪態をつきながら苦い表情をする。

「アレボクがやるのか？」

「な、出来るのか？」

「百体如き相手にならねーよ」

士郎が前に立ち、要らない詠唱を唱える。

「大地に眠る力強き精霊達よ、我が声に耳を傾けたまえ、その姿を龍と化せ、我が腕を指揮棒とし、目の前の障害を噛み砕け、『大地龍』」

突然地面が盛り上がり何が飛び出してくるかと思えば、龍を象った土の塊だった。それは士郎の右腕とリンクしており、腕を振るうとその方向に龍が襲いかかる。口元にいる魔物は吸い込まれ、士郎が手を握ると龍の口が閉じて魔物が噛み砕かれる。

「な、なんだアレ……！」

そして百を超える魔物の集団は士郎の魔法一発で綺麗さっぱり消えてしまったのだった。

「なんだよあの魔法、俺知らないんだが……」

「士郎さんのオリジナルらしいわ」

「詠唱はダイの○冒険を参考にしたよ☆」

士郎のオリジナル魔法『大地龍』。民の叡智と重力魔法の合成だ。

民の叡智で龍を象り、重力魔法で魔物を吸い込みそのまま噛み砕くという、シンプルな効果だ。

「おいおいおいおい、何なのあれ?何なんですか、あれっ!」

「へ、変な生き物が……空に、空に……あつ、夢か」

「へへ、俺、町についたら結婚するんだ」

「動揺してるのは分かったから落ち着け。お前には恋人どころか女友達すらいないだろうが」

「魔法だつて生きてるんだ!変な生き物になつてもおかしくない!だから俺もおかしくない!」

「いや、魔法に生死は関係ないからな?明らかに異常事態だからな?」

とまあ冒険者達が色々おかしくなっていた。

「はあ、まずは礼を言う。あんたのおかげで被害ゼロで切り抜けることが出来た」

「お互い仕事仲間だ。礼は不用だよ」

「で、今のはなんだ?」

「オリジナル魔法だよ、詮索はしないで欲しい」

「ツ……それは、まあ、そうだろうな。切り札のタネを簡単に明かす冒険者などいないしな……」

深い溜息と共に、追及を諦めたガリテイマ。ベテラン冒険者なだけに暗黙のルールには敏感らしい。肩を竦めると、壊れた仲間を正気に戻しにかかるのだった。

商隊の人々の畏怖と尊敬の混じった視線をチラチラと受けながら、一行は歩みを再開した。

士郎が、全ての商隊の人々と冒険者達の度肝を抜いた日以降、特に何事もなく、一行は遂に中立商業都市フューレンに到着した。

「お疲れ様でした……それと一つ忠告しておきたいことが」

「?何?」

「あまり竜という言葉は使わない方がよろしいかと」

「なんでなんだ?」

「聖教会では竜という存在……竜人族は悪く見られているのでね。奴らは人にも魔物にもなれる半端者。それにどの神も信仰していなかったので、教会側としては面白くない存在だったのでしよう」

「なるほどね忠告ありがと」

「竜の尻を蹴飛ばしたくないので、私はその兎人族の交渉は辞めておきます」

それから士郎はハジメ達を探す為に案内人の人にハジメ達の特徴を説明すると、なんとハジメ達はギルド本部にいるとのことだった。

「何やらかしたんだ……あいつら」

「とにかく行きましょう……それで事情を聞けばいいし」

ギルド本部に向かう一行なのだった。

本部に着き、ハジメの所まで通してもらおう。そこにはソファに座るハジメ達がいたのだった。

状況を回路接続の記憶共有で全員に共有する。

ハジメ達が来たのは先程らしい。その時に香織とユエにちよつかいかけて来たブタ貴族と金好きの冒険者を返り討ちにしたらこうなっただらということ。

「なるほどね……なんで威圧だけで済まさなかったんだよ……」

「すまない士郎殿……私が目を離している時に」

「いや、あのブタ貴族も悪いし」

「初めまして、私は冒険者ギルドフューレン支部、支部長イルワ・チャングだ。シロウ君、ユキトシ君、シズク君、シア君、ユウカ君、でいいかな?」

「うん、構わないよ。名前は手紙に?」

「その通りだ。先生からの手紙に書いてあったよ。随分と目をかけられている……というより注目されているようだね。将来有望、ただしトラブル体質なので、出来れば目をかけてやって欲しいという旨の内容だったよ」

「トラブル体質なのは否定出来ないね……」

「トラブル体質……ね。確かにブルックじやあトラブル続きだったな。まあ、それはいい。肝心の身分証明の方はどうなんだ？それで問題ないのか？」

「ああ、先生が問題のある人物ではないと書いているからね。あの人の人を見る目は確かだ。わざわざ手紙を持たせるほどだし、この手紙を以て君達の身分証明とさせてもらうよ」

「あのおキヤサリンさんって何者なのでしょう？」

おばちゃんに懐いていたシアがそう言う。

「ん？本人から聞いてないのかい？彼女は、王都のギルド本部でギルドマスターの秘書長をしていたんだよ。その後、ギルド運営に関する教育係になってね。今、各町に派遣されている支部長の五、六割は先生の教え子なんだ。私もその一人で、彼女には頭が上がらなくてね。その美しさと人柄の良さから、当時は、僕らのマドンナ的存在、あるいは憧れのお姉さんのような存在だった。その後、結婚してブルックの町のギルド支部に転勤したんだよ。子供を育てるにも田舎の方がいいって言ってね。彼女の結婚発表は

青天の霹靂でね。荒れたよ。ギルドどころか、王都が」

「そんなにすごい人だったんだね」

「……キャサリンすごい」

「只者じゃないとは思ってたけど、中枢の人間だったとはね……」

「それで依頼なんだが……」

「断るよ」

「いやハジメ、身分証明は問題ないがブタ貴族の件は許されていないからな?」

「しまった……ホント威圧だけにしとけば良かった……」

「それで支部長殿、依頼内容は?」

最初から受ける気だったヴェアベルトが内容を聞く。

「依頼内容だが、そこに書いてある通り、行方不明者の捜索だ。北の山脈地帯の調査依頼を受けた冒険者一行が予定を過ぎても戻ってこなかったため、冒険者の一人の実家が捜索願を出した、というものだ」

彼の話を要約すると、つまりこういうことだ。

最近、北の山脈地帯で魔物の群れを見たという目撃例が何件か寄せられ、ギルドに調査依頼がなされた。北の山脈地帯は、一つ山を超えるとほとんど未開の地域となっており、大迷宮の魔物程ではないがそれなりに強力な魔物が出没するので高ランクの冒険者

がこれを引き受けた。ただ、この冒険者パーティーに本来のメンバー以外の人物がいささか強引に同行を申し込み、紆余曲折あつて最終的に臨時パーティーを組むことになった。

この飛び入りが、クデタ伯爵家の三男ウィル・クデタという人物らしい。クデタ伯爵は、家出同然に冒険者になると飛び出していった息子の動向を密かに追っていたそうなのだが、今回の調査依頼に出た後、息子に付けていた連絡員も消息が不明となり、これはただ事ではないと慌てて捜索願を出したそうだ。

「報酬は弾ませてもらうよ？ 依頼書の金額はもちろんだが、私からも色をつけよう。ギルドランクの昇格もする。君達の実力なら一気に『黒』にしてもいい」

「いや、金は最低限でいいし、ランクもどうでもいいから……」

「なら、今後、ギルド関連で揉め事が起きたときは私が直接、君達の後ろ盾になるというのはどうかな？ フューレンのギルド支部長の後ろ盾だ、ギルド内でも相当の影響力はあると自負しているよ？ 君達は揉め事とは仲が良さそうだからね。悪くない報酬ではないかな？」

「随分と気前がいいね……」

「……伯爵とは個人的に仲が良くてね。同行パーティーに話を通したのは私なんだ。確かな実力のあるパーティーだから問題無いと思った。同行させてウィルに厳しさを教

えようとしたんだが……それがこんなことになるなんて……」

イルワ支部長は歯を食いしばりながら悔しそうな表情を浮かべる。

許可を出してしまった自分が許せないのだろう。ウィルという男の安否を早く確認したいのだろう。

「……なら条件が二つある。それを了承してくれるなら、受ける」

「……言ってみてくれ」

「一つシア、ユエ、ヴェアベルトのステータスプレートを作り、その情報を非公開にする
こと」

「まあそれならいいだろう……で二つ目は？」

「ギルド関連のコネクションを使って要求に応えること。教会から指名手配された時に
便宜を図ってくれればいいよ」

「な、教会からの指名手配!?つまり、教会と敵対すると言うのか!なんて無謀な……」

「うん、いつか必ずされる」

「わかった……キャサリン先生が認めた人間が言うことだ。何か理由かあるのだろう」
「理解が早くて助かるよ。依頼の方は任せて」

「わかっていると思うが、犯罪に加担する要望は応えられない」

「ボクだって犯罪者になるつもりはないよ。依頼は本人か遺品を持ってくればいいんで

しよ?」

「ああ、形はどうあれ、痕跡を見つけて欲しい。シロウ君、みんな……どうかよろしく頼む」

士郎は立ち上がりイルワと握手をして部屋から出るのだった。

士郎達がいなくなった後、イルワは勢いよく息を吐く。

「ふう……」

「支部長……あのような条件を受けてよかったですか?」

「ウイルの命がかかっている、仕方ないさ」

「自分としても彼らの秘密が気になりますね。ステータスプレートに表示されたくない不都合とは一体……」

「ドット君、知っているかい? ハイリヒ王国の勇者一行は皆、とんでもないステータスらしよ?」

ドットは、イルワの突然の話に細めの目を見開いた。

「!支部長は、彼が召喚された者……『神の使徒』の一人である?しかし、彼はまるで教会と敵対するような口ぶりでしたし、勇者一行は聖教教会が管理しているでしょう?」

「ああ、その通りだよ。でもね……およそ四ヶ月前、その内の6人がオルクス大迷宮で亡

くなつたらしい。魔物と一緒に奈落の底へ落ちたつてね」

「……まさか、その者が生きていたと?四ヶ月前と言えば、勇者一行もまだまだ未熟だったはずでしょう?オルクスの底がどうなっているのかは知りませんが、とても生き残るなんて……」

ドットは信じられないと首を振りながら、イルワの推測を否定する。しかし、イルワはどこか面白そうな表情で再び士郎達が出て行つた扉を見つめた。

「そうだね。でも、もし、そうなら……なぜ、彼等は仲間と合流せず、旅なんてしているのだろうね?彼等は一体、闇の底で何を見て、何を得たのだろうね?」

「何を……ですか……」

「ああ、何であれ、きっとそれは、教会と敵対することも辞さないという決意をさせるに足るものだ。それは取りも直さず、世界と敵対する覚悟があるということだよ」

「世界と……」

「私としては、そんな特異な人間とは是非とも繋がりを持っておきたいね。例えば、彼等が教会や王国から追われる身となつてもね。もしかすると、先生もその辺りを察して、わざわざ手紙なんて持たせたのかもしれないよ」

「支部長……どうか引き際は見誤らないで下さいよ?」

「もちろんだとも」

スケールの大きな話に、目眩を起こしそうになりながら、それでもイルワの秘書長として忠告は忘れないドット。しかし、イルワは、何かを深く考え込みドットの忠告にも、半ば上の空で返すのだった。

魔物襲撃と。パ。パ!?

ウルでの再会

現在ボク達はウルの町を向けてシユタイプと車で爆走している。

最初は車だけで行こうとしたのだが、シアがバイクで風を感じたいと言ったのでバイクを出して走ることにしたのだ。

「はう〜気持ちいいですう〜」

風の心地よさにシアはウトウトしている。かくいうボクもシユタイプに乗って走るのは好きだ。

ハジメが運転する車が地面を整地するので変にバウンドすることなく進む。

『このペースで行けば後1日だね。このままノンストップで行くよ』

『そうだな……なるべく早く着いた方がいい』

『みんな積極的……』

「ま、生きてる方が良いに越したことはないよ」

『うむ、生きてる方が、恩も大きくなるであろうし、これから先あのギルド本部長の力があるとはいえ、国や教会……面倒事が増える。一々構っている暇はない』

『……なるほど』

イルワという後ろ盾もどこまで働くかどうかはわからない。とりあえずその後ろ盾が強くなるよう動くだけだ。

『それに楽しみな事はあるし』

『そうね、なんとたつて彼処には……』

「『『『米がある！』』』』」

「からね」

「米？なんでそこまで土郎さん達が楽しみなんですか？」

「そりゃあボク達の故郷の主食だからね」

『なるほど……ハジメ達の故郷の味……私も食べたい』

「味も期待しても良さそうだし」

『うん、湖畔の町なら私達の故郷と同じ味の可能性が大きいし』

それから一度野宿をして、ウルの町に向かうのだった。

三人称 side

「ふう……皆さん今日もお疲れ様です！このまま晩御飯にしましょう！」

「『『『はい！』』』』」

ウル の町では畑山愛子、相川昇達愛ちゃん護衛隊が農地改革のために仕事を終えた直後だった。この世界に来てから、ハイスペックな身体能力を得た彼女達は農作業をし、自身の発言力を少しずつ高めていた。士郎が過去に貴重な能力である事を活かして欲しいと言ったことをやっているのだ。

「早くご飯食いてえ……」

「カレーがあつた時はすげえ嬉しかったな」

「見た目シチューなんだよね……ホワイトカレーとかあつたっけ？」

「天井だな俺は……清水の方が美味いがこのも美味い」

「チャーハン擬き一択。これはやめられないよ」

「それでも……」

「……あの2人の料理が食いてえ／食べたいたい……」

と、幸利や優花と交流のある5人。相川昇達は畑山愛子の護衛としてウル の町に来ていた。

護衛というよりも、畑山愛子に着いて来た理由は、教会から派遣されて来た神殿騎士から守るためだった。

教会側の狙いとしては神殿騎士に愛子を落とさせる目論見だったのだが、逆に落ちてしまうという事態になったのだ。

どこの馬の骨に畑山を渡すものかと5人は愛子に着いて行き、時折牽制していた。『水妖精の宿』という場所に一行は滞在していた。

そこでは米料理を食べることができ、日本育ちの転生組はたいそう喜んだのだった。美味しい料理で一時の幸せを噛み締めている愛子達のもとへ、六十代くらいの口ひげが見事な男性がにこやかに近寄ってきた。

「皆様、本日のお食事はいかがですか？何かございましたら、どうぞ、遠慮なくお申し付けください」

「あ、オーナーさん」

愛子達に話しかけたのは、この水妖精の宿のオーナーであるフォス・セルオである。スつと伸びた背筋に、穏やかに細められた瞳、白髪交じりの髪をオールバックにしている。宿の落ち着いた雰囲気がよく似合う男性だ。

「いえ、今日もとてもおいしいですよ。毎日、癒されています」

愛子が代表してニッコリ笑いながら答えると、フォスも嬉しそうに「それはようございしました」と微笑んだ。しかし、次の瞬間には、その表情を申し訳なさそうに曇らせた。何時も穏やかに微笑んでいるフォスには似つかわしくない表情だ。何事かと、食事の手を止めて皆がフォスに注目した。

「実は、大変申し訳ないのですが……香辛料を使った料理は今日限りとなります」

「えっ!?それって、もうこのニルシツシル（異世界版カレー）食べれないってことですか？」

現在、カレーを食べている、菅原妙子が驚いた声を上げる。

材料の入荷が滞り、一部メニューが今日限りとなってしまったからだ。

「はい、申し訳ございません。何分、材料が切れまして。何時もならこの様な事が無い様に在庫を確保しているのですが、ここ一ヶ月ほど北山脈が不穏と言う事で採取に行く者が激減しております。つい先日、調査に来た高ランク冒険者の一行が行方不明となりまして、ますます採取に行く者がいなくなりました。当店にも次にいつ入荷するか分かりかねる状況なのです」

「あの、不穏って言うのは具体的には？」

「何でも魔物の群れを見たとか。北山脈は山を越えなければ比較的安全な場所です。山を一つ越えるごとに強力な魔物がいる様ですが、わざわざ山を越えて迄こちらには来ません。ですが、何人かの者がいるはずのない山向こうの魔物の群れを見たのだとか」

「それは、心配ですね…」

愛子が眉をしかめる。他の皆も若干沈んだ様子で互いに顔を見合わせた。フォスは、「食事中にする話ではありませんでしたね」と申し訳なさそうな表情をすると、場の雰囲気を取り返すように明るい口調で話を続けた。

「しかし、その異変ももしかするともう直ぐ収まるかもしれませんよ」
「どういうことですか？」

「実は、今日のちょうど日の入り位に新規のお客様が宿泊にいらしたのですが、何でも先の冒険者方の搜索のため北山脈へ行かれるらしいのです。フューレンのギルド支部長の指名依頼らしく、相当な実力者のようですね。もしかしたら、異変の原因も突き止めてくれるかもしれません」

愛子達はピンと来ないようだが、食事を共にしていたデビッド達護衛の騎士は一樣に「ほう」と感心半分興味半分の声を上げた。フューレンの支部長と言えばギルド全体でも最上級クラスの幹部職員である。その支部長に指名依頼されるというのは、相当どころではない実力者のはずだ。同じ戦闘に通じる者としては好奇心をそそられるのである。騎士達の頭には、有名な『金』クラスの冒険者がリストアップされていた。

愛子達が、デビッド達騎士のざわめきに不思議そうな顔をしていると、二階へ通じる階段の方から声が聞こえ始めた。男性の音が4つ、女性が5つだ。

「おや、噂をすれば。彼等ですよ。騎士様、彼等は明朝にはここを出るそうなので、もしお話になるのでしたら、今のうちがよろしいかと」

「そうか、わかった。しかし、随分と若い声だ。『金』に、こんな若い者がいたか？」

デビッド達騎士は、脳内でリストアップした有名な金クラスに、今聞こえているよう

な若い声の持ち主がいないので、若干、困惑したように顔を見合わせた。

そうこうしているうちに金ランクとされる一行の話声が聞こえてくる。

「いやーこんなに米があるなんてね『香織』もご飯好きだったよね」

「うん！久しぶりにお米食べ放題だね『ハジメくん』」

『士郎さん』と『雫さん』達の故郷の味どんなものか楽しみですう」

「……実際とは違うとは思うけど予行練習に打って付け」

「今度米の研ぎ方教えるわ」

「ここを立つ際に買い込んでおきたいな……」

「ここ以外じゃ作られて居ないらしいからね……」

『幸利殿』、『優花殿』……買い込むといっても限度はあるぞ？」

その会話の内容に、そして少女達の声が呼ぶ名前に、愛子の心臓が一瞬にして飛び跳ねる。彼女達は今何といった？少年達を何と呼んだ？一行の声は、『あの少年達』の声に似てはいないか？愛子の脳内を一瞬で疑問が埋め尽くし、金縛りにあつたように硬直しながら、カーテンを視線だけで貫こうとでも言うように凝視する。

他の生徒達も同じだった。彼らの脳裏に、およそ四ヶ月前に奈落の底へと消えていった、とあるグループが浮かび上がる。クラスメイト達に『異世界での死』というものを強く認識させたグループ。

尋常でない様子の愛子と生徒達に、フオスや騎士達が訝しげな視線と共に声をかけるが、誰一人として反応しない。騎士達が、一体何事だと顔を見合わせていると、愛子がポツリとその名を零した。

「……南雲君？」

無意識に出した自分の声で、有り得ない事態に硬直していた体が自由を取り戻す。愛子は、椅子を蹴倒しながら立ち上がり、転びそうになりながらカーテンを引きちぎる勢いで開け放った。

存外に大きく響いたカーテンの引かれる音に、ギョツとして思わず立ち止まる一行。

「南雲君!? 土郎君!? 清水君!? 白崎さん!? 八重樫さん!? 園部さん!」

「「「「先生?」」」」

ウルの町に着いた土郎達は宿を取った後、夕食の時間まで時間を潰し、漸く楽しみにしていた米料理を頂けるといふ事で一行は嬉々として食堂へと向かう。

「いやーこんなに米があるなんてね香織もご飯好きだったよね」

「うん! 久しぶりにお米食べ放題だねハジメくん」

「土郎さんと雫さん達の故郷の味どんなものか楽しみですよ」

「……実際とは違うとは思うけど予行練習に打って付け」

「今度米の研ぎ方教えるわ」

「ここを立つ際に買い込んでおきたいな……」

「ここ以外じゃ作られて居ないらしいからね……」

「幸利殿、優花殿……買い込むといつても限度はあるぞ？」

と、ワイワイしながら席に向かう。するとカーテンの奥から近づいてくる気配がするので、土郎は視線を移す。そこから現れたのは……

「南雲君!? 土郎君!? 清水君!? 白崎さん!? 八重樫さん!? 園部さん!」

社会科担当の畑山愛子先生だったのだ。

「[[[[[[先生?]]]]]]」

「皆さん……生きていたんですね……」

「まあ、色々と変わっちゃいましたけれども、ボク達は無事、生きてます」

「よかった。本当によかった……」

「でも先生がここにいるのは驚きました」

「実は……」

簡単に説明すると、農地改革をしていたという。それで今では豊穰の女神とまで崇められているとか。

同じ金星の女あかいあぐま神と同じ名前の教皇とはえらい違いだ。

「それで士郎君達は何故ここに？」

「フューレンで受けた依頼の道中で、休みに来た所です。ここに米もあると聞いたので楽しみにしてみました」

するとどこからかグウと誰かのお腹の音が鳴る。士郎が後ろを振り向くと、顔を赤くしている雫が、少し恥ずかしそうにそっぽ向いていた。

「詳しい話はご飯の後でいいですか？」

「そうですね……それでしたら私達と同じ席で食べませんか？かなり広いので天野君達も座れるかと」

愛子先生達の席に向かう。

「優花つち!?!」

「清水!?!」

「妙子に奈々?」

「相川に仁村に玉井?」

幸利と優花が地球にいた頃、仲良かった人の名前をぼつりと溢す。

「久しぶりね」

「うん……2人とも生きててよかった……」

「優花たち達が落ちた時、生きた心地がしなかったよ……」

「俺達もだ……あの時真っ先に逃げちまったのに、清水達は冷静に立ち回っていて……」

「そのまま俺達だけ生き残って、戦いから逃げて……」

「結局はここにいて逃げてるようなもんだ……」

相川達5人は悔しそうに拳を握っていた。

「別に戦いから逃げてもなんの問題もないと思うけどな」

「……え？」

「そうね。むしろ戦い続けてる方がすごいわよ」

「目の前で死人が出て戦いに行ける強さなんて簡単に身につくものじゃないしな」

と、その後も色々話してから注文したメニューが運ばれ、土郎達も食事を始める。

「うーむ、ボクらの世界のとは違うけど美味しい」

「まあ、わりかし似てると思うけどな」

異世界の米の味を楽しんでいる。ニルシツシルはカレーみたいな味で美味しい。ホワイトカレーみたいだ。

「それでみなさん生きていたのはよかったですね、何故戻って来なかったのですか？」

「やる事が見つかっていたからです。それにその内戻る予定も作るうとは思ってんですが、色々忙しくて……」

「その見た目は？」

「奈落の底から這い上がる過程で」

「彼処は地獄だった……」

「そうだったんですか……」

少し落ち込んだ表情になる愛子先生。自身は生徒を守る立場にいるはずなのに戦闘能力を持っておらず、安全な所でしか能力を發揮出来ないことが悔しいのだろう。

「天野君達の目的は？」

「それは話せない」

「そうですか……」

「おい、お前。愛子が聞いているのだぞ。何故話さん？」

「別に強制じゃないでしょ？というか神殿騎士達は何でここに居るの？教会に居るものだと思ってたよ」

ハジメがなぜ神殿騎士がここに居るのか聞く。

正直士郎も気になっていた。神殿騎士は教会の犬らしく、そこ守る番犬のように門番してると思っていたのだから。

「ふん、聞いて驚け。我等は愛子をお守りするために教会から派遣されたのだ！」

と、なんかポーズを取っていた。

「食事中なのによくそんなこと出来るね……行儀作法がなっていないんじゃない？」

「行儀作法がなっていない？その言葉そのまま返してやる。薄汚い亜人を人間と同じテーブルに着かせるなど、お前の方が礼儀がなっていないな。せめてその醜い耳を切り落としたらどうだ？少しは人間らしくなるだろう」

侮蔑をたつぷりと含んだ眼で睨まれたシアはビクツと体を震わせた。ブルツクの町では、宿屋での第一印象や、キャサリンと親しくしていたこと、土郎達の存在もあって、むしろ友好的な人達が多かったし、フューレンでも蔑む目は多かったが、奴隷と認識されていたからか直接的な言葉を浴びせかけられる事はなかった。

旅に出てから初めて、亜人族に対する直接的な差別的言葉の暴力を受けたのである。有象無象の事など気にしないと割り切ったはずだったが、少し外の世界に慣れてきていたところへの不意打ちだったので、思いの他ダメージがあつた。シュンと顔を俯かせるシア。

よく見れば、デビッドだけでなく、チェイス達他の騎士達も同じような目でシアを見ている。彼等がいくら愛子達と親しくなろうと、神殿騎士と近衛騎士である。聖教教会や国の中枢に近い人間であり、それは取りも直さず、亜人族に対する差別意識が強いということでもある。何せ、差別的価値観の発信源は、その聖教教会と国なのだから。デビッド達が愛子と関わるようになって、それなりに柔軟な思考が出来るようになったと

いっても、ほんの数ヶ月程度で変わる程、根の浅い価値観ではないのである。

ブチッ！

と、何かが切れる音が響いた気がした。

「今なんて言った？」

「……んなー！」

士郎はシアの侮辱発言に怒りを覚えた。

いくら教会の人間だからと言って仕方ないと思っている士郎だが、大切な人をここまでするほど悪く言われればキレない訳がなかった。

「お前達が教会の犬だという事は知ってる……だがな……シアを侮辱されて黙ってられるほどボクはバカじゃないんでね……」

最後に全て食べ終えた士郎が立ち上がり、デビッドに思いつきり威圧と殺気をぶつける。あまりの圧力にデビッドが耐えられる訳もなく気絶した。

このまま寝泊まりしている部屋に戻ろうとする。

「それじゃあボク達はこの辺で……ああ一つ言い忘れてた」

くるりと首だけ愛子達に向ける。

「他の騎士も同じ事言うならそこで倒れている男と同じにするから」

そう言つて部屋に戻つて行くのであつた。

部屋前の廊下でシアはわかりやすく落ち込んでいた。ウサミミは垂れ下がり、顔も暗い。

「シア、これが外での普通だよ。一々気にしてたらキリがない……」

「特にあの騎士は教会の教えを直に受けている。我々魔族も亜人族を神に見放された種族なのに緑の地で生活している、憎むべき存在と教えられている……」

「はい、そうですね……わかつてはいるのですけど……やっぱり、人間の方には、この耳は気持ち悪いのでしょうね」

そう言うシアの頭を一度撫でて、垂れ下がっているウサミミをもふもふし始める。

「ボクはそう思わないよ。むしろ好きだし可愛い。ね、雫?」

「ひやわ!? 士郎さん!」

「ええ、初めて出会つた時からそう思つてたわ」

「えへへ〜士郎さん雫さん嬉しいですよ〜」

落ち込んだ表情から一転、笑顔に戻る。

やはりシアは笑っている方がいい。そう思いながら2人はシアの頭とウサミミを撫

でもふもふするのだった。

北の山脈

その日の夜、愛子は先程の事を思い出していた。

前から敵対した相手に容赦のなかった土郎がさらに容赦のかけらもない変化、それを容認している皆。あまりの変わりように彼女は戸惑いを隠せなかった。しかし土郎がウサミミ少女のために騎士へ怒った事に対しては、やはり身内への優しさは失われていないようでホツとしていた。

「先生、百面相してどうしたんですか？」

突然声が聞こえ、声の方を見るとそこにはモノクルをした少年、南雲ハジメが窓からこちらを覗いていた。

「な、南雲くん!?!ど、どうしてここに、というかどうやって!?!」

「僕は錬成師です。壁に足場を作って登るくらい容易いことです」

「それで何故ここに?」

「土郎から伝言……というか、僕達からの話かな?」

ハジメは一呼吸置き続ける。

「もし僕らのことが知りたいなら神殿騎士のいない所で詳しく話す……確かに伝えた

よ。そろそろあの騎士も来そうだから帰ります」

そう言つてハジメは飛び降りて部屋に戻つて行つた。それと同時に勢いよく扉を開く音に驚く。入つて来たのはデビッドだった。

「貴様！ さつきの！」

どうやらハジメに気づいて入つたのだが、既にハジメは部屋に戻つてしまつた。

愛子は先の話のことを考えていた。

翌日

士郎達は依頼をこなす為朝早くにウルを立つつもりで町の門まで歩いていた。

「士郎さんこんな朝早くから搜索するんですか？」

「時間をかければ生存率は下がるからね……生きてる方が返してもらえる恩は大きい」

「ハジメくんあそこ……誰かいる」

そう香織が指刺したところには、なんと愛子達転生組が待ち構えていた。

「待つてましたよ皆さん！」

「先生……一応聞きますけどなんでここに？」

「皆さんは仕事でここに来たんですよね？ それなら人数は多い方がいいはずですよ。それ

に騎士方がいない場所で話をするとともに言っていたので、騎士方が目を覚ます前に来させていたいただきました。移動中に話を聞けば皆さんの時間もとりません。なので同行させてください」

「本当、先生の行動力はすごいな……」

幸利が後ろで感心していた。

「どうするの？これから向かう先は先生達じやきついわよ……」

雫が耳打ちする。

彼女の言う通り、冒険者達が帰ってこない異常事態。そんな所に愛子達を連れて行くのは流石に気が引ける。だが幸利が言った通り彼女の行動力は半端ではない。

「うーむ……しようがない……連れて行くこう」

「ええ!?!」

「ボクが騎士達のいない所で話すって言ってたからね……」

ということでは先生達を車に乗せて、走れる所まで走ることにした。流石に全員は乗せられないので、何人かは荷台に乗ってもらった。

シア達トータス出身者の紹介も済ませ、走り出すのだった。ヴェアベルトのことは他言無用として正体を話した。当然驚かれたのだが、訳を説明すると、納得したようだ。

余談だが、車を出した時に男子陣が興奮しそれに火がついたのか、ハジメが色々説明

していたので出発に時間がかかった。

「それで皆さんの目的とは……」

「大迷宮を全部攻略すること。そして地球に帰ることは出来る」

「そ、そんなんですか!?!」

「ただ一つ問題があつて。この世界の神、エヒトを倒さないと帰れなさそうなんです」

「え……?」

「まあ先生が驚くのも無理もないわね……」

解放者達の話を先生にする。

「そ、そんなことがこの世界で……」

「このことも他言無用でお願いします」

「も、もちろんです!」

すると後ろに座つていた香織が何か思い出したのか、愛子に質問する。

「先生、私達がオルクス迷宮に行った時、ハジメくんに向けて撃たれた魔法、誰が撃つたんですか?」

少し圧を込めて香織が愛子に聞いた。

「檜山君です……」

「ありがとうございます……」

「檜山の同行には気をつけてください先生」

「ああ、恵里は今どうなんですか？」

「恵里さんですか？彼女が土郎君達を探す為に迷宮に潜っています……」

「無事、なのかな……」

「心配されるのも無理ないですよ。お2人は付き合っているのですしガン！」

土郎は勢いよくハンドルの頭を打ちつけた。

さらに魔力コントロールが変になり蛇行運転になり揺れが激しくなっていた。

「土郎！落ち着け！」

「深呼吸して！深呼吸！」

少しして落ち着きを取り戻した土郎は、愛子に再び質問する。

「何処でそれを……」

「偶々聞いてしまいました……すみません」

「いや、先生は悪くないです……」

それからしばらくして車を止める。これ以上は車で進めないで、ここからは徒歩で探索することにした。

「なあ清水、どんな仕事なんだ？」

「遭難者の搜索だ」

「は!? こんな広い所どうやって……」

玉井が困惑したように驚く。流石にここら一帯から人を探すのは流石に困難だと思っただろう。

「ハジメ、あれの準備して」

「了解」

そう言って宝物庫から取り出したのは鳥の形をした、自律人形だった。

重力制御式無人偵察機『オルニス』

ミレディの使っていたゴーレムを参考に作ったもの。ゴーレムの映像はハジメのモノクルに送られるのだ。

「車の次はドローンかよ……」

「銃作った時もそうだけど、錬成師スゲエな……」

「その内LB〇も作ろうかな……」

しばらくハジメがオルニスを使って搜索していると、何か見つけたようだ。

「ん? これは……盾? 他にも色々と落ちてる……それに鞆……血の痕もまだ新しい!」

「行こうハジメくん!」

全員でその場所へ向かう。

そこには、戦闘に悲惨さを物語るように、焼け焦げた剣や盾、鞆、ペンダントなどが転がっていた。

それらを遺品として回収しつつ、辺りの様子を伺う。

「ハジメ、これ……」

ユエが足跡を発見した。

「この足跡……」

「うん、魔物だね。見た所身長が2〜3mほどの2足歩行って所だろうけど……こんな破壊の仕方出来るか？」

ハジメの視線の先には川の支流が新しく作られたと思えるほどに深く抉り飛ばされた大地の後が残っていた。

「まるでレーザーで抉り飛ばしたかのような後だな……」

「はあはあ、きゅ、休憩ですか……けほつ、はあはあ」

「ぜえーぜえー大丈夫ですか……愛ちゃん先生ぜえーぜえー」

「うえつぷ、もう休んでいいのか？ はあはあ、いいよな？ 休むぞ？」

「……ひゅうーひゅうー」

「ゲホゲホ、南雲達は化け物か……」

原因を探そうとしたのだが、愛子達の息が切れて、着いていくのがギリギリのよう

だった。

「ハジメ、先生達お願い、ボク達は気配感知使って探してくる」

「うん、わかった」

先生達はハジメ、香織、ユエの3人に任せて、土郎達は奥に進んで行く。

気配感知に反応があり、感知した場所へ向かうと気配がするのは滝壺の奥だった。

「うーん、とりあえずほいっと」

土郎は滝の流れを変える。洞窟らしき場所へ踏み込んだ。洞窟は入って直ぐに上方へ曲がっており、そこを抜けるとそれなりの広さがある空洞が出来ていた。天井からは水と光が降り注いでおり、落ちた水は下方の水溜りに流れ込んでいる。溢れないことから、きっと奥へと続いているのだろう。

その空間の一番奥に横倒しになっている男を発見した。傍に寄って確認すると、二十歳くらいの青年とわかった。端正で育ちが良さそうな顔立ちだが、今は青ざめて死人のような顔色をしている。だが、大きな怪我はないし、靴の中には未だ少量の食料も残っている。単純に眠っているだけのようだ。顔色が悪いのは、彼がここに一人でいることと関係があるのだろうか。

「おい、起きろ、おい」

幸利が青年の身体を揺するのだが、中々目を覚まさない。なので強行手段に出た。

「ちよつ幸利！」

バチコンツ！

「ぐわっ！」

デコピンで起こされた青年は悲鳴を上げ、あまりの痛さに額を抑える。

「あんたがウイル・クデタか？」

「いつつ、えつ、君達は一体、どうしてここに……」

「いいから答えろ、あんたがウイル・クデタか？」

「えつと、うわつ、はい！そうです！私がウイル・クデタです！はい！」

「そうか、俺は清水幸利だ。フューレンのギルド長の依頼でお前を捜しに来た」

「イルワさんが!?そうですか。あの人……また借りができてしまったようだ……あの、あなたも有難うございます。イルワさんから依頼を受けるなんてよほどの凄腕なのですわね」

尊敬を含んだ眼差しと共に礼を言うウイル。先程、有り得ない威力のデコピンを受けたことは気にしていないらしい。もしかすると、案外大物なのかもしれない。いつぞやのブタとは大違いである。

そして先生達も追いついてきていた。

何があつたのかをウイルから聞いた。

要約するところだ。

ウイル達は五日前、士郎達と同じ山道に入り五合目の少し上辺りで、突然、十体のブルタールと遭遇したらしい。流石に、その数のブルタールと遭遇戦は勘弁だと、ウイル達は撤退に移つたらしいのだが、襲い来るブルタールを捌いているうちに数がどんどん増えていき、気がつけば六合目の例の川にいた。そこで、ブルタールの群れに囲まれ、包囲網を脱出するために、盾役と軽戦士の二人が犠牲になつたのだという。それから、追いつてられながら大きな川に出たところで、前方に絶望が現れた。

漆黒の竜だつたらしい、その黒竜は、ウイル達が川沿いに出てくるや否や、特大のプレスを吐き、その攻撃でウイルは吹き飛ばされ川に転落、流されながら見た限りでは、そのプレスで一人が跡形もなく消え去り、残り二人も後門のブルタール、前門の竜に挟撃されていたという。

ウイルは、流されるまま滝壺に落ち、偶然見つけた洞窟に進み空洞に身を隠していたらしい。

ウイルは、話している内に、感情が高ぶつたようですり泣きを始めた。無理を言つて同行したのに、冒険者のノウハウを嫌な顔一つせず教えてくれた面倒見のいい先輩冒険者達、そんな彼等の安否を確認することもせず、恐怖に震えてただ助けが来るのを待つことしか出来なかつた情けない自分、救助が来たことで仲間が死んだのに安堵してい

る最低な自分、様々な思いが駆け巡り涙となつて溢れ出す。

「わ、わだじはさいでいだ。うう、みんなじんでしまったのに、何のやぐにもただない、ひつく、わたじだけ生き残つて……それを、ぐす……よろこんでる……わたじはっ!」

洞窟の中にウイルの慟哭が木霊する。誰も何も言えなかつた。顔をぐしやぐしやにして、自分を責めるウイルに、どう声をかければいいのか見当がつかなかつた。生徒達は悲痛そうな表情でウイルを見つめ、愛子はウイルの背中を優しくさする。ユエは何時もの無表情、シアは困つたような表情だ。

が、ウイルが言葉に詰まつた瞬間、意外な人物が動いた。ヴェアベルトだ。ヴェアベルトはツカツカとウイルに歩み寄ると、肩に手を置きウイルの目を見て口を開く。

「生きていることの何が悪いのだ。生きてさえいれば、出来ることは沢山ある。今喜ぶことは人として正しいのだ」

「だ、だが……私は……」

「もし死んだ者が気になるのなら、生き続けるのだ。死んだ者の事を忘れるな……その者達の分まで生きろ。いつか生きていてよかつたと思える度に、自分の身を守ってくれた者へ感謝するのだ」

「……生き続けて、感謝する」

涙を流しながらも、ヴェアベルトの言葉を呆然と繰り返すウイル。彼もまた戦争で友

を仲間を失った。そんな彼だからこそ、声をかけずにはいられなかったのだ。「ヴェアベルトさん……」

一行が下山しようとした時、何処からか何かの低い唸り声が聞こえて来た。

洞窟の外には、漆黒の鱗を全身に覆い、金色の瞳を持ち、翼をはためかせて空中に浮かぶ姿があつた。

竜滅杖!

竜の体長は七メートル程。漆黒の鱗に全身を覆われ、長い前足には五本の鋭い爪がある。背中からは大きな翼が生えており、薄らと輝いて見えることから魔力で纏われているようだ。

空中で翼をはためかせる度に、翼の大きさからは考えられない程の風が渦巻く。だが、何より印象的なのは、夜闇に浮かぶ月の如き黄金の瞳だろう。爬虫類らしく縦に割れた瞳孔は、剣呑に細められていながら、なお美しさを感じさせる光を放っている、その黄金の瞳が、空中より士郎達を見下ろしていた。

黒竜が口を大きく開け、エネルギーを溜める。

「不味い! ブレスか!」

士郎が真つ先に動き、右手を突き出す。

「熾^{ロイ}天覆^{アス}う七^イつの円環^ス!」

薄桃色の7枚の盾が突き出した右手の前に現れ、ブレスを防ぐ。しかしかなりの威力で2枚ほど割れる。

「んな!? アイアスが割れた!? ならこれでどうだ!」

士郎は熾天覆う七つの円環に金剛を込め、防御力を上げる。それでも膨大な熱量が襲いかかる。オルクスの最下層にいた赤いヒュドラの炎もびつくりの威力だ。

「『禍天』」

「グウルアアア!?」

ユエと幸利の重力魔法が黒竜を地面に押しさえつける。

「でえやああああ!」

シアが叫びながら星砕きを振り下ろす。誰もが命中したと思ったその攻撃は黒竜の頭を外し、地面を叩きつける。

「士郎さんが付与してくれた重力魔法ハンマーすごいですう!」

「外したら意味ない!」

シアがあまりの威力に感心するが、当ててないことにハジメがツツコミを入れる。

「あの状態から避けたのかよ……」

「……ん、並の力じゃ出来ない」

「グルアアア!!」

黒竜が再び吠え、火炎弾を魔法使い組に放つ、ユエが自身と幸利を右に落とす、幸利が火炎弾を左にそらす。代わりに黒竜にかかる重力魔法が解けてしまう。

「あつぐう!」

そのまま横に回り、その長い尾でシアを叩きつける。星砕きを盾にしつつ後ろに飛んでダメージは抑えたものの、勢いよく森の方に飛ばされてしまう。

「シアー！」

士郎が地面から鎖を生成して、シアの足を捕まえ、勢いを殺すためにそのままグルグル回る。

「大丈夫？」

「あひえ〜……」

どうやら酔ってしまったようだ。それだけ威力がやばいことがわかる。

「せやあああー！」

「食らいなさいー！」

雫が刀で斬りかかり、優花が纏雷を使いレールガンを黒竜に向けて放つも、硬い鱗に阻まれ大したダメージを入れることが出来なかった。

ハジメと香織も射撃するも弾かれてしまう。

「そらあー！」

士郎がソスタンボイで斬りかかる。

「グルアアア!?!」

効いたのか、黒竜は悲鳴じみた声を上げる。

振り返りながら尾で士郎を吹き飛ばす。とても速く、反応が遅れ士郎は無防備な状態で飛んでいく。

ウィル目掛けて火炎ブレスは吐き出す。

その近くには愛子達もいた。生徒達はそれぞれ詠唱して迎撃しようとする。

「メル！氷結ブレスだ！」

メルリアンがヴェアベルトの指示通り氷結ブレスを吐き出す。

「『氷塊』！」

さらにヴェアベルトの氷塊が氷結ブレスを後押しするも、火炎ブレスの威力に押し負け、炎が襲いかかる。

メルリアンが咄嗟に巨大化して彼らを庇う。擬竜の鱗には属性ダメージを軽減する効果があり、なんとかやり過ごす。

「済まないメル、助かった」

『ヴェアコソダイシヨウブ？』

「問題ない、隙ができ次第アレをやるぞ」

『ワカツタ』

雫とシアが黒竜に攻撃して気を引こうとするものの、黒竜はウィルばかり狙う。

「こんなに無視されるとか初めてだよ……」

「これ明らかにウイルくん狙って……うんウイルくんしか眼中にないみたい」

「どうにかして弱点を見つけないと……士郎の剣には竜特效があるけど……」

すると幸利は何かをふと思いついたのか、全員に念話で伝える。

『みんな、弱点なら心当たりがある』

『本当なの幸利?』

『ああ、俺が奴の後ろに回れるように立ち回ってくれ。だが一度、俺に意識を向けさせてからだ』

そう言った幸利はブラッククロッドで黒竜を乱打する。

「オラオラオラオラア!!」

黒竜がその爪で引き裂こうとするが、それを幸利は棒高跳びの要領で避けて、杖の先端で乱れ突きを放つ。

『グオオオオツ!!』

黒竜の口に魔力が溜まり、黒い炎が放たれる。

「『絶禍』!」

重力魔法に炎は飲み込まれていく。

ブレスを吐き切ったその顔面にクロッドを叩き込む。

あまりの痛撃に黒竜は飛翔して距離を取ろうとするが、

「逃さねえよ！」

重力魔法を乗せた杖で顔面をもう一度ぶん殴る。そして翼を闇魔法で貫く。

『そろそろ交代頼めるか！』

『OK！任せて！』

そう言つて幸利は気配遮断を発動する。

ハジメ達が、黒竜の気を引く為に交代で打撃戦で応戦し、幸利が杖に魔力を籠める時間稼ぐ。

「色々状況は把握したー！」

士郎がそう言いながら飛び出し、鎖を地面から生成し、黒竜を拘束する。

鎖に重力魔法を付与し、拘束力を高めている。さらにユエの重力魔法も乗せられる。身動きの取れなくなった黒竜の背後には膨大な魔力を籠めた杖を持つ幸利が槍投げのように投げる。

ブラックロッド
この時幸利は尻を狙った、黒竜は必死に避けようと身じろぎしていた。結果、投げた杖は綺麗にその穴へと吸い込まれていき、突き刺さってしまった。

『アツーーーーーなのじゃああアツーーーーー!!』

黒竜は悲鳴をあげたのだった。

現れたのはドMの駄竜でした

『アツーーーーーなのじゃあああーーーーー!!!』

くわつと目を見開いた黒竜が悲痛な絶叫を上げて目を覚ました。

幸利としては尻の何処かに当たればいいと思って投げたのだ。しかし自分の投げた杖が尻の穴に刺さったことは想定外だった。

認めたくないのか、顔に手を当てて俯き「うわくやつちまつたく」と嘆いていた。

『お尻があゝ妾のお尻があゝ』

黒竜の悲しげで、切なげで、それでいて何処か興奮したような声音に全員が「一体何事!」と度肝を抜かれ、黒竜を凝視したまま硬直する。

『ぬ、抜いてもおゝお尻のそれ抜いてもおゝ』

北の山脈地帯の中腹、薙ぎ倒された木々と荒れ果てた川原に、何とも情けない声が響いていた。声質的には女性のようだ。直接声を出しているわけではなく、広域版の念話の様に響いている。竜の声帯と口内では人間の言葉など話せないから、空気の振動以外の方法で伝達しているのは間違いない。

「……喋る魔物なんて初めて見た」

と驚くユエの隣でシアはライセンス大迷宮で排出される時に出会った人面魚を思い出していた。

士郎は黒竜の存在が信じられなかった。ユエ、幸利の重力魔法下でシアの攻撃を避けたこと、ハジメ達の攻撃が効かなかったこと、ヴェアベルトとメルリアンの氷属性攻撃を上回ったこと、そんな存在の魔物がいるのならもつと危険視され、討伐しようとした話が少なくとも本になっているであろう。ヴェアベルトも同じ結論に至り、ある存在が浮かび上がった。

「まさか、貴女は《竜人族》なのですか……」

敬意を込めた声でヴェアベルトが確認する。

『む？いかにも。妾は誇り高き竜人族の一人じゃ。偉いんじやぞ？凄いんじやぞ？だからの、いい加減お尻のそれ抜いて欲しいんじやが……そろそろ魔力が切れそうなのじゃ。この状態で元に戻ったら……大変なことになるのじゃ……妾のお尻が』

「とりあえずそれ抜くか……力緩めてくれ」

そう言つて、幸利は杖に重力魔法をかけて引つ張る。しかしピツタリハマっているのか中々抜けない。なので幸利は身体強化をして勢いよく引つ張る。

『はああん！ゆ、ゆつくり頼むのじゃ。まだ慣れておらつあふうん。やつ、激しいのじゃ！こんな、ああんっ！きちやうう、何かきちやうのじゃ〜！』

ズボツ!!

『あひいいー!!す、すごいのじゃ……優しくっってお願ひしたのに、容赦のかけらもなかったのじゃ……こんなの初めて……』

訳のわからないことを呟く黒竜は、直後、その体を黒色の魔力で繭のように包み完全に体を覆うと、その大きさをスルスルと小さくしていく。そして、ちょうど人が一人入るくらいのお尻の大きになると、一気に魔力が霧散した。

黒き魔力が晴れたその場には、両足を揃えて崩れ落ち、片手で体を支えながら、もう片手でお尻を押さえて、うつとりと頬を染める黒髪金眼の美女がいた。腰まである長く艶やかなストレートの黒髪が薄らと紅く染まった頬に張り付き、ハアハアと荒い息を吐いて恍惚の表情を浮かべている。

「ハアハア、うむう、助かったのじゃ……まだお尻に違和感があるが……それより全身あちこち痛いじゃ……ハアハア……痛みというものがここまで甘美なものとは……」

一息ついて黒竜は自己紹介を始める。

「面倒をかけた、本当に、申し訳ない。妾の名はティオ・クラルス。最後の竜人族クラルス族の一人じゃ」

「聞きたい色々ある。まずなんでここに？竜人族は滅んでなかったのは喜ばしいが隠れ住んでいるのではないのか？」

「数ヶ月前に膨大な魔力反応があったのじゃ。その正体を知るために妾が行くことになったのじゃ。世界に悪影響が無いか確認するためにな」

「数ヶ月前と言うと……」

「ちょうど私たちが召喚された時だね」

「じゃあなんで暴れていたのさ？」

「それは操られてしまっていたからじゃ。ちょうど竜化した時に眠ってしまい、そのまま……」

「竜人族の悪癖が出てしまったのだな……基本尻でも叩かれない限り起きぬのだから」

「うむ、恐ろしい男じゃった。闇系統の魔法に関しては天才と言っていいレベルじゃろうな。そんな男に丸一日かけて間断なく魔法を行使されたのじゃ。いくら妾と言えど、流石に耐えられんかった……」

洗脳され、出された命令が『この辺りに来た人間を1人残らず殺せ』、というらしい。タイミング悪くウィル達に来てしまった。

そして幸利のブラックロッドが尻穴にぶっ刺さって目が覚めたという。

「……ふざけるな」

事情説明を終えたテイオに、そんな激情を必死に押し殺したような震える声が発せられた。皆が、その人物に目を向ける。拳を握り締め、怒りを宿した瞳で黒竜を睨んでい

るのはウイルだった。

「……操られていたから……ゲイルさんを、ナバルさんを、レントさんを、ワスリーさんをクルトさんを！殺したのは仕方ないとも言うつもりかっ！」

どうやら、状況的に余裕が出来たせいか冒険者達を殺されたことへの怒りが湧き上がったらしい。激昂してテイオへ怒声を上げる。

対する彼女は何も喋らない。ただ、静かな瞳でウイルの言葉の全てを受け止めるよう真つ直ぐ見つめている。その態度がまた気に食わないのか、

「大体、今の話だつて、本当かどうかなんてわからないだろう！大方、死にたくなくて適当にでつち上げたに決まってる！」

「……今話したのは真実じや。竜人族の誇りにかけて嘘偽りではない」

なお、言い募ろうとするウイル。それに口を挟んだのはユエとヴェアベルトだった。

「……きつと嘘じゃない」

「つ、一体何の根拠があつてそんな事を……」

「竜人族は高潔で清廉。その彼女は皆よりずつと昔を生きた。竜人族の伝説も、より身近なものなのだろう。彼女は《己の誇りにかけて》と言った。なら、それは嘘ではない。それに……嘘つきの目がどういふものか私達はよく知っている」

ユエは、ほんの少し黒竜から目を逸らして遠くを見る目をした。きつと、三百年前の

出来事を思い出しているのだろう。孤高の王女として祭り上げられた彼女の周りは、結果の出た今から思えば、嘘が溢れていたのだろう。もつとも身近な者達ですら彼女の言う《嘘つき》だったのだから。その事実から目を逸らし続けた結果が《裏切り》だった。それ故に、《人生の勉強》というには些か痛すぎる経験を経た今では、彼女の目は《嘘つき》に敏感だ。真実は叔父が彼女を逃がすための策略だったが。ヴェアベルトは戦場に長く立ち、命乞いをするために嘘をつくものを沢山見ていた。彼の目標故に見抜く必要があった。結果としては多くが嘘つきだったのだが。

「ふむ、この時代にも竜人族のあり方を知るものが未だいたとは……いや、昔と言ったかの？」

竜人族という存在のあり方を未だ語り継ぐものでもいるのかと、若干嬉しそうな声音の黒竜。

「……ん。私は、吸血鬼族の生き残り。三百年前は、よく王族のあり方の見本に竜人族の話を聞かされた」

「何と、吸血鬼族の……しかも三百年とは……なるほど死んだと聞いていたが、主がかつての吸血姫か。確か名は……」

「今の名前はユエ。大切な人に貰った大切な名前」

アレーティアとしての人生は終わり。ユエとしての人生を歩んでいるのだ。そう名

乗るのが当然だ。

「それでそっちの男は？」

「ヴェアベルト・ハリス。竜人族の歴史を探る者だ」

「……それでも、殺した事に変わりないじゃないですか……どうしようもなかったってわかってはいますけど……それでもっ！ゲイルさんは、この仕事が終わったらプロポーズするんだって……彼らの無念はどうすれば……」

頭ではテイオの言葉が嘘でないとは分かっている。しかし、だからと言って責めずにはいられない。心が納得しない。幸利は内心、「また、見事なフラグを立てたもんだな」と変に感心した。ハジメがふとここに来るまでに拾ったロケットペンダントを思い出す。

「ねえ、ウイル、これゲイルって人の持ち物？」

そう言って、取り出したロケットペンダントをウイルに手渡した。ウイルはそれを受け取ると、マジマジと見つめ嬉しそうに相好を崩す。

「これ、僕のロケットじゃないですか！失くしたと思ってたのに、拾ってくれてたんですね。ありがとうございます！」

「あれ？君の？」

「はい、ママの写真が入っているので間違いありません！」

「マ、マママ？」

まさかの反応に顔が引き攣る一行。

士郎が「ごほん！」と咳払いをして、話題を変える。

「それで彼女の処遇？ なんだけど」

「……殺すべきです！ もしまた操られたりしたらどうするんですか!？」

ウィルは殺すことを主張する。

理由を述べてはいるが、本音は復讐だろう。

「また操られるようなことはないだろうな。《闇術師》の俺が言うんだから間違いない」

と幸利が言う。

「とりあえず保留でいいだろ。しょーじき処罰を与えるのと考えるのが怠い。さっきの

杖シユートで過剰に魔力を込めすぎて、大半の魔力がないんだよ」

すると士郎がピクンと反応する。大地感知に何か引つかかったようだ。すると少し

驚いた表情になる。

「ねえ……すごい魔物が迫って来てる。3千、4千つてレベルじゃないね。桁が一つ追

加されるくらいだね」

士郎の報告に全員が目を見開く。しかも、どうやら既に進軍を開始しているようだ。

方角は間違いなくウルスの町がある方向。このまま行けば、半日もしない内に山を下り、

一日あれば町に到達するだろう。

「は、早く町に知らせないと！避難させて、王都から救援を呼んで……それから、それから……」

事態の深刻さに、愛子が混乱しながらも必死にすべきことを言葉に出して整理しようとする。いくら何でも数万の魔物の群れが相手では、チートスペックとは言えトラウマ抱えた生徒達と戦闘経験がほとんどない愛子、駆け出し冒険者のウィルに、魔力が枯渇したテイオでは相手どころか障害物にもならない。なので、愛子の言う通り、一刻も早く町に危急を知らせて、王都から救援が来るまで逃げ延びるのが最善だ。

と、皆が動揺している中、ふとウィルが呟くように尋ねた。

「あの、士郎殿達なら何とか出来るのでは……」

その言葉で、全員が一斉に士郎達迷宮攻略組の方を見る。その瞳は、もしかしたらという期待の色に染まっていた。

「まあボクはやるけど、みんなは？」

「士郎さん、因みに理由は？」

「米」

「「「「やっぱりか！」「」」」」

ハジメ達の一斉ツツコミに緊迫した空気が抜ける。愛子達もあまりの理由にズツクケル。

「ひとまず下山しよう……対策はそれからだ」

一行は一気に下山しウルの町に戻るのがだった。

ウル襲撃戦 前編

士郎 side

ボク達はこれから山脈からウルの町に下山する。その時魔力枯渇でテイオが動けないので幸利が引つ張って連れて行った。その際「ご主人様」なんて言ったのは気のせいだと思いたい。

車の天井にくくりつけて町に向けて走り出す。運転手は幸利だ。魔力はボクが補っている為、走る事は問題ない。

ウルの前に来ると、そこには完全武装した騎士の男達が猛然と馬を走らせている姿を発見した。愛子先生が「デビッドさーん」と手を振ると、騎士達は気持ち悪いほどいい笑顔でこちらに向かって来ていた。

突然、何を思ったか幸利は更に魔力を込めて走り出す。

「ちよ、幸利!?!」

「前にデビッドさん達がいいますよ!?!」

そして加速した車はそのまま騎士達を置き去りにして行ったのだった。

「清水くん!?!」

「すいません先生。騎士が気持ち悪かったんで……」

「それにそのままウルで話した方がいいし……」

まあ正直ボク気持ち悪いと思ったから、魔力の供給を止めなかったし。

このまま騎士達を無視して町に向かい走る。

それから魔物の大群がこの町を襲撃することを愛子先生とウィルが住民に伝える。

「ですので、皆さんは避難してください！」

「町はどうなるんですか！」

「それは彼らが対処してくれます！ですので安心して避難を！」

愛子先生が住民に避難誘導している間にハジメは壁を作る。ボクはボクで必要な物を投影する。あと色々衣類が破れていたので新しいのを投影する。今回はドラクエ8の主人公の服をモチーフにした。

準備を終え、これからどう殲滅するか話し合おうとした時、愛子先生がこちらにやって来た

「皆さん、住民の避難誘導終わりました」

「お疲れ様です先生」

「それで一つお話があります。貴方達が奈落の底で何を見て、どう思ったのか、それを深く共感することは出来ません……その価値観を変えろとも言いません。ですが、ここに

来る前に持っていた人を思いやる心を、これからどんなことがあっても無くさないでいて欲しいのです」

「わかってます、先生」

「それならいいです。すみません無力で……本来ならば私が生徒を守らなければならぬ立場なのに」

「畑山殿、あまり気に病むのも士郎殿に悪い。今は何も言わず送り出してやってくれ」
「ヴェアベルトさん……」

それから魔物の大群殲滅の話し合いを終えて宿に泊まり、眠る。その夢がいつもと違っていた。

空は青く澄み渡り、地面は草で一面中覆われていて、どこまで歩いていても途切れることがない。武器を出そうと投影するのだが、魔力が霧散してしまう。ライセン大迷宮よりも強力なようだ。そして何かボクに襲いかかるところで目が覚めた。

「………夢か………変な夢だな………」

隣にはシアと雫がスヤスヤと眠っている。起こすのも忍びないので、ゆつくりとベットから出て、そのまま外に出る。

「ふっ………ほっ………」

身体を捻ったり伸ばしたりして準備運動を始める。

「おはよう士郎殿。随分と早いな……」

「おはよう。ヴェアベルトも早いんだね」

「早起きして朝の鍛錬が日課なのでね……ここしばらくは移動や迷宮攻略があつて、なかなか出来なかつたが」

「あはは、たしかに最近慌ただしかつたからね」

しばらく身体を動かして、身体を起こす。そろそろ2人も起きているだろうから部屋に戻る。

「おはようございませう……士郎さん……」

中に入ると、ベットの上で目をぼしよぼしよさせたシアがいた。

「雫は？」

「雫さんなら、顔を洗いに行きましたあ……ふわあ……」

「そっか」

ボクは紅茶を淹れるのだった。

そろそろ魔物の大群がこちらに到着する頃だ。

「さて、そろそろだ」

「武器の用意も済んだ」

「てか士郎、服変えたんだな」

「うん、オニニューだよ」

「似合ってますう士郎さん」

「皆さん！」

息を切らしながら愛子先生が、こつちにやってくる。騎士の男も一緒にだ。昨日には話すことも話されたと思うのだが、まだ何かあるのだろうか。

「準備や体調は大丈夫ですか？」

「大丈夫、体調はすこぶる良いし物も揃ってる」

振り返らずに返答する。

「おい、貴様。愛子が……自分の恩師が声をかけているというのに何だその態度は。本来なら、貴様の持つアーティファクト類の事や、大群を撃退する方法についても詳細を聞かねばならんところを見逃してやっているのは、愛子が頼み込んできたからだぞ？ 少しは……」

「デビッドさん。少し静かにしててもらえますか？」

「うっ……承知した……」

先生に怒られてシユンとする騎士、忠犬のようだ。

「頑張つて下さい。私は応援や祈ることしか出来ませんので」

「無論生きて帰つて来ますよ先生。だから私達の心配はいりません」

そうしてボク等は外壁の上に立ち、魔物の様子を見る。あと一時間かそこらでここに着くだろう。

するとテイオがこちらに来る。

「ふむ、よいかな。妾もご主……ゴホンツ！お主達に話が……というより頼みがあるのじゃが、聞いてもらえるかの？」

「？……………テイオか」

「幸利あんた……………」

「お、お主、まさか妾の存在を忘れておつたんじゃ……はあはあ、こういうのもあるのじゃな……………」

なんか顔を赤らめているんだけど。しかもビクついてる上に息もはあはあしてるし。

「んっ、んっ！えつとじやな、お主達は、この戦いが終わつたらウィル坊を送り届けて、また旅に出るのじやろ？」

「まあそうだな」

「うむ、頼みというのはそれでな……妾も同行させてほし「断る」」

幸利がなんか汚物を見るような目でテイオを見てる……どんだけ嫌なんだ……

「……ハアハア、よ、予想通りの即答、流石、ご主……コホンツ！もちろん、タダでは言わん！ これよりお主を『ご主人様』と呼び、妾の全てを捧げよう！身も心も全てじゃ！どうぞ？」

「帰れ！むしろ里に帰りやがれえ！」

いや、ホントどんだけ嫌なんだよ！

両手を広げ、恍惚の表情で幸利の奴隷宣言をするテイオに、幸利はドブを見るような眼差しを向け、ぼつさりと切り捨てた。

ボクと出会ったばかりの頃に目が戻ってる……

それにまたゾクゾクしたように体を震わせるテイオ。頬が薔薇色に染まっている。どこからどう見ても変態だった。周囲の者達も、ドン引きしている。特に、竜人族に強い憧れと敬意を持っていたユエとヴェアベルトの表情は、全ての感情が抜け落ちたような能面顔になっている。もう心を失った者になっている。

隠れ村は絆周回ありがとうございました。

「そんな……酷いのじゃ……妾をこんな体にしたのはご主人様じゃろうに……責任とって欲しいのじゃ！」

全員の視線が「えっ!？」というように幸利を見る。流石に、とんでもない濡れ衣を着せられそうなのに放置する訳にもいかず、きつちり向き直ると青筋を浮かべながらテイ

才を睨む幸利。どういふことかと視線で問う。

「あう、またそんな汚物を見るような目で……ハアハア……ごくりっ……その、ほら、妾強いじやろ？」

幸利の視線にまた体を震わせながら、幸利の奴隷宣言という突飛な発想にたどり着いた思考過程を説明し始めるティオ。

「里でも、妾は一、二を争うくらいでな、特に耐久力は群を抜いておった。じゃから、他者に組み伏せられることも、痛みらしい痛みを感じることも、今の今までなかったのじゃ」

近くにティオが竜人族と知らない護衛騎士達がいるので、その辺りを省略してポツポツと語るティオ。

「それがじゃ、ご主人様達と戦って、初めてポツコポツコにされた挙句、組み伏せられ、痛みと敗北を一度に味わったのじゃ。そう、あの体の芯まで響く拳！嫌らしいところばかり責める衝撃！体中が痛みで満たされて……ハアハア」

一人盛り上がるティオだったが、彼女を竜人族と知らない騎士達は、一樣に犯罪者でも見るかのような視線を幸利に向けている。客観的に聞けば、完全に婦女暴行である。「こんな可憐なご婦人に暴行を働いたのか！」とざわつく騎士達。あからさまに糾弾しないのは、被害者たるティオの様子に悲痛さが無いからだろう。むしろ、嬉しそうな

で正義感の強い騎士達もどうしたものかと困惑している。

「つーか、ダメージが欲しいなら士郎にしろよ！士郎の方が強いし、お前に特攻持ちだしよー！」

「ボクに押し付けろのやめて！責任持って幸利が管理してよ！」

「俺だって嫌だわ！」

「はうつ！容赦ない罵倒……」

また興奮するティオ。誰か何とかして……

「……つまり幸利が新しい扉を開いちゃったと」

「その通りじゃ！妾の体はもう、ご主人様なしではダメなのじゃ！」

「……きめえ」

ユエが、嫌なものを見たときと表情を歪ませながら、既に尊敬の欠片もない声音で要約すると、ティオが同意の声を張り上げる。思わず、幸利は本音を漏らす。完全にドン引きしている。

「それにのう……」

ティオが、突然、今までの変態じみた様子とは異なり、両手をムツチリした自分のお尻に当てて恥じらうようにモジモジし始める。

「……妾の初めても奪われてしもうたし」

その言葉に、全員の顔がバツと音を立てて幸利に向けられた。幸利は頬を引き攣らせながら「そんな事していねえよ」と首を振る。

「妾、自分より強い男しか伴侶として認めないと決めておったのじゃ……じゃが、里にはそんな相手おらんしの……敗北して、組み伏せられて……初めてじゃったのに……いきなりお尻でなんて……しかもあんなに激しく……もうお嫁に行けないのじゃ……じゃからご主人様よ。責任とつて欲しいのじゃ」

お尻を抑えながら潤んだ瞳を幸利に向けるティオ。騎士達が、「こいつやっぱり唯の犯罪者だ！」という目を向けつつも、「いきなり尻を襲った」という話に戦慄の表情を浮かべる。愛子先生達は事の真相を知っているにもかかわらず、責めるような目で幸利を睨んでいた。こちらの女性陣ですら、「あれはちよつと」という表情で視線を逸らしている。迫り来る大群を前に、幸利は四面楚歌の状況に追い込まれた。その状況に幸利は頭を押さえていた。

「お前のやる事はどうなんだよ……」

確かに竜人族の調査とやらはどうするつもりなのか。

「それはご主人様達の事を調査すれば良いので問題ないのじゃ。ほら、旅中では色々あるじゃろ？イラつとしたときは妾で発散していいんじゃよ？ちよつと強めでもいいんじゃよ？ご主人様にとっていい事づくしじゃろ？」

「八方塞がりの上に変態がいる時点でデメリットじゃねえか……」

「幸利はかがみ込む。もうどうしようもないことに、だんだんと気落ちしていつてい
る。」

「つ……そろそろだね」

ボクは前を向き、大地感知で魔物の数を計る。

「凡そ5万強つてところかな？ 昨日の倍だ」

「1日で増えすぎでしょ……」

「増えた理由に何かあるのかもね」

「複数の魔物の混成。到達まで30分くらい」

ハジメは左目を閉じてオルニスから送られてくる右目の魔眼鏡の映像を見る。空には
プテラノドン擬きがいる、1匹だけ大きめの奴がいる。そいつの上に人影が見えた。
恐らくそこに主犯がいるのだろう。

先生達は増えた数に魔物の種類が多いことに不安を感じた顔をする。

「先生は安全な場所へ」

「わたし達なら問題ないですよ！」

「……ん、ばっちこい」

「久しぶりに大暴れさせてもらおうか！」

「……わかりました。皆さんご無事で！」

そう言つて先生達はここから離れる。残つたのはウイルとティオだけだ。

ウイルは、ティオに何かを語りかけると、こちらに頭を下げて愛子達を追いかけていった。疑問顔を向ける幸利にティオが苦笑いしながら答える。

「今回の出来事を妾が力を尽くして見事乗り切つたのなら、冒険者達の事、少なくともウイル坊は許すという話じゃ……そういうわけで助太刀させてもらうからの。何、魔力なら大分回復しておるし竜化せんでも妾の炎と風は中々のものじゃぞ？」

「わかつた……ならこいつをやる」

そう言つて渡したのは魔晶石の指輪だった。

「ご主人様……戦いの前にプロポーズとは……妾、もちろん、返事は……」

「違うわ！貸してやるからせめて砲台として頑張れつてことだ」

「とうるか誰かとボケが被つてなかつた？」

「これが黒歴史」

2人は何があつたの？

「さてと……」

最初は先生を女神として奉らせようとしたのだが、これから先、エヒトを殺すにあつたって、神のいない世界になるのなら、先生を奉らせる必要はない。

「ユエ、幸利先制。パンチよろしく」

「……ん」

「おう」

『雷龍』

『闇龍』

上空から雷の龍と闇の龍が降り注ぎ、魔物を攻撃する。プテラノドン擬きを撃ち落とすことに成功し、魔族も落ちていっただろう。

『投影・開始』

ボクは弓を取り出して赤原猟犬を何本か投影する。それをつがえる。

「喰らいつけ！ 『赤原フルンディング猟犬』！」

剣を3本放つと縦横無尽に動き、魔物を殲滅する。

隣でシアがオルカンをぶっ放し、ハジメと香織がメツエライで乱れ撃ちされ前方の魔物は全滅した。

「近接組はこのまま突撃！ 魔法組は撃ち漏らしを！」

そう言つてボクは干将・莫耶を投影して魔物に斬りかかった。

三人称 side

士郎達は勢いよく魔物を殲滅していった。

剣撃が銃撃が、拳による衝撃が、魔法の波状攻撃が魔物を蹂躪していく。

魔物の量が目に見えて減っていく。密集した大群のせいで隠れていた北の地平が見え始めた頃、遂にテイオが倒れた。渡された魔晶石の魔力も使い切り、魔力枯渇で動けなくなったのだ。

「むう、妾はここまでのようじゃ……もう、火球一つ出せん……すまぬ」

うつ伏せに倒れながら、顔だけを幸利に向ける。申し訳なさそうに謝罪するテイオの顔色は、青を通り越して白くなっていた。文字通り、死力を尽くす意気込みで魔力を消費したのだろう。

「お疲れさん、後は俺等に任せろ」

「……ご主人様が優しい……罵ってくれるかと思つたのじゃが……いや、でもアメの後にはムチが……期待しても？」

「そのままくたばれよお前……」

ユエの重力魔法が魔物の一団に放たれる。

「うーむもう少し効率よく……なるほど」

士郎は魔物を殲滅しながら観察していた。そこで一つわかったことがあった。

先程の重力魔法を食らった一団はほとんどが怯えているのに対して一匹だけ突撃命

令を出しているのがいた。

『零、シア魔物の違いわかる?』

『ええ、さっきの重力魔法を食らった一団を見ればわかるわ』

『テイオさんみたいな魔物とへっぴり腰の魔物ですね』

『うん、そいつさえ倒せば後は威圧をぶつけてれば逃げる』

『了解』

それからはリーダー格を潰して回り、魔物の集団はほとんどいなくなっていく。すると何やら先程までの魔物とは何か雰囲気の違い魔物がシアに襲いかかってきた。

眼が4つで黒い体毛の狼だった。

振り返りにしてやろうと星砕きを振うのだが回避され、星砕きを地面に押さえつけられてしまった。無論、たかだか魔物の一体くらい、シアの身体強化を施された膂力ならどうということはない。しかし、それでも意表を突かれた事と、一瞬であれ動きを封じられたことに変わりはなかった。

そして、黒い四目の狼には、それで十分だった。完璧なタイミングでシアの後方から同じ魔物が鋭い牙の並ぶ顎門を開いて眼前まで迫っていたからだ。シアは眼を見開き、そして咄嗟に足に集中させた身体強化を解いて、全身に施した。それは、攻撃をくらくらことを覚悟したからだ。

あわや、その鋭い牙がシアを血濡れにさせるかというその瞬間、尖った地面が狼の頭部を貫いたのだ。

『シア大丈夫？』

『はい！』

『気をつけて、迷宮クラスの魔物が混ざってる。君は自分の周り、18匹を確実に仕留めて』

『了解ですう！先程は助かりました！ありがとうございます！』

『うん、やられないですよ？』

士郎の方は4つ目狼を地面から飛び出した杭で不意打ちするように仕留めていく。

ハジメ達も余裕で倒していく、流石に奈落の狼よりは強くなかったようだ。

すると地中から錐揉み回転しながら魔物が飛び出てきた。士郎の大地感知にすら引つかからない、隠密力を持っていた。

その魔物の姿は両手に鋭い爪を持ち、頭部には角が生えていた。

「うおー！」

「……モグラ？」

「ああ〜ド○ユウズみてえだな」

そんな魔物も重力魔法で吸い込まれていき、そのまま潰された。

この魔物が最後だったのか、魔物はいなくなっていた。リーダー格を殺され慌てふためく魔物は士郎達の威圧により一目散に逃げていった。

こうしてウル魔物襲撃は終わった。

「きやあああああ！」

悲鳴がウルの町から聞こえたのだった。

ウル襲撃戦 後編

「ぎやあああああー！」

ウルの町から悲鳴が聞こえた。それも聞き覚えのある人物のだ。

「畑山殿ー！」

真っ先に向かったのは、最年長のヴェアベルトだった。ありえないスピードで走っていった。

そのスピードのまま壁を飛び越え、町の中を見ると魔族の一人が愛子を捕まえ、ナイフを片方の手で掴んでいる首に当てていた。

「この女が殺されたくなければ、この町の食糧を全てもってこい！」

「き、貴様！愛子を離せ！」

「おっと、その騎士、動けばこの女の首を搔つ切つてやるからな？」

「ぐっ……おのれ……」

神殿騎士も愛子の人質に取られてしまい、何も出来ない。

『蒼槍』……はあっ！」

ヴェアベルトは氷の槍を魔族の男に向けて放つ。速度は音速を超え、並の人間では

反応することすら出来ないほどだ。

当然魔族の男は氷の槍を喰らう。辛うじて愛子を突き飛ばしながら避けた為死ぬことはなかったものの肩を貫かれてしまった。

愛子の体格が小さい事も幸いし彼女には掠り傷一つ付かず、魔族の男から遠ざけることが出来た。

「畑山殿！」

ヴェアベルトは突き飛ばされた彼女を受け止める。

「ヴェアベルト……さん……？」

「怪我はないか？」

「はい……捕まっただけなので……何処も切られたりはしませんでした……」

「そうか……それならいい」

愛子は意識を失い、力なくヴェアベルトに倒れ込む。ヴェアベルトは愛子を抱える。

「貴様……おのれ……人間族風情が……我々魔族に傷をつけるだと……」

その発言にヴェアベルトは少し寂しげな表情をする。

「（今の私は人間族に見えるのだったな……）『氷柱雨』」

男の頭上に氷の棘が現れ、一気に降り注ぐ。無数の氷柱に貫かれ男は絶命した。

「ヴェアベルト！何があった!？」

壁の上から土郎が降りてくる。

「畑山殿が人質に取られていてな」

「それで助けてくれたんだ……ありがとう」

「当然のことをしたまでだ。それより遺体処理をせねば。あまり見せていいものではない」

愛子を宿に預けた後、男の死体を町の外れに処理する。

ヴェアベルトはまだ彼女が不安なのか、気絶している愛子の様子を見ている。

「……む？」

愛子を見ていると、彼女とは別の魔力を感じ取った。それも閨属性のものだった。

「念のため前に土郎殿からもらった破戒^ルすべき^ル全ての符^カを使用しておくか……」

彼女の右腕にチクリと刺しておく。魔力が霧散し、彼女はそれと同時に目を覚ます。

「……ここは？……水妖精の宿？」

「目を覚ましてよかった。ゆっくり休んでいるといい」

「ヴェアベルトさん……助けていただきありがとうございます……」

「貴女が無事ならそれでいい。私はここを出る」

そう言ってヴェアベルトは部屋を出ていこうとする。

「あの……待ってください」

愛子は彼を呼び止めたのだった。

愛子 side

私は天野君達が襲撃してくる魔物を倒すのを町の中で待っていました。

凄まじい轟音が壁の外から聞こえ、戦闘の激しさがこの場でもわかります。

そして轟音が鳴り止み魔物が殲滅され尽くしたことがわかりました。

「先生……終わりましたんですか？」

「音も聞こえないようなので終わったのではないのでしょうか……」

町の方々もそう思ったのか、歓喜の声上がる。

かく言う私も終わったと思いい、ふう、と息を一気に吐いたその時だった。何かが私の目の前に落ちてきた。あまりに突然だったので悲鳴をあげてしまった。そして背後から何者かに首を掴まれてった。

「がっ……!!？」

酸素を上手く肺に取り込むことが出来ず、意識か朦朧とする。段々と自分ではないナ

「だ、誰か……助け……！」

遂に顔と上に伸ばした右手だけとなったその時、誰かが私の右手を掴み、液体から引つ張り出してくれた所で目が覚めた。

「……………ここは？……水妖精の宿？」

少し息が荒くなつて、背中がじつとりと脂汗で濡れていた。

「目を覚ましてよかつた。ゆっくり休んでいるといい」

隣にはヴェアベルトさんが座っており、私の様子を伺っていたようだ。

「ヴェアベルトさん……助けていただきありがとうございます……！」

重い身体を必死に動かし、お礼を言う。

「貴女が無事ならそれでいい。私はここを出る」

一つ気になった事があつた。それを聞きたいので、彼を呼び止める。

「あの……待ってください」

「？……やはり何か身体に異常かあつたのか？」

「いえ、なんでもありません。すみません呼び止めてしまつて」

「そうか、では」

ヴェアベルトさんはそのまま部屋を出ました。

「はあ……何故彼は——」

——あんなにも寂しそうな顔で私を見るのでしょうか……」
私の眩きは部屋の中で響くだけでした。

士郎 side

水妖精の宿からヴェアベルトが戻ってくる。

「待たせてしまったか？」

「いや問題ない、このままウィルを連れてフューレンに戻るから荷物取ってきて」
「わかった」

宿に荷物を取りに戻る。しばらくして戻ってきたヴェアベルトを車に乗せて、フューレンに向けて走り出すのだった。

最初は愛子先生が魔族に捕まってしまったので、町の人に何か言われると思ったものの、特に何も言われなかった。

「皆さんこの度は本当にありがとうございます！ 私の命の恩人です」

ボクが「どういたしまして」と返そうとした時だった。

「お〜いウイル坊。胸がつかえて入れぬ。すまんが引つ張つてくれんか？」

「「「で…出たア！」「」」」

「テイオお前いつの間に乗り込んでる!!」

ドドドン！

幸利がテイオの頭に魔力弾を3発打ち込む。

「……………どこまでも妾の好みをわきまえたご主人様よ」

「この変態……………マジでついてくる気なのか……………」

「はあ……………わかった……………なあ、こいつ連れてっていいか？」

「幸利が面倒見るならね」

「結局は俺か……………邪魔はしないでくれよ」

「ご主人様それはつまり……………」

「好きにしろ……………相手するのが疲れる」

「え……………それは嫌なのじゃ……………放置プレイじゃダメなのじゃ……………もつと罵つて……………」

「やっぱり里に帰れよう」

フューレンにて

ウルの町からフューレンにまで車を使い一直線で戻る。その間、幸利の目が死んでいた。こうもテイオの相手をしていると疲れるのか、暗いオーラが溢れ出ている。車も隠す意味もなくなって来たので車のまま乗りつけた。

「車も隠さなくて良くなった訳だし、シアの首輪もお洒落にしないとね」

「ふえ？」

ボクはシアの首輪に触り、無骨な作りから華やかなものに変える。

「わあ………！」

「綺麗ねシア」

「はい！」

嬉しそうな表情を浮かべ、ウサミミをピコピコ動かすシア。そんな彼女の頭を雫が撫でている。

フューレンの街中を歩いていると女性2人を連れているチャラ男がこちらの女性陣をナンパしようと近づいて来た。

「よお、レディ達。よかったら、俺と『何、勝手に触ろうとしてるのかなあ？』ヒイ!!」

チャラ男は、実に気安い感じでボク達男性陣を無視して女性陣に声をかけた。それがただ声をかけるだけなら、威圧の気絶コースで済ませようと思つてたのだが、事もあろうに、チャラ男はシアの頬に手を触れようとした。

見た目はチャライがルックス自体は十分にイケメンの部類だ。それ故に、自分が触れて口説けば、女なら誰でも墮ちるとでも思つたのだろうか？ シアが冷たい視線を向ける。彼女が触れられる前に対処しようとしたのだが、その前にボクがチャラ男の頭を鷲掴みにした。

なんだこいつ、この程度の圧でビビるのか、腰抜けめ。

そのままボクは男を気絶させて、そこから辺にポイした。なんか臭かつたし。そしてウイルをギルド支部長であるイルワの元に送り届ける。

「ウイル！ 無事かい！？ 怪我はないかい！？」

イルワ支部長がウイルに駆け寄る。

「イルワさん……すみません。私が無理を言つたせいで、色々迷惑を……」

「……何を言うんだ……私の方こそ、危険な依頼を紹介してしまった……本当によく無事で……ウイルに何かあつたらグレイルやサリアに合わせる顔がなくなるところだよ……二人も随分心配していた。早く顔を見せて安心させてあげるといい。君の無事は既に連絡してある。数日前からフューレンに来ているんだ」

「父上とママが……わかりました。直ぐに会いに行きます」

ウイルはそう言うのと俺達にもう一度礼を言つて部屋を出て行つた。

それにしても、父親の事を『父上』と呼んでいたのに母親の事を『ママ』と呼んでいたウイルに、やはりマザコンなのかとボクは内心思つていた。

ウイルが出て行つたあと、イルワ支部長がこちらに振り返る。

「シロウ君、みんな今回は本当にありがとう！まさか、本当にウイルを生きて連れ戻してくれるとは思わなかつた。感謝してもしきれないよ」

「まあ、生き残つていたのはウイルの運が良かったからだろ」

「ふふ、そうかな？確かに、それもあるだろうが……何万もの魔物の群れから守りきつてくれたのは事実だろう？女神の守り人？」

「誰が呼び始めたんですかそれ……」

「ウルの人たちだよ。これを知つたのは長距離用アーティファクトのおかげさ。私の部下が君達に付いていたんだよ。といつても、あのとんでもない移動型アーティファクトのせいで常に後手に回つていたようだけど……彼の泣き言なんて初めて聞いたよ。諜報では随一の腕を持つているのだけどね」

そう言つて苦笑いするイルワ。最初から監視員がついていたらしい。支部長の直属でありながら、常に置いていかれたその部下の焦りを思うと、中々同情してしまう。

「それにしても、大変だったね。まさか、北の山脈地帯の異変が大惨事の予兆だったとは……二重の意味で君に依頼して本当によかった。数万の大群を殲滅した力にも興味はあるのだけど……聞かせてくれるかい？ 一体、何があったのか」

「勿論だけど、その前に3人のステータスプレートをお願い」

「テイオ、お前もこの際貰つとくか？」

「うむ、3人が貰うなら妾の分も頼めるかの？」

「ふむ、確かに、プレートを見たほうが信憑性も高まるか……わかった、ドット君」

「はっー」

そう言つて、イルワは、職員を呼んで真新しいステータスプレートを三枚持つてこさせる。

結果、トータス組のステータスは以下の通りだった。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

ユエ 323歳 レベル75

天職：神子

筋力：120

体力：300

耐性：60

技能・未来視「＋自動発動」「＋仮定未来」・魔力操作「＋身体強化」「＋変換効率上昇Ⅱ」「＋集中強化」・重力魔法

ヴエアベルト・ハリス 26歳 男 レベル61

天職 竜騎士

筋力：6988 [＋13818 (融合時)]

体力：6892 [＋13432 (融合時)]

耐性：7530 [＋14710 (融合時)]

敏捷：8452 [＋14402 (融合時)]

魔力：5346 [＋10036 (融合時)]

魔耐：6214 [＋11084 (融合時)]

技能：剣術・格闘術・短刀術・氷属性適正・氷耐性・魔力操作「＋魔力放射」「＋魔力圧縮」「＋遠隔操作」・炎耐性・熱耐性・竜化「＋一部変化」・気配感知・人竜一体「＋融合」「＋技能融合」「＋ステータス融合」・念話・変成魔法・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・重力魔法

流石に、イルワも口をあんどりと開けて言葉も出ない様子だ。無理もない。ユエとテイオは既に滅んだとされる種族固有のスキルである『血力変換』と『竜化』を持つている上に、ステータスが特異に過ぎる。シアは種族の常識を完全に無視している。ヴェアベルトは魔族でありながら、一部分だけではあるがテイオと同じ『竜化』を持っている驚くという方がどうかしている。

「いやはや……なにかあるとは思っていましたが、これほどとは……」

冷や汗を流しながら、何時もの微笑みが引き攣っているイルワに、ボクはお構いなしに事の顛末を語って聞かせた。普通に聞いただけなら、そんな馬鹿なと一笑に付しそうな内容でも、先にステータスプレートで裏付けるような数値や技能を見てしまっているので信じざるを得ない。イルワは、すべての話を聞き終えると、一気に十歳くらい年をとったような疲れた表情でソファアに深く座り直した。

「……道理でキャサリン先生の目に留まるわけだ。シロウ君達が異世界人だということ
は予想していたが……実際は、遙か斜め上をいったね……」

「で、どうするんですか？ 僕達を危険分子として教会に突き出しますか？」

「まさか、冗談がキツイよ。出来るわけないだろう？ 君達を敵に回すようなこと、個人的にもギルド幹部としても有り得ない選択だよ……大体、見くびらないで欲しい。君達は私の恩人なんだ。そのことを私が忘れることは生涯ないよ」

「そっか、それは悪かったよ」

ハジメは、肩を竦めて、試して悪かったと視線で謝意を示した。

「私としては、約束通り可能な限り君達の後ろ盾になろうと思う。ギルド幹部としても、個人としてもね。まあ、あれだけの力を見せたんだ。当分は、上の方も議論が紛糾して君達に下手なことはしないとと思うよ。一応、後ろ盾になりやすいように、君達の冒険者ランクを全員『金』にしておく。普通は、『金』を付けるには色々面倒な手続きがいるのだけど……事後承諾でも何とかなるよ。キャサリン先生と僕の推薦、それに『女神の守り人』という名声があるからね」

イルワの大盤振る舞いにより、他にもフェーレンにいる間はギルド直営の宿のVIPルームを使わせてくれたり、イルワの家紋入り手紙を用意してくれたりした。何でも、今回のお礼もあるが、それ以上に、ボク達とは友好関係を作っておきたいということらしい。ぶっちゃけた話だが、隠しても意味がないだろうと開き直っているようだ。

その後、ウィルの両親からお礼を言われた。彼らの家への招待や金品の支払いを提案されたのだが、ボクらはそれを固辞した。なので困ったことがあればどんなことでも力になると言い残し去っていった。

広いリビングの他に個室が四部屋付いた部屋は、その全てに天蓋付きのベッドが備え付けられており、テラスからは観光区の方を一望できる。

「とりあえず今日は休んで、明日食糧品を買いに行こうか」

ボクは、ソファに横になりながら言う。

「あの、土郎さん」

「どうしたのシア？」

「あの～そのお……明日、土郎さんと雫さんとわたしの3人でお出かけしたいなあって」

「……ここ最近慌しかったし、とりあえずいいよ」

ボクが了承すると、シアの表情が『パアッ』と明るくなった。

「2人きりじゃなくて良いの？」

「はい！雫さんとも行きたいので」

「そう、なら楽しみましょう」

明日はデートになるみたいだ。

何処に行くか、考えておかないと。

投影魔術師と錬成師〇〇になる

翌日、買い出しも兼ねたデートに行く。ハジメ達もデートに向かう予定らしい。服はドラクエ8主人公の物から、自作の物に変えている。

「2人ともどこか行きたいところある？」

「はい！水族館という所に行きたいです！」

「私は服を見たいわ」

「それじゃあ、買い出しが終わったら、服屋行って、水族館へ寄ってみるか」

そう言って、ハジメ達と一度手分けして必要な物を買いに出かける。

「ふんふんふふくん♪いい天気ですう♪」

「シアったらご機嫌ね」

「そうだね……シア転ばないでよ」

「ふふふ、そんなハマしませんよお、皆さんに鍛えられているんですからツ！」

言った側から足を段差に引っかけ、バランスを崩して転びそうになる。

ボクはすかさずシアの腰を抱えて支える。今履いてるスカートの丈が短いので腰に腕を回した。そこら辺の鼻息の荒い男共にラツキースケベはさせない。

雫もスツとシアの近くにきて、男達の視線を遮る。

「しゅ、しゅみません……」

「楽しみなのはわかるから。少し周りの目とかも気にしてよ？」

「は、……」

観光区には、実に様々な娯楽施設が存在する。例えば、劇場や大道芸通り、サーカス、音楽ホール、水族館、闘技場、ゲームスタジオ、展望台、色とりどりの花畑や巨大な花壇迷路、美しい建築物や広場などである。

まずは服屋を見に行く。幸利達が食品を買いに行くので、服屋で服を解析&記憶、それを後は布で縫うだけである。

えっ？アウト？

……読者の皆さん

バレなきや犯罪じゃないんですよお……！

一通り記憶したボク達は布類を買いに行く。流石に布をハジメが錬成するのに素材が必要だ。素材集めするより布を使った方がいい。生成魔法で特性を付与すればそこから辺の鎧より強い防具になる。

「士郎さん、この布すごい綺麗ですう」

「この布と色合いがいいね」

「士郎さんって裁縫とか出来るの？」

「一応、着物とか作ったことはあるし、やろうと思えばコスプレも作れる。今着てるのもオルクスの隠れ家で作った物だし」

「なら、その……ドレス……作ってくれないかしら……もちろん私も手伝うわ……」

「了解。なんならみんなの服作っちゃおうか」

「士郎さんわたしもお手伝いしたいので教えて欲しいです！」

「いいよ、そうだ今度ハジメにミシン作って貰おう」

かなりの布を購入し、店を出る。何に使うのか会計の時に聞かれた。

それから買った物を宝物庫の中に入れるために一度宿屋に戻る。

「結構買ったね〜」

「これではらくは持ちそうだ」

「そうだハジメ、今度ミシンとか作ってくれる？」

「別にいいけど、どうして？」

「布を買ったからさ、錬成で作るのもいいけど余り細かい所は鉋石と違って難しいでしよ〜」

「そういうことか。わかった時間ができ次第作るよ」

「なら士郎、作って欲しい服あるんだが」

「いいよ」

どんな服を作ろうかな？

幸利 side

「唐突な、清水幸利&」

「園部優花の」

「お料理教室」

ドンドンパフパフ〜！

「今回作っていくのは？」

「ウルで手に入れた米を使った料理、作者も好きなチャーハンだ」

「今回使う食材は、予め切って置いたネギ、ベーコン、塩コショウ、卵、幸利の味覚で再現した香味ペースト……というかあんたよく再現できたわね……」

「フツ……オタクの熱意を舐めるなよ？ SAOで閃光様が時間をかけて作ったマヨネーズも俺の味覚ですぐにでも再現してみせるさ」

「なくんかかっこよく言ってるけど、ダサいわよ」

「うるせえ、ちよつとふざけただけだ……気を取り直して、調理を開始しよう。まず、ベーコンを短冊切りにする」

トントントントン……

「切り終わったら、ハジメ特製のフライパンに油を……引きません！テフロン加工みたくなってるから必要ないわ。早速ベーコンを炒めていくわ」

ジュワ………！

「油が出た所で一度ベーコンを皿に移して、溶いである卵をベーコンで出た油で炒める」

ジュワ………！

「卵が固まる前に、米を投下、これで米に卵が少しだけだが混ざる。そこから一気に塩コショウをかけて……へらに香味ペーストをつけて混ぜる！ここからはスピード勝負だ」

ジュワ………！

「皿に移してあるベーコンを再び投下！更にネギも追加よ！」

ジュワ………！

「充分に火が通ったら完成だ」

お昼のチャーハンを食べ終えて、デートを再開する。

「士郎さん！ 雫さん！ メアシユタツト水族館に行きましよう！ わたし一度も生きてる海の魚を見たことが無かったの！」

ガイドブックを片手に、ウサミミを「早く！ 早く！」と言う様にぴよこぴよこ動かすシア。《ハルツィナ樹海》出身なので海の生物というのを見たことがないらしく、メアシユタツトというフューレン観光区でも有名な水族館に見に行きたいらしい。

ちなみに、樹海にも大きな湖や川はあるので淡水魚なら見慣れているらしいのだが、海の生き物とは例えフォルムが同じ魚でも感じるものは違うらしい。

普段見ることの出来ない物を見るのは新鮮なのは同意だ。修学旅行で沖縄に行った時、美ら海水族館の巨大水槽でジンベイザメを見て感動したのはいい思い出。

展示されていたのは、鏡のような鱗を持つ魚や、とんでもなく身体が長い魚、地面一杯にべたりとひっついてるなど、地球にはいない魚がいて面白かった。

シアも見たことのない魚に目をキラキラと輝かせて興奮していた。
突然シアが一つ水槽を二度見し、更に凝視し始めた。

「な、何故彼がここに……」

その水槽にいたのは……シーマ○だった。

「えっと……『リーマン』、固有魔法の『念話』が出来る……」

試しに話しかけてみようかな？

『もしもし………こんにちは、リーマン。ボクは天野士郎、聴こえているのなら反応してくれると嬉しい』

『あん？………お前さん『念話が』使えるのか』

『まあね………なんて呼べばいいかな？』

『俺は俺だ好きに呼んでくれ。んでなんで使えるんだ？』

ボクは彼？に念話ができる訳を説明する。

『………若えのに苦労してんだな。よし、聞きてえことがあるなら言ってみな。おっちゃんに分かることなら教えてやるよ』

同情されてしまった。どうやら、魔物を喰うしかないほど貧乏だとも思われたようだ。今のそれなりにいい服を着ている姿を見て、『頑張ったんだなあ、てやんでえ！泣かせるじゃねえか』とヒレで鼻をすすする仕草をしている。

リーさんと呼び、シロ坊と呼ばれるようになった。

それからしばらく話していると、怪訝な顔をした人が集まり出したので、話を切り上げることにした。最後に何故ここにいるのか聞く。

なんと訳もわからないうちに陸に打ち上げられたのだと。

おそらくミレディの迷宮から追い出された時だ。

『リーさんここから出たい?』

『俺はこいう所に留まるのが好きじゃねえからな……出来ることなら出てえよ。生き物は自然に生まれ自然に還るのが一番だ』

『うーん、流石に水槽破壊は出来ないし……』

『なら、彼をお金で買うしかないわね……』

『そうか……なら待つてるぜシロ坊』

そう言い、ボク達は別の場所に移動した。

一方その頃幸利達は食べ歩きをしていた。

かなり買ったので、座って食べている。

「ご主人様」

「?どうしたテイオ」

「いや何、ご主人様達について来て思ったのじゃが。ヴェアベルトという魔族と共に行動しておるのが、不思議に思えてな」

「そうね……目標は違うけど目的は同じだからついて来てるところよ」

「その目的とは?」

「戦争の終結と全種族の和平らしいな……」

「なるほど……して彼が妾達の一族を尊敬しているのは驚きじゃがな……」

「それは確かに気になるな……今度聞いてみるか」

すると後ろから、話題の人物が――

大量の屋台料理を頬張るヴェアベルトがやって来た。

「何の話をしている？」

「屋台の料理うめーって話」

「うむ、確かにここの料理は美味い……」

（声も相まってワー〇リの風〇さんみてえ）

と幸利はそう考えていた。

ドガシャン!!

「ぐへっ!!」

「ぶぎやあ!!」

すぐ近くの建物の壁が破壊され、そこから二人の男が顔面で地面を削りながら悲鳴を上げて転がり出てきた。更に、同じ建物の窓を割りながら数人の男が同じように悲鳴を上げながらピンボールのように吹き飛ばされてくる。その建物の中からは壮絶な破壊音が響き渡っており、その度に建物が激震し外壁がひび割れ砕け落ちていく。

そして十数人の男が手足を奇怪な方向に曲げたままビクンビクンと痙攣して表通り

に並ぶ頃、遂に、建物自体が度重なるダメージに耐えられなくなったようで、轟音と共に崩壊した。

野次馬が悲鳴を上げながら蜘蛛の子を散らすように距離を取る中、幸利達は吹っ飛ばした本人を見るために、煙を覗き込む。

「やっぱり幸利達か」

「あれ？幸利さん達？どうしてこちらに？」

煙から現れたのはデートに行つたはずの土郎組とハジメ組だった。

「それはこっちのセリフよ……」

「つたく……相変わらずの巻き込まれ体質だな……」

「あはは……私達もこんなデートは想定していなかったよ」

「……ん、成り行きで犯罪組織の壊滅を」

「どうしたらそうなる……」

「とりあえず人手は多い方がいいからね。手伝つてくれるかな？」

魔力で作られた弓を霧散させながら土郎は、地面に転がる男達を通行の邪魔だとも言うように瓦礫の上に放り投げていく。

そして成り行きを説明するのだった。

投影魔術師と錬成師〇〇になる その2

メアシユタツト水族館から出たボク達はおやつにアイスらしき物を食べている。

ひんやりしてて甘くて美味い。バニラのような味だ。

しばらく歩いてみると、大地感知に人の気配が引つかかった。

「む?」

「士郎さん?どうしたんですか?」

「大地感知に人の気配が引つかかった」

「士郎さんも?」

「2人共それ使ってるんですね」

「常時展開してるわ」

「う〜ん?でも、何が気になるんです?人の気配って言っても……」

周りは人だらけなので、何をさも当然のことを。と首傾げるシア。

「いや、引つかかったのは下なんだ」

「下?……って下水道ですか?えっと、なら管理施設の職員とか?」

「だったら、気にしないのよね。何か、気配がやたらと小さい上に弱い……多分、これ子

供よ!?しかも、弱っているわ!」

「ツ!?た、大変じゃないですか!もしかしたら、何処かの穴にでも落ちて流されているのかもしれないよ!2人共、急ぎましよう!」

言い終わると同時に駆け出すシア。

この行動力は彼女の優しさからくる物なのだろう。そう思いながらボクと雫は後を追いかけた。

その気配の進行方向の先に民の叡智を発動させて真下へ行く穴が開き、そこに飛び込む。

「いました!わたしが飛び込んで……」

「いや、それはしなくても大丈夫だよ」

再び民の叡智を発動。救い上げるように手が現れて、流されている女の子を拾う。

「だ……れ……?」

「もう、大丈夫だよ……」

「目覚めたの?」

「気を失ったよ」

「士郎さん、この子って……」

「うん、容姿からして海人族だね……ひとまず綺麗な場所に連れて行こう」

ボク達は一度宿に戻り、女の子の身体を洗うことにした。衣類も汚れていたの、買っていくことにした。

宿に戻るとハジメ達もいた。しかも同じ海人族の女の子を連れて。

「ハジメ達も？」

「なんで同じ状況になってるんだ……」

服はユエに買いに行ってもらい、ボクは消化にいい料理を作る。

「ボクは天野士郎、それで君達の名前は？」

「……ミユウ」

「……リーニャ」

「ミユウちゃんにリーニャちゃんか。2人はなんで下水道に？」

2人の話によると、ある日、海岸線の近くをミユウの母親と泳いでいたらはぐれてしまい、彷徨っているところを人間族の男に捕らえられたらしいということだ。

そして、幾日もの辛い道程を経てフューレンに連れて来られた2人は、薄暗い牢屋のような場所に入れられたのだという。そこには、他にも人間族の幼子たちが多くいたのだとか。そこで幾日か過ごす内、一緒にいた子供達は、毎日数人ずつ連れ出され。戻ってくることはなかったという。少し年齢が上の少年が見世物になって客に値段をつけ

られて売られるのだと言っていたらしい。

「いよいよ、2人の番になったところで、その日たまたま下水施設の整備でもしていたのか、地下水路へと続く穴が開いており、懐かしき水音を聞いた2人は咄嗟にそこへ飛び込んだ。三、四歳の幼女に何か出来るはずがないとタ力をくくっていたのか、枷を付けられていなかったのは幸いだった。汚水への不快感を我慢して懸命に泳いだ2人。幼いとは言え、海人族の子だ、通路をドタドタと走るしかない人間では流れに乗って逃げた2人に追いつくことは出来なかった。しかし疲労により方向感覚がなくなり、再びは別々の方に流されてしまったという。

「客が値段をつける……ね。オークションか。それも人間族の子や海人族の子を出すってんなら裏のオークションなんだろうね」

「ハジメくん……どうする?」

シアと香織はリーニヤとミュウを抱きしめる。その瞳は何とかしたいという光が宿っていた。亜人族は、捕らえて奴隷に落とされるのが常だ。その恐怖や辛さは、シアも家族を奪われていることから分かるのだろう。

「ここは保安署に預けるのがベターだね」

「そっか……」

「そんな……この子や他の子供達を見捨てるんですか……」

香織は納得したのだが、シアは納得がいかないようだ。

「あのね、シア。迷子を見つけたら保安署に送り届けるのは当然のことだよ。ましてや2人は海人族の子だ。必ず手厚く保護してくれる。それどころか、海人族をオークションに掛けようなんて大問題だ。正式に捜査が始まるだろうし、そうすれば他の子達も保護されるだろう。いい？おそらくだが、これは大都市にはつきものの闇なんだ。2人が捕まっていたところだけでなく、公的機関の手が及ばない場所では普通にある事なんだよ。つまり、これはフューレンの問題だ。どっちにしろ、通報は必要でしょ？」

「そ、それは……そうですが……でも、せめてこの子達だけでも私達が連れて行きませんか？どうせ、西の海には行くんですし……」

「その前に砂漠通るんだ。2人には酷だし、迷宮攻略する際に留守番させるの？」

「……うう、はいです……」

ボクとハジメは2人これからのことを話す。

「いいかい、リーニヤ、ミュウ、これから、2人を守ってくれる人達の所へ連れて行く。時間は掛かるだろうが、いつか西の海にも帰れるだろう」

「……お兄ちゃんとお姉ちゃん達は？」

「悪いけど、そこでお別れだね」

「やつー！」

「いや、やつ！じゃなくてな……」

「お兄ちゃんとお姉ちゃん達がいいの！みんなといるの！」

駄々を捏ねる2人。駄々っ子のようにシアと香織の膝の上でジタバタと暴れ始めた。今まで、割りかし大人しい感じの子だと思っていたが、どうやらそれは、こちらの人柄を確認中だったからであり、信頼できる相手と判断したのか中々の駄々っ子ぶりを発揮している。元々は、結構明るい子なのかもしれない。

こちらとしても信頼してくれるのは悪い気はしないのだが、どっちにしる公的機関への通報は必要であるし、途中で大火山という大迷宮の攻略にも行かなければならないので2人を連れて行くつもりはなかった。なので、「やつー!!」と全力で不満を表にして、一向に納得しないミュウへの説得を諦めて、抱きかかえると強制的に保安署に連れて行くことにした。

2人としても、窮地を脱して奇跡的に見つけた信頼出来る相手から離れるのはどうしても嫌だったので、保安署への道中、ハジメの髪やら魔眼鏡やら頬やらを盛大に引っ張り引っかけ必死の抵抗を試みる。隣におめかしして愛想笑いを浮かべるシアと香織がいなければ、ハジメこそ誘拐犯として通報されていたかもしれない。髪はボサボサ、魔眼鏡は奪われたまま、頬に引っっかけ傷を作った。ボクはリーニヤを抱えて歩いた。道中は静かだったのだが保安署に到着すると、凄い力ではがみつき、中々離れない。大人し

かったのはこういうことだったのか。しかし諦めたのかすんなり職員の本所に行った。

ハジメは、目を丸くする職員に事情を説明した。

事情を知った職員は、今後の捜査や送還手続きに本人が必要とのこと、2人を手厚く保護する事を約束しつつ署で預かる旨を申し出た。予想通り、やはり大きな問題らしく、直ぐに本部からも応援が来るそうで、自分達はお役目御免だろうと引き下がろうとした。

のだが……

「お兄ちゃん達はミュウとリーニヤが嫌いなのか？」

「ミュウダメだよ。お兄ちゃん達に迷惑かけちゃ」

「うー……」

ミュウをやつと引き離れたハジメと保安署を出て、そのまま宿に戻る道中、保安署が見えなくなる所まで歩いたその時だった。

ドガアアアアアン！

背後で大爆発が起きた。黒煙が上がっているのが見えた。その場所は――

「土郎さん！彼処……！」

「ああ、保安署だ！」

「急ぐうー！」

急いで保安署のところに戻ると、表通りに署の窓ガラスや扉が吹き飛んで散らばっている光景が目に入った。しかし、建物自体はさほどダメージを受けていないようで、壊の心配はなさそうだった。中に踏み込むと、対応してくれたおっちゃんの子の保安員がうつ伏せに倒れているのを発見する。

「香織！回復魔法！」

「うん！《回天》！」

香織の回復魔法で職員のおっちゃん達は回復していく。

「大丈夫か？」

「あ、ああ……お嬢さんの魔法でなんとか……」

「よかった……何があつたんですか？」

「実は……突然入ってきた黒ずくめの男達が海人族の女の子2人をさらつたあと爆弾を起爆したんだ……」

「取り返しに来たのか……」

「士郎さん！こんな物が！」

シアが一枚の紙を渡してきた。紙にはこう書かれていた。

〈海人族の子供を殺されたくなければ、連れのを連れて〇〇にこい〉

「士郎さん、これって……」

「どうやら向こうさんは欲張りで——傲慢みたいだね……」

ボクはグシヤリとメモ用紙を握りつぶす。

「士郎さん、わたし！」

「皆まで言わなくていいよ……こいつらはオレの敵だ……全員ぶっ飛ばして、リーニャとミュウを奪い返すぞ！」

「んで、行ってもハズレばかりで何度もぶちのめしてる内にアタシ達のところに着いた、と」

「理解が速くて助かる」

「それに優花やティオも誘拐対象だったみたいよ」

「それなら変態だけ蹴り入れてやったのに」

「ご主人様!? N〇Rが御所m「黙れ変態！」アヒイン！」

「……そうと決まれば私達も手伝おう、胸糞の悪いことはすぐ収めるのが一番だ」

「ありがとう」

現在判明してる居場所を伝え、ボク、雫、シアとハジメ、香織、ユエ。幸利、優花、ティオ。ヴェアベルトとメルリアンと別れて探すことにした。

士郎グループがフリートホーフ本拠地前まで歩いていると、扉の前に数人の男が立っていた。

「なんだあいつら」

「緑髪のがき、空色のポニテ女に白髪の兎人族……連絡にあった連中か」

「確かに女は上玉だな」

「男の方は？」

「構わん殺せ」

パチン！

ドガガガガン！

士郎の幻想の爆針ファンタズム・ニードルが男達2人残して全員爆散した。

「は？」

残った2人も雫が首を刎ね、シアが星砕きで叩き潰す。

「見張りならまず警笛鳴らせよ。馬鹿なの？ って死体に言っても無駄か」

そう言いながら中に入っていく。

奥に進み、人が集まっている所まで進む、すると一人が壁越しにも聴こえるほどの怒声を上げていた。

「ふざんけてんじゃねえぞ！ アア!? てめえ、もう一度言ってみやがれ！」

「ひい！で、ですから、潰されたアジトは既に五十軒を超えました。襲ってきてるのは3人組が3組と1人です！」

「じゃあ、何か？そんな10人のクソ共にフリートホーフがいいように殺られてるってのか？ああ？」

「そ、そうなりまッへぶ!？」

室内で、怒鳴り声が止んだかと思うと、ドガツ！と何かがぶつかる音がして一瞬静かになる。どうやら報告していた男が、怒鳴っていた男に殴り倒されでもしたようだ。

「てめえら、何としてでも、そのクソ共を生きて俺の前に連れて来い。生きてさえいれば状態は問わねえ。このままじゃあ、フリートホーフのメンツは丸潰れだ。そいつらに生きたまま地獄を見せて、見せしめにする必要がある。連れてきたヤツには、報酬に五百万ルタを即金で出してやる！一人につき、だ！全ての構成員に伝えろ！」

男の号令と共に、室内が慌ただしくなる。男の指示通り、組織の構成員全員に伝令するため部屋から出ていこうというのだろう耳をそばだてていたシアは背中から戦鎧を取り出し大きく振りかぶった。

そして、室内の人間がドアノブに手をかけた瞬間を見計らって、超重量の戦鎧を遠心力と重力をたっぷり乗せて振り抜いた。

ドオガアアア!!

爆音を響かせて、扉が木っ端微塵に粉碎される。ドアノブに手を掛けていた男は、その衝撃で右半身をひしゃげさせ、更に、その後ろの者達も散弾とかした木片に全身を貫かれるか殴打されて一瞬で満身創痍の有様となり反対側の壁に叩きつけられた。

「探す必要はありませんよ。既にここにいますからね」

「……てめえら、例の襲撃者の一味か……その容姿……チッ、リストに上がっていた奴らじゃねえか。士郎に雫、シアだったか？あと、他にも色々いたな……なるほど見た目は極上だ。おい、今すぐ投降するなら、命だけは助けてやるぞ？まさか、フリートホーフの本拠地に手を出して生きて帰れるとは思ってツ!? 『ズドンッ!』グギャアアア!!!」

シアが太った男を冷め切った目で見ながら星砕きで壁に吹き飛ばす。さらに星砕きで腹を潰しにかかる。

「リーニヤちゃんとミュウちゃんはどこですか」

「リ、リーニヤ……ミュ、ミュウ……?」

「惚けないで下さい。あなた達が攫った海人族の子供達です。内臓がぐちゃぐちゃになつて飛び出る前に答えることがオススメです」

「わかつた!言うから助けてくれ!観光区にある、美術館の地下だ!そこに裏オークシヨン会場がある!開始は遅めの夕方だから向かえば間に合うはずだ!」

「そうですか」

「助けてくれ……」

「子供の人生を弄んで置いて助かるなんて都合の良い話はありません。あなたはわたし達と敵対しました。それだけです」

シアは大きく振りかぶる。

「さよならです」

グシャアア……

「なんか言動といい行動といいボクに似てきてない？」

「士郎さんの恋人ですから！」

「……そうね。リーニヤちゃんともミュウちゃんを助けに行きましょう」

男の言った場所に向かおうとしたその時、机の上にある資料に目が止まった。

「士郎さん、それは？」

「会場とその他諸々資料みたい。ついでだ、後顧の憂いも絶っておくか」

そう言っただけは資料を丸めてジャケットの内ポケットに仕舞った。

投影魔術師と錬成師パパになる その3

三人称 side

オークション会場は、一種異様な雰囲気に含まれていた。

会場の客はおよそ百人ほど。その誰もが奇妙な仮面をつけており、物音一つ立てずに、ただ目当ての商品が出てくるたびに番号札を静かに上げるのだ。素性をバラしたくないがために、声を出すことも躊躇われるのだろう。

そんな細心の注意を払っているはずの彼等ですら、その商品が出てきた瞬間、思わず驚愕の声を漏らした。

出てきたのは二メートル四方の水槽に入れられた海人族の幼女ミュウとリーニヤだ。買ってもらった衣服は剥ぎ取られ、みずぼらしい服を着せられ、首輪と手枷をつけられている。

ミュウは白髪赤目の青年をリーニヤは白緑髪紫目の青年のことを思い出しては悲しい気持ちになり、どんどん深く落ち込んでいく。

何がいけなかったのだろう。やはり駄々を捏ねたのがいけなかったのだろうか？ そんなことを考えるとさらに落ち込んでいく。

「全く辛気臭いガキ共ですなあ。人間様の手を煩わせているんじゃないやありませんよ。半端者の能無しのごときが！」

ドカツと2人が入れられている水槽を蹴飛ばす。

すると上から2人の男の声が聞こえてきた。

「そのセリフ、そっくりそのまま返すぞ？クソ野郎」

水槽を蹴とばした男が天井から降りて来た男2人に蹴飛ばされ、壁に激突し何故か生えていた棘に突き刺さった。

そして白髪の男がミュウとリーニヤの入っている水槽を義手で殴る。

「ひゃうっ!？」

「ひにゃあ!？」

流れの勢いで、2人も外へと放り出された。思わず悲鳴を上げる2人だったが、直後ふわりと温かいものに受け止められて、瞑っていた目を恐る恐る開ける。そこには、会いたいと思っていた人が、声が聞こえた瞬間どうしようもなく期待し思い浮かべた人が……確かにいた。自分を抱きとめてくれていた。2人は目をパチクリとし、初めて会った時のようにジツと土郎とハジメを見つめる。

「助けに来たよ2人共」

「ごめんね、怖い思いをさせて」

「……お兄ちゃん……?」

「そっだよ」

「お兄ちゃん!」

苦笑いする士郎とハジメに2人は泣きながら抱きつく。

士郎は毛布を2つ投影して片方をハジメに手渡す。リーニヤとミュウを包む。

再会した二人に水を差すように、ドタドタと黒服を着た男達がハジメとミュウを取り囲んだ。客席は、どうせ逃げられるはずがないとも思っているのか、ざわついてはいるものの、未だ逃げ出す様子はない。

「クソガキ、フリートホーフに手を出すとは相当頭が悪いようだな。その商品を置いていくなら、苦しまずに殺してやるぞ?」

大勢の屈強な男達に囲まれる2人。どうやら自分達を逃がさないようだ。

不安になり士郎とハジメを見る。

「大丈夫、目を閉じていればいいから」

そう言つて、自分の目に手を被せる。

パチン! パアン!

何かが弾かれた音と共に破裂音になる。

目を閉じているので何が起きたかわからない。すると突然とんでもない速さで上に

上がる感覚が襲いかかる。

「よし、もう目を開けていいよ」

言われた通り目を開けると、そこは町を一望できるほどの上空だった。地平の彼方には、まさに沈もうとしている夕日が真っ赤に燃え上がりながら空を赤く染め上げており、地上には人工の光が点々と輝きだし、美しいイルミネーションを作り上げていた。

「わあ！」

2人は初めて見たその光景にキャツキャツとはしゃぐ。

「お兄ちゃん達凄いの！お空飛んでるの！」

「お兄ちゃん竜の上に乗ってる……すごいすごい！」

ハジメは空力を使い、士郎は大地龍を足場に浮いている。

「喜んでるとこ悪いけど、これから凄いのが見えるよ」

「お兄ちゃん……凄いのって何？」

リーニャは士郎に質問する。

「それはね……大爆発さ」

突然美術館が言われた通り大爆発する。

空からは雷の龍と闇の龍が美術館を破壊していた。

「はわわわわ……」

「どう2人共？」

「コワイ」

「あはははは！それもそうだよね。とりあえず降りないと」

そう言つて士郎とハジメは地上に降りていった。

「ミュウちゃん！」

「リーニヤちゃん！」

「お姉ちゃん！」

「倒壊した建物二十二棟、半壊した建物四十四棟、消滅した建物五棟、死亡が確認されたフリートホーフの構成員九十八名、再起不能四十四名、重傷二十八名、行方不明者百十九名……で？何か言い訳はあるかい？」

「カツとなつて計画的にやった。反省もしなければ後悔もしない！」

「はあ~~~~~まあ、やりすぎ感は否めないけど、私達も裏組織に関しては手を焼いていたからね……今回の件は正直助かつたといえば助かつたとも言える。彼等は明確な証拠を残さず、表向きはまっとうな商売をしているし、仮に違法な現場を検挙してもトカゲの尻尾切りでね……はつきりいつて彼等の根絶なんて夢物語というのが

現状だった……ただ、これで裏世界の均衡が大きく崩れたからね……はあ、保安局と連携して冒険者も色々大変になりそうだよ」

「まあ、元々、其の辺はフューレンの行政が何とかするところだろ。今回は、たまたま身内にまで手を出されそうだったから、反撃したまでだし……」

「唯の反撃で、フューレンにおける裏世界三大組織の一つを半日で殲滅かい？ ホント、洒落にならないね」

流石にイルワが可哀想なのか彼に一つ提案する。

「一応、そういう犯罪者集団が二度と僕達に手を出さないように、見せしめを兼ねて盛大にやったし。支部長も、僕らの名前使ってくれていいんだよ？ 何なら、支部長お抱えの『金』だつてことにすれば……相当抑止力になるんじゃないか？」

「おや、いいのかい？ それは凄く助かるのだけど……そういう利用されるようなのは嫌うタイプだろう？」

「そこは持ちつ持たれつってことだよ。世話になるんだし、それくらいは構わないよ。支部長なら、そのへんの匙加減もわかるだろうし。僕らのせいで、フューレンで裏組織の戦争が起きました、一般人が巻き込まれましたってのは気分悪いし」

「ああ、それと報酬額から差し引きで水族館のリーマンを買いたいんだけど……」

「わかった、後で水族館と交渉してくるよ。でだ……そのミュウ君とリーニャ君のこ

とただけど……」

イルワがはむはむとクッキーを両手で持ってリスのように食べている幼女2人に視線を向ける。

2人はその視線にビクツと反応し、土郎達を見る。

「こちらで預かって、正規の手続きでエリセンに送還するか、君達に預けて依頼という形で送還してもらうか……二つの方法がある。君達はどっちがいいかな？」

「土郎さん……わたし……必ず2人を守って見せます……だから……」

「みなまで言わなくてもわかってるさ……2人を連れてくよ……ハジメもその気だし……」

「土郎さん！／お兄ちゃん！」

「まあ大火山までの道のりは僕がなんとかするよ。冷房アータイプアクト作ればいいかな？ただね……」

ハジメが一呼吸置く。先程から何か言いたいことがあるらしい。

「お兄ちゃんって言うのはやめてくれないかな？ハジメで良いよ。なんというか……少しむず痒い……」

ハジメの要求に、ミュウはしばらく首をかしげると、やがて何かに納得したように頷き……ハジメどころかその場の全員の予想を斜め上に行く答えを出した。

「……パパ」

「あゝ？……な、何だつて？悪い、ミュウ。よく聞こえなかつたんだ。もう一度頼む」

「パパ」

「……そ、それはあれ？海人族の言葉でお兄ちゃんとかハジメという意味？」

「ううん、パパはパパなの」

「うん、ちよつと待とうか」

お兄ちゃん呼びからパパ呼びになったことに戸惑いを隠せないハジメ。

ミュウのパパ呼びにリーニヤも羨ましくなった。

「お兄ちゃん……」

「?どうしたのリーニヤ?」

「お兄ちゃんの事パパって呼んでもいい?」

「!?!?!」

!!土郎はリーニヤに『パパ』呼びされたことにハジメ以上の驚きを見せた。

「土郎さん!?!」

「……ふう……なんでパパなの?」

「リーニヤ、パパとママはどっちも神様の所に行っちゃった……リーニヤ、ミュウのママ

のところ引き取られた……ミュウのママはママって呼んでもいいって言ってたけど……呼びづらくて……」

予想だにしない重い話を聞かされて、なんと言った方がいいのかわからなくなりかける。

「リーニヤ……わかった……ボクをパパと呼んでもいいよ」

「ホント！ やったあ！ パパあ！」

पाアツと顔を明るくして士郎に飛びつく。

「リーニヤちゃんわたしのことをママと呼んでもいいんですよ」

「……シアお姉ちゃんはお姉ちゃんなの。ごめんなさい……」

「そうですか……」

「リーニヤのママってどんな人なの？」

雫がリーニヤの母親のことが気になり質問する。

「うーんと、パパといつもくつついてて、お料理が美味しくて、リーニヤと同じ髪色で髪型なの。背も周りの人と比べると少し小さかったの」

リーニヤの母親の事聞くと、どこか同じ印象を受ける人物が浮かぶ。

（まさかね……）

士郎と雫とはある人物を想像したのだった。

士郎とハジメはこの日18歳、17歳でパパになった！
これより子連れの旅が始まる！

オルクス大迷宮再び！

情報の見詰め直し

「フューレンから車で発進してこれからのこと、今までの情報の整理をすることにした。」

「これからホルアドを経由してアンカジに向かう」

「イルワから貰った手紙をホルアドのギルド本部長に渡してそのまま行く……で良いんだよね？」

「うん。……で全員の天職を確認するよ」

ボク：天の鎖／投影魔術師

ハジメ：錬成師

幸利：闇術師

香織：治癒師

雫：剣士

優花：投擲師

ユエ：神子

シア：占術師

ヴェア：竜騎士

テイオ：守護者

「ユエの神子つてのが気になるな」

「『神』って単語がつくだけで厄ネタよね……」

「ユエがエヒトに狙われているのは確かだけど……なんで直接来ないのかが疑問だよ
ね」

「『来ない』のではなく『来れない』のか？」

「幸利、それってどういうこと？」

「エヒトは依代を探してるのかも知れねえ」

「あー、ユエちゃんを狙う理由もわかるね。魔法の天才なら神様の依代としては最高だ
し」

「ならエヒトと戦う時はユエを守る形で戦うことになりそうだね」

「そう結論に至ると、ユエが不満そうな顔になる。どうやら庇われながら戦うことに不
満のようだ。」

「む……」

「んじゃ次は魔人族についてだな」

ヴェアベルトに魔族について語ってもらおう。

「我々魔族はシユネー雪原に住んでいる。赤髪に褐色の肌。暮らしは人間族と比べると貧しいものだ。だから掠奪することではか民を賄うことが出来ない……」

「なるほど、だから戦争になったのか」

「元々は全種族が友好関係だった歴史があつたのだがな……」

「そこでヴェアベルトさんは今一度友好関係を築こうとしてるわけですね」

「ああ。それを魔王に何度も提案したのだが、返つて来たのは私や私に与する者達の処刑だ。それを私の部下の一人が察知し、部下全員に変成魔法をかけ、人間族に近い見ただ目にして逃がし、最後に私が逃げようとしたところを」

「襲われたと、でご主人様達に助けられて今に至ると、いうわけじゃな」

「ああ……」

「一つ気になつたんだが、魔王の姿ってどんなだ？」

「うむ……伝えたいのだが、私には画力が……」

「そこはボクに任せて」

ボクは鎖を全員に巻きつける。そして情報共有を発動させる。

伝わった魔王の容姿は金髪、赤眼の壮年の男だった。

「デイ、デイン叔父様……!？」

「ユエ殿？」

「……なんでユエの叔父さんが魔王に……!?」

「ハジメくんということなの！」

その男は奈落にあるオスカアの隠れ家で映像として見たユエの叔父とそっくりだったのだ。

「魔王はエヒトとグルの可能性が高い……というより、グルだろこれは」

「結局我々は奴らの掌で踊らされた世界だったか……クソっ」

「エヒトが依代探してる説は濃厚になったな……」

全員暗い気持ちになる。

ユエの叔父がエヒトの仲間操られ、敵として立ちはだかるとは思いもしなかったのだ。

「パパ？」

「リーニャ……」

「パパ、げんき出して。あたままでなでしてあげる。シアお姉ちゃんに雫お姉ちゃんも」
幼い子供に頭撫でられる。想像したこともない現状に、理解が追いつかないが不思議と心がやすらいでいく。

「ありがとリーニャ」

「げんきになった？」

「はい！」

シアはリーニヤの頭を撫でる。「えへへ……」と顔を緩ませる。

「よし！このままホルアドまで一直線だ！」

そう言っつて、車を走らせて行く。

チュートリアルオルクスで……

オルクス大迷宮では勇者一行が攻略を続けていた。

攻略道中は恵里の的確な作戦と指示、鈴の強固な守りにより大きなピンチが訪れることなく進んでいる。

先ほどモ戦闘を終えたばかりだが、特に負傷者が出ることなく終わった。

「次が九十層……そろそろお兄ちゃんが見つかったも良いと思うけど……」

「ここまで長かったけど、中々オニーサン達、見つからないね……」

士郎達を探す為にオルクス大迷宮を搜索している恵里は、思ったような成果が得られず、もやもやしている。

このパーティ編成にメルド達騎士団は七十層辺りから足を引っ張り始めたので、その場で待機している。

「後十層だよ鈴、頑張らないとね」

「うん！」

現在の2人のステータスはこれだ

|||||

天野恵里 17歳 女 レベル

天職：降霊術師

筋力：300

体力：400

耐性：270

敏捷：550

魔力：1450

魔耐：1450

技能：降霊術適性「＋効果上昇」「＋イメージ補強力上昇」「＋範囲効果上昇」「＋消費魔力減少」「＋詠唱省略」「＋魔法効率上昇」「＋連続発動」「＋複数同時発動」「＋遅延発動」「＋付加発動」・閤属性適性「＋範囲効果上昇」「＋消費魔力減少」「＋詠唱省略」「＋魔力効率上昇」「＋連続発動」「＋発動速度上昇」「＋効果上昇」「＋持続時間上昇」「＋連続発動」「＋複数同時発動」「＋遅延発動」・全属性耐性・気配感知「＋範囲拡大」・魔力感知「＋範囲拡大」・高速魔力回復「＋瞑想」・

谷口鈴 17歳 女 レベル

天職：結界師

筋力：230

体力：380

耐力：380

敏捷：340

魔力：750

魔耐：450

技能：結界術適性「＋魔力効率上昇」「＋結界密度上昇」「＋範囲効果上昇」「＋消費魔力減少」「＋魔力効率上昇」「＋連続発動」「＋発動速度上昇」「＋複数同時発動」「＋遠隔操作」「＋連続発動」・光属性適性「＋障壁適性連動」・言語理解

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

とそこら辺の同職と比にならない程の強さになった。

ベヒモス戦からさらに強くなった。

そうして九十層に降りて進むのだが、中々魔物に姿が見られない。

（おかしい……一回も魔物と戦闘になってない……お兄ちゃんが先に全滅させたのなら、近くにいることになるけど、気配感知の反応からして違う……魔物……と人？どういうことだ？）

恵里は一つの決断をする。

「みんな、嫌な予感がする。ここで一旦撤収しよう」

恵里は安全を考慮して迷宮から脱出することを提案した。

しかし、

「何言ってるんだよ？ここまで何もなかったんだぜ？このまま行っても大丈夫だろ」

檜山はその提案を却下し、そのまま進もうとする。

「鈴は恵里の言う通り引いた方がいいと思う」

鈴は恵里の意見に賛成する。

「いや、このまま進もう。俺達はメルド団長より強くなったんだ。もし何かあっても俺がなんとかする」

天之河も進もうと言う。

「光輝、俺も戻った方がいいと思うぜ」

龍太郎もそう言うが、天之河は聞こうともせず、そのまま奥へと進んで行った。後ろにいる永山達も余り気が進まないようだ。

天之河の後を追いついて、進んでいく。

それでも全く魔物の姿を見ない。それどころか、血の痕が出てきた。

「これ……血……だよな？」

「薄暗いし壁の色と同化してるから分かりづらいけど……あちこち付いているよ」

「おいおい……これ……結構な量なんじゃ……」

夥しい血に青ざめるメンバー。

恵里は血を観察する。適当な布を取り出して被せる。あつという間に布が緋く染まる。つまり、この血はそこまで時間が経っていないと言うことだ。

「急いで戻った方がいいねこれは……この魔物の血、真新しいよ」

「そりゃあ、魔物の血があるってことは、この辺りの魔物は全て殺されたって事だろうし、それだけ強力な魔物がいるって事だろうけど……いずれにしろ倒さなきゃ前に進めないだろう？」

「少しは危機感を持ってよ……」

余りの危機感のない天之河の反論に恵里は呆れてため息を吐く。

恵里の鑑定結果に臨戦態勢を取った永山が天之河に反論する。

「天之河……魔物は、何もこの部屋だけに出るわけではないだろう。今まで通って来た通路や部屋にも出現したはずだ。にもかかわらず、俺達が発見した痕跡はこの部屋が初めて。それはつまり……」

「誰かが隠蔽したってことか重吾」

「その通りだ浩介……」

あとを継いだ遠藤の言葉に永山が頷く。光輝もその言葉にハツとした表情になると、永山と同じように険しい表情で警戒レベルを最大に引き上げた。

「それだけ知恵の回る魔物がいるという可能性もあるけど……人であると考えたほうが自然つてことか……そして、この部屋だけ痕跡があつたのは、隠蔽が間に合わなかつたか、あるいは……」

「……」が終着点という事さ」

天之河の言葉を引き継ぎ、突如、聞いたことのない女の声が響き渡つた。男口調のハスキーな声音だ。天之河達は、ギョツとなつて、咄嗟に戦闘態勢に入りながら声のする方に視線を向けた。

コツコツと足音を響かせながら、広い空間の奥の闇からゆらりと現れたのは燃えるような赤い髪をした妙齡の女。その女の耳は僅かに尖つており、肌は浅黒かつた。

天之河達が驚愕したように目を見開く。女のその特徴は、天之河達のよく知るものだったからだ。実際には見たことはないが、イシユタル達から叩き込まれた座学において、何度も出てきた種族の特徴。聖教教会の掲げる神敵にして、人間族の宿敵。

「……魔人族」

誰かの発した呟きに、魔人族の女は薄らと冷たい笑みを浮かべた。

救出要請!

ホルアドに着いた士郎達は直ぐにギルドへ向かう。

「そういえばよ。士郎」

「なに? 幸利」

「投影魔術って世界の修正力によって、投影した物は消されるだろう? でもお前のは消えない。衛宮士郎みたいに起源が『剣』な訳でもないし。仮に剣ならそれはそうと納得できてるが……」

「たしかに……考えたこともないや」

士郎の投影魔術は幸利の言う通り何か違っていた。

投影した時の感覚を一度考えてみる。投影した時、投影した物が世界に結びついたように感じた。

ひとまず用件を済ませて、次の目的地向かきたい。

ふと、士郎はオルクス大迷宮の入り口を見る。

「パ。パ?」

リーニヤが不思議そうな顔をして士郎の顔を見る。

「……あれから4ヶ月しか経ってないのにもう何年も前の事に思えてね……」

「よく俺たちもあの地獄から這い出たもんだな……」

「お主らはもしやり直せるのならどうするのじゃ？」

「また落ちるよ。腕を失うことになったとしてもね」

「私も一緒だよハジメくん」

「それは何故じゃ？」

「ユエ（ちゃん）に会いに行くため」

「ハジメ……香織……」

「無論ボクも落ちるさ……でないとシアと会えないからね。ただ、恵里を連れて行くかは……悩んでる」

彼女をあのだ獄に連れて行くのは気が引ける。もし、彼女が行きたいと言うのなら、士郎は連れて行くつもりだ。

そうこうしているうちにホルアドのギルドに着く。

ギルドの中に入ると、中にいた冒険者達の鋭い視線が士郎達を捉える。

「ひうっ！」

その視線にミュウは小さな悲鳴を上げ、リーニヤは声は出さなかったものの怯えてし

まった。

ハジメが威圧と魔力放射を発動。睨んだ冒険者達の身体が強張る。

「今睨んだ人……笑って?」

「「「「「え?」」」」」

「だ〜か〜ら〜笑ってって言ったんだよ?うちの子たち怖い思いしちやっただよ?ト
ラウマになったらどうしてくれるのかな?」

(ハジメのやつ親バカ進行してるな……)

(ウチの子って言ってるもの……子離れ出来なさそうね……)

ハジメの親バカ具合に幸利と優花は若干呆れている。

こわもてのガタイのいい男達が揃って引き攣った笑みを浮かべて小さく手を振る姿
は、途轍もなくシユールだったが、やはり、そんな事はお構いなく、ハジメは満足そう
に頷くと胸元に顔を埋めるミュウの耳元にそっと話しかけた。

何を言われたのか、ミュウはおずおずと顔を上げると、ハジメを潤んだ瞳で見上げる。

そして、ハジメの視線に誘われてゆっくり振り向いた。そこには当然、必死に愛想を振
りまくコワモテ軍団。

「ひっ!」

当然また怖がる。

そしてハジメはコワモテ冒険者を床に叩きつけるのだった。

リーニャは士郎に守られたのでコワモテスマイルを見ることはなかった。

ちなみ先程から黙っているヴェアベルトは、余りのシユールな光景に笑っている。

「支部長はいるかな？フューレンのギルド支部長から手紙を預かっているんだけど……本人に直接渡せって言われているんだ」

士郎は、そう言いながら自分のステータスプレートを受付嬢に差し出す。受付嬢は、緊張しながらもプロらしく居住まいを正してステータスプレートを受け取った。

「は、はい。お預かりします。え、えっと、フューレン支部のギルド支部長様からの依頼……ですか？」

普通、一介の冒険者がギルド支部長から依頼を受けるなどということはありえないので、少し訝しそうな表情になる受付嬢。しかし、渡されたステータスプレートに表示されている情報を見て目を見開いた。

「き『金』ランク!?!」

冒険者において『金』のランクを持つ者は全体の一角に満たない。そして、『金』のランク認定を受けた者についてはギルド職員に対して伝えられるので、当然この受付嬢も全ての『金』ランク冒険者を把握しており、士郎達のことを知らなかったので思わず驚愕の声を漏らしてしまった。

「も、申し訳ありません! 本当に、申し訳ありません!」

「あーいや、別にいいよ。取り敢えず、支部長に取り次ぎしてくれるかな?」

「は、はい! 少々お待ちください!」

五分も経たないうちにギルドの奥からズダダツ!と何者かが猛ダツシュしてくる音が聞こえた。何事だと、ハジメ達が音の方を注目していると、カウンター横の通路から全身黒装束の少年がズザザザザと床を滑りながら猛烈な勢いで飛び出て、誰かを探すようにキョロキョロと辺りを見渡し始めた。

「金ランク! どこだ!」

土郎達は、その人物に見覚えがあり、こんなところで再会するとは思わなかったので思わず目を丸くして眩いた。

「……遠藤くん?」

「その声は天野先輩なのか? 生きてるなら出てきてくれ!」

「遠藤くん? 土郎は目の前にいるよ?」

「今度は南雲か!? 何処だ!」

「お前の目の前にいるだろ……影の薄い奴に忘れられるとかおもしれー」

「清水もいるのか!? 返事をしてくれ! って言うか、誰がコンビニの自動ドアすら反応してくれない影が薄いどころか存在自体が薄くて何時か消えそうな男だ! 自動ドアくら

「い三回に一回はちゃんと開くわ!」

「二回に一回は開かんのな。後目の前だ」

そう言つて遠藤の眉間に軽くデコピンをかます。

ベシ!

「痛!へ?お前が清水なのか?」

「おう。見た目がおもくそ変わったが清水幸利だ」

「じゃあ周りにいるのは……」

「土郎達だ」

「……生きていたのか」

「今、目の前にいるんだから当たり前だろ」

「何か、えらく変わってるんだけど……見た目とか雰囲気とか口調とか……」

「奈落の底から自力で這い上がってきたんだぞ?そりや多少変わるだろ。後口調に関してはこれが素だ」

「そ、そういうものかな?いや、でも、そうか……ホントに生きて……」

「で、遠藤くんさつき物凄いい勢いで出てきたけど、どうしたの?」

土郎がそう聞くと、浩介はハツとした表情で、慌てて話し始める。

「そうだ!先輩達冒険者やってて最高ランクの『金』なんですよね!」

「うん」

「なら頼む!一緒に迷宮に潜ってくれ!早くしないと皆死んじゃう!一人でも多くの戦力が必要なんだ!健太郎も重吾も死んじゃうかもしれないんだ!頼む!」

「ちよつと待つて?状況が全くわからないんだけど?死んじゃうつて、天之河がいれば大抵何とかなるでしょ?アレだけどき。メルド団長がいれば、二度とベヒモスの時みたいな失敗もしないだろうし……」

遠藤のあまりに切羽詰った尋常でない様子に、困惑しながら問い返す。すると、遠藤はメルド団長の名が出た瞬間、ひどく暗い表情になって膝から崩れ落ちた。そして、押し殺したような低く激んだ声でポツリと呟く。

「……んだよ」

「聞こえない。何だつて?」

「……死んだつて言ったんだ!メルド団長もアランさんも他の皆も!迷宮に潜つてた騎士は皆死んだ!俺を逃がすために!俺のせいで!死んだんだ!死んだんだよお!」

「……そつか。それで何があつたんだ?」

「それは……」

尋ねるハジメに、遠藤は膝を付きうなだれたまま事の次第を話そうとする。と、そこでしわがれた声による制止がかかった。

「話の続きは、奥でもらおうか。そっちは、俺の客らしいしな」

声の主は、六十歳過ぎくらいのがタイのいい左目に大きな傷が入った迫力のある男だった。その眼からは、長い年月を経て磨かれたであろう深みが見て取れ、全身から覇気が溢れている。

遠藤の話によると、魔族が襲撃して来たらしい。最初は遠藤自身も戦闘に参加しようとしたのだが、恵里がもしもの時のために遠藤だけは参加させなかったと言う。

それが功を制したのか、遠藤の存在を悟られることなく、逃走に成功したものの運悪く魔物に見つかり、遠藤を逃す為に庇ったという。

「なるほどね……」

「頼む！俺と一緒に潜ってくれ！天之河……はどうでもいい……天野さんや重吾達を助けてくれ！」

士郎は悩むことなく支部長に一つ提案する。

「支部長、あなた名義で勇者の救出を依頼として出してくれ」

「行ってくれるのか!?!」

「当たり前だよ。恵里達の命がかかってるんだ」

「僕も行くよ」

「勿論私もだよ！回復が必要になるからね」

迷宮に行くメンバーを決める。

士郎、ハジメ、ヴェアベルト、香織、ユエ、雫、シアの7人で行くことになった。

幸利、優花、ティオは幼女2人の見守りとして残した。

「本当に助かる！」

「ほら、案内よろしく」

士郎達は、遠藤の後について行きながら迷宮へと向かって行った。

オルクス迷宮危機一髪

迷宮side

「……知らない天井だあ」

「生きてるみたいだね鈴……」

「恵里も生きてて良かったよ……」

2人は互いの身を安じるも、ボロボロなのは変わりなかった。

「……いや、結界が割れるのは想定外だったね」

「まあ鈴のおかげで生きてるけどね」

いつも会話するように話す互いの顔には疲労が現れていた。相当な魔力を消費した為、顔は青白く、目元にはクマが出来ていた。

「えっへん、もつと鈴に感謝したまえ……！」

「はいはい、ありがとう鈴」

2人で話していると後ろから天之河と坂上が心配するように声をかけて来た。

「鈴、目を覚ましてよかった。心配したんだぞ？」

「よお、大丈夫かよ。顔、真っ青だぜ？」

「そつちこそ大丈夫なのかい？若干肩で息してるけど」

「まあこれくらい気合でなんとかするさ」

天之河は限界突破の反動でフラフラだ。そして天之河より耐久のある坂上がボロボロになってる。それが魔族の攻撃がかなりのものだとわかる。

「あれ？一人足りないんだが？」

「遠藤くんですよ？僕が先に逃した」

「はあ!?!なんであいつだけ逃した!」

すると後ろから怒鳴り声が響く。

檜山だ。遠藤だけ逃したのが腹立たしいのか恵里に詰め寄る。

「遠藤くんは目立たないから先に逃げて貰って、助けを呼びに行つて貰った。最善策だよ」

「あいつ一人で逃げれるわけねえだろうが！何が最善策だ!」

「それじゃあ君は遠藤くんを訓練で見つけられた事があるの？この中でも誰かいるの？いないから任せたんだよ」

恵里の言う通り、訓練で遠藤を見つけることが出来た者はいない。

だからこそ彼に任せたのだ。

「それに騒ぐ元気があるなら囨にでもなつてよ……」

「んだと!？」

売り言葉に買い言葉だ。檜山は先に逃した遠藤とそれを指示した恵里に対して苛立ち、恵里は撤収しようとして提案したのに、調子に乗って却下したこと、土郎達を落とす原因になった存在である檜山に恨みしかなかった。更に言うなら無責任な発言をした天之河にも嫌悪感を抱いている。

足音がこちらに近づいて来る。全員それに気づき、声を潜める。足音は通り過ぎていった。

しかし恵里は何故か自身の警報が鳴り止まない。

「鈴、結界!」

「つ! わかった! 『聖絶』!」

指示通り鈴は結界を張る。それと同時に衝撃が走り壁が破壊される。壁の残骸が弾丸となって襲いかかるも、張られた結界によって防がれる。

「戦闘態勢!」

「なんで見つかったんだ!」

突如襲いかかる魔物に天之河が聖剣で斬りかかる。龍太郎は弾丸の様に襲いかかるブルータルモドキの鳩尾を殴りつけ吹き飛ばす。

猫型の魔物が襲いかかるも鈴の結界に阻まれ後衛職に襲いかかることは出来ない。

檜山達が結界に阻まれた魔物を斬り殺す。

だが、あまりの魔物の多さに前衛職が対応しきれなくなる。

「天之河！限界突破使って魔人族を討って！早く！」

「だが……「だかもクソもない！早く！」わ、わかった！『限界突破』！」

本日2度目の限界突破を使い、魔人族に斬りかかる。

しかし、ブルータルモドキに首根っこを掴まれたメルドが天之河の視界に現れる。

「メ、メルドさん……お前！メルドさんを離せ！」

攻撃を中断してしまい、動きが止まる。その隙を別のブルータルモドキが殴りかかる。咄嗟に左腕で防ぐも受け止めきれずに、壁に吹き飛ばす。

「ガハッ！」

四つん這いに倒れた天之河に休ませる隙を与えずに攻撃が続く。

「ぐううー！何、こいつの強さは！俺は『限界突破』を使っているのに！」

しばらく攻防が続いていたのだが、突然力ががくりと抜ける。

限界突破の効果が切れてしまった。

そのまま天之河は再び殴り飛ばされてしまった。

死にはしなかった……いや、殺さないよう手加減されたようだ。

しばらくして、恵里達が魔人族の前に警戒心たつぷり持って現れた。

天之河は馬頭の魔物にメルドと同じように掴まれた状態だった。

「うそ、だろ……」

「光輝が負けた……?」

数人が戦意を喪失している。

「ふん、こんな単純な手に引つかかるとはね。色々……舐めてるガキだと思ったけど、その通りだったようだ」

恵里が、警戒した表情で、声に力を乗せながら魔人族の女に問いかける。

「……何をしたの?」

「ん?これだよ、これ」

そう言つて、魔人族の女は、未だにブルータルモドキに掴まれているメルド団長へ視線を向ける。その視線をたどり、瀕死のメルドを見た瞬間、恵里は理解した。メルドは、天之河の気を逸らすために使われたのだと。知り合いが、瀕死で捕まっていれば、天之河は必ず反応するだろう。それも、かなり冷静さを失つて。

おそらく隠れる前の戦いで光輝の直情的な性格を魔人族の女は把握したのだ。そして、カメラの固有能力でも使つて、温存していた強力な魔物を潜ませて、天之河が激昂して飛びかかる瞬間を狙ったのだろう。

「……それで?僕達に何を望んでいるんだい?わざわざ生かして、こんな会話にまで応

じている以上、何かあるんだろう？」

「ああ、やっぱり、あんたが一番状況判断出来るようだね。なに、特別な話じゃない。前回のあんた達を見て、もう一度だけ勧誘しておこうかと思つてね。ほら、前回は？勇者君が勝手に全部決めていただろう？中々、あんたらの中にも優秀な者はいるようだし、だから改めてもう一度ね。で？どうだい？」

魔族の女の言葉に何人かが反応する。それを尻目に、恵里は、臆すことなく再度疑問をぶつけた。

「勇者は殺して僕達だけ魔族に連れて行くつもり？」

「ふふ、聡いね……悪いが、勇者君は生かしておけない。こちら側に来るとは思えないし、説得も無理だろう？彼は、自己完結するタイプだろうからね。なら、こんな危険人物、生かしておく理由はない」

「……そうだね。そいつには色々迷惑かけられたからね。でもそれは、僕達も一緒だろう？」

「もちろん。後顧の憂いになるってわかつているのに生かしておくわけないだろう？」

「今だけ迎合して、後で裏切るとは思わないのかな？」

「それも、もちろん思っている。だから、首輪くらいは付けさせてもらうさ。ああ、安心していい。反逆できないようにするだけで、自律性まで奪うものじゃないから」

「自由度の高い、奴隷つてところか。自由意思は認められるけど、裏切ることは出来ないっていう」

「そうそう。理解が早くて助かるね。そして、勇者君と違って会話が成立するのがいい」「そいつと同じにされるのはごめんだよ」

恵里は情報を聞き出しつつ策を練ろうとしていた。しかし、あまりの状況に浮かぶものも浮かばない。

（参ったね……どう足掻いても死。せめて鈴達を逃がせばいいけど……）
すると後ろから諦めた声上がる。

「俺は乗るぜ」

「んな、檜山テメエ！」

諦めた檜山に坂上は掴みかかる。

「坂上よお、もう俺たちは終わりなんだよ。ここで天之河と心中するより、生き残る為に従う方が安全だろ？」

檜山が魔族側につこうとしてることがわかり、魔族の女はニヤリと笑みを浮かべる。しかし呻き声か聞こえてくる。

「み、みんな……ダメだ……従うな……」

「光輝！」

「光輝くん!」

「天之河!」

声の主は、宙吊りにされている天之河だった。仲間達の目が一齐に、天之河の方を向く。

「……騙されてる……アランさん達を……殺したんだぞ……信用……するな……人間と戦わされる……奴隷にされるぞ……逃げるんだ……俺はいい……から……一人でも多く……逃げ……」

そして次いで呻き声がもう一つ聞こえた。

「ぐっ……お前達……お前達は生き残る事だけ考えろ!……信じた通りに進め!……私達の戦争に……巻き込んで済まなかった……お前達と過ごす時間が長くなるほど……後悔が深くなった……だから、生きて故郷に帰れ……人間のことは気にするな……最初から……これは私達の戦争だったのだ!」

メルドはその言葉を最後に、とあるものを発動させる。

メルドが全身から光を放ちながらブルータルモドキを振り払い、一気に踏み込んで魔族の女に組み付いたのは同時だった。

「魔族……一緒に逝ってもらおうぞ!」

「……それは……へえ、自爆かい? 潔いね。嫌いじゃないよ、そう言うの」

「抜かせ！」

メルドを包む光、一見、天之河の限界突破のように体から魔力が噴き出しているように見えるが、正確には体からではなく、首から下げた宝石のようなものから噴き出しているようだった。

それを見た魔人族の女が、知識にあつたのか一瞬で正体を看破し、メルドの行動をいつそ小気味よいと称賛する。

その宝石は、名を『最後の忠誠』といい、魔人族の女が言った通り自爆用の魔道具だ。国や聖教教会の上層の地位にいるものは、当然、それだけ重要な情報も持っている。閻系魔法の中には、ある程度の記憶を読み取るものがあるので、特に、そのような高い地位にあるものが前線に出る場合は、強制的に持たされるのだ。いざという時は、記憶を読み取られないように、敵を巻き込んで自爆しろという意図で。

メルドの、まさに身命を賭した最後の攻撃に、天之河達は悲鳴じみた声音でメルドの名を呼ぶ。しかし、天之河達に反して、自爆に巻き込まれて死ぬかもしれないというのに、魔人族の女は一切余裕を失っていなかった。

そして、メルドの持つ『最後の忠誠』が一層輝きを増し、まさに発動するという直前に、一言呟いた。

「喰らい尽くせ、アブソド」

と、魔人族の女の声が響いた直後、臨界状態だった『最後の忠誠』から溢れ出していた光が猛烈な勢いでその輝きを失っていく。

「なっ!?何が!」

よく見れば、溢れ出す光はとある方向に次々と流れ込んでいるようだった。メルドが、必死に魔人族の女に組み付きながら視線だけをその方向にやると、そこには六本足の亀型の魔物がいて、大口を開けながらメルドを包む光を片っ端から吸い込んでいた。

メルドを包む最後の忠誠の輝きが急速に失われ、遂に、ただの宝石となり果てた。最後のあがきを予想外の方法で阻止され呆然とするメルドに、突如、衝撃が襲う。それほど強くない衝撃だ。何だ?とメルドは衝撃が走った場所、自分の腹部を見下ろす。

そこには、赤茶色でザラザラした見た目の刃が生えていた。正確には、メルドの腹部から背中にかけて砂塵で出来た刃が貫いているのだ。背から飛び出している刃にはべつとりと血が付いていて先端からはその雫も滴り落ちている。

「……メルドさん!」

天之河が、血反吐を吐きながらも気にした素振りも見せず大声でメルドの名を呼ぶ。メルドが、その声に反応して、自分の腹部から光輝に目を転じ、眉を八の字にすると「すまない」と口だけを動かして悔しげな笑みを浮かべた。

直後、砂塵の刃が横薙ぎに振るわれ、メルドが吹き飛ぶ。人形のように力を失ってド

「シャア!と地面に叩きつけられた。少しずつ血溜りが広がっていく。誰が見ても、致命傷だった。満身創痍の状態で、あれだけ動けただけでも驚異的であったのだが、今度こそ完全に終わりだと誰にでも理解できた。」

「まさか、あの傷で立ち上がって組み付かれるとは思わなかった。流石は、王国の騎士団長。称賛に値するね。だが、今度こそ終わり……これが一つの末路だよ。あんたらはどうする?」

魔人族の女が、赤く染まった砂塵の刃を軽く振りながら光輝達を睥睨する。再び、目の前で近しい人が死ぬ光景を見て、一部の者を除いて、皆が身を震わせた。魔人族の女の提案に乗らなければ、次は自分がああなるのだと嫌でも理解させられる。

檜山が、代表して提案を呑もうと魔人族の女に声を発しかけた。が、その時、
「…………るな」

未だ、馬頭に宙吊りにされながら力なく脱力する天之河が、小さな声で何かを呟く。満身創痍で何の驚異にもならないはずなのに、何故か無視できない圧力を感じ、檜山は言葉を呑み込んだ。

「は?何だつて?死にぞこない」

魔人族の女も、天之河の呟きに気がついたようで、どうせまた喚くだけだろうと鼻で笑いながら問い返した。天之河は、俯かせていた顔を上げ、真っ直ぐに魔人族の女をそ

の眼光で射抜く。

突如、天之河の瞳が白銀色に光りだした。

得体の知れないプレツシャーに思わず後退りながら、本能が鳴らす警鐘に従って、馬頭に命令を下す。恵里達の取り込みに対する有利不利など、気にしている場合ではないと本能で悟ったのだ。

「アハトド！ 殺れ！」

「ルウオオオ!!」

馬頭、改めアハトドは、魔族の女の命令を忠実に実行し、魔衝波を発動させた拳二本で宙吊りにしている光輝を両サイドから押しつぶそうとした。

が、その瞬間、

カッ!!

天之河から凄まじい光が溢れ出し、それが奔流となつて天井へと竜巻のごとく巻き上がった。そして、天之河が自分を掴むアハトドの腕に右手の拳を振るうと、ベギヤ! という音を響かせて、いとも簡単に粉碎してしまった。

「ルウオオオ!!」

先程とは異なる絶叫を上げ、思わず光輝を取り落とすアハトドに、天之河は負傷を感じさせない動きで回し蹴りを叩き込む。

ズドン!!

そんな大砲のような衝撃音を響かせて直撃した蹴りは、アハトドの巨体をくの字に折り曲げて、後方の壁へと途轍もない勢いで吹き飛ばした。轟音と共に壁を粉碎しながらめり込んだアハトドは、衝撃で体が上手く動かないのか、必死に壁から抜け出ようとするが僅かに身動きすることしか出来ない。

天之河は、ゆらりと体を揺らして、取り落としていた聖剣を拾い上げると、射殺さんばかりの眼光で魔族の女を睨みつけた。同時に、竜巻のごとく巻き上がっていた光の奔流が天之河の体へと収束し始める。

限界突破の終の派生、霸潰だ。通常は3倍のステータス上昇だが、霸潰は5倍の上昇になる。それと同時に反動への時間も短く重い。

そんなことも考えず天之河は怒り任せに、攻撃を続ける。

「お前―！よくもメルドさんを!!」
「チィー！」

大上段に振りかぶった聖剣を天之河は躊躇いなく振り下ろす。魔族の女は舌打ちしながら、咄嗟に、砂塵の密度を高めて盾にするが……光の奔流を纏った聖剣はたやすく砂塵の盾を切り裂き、その奥にいる魔族の女を袈裟斬りにした。

砂塵の盾を作りながら後ろに下がっていたのが幸いして、両断されることこそなかった

だが、魔人族の女の体は深々と斜めに切り裂かれて、血飛沫を撒き散らしながら後方へと吹き飛んだ。

背後の壁に背中から激突し、砕けた壁を背にズルズルと崩れ落ちた魔人族の女の下へ、天之河が聖剣を振り払いながら歩み寄る。

「まいったね……あの状況で逆転なんて……まるで、三文芝居でも見てる気分だ」

ピンチになれば隠された力が覚醒して逆転するというテンプレな展開に、魔人族の女が諦観を漂わせた瞳で迫り来る光輝を見つめながら、皮肉気に口元を歪めた。

傍にいる白鴉が固有魔法を発動するが、傷は深く直ぐには治らないし、天之河もそんな暇は与えないだろう。完全にチエックメイトだと、魔人族の女は激痛を堪えながら、右手を伸ばし、懐からロケットペンダントを取り出した。

それを見た天之河が、まさかメルドと同じく自爆でもする気かと表情を険しくして、一気に踏み込んだ。魔人族の女だけが死ぬならともかく、その自爆が仲間をも巻き込まないとは限らない。発動する前に倒す！と止めの一撃を振りかぶった。

だが……

「ごめん……先に逝く……愛してるよ、ミハイル……」

愛しそうな表情で、手に持つロケットペンダントを見つめながら、そんな呟きを漏らす魔人族の女に、天之河は思わず聖剣を止めてしまった。覚悟した衝撃が訪れないこと

に訝しそうに顔を上げて、自分の頭上数ミリの場所で停止している聖剣に気がつく魔族の女。

天之河の表情は愕然としており、目をこれでもかと思開いて魔族の女を見下ろしている。その瞳には、何かに気がつき、それに対する恐怖と躊躇いが生まれていた。その光輝の瞳を見た魔族の女は、何が光輝の剣を止めたのかを正確に悟り、侮蔑の眼差しを返した。その眼差しに光輝は更に動揺する。

「……呆れたね……まさか、今になってようやく気がついたのかい？ 『人』を殺そうとしていることに」

「ッ!？」

そう、天之河にとって、魔族とはイシユタルに教えられた通り、残忍で卑劣な知恵の回る魔物の上位版、あるいは魔物が進化した存在くらいの認識だったのだ。実際、魔物と共にあり、魔物を使役していることが、その認識に拍車をかけた。

(あの馬鹿今になって気づいて怖気付いたのか!)

恵里は天之河が『人を殺す』ことを今の今まで知って戦っていないことに驚き、悪態を心の中で吐く。

「まさか、あたし達を『人』とすら認めていなかったとは……随分と傲慢なことだね」

「ち、ちが……俺は、知らなくて……」

「ハッ、『知ろうとしなかった』の間違いだろ？」

「お、俺は……」

「ほら？ どうした？ 所詮は戦いですらくなく唯の『狩り』なのだろ？ 目の前に死に体の一匹がいるぞ？ さっさと狩ったらどうだい？ おまえが今までそうしてきたように……」

「……は、話し合おう……は、話せばきつと……」

天之河が、聖剣を下げてそんな事をいう。そんな天之河に、魔族の女は心底軽蔑したような目を向けて、返事の代わりに大声で命令を下した。

「アハトド！ 扇を持った女の近くにいる杖の女を狙え！ そいつが一番厄介だ！」

衝撃から回復していたアハトドが魔族の女の命令に従って、猛烈な勢いで恵里に迫る。

パーティーの中で隠れて指示を出していたこと、主要パーティーの中で体力などがまだ残っていたのがバレていたようだ。その頭脳が厄介だと見られて、真っ先に狙われた。

「な、どうして！」

「自覚のない坊ちゃんだ……私達は『戦争』をしてるんだよ！ 未熟な精神に巨大な力、あなたは危険過ぎる！ 何が何でもここで死んでもらう！ ほら、お仲間を助けに行かないと、全滅するよ！」

自分の提案を無視した魔人族の女に天之河が叫ぶが当の魔人族の女は取り合わない。アハトドは、唯でさえ強力な魔物達ですら及ばない一線を画した化け物だ。不意打ちを受けて負傷していたとは言え限界突破発動中の天之河が圧倒された相手なのである。「あんまりこれはやりたくなかったんだけどなあ……鈴！坂上くん！ちよつとでいいから時間を稼いで！」

「わかったよ！」

「任せろ！」

2人の気合いの入った掛け声を信じて恵里は詠唱を始める。

「英雄よ、数多の戦で散り、志半ばで息絶えた英雄よ、我が身体にその歴史を纏わせ給え、一つになり給え……」

ただいま、そして……地獄から救いに来たよ！

『憑依英雄譚』

詠唱を終えた恵里から紫色の魔力が噴き出る。次第にそれが収まり薄い膜のように恵里の身体にまとわりつく。そして、髪色も紫に変色し、見開いた瞳は赤紫色になっていた。

「2人ともありがとう……あとは僕がなんとかする」

そう言つて恵里はワンステップで魔族の女に接近する。

「つなっ！」

「せやあー！」

勢いよく杖を振るうも間一髪避けられる。すると後ろにいるアハトドが恵里に向けて殴りかかる。それ紙一重でかわし、杖の下の棘の部分で拳を切り落とす。

さらに左右から金棒が振り下ろされるも、杖を一体の頭に投げて刺し、そのまま抜いてもう一体の頭を宝玉でかち割る。

猫顔の魔物の触手攻撃も全て捌き、的確に頭を潰す。

「恵里すげえ……」

「なんだあの動き……まるで歴戦の戦士みてえな戦い方だぜ……」

魔物の攻撃を全てかわし、更に的確に一撃一殺を繰り返す彼女に、呆然とする。

鈴達も気を取り直して魔物と相對する。

恵里は全てではないが魔物を蹴散らし、再び魔族の女に攻撃を仕掛ける。

魔族の女は砂塵を使い、攻撃を受け止めようとするものの、背後にある闇の塊が爆発、視界が煙に覆われ、恵里を見失う。

そして真横から杖を振るい壁に殴り飛ばす。

恵里はトドメを刺すべく、杖の先端で心臓を突き刺そうと突撃、しかしそれは別の人物によって阻まれてしまった。

「なんで邪魔するのかなあ……!」

天の河だ。

「人殺しはいけないんだ……まだ話せばわかってくれるはずだ……!」

そう言つて天の河は倒れた。

どうやら限界突破の時間が来てしまったようだ。

倒れた天の河を一度、檜山達の所まで蹴飛ばす。

「ホント甘ちゃんだね。あの勇者君」

「邪魔しかしいならどっか行つてほしいね……」

ため息を吐く恵里の身体は時間を経過する毎にボロボロになっていく。

『憑依英雄譚』

自身のステータスを一気に上昇させ、歴代の戦士達の戦い方を真似る。闇魔法と降霊術の複合魔法。

ステータスの上昇は言わば強制火事場のクソ力だ。無理矢理底上げされたステータスに身体が追いつかなくなっていく、最終的には動けなくなってしまう。

杖には今まで戦ってきたトータスの戦士達の記録が込められている。それを媒介に自身へと付与している。

(早くしないと時間リミットが……！)

魔族の女は土煙を発生させる。死角から魔物の攻撃が襲いかかる。

「くっ……！」

恵里は攻撃を避けつつ反撃を的確に入れるのだが、焦ってしまい攻撃が1発逸れてしまった。魔物を倒すことも出来ず、カウンターを貰ってしまう。

「グハッ！」

なんとか杖を盾に防御したのだが、杖に寿命が来てしまい粉々に砕け散った。壁にまで飛ばされた恵里の身体が薄紫色に点滅する。

起き上がろうとするのだが、点滅が消えた途端に力が一気に抜ける。

(もう……時間が……)

倒れて隙だらけの恵里にアハトドの金棒が振り下ろされる。

「恵里! 『聖絶』う!」

その寸前に飛び込んで来た鈴が全魔力の濃縮して作り出したバレーボールくらいの大きさの結界で防ぐも、そのまま砕かれ2人共々壁に叩きつけられる。

「なん……で、来たの……鈴……」

「え……へへ……勝手に……身体が動い……ちゃった……」

「バカだなあ……鈴は……逃げてれば助かったのに……」

「親友を……置いて行く勇氣……鈴にあるわけ……ないよ……」

互いに魔力も体力もなく、掠り声で力なく会話する。這いずりながら互いの身を寄せ
る。

坂上は既に別のアハトドに殴り飛ばされてしまい、意識が朦朧としていた。永山達も
防御で手一杯だ。

『ズシン、ズシン』と大きな足音が2人に迫る。2人は互いを守り合うように抱きしめ
る。

(お兄ちゃん……再会出来ないまま死んじやうのか……)

「嫌だよ……助けて……お兄ちゃん……」

アハトドの巨大な足が恵里と鈴の2人を踏み潰そうとしたその時だった。
ブウウウウウウウウウン!

突然、戦闘機のエンジンのような音が上から聞こえたのだ。その音はドンドン近く
なっついていき、遂には……

ドゴオ!

天井の岩盤を破壊し、出てきたのは巨大な鎖だった。

その鎖はアハトドを潰し、地面に突き刺さった。

「えっ……何?……おっきな……鎖?……恵里?」

恵里はぼうつと目の前に突き刺さった鎖を見ている。まるで何か懐かしい物を見る
ように。

(あの鎖……お兄……ちゃん……?)

鎖が空気に溶けていくように解けていく。ほど

そこから1人の人影が現れる。

白緑色の髪、橙の外套、両手に握られる黒白の中華刀。

「お兄ちゃん……!」

恵里には見た瞬間わかっていった。自身の兄で恋人の士郎だと。

「ただいま……遅くなってごめん。そして……地獄から救いに来たよ」

僕のヒーロー

「ただいま……遅くなってごめん。そして……地獄から救いに来たよ」

士郎は振り返りながらそう言った。

その紫色の瞳は恵里を確かに安心させた。

「えっ？オニーサン!? えっ!？」

「あはは、まあこんな見た目になってるからそんな反応になるよね」

更にならハジメ達も降りてくる。

「天野先輩……!余波で吹っ飛ばされたんですけど!」

「浩介!」

「重吾! 健太郎! 助けを呼んできたぞ!」

「助けを呼んできた」その言葉に反応して、天之河達も魔族の女もようやく我を取り戻した。そして、改めて士郎達を見る。

「香織とユエは彼処の連中を、シアは倒れている騎士の男を」

「了解（ですう）！」

「その魔人族、死にたくないなら帰ることをお勧めするよ」

左手に握る干将を魔人族の女に突きつける。

「なんだって？この状況を見てわからないのかい？」

「わかつてるから言ってるんだけど？戦場での

判断はお早めに」

「殺れ」

前からアハトドが襲いかかるが士郎はそれを気にせず、右手に握る莫耶で何も無い空間を切りつける。するとそこから血がダラダラ垂れ出てくる。

そしてライオン顔のキメラが現れ、それは息絶えていた。

「不意打ちは辞めた方がいいよ？どこに居ようと見つけられるからね」

「くっ……」

そして士郎達は魔物を蹴散らしにかかる。

ハジメはその手に持つドンナー&シユラークで脳天を打ち抜き、雫と士郎は刀で切りかかり、ヴェアベルトは氷魔法で殺す。

あつという間にほとんどの魔物が士郎達の手によって殺されていく。

「何なんだ……彼等は一体、何者なんだ!？」

天之河が動かない体を横たわらせながら、そんな事を呟く。今、周りにいる全員が思っていることだった。その答えをもたらしたのは、先に恵里が逃がし、自らの意志で戻ってきた仲間、遠藤だった。

「はは、信じられないだろうけど……あの人は先輩、天野先輩だよ」

「「「「は？」「「「「」」」」」」

遠藤の言葉に、天之河達が一斉に間の抜けた声を出す。遠藤を見て「頭大丈夫か、こいつ？」と思っているのが手に取るようにわかる。遠藤は、無理もないなあ〜と思いつつも、事実なんだから仕方ないと肩を竦めた。

「だから、天野先輩だよ。銃ぶっ放してるのは南雲だ。あの日、橋から落ちた人達だ。迷宮の底で生き延びて、自力で這い上がってきたらしいぜ。ここに来るまでも、迷宮の魔物が完全に雑魚扱いだった。マジ有り得ねえ！って俺も思うけど……事実だよ」

「天野先輩って、え？天野先輩が生きていたのか!？」

「ああ、ちゃんとステータスプレートも見せて貰ったし」

周りはどこをどうみたらその人なんだと思うのだが、ただ一人だけ慌てている男がいた。

「う、嘘だ……あいつらは全員死んだんだ！そうだろ？みんな見てたじゃんか。生きてるわけない！適当なこと言ってんじゃねえよ！」

「うわっ、なんだよ！ステータスプレートも見たし、本人が認めてんだから間違いないだろ！」

「うそだ！何か細工でもしたんだろ！それか、なりすまして何か企んでるんだ！」
「いや、何言ってるんだよ？そんなことする意味、何にもないじゃないか」

遠藤の胸ぐらを掴んで無茶苦茶なことを言うのは檜山だ。顔を青ざめさせ尋常ではない様子で土郎達の生存を否定する。周りにいる近藤達も檜山の様子に何事かと若干引いてしまっているようだ。

そんな錯乱気味の檜山に、比喻ではなくそのままの意味で冷水が浴びせかけられた。檜山の頭上に突如発生した大量の水が小規模な滝となって降り注いだのだ。呼吸のタイミングが悪かったようで若干濡れかける檜山。水浸しになりながらゲホッゲホッと咳き込む。混乱する檜山に、冷水以上に冷ややかな声がかけられる。

「……大人しくして。鬱陶しいから」

その物言いに再び激高しそうになった檜山だったが、声のする方へ視線を向けた途端、思わず言葉を呑み込んだ。なぜなら、その声の主、ユエの檜山を見る眼差しが、まるで虫けらでも見るかのような余りに冷たいものだったからだ。

ドパンッ！

さらに香織の銃撃が檜山の顔のすぐ横を通る。

「黙っててくれなかな？かな？私ハジメくんみたいに百発百中じゃないから、次は当たっちゃうよ？」

「か、香織……？」

天之河は香織が容赦なく人に発泡するとは思わなかったからだ。
すると天之河達に魔物が襲いかかる。

ドパンツ！

『蒼炎』

しかしそれは香織の銃撃とユエの魔法によりあつげなく殺される。

また、恵里と鈴を狙ってキメラや黒猫が襲いかかった。しかしそれも士郎の投げた干将・莫耶によって切り裂かれ、壊れた幻想で爆殺される。

「ホントになんなのさ……」

力なく、そんなことを呟いたのは魔族の女だ。何をしようとも全てを力でねじ伏せられ粉碎される。そんな理不尽に、諦観の念が胸中を侵食していく。もはや、魔物の数もほとんど残っておらず、誰の目から見ても勝敗は明らかだ。

魔族の女は、最後の望み！と逃走のために温存しておいた魔法を手頃な位置にいる士郎に放つ。

「地の底に眠りし金眼の蜥蜴、大地に眠りし魔眼の主、宿るは暗闇見通し射抜く呪い」あ

あ、石化魔法なら意味ないよ」っな！」

士郎は詠唱の途中でどんな魔法か判別し、魔法の中止を促す。

魔族に女は石化魔法を撃つことが察知されたことに驚き、詠唱を止めてしまった。

そしてコツコツと近づき、首筋に干将を当てる。

「チエックメイト……終わりだよ」

「既に詰みだったか……」

「その通りさ。殺す前に一つ二つ聞くことがある。この迷宮に来た目的は？」

「見ればわかるだろう？勇者一味を殺そうとしたんだよ。最初は勧誘したけど勇者が想

像より厄介で、予定変更したのさ」

「まだ……いやそれが目的じゃないよね」

「……何が言いたい」

「勧誘するならもつと安全な場所で行う。それにこの魔物迷宮攻略の為に連れて来たのは火を見るよりも明らかだ」

士郎はある男がこちらに歩いて来て、隣に立ったことを確認すると、一度左足で音をコツコツと鳴らす。すると地面から鎖が生えてきて、魔族の女と肩に乗っている白鳩を捕縛し、地面を天井にまでせり上がらせ天之河達から見えなくなる。

「さて、ここからは交渉タイムだ。じゃよろしく」

「ああ、任された」

士郎は一歩下り、次いで現れた男に相手をまかせる。

「久しぶりだな、カトレア」

「何故人間族の貴様があたしの名前を！」

「……そうだった、今、姿を戻す」

人差し指と中指を顛顛に当て、魔力を流し込む。するとベージュの肌が魔人族特有の褐色肌に変色していく。

「あ、貴方は……ヴ、ヴェアベルト隊長!？」

「私のことを覚えていてくれていたか」

「何故貴方が人間族と行動を……」

「それには色々と訳があつてだな。聞いてくれるか？」

「あ、はい……」

ヴェアベルトはこれまでの経緯を話す。

「そんな事があつたなんて……」

「信じてくれるのか？」

「はい、もちろん。貴方様が嘘を吐くような人ではないことはわかっていますから……」

「よかつた……そうだな……」

ヴェアベルトはゴソゴソと胸ポケットの中を探る。そして取り出したのは一枚の紙切れだった。

その紙切れには何か特殊な紋章が手書きで書かれていた。

「ヴェアベルトそれは？」

「これは魂の紙切れ、変成魔法で作ったアーティファクトだ。これがあれば私の部下達が隠れている場所がわかる」

（○ンピースの命の○みたいだな……）

その紙切れをカトレアに手渡す。

「ミハイルにも伝えておいてくれ……後の問題というと、このままカトレアが帰るとなるの成果も得られず、どんな処罰を受けるか……」

魔族は軍隊思想で成果を得られないのなら切り捨てられる可能性がないわけではない。

いくらヴェアベルトの部下の元に行くとはいえ、荷物をまとめる時間すら与えられない可能性もある。

「よし、私が生きていることをフリードの奴に報告すれば良い。そうすれば奴は私を捜索するだろう」

「いいのですか？ヴェアベルト隊長の身に危険が……」

「それしかないだろう。士郎殿ここからは……」

「別行動取るって？別に魔族に襲われるのは問題ないからこのまま同行していいよ。どうせ世界を相手にするつもりだし、いつか魔族と戦うことになるだろうからさ」

「すまない。我々魔族の為に」

「いいよ、共通の敵がいるんだし。それとカトレアさんはとりあえずこの場で殺したことにしないといけないから、銃声を響かせるからその間に撤退してて」

「ああ、感謝するよ」

そう言つてカトレアは白鳩を連れて国に帰投した。

「んじやまあ適当に銃を投影してっつと」

ドパンツ！

大きな銃声を響かせ、地面からせり上がらせた壁を元に戻す。

「士郎さん！」

「シア、騎士の男は大丈夫？」

「はい、渡された神水を使つて治しました」

「よかった……メルド団長の代わりに変な教育係か就いたら大変だからね」

士郎はメルドが生きていることに安堵した。

「天野先輩、あの魔族は？」

いつの間にか回復している天之河は魔人族がない事を質問する。

「殺したよ」

「な、なんでだ……なんで殺す必要があつたんだ……」

天之河はその事実（嘘）に愕然とする。

すると士郎の後ろから勢いよく抱きつく少女がいた。

「お兄ちゃん……色々聞きたいことはあるけど……ありがとう、僕達を助けてくれて！」

「ボクは君を守るって決めたからね。助けに行くよ。たとえ地獄だろうと」

そう言つて士郎は恵里を抱きしめ返すのだった。2人の感動の再会に周りの人は何も言わなかつた……とある人物を除いては。

「恵里、天野先輩から離れるんだ。何故殺したか聞く必要がある」

この場にいる殆どの人が天之河を非難するような目をした。

そんなことも梅雨知らずの天之河は士郎を問い詰めようとする。

「普通に嫌だけど。ていうかさ、なんで天之河はお兄ちゃんのこと睨んでるのさ。助けてもらつたのに」

「そもそも恵里が引こうつて言つたのに、自分がなんとかするつて言つて、やられて鈴達
が死にかけた所をオニーサンに助けられたのに睨むのおかしいよ」

「それは感謝してるさ。だが殺す必要はなかつた筈だ。つまり天野先輩は許される訳は

ない。王国に戻って話をするんだ」

全く感謝している様子のない天之河。恵里や鈴に言われた事も聞こえていないようだ。頭の中には士郎を問い詰めることしかない。

しかしそこでユエが割り込む。

「……くだらない男。士郎、ハジメ、香織、行こう?」

「そうだね。話を聞く気のない人と話しても無意味だし」

ユエが絶対零度ばりの冷たい声音で言い放ち、その場を去ろうとする。正しいはずの自分の言葉を無視する彼等に天之河が苛立ちを隠さず待ったをかける。

「待ってくれ。こっちの話は終わっていない。二人の本音を聞かないと仲間として認められない。それに、君は誰なんだ? 助けてくれた事には感謝するけど、初対面の相手にくだらないなんて……失礼だろ? 一体、何がくだらないって言うんだい?」

またズレた発言をする。言っている事自体はいつも通り正しいのだが、状況と照らし合わせると、「自分の胸に手を置いて考えろ」と言いたくなる有様だ。ここまでくれば、何かに呪われていると言われても不思議ではない。

ユエは何言っても理解しないだろうと天之河に見切りをつけていた。会話する価値すらないと思っっているようで視線すら合わせない。天之河は、そんなユエの態度に少し

苛立ったように眉をしかめるが、直ぐに、いつも女の子にしているように優しい微笑みを携えて再度、ユエに話しかけようとした。

「あのねえボクは君の仲間じゃない。ボクがここに来たのは、恵里を助けに来たそれだけ。遠藤くんが命がけでホルアドまで突っ走って、ギルドで助けを求めて偶々ボク達がいただけだよ」

「な、仲間じゃない……なんでそんなこと言うんだ！」

天之河の語気が強まる。

「なんでって……地球にいた時にハジメのこと、悪く言つててそれを謝らない。挙句の果てには檜山達が特訓とか言いながらハジメをリンチしようとした時も、君は檜山を庇った。ボクとしてはハジメを悪く言う人を仲間とは認めないね」

「な、なんで認めない理由になるんだ！俺は南雲が不真面目だから注意しただけだ！」

「色々酷かったけどね……なんだっけ？「不真面目だ、直せ」。別にハジメは校則を破つた訳でもないよ？そもそも注意するのは檜山でしょ。一年の頃、ハジメをその取り巻き3人も一緒にリンチしようとしてたし」

一年の頃、ハジメは一度檜山達にリンチされかけたことがある。理由としてはハジメが香織と話しているのが気に食わなかったという、幼稚なことだった。されかけたと言うのは、士郎が本格的になる前に防いだからである。

その時、遅れて天之河が来て檜山が縋りつき、「何もしてないのに、士郎に投げられた」と言い、それを鵜呑みにした天之河が士郎を悪者だと決めつけた。

その後は愛子や士郎のクラスメイトが士郎の無罪を主張、更に恵里が証拠を持ってきたので、檜山達が逆に怒られることとなった。

「ぐっ……」「よせ光輝」メルドさん」

メルドは天之河の言葉を遮る。

「お前達………すまなかつた………!!それから、お前達が生きていたことを本当に嬉しく思う」

メルド団長は土下座する勢いで頭を下げた。

「メ、メルドさん!?!どうして、メルドさんが頭を下げるんだ?」

「当たり前だ………俺はお前達の教育係………『戦争』をする上で『敵を殺す』ことは避けて通れない問題だ………本当ならもつと早く盗賊などをけしかけてお前達に『殺す覚悟』を教えるはずだった………だが、お前達はこの世界とは関係の無い人間だ。俺達の世界の都合でそのような事を教えていいのかとずっと悩んでいて、自分に言い訳をしながら先延ばしにしてしまった………それが今回の結果だ。これは俺のミスだ。本当にすまなかつた」

メルドもどうやら天之河達の扱いについて悩んでいたらしい。

騎士団長である自分と、メルド自身との間で葛藤していたようだ。そうこうしている内に迷宮の外に出ることが出来た。そこで待っていたのは、

「パパあー！お帰りー！」

と呼ぶ幼女2人だった。

「リーニヤ？幸利達は？」

ステテテと土郎の所に駆け寄るリーニヤに質問する。

「幸利お兄ちゃんなら、そろそろパパ帰ってくるって言ったから迎えにきたの。幸利お兄ちゃん達は……」

「俺達ならここだ」

「幸利、リーニヤ達のお守りありがとう」

「これくらいどうってことねーよ。ただな、2人に手エ出そうとした馬鹿はいたからな……骨抜きにしてやったわ」

「何処にいるの？」

「そこで恍惚な表情浮かべて倒れてる」

幸利が後ろを指すので、そこを見ると、冒険者達が幸せそうな顔をして横たわっていた。

「料理食べさせたのね……幸利」

「おう、武力行使も良かったが徐々に料理を大勢に振るいたかったからな」

幸利達 side

「清水幸利&園部優花のお料理コーナー!!」

「今回作っていくのは、大人数で食べるのもってこいの唐揚げよ!」

「用意するのは、ククルー鳥と片栗粉、小麦粉、酒などの調味料と卵、揚油だ」

「ククルー鳥を一口大に切り分けて、調味料に漬け込んで、揉み込む。今回は量が量なので、テイオの風魔法を使うわ」

「んで溶きほぐした卵をぶち込んで、更に馴染ませるように揉み込む。本来なら30分ほど放置するが今回は直ぐに揚げる為小麦粉と片栗粉をまぶして揚げる」

ジュワ~~~~

「揚げ色が足りない内に一度取り出して1分程置いておく」

「もう一度揚げる前に一度お玉で軽く叩いて亀裂をいれとくのがポイントだ。これを2、3回繰り返し返す」

ジュワ~~~~!

コンコンコン

ジュワ~~~~

コンコンコン

ジュワ~~~~

「そのうちに油を高温にして、もう一度揚げて完成よ！」

「そらあ食いな！冷めてもうめえ唐揚げダア！」

「って感じだ」

「成る程……って幸利達の唐揚げ!?まだある!?!」

ハジメは唐揚げを作ったことに驚き、食いつく。

「今日の夜作るから我慢しろ……」

「やった！」

純粹に喜ぶハジメを見るのは地球以来だった。

脱出後の色々（リメイク）

「ご主人様、この状態の者はどうするのじや？」

テイオは幸せそうな顔をした男達を指さす。

「放置して良いだろ。幸せそうな顔してるし」

「そうね。無理に起こすのもかわいそうだし」

そう納得する。

幸利達の唐揚げで骨抜きになっている、男達を尻目に、恵里は士郎の肩を叩く。

「ねえお兄ちゃん、パパってどう言うこと？」

恵里がこの場にいるほとんどの人が思っていることを聞く。

「ええと実はね……」

士郎がフューレンであったことを話すと、恵里はリーニヤの頭を撫でる。

「そうなんだ……よく頑張ったね」

リーニヤは気持ち良さそうに顔を綻ばせる。

「ありがとうママ……あっ！」

リーニヤは頭を撫でる恵里のことをママと呼んだ。

「!?リーニヤちゃん?なんで僕の事をママって呼んだの?」

「えつとその……お姉ちゃんがママにそっくりだったから……つい呼んじやった……」
「やっぱり恵里と似てると思ったのよ……」

フューレンでリーニヤの母親の事を聞いた時に感じた既視感を思い出す。

『リーニヤと同じ髪色で髪型なの。背も周りの人と比べると少し小さかったの』

今の恵里の容姿と同じだった。

「リーニヤが呼びたいなら僕の事をママって呼んで」

「ありがとうママ!」

リーニヤは恵里に抱きつく。

「お兄ちゃん、僕も着いていくね」

「言っておくけど、今回の件よりも過酷な旅だ。それでも着いてくるの?」

「うん、もうお兄ちゃんと離れ離れになるのは嫌だからね」

「わかった。荷物まとめて来て」

「やった!」

喜ぶ恵里。荷物を取りに向かおうとしたその時、待ったをかける人物がいた。

「な、恵里、君は着いて行くのか?」

「ん?そうだけど何か問題ある?」

天の河の質問に対して、恵里は「何を当然の事を」といった顔をして返す。

「大有りだ。天野先輩は人殺しなんだ。これ以上そんなことをさせない為にも王国に留まってもらう必要がある。それに君は人殺しの近くに居てはいけない」

天の河は地球だと真つ当な理由で恵里を引き留めようとする。

「香織も雫も、園部さんも俺達と一緒に戦おう。その力が有ればこの戦争に勝てる。君達もだ、そんな男の元にいるべきじゃない。俺と一緒にこう！君達ほどの実力なら歓迎するよ。共に人々を救うんだ。それからシア……………だったかな？安心してくれ。俺と共に来てくれるなら直ぐに奴隷から解放する。テイオも、もうご主人様なんて呼ばなくていいんだ」

物凄い自己完結で見当違いである。

誰も士郎やハジメ、幸利から離れたとは思ってもいないのにだ。

爽やかな笑顔を浮かべながら、ユエ達に手を差し伸べる天の河。

「「「……………」」」

「あれはなんか違うのじゃ……………」

「この歳で厨二病患ったのかあいつ……………」

「あれが人間の勇者なのか……………力はともかく、内面に問題しかないな……………」

香織達は絶句し、テイオが若干引いている。あのテイオがだ。

幸利とヴェアベルトは天之河の一方的な発言に、呆れ果てている。

「光輝、私達は自分の意思で着いていつてるわ」

「雫ちゃんの言う通りだよ。それにやることもあるから、冒険者をやってるんだよ？ それに私ハジメくんと離れるつもりないし」

雫と香織は戻らないことを伝える。

「な、香織、何故南雲なんかと……南雲お前！香織に何をした！」

「何もしてないよ……」

あまりの言いがかりにハジメもため息を零しながら肩を下げる。

「ならまさか清水お前！彼女達を洗脳したのか！」

「言つとくが俺は闇魔法で洗脳の魔法を使ったことはないぞ。なんなら攻撃魔法くらいしか使つてないし」

「それといつまで恵里は先輩といるんだ。兄妹とはいえもういいだろう。恵里も恋人がいるんだから離れた方が、人殺しと離れられて一石二鳥だ」

（やっぱり言つた方がいいのかももしれないな……）

（僕もそう思う……これ以上隠しても意味ないし……いずれバレちゃうよ……）

士郎と恵里は耳打ちしながら自分達のことを話すか相談する。

「この際言うけど僕の恋人はお兄ちゃんだよ」

恵里がその事を伝えると、鈴以外の全員の顔が驚愕に染まり、騒つく。

「き、兄妹で付き合うなんて間違っている！恵里、今すぐ別れるんだ」

当然、天之河は反対する。

「因みにボクと恵里は血は繋がってないよ。恵里はある理由でボクの子の家の養子になったからね」

立て続けに明らかになる事実にて、動揺が大きくなっていく。

「な、血の繋がりが無いだって……」

天之河も当然驚く。しかし何を思ったかとんでもない発言をした。

「血が繋がっていないなら家族でもなんでも無いじゃないか！」

と、士郎と恵里の関係を完全に否定する発言をした。

その時何かが切れた。

ブヂッ

「今なんだった？」

士郎はウルでシアが侮辱された時よりも激しく怒っていた。恵里は天野家の一員ではないと言われ、自身の家族を、それまでのことを、思い出を、全てを否定されたような気持ちになった。

「恵里と天野先輩は家族じゃないと言ったんだ！2人は早く別れるんだ！」

さらに士郎の怒りが増幅する。威圧を出さない辺り、まだ冷静な部分から残っているのだろう。声が少し荒くなっただけだ。

「何が気に入らないんだよ……」

「気に入らないんじゃない、お前が間違っているから俺は指摘しているだけだ！まさか恵里を家族にしたのも、付き合う為なのか！それに香織達が神の使徒として戦わないのも、お前が洗脳したのか！」

天の河の中の士郎がどんどんおかしな方向へ進んでいく。

「天野士郎！俺はお前を許さない！決闘しろ！」

士郎の中で一つの結論が出た。

こいつは一度徹底的に叩きのめさないと

「わかった、早く来な、やるんだったらさっさとやろう」

士郎は挑発するように、手をクイクイと動かす。

「はあああああ！」

天之河は聖剣を縦に勢いよく振り下ろす。

しかしそれは士郎の右腕によって防がれる。

「な……これなら！」

天之河は連続で切りかかってくる。しかし、その動きも雫の剣速よりも圧倒的に劣り、最も容易く捌かれる。

「ふっ！」

バギイ！

「ガハッ……！」

士郎は天之河の鳩尾を殴る。鎧には一切ダメージは入らなかった。しかし、内部の天之河本体に多大な衝撃が襲いかかる。

襲ってきた魔物が持っていた技能「衝撃変換」である。じつは士郎、戦闘中にいくらか食べてみたのだ。軽く痛みが走ったが、耐えられない物ではなかった。

「ぐっ……まだだ……俺は香織達を助ける為にお前を倒すんだ……」

聖剣を杖のように地面に突き刺し、フラフラと立ち上がる。側から見ればまるで強大な敵に立ち向かう正義のヒーローのようだ。

しかし相手は奈落の底から這い上がった化け物。奈落よりも上の階で戦っていた、天之河が勝てる相手ではなかった。

「『限界突破』！」

今度は限界突破を使用して、ステータスの底上げをする。先程よりもスピードとパワーが上がっている。オルクス迷宮を攻略していた人達は、天之河のスピードに、目が追いついていなかった。

「たあああああー！」

横一文字に斬りかかる。

ガキン！

またも聖剣は士郎の右腕に受け止められる。

「いい加減諦めたらどう？」

「涼しげな顔をして聖剣を受け止める士郎。その様子が天之河の怒りを煽るには充分だった。」

「うるさい！俺はお前を倒して香織達を取り戻し、ユエ達も救ってみせる！」

諦めの悪い天之河。ハジメ達のいる所で、ユエ達が冷たい目をしていることに気づくことはなかった。

士郎はふとあの時の天之河に対して思ったことがあった。それを今問いただしてみることにした。

「君ってちゃんと中学で歴史の授業、受けたの？」

「受けたに決まってるだろう！」

「じゃあ、戦争のことは？」

「習った！」

当然のことだろう。むしろ今まで中学で習わないのが不思議だ。

「ならなんで参加しようって声高々に言ったの？」

「俺なら……みんなとなら出来るからだ！」

「ふーん……」

メキョオ！

再び士郎の拳が天之河の腹部を捉え、めり込む。

「ガハッ……」

「君は自分が今まで他人に迷惑をかけたことがないの？」

「ゲホッゲホッ……ああ！」

「ならなんで雫や香織が、君と関わった人に謝ってるのさ」

「うるさい！出鱈目言うなあ！」

そう怒鳴ると天之河は力を溜める。

「『霸潰』！」

叫び声と共に天之河の身体に光の奔流が収束する。遂に限界突破の終の派生技能を

使用する。

「天野士郎オオオオオ！」

今までは桁違いの速度で聖剣を構えた天之河が士郎に突撃する。

ドゴオ!!

物凄い、音がした。

士郎の拳がカウンターで天之河の腹部を3回目も捉え、後ろの岩壁まで飛んでいき、そのままめり込んだ。自身の突撃した勢いと士郎の拳の威力により、気絶していた。

「ふう……勝負あり……でいいよね？」

誰も文句を言う者はいなかった。

壁に激突し、気絶した天之河が医務室に運ばれる。このまま騎士団と勇者パーティはホルアドから一旦、王国に戻るようだ。

すると坂上が士郎の元に走ってくる。そして勢いよく頭を下げる。

「天野先輩！光輝が本当にすいません！」

「いや、別に君が悪い訳じゃないから、謝る必要はないよ？」

坂上のあまりの謝罪の勢いに、士郎はたじろぐ。

「それでも俺の気が済みません！」

坂上は頭を下げ続ける。

「とりあえず頭上げて」

「はい……」

「道中、恵里から聞いたよ。前衛として頑張ってたこと」

「はい……」

「だからまあ気にしないで」

「わかりました！」

「ハジメ！坂上くんと鈴、遠藤くんに渡す物があるんだけど……」

士郎は鈴がどこに居るか探す。どうやら恵里と会話しているようだ。

「私、鈴呼んでくるわ」

雫が鈴を呼びに行く。

3人揃い、ハジメが宝物庫から袋を三つ取り出す。

「オニーサン渡す物って何ですか？」

「3人には武器と防具を渡すね」

士郎とハジメはそれぞれに袋を手渡す。

坂上に渡した袋には、小手と服。鈴に扇とロープ。遠藤には短剣と衣だ。

「使い方は同封されてる紙を読んで」

「えつと……本当にいいんですか？紙を見た感じ、とんでもないアーティファクトなんですけど……」

「用意出来たのが君達と恵里の分だけなんだよね……檜山達には渡すつもりはないけど。他のメンバーの分も用意したかったんだが……サイズやら天職、使用武器を把握してなかったから作れなかったんだ。その点は謝る。状態異常耐性上昇の腕輪も作ったし、檜山達以外に渡しといて」

「光輝の分は？」

「多分受け取らないだろうから、預かってもらおうよ」

「あはは……頑張って使い熟してみせます！」

「そうしてくれると嬉しいよ」

「恵里も頑張つてね！」

「うん、鈴木」

士郎が天之河の相手をしている間――

「そういえば、僕に向けて魔法を放ったの誰か知ってる？」

ハジメは特に恨みを持っていないわけではない。あの時奈落の底に落ちたのは後悔

してない。それとは別に、香織が悲しんだ事が許せなく、いつか犯人を問い詰めてやろうと思っていた。

ただここで素直に名乗り出るのなら、少しだけ優しくしてやろうと思っていた。

「……」

名乗り出ることはなかった。

「まあ良いやどうせ檜山なんでしょ？」

「な、なんで知ってんだよ！」

「畑山先生から聞いたからね」

「ハジメくんに謝りもしないんだね……」

「……あいつがハジメに魔法を当てた奴？」

するとユエはウルで愛子から聞いた事を思い出す。「真っ直ぐ撃つ筈の魔法が何故か南雲君に向かって曲がってしまった」と。魔法のエキスパートである自身からすれば、それはあり得ないことだ。

魔法は撃てばその通りに放たれる。つまり真っ直ぐ撃つなら、真っ直ぐにしか進まないのだ。

「……貴方が騎士団の団長？」

「ああ……お嬢さん……君は一体？」

「彼女はユエ。僕達のパーティーのメンバーの中でもトップクラスの魔法使いです」

「なるほど……そんなお嬢さんが何のようだ？」

「……私は魔法の事……ハジメに撃った魔法の事を話してきた」

「坊主に向かった魔法……何か仕掛けがあったと言うのか？」

「……ん。魔法が自分でも知らないのに曲がったなんて真つ赤な嘘。魔法は決められた詠唱、魔法陣によって、撃ち方とか細かいことは全部、決められている。つまりその男はハジメに向けて魔法を撃ったということ」

「で、出鱈目言うんじゃない」「黙ってる大介」……ぐっ」

檜山は突かれたくない所を言われたのか、怒鳴って誤魔化そうとしたのだが、メルドの一喝に怯む。

「……動機なんてものはどうでもいい。ただそいつは殺意を持ってハジメに魔法を放った、それだけ。どう対応するかは貴方次第」

その言葉に檜山の顔は顔面蒼白というのを通り越した白さだ。

「なるほど……ユエ殿が言うのなら本当なのだろう。大介の処罰は王と相談してみよう」

「クソっ！クソっ！なんなんだよ！白崎が生きていたのは良いが、キモオタ共まで生きてやがった！」

時間は深夜。

思わぬ方向から罪を告発され、再び監視下に置かれることになった檜山は拳を叩きつけながら、押し殺した声で悪態をついていた。彼の瞳は、憎しみと動揺と焦燥で激しく揺れていた。それは、もう狂氣的と言っても過言ではない醜く濁った瞳だった。

「クソが……どうしたら白崎を俺のものに出来る……」

檜山は土郎が天之河と戦う前に香織がハジメと離れるつもりがないと言った。つまり香織とハジメが恋人関係にあると言うことだ。

すると突然、何かの羽ばたきの音が檜山の耳に入る。

音の元を探すと、どうやら上のようなようだ。

音の主は背中に銀色の翼を持ち、銀色の髪、美しさと不気味さを兼ね備えた顔を持つ女だ。

「私はノイント、主の名で貴方を主の元へ連れて行きます」

ノイントと名乗った女性によって、檜山は神域と呼ばれる場所へ連れて行かれることになった。二人は光りに包まれ、薄れた時には、そこにはもう誰もいなかった。

勇者パーティー達が王国に戻り、士郎達はホルアドにあるちよつと良いところの宿屋に向かう。

マジデの宿

この宿名に既視感を感じた。

「いらつしやいませ！マジデの宿へようこそ！本日はお泊りですか？それともお食事だけですか？」

「宿泊で、部屋割りは……」

「いつも通りで、恵里は士郎と一緒に良いしょ？」

「勿論だよ」

いつも通りの部屋割りで部屋に入る。リーニャはミユウと一緒に寝ると言ったので別室になった。

そして風呂にも入り、そろそろ寝ようと支度をしたその時だった。

ネグリジエ姿の恵里が士郎に抱きついてきた

「お兄ちゃん……僕のハジメテ貰ってくれる？」

「恵里……それって……」

「お兄ちゃんの考えてる通りだよ。あのね僕、お兄ちゃんと再会出来た時にそうシたいつて思ってたからね……勿論、雫とシアさんも一緒にだよ？2人と相談して、2人共

「一緒にやるって」

士郎は恵里の事を当然大切に想っている。その彼女から夜の誘いをされたのだ。

「恵里さん、わたし達も準備できましたよ」

「これで大丈夫なのかしら……」

備えつけの更衣室から雫とシアが露出度の高い格好で出てきた。

「ふ、2人共……」

「恵里さんも合流しましたし、わたしの……処女を貰って下さい！」

「私も……お願い、貴方の手で奪って……女にして」

「……まで言われてしまえば、士郎も男として応えねばならない。

「わかった……3人のこと……抱かせてもらうよ……」

この日、士郎達は大人の階段を一斉に登るのだった。

幕間の物語 part ② 勇者と拳士

翌日、アレの事後処理を終わらせた士郎達は、ホルアドを出発する。

一方、王国では士郎の強烈な一撃で気絶した天之河が目を覚ました。

「……………ぐつ……………ここは……………」

「光輝、目え覚めたか」

「龍太郎……………」

「腹は痛くねえか？」

「ああ……………もう大丈夫だ……………そうだ香織達は?」

「もうホルアド出たとよ」

「つ!なら早く追わないと!」

「やめろ光輝」

天之河はベッドから飛び起きて、聖剣と鎧を取りに行こうとする。しかしそれは龍太郎によって止められる。

「龍太郎……………」

「光輝……………聞きてえことがある。オメーなんであの時、天野先輩達にあんなこと言った

んだ。家族じゃないって」

「……それは、2人は血の繋がりが無いからだ……」

「そうか……」

龍太郎は一度顔を下げる。そして――

バギイツ！

拳で思いつきり天之河の頬を殴り飛ばす。

「龍太郎……何をするんだ……」

「光輝、一度俺とサシで勝負しろ」

訓練場

何も遮蔽物のないこの場所には天之河と龍太郎、審判役にメルドが立っている。

天之河は聖剣と鎧を龍太郎はガントレットと軽い鎧を装備している。

「双方準備はいいな。ルールは技能の使用を禁ずる、己の経験のみで戦うこと！……模

擬戦開始！」

真つ先に動いたのは天之河だった。ワンステップで近づいて龍太郎の頬を殴り飛ばす。その威力に龍太郎は後ろに飛んで行くが、身体を翻し着地する。

「……」いつで今朝の分はチャラだ」

龍太郎は6回飛ぶ。左右に揺さぶり、天之河に狙いを定めさせないためだ。龍太郎は天之河の腹に一撃を放つ。

それをかわして、反撃の斬撃を入れる。しかし龍太郎は地面に手を着き、膝で蹴りを入れるように受け止める。そのまま足を伸ばして側頭部に蹴りを放つ。天之河は首を逸らしてかわそうとするも、ギリギリ当たり踏跟めく。

その隙を逃すまいと拳の連続攻撃が天之河の腹、鳩尾、聖剣を握る手、顎全てを的確に捉える。自身の耐久を上回る、筋力の一撃一撃にダメージが蓄積していく。

聖剣を握る手の力弱まったその時、龍太郎の回し蹴りが聖剣の腹を蹴り飛ばす。天之河の手から聖剣が離れ、訓練場の壁に突き刺さる。

「龍太郎……突然なんでこんな勝負をしたんだ？」

「光輝……なんであの時、先輩がキレたのか分かるか？」

「ああ……」

「ならなんであんなこと言ったんだ」

「間違っているからだ……」

「間違ってる？」

「ああ、家族じゃないだろう！血の繋がらないのに、兄妹だなんて！」

バギイッ！

再び天之河の頬を朝と同じように殴り飛ばす。

「お前はなんであの時、魔族を殺さなかった？天野の邪魔をした？」
「人殺しはいけないことだろう？」

「今は戦争中だ。俺だつてあの時、殺すつもりだったぞ……」

「な……まさか龍太郎お前……あいつに洗脳されたのか……！」

「な訳ねえだろうが！」

「ゴチン！」

龍太郎は鎧の襟を掴み勢いよく天之河の頭に頭突きをかます。

「俺は洗脳なんかされてねえ！天野先輩も洗脳なんかする訳がねえ！」

「うぐっ……！！」

「俺の目を見ろ！これが洗脳された奴の目か！」

そのまま天之河を殴り飛ばし勝負が終わる。

「試合終了！龍太郎の勝ちだ」

訓練場で3人は座っている。

長い沈黙の中、メルドが口を開く。

「光輝、お前は何故士郎に強くあたるんだ？」

「……だってあいつは、人を殺したんですよ」

「なら俺もお前に当たられると思うが？」

天之河は言葉に詰まる。メルドも戦争の中魔人族を殺して来た。それを言われなくともわかつている。

「光輝……あの時魔人族を殺すのを躊躇つただろ？あの時天野は悪態付いてたぞ。多分お前が人殺しを自覚して、それをやらなかったからだつて」

龍太郎はあの時のことを思い出して話していく。

「光輝……正直に言えば俺もあの時あの魔人族を殺すつもりだったぞ？それがこの国に求められてることだと思ってるからな……でも人を殺す、それがどれだけ悪いことなのか理解してる。それは先輩だつてわかっているはずだと思うぜ」

「ならなんで殺したんだ……」

天之河はまたもそこに行き着く。

「しなればならなかったんだろうな……あの人のとつて大切な人を守るために交渉することは必要ないって判断したから。人間と魔人族が戦争してるし……」

「そうか……」

「まあ今すぐに先輩を理解してくれとは言わねえよ」

そう言つて龍太郎は立ち上がり訓練場を後にする。メルドもそれに続いて立ち去る。

その間際天之河に告げる。

「光輝、もし覚悟が決まったなら言ってくれ。迷宮で言った『人を殺す訓練』をさせる。龍太郎は覚悟が決まっている。なにすぐ人を殺せとは言わん。それに近いものを当てる。これからは心をオーガにしてお前たちを教育するつもりだ」

その夜王宮の廊下にて

「龍太郎くん？」

彼を呼ぶ声があった。後ろを振り向くとそこには身長こそ低いもののやる気と元氣のある2つおさげの少女——谷口鈴が立っていた。

「ん？鈴か……こんな夜に一人でどうした？」

「暇だから夜の散歩。それで……今日、天之河くんと勝負したんだね」
「なんだもう広まっていたのか」

いつのまにか自分と親友のサシでの勝負が知られていたようだ。

「ううん、偶々鈴が見てただけ」

「そうか」

「どうやら昼間の勝負を見ていたのは彼女だけのようだ。」

「どうしてあんなことをしたの？」

「光輝の奴が先輩達を敵視してたからな……あのままじゃやばいと思つたからやつただけだ」

「別に龍太郎がやる必要はないと思うけど……それに前『信じれない』つて言つてたし」「信じる、信じないの話じゃねえ……親友だからこそやらなきゃならなかつたんだよ」

「親友だからこそ?」

「ああ、親友が間違つた方向に進もうとするならそれを止めるのが親友だ……」

「変わったね龍太郎くんも」

「天野に色々と忠告されたこともあつたからな……」

「そうだね……完全に脳筋だったもんね龍太郎くんは」

「今思うと俺つて光輝に着いてくる金魚のクソみてえだったな……」

龍太郎は窓から見える三日月を見上げて過去の自分を思い出す。

いつも天之河の後ろを着いて行き彼のすごい所を見ては、感動して更に彼を慕つていた。

そして士郎と出会つた時のことも思い出す。

偶々ランニングしていた時、ルートが同じだったので一緒に走つた。自分が空手をやって話を話した筋トレの情報交換しあつたことがとても懐かしい。

「なあ鈴……もし俺が間違つたことをしそふになつたら……止めてくれねえか?」

「鈴が？」

「ああ……これはお前にしか頼めねえ……情け無い話だな……」

鈴は顔を下げて少し悩んだ素振りを見せる。そして顔を上げる。

「任せて！もし龍太郎くんが間違えそうになったら鈴がガツーンって止めてあげる！」

「ああ……！頼むぜ！」

互いの拳をコツンとぶつける。すると鈴は『ふわあ』と欠伸をする。

「そろそろ寝るか……また明日な」

「うん……おやすみ龍太郎くん」

二人はそれぞれの就寝する部屋に戻って行った。

「先輩……俺は強くなれてんのかなあ」

彼の呟きに応えたのは風で揺れた窓だった。

幕間の物語 part ③ 虹を写す一雫

時は遡って樹海を出た時。

シアは気になっていたことがあった。

「雫さん、一つ聞きたいことがあるんですが」

「いいわよ」

「士郎さんと出会ったのはいつなんですか？」

「士郎さんと出会った時ね……あれは11歳の頃で……」

『ザァー』と音を立てて雨が勢いよく降っている中青い傘と紫の傘をさし、二人で帰る少年少女——天野兄妹は水溜りを避けて歩いていった。

「雨強いね……」

「雷がないだけマシだよ……」

とまあ雨が好きではない会話をして下校していた。2人は図書室で本を読み耽り過ぎて完全下校時間ギリギリに学校を出たばかりだ。

すると雨の音に混じって誰かの噺り泣く声が士郎の耳に入る。音の場所を探すよう

にキヨロキヨロと辺りを見回す。

「お兄ちゃん？」

「恵里、誰かの泣いてる声が聞こえたんだけど……」

「え？……本当だ……誰なんだろう……こっちの方みたい」

恵里も耳を澄ますと彼女にも啜り泣く声が聞こえた。

「とりあえず行ってみよう……」

2人は音源の所まで行く。

そこは明らかに誰も目につかないような路地裏だった。中も暗くて見え辛いが1人が蹲って泣いていた。

「あの～そんな所で泣いて、どうしたの？」

泣いてる当人に士郎は話しかける。話しかけられたショートカットの人は振り向くと、2人を警戒したように見る。

「誰……？」

女の子の声だ。しかしその声は弱々しく、怯えを含んでいた。まるで初めて恵里と出会った時のようだった。

足下には雨と泥で汚れたストラップ人形が落ちていた。

恵里はそれを手に取ってまじまじと見る。

「これ君の？」

「……うん」

恵里が手に取った熊の人形には泥以外にも足跡が付いていた。

「酷い汚れだね……踏まれた後もある……誰にやられたの？」

「……クラスの友達に」

「いやいや……人形にこんなことする人を友達とは言わないよ？」

「……何があつたの？……あ、ボク天野士郎。それでこつちが妹の」

「天野恵里。君の名前は？」

「……八重樫雫」

「八重樫さんか……君が良ければだけど一旦、ボク等の家に行こう……それでなんでもななことになつたか教えてくれる？」

士郎が雫にそう聞くと、彼女は少し俯く。どうやら話しているのか悩んでいるようだ。

数十秒が経過して、口を開く。

「お願いします……」

雫を連れて帰宅し、熊の人形を洗う。両親は出かけていかなかった。

話によると雫が学校の友人と放課後の時間、一緒に遊んでいて自分が集めてる人形をその友人に見せたりしてたのだが、突然友人達から呼び出されて友人から言われたのが、「あんた女だったの？」である。さらに人形をぐちゃぐちゃにされてしまった。そのことを幼馴染に相談したのだが、話し合わせられてしかも何故かいじめられた雫も謝ることになった。その時に言ったのが「彼女達がやったことは悪いことだ。俺が謝らせてくる。だけど雫も彼女達に何かしたんだらう？だからお互いに謝り合おう」という虐めてきた側も庇うようなものだった。

それだけならまだ抑えられた。今日も呼び出されこの路地裏に訪れて言われたのが、「光輝くんにチクリやがって。嫌われたらどうすんだよこの男女！」そう言われて、お気に入りであるストラップの人形を踏み潰され、雫自身も泥に突き飛ばされた。

「……酷い話だね」

「……もうどうしたらいいの?」

諦めたように俯いてしまう。

「とういか光輝って呼ばれてる君の幼馴染は何を考えてるのかな……余計に悪化させて……まず味方をするのは八重樫さんの方なのに」

雫の幼馴染のあんまりな対応に恵里は呆れ果てたようにため息を吐く。

「でも光輝くんは私を皆と仲良くするために「それで君が傷ついたら意味ないよ」……」

雫が幼馴染を庇おうとするのだが、士郎はそれを遮る。

「その幼馴染は結局、『君』じゃなくて君を含めた『皆』という物しか見てないんだと思うよ……」

士郎は幼馴染の行動から、その幼馴染が見ているものを推測する。

士郎は恵里を護る為に父親から、あらゆる知識を吸収している。真つ先に学んだのが虐め関連の物だ。

「……それじゃあ光輝くんは私を助けてくれないの……？」

「根本的にはね……」

雫は士郎の話に絶望する。

頼みの綱である幼馴染さえダメだと言われた。あとは何を頼ればいいのかわからなかった。

「ねえ八重樫さん、親には相談しないの？」

「お父さん達には迷惑をかけられないから……」

すると恵里は雫の両肩を掴む。

「八重樫さん……親つて言うのは迷惑かけてなんぼだよ？僕だったお義父さんやお義母さんに迷惑かけたことがあるし」

しかし雫は中々納得しない。まだ何か懸念していることがあるようだ。

「もしかして、自分以外……自分の次に虐められそうな人がいるの?」

雫はハツとした顔になる。どうやら凶星のようだ。

「……私も虐められるのは嫌よ……でも香織が私の代わりに虐められるのはもつと嫌……どうしたら……どうしたらいいのよ……!」

彼女自身の心の支えになっている、少女の名前を叫びながら、心に溜まっていたモノを叫ぶ。

「……とりあえず、君を虐めてきた人を教えてくれるかな?」

あの後ストラップが乾くのに時間がかかるので明日、指定した所で待ち合わせを決めた。

しかし翌日、雫はいじめっ子に再び同じ場所に呼び出される。断ることも出来ず、昨日の路地裏に連れて行かれる。そこに居たのは自身よりも背の高い男子が数人いた。

どうやら遂に完全に武力行使に出るようだ。

雫自身負けるつもりはなかったが多勢に無勢の上体格差もあるため勝ち目がなかった。

「あんたが光輝くんから離れないから悪いのよ?」

そして数人の男子生徒が雫を囲う。雫はなるべく痛みを堪える為に蹲る。

カシャ！カシャ！

2回学校などで聞くシャッター音が路地裏に響く。

「八重樫さん……大丈夫？」

雫が顔を上げた先に立っていたのは、昨日自身のストラップを返すと言った少年だった。

「寄つてたかつて年下の女の子虐めるとか……男としてのプライドないの？」

「誰だお前！」

「ボク？そうだな……悪いやつをやっつけに来た通りすがりの「邪魔すんな！」うわア！自己紹介は邪魔しちやいけないうって習わないの!？」

長つたらしい自己紹介をしようとした士郎に、我慢出来なくなった1人が殴りかかる。

しかしそれを避けられる。

「危ないなあ全く……」

そう呟くと再び自己紹介を始める。

「ボクは悪いやつをやっつけに来た通りすがりの別の学校の生徒さ！」

そう言うのと、男子の1人が笑い始める。

「ダッセエ自己紹介だな！」

「まあそんなダツセエ奴に君は注意されてる訳だし……もつとダサイね！」

士郎は煽られたかと思うと逆に煽り返すのだった。その言葉にキレたのか雫を囲んでいた男子は士郎を囲い始める。するといつのまにか雫の後ろに恵里が立っていた。

「八重樫さん……こつち、早く」

「でもお兄さん……」

「お兄ちゃんは大丈夫。だから早く」

恵里は雫の手を引いて路地裏を抜け出す。

一方の男子は手をポキポキと鳴らす。

「テメエみたいな生意気なやつはこうだ！」

また殴りかかる。今度は士郎の後ろの男子が羽交い締めしており、避けることが出来なくなっていた。

しかし士郎は頭を自らぶつけに行く。

ゴキーン！

「イツデエエエ！」

「ごめんね、ボク石頭だからさ？」

そういうと士郎は羽交い締めしている男子にも後頭部をぶつけて男子から離れる。

「それじゃあみなさんバイビー！」

士郎も恵里達とは別の方向に逃げる。

「待ちやがれ！」

残りの男子が後を追う。士郎は突然逃げるのをやめ、回し蹴りをする。

「ゲフっ！」

「せい！」

さらに飛び蹴りをもう1人の頭にかまして、残りの2人には鳩尾に正拳をめり込ます。

そのまま士郎は恵里達と合流する。

「恵里！八重樫さん！」

「お兄ちゃん！あいつらは？」

「蹴りと正拳かましてやった」

「そっか……」

「あの……なんで、ここに来たの？」

「待ち合わせ場所に来なかつたから、もしかして……って思つて昨日の場所に行つたら」

「君がいたんだよ。いじめっ子と一緒にね」

「……なんで助けてくれるの？」

「そりゃあ昨日知り合つて、助けて欲しそうだから勝手に助けただけだよ？」

士郎は雫の問いに対して、『何を当然のことを』と言った感じで答える。
「とりあえず虐めの証拠も抑えたし。あとは教育委員会に提出しちゃおう」

「と言った感じよ」

「士郎さんは皆さんの故郷にいた頃から優しいのですね……」

「そうね……」

幕間の物語 part ④ 闇に光を

ちよつと時は進んでフューレンで士郎達がデートしている時、幸利達が屋台を食べ歩いている頃。

「そういえば幸利が士郎さんと本屋で意気投合したって聞いたけど、出会ったばかりのアンタってどんななんだったの？」

「藪から棒にどうした？」

「士郎さんがあなたの目が出会ったばかりの頃に戻ってるって言ってたから気になったのよ」

「それは妾も気になったのじゃ」

「……中2の頃だな……確かその時は香織もハジメのことを知った時期らしいし」

快晴、ジリジリと地上に住む人間の肌を照りつける日光が厳しい夏だ。これでもまだ朝方だと言う。

士郎は行きつけの古本屋『マスカレード』に足を運んでいた。

「ダ○の大冒険あるかな……あった」

士郎が家がない巻を手に取りうとした時だった。士郎とは別の左手が同じのを取ろうとしていた。

「あ」

その手の正体は、髪はボサついており、腕も痩せていた。顔を見ると寝れていないのかクマが出来ていて、おまけに目がドロつと澱んでいた。頬も痩せこけていた。

「すいません……」

「ああ、大丈夫。君もこれ読むの？」

「えっと……はい……」

「そうなんだ……ねえ、よかつたらこの後近くの公園で話さない？」

清水幸利は家に引きこもり、アニメやゲームの類をやる毎日を過ごしている。家族からの批難の目も無視している。

しかしある日、兄と遭遇してしまった。口喧嘩の末、幸利は財布を持って家を飛び出した。

飛び出したはいいものの、行く当てもなくただ町中をぶらぶらと歩いていた。その時、目に入ったのが古本屋『マスカレード』だった。

行く当てもないのでそこに入る。

中は大量の本で埋められており、新品同然の物や、日焼けしてしまった物など様々だ。ウロウロと本を見て回ると、家で読んでいる途中の本があったので手に取って読もうとしたその時、別の右手が現れる。

「あ」

これが、清水幸利と天野士郎の出会いだった。

公園に移動した2人は、自販機で飲み物を買ってベンチに座る。

「えっと……自己紹介からだね……ボクは天野士郎。タメ口でいいよ

「……清水幸利だ」

「清水くんか……さっきダ○の大冒険取ろうとしてたけど君も読むの？」

「まあ……家には全巻あるから……」

「へえ、いいなあ」

「まあ、家族はみんなそう言った物が嫌いな人ばかりだけど……俺だけ特殊な奴なんだよ」

「特殊で何が悪いんだろうね。英語ならSpecialって言うのに」

「千葉県のシスコン高校生か……」

士郎と話していくうちに幸利の表情は徐々に明るくなっていた。

日も上りそろそろお昼になった頃、士郎は行きつけのラーメン屋に行く予定だった。

「ねえこの後ラーメン屋行くけど清水くんも行く?」

幸利としては家族に顔を合わせたくないので、士郎について行くことにした。

ジュースを飲み切り、そのままゴミ箱に空のペットボトルを投げ入れて公園を出る。

そのまま通りを左に歩き、大通りに出る。そのまま道なりに進むと、『本格的ラーメン! 鳴門屋!』と書かれた看板な店に入る。

「へいらっしやい! おお? 士郎に……隣の坊主は?」

「さっきマスカレードで知り合った。おっちゃんいつもの豚骨醤油ラーメンネギマシマシで。清水くんはどうする?」

清水は立ってかけられているメニューに目を通す。どれも美味しそうな物ばかりで悩む。

「味噌ラーメンで」

「あいよ!」

2人はカウンター席に座り、公園での話しの続きを始める。

「えっと……家族が清水くんの趣味に理解を示してくれないんだっけ? 特にお兄さんが」

「……兄貴は世間一般で認められてる物にしか良い目をしないんだ」

「視野が狭いねえ……あれかな？ 鬼○の刃だつてジ○リの○と千尋の収入抜いたことも興味ないタイプ？」

「……そうだな……兄貴は勉強だの将来だの大人になれだの言つてきて……それが大事なのはわかつてるんだけど……」

「まあそう言つた物が大事なのはボクもわかるけど……具体例がないよね。大人になれ？ そんなの大人だつてゲームしたり漫画だつて読んだりするのに……なんならボクの幼馴染の親、そっち方面の社長だよ？」

「……まじつすか」

「……まじつすよ」

「お待ち！ ネギマシマシ豚骨醤油に味噌ラーメン！」

幸利が驚いているうちに2人のラーメンが運ばれてくる。食欲を唆る良い匂いが2人の鼻腔をくすぐる。

「それじゃあ、食べよつか」

「いただきます！」

ズルズル！

麺はコシがしつかりしており、コクのあるラーメンスープと見事に絡み合う。チャー

シユーも嘸まずに舌の上で蕩ける。

「うめえ……」

「でしょ！ここのラーメンホント美味しいんだよね。今度、炒飯も頼んでみると良いよ」

幸利は麵を勢いよく啜る。淀んでいた目に少しばかり光が灯る。

「こんなに美味しいの久しぶりに食った……」

「人に良いと書いて『食』だからね。人は食が基本だと思ってる」

「……あんた面白い人だな」

幸利はクスリと笑った。

「つて感じだ」

「そんなことがあったのじゃな……」

「引きこもり辞めてからは両親と弟からの当たりは収まったけど、兄貴は相変わらずだ
がな」

「じゃあウチに来たのは？」

「それは士郎にラーメン屋連れてつてもらった時に飯を食うことに目覚めたんだよ。食
べ歩きして、ウイステリアに寄った」

「それで調理実習で料理が上手って噂が立った時は？」

「ありや俺が自分で美味しい物食いたい一心で料理の研究してただけだ」
「へえ〜」

幸利達はここのまま屋台を食べ歩くのだった。

砂漠と火山と大海

砂漠って暑いし寒いから好ましい場所じゃないよな。そんな所の事件って……

ホルアドマジデの宿にて

士郎は昨日の夜、恵里達3人を抱いた。そのことについては後悔はしていない。

「とりあえず3人を起こさない」と

恵里達を起こして、出発の準備をする。朝食は軽く済ませて、ブリーゼ（車）に乗って大火山を目指す。

「わあ……本当に車だ……」

宝物庫から現れたブリーゼに恵里は感動する。

「その内空中要塞も作るつもりだよ。なんとたつてロマンがあるからね」

「それじゃあ出発するか。今回の運転は俺がする」

「幸利殿、今回は私に任せてくれないか？君は最近運転することも多かつただろう」

「……そうだな。頼むわヴェアベルト」

今回の運転はヴェアベルトがするようだ。

士郎達は真ん中の列に座る。

座席はこんな感じになっている

○運

○ ○ ○ ○

○ ○ ○ ○

○ ○ ○ ○

○ ○ ○ ○

荷物置き

荷台

とかなり広く作られている。

ブリーゼがホルアドから出発して、数十分が経過した。

「パパすごいの一！とつても涼しくて目も痛くないの一！」

「ハジメお兄ちゃんすごい……！」

幼女2人はハジメ制作の車に感動し、キャツキャツとはしゃぐ。

砂漠の上も錬成整地の能力で進んでいるので、沈む事はない。

しばらく走っていると、何かが大地感知に引っかかった。

「ヴェアベルト、三時方向になんかいる」

「む？あれは……サンドワームか？」

「だとするとおかしいのう。まるで食うか食わざるか迷っておるようじゃ」

「まあ、そう見えるな。そんな事あんのか？」

「妾の知識にはないのじゃ。奴等は悪食じゃからの、獲物を前にして躊躇うということはないはずじゃが……」

ドMの変態であるティオだが、ユエ以上に長生きな上、ユエと異なり幽閉されていたわけでもないので知識は結構深い。なので、魔物に関する情報などでは頼りになる。その彼女が首をかしげるといふことは、何か異常事態が起きているのは間違いないだろう。

しかし、わざわざ自分達から関わる必要もないことなので、こちらは避けて進む。

「つー全員何かに捕まれー」

ヴェアベルトはブリーゼを突然加速させる。後方から突如サンドワームが飛び出てきたようだ。

ヴェアベルトは、さらに右に左にとハンドルをきり、砂地を高速で駆け抜けていく。そのSの字を描くように走る四輪の真下より、二体目、三体目とサンドワームが飛び出してきた。

「きゃあああー」

「ひうー！」

「ひゃあー！」

「わわわー！」

「おおつととと」

「ゴチン！」

「いったあー！」

ブリーゼが左右に大きく揺さぶられ、士郎達は体勢を崩す。香織がユエとハジメの上
に乗り、その上にミュウが乗り。幸利と優花の頭がぶつかつたりした。

サンドワームはブリーゼの前に大口を開いて待ち構えている。

「何気にこれを使ったところは今まで見た事なかったな……い！」

ヴェアベルトはブリーゼをドリフトさせて車体の向きを変え、バック走行すると同時
にブリーゼの特定部位に魔力を流し込み、内蔵された機能を稼働させる。

「ガコンツッ！ カシャ！ カシャ！」

機械音が響き渡ると同時に、ブリーゼのボンネットの一部がスライドして開き、中
から四発のロケット弾がセットされたアームがせり出してきた。そのアームは、獲物を
探すようにカクカクと動き、迫り来るサンドワームの方へ砲身を向けると、『バシユ！』
という音をさせて、火花散らす死の弾頭を吐き出した。

オレンジの輝く尾を引きながら、大口を開けるサンドワームの、まさにその口内に飛び込んだロケット弾は、一瞬の間の後、盛大に爆発し内部からサンドワームを盛大に破壊した。サンドワームの真っ赤な血肉がシャワーのように降り注ぎ、バックで走るブリーゼのフロントガラスにもベチャベチャとへばりついた。

残りの2匹も内蔵シユラーゲンで撃ち抜く。

「うわあ……スプラッタ……恵里、リーニヤの目、隠してくれる？」

「そうだね……」

「ママ見えないよ？」

「見ちゃいけないよ……」

体勢を崩しながらもリーニヤの目を手で覆う。

「たしかに見せられないわね……」

「血塗れですう……」

「悪い優花……」

「不可抗力よ……」

幸利と優花の2人はぶつかり合った頭を押さえる。

「香織……降りて……苦しい……」

「い、いめんねユエちゃん！」

ユエは顔が座席を向いていたので呼吸がし辛くなっていた。

慌てて香織はミユウを抱えて降りる。

「とりあえず、何があつたか調べてみるでしょう」

サンドワームが食うか悩んでいたのは人だった。その人はエジプトの民族衣装に似た白い服を身に纏った20代半ばぐらいの男だった。

苦しうに歪められた顔には大量の汗が浮かび、呼吸は荒く、脈も早い。

服越してもわかるほど全身から高熱を発している。

しかも、まるで内部から強烈な圧力でもかかっているかのように血管が浮き出ており、目や鼻といった粘膜から出血もしている。

香織が『浸透看破』で診察する。

「魔力暴走？ 摂取した毒物で体内の魔力が暴走しているの？」

「香織？ 何がわかつたんだ？」

「うん。これなんだけど……」

|||||

状態：魔力の過剰活性 体外への排出不可

症状：発熱 意識混濁 全身の疼痛 毛細血管の破裂とそれに伴う出血

原因：体内の水分に異常あり

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

「おそらくだけど、何かよくない飲み物を摂取して、それが原因で魔力暴走状態になっているみたい……しかも、外に排出できないから、内側から強制的に活性化・圧迫させられて、肉体が付いてこれてない……このままじゃ、内蔵や血管が破裂しちゃう。出血多量や衰弱死の可能性も……『万天』！」

香織は中級の治癒魔法を使う。万天の効果は状態異常の解除だ。

「……効果が薄い……どうして？浄化しきれないなんて……それほど溶け込んでいるということ？」

「治せないのか？」

ハジメがそう聞く。

「わからない……『廻聖』！」

廻聖は一定範囲内における人の魔力を他者に譲渡する魔法だ。

それを使いこの人の余剰分の魔力を吸い出し、彼女の所持している神結晶の指輪に魔力を溜める。

「とりあえず今は大丈夫。だけど、根本的な治療は出来てないからまたその内症状が出

てくると思う」

つまり香織が行ったのは症状を悪化させないための保存療法という事だ。

「この世界の病気にはあまり詳しくないけど、ユエちゃんやテイオさんは何か知らないかな？」

香織がこの世界の年長者であるユエとテイオに問いかける。

だが、2人とも覚えが無いのか首を傾げたり、首を横に振るだけだ。

「香織、念のため僕達も診察しておいてくれ。未知の病だというなら空気感染の可能性もあると思う。まあ、魔力暴走ならミュウとリーニャの心配は無用だけど」

「うん、そうだね」

ハジメの言葉で香織は士郎全員を診察したが、異常は見当たらなかった。

その事に一先ずホツとしていると、先程の男が目を覚ました。

「……………う」

「あつ、大丈夫ですか？」

香織が心配そうに声を掛けると、その男は香織をボーッと見つめた後、

「……………女神？そうか、ここはあの世か……」

香織に見惚れた様にそう言った。

そのまま白崎さんに熱っぽい視線を向け、香織に触れようと手を伸ばし始めたのだ。

ハジメはそんな行為を看過することが出来ず、その男の手を『パシン！』とはたく。

「おふっ!？」

「ハ、ハジメくん!？」

（ハジメは独占欲が強いというか……ボクも人のこと言えないけど）

「まず、助けてくれた事に礼を言う。本当にありがとう。あのまま死んでいたらと思うと……アンカジまで終わってしまふところだった。私の名は、ビイズ・フォウワード・ゼンゲン。アンカジ公国の領主ランズイ・フォウワード・ゼンゲン公の息子だ」

どうやらこのビイズと名乗った男は結構な大物だったようだ。

彼の話によると、最近アンカジで流行病が広まり、倒れる人が続出。医療院は飽和状態となり、公共施設を全開放して医療関係者も総出で治療と原因究明に当たったが、進行を遅らせることは何とか出来ても完治させる事は出来なかった。

処置を受けられなかった人々の中から死者が出始め、発症してから僅か二日で死亡するという事実には絶望が立ち込める。

飲み水やオアシスを調べたところ、魔力の暴走を促す毒素が含まれていることがわかった。

治療する為にはグリーエン大火山でしか採れない静因石を使うという。

外部に助けを求める為にビイズが出たのはよかったが、護衛はサンドワームに襲わ

れ、彼の身体にも症状が現れ始めて死にかけてところに士郎達が現れたと言う。

「……君達に、いや、貴殿達にアンカジ公国領主代理として正式に依頼したい。どうか、私に力を貸して欲しい」

そう言つて、ビイズは深く頭を下げた。車内にしばし静寂が降りる。窓に当たる風に煽られた砂の当たる音がやけに大きく響いた。領主代理が、そう簡単に頭を下げるべきでないことはビイズ自身が一番分かっているのだろうが、降つて湧いたような僥倖を逃してなるものかと必死なのだろう。

(アンカジにリーニヤとミュウを預ける予定ではあるし、大火山にも行く……アンカジを助ける代わりのギブアンドテイクになるね……)

士郎は長考していた。早く大迷宮を攻略しなければならぬこと、リーニヤとミュウの安全の確保。この二つのことで悩んでいた。

「パパ……助けてあげよう?」

リーニヤの懇願するような瞳に士郎は了承することにした。

「……わかりました。その依頼受けましょう。元々アンカジも大火山も行く予定だったし」

「感謝する……」

ビイズは感極まった様に涙を流した。

その後、すぐに気を取り直す。

「士郎殿が『金』クラスなら、このまま大火山から『静因石』を採取してきてもらいたいのだが、水の確保のために王都へ行く必要がある。この移動型のアーティファクトは、士郎殿以外にも扱えるのだろうか？」

「リーニャとミュウ以外は扱えるけど……わざわざ王都まで行く必要はないかな。水の確保はどうか出来るだろうか、一先ずアンカジに向かいたい」

「どうにか出来る？それはどういふことだ？」

怪訝そうに聞くビイズに内容を説明しながら、士郎達はアンカジへと向かった。

砂漠の国アンカジ

アンカジの入場門は高台にあり、そこから街が見渡せるようになっていた。

アンカジの建物は乳白色で彩られており、素人目から見ても美しい都だと思った。

しかし、都は美しくても人々の活気は全く無く、建物の扉は固く閉じられており、人通りは殆どない。

ビイズは活気ある街を見せたかったと残念そうにそう言っていたが、今は一先ず問題の解決が先だという事で宮殿へ向かうことになった。

アンカジを出て一日で戻ってきたビイズに領主であるランズイは大層驚いていたが、そのランズイも衰弱している筈なのに執務室で気合いと根性で仕事に励んでいたのだ、よほどの人格者らしい。

そんなランズイに王国にいた王族や貴族なんかよりも好感が持てると思心した。

ビイズがランズイに事のあらましを説明し、トントン拍子で話が進んだ後、手分けして問題の解決に乗り出すことになった。

「それじゃあ……ボクとヴェアベルトは静因石擬きの制作。恵里、雫、シア、香織は治療院に收容されている患者の所に当たってくれ。魔晶石も持って行って、それが溜まった

らユエに渡して。残りはオアシスを」

それぞれ手分けして、アンカジの救助に当たる。

リーニヤとミュウは治療院で恵里達の所で待つことになった。

「ヴェアベルト、静因石の特徴を教えてください。」

「うむ、静因石は魔力を鎮める石と聞いた。生成魔法で作るのならば、魔力操作の技能を応用するのがよいだろう」

「なるほど……」

『ワタシモシラナイ……チカラニナレナイ……』

久しぶりに喋ったメルリアンは落ち込んでいた。

「私も本に載っている物しか知らない……仕方ないさ……」
ヴェアベルトはメルリアンの喉を撫でた。

三人称ハジメ side

「領主、最低でも二百メートル四方の開けた場所はある？」

「む？うむ、農業地帯に行けばいくらでもあるが……」

ランズィに案内され、農場に案内される。

「ユエ、お願い」

「……ん『壊劫』」

前方の農地に頭上に向けて真っ直ぐにつき出された右手の先に、黒く渦巻く球体が出現する。その球体は、農地の上で形を変え、薄く四角く引き伸ばされていき、遂に二百メートル四方の薄い膜となった。そして、一瞬の停滞のあと、音も立てずに地面へと落下し、そのまま何事もなかったかのように大地を押しつぶした。

凄まじい圧力により盛大に陥没する大地。地響きが鳴り響く。それは、さながら大地が上げた悲鳴のようだ。一瞬にして、超重力を掛けられた農地は二百メートル四方、深さ五メートルの巨大な貯水所となった。

ハジメがチャリとランズィ達を見ると、お付の人々も含めて全員が、顎が外れないか心配になるほどカクンと口を開けて、目も飛び出さんばかりに見開いていた。衝撃が強すぎて声が出ていないようだが、全員が内心で「なにいー!?」と叫んでいるのは明白だ。

魔力がなくなつた訳ではないが、かなり消耗したのでユエはハジメに嘔みつき吸血する。

カプツ チュー

吸い終わるとハジメが貯水池を錬成で整地する。そして整地終了後、ユエが水魔法で水を貯める。

魔力が限界近くなると同時に雫とシアが魔晶石を持つてくる。

魔晶石から補給すると、再び水魔法を発動する。

「……………こんなことが……………」

ランズイは、あり得べからざる事態に呆然としながら眼前で太陽の光を反射してオアシスと同じように光り輝く池を見つめた。言葉もないようだ。

「取り敢えず、これで当分は保つだろう。あとは、オアシスを調べてみて……………何も分からなければ、稼いだ時間で水については救援要請すればいい」

「あ、ああ。いや、聞きたい事は色々あるが……………ありがとう。心から感謝する。これで、我が国民を干上からせずつに済む。オアシスの方も私が案内しよう」

ランズイはまだ衝撃から立ち直りきれずにいるようだが、それでもすべきことは弁えている様で、ハジメ達への態度をガラリと変えると誠意を込めて礼をした。

ハジメ達は、そのままオアシスへと移動する。

オアシスは、相変わらずキラキラと光を反射して美しく輝いており、とても毒素を含んでいるように見えなかった。

「……………ん？」

「……………ハジメ？」

「今、魔眼鏡に反応があった……………領主。調査チームつてのはどの程度調べたんだ？」

「……確か、資料ではオアシスとそこから流れる川、各所井戸の水質調査と地下水脈の調査を行ったようだ。水質は息子から聞いての通り、地下水脈は特に異常は見つからなかった。もつとも、調べられたのは、このオアシスから数十メートルが限度だが。オアシスの底まではまだ手が回っていない」

「オアシスの底には、何かアーティファクトでも沈めてあるのか？」

「いや。オアシスの警備と管理に、とあるアーティファクトが使われているが、それは地上に設置してある……結果系のアーティファクトでな、オアシス全体を汚染されるなどありえん事だ。事実、今までオアシスが汚染されたことなど一度もなかったのだ」

「で、どんな効果なんだ？」

「オアシスに害意を持つ者や邪な考えを持つ者の侵入を防ぐ物だ」

「ほう……ティオ！」

幸利は何を思ったか指パッチンでティオを呼び、オアシスの結界に突撃させた。

「ラジャーなのじゃ！ご主人様とサンドワームプレイがしたい！」

バチィッ！

「ヴッー」（低い声）

そう言って突撃したティオは最も容易く結界に弾かれた。そしてティオからは焦げ臭いにおいがした。

「なるほど……優秀なアーティファクトだな」

「我が国、自慢のアーティファクトだ」

「幸利、あんた……」

幸利は感心した。そして優花は呆れた。

ハジメはオアシスの中にペットボトルサイズの金属の塊を投げ入れる。

ドゴオオオオ!!

凄まじい爆発音と共にオアシスの中央で巨大な水柱が噴き上がった。再び顎がカクンと落ちて目を剥くランズイ達。

「うーん……意外にすばしっこい……いや、防御力が高いのか?」

ハジメはそんなことを言いながら、今度は十個くらい同じものを取り出しポイポイとオアシスに投げ込んでいく。そして、やっぱり数秒ほどすると、オアシスのあちこちで大爆発と巨大な水柱が噴き上がった。

ハジメが投げ入れたのは魚雷である。

「おいおいおい! ハジメ殿! 一体何をやったんだ! ああ! 棧橋が吹き飛んだぞ! 魚達の肉片があ! オアシスが赤く染まっていくう!」

「まだ捕まらないか。よし、あと五十個追加で……」

ハジメの魚雷投下により、オアシスから何かが盛り上がって現れる。

現れた何かはハジメ達に向けて触手を放つ。

ハジメは銃撃でユエは氷結魔法で、優花は苦無で触手を破壊する。

「なんだ……これは……」

ランズイの呆然としたつぶやきが、やけに明瞭に響き渡った。

オアシスより現れたそれは、体長十メートル、無数の触手をウネウネとくねらせ、赤く輝く魔石を持っていた。スライム……そう表現するのが一番わかりやすいだろう。

だが、サイズがおかしい。通常、スライムといえば腕で抱えられるほどの大きさだ。しかしこの大きさはウルトラスライムとでも言うべき存在だ。それに周囲の水を操るような力もなかったはずだ。少なくとも触手のように操ることは、自身の肉体以外では出来なかったはずである。

「なんだ……この魔物は一体何なんだ？バチエラム……なのか？」

「まあ、何でもいい。こいつがオアシスが汚染された原因だろ？大方、毒素を出す固有魔法でも持っているんだろう」

「……確かに、そう考えるのが妥当か。だが倒せるのか？」

「問題ないよ捉えたからね。でも一応ユエ、幸利お願い」

「……ん、任された」

「あいよ」

ユエと幸利は重力魔法を使いバチエラムの魔石を固定する。それをシユラーゲンで破壊する。

バチエラムの魔石はあまりの威力に消滅した。

「……終わったのかね？」

「はい、もう魔力反応はないです」

「まあバチエラム排除したからといって、毒素が無くなったかはわからないが」

自分達アンカジを存亡の危機に陥れた元凶が、あっさり撃退されたことに、まるで狐につままれたような気分になるランズィ達。それでも、元凶が目の前で消滅したことは確かなので、慌ててランズィの部下の一人が水質の鑑定を行った。

「……どうだ？」

「……いえ、汚染されたままです」

ランズィの期待するような声音に、しかし部下は落胆した様子で首を振った。オアシスから汲んだ水からも人々が感染していたことから予想していたことではあるが、オアシスバチユラムがいなくても一度汚染された水は残るといふ事実には、やはり皆落胆が隠せないようだ。

「まあ、その気を落とすでない。元凶がいなくなった以上、これ以上汚染が進むことはない。新鮮な水は地下水脈からいくらかでも湧き出るのじやから、上手く汚染水を排出して

やれば、そう遠くないうちに元のオアシスを取り戻せよう」

テイオが慰めるようにランズイ達に言う。彼等も、気を取り直し復興に向けて意欲を見せ始めた。ランズイを中心に一丸となつてゐる姿から、アンカジの住民は、みながこの国を愛しているのだということがよくわかる。過酷な環境にある国だからこそ、愛国心も強いのだろう。

「……しかし、あのバチュラムらしき魔物は一体なんだつたのか……新種の魔物が地下水脈から流れ込みでもしたのだろうか？」

気を取り直したランズイが首を傾げてオアシスを眺める。それに答えたのはハジメだった。

「おそらくだけど……魔人族の仕業じゃないかな？」

「確かに……ウルやオルクスにも襲撃されたからな……魔人族も何かあつたんだろうな……」

幸利は魔人族が関わつた件に遭遇した場所を思い出す。

ウルでは畑山愛子を狙い、オルクス迷宮に関しては士郎から聞いた話だが、勇者一行を襲つたのはついででオルクス迷宮の攻略をしていたらしい。それをランズイに話す。彼は低く唸り声を上げ、苦い表情を見せた。

「魔物のことは聞き及んでいる。こちらでも独自に調査はしていたが……よもや、あんな

なもので使役できるようになっているとは……見通しが甘かったか」

「仕方ないと思うわ……王都でも新種の魔物の情報が出てなかったもの。それにこの事はかなり最近起きたし」

「いよいよ、本格的に動き出したということか……ハジメ殿……貴殿達は冒険者とな乗っていたが……そのアーティファクトといい、強さといい、やはり恵里殿と同じ……」
ハジメが、何も答えず肩を竦めると、ランズイは何か事情があるのだろうとそれ以上の詮索を止めた。どんな事情であろうとアンカジがハジメ達に救われたことに変わりはない。恩人に対しては、無用な詮索をするよりやるべき事がある。

「……ハジメ殿、幸利殿、ユエ殿、優花殿、ティオ殿。アンカジ公国領主ランズイ・フォワード・ゼンゲンは、国を代表して礼を言う。この国は貴殿等に救われた」

そう言うと、ランズイを含め彼等の部下達も深々と頭を下げた。領主たる者が、そう簡単に頭を下げるべきではないのだが、ハジメ達が『神の使徒』の一人であるか否かに関わらず、きつと、ランズイは頭を下げただろう。ほんの少しの付き合いしかないが、それでも彼の愛国心が並々ならぬものであると理解できる。だからこそ、周囲の部下達もランズイが一介の冒険者を名乗るハジメ達に頭を下げて止めようとせず、一緒に頭を下げているのだ。この辺りは、息子にもすっかり受け継がれているだろう。仕草も言動もそっくりである。

そんな彼等に、ハジメと幸利はニッコリと満面の笑みを見せる。

「そうだね、たっぷり感謝してね」

「今回の恩は絶対に忘れるなよ？」

思いつきり恩に着せた。それはもう、清々しいまでに。ランズイは、てつきり「いや、気にしないでくれ」等と言うと思っていたので、思わずキョトンとした表情をしてしまう。別にランズイとしては、救国に対する礼は元からするつもりだったので、それでも構わなかったのだが、まさか、ここまでド直球に来るとは予想外だった。

「アンタ達……」

優花は呆れた顔をまた作っていた。

すると向こう側から白緑色の髪を靡かせながら士郎が飛んで来た。手には袋が握られており、おそらくその中に静因石擬きが入っているのだろう。

「おーい、静因石擬きを作ったけどこれで大丈夫かな？」

士郎はそのまま降りて、袋の中から石ころ一つハジメに手渡す。ハジメはその石ころに鉱物鑑定をかける。

|||||

魔力抑制石

魔力の暴走を抑圧することができる。

あくまでも抑圧させるだけなので、鎮める事はできない。それでも1ヶ月は余裕で抑えることができる。

|||||

「これなら充分かな……延命措置にしかならないけど……」

「いや、これで患者にも希望が持てる！ありがとう士郎殿！」

ランズイは士郎にも頭を下げた。

「どういたしました。それで静因石はどれくらい取っておけば？」

ランズイは士郎に静因石の必要数を話す。

一方で治療院では、香織が回復魔法、恵里が闇魔法の応用で患者の症状進行を抑え、零とシアがその力を持って、患者を運んでいく。

そして袋の中に入っている大量の魔力抑制石を持った士郎が治療院にやってきた。

「恵里、静因石擬きを作って持ってきた。これで1ヶ月は持つ」

「ホント！流石お兄ちゃん！香織！これを患者に使って！」

「うん！士郎さんありがとう！」

袋に入っている大量の魔力抑制石を軽々持っていく香織。一応言っておくが、あの袋はかなりの重さになっている。普通なら車や重機で運ぶような重さだ。それを軽々持っていく彼女も怪力だということだ。

魔力抑制石を服用した患者達は全員、安定を取り戻した。

しかしこれは最低でも1ヶ月しか持たないということ。

そして大火山の攻略をすることになったが幼女2人は預かり施設で預かれることになった。もしものことが有れば2人が着けている腕輪が防御結界を展開し、さらにはLB○が危害を加えた者に制裁を与えることになっている。さらに士郎のゴーレムも配置されている。しゃべる事はないが戦闘力なら奈落の底の中層あたりなら勝てるほど強い。

因みに用意したLB○は戦闘機に変型するのと二刀流の機体が三機、槍の機体と狙撃型が二機となっている。

「2人とも良い子で待っててね」

「早く帰って来れるよう頑張る」

「わかったよ。パパ」

「パパも頑張ってなの！」

幼女2人の声援を受けて士郎達は大火山に向けて、ブリーゼを走らせるのだった。

グリユーエン大火山

士郎達は大火山に向けてブリーゼを走らせる。フロントガラスから見たのは巨大な積乱雲だった。

「○ピユタだ……」

「ラピ。タ?」

「正確には龍の巣だね……」

思わず、日本を代表する名作アニメのワンシーンを思い出し呟いたハジメに、ユエ達の疑問顔が向けられる。それに肩を竦めるハジメは、ブリーゼの車内から前方の巨大な渦巻く砂嵐を見つめた。

「あのハーゲあーたーまー」

「かーがーやくーのーはー」

「どこかーにかつーらー」

「隠してーいるーかーらー」

「ブフォ!」

突然○を乗せての替え歌を歌い始める士郎、恵里、雫。それを聞いた幸利が腹を抱え

て笑い出す。

近くにいたシアは何を歌っているのかわからないのか、首を傾げている。

「ウツククククツwヒーツw懐かしいの歌うなやw」

「ラピユ〇と聞いたらこれを歌いたくなつた」

「でも、雫が歌うのは意外だったね」

「……歌わさなきやいけない気がしたわ」

再び砂嵐に視線を戻す。

当然、サンドワームや他の魔物も現れる。

視界すら確保が難しい中で容赦なく奇襲を仕掛けてくるというのだ。並みの実力では、『グリューエン大火山』を包む砂嵐すら突破できないというのも領ける話である。

「つくづく、徒歩でなくて良かったですう」

「流石の妾も、生身でここは入りたくないのお」

「雪原と違い、ここは砂埃が痛そうだ……」

車で進める所まで進み、迷宮内部に突入する。

内部はとても暑く、まともな人間ならば耐えることすらきつい。寒冷地帯に住んでいたヴェアベルトはとてもきつそうだ。

「ぐっ……これはキツいな……」

『ヴェアベルト……ダイジョウブ?』

「うわう……あ、あついですう」

「ん……」

「確かにな。……砂漠の日照りによる暑さとはまた違う暑さだ。……こりやあ、タイムリミットに関係なく、さっさと攻略しちまうに限るな」

「ふむ、妾は、むしろ適温なのじゃが……熱さに身悶えることが出来んとは……もつたいないのじゃ」

「……あとでマグマにでも落としてやるよ」

迷宮内部の暑さに苦悶の表情を見せる一行。1人だけ興奮している者がいるが。

すると士郎は肩掛けバックをのちをゴソゴソと探す。

「とりあえずこれを全員に渡すね」

士郎が取り出したのは様々な形をした石のついた首飾りだった。

「お兄ちゃんこれ何?」

「ボクの気温耐性を付与したアーティファクトだよ。暑さもこれで少しはマシになると思う」

全員がそれを手渡され、身につける。

暑さが遠のいていく。

「すごい……僕には気温耐性系の技能がないからどう作るか悩んでたから助かったよ」

「土郎さん、いつ気温耐性とったのよ」

「奈落に落ちた時」

「そんな前からとってたのか……」

一行はグリュウエン大火山を進んで行くのだった。

迷宮内部を進みながら静因石を集める。しかしほとんどがカケラみたいな物しかなく、奥まで探さないといけないようだ。所々、マグマが吹き出してくるので、不用意に進もうならば火傷してしまう。熱源感知の技能がなければの話だが。

「小さい……」

「これじゃあ、アンカジの人達は助けられないよハジメくん……」

「うん……ここら辺はもう取り尽くされてるね……」

「マグマも突然飛び出してきて危ないですねえ……」

「熱源感知がある私達はいいけど、それが無いシアは気をつけて」

「はいー」

静因石の少なさに落胆してしまう。いくら軽減されているとはいえ、マグマの近くにいけば耐性を超えて暑さを感じてしまう。土郎は自前だが、他はアーティファクトによ

る耐性だからだ。

「暑い……ぐっ……だが、あの雪原の迷宮よりはマシだな……」

「雪原の迷宮ってそんなにキツイのかよ……」

「行く先が不安になって来たわ……」

「ふっ……あの迷宮は心にク……前に見たあの人間の勇者……あのままならば、攻略することは叶わない……迷宮に吞まれるだろうな……」

一行はそのまま進む。

前人未到の第8層に足を進める。その瞬間、火炎が襲いかかる。

『絶禍』

士郎は手を前に出し、重力魔法で防ぐ。

炎を放った正体を探ると、目の前にはマグマを纏った牛がいた。鼻息を荒げ、今にも突進してきそうだ。

「任せてください！どおりやああああ！」

後ろからシアが星砕きをマグマ牛に向けて振りかぶる。

体を空中で一回転させ遠心力をたつぷり乗せると、正面から突っ込んできたマグマ牛に絶妙なタイミングで星砕きを振り下ろす。狙い変わらず、振り下ろされた星砕きは、吸い込まれるようにマグマ牛の頭部に直撃した。と、その瞬間、直撃した部分を中心にし

て淡青色の魔力の波紋が広がり、次いで、凄まじい衝撃が発生。マグマ牛の頭部がまるで爆破でもされたかのように弾けとんだ。

シアは、打ち付けた星砕きを支点にして空中で再び一回転すると、そのまま慣性にしたがつて崩れ落ちながら地を滑るマグマ牛を飛び越えて華麗に着地を決めた。

「お、おうう……土郎さんやったわたしが引く威力ですよこれ……」

「衝撃変換……ボクも一度使ったけど面白い性能してるよ」

土郎も天の河に対してお試しとして使ったが、打撃戦なら強い力を発揮する。手加減してもダメージを与えられる上に、外傷を与えずに内部だけにダメージを与えることができる点が土郎にとって、魅力的だった。

リーニャやミュウにスプラツタな光景を見せずに済むからだ。

その後も次々とマグマを纏った魔物が襲いかかるが、全て、銃で撃ち抜かれたり、剣で斬られたり、魔法で凍らされたりと全く相手にならなかった。

「お兄ちゃんから貰った杖……使えなかったな……」

恵里は土郎から貰った杖を見て、その力を使うことが出来ず、落ち込んでいた。

土郎が渡したのは、全身真っ黒で所々に蒼く発光する杖だ。先端は槍のようになっており、魔力を込めれば切れ味が増す作りになっている。

「はあはあ……暑いですう」

「……シア、暑いと思うから暑い。流れているのは唯の水……ほら、涼しい、ふふ」
「ハジメくん！ユエちゃんが壊れかけてる！目が虚ろになってるよ！」

耐性持ちの士郎と暑さに強いティオ以外、ハジメ達ですらダウン状態だ。一応、士郎が渡した耐性アーティファクトと冷房型アーティファクトで冷気を生み出しているのだが……焼け石に水状態。止めどなく滝のように汗が流れ、意識も朦朧とし始めているユエとシアを見て、ハジメもあご先に滴る汗を拭うと、少し休憩が必要だと考えた。

ハジメは、広間に出ると、マグマから比較的に離れている壁に錬成を行い横穴を空けた。そこへユエ達を招き入れると、マグマの熱気が直接届かないよう入口を最小限まで閉じた。更に、部屋の壁を『鉱物分離』と『圧縮錬成』を使って表面だけ硬い金属でコーティングし、ウツボモドキやマグマの噴射に襲われないよう安全を確保する。

「ふう……ヴェアベルト、氷塊を出してくれ。しばらく、休憩しよう。でないと、その内致命的なミスを犯しそうだ」

「私も同じ事思った……」

ヴェアベルトは、虚ろな目をしながらも、すっかり氷系の魔法を発動させ部屋の中央に巨大な氷塊を出現させた。気をきかせたティオが、氷塊を中心にして放射するように風を吹かせる。氷塊が発する冷気がティオの風に乗って部屋の空気を一気に冷やしていった。

「はうあくく涼しいですうく生き返りますうく」

「……ふみゆく」

「ここから移動したくなくなるわ……」

「私ここに永住するよハジメくん」

「ボクもく」

女の子座りで崩れ落ちたユエとシアが、目を細めてふにやりとする。タレユエとタレシアの誕生だ。恵里と雫、香織も空調の効いた部屋に居る気分になり、ダレている。土郎とハジメはそんな恋人の姿に萌える。

ハジメは宝物庫からタオルを取り出して全員に配る。

「みんなダレるのはいいけど、ちゃんと汗は拭いてよう？」

「……んく」

「わかつてるよく」

「了解ですうく」

「うくん」

「はい」

間延びした声でタオルを広げるダレ陣。

「ご主人様と優花はまだ余裕そうじゃの？」

「お前ほどじゃないがな……キツイ物はキツイ」

「揚げ物作ってる時の方がマシよ……」

「ふむ、ご主人様達でも参る程ということとは……おそらく、それがこの大迷宮のコンセプトなのじゃろうな」

参るほどではないとは言え、暑いものは暑いので同じく汗をかいているテイオがタオ
ルで汗を拭いながら言った言葉に、ハジメが首をかしげる。

「コンセプト？」

「うむ。ご主人様から色々話を聞いて思ったのじゃが、大迷宮は試練なんじゃろ？ 神
に挑むための……なら、それぞれに何らかのコンセプトでもあるのかと思つたのじゃ
よ。例えば、ご主人様が話してくれた「オルクス大迷宮」は、数多の魔物とのバリエ
ション豊かな戦闘を経て経験を積むこと。「ライセン大迷宮」は、魔法という強力な力を
抜きに、あらゆる攻撃への対応力を磨くこと。この「グリユーエン大火山」は、暑さに
よる集中力の阻害と、その状況下での奇襲への対応といったところではないかのお？」
「……なるほどな……攻略することに変わりはないから特に考えたことなかったが……
試練そのものが解放者達の“教え”になつてゐるってことか」

テイオの考察に、なるほどと頷く幸利。DMの変態の癖に知識深く、思慮深くもある
テイオに、普段からそうしていれば肉感的で匂い立つような色気がある上に理知的でも

ある黒髪美女なのに……と物凄く残念なものを見る眼差しを向ける。

しかし、テイオの首筋から流れた汗がツツと滴り落ちて、その豊満な胸の谷間に消えていくのを目にするると、幸利は何となく顔を逸らした。幸利も男だった。邪険に扱っているとはいえ、流石にあの豊満な胸が揺れたり強調でもされると自然と視線がそつちに行つてしまう。それを持つ本人が自分を『ご主人様』と呼ぶので余計に変な気分になりそうだった。そんな気分になった時に後ろから何故か冷たい視線を感じるので手を出すことはないが。

「むう……」

「優花？」

「なんでもない……」

幸利は優花の視線を疑問に思いながらも、この大迷宮をどうするか考えることにした。

大火山攻略でピンチ!?

現在火山迷宮およそ五十層。何故およそかと言うと、ハジメが暑さでやらかしたからだ。マグマの流れに関係していた静因石を掘り出し、そこから大量のマグマが溢れ出したのだ。咄嗟に全員が乗れる船を出して、事なきことを得たが……

「ハードモードインディさんだね……」

「全く誰のせいでハードモードになったんですかねえ」

「ゴメンナサイ」——?——〇

「ハジメくんの土下座久しぶりに見たよ……」

幸利にジト目を向けられハジメは土下座をする。よくこんな狭い所でできるな。

今はどんぶらこどんぶらこことマグマを流されている。

「マグマかあ……まあお兄ちゃんの為なら僕はマグマだつて泳いで見せるよ」

おつと?うちの義妹兼正妻様は溶岩水泳部のようだ。でもそこまで愛されるのは嫌ではない。

「それはまた……すごい気持ちだな……私にはできそうにもない……ぐっ……」

ヴェアベルトは恵里の気持ちに感心するのだが、この中でも暑さ耐性の無さが災い

し、マグマロードを渡る船の熱には耐えられそうにもない。

メルリアンが頭に向けて氷ブレスは当てているお陰でなんとか熱中症にはならないで済んでいる。

「士郎さん、またトンネルですよ」

「そろそろ、標高的に麓辺りね。何かあるかもしれないわ」

トンネルに突入すると、そのまま続いていたマグマロードが滝のようになっていた。「全員振り落とされないように何かに捕まって！」

香織とユエはハジメに、恵里と雫、シアがボクに、優花とティオは幸利に捕まる。

「優花？」

「……あなたなら落ちないでしょ？」

「まあ……な……てかティオ、お前はひつつきすぎだ！暑い！」

「嫌なのじゃー！」主人様を合法的に堪能できるこの機会は逃さないのじゃー！」

幸利はティオを引き剥がそうとするも筋力ステータスを覆すパワーで中々離れない。

そうこうしているうちにマグマ滝を落ちる。流れから飛び出さぬよう重力魔法による体重移動と風魔法で制御する。その際、マグマコウモリが襲いかかる。それをハジメと香織が銃撃で瞬殺する。しかし数が増えてくる。ユエとヴェアベルトも参戦し、マグマコウモリを撃破していく。

するとマグマコウモリは密集していき、炎龍のような姿になる。

「一気に仕留めるとしますか。香織、オルカンお願い」

「任せてハジメくん」

ハジメは宝物庫からメツエライとオルカンを取り出し、オルカンを香織に渡して構える。

腰だめに構えたメツエライのトリガーを引く。

ドウルルルルル!

独特の射撃音を響かせながら、恐るべき威力と連射を遺憾無く発揮した殺意の嵐は、その弾丸の一発一発を以て遙か後方まで有無を言わせず貫き通す。洞窟の壁を破砕するまでの道程で射線上にいたマグマコウモリは、一切の抵抗も許されず粉碎され地へと落ちていった。

さらに、香織が肩に担ぎ構えたオルカンが、容赦なくその暴威を解放した。火花の尾を引いて飛び出したロケット弾は、メツエライの弾幕により中央に固められた群れのだ真ん中に突き刺さり、轟音と共に凄絶な衝撃を撒き散らした。

結果は明白。木っ端微塵に砕かれたマグマコウモリの群れは、その体の破片を以て一時のスコールとなった。

後ろからも迫ってくるが、

「嵐龍」

ユエが右手を真つ直ぐ伸ばし、そう呟いた瞬間、緑色の豪風が集まり球体を作った。そして瞬く間に、まるで羽化でもするかのように球形を解いて一匹の龍へと変貌する。緑色の風で編まれた『嵐龍』と呼ばれた風の龍は、マグマコウモリの群れを一睨みすると、その顎門を開いて哀れな獲物を喰らい尽くさんと飛びかかった。

当然、マグマコウモリ達は、炎弾を放ちつつも、『嵐龍』を避けるように更に二手に分かれて迂回しようとした。しかし、ユエの『龍』は、その全てが重力魔法との複合魔法だ。当然、『嵐龍』も唯の風で編まれただけの龍ではなく、風刃で構成され、自らに引き寄せる重力を纏った龍であり、一度、発動すれば逃れることは至難だ。

「流石ハジメ殿の兵器とユエ殿の魔法……凄まじいな……」

ヴェアベルトは苦笑いして賛辞を贈る。

その後も進み、最奥部辺りに到着する。

「……あそこが住処？」

ユエが、チラリとマグマドームのある中央の島に視線をやりながら呟く。

「階層の深さ的にも、そう考えるのが妥当だろうな……だが、そうなる……」

「最後のガーディアンがいるはず……じゃな？ ご主人様よ」

「シヨートカットして来たっばいですし、とつくに通り過ぎたと考えてはダメですか？」

「大迷宮がそんな簡単に行くわけではないわよ」

幸利の考えをテイオが確認し、僅かな異変も見逃さないとドMの変態とは思えない鋭い視線を周囲に配る。そんなボク達の様子に気を引き締めながらも、シアがとある方向を見ながら楽観論を呟いてみた。

そこには正規ルートで通るのであろう階段があつた。

シアの言葉を優花がバツサリ切り捨てる。

すると突然、マグマの弾幕が襲いかかる。

「散開！各自中央の島に！」

ボクの指示に全員別の場所に飛び移り、中央の島に向かう。その小島に何かあるかもしれない。

マグマ蛇が大口を開けて襲いかかってくる。ボクはその蛇を撃つ為に銃剣干将・莫耶を投影、即座に発砲する。

「っ……いつ肉体がないっ?!……いや、とにかく進まないっ！」

撃たれたマグマ蛇には肉体がなく、全部がマグマで構成されていた。

次々とマグマ蛇は襲いかかる。それを銃撃で迎え撃つ。何体かは弾けるだけだが、2体ほど魔石を砕いた気配を感じ取る。しかし同じ数のマグマ蛇が現れた。

「っこれどういう条件……?」

ボクがマグマ蛇の原理に疑問に思っていると、シアが何か見つけたのかこちらに駆け寄ってくる。

「士郎さん、彼処、岩盤が光ってます！」

「ホントだ……数は……百で……十光ってるってことは……全部倒せば一気にいなくなるわけか……！」

ボクはみんなに攻略方法を大きな声で伝える。

「なら、一番多く倒した者が誰かに一つ命令が出来ると言うのはどうじゃ？」

「あ、それいいですね！」

「というわけじゃ……ご主人様よお仕置きご褒美じゃ！」

唐突に競争が始まった。

それに乗った女性陣が勢いを増してマグマ蛇を倒していく。

「えっ、ちょっ!？」

その競争に意を唱えようとした幸利だが、既に始まった物が止まることはなかった。

ユエは雷龍を七体呼び出し、次々とマグマ蛇が撃破していく。おそらく一番多く倒したのは彼女だろう。

残り二体となったその時だった。

優花が残りを倒そうと苦無を2つ投げようと構える。

「優花危ねえ!」

幸利が突然優花の腕を引き自分との立ち位置を入れ替える。突然の出来事に反応出来なかつた優花はそのまま尻餅をつく。

そして最後に残つたマグマ蛇もろとも謎の閃光が幸利を呑み込んだ。

「ゆ……幸利イイイイイイイ!」

大火山で再び魔人族襲来

「ゆ……幸利イイイイイイ！」

白い極光が晴れるとそこには衣服はボロボロで所々から血が垂れた幸利の姿が現れ、その場にドサリと糸の切れた人形のように倒れる。

その姿に優花とティオは慌てて駆け寄る。

「幸利／＼ご主人様！」

「ぐっ……っ……」

近くで見ると、破れたところから血が出ており、中には肉が焼けていたり、骨が露出している部分もあった。

「酷い傷……」

「香織！回復魔法を！」

「う、うん！」

香織が回復魔法を使い治療を試みるも、効果が現れる気配がない。

「そんな……なら『万天』！からの『回天』！」

状態異常回復と同時に回復魔法を唱える。

しかし、それを妨害しようと再び極光が襲いかかる。

「熾天覆う七つの円環！」

士郎は幸利達を庇う為に熾天覆う七つの円環を展開して防御するのだが、『パリン』と音を立てて割れてしまう。

「全員散開！防げない！」

防ぎきれないと判断して士郎は優花が幸利を背負って移動したのを確認し、盾を解除して自身も回避する。

極光が放たれた空を見上げるとそこに白竜に乗った魔人族の男がいたのだった。

「……看過できない実力だ。やはり、ここで待ち伏せていて正解だった。お前達は危険過ぎる。それに報告があつた通り……ヴェアベルト、貴様が生きていようとはな……」

「フリード……貴様っ！」

ヴェアベルトの顔は怒りに満ちた声で魔人族の男の名を叫んだ。その怒りに応じるかのように、肩に乗っていたメルリアンが地面に降りて、身体を巨大化させる。

「アルヴ様に叛き、挙げ句の果てには人間の味方をしていようとはな……やはり貴様は愚か者のようだ」

「愚かなのはそつちだろう……意味の無い争いを続けて……一体何人もの犠牲を出せば気が済むのだ！」

「アルヴ様がそうしろと命じたのだ。だから我々はそれに応えるのみ。死ぬ」

2人は氷魔法を言葉を交わしながら放つと。

白竜から再び極光が放たれるその時だった。突然、3本の苦無がフリード目掛けて飛んで来た。

その苦無はフリードの小手によって弾き落とされる。

「アンタね……あの光は……」

「いかにも……だが私の竜は白竜だけでは無い……」

フリードの背後から黒い鎧を纏った紅目の竜が現れた。

「黒竜、灰竜よ奴らを焼き尽くせ！」

黒竜の口から黒炎が吐き出される。さらには周囲の灰竜から光弾も降り注ぎ、士郎達の回避を困難にさせる。

ハジメはクロスビットを用いて、テイオは風空で、ユエが聖絶で光弾と黒炎を防ぐ。

「幸利、しっかりして！」

「優花ちゃん落ち着いて……！」

幸利は香織の回復魔法により、徐々に傷が癒えていくが、意識を取り戻す気配がない。

「これだけの攻撃でも倒せぬとは……貴様ら、どれだけの神代魔法を習得している？」
すると土煙から1人の人間が現れ、フリードに剣を振り下ろす。

「それに答えるとしても思ってるのか？」

振り下ろした剣は受け止められた衝撃で碎け散る。

士郎はソスタンボーイを使おうと思ったのだが、気配を悟られない為に低コストの剣を投影していた。

そして士郎は空力で跳び、弓と別の剣を投影する。

「喰らいつけ！フルンディング赤原獵犬！」

放たれた剣は周囲の灰竜を次々に撃ち落とす。

しかし、多くは障壁により、攻撃が防がれてしまう。

「貴様が一番厄介だということとは分かっている」

白竜から極光が放たれる。士郎はそれを避けて、地面に降りた。

次いでシアも靴に付与された空力で跳び、灰竜を叩き落として行く。

その間士郎は恵里のところに行き、耳打ちで指示を出す。

「恵里お願い……」

「わかった……」

恵里は詠唱を始める。その時間を稼ぐ為に雫とハジメはフリードへと攻撃を仕掛ける。

雫は刀をフリードの鎧の薄い所へと振り下ろし、ハジメはドンナー&シユラークで肌

の露出している所へ撃ち込む。

「人間め……小癩な……！だが私の攻撃がこの白竜達だけとは思うな！」

フリードはその攻撃を受け流したり避けたりする。そして何かの詠唱を始める。

そうはさせるかと2人は攻撃を続ける。ハジメはオルカンを取り出して攻撃を再開するのだが、「灰竜達の障壁がそれを防ぐ。

『界穿』！」

「雫さん！ハジメさん！後ろです！」

最後の魔法名が唱えられると同時に、フリードと白竜の姿が消えた。正確には、光り輝く膜のようなものが出現し、それに飛び込んだのだ。ハジメ達は、フリードが魔法名を唱えると同時に叫んだシアの警告に従い、驚愕に目を見開く暇もなく背後へ振り返る。

そこには……2人の眼前で大口を開けた白竜とその背に乗って2人を睨むフリードがいた。白竜の口内には、既に膨大な熱量と魔力が臨界状態まで集束・圧縮されている。咄嗟に武器を盾にするのと、ゼロ距離で極光が放たれるのは同時だった。その時だった、

「死せし獣達よ、今一度戦おうとする獣達よ、その力を持って、敵を打ち倒さんとするならば、我が声に耳を傾けたまえ、その牙を我に捧げよ……『従魂死獣』」

惠里の詠唱が終わると同時に死んだ灰竜の群れがフリードと2人の間に現れ、障壁を貼り、極光を防ぐ。

「何っ!？」

「間に合ってよかった……!」

「貴様、カトレアにやられた降霊術師か……」

「元々僕は前線向きの職業じゃないからね……やられたのは当然だよ……」

惠里はそのまま操った灰竜に攻撃指示を出す。一斉掃射をする。フリードも灰竜の一斉掃射で迎え撃つ。しかしフリードの方が灰竜の数が多いことと惠里の方は既に息絶えた灰竜なので攻撃がどんどん弱まっていくので、押され始める。

だが、惠里の背後にはドリルのような矢をつがえた弓を持つ士郎がフリードを狙っている。

「我が剣は崩れ、歪む——! カラドボルグ・イー 偽・螺旋剣!」

偽・螺旋剣を放つと、惠里の従えている灰竜諸共貫く。そのままフリードの白竜も貫くと思われたのだが、再び瞬間移動されてしまい、かわされてしまう。

「おのれ……! 黒竜よ焼き尽くす! 僕達ばかり見てていいのか?」何っ!？」

フリードの後ろからメルリアンが鋭い氷の弾丸を吐く。それを数体の灰竜が相殺する。

しかしヴェアベルトがないことにフリードは疑問を抱く。

「上かつー！」

「喰らえフリードー！」

振り下ろした剣は避けられ空を切る。メルリアンはそのまま突撃して、フリードを白竜からマグマへと落とそうとするもこれもかわされる。

そのままの勢いでヴェアベルトを回収する。

するとフリードの背中に強い衝撃が走る。

「さつきはよくも不意打ちしてくれたなあ……伸びろブラックロッドー！」

衝撃の犯人はいつの間にか意識を取り戻し、すぐに戦闘へと参加したのだった。

ヴェアベルトに意識を向けていたフリードは後ろから迫る幸利の攻撃に気づくことが出来なかったのだ。

伸びたブラックロッドで幸利は白竜の頭部を叩きつける。

叩きつけられた白竜は気絶し、それに乗っていたフリードは黒竜へと乗り換える。黒竜は気絶した白竜を掴む。

そのまま闇魔法で追い討ちをかけるも、黒炎により防がれる。

「貴様……もう意識を取り戻したのか……いや、既に限界のようだな……」

「……はあ……はあ、だからといって寝てるわけにやいかねーよ……ゲホッ……喰らい

やがれえ！」

息を切らせながら立つ幸利は、今にも倒れそうだった。しかし、幸利は杖に魔力を込めて身体強化を使い勢いよく、杖を投げつける。

「なっ……ゴフツ……」

「どうだ……この野郎」

杖はフリードの横つ腹を貫き虚空へと飛んでいった。

「ぐっ……恐るべき戦闘力だ……一人一人が脅威になる……この手は使いたくなかったが致し方ない……」

フリードはいつの間にか止まっぴま肩の小鳥に何か話すと、グリュエーエン大火山が大きく揺れた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴツ！

「土郎さん水位が！」

シアが下を見るとマグマの海が荒れ狂い、どんどんせり上がっていく。

「フリード貴様何をした！」

「……要石を……破壊したただけだ」

そのままフリードは黒竜に跨り去っていった。

追いかけるれないよう灰竜達が小極光を放つ。

それをユエと幸利の重力魔法で呑み込む。

「待てッ！」

ヴェアベルトはフリードの後を追う為にメルリアンに跨ろうとする。それを士郎が止める。

「待つてヴェアベルト！深追いはしない方がいい！」

「くっ……」

ヴェアベルトは悔しそうに追跡を諦める。

「しかしどうするのだ？」

「このまま神代魔法を手に入れる。そしてマグマの中を進む」

「は？」

ハジメの言葉に啞然とするヴェアベルト。まさかマグマの中を進むなんて思いもしなかった。

「神代魔法は一体何処に……」

「彼処、マグマストームが無くなって石版が出てきてる。たぶんけどそこにあるはず」
「急ごう、このままだと神代魔法が入手出来ない」

士郎は灰竜が撤退した頃合いを見て、一気に石版の所に向かう。

石版は扉などない唯の長方体に見えるが、壁の一部に毎度お馴染みの七大迷宮を示す

文様が刻まれている場所があった。その前に立つと、スッと音もなく壁がスライドし、中に入る事が出来た。士郎達が入ると、遂にマグマが中央の島をも呑み込もうと流れ込んできたのは同時だった。再び、スッと音もなく閉まる扉が、流れ込んできたマグマを間一髪でせき止める。

マグマが侵入してこないのを確認すると、全員がホツと息を吐く。

「一先ず、安心だね……」

香織はそう呟き、安心した様子を見せる。

「ん……ハジメ、アレ」

「魔法陣、だね……」

全員が魔法陣の上に立つ。

そして全員が新しい神代魔法を手に入れる。

しかし、

「うぐっ……ガアアアアアアアアアアアアア！」

士郎が突如苦しみ始めたのだった。

大火山からの脱出

「うぐっ……ガアアアアアアアアアアアアアアアア！」

ボクは新しい神代魔法を入手しようと、魔法陣の中に踏み入れたのだが、突如頭の中入ってくる膨大な情報量に激しい頭痛に襲われた。

（この痛み方は……この世界に来た時と同じ……!?）

頭に入ってきたのは黄金色に輝く鎖に何か靄がかかっている。鎖がナニかとナニかを繋ぐと離れなくなっただけだった。

それを意味する理由が頭に流れ込んでくる。

（これは……ボクの起源というやつなのか？……モノとモノを繋ぎ結ぶ……。それは目に見えるものだけではない？ 一体どういう……概念的な曖昧なものなのか？）

激しい頭痛が治ると同時に先程の映像などが止まり、残ったのは、軽い頭痛だけだった。

周りを見ると、そこには心配そうにボクを見るみんなだった。

「お兄ちゃん……大丈夫……なの？」

「うん……トータスに召喚された時と同じ痛みと情報がボクに流れ込んで来たただけだか

ら」

「情報?どんな?」

ハジメがボクに質問する。

「なんて言ったらいいのかな……こう……曖昧なものなんだよね……モノとモノを繋ぐみたいな……ボクの起源みたいなモノのかな? あえて言うなら『鎖』……かな?」

ボクがそう説明すると、幸利は1人納得した表情になった。

「成る程な、だから士郎の投影は世界の修正を受けないのか」

「え? どういう事なの幸利?」

今度は何なのかわかっていない優花が幸利に質問する。

「世界に繋がってしまったから、修正力が効かなくなっちゃったって訳だ。前に聞いたときに繋がったって言ってたし、多分それが正解なんだろうな」

幸利の説明にボクは納得した。

投影の際に感じるあの感覚は世界に投影品が繋がった瞬間だったのだ。

「さて、魔法も証も入手したしこれからどうしようか……」

「そうだね……私たちもいつまでもここにはいられないし……」

「今回手に入れた神代魔法は空間魔法……これを使えば出れるんだろうけど……僕は相変わらず、全く使えないし……」

悲しいかなハジメの魔法適性はゼロに等しく、生成魔法以外はまともに使えなかった。

「それならボクがやる。まだ馴染んでないけど5人くらいならここから避難させられる」

「まず、幸利と香織は確定として……」

「アタシもついて行くわ」

「勿論、妾もじゃ」

「あと1人……」

5人行かなければならない訳ではないので、幸利達だけでもいい。

「私も行かせてもらえないか?」

「わかった」

「少し頭を冷やしたい……」

おそらくフリードと相対した時に、冷静でなかったことを悔いているようだ。

「ハジメくんまた後で」

「うん、香織また後で」

「それじゃあ開くよ……」

ハジメが香織に静因石を持たせる。

ボクは腕を思いっきり縦に振り下ろす。すると空間に裂け目が現れる。それを両手でこじ開けると、外の景色が映る。

「今のうちに……!」

5人が外に出るのを確認したら、ボクはこじ開けた空間を閉じる。

ハジメは宝物庫から潜水艇を取り出す。

「これに乗って、マグマを進んでいく」

「……大丈夫なの?」

不安そうに恵里はハジメが取り出した潜水艇を見る。

「マグマ如きじゃ溶けたりしないよ」

自信満々で答える。

「ルートは?」

「天井のショートカット。ユエ、潜水艇の搭乗口まで結界をお願い」

「んっ……任せて」

ハジメの言葉に頷いて、ユエが念を入れて聖絶を三重に重ね掛けする。光り輝く障壁がボク達を包み込んだ。

全員が潜水艇に乗り込みマグマの中を進む。

途中、大きく揺さぶられたが、重力魔法を応用してなんとか体勢を立て直しつつ脱出

をするのだった。

帰還組

「とりあえず急いで静因石をアンカジに届けたいとな……」

士郎の空間魔法によって、火山を脱出した幸利達はアンカジを目指す。

「妾が竜化すればすぐじゃ」

テイオがそう言うのと、竜に変身し幸利達を乗せる。

ヴェアベルトは巨大化したメルリアンに乗る。

トツプスピードでアンカジの元に戻る。

『ご主人様よ。傷の方は大丈夫なのかえ？』

「まだ痛むが食らった時よりはマシだ……」

「あんたが生きててよかったわ……」

「優花ちゃん、幸利くんが光に襲われた時、すごい焦ってたよね」

「……目の前で人が死ぬのは見たくないもの」

「しかし幸利殿の魔力耐性が高かったのは幸いしたな……あの極光は魔力耐性で毒素の

侵食具合が変わる」

「へえ〜」

アンカジジまではものの数分で到着する。幸利達が来たのがわかったのか、ミュウとリーニヤがLB○を引き連れてこちらに走ってきた。

「香織お姉ちゃん、パパ達は？」

「ハジメくんは別の所に行ってるよ。ちよつと寄るところが出来ちゃって、私達とは別行動してるの」

「パパとママにまた会える？」

震えた声でリーニヤは香織に問いかける。

「勿論」

と香織は笑顔で答えた。

「また後でって約束したもん。だからまた会えるよ。お姉ちゃんこれから患者さんを治療してくるから」

香織は3日間、患者を静因石で治療する。治療院から疲れた表情をした彼女が現れた時は幸利達が逆に心配になった。

「これで全員終わったよ」

「お疲れ様、香織」

「すぐにハジメくん達と合流しないとね」

「休まなくて大丈夫なのか？3日間ぶつ通しで治療してたんだろ？」

「早くハジメくんに会いたいんだもん……でもちよつと眠いからテイオさんの背中であ
てもいいかな？」

「それは勿論構わぬよ」

ヴェアベルトを除く全員が竜化したテイオの背中に乗り、アンカジから香織の持つて
いる神結晶の指輪が指し示す方角へと飛び立つのだった。

母娘の再会

見渡す限り一面、青い海原で覆われており島一つ見つからない。

そんな中ボク達は潜水艇の上で黄昏ていた。

ハジメとユエは潜水艇の中で寝ている。移動の際にかなり神経を使ったので、休憩させた。

「お兄ちゃん目の目……紫色に変わったんだね」

「突然どうしたの恵里」

「ハジメの目が赤くなつたつて香織から聞いたからお兄ちゃん目の目が改めて気になつたからさ」

「恵里それ本当？私が見た時は白緑だつたわよ」

「なんですかそれ。土郎さんの目がコロコロ色が変わつてるんですか……」

「やめてよシア。自分の目が不気味になつてくる」

自分の目の色が変化している事実を知つたが、特に気にはしていない。既に自分の身体が化け物になつているので今更だ。

空を見上げると、海猫らしき鳥が飛んでいる。本当に何もなし……釣りをしようとし

たら魚が釣れそうだ。もつとも魚以外に魔物が真つ先に釣れるだろうが。

グリユーエン大火山から脱出した時、道中でダイオウイカよりもデカイイカ魔物——クラークンのようなものに遭遇、ユエの魔法や偽・螺旋剣を射出して撃退した。さらにはサメなどにも遭遇し、なんやかんやあつて今に至る。

ちなみに何故か潜水艇が揺れたり、ゲツソリしたハジメとツヤツヤなユエは中から現れたりしなかった。

「土郎さん、なんか来ます。魔物ではないようですが……」

『ザバツ！』と音を立てながら現れたのは、エメラルドグリーンの髪と扇状のヒレのような耳を付けていた。どう見ても、海人族の集団だ。彼らの目はいずれも、警戒心に溢れ剣呑に細められている。

「お前達は何者だ？なぜ、ここにいて？その乗っているものは何だ？」

その質問にボクは答えようとする。

「えっと、ボク達は冒険者です。グリユーエン大火山から脱出した際に海に放り出されたので彷徨つてました。フューレンのギルドの依頼で海人族の子供2人を「貴様らがあの子達を誘拐したのか！」話聞いて？」

海人族は一斉に槍を構える。

「誘拐犯め！手足を切り落としてでも居場所を吐かせてやる！」

その声を皮切りに槍の一斉攻撃が始まった。

一難去つてまた一難つてこういう時に使うのかな……

とりあえずボクは三叉槍の穂を掴みそのままへし折る。『ベキツ』と音を立てて折つた槍の先端を投げ捨てる。

「なっ……」

「話しを聞いてください……ハジメ、紙出して……」

「わかつた……」

ハジメに頼んで、フューレンの依頼書を取り出す。それを受け取り、海人族に手渡す。手渡されたその紙を読む。

「……依頼の確認を承認する天野殿。手荒な真似をして済まなかった。こちらも同胞を2人も拐われ、冷静な判断が出来なかったことはわかつてくれ」

ボク達は海人族に囲まれながら彼らの街『エリセン』へと向かった。

「よく話を聞いてくれたね彼等。士郎がなんかしたの？」

海人族が話を聞いてくれたことに疑問に思ったハジメが耳打ちしながら質問する。

「ちよつとだけ威圧を使った。要は犬に命令するのと同じだよ」

海人族も亜人族だ。動物的生存本能を利用させてもらった。

すると後ろでシアがウサミミをピコピコさせる。
かわいい……じゃなくて……

「シア？」

「何か落ちてくる音が……こう、高いところから自由落下するよう……」

自由落下ねえ……

パパあ……！

キヤー……！

ハジメく……ん！

この声は……まさか！

ボクは上を見上げる。ハジメも聞こえたのか隣で見上げている。視界に入ったのは、
とんでもない高度から落ちてくる幼女2人とそれを追いかけるように降りる香織の姿
だった。

親方！空から女の子が！じゃない！てかなんかラピユ○ネタ多いな！

「香織!!ミユウ!!」

「リーニャ!!」

ボクとハジメは縮地と空力を使い跳ぶ。ボクはリーニャを、ハジメは香織とミユウ
を、キヤツチする。ミユウは香織が抱き抱えていたのでハジメはその香織をキヤツチす

る。そしてそのまま勢いを殺す為に下に一気に下降する。衝撃を完全に逃した為、下にいた海人族の兵の何人かがぶっ飛んだ。

コラテラルダメージだ気にしない。必要な犠牲です。わかりますね？

「リーニヤ、なんでこんなことしたんだ？危ないでしょ？」

「ごめんなさい……ミユウがハジメお兄ちゃんを見つけたら飛び降りちゃって、それを追って香織お姉ちゃんが降りて、慌ててわたしも落ちちゃったの……」

リーニヤが説明する。どうやらそれは事実のようだ。隣ではハジメがミユウを叱っていて叱られたミユウが泣いていた。

「えっと、これで依頼は完了でいいかな？早くこの子らの親に合わせてあげたいから話はまだ後で」

「……ああ、依頼の完了を承認する。ただ船のことや先程の黒竜のことを聞くから覚えておいてくれ。それとその子は母親の状態を？」

「いや知らない……けど薬も優秀な治癒師がいるから問題ない」

「そうか……では、落ち着いたら連絡してくれ」

そう言うと隊長は去っていった。

幸利がこちらに歩いてくる。

「お前らが無事でよかった」

「ええ、まだ帰れてないのに死ぬつもりはないわ」

「怪我とかは？」

「ほとんど士郎さんの鎖で共有した完全なる形で回復できたので大丈夫です」

「そう……それならよかったわ」

安堵した様子の子の優花。

「しかし……何故こんなにも海人族は優遇された土地にいる？樹海にいる亜人族と同じだと言うのに……」

ヴェアベルトがこの街の栄えようが疑問のようだ。それにハジメが答える。

「海人族が水産業を担ってるからだろうね。水中でも活動できるからそのところが優遇される理由だと思う」

「なるほど……格差社会のようだな……」

全くもって同意だ。結局はこちらの都合でしかないんだ。

「パパ、早くお家に帰るの……ママが待ってるの！」

「そうだね……早く会いに行かないとね」

ハジメの手を懸命に引っ張り、早く早く！と急かすミュウ。彼女にとっては、約二ヶ月ぶりの我が家と母親なのだ。無理もない。道中も、ハジメ達が構うので普段は笑って

いたが、夜、寝る時などに、やはり母親が恋しくなるようで、そういう時は特に甘えん坊になっていたらしい。リーニヤも寝る時そうだった。恵里をママと呼び始めてからそれがより一層わかりやすくなった。早く帰りたいのか手を『キュツ』と普段より強く握ってくる。

ミュウの案内に従って彼女の家に向かう道中、顔を寄せて来た香織が不安そうな小声で尋ねる。

「ハジメくん。さっきの兵士さんとの話って……」

「いや、命に関わるようなものじゃないらしい。ただ、怪我が酷いのと、後は、精神的なものみたい……精神の方はミュウとリーニヤがいれば問題ない。怪我の方は香織が詳しく見てあげて」

「うん。任せて」

そんな会話をしていると、通りの先で騒ぎが聞こえた。若い女の声と、数人の男女の声だ。

「レミア、落ち着くんだ！その足じゃ無理だ！」

「そうだよ、レミアちゃん。ミュウちゃんとリーニヤちゃんならちゃんと連れてくるから！」

「いやよ！2人が帰ってきたのでしよう!?なら、私が行かないと！迎えに行つてあげな

いとー！」

どうやら、家を飛び出そうとしている女性を、数人の男女が抑えているようである。おそらく、知り合いが2人の帰還を母親に伝えたのだろう。

そのレミアと呼ばれた女性の必死な声が響くと、ミュウが顔をパアア！と輝かせ、リーニヤは泣きそうな顔になる。そして、玄関口で倒れ込んでいる二十代半ば程の女性に向かって、精一杯大きな声で呼びかけながら駆け出した。

「ママーー!!」

「ミュウのママツッ！」

「ツッ!ミュウ!リーニヤ!ミュウ!リーニヤ!」

2人は、ステテテター!と勢いよく走り、玄関先で両足を揃えて投げ出し崩れ落ちている女性——母親であるレミアさんの胸元へ満面の笑顔で飛び込んだ。

もう二度と離れないというように固く抱きしめ合う母娘の姿に、周囲の人々が温かな眼差しを向けている。

レミアさんは、何度も何度もミュウとリーニヤに「ごめんなさい」と繰り返していた。それは、目を離してしまったことか、それとも迎えに行つてあげられなかったことか、あるいはその両方か。

2人が無事だった事に対する安堵と守れなかった事に対する不甲斐なさにポロポロ

と涙をこぼすレミアさんに、ミュウとリーニャは心配そうな眼差しを向けながら、その頭を優しく撫でた。

「大丈夫なの。ママ、ミュウ達はここに居るの。だから、大丈夫なの」

「うん……ここに居るよ……」

「ミュウ、リーニャ……」

まさか、まだ四歳の娘達に慰められるとは思わず、レミアさんは涙で滲む瞳をまん丸に見開いて、2人を見つめた。

2人は、真つ直ぐレミアさんを見つめており、その瞳には確かに、レミアさんを気遣う気持ちがある。攫われる前は、人一倍甘えん坊で寂しがり屋だった娘が、自分の方が遥かに辛い思いをしたはずなのに、再会して直ぐに自分のことより母親に心を砕いている。

驚いて思わずマジマジと2人を見つめるレミアさんに、2人はニツコリと笑うと、今度は自分達からレミアさんを抱きしめた。体に、あるいは心に酷い傷でも負っているのではないかと眠れぬ夜を過ごしながら、自分は心配の余り心を病みかけていたというのに、娘達はむしろ成長して帰って来たように見える。

その事実には、レミアさんは、つい苦笑いをこぼした。肩の力が抜け、涙も止まり、その瞳には、ただただ娘への愛おしさが宿っている。

再び抱きしめ合ったミュウとリーニヤとレミアさんだったが突如、ミュウが悲鳴じみた声を上げた。

「ママ！あし！どうしたの！けがしたの！?! いたいのに!」

「だ、大丈夫!」

どうやら、肩越しにレミアさんの足の状態に気がついたらしい。彼女のロングスカートから覗いている両足は、包帯でぐるぐる巻きにされており、痛々しい有様だった。

「パパあ！士郎お兄ちゃん！ママを助けて！ママの足が痛いのに!」

「パパ！ハジメお兄ちゃん！お願い!」

「えっ!?! ミ、ミュウ? リ、リーニヤ? いま、なんて……」

「パパ！はやくう!」

「あら? あらら? やつぱり、パパって言ったの? 2人とも、パパって?」

混乱し頭上に大量の『?』を浮かべるレミアさん。周囲の人々もザワザワと騒ぎ出した。あちこちから「レミアが……再婚? そんな……バカナ」「レミアちゃんにも、ようやく次の春が来たのね! おめでたいわ!」「ウソだろ? 誰か、嘘だと言ってくれ……俺のレミアさんが……」「パパ……だと!?! 俺のことか!?!」「きつとクツ〇ングパパみたいな芸名とかそんな感じのやつだよ、うん、そうに違いない」「おい、緊急集会だ! レミアさんとミュウちゃんとリーニヤちゃんを温かく見守る会のメンバー全員に通達しろ! こりや

あ、荒れるぞ！」など、色々危ない発言が飛び交っている。

どうやら、彼女達は、かなり人気のある母娘のようだ。

そして一つ言いたい。

なんでクツキン○パパがトータスにあるの!?!?

「パパあ！はやくう！ママをたすけて！」

2人の視線が、がっちりボク達を捉えているので、その視線をたどりレミアさんも周囲の人々もボク達の存在に気がついたようだ。ボク達は観念して、レミアさん達母娘へと歩み寄った。

「パパ、ママが……」

「大丈夫だよ、ミュウ……ちゃんと治る。だから、泣きそうな顔しないで」

「はいなの……」

「パパ……ママ……」

「大丈夫。ハジメ達に任せて」

「うん……」

ボクはリーニヤを安心させる為に頭を撫でる。

「すいません、少し失礼します」

ハジメはミュウの頭を撫でるとレミアさんを抱き抱える。

初めて会う未亡人を何の恥じらいも無く抱き上げるハジメにボクは心の中で敬礼する。

それが普通にお姫様抱つこな物だから、背後で悲鳴と怒号が上がっていた。

ハジメはナチュラルにそれを無視すると、ミュウに先導されて家の中へと入っていった。

ボク達もその後についていった。

リーニヤの家族について

レミアさんの家にお邪魔して、彼女の治療を香織がすることになった。

一様安全をとって1日かけるようだ。

「あらあら、まあまあ。もう、歩けないと思っていましたのに……何とお礼を言えればいいか……」

「ふふ、いいんですよ。ミュウちゃんとリーニヤちゃんのお母さんなんですから」

「えっと、そういえば、皆さんは、ミュウとはどのような……それに、その……どうして、ミュウとリーニヤは貴方方のことを『パパ』と……」

ボクは事の経緯を説明する。

フューレンで出会って、そのその騒動やパパと呼ばれるようになった経緯を。

全てを聞いたレミアさんは、その場で深々と頭を下げ、涙ながらに何度も何度もお礼を繰り返した。

「本当に、何とお礼を言えればいいか……娘とこうして再会できたのは、全て皆さんのおかげです。このご恩は一生かけてもお返しします。私に出来ることでしたら、どんなことでも……」

「えつとその……気にしないでください」

ハジメはそう言うがレミアさんは納得しない。

とりあえず今日の宿を探すかとハジメが言った時、レミアさんはこれ幸いと自宅に泊まることを勧めた。

「どうかせめて、これくらいはさせて下さい。幸い、家はゆとりがありますから、皆さんの分の部屋も空いています。エリセンに滞在中は、どうか遠慮なく。それに、その方がミュウも喜びます。ね？ミュウ？リーニヤ？ハジメさん達が家にくれた方が嬉しいわよね？」

「？。パパ、どこかに行くの？」

ミュウは目をパチクリさせて首を傾げる。

ミュウにとつて、ハジメが自宅に泊まることは当然の様だ。

しかしリーニヤは何かわかつているのか、俯いている。

「母親の元に送り届けたら、少しずつ距離を取ろうかと思っていたんだけどなあ……」

「あらあら、うふふ。パパが、娘から距離を取るなんていけませんよ？」

「それは説明しましたし……ボク達は……」

「いずれ、旅立たれることは承知しています。ですが、だからこそ、お別れの日まで『パパ』でいてあげて下さい。距離を取られた挙句、さようならでは……ね？」

「……まあ、それもそうか……」

「うふふ、別に、お別れの日までと言わず、ずっと『パパ』でもいいのですよ？先程、『一生かけて』と言つてしまいましたし……」

そんな事を言つて、少し赤く染まった頬に片手を当てながら「うふふ♡」と笑みをこぼすレミアさん。おっとりした微笑みは、普通なら和むものなのだろうが……ハジメの周囲にはブリザードが発生していた。

心なしか巻き込まれて寒気を感じる。シアのウサミミがブルブルと震えていた。するとレミアさんはボクの方を見る。

「それでリーニヤがパパとママと呼んでいる土郎さん恵里さん」

「はい」

「お二人の顔を見てリーニヤがそう呼ぶのが少し理解できました」

「それは何故？……」

「リーニヤの両親は私の親友でして。容姿がお二人に良く似てるのですよ」

「へえ〜」

「名前も『シユロム』と『エリーナ』と似ていて……私も一瞬見間違えました」

レミアさんは近くにある棚から写真を一枚取り出す。

そこには2人の男女の間に挟まれて笑っているリーニヤが写っていた。

「わあ……男の人、士郎さんにそっくりですう」

「女の人は恵里そっくりね……」

リーニヤを挟む2人はシアと雫の言う通りボクと恵里そっくりだった。

シユロムという男性はボクの髪をエメラルドグリーンに変えればほとんど同じで、エリーナという女性は少し成長した恵里みたいだ。

「ここまでそっくりだとは思わなかったな……」

「海人族なのにエリーナさん、黒髪なんだね」

「ええ、彼女は魔力を持っていましたから」

「へえ……ならリーニヤも持つてるのも納得だね」

リーニヤと初めて出会った時、微弱ながらも魔力を感じ取った。

あの時はただ気のせいかと思ったし、その後も魔力を込めた御守りアーティファクトを渡したので気にしていなかった。

それから3日間レミアさんの家でお世話になった。

その間メルジーネ海底洞窟に行く下準備をしたり。レミアさんとハジメの距離が近かった。そのせいなのか、香織とユエからブリザードが吹き荒れていた。エリセンに着いてからより一層甘えるようになったリーニヤに癒されたりした。

メルジーネ海底洞窟攻略

リーニヤに『パパ、ママいつてらつしやい』と送り出されて、エリセンから北西に遠く離れた大迷宮『メルジーネ海底遺跡』に向かう。そのために荷物確認をする。

士「それでは只今より荷物の確認を行う」

ハ幸香 「「おん！」「」

「ハジメ製酸素ボンベ持ったか？」

「「おん！」「」

「宝物庫持ったか？」

「「おん！」「」

「隠し武器持ったか？」

「「持ってるわ！」「」

「反抗期か！」

ハ「时期的は反抗期だけどね」

士「それ言ったらアカン」

と、ふざけた持ち物確認を終わらせて、メルジーネ海底遺跡のある場所まで進む。グリーユーエンの証と月に従えとのミレディの教えに則るしかなかった。

取り敢えず方角と距離だけを頼りに大海原を進んできたのだが、昼間のうちにポイントまで到着し海底を探索したものの特に何も見つけることは出来なかった。海底遺跡というくらいだから、それらしき痕跡が何かしらあるのではないかと考えたのだが、甘かつたらしい。

ひとまず、月が登るまで待つことにした。

色々と投影しておき、宝物庫に仕舞い、いつでも取り出せるようにしておく。

あと、偽・螺旋剣は空間魔法を生成魔法で付与して、空間を削ぎ、抉る力を強化した。シアの星砕きの調整をする。整備は怠ってはいないが、少々ガタが来ていたので修理した。

修理の終わった星砕きを手渡す。

シアは先程までシャワーを浴びていたので、水色の髪が少し湿っている。

「シア、星砕きの調整終わったよ」

「土郎さんありがとうございます！」

「他のみんなは？」

「船内でシャワー浴びてます」

「そっか」

しばらく夕陽を眺めていると恵里がこちらにやって来た。

「どうしたのお兄ちゃん？」

「恵里。いや、ちよつと日本を思い出してね……こういう景色は同じなんだあつて」

「確かに……なんでこんなことになっちゃったんだろう……」

ポツリと恵里はそう言葉をこぼす。いつも通りの日常、それを人一倍大切にしていた彼女にとって、現状は辛い物となっている。

そんな彼女の頭をいつの間にか撫でていた。

「早く帰らないとなあ。父さん達、心配してるだろうし」

「うん……」

やがて日も落ちて、月が昇ってくると、ハジメはグリューエン大火山の攻略の証であるペンダントを取り出し、月に翳してみる。

ペンダントは、サークル内に女性がランタンを掲げている姿がデザインされており、ランタンの部分だけがくり抜かれていて、穴あきになっている。暫くそうしていると、ペンダントに変化が訪れた。

「わあ、ランタンに光が溜まっていきますう。綺麗ですねえ」

「ホント……不思議ね。穴が空いているのに……」

シアが感嘆の声を上げ、香織が同調するように瞳を輝かせる。

「昨夜も、試してみたんだがな……」

「ふむ、ご主人様よ。おそらく、この場所でなければならなかったのではないかの？」

おそらく、テイオの推測が正解なのだろう。やがて、ランタンに光を溜めきつたペンダントは全体に光を帯びると、その直後、ランタンから一直線に光を放ち、海面のとある場所を指し示した。

「……なかなか粋な演出。ミレディとは大違い」

「全くよ。すごいファンタジーっぽくて私ちよつと感動してるわ」

それから、真つ暗な海をペンダントの光が指す方向に潜水艇を進める。

辿り着いた場所は海底の岩壁地帯だった。

「やみくもに探しても見つからない訳だ……」

「俺達はアホだったな」

昼間の搜索が無駄だったとわかったハジメと幸利が残念そうに溢した。

「まあいいじゃない、異世界で海底遊覧なんて、貴重な体験ができたんだし」

「優花ちゃんの言う通りだよ」

「ん……暇だったし、楽しかった」

落ち込んだ2人と対照的に3人は楽しんでいたようだ。

ボクも勿論、楽しんだ。見たこともない魚だったり、似たような魚もいた。

「ふむ、海底遺跡と聞いた時から思っていたのだが、この“せんすいてい”？とやらがなければ、まず、平凡な輩では、迷宮に入ることも出来なさそうだな。我々魔族にはこのような物を作る知識はなかった」

「……強力な結界が使えないとダメ」

「他にも、空気と光、あと水流操作も最低限同時に使えないとダメだね」

「でも、ここにくるのに『グリューエン大火山』攻略が必須ですから、迷宮を攻略している時点で普通じゃないですよね」

「もしかしたら、空間魔法を利用するのがセオリーなのかもしれないわね」

それぞれが普通の人達がこの場所に来るためにどういう方法があるかと推理を始める。

「ユエや幸利位の魔法適性があれば重力魔法なんかで海に穴開けた方が手っ取り早いかもね」

「んな魔力ねえよ……」

さらに海中を進んでいくと、海流の流れが変わって潜水艇が大きく揺さぶられたり、魚の魔物に襲われるなどのアクシデントもあった。

ペンダントの光は放出されず、ただ光が灯るだけになった。

「うわあ〜士郎さん今窓の外を死んだ魚のような目をした物が流れて行きましたよ」

「シアよ、それは紛う事無き死んだ魚じゃ」

「改めて思っけどハジメの作るアーティファクトって反則ね」

さらにはしばらく進むのだが、一向に景色が変わる気配がなかった。

「なんかさつきから同じところをぐるぐる回ってる気がする……」

「そうみたい……ここさつき通ったよハジメくん」

どうやら円環状の洞窟を一周してしまったようだ。

なので今度は何か目立つような物、それこそ先程の光るメルジーネの紋章のような物を探して周る。

その結果、五つの紋章を見つけることが出来た。

紋章にペンダントの光を注ぐ。注ぐ度に光が弱まっていく。

全てに注ぐと円環の洞窟から先に進む道が開かれた。『ゴゴゴゴッ！』と轟音を響かせて、洞窟の壁が縦真つ二つに別れる。

特に何事もなく奥へ進むと、真下へと通じる水路があった。潜水艇を進めるハジメ。

すると、突然、船体が浮遊感に包まれ一気に落下した。

「おお?!」

「おおつと?!」

「うわつ?!」

「ぬう?!」

「きやあ?!」

「ひやあ?!」

「んっ?!」

「ぬおっ?!」

「はうっ?!」

「わあっ?!」

「なっ?!」

「きゆう?!」

全員が悲鳴をあげる。

直後、ズシンツ!と轟音を響かせながら潜水艇が硬い地面に叩きつけられた。激しい衝撃が船内に伝わり、特に体が丈夫なわけではない恵里がうめき声をあげる。

「……いつつ。恵里、大丈夫?」

「う、うん……なんとか……ここは？」

潜水艇の壁にぶつかる前にボクが庇うように恵里の下に回ったのでそこまでダメージを受けなかったようだ。

恵里が水晶でできた窓の外を見ると、海中ではなく空洞になっているようだった。取り敢えず、周囲に魔物の気配があるわけでもなかったもので、船外に出る。

潜水艇の外は大きな半球状の空間だった。頭上を見上げれば大きな穴があり、どういふ原理なのか水面がたゆたっている。水滴一つ落ちることなくユラユラと波打っており、どうやらボク達はそこから落ちてきたようだ。

「どうやらここからが本番みたいだね……」

「……全部水中じゃなくてよかった」

すると、前方から水蛇のような魔物が、天井から圧縮された水のレーザーが襲いかかるが、香織の結界に阻まれ、ユエとテイオの炎魔法によりすぐさまやられる。

ほとんどのメンバーが怯むことなく立っていた。

しかし、恵里だけは違った。

「うわあ!？」

「恵里、大丈夫？」

余りに突然かつ激しい攻撃に、思わず悲鳴を上げながらよろめく。傍にいたボクが、

咄嗟に、腰に腕を回して支えた。

「……ごめん、お兄ちゃん」

「問題ないよ」

ボクはそう言うのだが、彼女の表情は浮かない。おそらく恵里とボク達の実力差がハッキリと分かったことで何かしらの「劣等感」を抱いているのだろう。こればかりはボクが何を言っても逆効果になるだろうと思い、何も言うことはしなかった。

海水の中を歩くのは少し面倒なのでヴェアベルトの水魔法で凍らせて歩いて進んでいる。たまに氷を砕いて魔物が現れるもののすぐに瞬殺するのでそこまで厄介ではなかった。

「……弱すぎやしないかな？」

「……ん、オルクス迷宮の魔物の方が厄介」

「まあミレディ曰くオルクスは最後に行く所らしいからね……」

あまりの弱さにハジメ達も少し拍子抜けしている。

大迷宮の敵というのは、基本的に単体で強力、複数で厄介、単体で強力かつ厄介というのがセオリーだ。だが、ヒトデにしても海蛇にしても、海底火山から噴出された時に襲ってきた海の魔物と大して変わらないか、あるいは、弱いくらいである。とても、大迷宮の魔物とは思えなかった。

とはいえオルクス大迷宮は全ての迷宮を制覇した実力者が行くのだというのだから強さが違うのは当たり前である。

いずれはヴェアベルトがオルクス大迷宮に向かうと言っていたので、彼は順番通り攻略するのだろう。

大迷宮を知らない恵里以外は、皆、首を傾げるのだが、その答えは通路の先にある大きな空間で示された。

「っ……何だ?」

ボク達が、その空間に入った途端、半透明でゼリー状の何かが通路へ続く入口を一瞬で塞いだのだ。

「私がやります! うりやあ!!」

咄嗟に、最後尾にいたシアが、その壁を壊そうと星砕きを振るったが、表面が飛び散っただけで、ゼリー状の壁自体は壊れなかった。そして、その飛沫がシアの胸元に付着する。

ちよつとエロい。ゲフンゲフン。

「ひゃわ! 何ですか、これ!」

シアが、困惑と驚愕の混じった声を張り上げた。ボク達が視線を向ければ、何と、シアの胸元の衣服が溶け出している。衣服と下着に包まれた、シアの豊満な双丘がドンド

ンさらけ出されていく。

「シア、動くでない!」

咄嗟に、テイオが、絶妙な火加減でゼリー状の飛沫だけを焼き尽くした。少し、皮膚にもついてしまったようでシアの胸元が赤く腫れている。どうやら、出入り口を塞いだゼリーは強力な溶解作用があるようだ。

「つーまた来るわ!」

優花がそう叫ぶ。

警戒して、ゼリーの壁から離れた直後、今度は頭上から、無数の触手が襲いかかった。先端が槍のように鋭く尖っているが、見た目は出入り口を塞いだゼリーと同じである。だとすれば、同じように強力な溶解作用があるかもしれないと、再び、香織ユエが障壁を張る。更に、優花とテイオが炎を繰り出して、触手を焼き払いにかかった。

「正直、4人の防御と攻撃のコンビって、割と反則臭いよな」

「これにヴェアベルトと幸利も加わったら手を出す隙なんかないわね……」

鉄壁の防御と、その防御に守られながら一方的に攻撃。幸利と雫がそう呟くのも仕方ない。それを余裕と見たのか、シアがボクの傍にそろりそろりと近寄り、露になった胸の谷間を殊更強調して、実にあざとい感じで頬を染めながら上目遣いでおねだりを始めた。

「あのお、士郎さん。火傷しちゃったので、お薬塗ってもらえませんかあ」

「……今、迷宮攻略中だよ？」

「あうっ」

そう言つて一度シアの頭に軽くチョップを入れる。

ボクは彼女の肩に触れて回路接続で完全なる形を発動し、シアの赤く腫れた部分が治っていく。

「着替えが必要なら着替えてね」

「はい……」

残念そうに返事をするのだった。

「む……ハジメ、このゼリー、魔法も溶かすみたい」

ユエから声がかかる。見れば、ユエの張った障壁がジワジワと溶かされているのがわかった。

「ふむ、やはりか。先程から妙に炎が勢いを失うと思つておつたのじゃ。どうやら、炎に込められた魔力すらも溶かしているらしいの」

テイオの言葉が正しければ、このゼリーは魔力そのものを溶かすことも出来るらしい。中々に強力で厄介な能力だ。仮に氷魔法で凍らしたとしても氷を溶かすのだろう。まさに、大迷宮の魔物に相応しいな。

そんなボクの内心が聞こえたわけではないだろうが、遂に、ゼリーを操っているであろう魔物が姿を現した。

天井の僅かな亀裂から染み出すように現れたそれは、空中に留まり形を形成している。半透明で人型、ただし手足はヒレのようで、全身に極小の赤いキラキラした斑点を持ち、頭部には触覚のようなものが二本生えている。まるで、宙を泳ぐようにヒレの手足をゆらりゆらりと動かすその姿は、クリオネのようだ。もつとも、全長十メートルのクリオネはただの化け物だが。

その巨大クリオネは、何の予備動作もなく全身から触手を飛び出させ、同時に頭部からシャワーのようにゼリーの飛沫を飛び散らせた。

「ユエも攻撃して！ 防御は私が！ 聖絶！」

香織は、派生技能『遅延発動』で、あらかじめ唱えておいた聖絶を発動する。それにコクリと頷いたユエは優花、ティオと一緒に巨大クリオネに向けて火炎を繰り出した。シアも、星砕きを砲撃モードに切り替えて焼夷弾を撃ち放つ。

全ての攻撃は巨大クリオネに直撃し、その体を爆発四散させた。いっちょ上がり！ とばかりに満足気な表情をするユエ達だったが、それにハジメが警告の声を上げる。

「まだだ！ 反応が消えてない。香織は、障壁を維持して……なんだこれ、魔物の反応が部屋全体に……」

ボクも解析眼を使用し、部屋全体を視る。

魔力の流れが部屋全体に広がっている？いや違う……これは、この部屋は……

「この部屋全体が魔物の腹の中だ……」

「さっきの魔物はそいつのエサかよ……」

腹の中だと分かると、幸利がげんなりとした顔をする。

「無限に再生されてはたまらん……土郎殿、ハジメ殿魔石の位置は？」

「そういえば透明な身体なのに魔石が見当たらないですねえ」

そう魔物にはあるはずの魔石がどこにも見当たらないのだ。

「……お兄ちゃん？」

恵里が不安そうにこちらを見る。

「魔石がない……いや、こいつ自体が魔石なんだ……!」

「んなっ!」

「それじゃあどうするの？」

「とにかく燃やすしかないよ……」

そう言つてハジメは宝物庫から、火炎放射器を取り出す。それで壁を燃やし尽くす。メルリアンも火炎放射を壁に放つ。ぼろぼろと壁に擬態したクリオネの一部が落ちてくる。だが隙間から際限なく現れてくる。そして凍らせた床がどんどん上昇してくる。

「シアー！床砕いて！みんなは酸素ボンベ！下に空間がある！どこに通じてるかかわからないから気をつけて！」

ボクはみんなに指示を一斉に出す。

シアは星砕きで床の氷を砕く。全員がその穴に酸素ボンベを所持して飛び込む。

その際ボクは幻想の爆針を大量に投影し、クリオネを爆破する。

時間を少しでも稼げればいいが……

そう考えながらボクは海水の流れに身を任せて進むのだった。

過去の真実

「けほっけほっ……………」

「ふう……………恵里、大丈夫？」

「うん……………なんとか……………他のみんなは？」

「わからない……………おそらく水流に吞まれてはぐれたと思う」

「そっか……………」

二人は当たりを見回す。そこにハジメ達はおらず、波が岩礁に打ち付けられているだけだった。

水流が流される時、色々となんとかしようとしたのだが、ランダムな流れだったりうまく集まることができなかつたのだ。そのため、念話で近くにいる人と手を繋ぐように指示をした。

ハジメは香織、ユエと、雫はシアと、幸利は優花、テイオ、ヴェアベルトと。

士郎は雫達と繋ごうとしたのだが、遠く離れていて、恵里としか繋ぐことは出来なかつた。鎖を使おうにも激流でコントロールが出来なかつたのだ。

「とりあえず、先に進もうか」

「うん。ここにどどまっても何も無いしね」

二人ははぐれた仲間たちを探す為に歩き始めた。

しばらく歩いていると、座礁した船があった。それも大量に。

「まるで船の墓場だな……」

「戦争でもあったのかな……」

「それにしても戦艦ばかりだ……」

「でも、あそこ。豪華な客船……」

しかし砲門がある訳ではなかった。

おそらく魔法を大砲代わりにしているのだろう。

そして、その推測は、士郎達が船の墓場のちようど中腹に来たあたりで事実であると証明された。

——うおおおおおおおおおおおおお!!!

——ワアアアアアアアアアアアアアアア!!!

「ツ!?なんだ!?!」

「お兄ちゃん!周りがっ!」

突然、大勢の人間の雄叫びが聞こえたかと思うと、周囲の風景がぐにやりと歪み始めた。驚いて足を止めた士郎達が何事かと周囲を見渡すが、そうしている間にも風景の歪

みは一層激しくなり——気が付けば、士郎達は大海原の上に浮かぶ船の甲板に立っていた。

そして、周囲に視線を巡らせば、そこには船の墓場などなく、何百隻という帆船が二組に分かれて対峙し、その上で武器を手に雄叫びを上げる人々の姿があった。

「な、なんじゃこりゃ……」

「お兄ちゃん……これどういふこと……?」

士郎も恵里も度肝を抜かれてしまい、何とか混乱しそうな精神を落ち着かせながら周囲の様子を見ることしかできない。

そうこうしている内に、大きな火花が上空に上がり、花火のように大きな音と共に弾けると、何百隻という船が一斉に進み出した。士郎達が乗る船と対峙している側の船団も花火を打ち上げると一斉に進み出す。

そして、一定の距離まで近づくと、そのまま体当たりでもする勢いで突貫しながら、両者とも魔法を撃ち合いました。

士郎達の乗る船にも火炎弾が飛んでくる。試しにハジメ製の銃を撃つのだがそのまますり抜けていく。

「なにっ?!」

次に熾天覆う七つの円環で防ごうとする。それは問題なく防げる。

「……………」

「お兄ちゃん、これって」

「どうやら魔力で作られた物なら防げることに2人は気づいたようだ。士郎は銃剣の干将・莫耶で魔力弾を狙撃すると消滅した。

「魔力が込められていれば防げるみたいだね……………」

「じゃあ杖に魔力を込めたらいける？」

「たぶんねただの幻覚ってやつじゃ無さそうだ……………」

「さらにこちらに気づいた者に攻撃されたものの投影品や魔力を込めた攻撃で倒していく。」

「お兄ちゃん、これどうしたら終わると思う？」

「出口を探すか、この戦いを終わらせるくらいだよね……………」

「出口なんてどこにあるかわからないし、倒していくしかないね……………」

「それだとちまちま倒していくのは面倒だね……………赤原獵犬は血がないと追尾しないし……………」

「これ、攻撃魔法じゃなくても良さそう…………『墮落識』！」

「恵里は閻属性魔法の『墮識』の広範囲版を唱える。範囲内にいた人が消滅していく。

「なるほど直接作用できる幻覚みたいなものか…………『禍界』！」

士郎は前方180°の重力場を発生させる。

消費魔力は範囲の大きさによって異なるが、攻撃用でもないものであまり消費しない。すると士郎後ろから狂ったような叫び声がちらに向かってくる。

「全ては神の御為にいい！」

「エヒト様あ！万歳い！」

「異教徒めえ！我が神の為に死ねえ！」

そこにあつたのは狂気だ。血走った眼に、唾液を撒き散らしながら絶叫を上げる口元。まともに見れたものではない。

相対する船団は、明らかに何処かの国同士の戦争なのだろうと察することが出来るが、その理由もわかってしまった。これは宗教戦争なのだ。よく耳を澄ませば、相対する船団の兵士達からも同じような怒号と雄叫びが聞こえてくる。ただ、呼ぶ神の名が異なるだけだ。

「ヒツ……」

恵里はその光景を目にすると、視界にノイズが走る。

『ここにいやがったなあ……へへへ……あの女もチョロいぜ……』

『今すぐお前を犯さねえと気がすまねえ！だから犯させろおおおお！』

過去に自身を襲ってきた男の姿がフラッシュバックし、発動している魔法を解除して

しまった。

「いや……いやあ……嫌あああああ！」

「恵里!？」

遂には耐えきれなくなり、しゃがみこんでしまった。

士郎は振り向き様に風爪を放ち、叫び声をあげる人を消す。しかしまだ襲ってくる人は多数いるので恵里を抱き締めながら空力で空に浮かぶ。

大地龍は地面がないと使えない。

「恵里、しっかりして……ここにアイツはいないし、アイツは二度と目の目を見ることはないから……」

士郎はそのまま中に浮きながら恵里の抱き締めながら背中をさする。震えていた身体は段々と落ち着きを取り戻していった。

「うん………もう大丈夫……ありがとうお兄ちゃん」

「よかった……」

そうして再び殲滅を始めて、1時間ほどで2つの艦隊は壊滅したのだった。

最後の兵士達を消滅させた直後、再び、周囲の景色がぐにやりと歪み、気が付けば、士郎達は元の場所に戻っていた。

「どうやら殲滅が正解だったね」

「うん……これって、この船の墓場と何か関係あるのかな……」

「迷宮には何かコンセプトがあるから、たぶん今のは過去にあつた宗教戦争で、コンセプトは狂った神の悲惨さを知れてことだと思ふ」

「なるほど……ああ、怖かつた！」

一気に息を吐き出す。

「気持ち悪かつたな……」

「うん……」

「吐き気とかはない？」

「大丈夫、フラッシュバックでそれどころじゃなかつたよ……」

「ならあの船に行つてみようか……」

一番遠くに鎮座する最大級の帆船へと進んでいく。

幸利 side

「ふう……なんだつたんだありや……」

「この廃船からするに過去にあつたことみたいね……」

「なるほど……この迷宮のコンセプトは狂った神の悲惨さを知ることのようじゃな」

3人が迷宮の幻覚の一つを乗り越え、考察をしている中、1人落ち込んでいる者がいた。

「やはり、全種族が手を取り合うことはできぬのか……いや、それだと雪原の迷宮で説明されたことが嘘になる……」

「ヴェアベルト？……どうしたんだよヴェアベルト」

「つー……すまない、なんでもない……訳ではないな。全種族が手を取り合うことはできないのかも知れないと思っってしまったてな……」

ヴェアベルトは自身の掲げている目標を達成することが不可能なのではないかと、思い込んでいるようだ。

「そうか……それはねーんじゃねえか？」

しかし幸利はそれを否定した。

「？……どういうことだ？」

「だってよ……それができないなら、俺たちとお前が仲間になってないだろ？」

その一言に、ヴェアベルトの不安は少し軽くなった。

「……ふっ……そうだな。私は諦めない……■■■■……絶対、和平を結んで見せる」

そう言つてヴェアベルトは覚悟を決め、メルリアンを巨大化させ、遠くの船に飛ぶ。

その船の全長は300メートル以上でそこかしこに装飾が施されている。

そのままテラスに降り立つと、案の定、空間が歪む。

「また、どうせ碌な光景じゃねえだろうな」

「そうね……ミレディといいメルジーネといい、女性の試練はまともなののかしら」
「この後行くであろうハルツィナも女性らしいからのお……相応の覚悟をしておいた方が良さそうじゃな」

そう話しているうちに景色の変化が終わり、今度は海の上に浮かぶ豪華客船の上に立っていた。

時刻は夜で、満月が夜天に輝いている。豪華客船は光に溢れキラキラと輝き、甲板には様々な飾り付けと立食式の料理が所狭しと並んでいて、多くの人々が豪華な料理を片手に楽しげに談笑をしていた。

「パーティー……だよね？」

「みたいだな。随分と煌びやかだが……メルジーネのコンセプトは勘違いだったか？」
「いや、今の時代に至るまでの何かがあるんだろうな……この後にどんでん返しがあるだろうな……」

予想したような凄惨な光景とは程遠く肩透かしを喰ったような気になりながら、その煌びやかな光景を、4人は見下ろす形で眺めていた。

聞き耳を立てて見れば楽しげな話し声が聞こえてくる。中を覗けば、種族関係なく仲良さげに談笑していた。

「このような時代もあったのだなあ……」

「神がこれを乱したんだろうな……」

「やっぱエヒトに敵意しか湧かないわね……」

そして予想通り、狂信者であろう人族の国王らしき人物が人族以外の種族の殺害を命じる。しかも最初イシユタルがエヒトを見上げるように恍惚とした表情でだ。

人族の国王が入った部屋に入るとそこは真つ暗だった。

さらにケタケタケタと笑い声が聞こえてくる。

「ゾンビい……」

「これ香織ダメなやつね」

「大暴走してなきやいいが」

「む？香織はこういったものが苦手なのか？」

「ああ、ホラーものが嫌いって大分前に言ってたな……」

「杖だの銃だのをぶつ放してなければいいが……」

その後何事もなく幸利達は暗闇を抜けるのだった。

悪食討伐戦

幸利達 side

暗闇を抜けた先には魔法陣があり、そこに足を踏み入れるとどこかに転移した。

転移した先は神殿のような支柱が立っており、祭壇らしき場所に魔法陣が描かれていて、そこに幸利達が立っていた。

「……これで終わりか？」

「あっけなかつたわね……こう、もっとやばいの来るのかと思つたわ……」

「ふむ……今回の試練は信仰か強い者だと達成するのが難しいやつじゃな」

「あとは迷宮に入るのも困難だろうな……今回はハジメ殿の潜水艇があつたから良いものの……」

すると足音がこちらに近づいてきた。敵かと思ひ身構えたが、姿が明らかになつたこととですぐに警戒を解く。

「3番目は幸利達だったんだね」

「後は土郎さんと恵里ちゃんだけだね」

足音の正体はハジメと香織だった。

「3番目？ハジメ達の後には雫とシアかしら？」

「うん。僕と香織とユエの後に雫とシアがその魔法陣から出て来たからね」

「最初にクリア出来なかったのは残念だな」

と少し悔しがる様子を見せる幸利だった。

幸利達が魔法陣から出て、しばらくすると士郎と恵里が幸利達と同じように魔法陣から出てくる。しかし出てきた様子が少しおかしかった。

士郎の腕にべったりくっついていてる恵里とそれを苦笑いで受け止める士郎の姿だった。

「……恵里どうしたの？そんなに士郎さんにべったりくっついて」

「あ、雫にシア。実はね……」

魔法陣から出てくる前の出来事を恵里が話し始めた。

人間側の国王が教皇のように痛々しいトリップをしてそれ以外の種族を攻撃したあと、空間が歪み元いた場所に戻ってきた。

「……これが……この世界で起きた戦争の顛末なんだね」

「みたいだね……クソ神は早めに処理したい……もしかしたら地球にも干渉してきそうだし」

「寿命がちよつと縮んだかも……」

「香織が暴走してないといいけどね……」

「多分地球組のみんなが同じ事考えてるよ」

「そう言いながら先に進む。」

どんと霧が濃く深くなっていく。そして霧の中から剣を持った男が現れる。士郎は指から魔力弾を放ち、脳天を撃ち抜く。恵里も杖で魔力弾を放ち倒していく。中には拳で襲いかかってくるのもいた。

「ふう、これで全部かな？」

「そうだね。先に進もつかお兄ちゃん」

「そう言う恵里の額に指を突きつける士郎。突然の行動に戸惑いの表情を作る。」

「お、お兄ちゃん？何してるのかな？」

「お前は誰だ？恵里の身体に入って何をしてる？」

「何言ってるの?!」

恵里の問いかけにも答えず指を突きつけたままだ。

士郎の解析眼には恵里の身体に重なるようにしてとり憑いている女の亡霊のようなものが映っていた。正体がバレていると悟ったのか、戸惑いの表情から一転して、ニヤニヤし始める。

「ウフフ、それがわかってもどうする事も出来ない……もう、この女は私のものッ!」

そう話しながら、土郎に襲い掛かろうとしたのだが、顔を掴まれ、持ち上げられる。

「まてっ!なにをするの!この女は、あんたの女!傷つけるつもりッ!」

「何言ってるんだ?お前は恵里じゃない。お前だけを魔力弾で傷つけるだけだ」

「私が消滅すれば、この女の魂も壊れるのよ!それでもいいの!」

「それがハツタリじゃないとしても、この破戒^ルすべき^ル全ての符^ブでお前を剥^レがせば良いだけだ。人の大切な人に入り込んだんだ……それ相応の覚悟をするんだな」

土郎は殺気を込めて破戒すべき全ての符を投影し、肩に突き刺す。恵里の身体から幽霊が抜け出てくる。

「そのまま死ね……!」

『待つ……!』

銃剣の干将・莫耶を投影して数発、撃ち抜き消滅していった。

「……うん……お兄ちゃん?」

「どこか違和感とかない?」

「……うん、ありがとう……」

そう言って土郎の腕に抱きつく。

「……やっぱり、お兄ちゃんの腕は落ち着くなあ……」

そのまま魔法陣の中に入って行った。

「……という感じなんだ」

「愛されてるわね恵里」

「えへへ……そうだ、ハジメ、ユエ。香織はどうだった？暴走してた？」

恵里がハジメに幽霊エリアでのことを聞く。

「えつとね……その……」

「……ん。香織無双だった。襲いかかる幽霊を杖と銃で次々と倒していった」

言い淀むハジメだったが、ユエがはつきりと答える。

「ちよつとユエってば……もう……ハジメ君も何か言つてよ……」

照れたように香織は顔を俯かせる。ハジメもハジメで事実だったので否定することもしなかった。

「神代魔法の魔法陣はと……あそこだね……」

全員が魔法陣に入ると攻略道中の記憶を確認するのか、それぞれが見た情報を共有するようだ。

記憶の確認も終わり全員が攻略者として認められ、士郎達の脳内に新たな神代魔法が

追加された。

「……でこの魔法……大陸の端と端じゃないか……解放者め……」

「……見つけた『再生の力』」

「絶対わざとだろ……ここにあるとか……」

今回手に入れた神代魔法はハルツィナ樹海で必要になる。それをこんなところに置くので、意図的なものだと思ってしまう。

すると魔法陣の輝きが薄くなると人型の光が現れる。

どうやら、オスカー・オルクスと同じくメッセージを残したらしい。

人型は次第に輪郭をはっきりとさせ、一人の女性となった。祭壇に腰掛ける彼女は、白いゆったりとしたワンピースのようなものを着ており、エメラルドグリーンの長い髪と扇状の耳を持っていた。どうやら解放者の一人メイ・メルジーネは海人族と関係のある女性だったようだ。

彼女は、オスカーと同じく、自己紹介したのち解放者の真実を語った。おっとりした女性のように、憂いを帯びつつも柔らかな雰囲気を感じている。やがて、オスカーの告げたのと同じ語りを終えると、最後に言葉を紡いだ。

『……どうか、神に縋らないで。頼らないで。与えられる事に慣れないで。掴み取る為に足掻いて。己の意志で決めて、己の足で前へ進んで。どんな難題でも、答えは常に貴

方の中にある。貴方の中にしかない。神が魅せる甘い答えに惑わされないで。自由な意志のもとにこそ、幸福はある。貴方に、幸福の雨が降り注ぐことを祈っています』

そう締め括り、メイル・メルジーネは再び淡い光となって霧散した。直後、彼女が座っていた場所に小さな魔法陣が浮き出て輝き、その光が収まると、そこにはメルジーネの紋章が掘られたコインが置かれていた。

「証の数も四つですね、土郎さん。これで、きつと樹海の迷宮にも挑戦できます。父様達はどうしてるでしょう〜」

「他の兎人族も巻き込んで強くなつてたりしてね……」

「……………」

「ねえ、なんでみんな黙るの？」

「いや、ありえそうだと思ったから……」

「むしろやばいことになってなければなんもねえよ……」

そうだなあ……とハウリアに出会った地球組は思った。

突然、神殿が鳴動し、周囲の海水がいきなり水位が上がる。

「強制排出か！みんな！」

ハジメが潜水艇を取り出す暇もないと考え、土郎は地面からかなり長めの鎖を作り出し、全員に巻きつける。ハジメも同じ事を考え、酸素ボンベを宝物庫から取り出す。

天井部分が開き、そこに勢いよく海水が流れ、全員がそこに流れ込む。そして、遺跡の外——海中に放り出される。

ハジメが潜水艇を取り出し、乗り込もうとしたのだが、半透明の触手が潜水艇を弾き飛ばす。

『ユエー！』

『凍柩！』

ハジメが念話でユエに指示すると同時にヴェアベルトも氷魔法を使う。

『30秒くれ！そしたら空間魔法で一氣に外に出る！』

士郎が魔力を練り始める。

魔法組は氷魔法で障壁を、炎魔法で触手を焼き、重力魔法でクリオネに圧をかける。

ハジメは魚雷を連射する。

『くっそ！再生速度が早すぎる！』

『焼いても焼いてもキリがないわよ！』

『魔力を分解する性質が特に厄介過ぎる……ここではメルのブレスが使えん……』

炎魔法が有効打なのは分かっているのだが、海中ではそこまで効果が出ない。

すると士郎が目を見開く。

『みんな準備できた！行くよ！』

そうして開いたゲートに飛び込み、出た先は上空百メートルほどの高さだった。

ティオの竜化とメルリアンの巨大化で全員を拾い上げる。

「ふう……助かったですう……」

「とにかくティオ上に逃げてくれ……」

『承知したのじゃ』

海面から一気に離れる。しかしそれを逃すまいと巨大な津波に呑み込まれる。その際に香織とユエが結界を張る。

「また海中に逆戻りか……」

「なんとかあのクリオネを一気に焼き尽くせれば良いんだけど……それを作る時間は……」

「時間が……足りないね……私の聖絶でも稼げて数十秒……ユエと合わせても一分強が限界だね……」

結界を維持する香織がクリオネの魔力分解の時間を計算する。

それでもハジメは限界突破のオーラを纏いながら武器制作に専念する。

時間が欲しいと切に願ったその時、士郎の脳内に聞き覚えのある声が聞こえた。

『よう、シロ坊苦戦してるみたいだな。おっちゃんが手助けしてやるぜ』

『この声って……リーさん!?!』

『おうよ！シロ坊の友、リーさんだ』

かつてフューレンの水族館で出会った人面魚のリーマンだった。

突然、銀色の巨大な影が横合いから巨大クリオネに体当たりをぶちかました。大口を開けてまさに捕食態勢だった巨大クリオネは、完全な不意打ちを受けて吹き飛ばされ、押しやられていく。

『シズクの嬢ちゃんにシアの嬢ちゃんも息災か？』

『久しぶりね……』

『ふえ!?えっと、は、はい！健康ですう！』

『そりゃ、重畳。で、その坊主は何ぼさつとしてやがる。あと三分ありやあ、悪食をどうにか出来んだろ？やること、さっさとやりな。そう長くは持たないぜ？』

『あ、うん……ありがとう。』

ハジメは武器制作に戻る。

銀色の巨大な影は、巨大クリオネに特攻したり、攻撃をかわしたりして時間を稼いでいる。どうやら、銀色の影の正体は、魚群のようだ。それも魔物などではなく、ただの魚だ。ただの魚でも数万、あるいは数十万匹という数が揃えば、怪物相手でも時間稼ぎくらいは出来るらしい。物凄い勢いで数を減らしているの、確かに、そう長くは保たないだろうが。

なぜ、ここにリーマンがいるのか、その疑問を顔見知りらしいからと無理やり前に出されたシアが代表して聞く。

『あ、あのリーさん？でいいですか？えっと、一体何がどうなっているんですか？』

『ふん、別にどうってことはねえ。この近くを適当にぶらついていたら、でつけえ上に覚えのある魔力を伴った念話が聞こえたもんでよ。何事かと駆けつけてみりやあ、シロ坊が悪食に襲われてるじゃねえか。色々疑問はあつたが、友の危機だ。何もしないなんて男の恥つてもんよ』

「えーと、あの魚群は……それに悪食？」

『悪食つてのは、あれのことだ。遙か昔、太古から海に巣食う化け物……いや、天災つてやつよ。魔物の祖先なんて言われてたりもするな。あの魚の群れは、俺の能力で誘導したんだよ。俺達の種族が使う念話には、普通の海の生物をある程度操る能力があるんだな』

驚愕の事実が発覚した。人面魚リーマンは魚使いだつたらしい。と、リーマンの話が終わったタイミングで魚群がほぼ壊滅し、巨大クリオネが再びハジメ達に向かって大口を開けながら襲いかかってきた。

だが、尊い犠牲の上に稼がれた時間は……きっちり三分。

通常のものより大きい魚雷群がハジメ達を囲む聖絶の周囲に整然と展開された。そ

の数は凡そ百二十。そして、不敵に笑うハジメの周囲には同数の円環が浮かんでいる。

ハジメは手元の感応石を起動すると、一斉に魚雷群を射出させた。百二十もの魚雷が気泡の線を引きながら高速で大口開ける巨大クリオネに向かって突貫する。しかし、ただの魚雷では、爆発したところで巨大クリオネの体を四散させるだけで、実質的なダメージもなく直ぐに再生されてしまうだろう。

さらに続けてフラム鉱石が液状化したタールを円環に大量に投下する。

円環を通ったタールは魚雷群の元に現れ、クリオネを黒く染め上げる。

分離して逃げようとするもののユエとヴェアベルトの水魔法、ティオのプレスに幸いの重力魔法、士郎の空間魔法により動きを妨害される。

「城炎！」

タールをぶち込んだ際にやることを理解していた優花がタールに向かって炎魔法を放ち一気に炎上、大爆発。赤い炎に内側からクリオネは焼かれて灰になっていった。

「お兄ちゃん……」

解析眼にはクリオネの存在を示すものは写らなかつた。

「悪食の討伐完了……みんなお疲れ様」

一気に疲れが来たのかハジメは結界内で片膝をつく。限界突破の赤いオーラも消えている。

「ふう……」

「大丈夫、ハジメ君？」

「魔力切れだね……」

「えぐい殺し方をする。ゾクゾクしたのじゃ」

『よお、シロ坊。爆破するってんなら言ってくれよ。危なかったじゃねえか』

『ごめん。あれ殺すのこじか頭になかった』

『まあ悪食、殺ろうてっんなら仕方ないか。何はともあれ見事だったぜ』

『リーさんが来てくれなかったら、本当不味かったよ……ありがとう』

『どういたしましてだ。まあ、仁義を貫いただけさ。気にするな』

『漢だね……流石リーさんだ。ここに居てくれた偶然にも感謝だよ』

『シロ坊、積み重なった偶然は、もはや必然と呼ぶんだぜ？おっちゃんがお前さんに助力できたのも必然、こうして生き残ったのも必然さ』

ニヤリと笑うおっさん面の魚と同じくフツと口元を緩める士郎。何かが通じ合っている二人に、背後の数人がヒソヒソと話している。

『おい、ハジメ……あれがイケおじとの男の友情ってやつか……』

『男子の誰もが一度は憧れる関係だね……羨ましいなあ……』

「お兄ちゃんが異世界でできた友達がシーオン……なんだか頭が混乱してきたよ……」

「前もあんな感じでしたよ。ガールズトークならぬボーイズトークってやつですかね？
まあ、相手はおっさんですが……」

『じゃあ、おっちゃんは今もう行くぜ。シロ坊。縁があればまた会おう』
『ああ。リーさんも元気で』

互いに一つ頷くと、リーマンは踵を返した。しかし、少し進んで振り返ると、雫とシアに話しかけた。

『嬢ちゃん達、ライバルは多そうだが頑張れよ。子供が出来たら、いつか家の子と遊ばせよう。カミさんも紹介するぜ。じゃあな』

それだけ言い残すと、今度は振り返らずに、そのまま大海へと消えていった。
後に残ったのは……

「「「結婚してたのかよおー！！」」」

『ダメオヤジ……』

「メル、それ以上はいけない」

まさかの妻子持ちだとは思わなかった。

そう聞くと風来坊からメルリアンの言ったダメ親父にしか見えなくなってしまった。

叛逆者への刺客と終わりへと近づく大迷宮攻略

母子との約束と異端者認定

メルジーネ海底洞窟の攻略を終えて、土郎達はエリセンまで戻り、数日を過ごしていた。本来ならば、すぐにでも出発したかったのだが、ハジメとミュウが中々離れられないのである。

ミュウはハジメが離れてしまうのを直感で感じているのか、無言の懇願で中々言い出せずにいる。

リーニヤには一度エリセンに預けて、全てが終わったら迎えに行くと伝えている。

「パパ、ママ、お姉ちゃん達、起きて。朝だよ」

「……おはよう、リーニヤ……」

土郎に馬乗りになりながら身体を揺すって起こそうとする。かなり広めのベッドに寝ていて、土郎と恵里の間にリーニヤが寝ている。

リーニヤに起こされた土郎達は顔を洗って、着替える。

朝食を済ませて、今日は何をするか考える。

ここ数日は空間魔法と再生魔法の習熟に費やした。偽・螺旋剣には空間魔法をきちん

と付与し、空間を抉る力を強化した。

エリセンは海の幸が多いので、幸利と優花の作る海鮮料理がとても美味しい。エリセンの料理人も教えを乞いに来ていたのは全員が驚いていた。

キュー〇〇3分〇ツキングの〇P

「はい、久しぶりに俺たち清水幸利と園部優花によるお料理のお時間となりました」

「今回作っていく料理はアクアパッツアよ」

「まずはアイザリー貝を1〜2時間ほど塩水に付けておくわ」

「で、その1〜2時間ほど経過したのがこれだな。これを流水でよく洗って別の場所に置いておく」

「次にカタライドの切り身をキッチンペーパーで水分をとって塩胡椒をふる」

「そしてたらアタマトのミニサイズを半分に切って、スメズはいしづきを切り落としてバラバラにしてマツスルーミーは水気をきって、パセリをきざんでおく。これで下準備が完了だな」

「ええ。次は熱したフライパンにカタライドとニギンニギユを入れたらを両面こんがりなるように焼いていくわ」

「ホントハジメのアーティファクトは便利だな…」

「さつき下準備したものと調味料を順番に煮ていくわ」

少女調理中

「15分くらい経過したら皿に盛り付けてパセリ、粗挽き胡椒をふりかけて完成よ！」

幸利と優花のアクアパツアを食べ終えた土郎達は、海で遊んでいる。

土郎は恋人達の水着にしばらく見惚れてしまい、鼻から血を垂れ流していた。

「お兄ちゃん？」

「ごめん……みんなの水着が……綺麗すぎて……鼻血が……」

「やりました！わたし達の水着で土郎さんを悩殺できたですうー！」

「それよりも大丈夫？ボタボタ出てるけど……」

「ちよつと待っててね……よし！治った！」

大量に溢れ出る鼻血を完全なる形で止血する。

下を見ると相当出血していたのか大きな血溜まりができていた。戦闘も行っていないのに、この出血量はおかしい。

そして今はミュウとリーニヤを海中で追いかける、変則的な鬼ごっこをしている。海人族の特性を活かし、逃げ回るので、鬼役は中々捕まえることが出来なかった。

かくいう士郎も全然捕まえることが出来なかった。

ミュウの悪戯でシアとテイオの水着の上を取られていた。手ブラでミュウを追いかけるシアと、偶々近くにいた幸利の顔を咄嗟に押さえ込む優花、残念そうな表情をするテイオの姿が目に入る。

「幸利、あんた見た？」

「見てねえよ……（少し見たいと思ったのは男の性だ……）」

「ミュウちゃ〜ん返して下さ〜い！」

「ふむ……見てもらえなかったか……」

向こう岸にはハジメとレミアさんが2人で座っていた。おそらくミュウのことを話しているのだろう。

「パパ、ミュウは連れていけないの？」

「そう……だね……ハジメとしては、危険なところや元いた世界から連れ出すのを躊躇っているんだよね……」

「なら、ミュウのママが一緒なら大丈夫？」

「レミアさんが良いって言うならね……そこはハジメの問題だ……別の事を考えよつか。なににする？」

「ママとお姉ちゃん達呼んで海の中、自由に泳ぎたい」

「わかった。3人呼んでくるよ」

士郎は恵里達を呼びに行く。未だにミュウを捕まえることが出来ずにいたシアが慌てて雫の後ろに隠れた。

「あの〜士郎さん……ミュウちゃんに水着を取られて上、裸なので、見ないでくれますか……」

「ご、ごめん……」

「ホルアドの宿屋であんなに乱れてたのに今更恥ずかしがるの？」

「それとこれとは別なんですよ！恵里さん！」

顔を赤く染めて雫の影から反論するシア。

ミュウから水着を返してもらい酸素ポンベを使い、海の底へと潜って行く。リーニヤの案内で進んでいく。

太陽の光が筋のようにさして海藻や魚の鱗に反射して綺麗な光景だ。

『ダイビングなんてしたことなかったから、こんな綺麗な景色初めてよ……』

『そうですね……フェアベルゲンでもこういった幻想的な景色は見れませんからねえ……』

雫とシアは海中の景色に声を漏らす。

『リーニヤ、ありがとうねこんな綺麗な場所に連れて来てくれて』

「ここは、リーニヤのお気に入りの場所だよ。ミュウとミュウのママにも教えてない秘密の場所なんだ。でもパパやママ、お姉ちゃん達には特別」

リーニヤにとつて特別な場所に連れて来てもらった。彼女が士郎達のことと本当に大切な人と認識しているということだ。

士郎と恵里はリーニヤを抱きしめるのだった。

そして夕方になり夕食を食べ終えて、明日の出発の準備をし始める。

「リーニヤ、必ず迎えに行くから。良い子で待つててね」

「うん。リーニヤは良い子で待つてるよ」

「僕達の住んでる世界に必ず連れて行ってあげるからね」

「うん！」

2人で海中で抱きしめたように抱きしめる。

「パパ！ママ！お姉ちゃん達！いつてらっしやい！」

「「「いつてきます！」「」」」

リーニヤに見送られた士郎達はブリーゼに乗り込む。そこには既にヴェアベルトとメルリアンが乗っていた。

「ハジメ殿もどうやら踏ん切りがついたようだな」

ヴェアベルトの視線の先にはハジメ達がいた。しばらくして彼らがこちらに戻ってくる。

「もう大丈夫なのかハジメ」

「幸利。うん、迎えに行くって約束した。だから早く迷宮を全部攻略しないとね」

そう言つて全員ブリーゼに乗り込み、手に入れた神代魔法、再生魔法を使うためにアンカジへと走り出した。

1日半かけてアンカジへと到着した。

再生魔法ならばアンカジの毒素も無効化できると思い、士郎達は立ち寄つたのだ。

アンカジの入り口は多くの隊商で溢れていた。

「随分と大規模な隊商だね……」

「……ん、時間かかりそう」

「物資を運んでるんだらうね」

しかしこつちも急ぎなので、ハジメは順番待ちする気もなく、入場門に車を走らせる。門番の兵士がブリーゼを目にした途端に、こちらに走り寄つて来た。

ブリーゼを宝物庫にしまう。

「ああ、やはり使徒様方でしたか。戻って来られたのですね」

兵士は此方の姿を見ると、ホッと胸を撫で下ろした。

使徒としては恵里の知名度が高いので、恵里が前に出る。

「はい。オアシスを浄化できる手段が手に入ったので、試しに来ました。領主様にも話を通しておきたいのですが……」

「オアシスを!?それは本当ですか?!」

「は、はい。あくまで可能性が高いというだけです……」

「いえ、流石は使徒様です。と、こんなところで失礼しました。既に、領主様には伝令を送りました。入れ違いになってもいけませんから、待合室にご案内します。使徒様の来訪が伝われば、領主様も直ぐにやって来られるでしょう」

やはり、国を救ってもらったという認識なのか兵士の士郎達を見る目には多大な敬意の色が見て取れる。VIPに対する待遇だ。士郎達は、好奇の視線を向けてくる商人達を尻目に、門番の案内を受けて再びアンカジ公国に足を踏み入れた。

「久しい……というほどでもないか。無事なようでは何よりだ。香織殿達に静因石を託して戻って来なかった時は本当に心配したぞ。貴殿は、既に我が公国の救世主なのだから。礼の一つもしておらんに勝手に死なれては困る」

「一介の冒険者にそこまで心配しなくても……まあ無事だったよ。この通り元気だ。この国も支援を受けていて安心したよ」

「ああ。備蓄した食料と、ユエ殿が作ってくれた貯水池のおかげで十分に時間を稼げた。王国から援助の他、商人達のおかげで何とか民を飢えさせずに済んでいる」

そう言つて、少し頬がこけたランズイは穏やかに笑つた。アンカジを救うため連日東奔西走していたのだろう。疲労がにじみ出ているが、その分成果は出ているようで、表情を見る限りアンカジは十分に回せていけているようだ。

「領主様。オアシスの浄化は……」

「香織殿。オアシスは相変わらずだ。新鮮な地下水のおかげで、少しずつ自然浄化は出てきているようだが……中々進まん。このペースだと完全に浄化されるまで少なくとも半年、土壌に染み込んだ分の浄化も考えると一年は掛かると計算されておる」

少し、憂鬱そうにそう語るランズイに、香織が今すぐ浄化できる可能性があると伝える。それを聞いたランズイの反応は劇的だった。掴みかからんばかりの勢いで「マジで!?!」と唾を飛ばして確認するランズイに、香織は完全にドン引きしながらコクコクと頷く。

そしてオアシスにて、香織が杖先に魔力を込めて再生魔法を唱える。

「絶象」

手に入れた再生魔法の適性が一番高かったのが香織で次がティオ、ユエと士郎が同じくらい。その月に幸利と恵里、次いで優花と雫、ヴェアベルトでギリギリ使えるのがシアで適性がなかったのは当然の如くハジメだった。

自己再生ができるユエは少し苦手としているようだった。対する士郎は強化魔術を他者に行う要領で使い熟していた。

香織の魔法はオアシスの中心に落ちる。

神秘的な光がオアシスを包みその光が空に溶けていった。

術の効果に呆気にと取られていたランズィ達が慌ててオアシスを調べる。

「……戻っています」

「もう一度言ってくれ……」

「オアシスに異常なし！元のオアシスです！完全に浄化されています！」

その瞬間、ランズィの部下達が一齐に歓声を上げた。手に持った書類やら荷物やらを宙に放り出して互いに抱き合ったり肩を叩きあつて喜びをあらわにしている。ランズィも深く息を吐きながら感じ入ったように目を瞑り天を仰いでいた。

「あとは、土壌の再生だな……領主、作物は全て廃棄したのか？」

「……いや、一箇所にとめてあるだけだ。廃棄処理にまわす人手も時間も惜しかったのでな……まさか……それも？」

「そうだね……他のメンバーでやればあつという間に終わると思う」

「……ん、問題ない」

「うむ。せっかく丹精込めて作ったのじゃ。全て捨てるのは不憫じゃしの。任せるが良
し」

「そうだな、食料は大切にしねえと」

士郎達の言葉に、ランズイは胸に手を当て、深く頭を下げた。

「領主がそんな簡単に頭下げていいの？」

「今下げないでいつ下げる……貴方は我々の救世主だ……」

ランズイの愛国心がとても伝わった。

「ねえ、あれアンカジの兵士じゃないわよね？」

すると優花が遠見で確認した場所には彼女の言う通り、アンカジの兵士とは違う装備の兵士が隊列を組んでこちらにやってきていた。

「……あれは神殿騎士かしら？」

「……嫌な予感がするよ」

そして士郎達の元へやってきた彼らの中から、豪華な法衣を着た初老の男が進み出てくる。

「ゼンゲン公……こちらへ。彼等は危険だ」

「フォルビン司教、これは一体何事か。彼等が危険？二度に渡り、我が公国を救った英雄ですぞ？彼等への無礼は、アンカジの領主として見逃せません」

「ふん、英雄？言葉を慎みたまえ。彼等は、既に異端者認定を受けている。不用意な言葉は、貴公自身の首を絞めることになりますぞ」

「異端者認定……だと？馬鹿な、私は何も聞いていない」

「当然でしょうな。今朝方、届いたばかりの知らせだ。このタイミングで異端者の方からやって来るとは……クク、何とも絶妙なタイミングだと思わんかね？きつと、神が私に告げておられるのだ。神敵を滅ぼせとな……これで私も中央に……」

「うわ、この男、私欲まみれですよ。主に最後の言葉なんて」

士郎達には聞き取れなかった言葉をシアだけが聞き取り、ドン引きしていた。

どうやら士郎達が異端者認定を受けたようだ。

「さあ、私は、これから神敵を討伐せねばならん。相当凶悪な男だという話だが、果たして神殿騎士100人を相手に、どこまで抗えるものか見ものですね……さあさあ、ゼンゲン公よ、そこを退くのだ。よもや我ら教会と事を構える気ではないだろう？」

こちらを舐めている発言をする。

しかしランズイが発した言葉は――

「断る」

否定だった。

「何？今なんと言った？」

「断ると言った。彼等は公国の英雄にして救世主。そんな彼等に恩を仇で返すようなことはしない。例え聖教会であろうとも彼等に仇なすことは許さん」

「なつ、なつ、き、貴様！正気か！教会に逆らう事がどういふことかわかんわけではないだろう！異端者の烙印を押されたいのか！」

「フォルビン司教。中央は、彼等の偉業を知らないのではないか？彼は、この猛毒に襲われ滅亡の危機に瀕した公国を救ったのだぞ？報告によれば、勇者一行も、ウルの町も彼に救われているというではないか……そんな相手に異端者認定？その決定の方が正気とは思えんよ。故に、ランズイ・フォウワード・ゼンゲンは、この異端者認定に異議とアンカジを救ったという新たな事実を加味しての再考を申し立てる」

「だ、黙れ！決定事項だ！これは神のご意志だ！逆らうことは許されん！公よ、これ以上、その異端者を庇うのであれば、貴様も、いやアンカジそのものを異端認定することになるぞ！それでもよいのかっ！」

「ランズイよ、良いのか？王国と教会、この2つと事を構えることになるのだぞ？」

ランズイはヴェアベルトの言葉に反応することなく事の成り行きを見守っていた部下達に視線を向けた。ハジメも、誘われるように視線を向けると、二人の視線に気がつ

いた部下達は一瞬瞑目した後、覚悟を決めたように決然とした表情を見せた。瞳はギラリと輝いている。明らかに、「殺るなら殺るぜえ」という表情だ。

その意志を司教も読み取ったようで、更に激高し顔を真っ赤にして最後の警告を突きつけた。

「いいのだな？公よ、貴様はここで終わることになるぞ。いや、貴様だけではない。貴様の部下も、それに与する者も全員終わる。神罰を受け尽く滅びるのだ」

「このアンカジに、自らを救ってくれた英雄を売るような恥知らずはいない。神罰？私が信仰する神は、そんな恥知らずをこそ裁くお方だと思っていたのだが？司教殿の信仰する神とは異なるのかね？」

ランズイの言葉に怒りの限界を超えたのか、神殿騎士に攻撃の指示を出そうとしたが、何かが神殿騎士に飛来してきた。飛来してきたそれはただの石ころだった。

それを皮切りに大量の石ころやらなんやらが神殿騎士や司教に飛来してくる。

「やめよ！アンカジの民よ！奴らは異端者認定を受けた神敵である！やつらの討伐は神の意志である！」

フォルビンが、殺気立つ住民達の誤解を解こうと大声で叫ぶ。彼等はまだ、士郎達が異端者認定を受けていることを知らないだけで、司教たる自分が教えてやれば直ぐに静まるだろうと、フォルビンは思っていた。

実際、聖教教会司教の言葉に、住民達は困惑をあらわにして顔を見合わせ、投石の手を止めた。

そこへ、今度はランズイの言葉が、威厳と共に放たれる。

「我が愛すべき公国民達よ。聞け！彼等は、たった今、我らのオアシスを浄化してくれた！我らのオアシスが彼等の尽力で戻ってきたのだ！そして、汚染された土地も！作物も！全て浄化してくれるという！彼等は、我らのアンカジを取り戻してくれたのだ！この場で多くは語れん。故に、己の心で判断せよ！救国の英雄を、このまま殺させるか、守るか。……私は、守ることにした！」

フォルビン司教は、「そんな言葉で、教会の威光に逆らうわけがない」と嘲笑混じりの笑みをランズイに向けようとして、次の瞬間、その表情を凍てつかせた。

住民達の意味が投石という形をもって示されたからだ。

「なっ、なっ……」

再び言葉を詰まらせたフォルビン司教に住民達の言葉が叩きつけられた。

「ふざけんなあ！俺達の恩人を殺らせるかよ！」

「そうよ！あんた達なんか何もしてくれなかったのに！」

「異端者認定なんて何かの間違いよ！」

「香織様を守れ！」

「雫お姉様をお守りするわよ！」

「ビーズ会長を呼べ！香織様にご奉仕し隊を出してもらうんだ！」

「雫お姉様の妹になり隊行きまーす！」

などなどアンカジの住民が口々に大声を出す。

雫は顔を隠していた。どうやら義妹がここに誕生したことに軽くショックを受けていた。

「司教殿、これがアンカジの意思だ。先程の申し立て……聞いてはもらえませんか？」
「ぬっ、ぐう……ただで済むとは思わないことだっ」

そう言つてフォルビン司教達は士郎達を憎々しげに睨んで立ち去つていった。

その後農作物や土壌を浄化した士郎達はアンカジの宴会に参加していた。

その国特有の料理やダンスを楽しんだ。

その際に恵里達に来ていた衣装を見て押さえ込んでいた欲が爆発して、宴会が終わり、そのまま宿屋に戻つたのだが、朝になつても中々出てくることはなかった。無論ハジメもだった。

幸利も幸利で夜中、外で魔力を放出し、気分を落ち着かせていた。

アンカジの出たのは3日後になつていた。

王都侵攻 前編

アンカジを出てしばらくすると隊商が賊に襲われているのを見つけた。

「相手は賊みたいだな。……小汚ない格好した男が約四十人……対して隊商の護衛は十人つてところか。あの戦力差で拮抗しているのがすげえな」

「あの結界は中々のものね」

「ふむ、さながら城壁の役割じゃな。あれを崩さんと本丸の隊商に接近できん。結界越しに魔法を撃たれては、賊もたまらんじやろう」

「でも、一向に引く気配がありませんよ?」

「そりゃあ、あんな隊商全体を覆うような結界、ボクら異世界組でもなければ、そう長くは持たないよ。多少時間は掛かるけど、待ってれば勝手に勝手に勝手に解ける」

「でもあの結界どこかで見たような……」

ボクは前の結界を観察する。

すると恵里が飛び出して声を上げる。

「お兄ちゃん!あの結界、リリイのだよ!」

「リリイのか!」

一言叫んでボクはアクセルを全開にして賊に突撃する。

「お兄ちゃん!?もしかしてこのまま行くの!？」

「正直そっちの方が楽!あ、良い子のみんなは車で人を引いちやダメだよ!」

「言ってる場合じゃ、きやああああ!」

ブリーゼで賊を次々と轢き殺す。ボンネットに乗った者は屋根のブレードに切り裂かれていた。

「お兄ちゃんトータスに来てからアグレッシブになったね……」

そう言う恵里はフロントガラスを見ないように顔を下げている。

その後、ブリーゼから降りて賊を蹴散らしていく。

香織は倒れていた護衛の人を治療するのだが、数人は事切れていたのか再生魔法でも蘇生は叶わなかった。

するとフードを目深に被る人物が恵里に抱きつく。

「恵里!」

「リリイ!やっぱり君だったんだね!あの結界を見てまさかと思っただけど……」

「私も、こんなところで恵里に会えるとは思いませんでした……僥倖です。私の運もまだまだ尽きてはいないようですね」

「どういふことなのリリイ……」

感動の再会に水を差すのは気が引けたのだが、状況を把握したいのでやむを得ず2人の間に割って入る。

「リリイ、久しぶりだね……見た目はこんなに変わったけど」

「士郎さんですか!？」

「うんお兄ちゃんだよリリイ。ハジメ達もそこにいるし」

「鈴やメルド団長から聞いてはいましたが、皆さん本当に生きていたのですね……よかったです……」

「まあなんとか……だけど。それでリリイはなんでここに？」

ハジメはリリイに質問をする。

リリイほどの立場の人間がここにいるのかわからなかった。

すると後ろから初老の男が現れた。

「お久しぶりですな、息災……どこるか随分とご活躍のようで」

「アンタは確かユンケル・モットーさんか……」

「栄養ドリンク？」

「香織、違うわよ」

そんなやりとりが聞こえてきたが、ユンケルさんは話を続ける。

「ええ、覚えていて下さって嬉しい限りです。ユンケル商会のモットーです。危ないと

ころを助けて頂くのは、これで二度目ですな。貴方とは何かと縁がある」

握手を求めながらにこやかに笑う男は、かつてボク達が、ブルツクの町からフューレンまでの護衛を務めた隊商のリーダー、ユンケル商会のモットー・ユンケルだった。

「申し訳ありません。商人様。彼等の時間は、私が頂きたいのです。ホルアドまでの同乗を許して頂いたにもかかわらず身勝手とは分かっているのですが……」

「おや、もうホルアドまで行かなくても宜しいので？」

「はい、ここままで結構です。もちろん、ホルアドまでの料金を支払わせて頂きます」

どうやらリリイは、ユンケルさんの隊商に便乗してホルアドまで行く予定だったらしい。しかし、途中でボク達に会えたことでその必要がなくなったようだ。

「そうですか……いえ、お役に立てたなら何より。お金は結構ですよ」

「えっ？いえ、そういうわけには……」

お金を受け取ることを固辞するユンケルさんにリリイは困惑する。

おそらく隊商では色々とお世話になったのだろう。

「二度と、こういう事をなさるとは思いませんが……一応、忠告を。普通、乗合馬車にしろ、同乗にしろ料金は先払いです。それを出発前に請求されないといいのは、相手は何か良からぬ事を企んでいるか、または、お金を受け取れない相手という事です。今回は、後者ですな」

「それは、まさか……」

「どのような事情かは存じませんが、貴女様ともあろうお方が、お一人で忍ばなければならぬ程の重大事なのでしょう。そんな危急の時に、役の一つにも立てないなら、今後は商人どころか、胸を張つてこの国の人間を名乗れますまい」

「ならば尚更、感謝の印にお受け取り下さい。貴方方のおかげで、私は、王都を出ることが出来たのです」

「ふむ……突然ですが、商人にとって、もつとも仕入れ難く、同時に喉から手が出るほど欲しいものが何かご存知ですか？」

「え？……いいえ、わかりません」

「それはですな、『信頼』です」

「信頼？」

「ええ、商売は信頼が無くては始まりませんし、続きません。そして、儲かりません。逆にそれさえあれば、大抵の状況は何とかなるものです。さてさて、果たして貴女様にとって、我がユンケル商会は信頼に値するものでしたかな？もしそうだというのなら、既にこれ以上ない報酬を受け取っていることになりましたが……」

これ以上ない上手い言い方だな……ユンケルさん。実際、リライからの、王家からの信頼を得ると言うことはかなりの報酬だ。

リリイ、諦めたように、その場でフードを取ると、真っ直ぐモットーに向き合った。「貴方は真に信頼に値する商会です。ハイリヒ王国王女リリアーナは、貴方方の厚意と献身を決して忘れません。ありがとうございます……」

「勿体無いお言葉です」

リリアーナに王女としての言葉を賜ったユンケルさんは、部下共々、その場に傅き深々と頭を垂れた。

その後ユンケルさんはボク達をその場に残しホルアドへと進んでいった。

「それでリリイ、なんでそんなお忍びの格好をしてまで王国を出たの？」

リリイに質問をしたのはハジメだった。

「……愛子さんが……攫われました」

「なにっ!？」

「そんな……!？」

リリイの話を要約すると。

王宮内の雰囲気がおかしくなったり、父王が教会に傾倒し、時折、熱に浮かされたようにエヒト様を崇め、それに感化されたのか宰相や他の重鎮達も巻き込まれるように信仰心を強めていった。

顔馴染みの騎士達は正気を失ったような行動をし、メルド団長に至っては顔を合わせ

る回数が激減し、話す機会がなくなってしまった。

さらにはボク達の異端者認定に反対しようものなら、自身のことを敵を見るような目で見られたという。

先生から話があるとやられて夕食の時に同席して欲しいと頼まれ、時間になって向かうと先生と何者かが言い争っていた。

その様子を見ると彼女と銀髪の修道女がいて、その修道女が先生を気絶させ、担いでどこかへいくのを目の当たりにした。

王族用の脱出ルートで王国から出て恵里、そしてボク達を探しに来たという。

「あととは知つての通り、ユンケル商会の隊商をお願いして便乗させてもらいました。まさか、最初から気づかれているとは思いませんでしたし、その途中で賊の襲撃に遭い、それを皆さんに助けられるとは夢にも思いませんでしたが……少し前までなら神のご加護だと思うところですが……しかし……私は……今は……教会が怖い……一体、何が起きているのでしょうか……あの銀髪の修道女は……お父様達は……」

自分の体を抱きしめて恐怖に震えるリリイは、才媛と言われる王女というより、ただの女の子にしか見えなかった。だが、無理もないことだ。自分の親しい人達が、知らぬうちに変貌し、奪われていくのだから。

香織は震える彼女を落ち着かせるよう抱きしめ、ゆっくりと背中を撫でる。

「幸利……銀髪の修道女と王国の人達の変化って……」

「ああ、十中八九メルジーネで見たあれと同じだ……」

先生が攫われた理由は確実にこの世界の事、そしてエヒトの事を話してしまったからだ……

迂闊に話すべきではなかったか……

「土郎殿……畑山殿を……」

「うん。助けに行かないとね。先生には地球で世話になったし」

「そうだね……先生には恩返しをしないと」

「宜しいのですか？」

「うん」

リリイが確認するとハジメは短く一言頷く。

「皆さんありがとうございます……」

「よし、それじゃあこのまま王国まで一走りだ。リリイも車に乗って」

ブリーゼの速度をMAXまで上げてハイリヒ王国まで突っ走る。すると大地感知に複数の気配を感じ取った。

「……どうやら魔人族も来てるみたいだね」

「そんな……」

魔族の対処に悩む。

おそらく本物の神の使徒がいるだろうし戦力はあまり割く事はしたくない。王国の結界も当てにできないわけではないが、神代魔法のことを考えると期待ができない。

「士郎、俺に行かせてくれるか?」

「士郎さん、あたしも行かせて欲しいわ」

「それは構わないけど。どうしたの?」

幸利と優花が突然名乗り出たことについて問い返してしまった。

「多分だが火山でやりやったフリードってやつがいるだろうから、やり返しに行く」

「アタシも同じ理由よ」

「わかった。2人とも気をつけて」

2人は空力を使い、空を跳んで行った。

「……テイオは行かなくてよかったの?」

と、ユエは皆が疑問に思っていたことを口に出す。

「本来なら妾も行きたかったのじやが、流石に戦力を割けないからのお」

と、真面目に答えたのだった。

ボクらはこのまま神山に向かい、熱源探知で先生を探すのだった。

神山で監禁されていた畑山愛子は一人不安に苛まれていた。

自身のこれから、教え子達が何をするのか、様々だ。

「みなさん……何をするつもりなのでしようか……」

愛子は生徒の無事を祈るように両手を握る。

「……殿……畑山殿」

突如聞こえてきた声に当たりをキョロキョロと見渡す。

「……幻聴でしょうか？ ヴェアベルトさんの声が聞こえるなんて」

「……幻聴ではないぞ」

「え!？」

格子の小窓からヴェアベルトが顔を覗かせていた。

「ヴェアベルトさん……!? 何故ここに?」

「しっ! 静かに……今ここを開ける」

ヴェアベルトは格子戸の鍵を破壊して扉を開ける。

「開いたぞ」

「ありがとうございます……ですが何故……つて、ええつ!？」

愛子はヴェアベルトが自身の手を突然握ってきたことに慌てる。

そして手首につけられていた金属の腕輪を破壊する。

「ヴェアベルトさん……?」

「その枷は魔力を封じる物のようだったのでな。破壊させてもらった。

そして愛子連れ出そうとしたその時だった。

『ヴェアベルト! 急いで先生を連れ出して脱出して!』

突然、外で警戒していた士郎から連絡が入ってきた。

『士郎殿!? 何があった!』

『メルジーネ海底洞窟にいた銀髪がこつちに襲いかかってきた!』

『わかった、今すぐ連れ出す!』愛子殿、すぐに出るぞ!』

「は、はい!」

ヴェアベルトは愛子の手を引つ張り、そのままメルリアンに乗って外に出る。

彼等が居た場所に空からレーザービームのようなものが放たれた。あと数秒遅ければ2人共アレを喰らっていた。

「フリード將軍から話は聞いたが……本当に生きていたとはな……」

ヴェアベルトが空を見上げるとそこには髪を一つに束ねた女の魔族が三つ首の竜に乗りこちらを見下ろしていた。

「カイラナか……」

「異教徒を滅ぼす……それが私の使命……」

そう言うのと、三つ首の真ん中の首から先程と同じ攻撃が何度もこちらに放たれる。

「ぐっ……」

「きゃあああああ！」

それをメルリアンが急旋回しながら回避する。

『ティオ殿！今すぐこちらに来てくれ！畑山殿を頼みたい！』

『承知したのじゃ！』

ヴェアベルトはティオが来るまでの間、攻撃をかわし続けた。何度も旋回し時には急に止まり、攻撃を愛子に当てぬよう必死に避ける。

すると黒竜がこちらに飛んでくる。ティオだ。

『ヴェアベルトよ待たせたのじゃ』

「助かった。畑山殿を頼む」

『任せるのじゃ』

愛子をティオに乗せる。

「えつと、ティオさん。よろしくお願いします」

『うむ任せよ』

そう言ってティオは離れていった。

だがカイラナはそれを逃がさない。三つ首のブレスを放つ。しかしそれを防ぐようにメルリアンのブレスで相殺する。

「異教徒……いや、裏切り者のヴェアベルト・ハリス。貴様はここで始末する」
「……目的を邪魔するのなら、私は貴様を排除する」

2人は剣を抜刀し急接近する。

ガキン！

剣が交差し何度も斬り合うが、決め手にはならない。

しかし互いが乗る竜のブレスの威力はこちらが上だが、3発同時に放たれば競り負ける。

神山の空で2人の竜騎士と竜が剣とブレスのやりとりが行われる。

（くっ……剣技はこちらが上だが、ブレスの数と威力が劣るか……ならばやるしかあるまい……北の山脈では使うことはなかったが、ここで使うとしよう。出し惜しみして時間をかけてはいられん！メル！）

（ワカッター！）

ヴェアベルトとメルリアンと意識を同調させる。

隙だらけの姿を晒すことになるが、僅かな時間だ。

三つ首竜がブレスを放つ。

しかしヴェアベルト達のいた所から放たれた火炎がそれを防ぐ。相殺したと同時に爆発が起きる。

爆炎が晴れると表れたのは素肌を竜の鱗で覆い、蒼い竜翼を生やしたヴェアベルトだがそこに飛んでいた。

「何っ!?!」

「あまり手の内は晒したくはなかったのだがな……貴様を殺す。情報は渡さん」

「そんな姿になったからって……なんだと言うのだあ!」

カイラナは突撃してくる。三つ首竜の角で突き刺そうとしたのだが、ヴェアベルトの姿はなかった。

「何処に「後ろだ」なっ!?!」

振り向くと同時に剣を突き刺す。心臓を外したが、大量に出血する。さらに三つ首竜の首を落とす。

カイラナが別の竜に乗り移ろうとしたのだが、ヴェアベルトは息を吸い込み、氷ブレスを吐く。

「ぐあああ!」

乗り移ることが出来ずにそのまま下へ落ちていく。

それを追い、ヴェアベルトは止めを刺した。

「裏切り者に……敗れるとは……フリー……ド様……魔王様……お許しを……」
「ふう……早く士郎殿達に加勢せねば」
ヴェアベルトは士郎達の加勢に向かった。

王都侵攻 中編

ヴェアベルトがフリードの部下と戦っている頃、同時期に幸利と優花は空力を使い、気配感知で認識した敵のところに向かっていた。

「この気配……やつぱ奴がいるのか……前回は不意打ちでやられたが、今度はやられねえ……」

「あまり先走らないですよ？それでやられたら元も子もないんだから」

「わかっている……それとヴェアベルトに殺してもいいのか聞いたら、良いって言うてた……もう分かり合えないんだよ」

「そう……ならアタシも容赦はしないわ」

2人が飛んでいると、魔族の兵達と灰竜達が襲いかかる。

「邪魔すんなー！」

「どいてー！」

幸利は闇魔法を連続で放ち、優花は属性を纏わせた苦無を大量に投げて一気に殲滅していく。

撃ち漏らしもあるが、既に王国に辿り着き、別行動をとっているユエの魔法が殲滅す

る。

「やはり貴様らか」

そう言つて現れたのは、白竜と黒竜、大量の灰竜を従えるフリードだった。

「よお……また会つたな」

「あそこでくたばつてはいなかったか……」

「あれしきでくたばるものですか」

「……だが今ここで貴様らを始末する！」

その声と共に灰竜のプレスが2人を四方八方から焼き尽くそうと襲いかかる。

『絶禍』

幸利の放つた黒く渦巻く四つの球体がそのプレスを呑み込んでいく。

「くっ……見たことのない魔法……貴様らも神に選ばれし者なのか！」

額に汗を流して得心がいったと頷くフリード。

「ほざけ、神なんかに選ばれてもなんも嬉しくねえからな？お前みたいに神を信仰なんてしてねえよ。少なくともこの世界の神はな！」

その台詞にフリードは自身の神すら侮辱された気になり、無表情となる。

「幸利、あんた口悪くなつてない？」

「こいつには恨みしかないから……」

「よかろう……貴様らを殺し、その遺体をアルヴ様の生贄にしてくれる！」

そう言ってフリードは灰竜に再びブレスを吐かせる。さらに黒竜に黒炎弾を吐かせ、白竜から極光ブレスを放った。

『界穿』

優花の空間魔法で転移して避ける。

二手に分かれてフリードの相手を幸利が、周囲の魔族と灰竜を優花が相手をする。

『暗黒波・集』！

幸利のレーザーの闇魔法がフリードの背後から襲いかかるが、地上にいた亀の魔物、アブソドが喰らい尽くす。

そしてそのまま暗黒波・集が撃ち返される。何度か試すものの結果は同じだった。

「チツ……面倒だな……だったら……優花！少し時間くれ！」

「わかったわ！」

そうはさせまいと白竜の極光ブレスが放たれるが、界穿で撃ち返す。

そして魔族を相手にしてた優花と交代する。

「今度は女の方が。どちらにせよ殺すだけだ」

そう言ってブレスや魔法を連続して放った。

優花は黒竜と白竜のブレスを幸利と同じように空間魔法の界穿で防ぐ。

そして一気に間合いを詰めて、短刀で斬りかかる。

「ふっ………せいっ………！」

「くっ………近接戦も熟すのか………！物を投げるだけではないのとは………！」

フリードは短刀の攻撃を帯刀していた剣で防ぐ。

ブレスを吐かせて優花との距離を取る。

「——揺れる揺れる世界の理、巨人の鉄槌、竜王の咆哮、万軍の足踏、いずれも世界を満たさない、鳴動を喚び、悲鳴を齎すは、ただ神の溜息！、それは神の嘆き！、汝、絶望と共に砕かれよ！『震天』！」

優花は嫌な予感を感じ、空力と縮地を使い距離を取る。しかし逃げ切れる気がしない。避けることをやめて頭上に空間魔法で自身に何も来ないよう、空間を固定すると、一瞬収縮した空間が大爆発を起こしたのは同時だった。

空間そのものが破裂する。そうとしか言いようのない凄絶な衝撃が、生き残りの灰竜や地上の魔物すら一瞬で粉微塵に砕いて、大地を抉り飛ばし、天空のまだら雲すら吹き飛ばした。

（空気を圧縮して一気に放出した!? 幸利から借りた本にあったわね………！）

なんとか防御しきり、再生魔法で傷を治す。

「やはり耐えると思っただぞ！」

優花の背後に開いたゲートを通り。極光を放ちながら白竜に騎乗したフリードが出現する。

咄嗟に重力魔法で避ける。

すると幸利からの念話を受け取る。

『優花！準備完了だ！横に避けてくれ！』

『わかったわ！』

幸利の指示通り左に避ける。

すると優花の後ろから超高速で何か飛んできた。

それはフリードの動体視力では認識することが出来なかったが、優花と同じように左に避けることでその何かに当たることはなかった。

「くっ……今のは、一体?!」

しかし息つく間もなく第二撃が飛んできくる。

今度は避けることが出来ずに飛んできた何か腹を突き破る。

「ぐあああああああ!」

さらに追い詰めるように何度も何度も飛んでいく。フリードに避ける力はなく何度も何度も突き抜かれる。

ポロポロになったフリードは後ろで魔力を高める幸利に目を向ける。

「はあ……はあ……今のは、一体……」

「前にお前を貫いた杖だよ。どうやったかは教える気はないがなあ……!」

そしていつのまにか接近していた優花がフリードに触れる。

「貴様、いつの間n「壊刻!」なっ、ガハア!」

「幸利が前に着けた傷よ……もう一回味わいなさい!」

吐血し癒えた傷が再び開き、大量の出血で一気に意識が朦朧としていくフリード。白竜は自身の主が倒れそうになったことで逃げの選択をする。

すると生き残りの魔人族達が灰竜と共に現れる。

「フリード様!ここは我々が足止めをします!貴方様は撤退を!」

「お前たち!……くっ、すまん!」

フリードは命辛々、幸利と優花から逃げるのだった。

2人は向かってくる魔人族を殲滅し、フリードの後を追おうとしたのだが、既に、空間魔法で転移していなくなっていた。

「ちっ……逃したか」

「また会った時は絶対倒す……それよりも幸利。一つ聞きたいことがあるんだけど」

「おう。多分さつきフリードにやった攻撃だろ?」

「ええ。早すぎてアタシの目でも追えなかったし」

優花の動体視力は士郎達の中でも一二を争うほどいい。そんな彼女でさえ追えないスピードの攻撃が気になっていた。

「あれな、士郎と考えて編み出したやつだ。杖に重力魔法かけて、空間魔法で永遠に落下させ続ける。したら落ちるスピードがバカ早くなったとここで相手に向けて空間魔法で飛ばした」

「落下速度であそこまで出るものなの？」

「出るみたいだぞ。実戦で使うのは初めてだが」

そう言うって2人はユエとシアが戦っているところに向かった。

幸利と優花が火山で出会った魔人族の方へ向かい、ユエとシア、ティオに王都に現れた魔物の殲滅を任せ、恵里と雫、香織にリリイと共に王国に戻り護衛を、ボク、ハジメ、ヴェアベルトで先生の救出に向かった。

ヴェアベルトが先生の拘束を解いている間に銀色の翼を持つワルキューレのようなヒトが2体こちらを見ていた。そして急接近し、大剣を振り下ろしてくる。

「神の木偶の御出ましのようだね……」

「あいつがメルジーネの映像で見た銀髪の……」

「私の名前はノイント」

「私の名前はファイアーン」

「お前たちイレギュラーはここで主の盤上から不要な駒として排除します」

そう言い、銀羽が魔弾となり襲いかかってくる。

避ければ後ろにいるヴェアベルトと先生に被害を受けてしまうので、熾天覆う七つの円環を展開して防ぐ。

「ハジメ分断するぞー！」

「ああー！」

形だけの巨大な大剣を投影して、ノイントとファイアーンの間に向けて投げる。そのまま干将・莫耶で切りつけに行く。力任せに後ろへとふき飛ばす。

手に持つ剣を見ると少し刃こぼれしていた。干将・莫耶はそう簡単に刃こぼれするよ
うな鈍ではない。しかし現に刃こぼれしている理由がわからない。しかし刃こぼれと
言うには違和感があった。

「分解されたのか……？」

「ご名答ですイレギュラー。しかし一人で私と戦うつもりですか」

「見てわからないの？」

「いえ、後ろにいるイレギュラーもかと。ですがあなた一人であるならば即刻に排除し、
残りのイレギュラーも排除します」

再び大剣を振り下ろす。

それを背中に吊るしたボクが投影制作できる最強の剣で受け止める。分解されぬよう魔力で保護する。

さらに空間魔法を使い剣を射出するがそれは銀翼によって阻まれる。

「ウツソでしょ……」

射出した剣はオルクスの魔物を軽く貫き、切り裂くほどの威力を持つてははずだぞ!?
するとノイントの銀羽が集まり一つの魔法陣になる。

『劫火狼』

炎の波が現れこちらに襲いかかってくる。

それをボクは握る剣に魔力を込めて目の前の空間を切り裂き、気圧差の隙間を作る。
炎はそこに吸い込まれていき、一つの球体に押し固める。

「さあ爆ぜるのである! って感じかなっ!」

ボクはその球体を握りファイアーンに投げつけ、ちよつと離れたところで短剣を投影・
射出する。

球体に短剣が刺さった瞬間大爆発が起こる。

ドガアアーン!

さらに奴は銀羽の魔弾を放つ。それを銃剣干将・莫耶で撃ち落とす。

弓を宝物庫から取り出し、剣を投影し奴に向けて撃つ。しかしそれは大剣で防がれるか弾き落とされる。

『天青凍波』

空気が震え、風が巻き起こる。すると一気に空気が凍りつく。『パキパキ』と音を立ててこちらに向かってくる。

「やばっ！」

空力と縮地でその場を一瞬で離れる。

自分がいた場所が瞬きする間も無く凍っていた。

「あんなの食らったら内部凍結まっしぐらじゃん……ってうお!」

大剣が再び振り下ろされる。

「ぐぐっ……重っ……」

上から振り下ろされた剣に対して抗うことが出来ず、受け止めてゆっくりと下に落ちていく。

くるりと前に一回転し、大剣を流し、そのまま踵落としを繰り出す。

それは当然の如く避けられ、大剣が横に振るわれる。それを弾くように横に回りながら回避する。

大剣を振り切ったフィーアンに向けて干将を振り、切りつけようとするがかわされ

る。

遠距離戦に持ち込まれるとボクの勝ち目が薄い。

「ふっ、はっ、せい！」

「諦めが悪いですね」

「生憎と、帰りたいんでね」

「それは不可能なことです。イレギュラー全てを我々が排除します」

「排除、排除うるさいなあ……」

すると突然、神山に響く歌が聞こえてきた。

歌声のする方を見るとランゴバルド率いる聖教教会が祈りながら歌を歌っている光景だった。

「ん？……少し倦怠感が……」

自分の身体から力が抜けていい感覚に陥る。

「まさか、弱体魔法か……？」

「イシユタル……自分の役割をよく理解している。良い駒です。しかしイレギュラー、何故あなたは『覇墮の聖歌』の効果が薄いのですか」

「さてね……」

フィーアンの質問よりもハジメ達の方が心配だ。

ボクには対魔力があるから弱体軽減できているが、ハジメにはそれが無い。一応防具に生成魔法で付与しているが、それがどのくらい防げるかはわからない。

再び切り合いに入る。

干将・莫耶で何度も受太刀しているが、その間に何度か砕かれている。

このままだと魔力をジリジリと消耗して、負ける。

ひとまず干将・莫耶を投げる。

ん？ 投げる……一つ勝ち筋が見えてきたかもしれない……

まずはあの剣の内一つを破壊しないと……自分の知るアレは一刀の時のしか知らない。

偽・螺旋剣を複数投影する。そしてそれを何度も双大剣に打ちつける。

「何をしているのです？」

フィーアンはボクの行動が理解できないようだ。

それならば何度も斬り合うだけだ。

何度も斬り合う内に双大剣の片方にヒビが入るのが見えた。

しかしこちら相手も相手の剣戟に何度も切り付けられ身体中に傷がつく。完全なる形で自動修復し、戦い続ける。だが傷は癒えて体力も回復しても痛みだけが残る。

そしてボクは双剣が交差させた瞬間に勢いよく偽・螺旋剣を突き立てる。

『ギリギヤリ』と音を立てて剣を削っていく。10数秒後『バキン!』と音を立てて大剣が砕ける。

「なっ!?!」

更に動揺した隙に空間魔法で開いた空間から鎖を放ち翼を無力化させる。

翼は鎖の拘束を解き放たとうと『ギリギリ』と軋む。

「これで準備が整った……」

「剣一つ折った程度で何になるというのです!」

干将・莫耶を投影する時に、その記憶、それが使われた後の記憶を読み取る。

脳にノイズが走る。オルクスの最下層の時よりはマシだが、腕が焼け、白い煙が噴き上がる。

覚悟を決める……天野士郎! 投影焼けがなんぼのもんだ! 今は目の前の敵を殺すことに集中しろ!

奴は何かを感じ取ったのか片手に握る剣を両手で握り直した。

「——鶴翼しんぎむけつ 欠落むけつヲ不ラズ」

投影した干将・莫耶に力と魔力を込めてフイーアンに投げつける。

「そんな同じ攻撃で私が倒せるとでも?」

ガキン!

奴は当然の如くその投擲を弾く。

「凍結、解除……」

「しつこいです……っ!？」

そしてこちらを襲う殺意の塊。それがこちらを殺す直前――

「心技 泰山二至り」

反則のような直感で背後からせまる干将をかわす。その隙に莫耶を叩きつける。それを再び防ぎ破壊する。

正直言つて、後ろからの奇襲と前の全力攻撃、これを防ぐ奴は化け物だ。おまけに莫耶を破壊したことは特に。

だが――

「心技 黄河ヲ渡ル」

こいつ化け物相手だから布石を打った意味はないッ!

「またかつ……!？」

2度背後から飛来する莫耶。

最初に投擲し、弾かれたやつだ。

ご存知の通り干将・莫耶は夫婦剣。互いを磁石のように引き寄せる性質を持つ。

つまり、今ボクの手干将有る限り、莫耶は勝手にボクの手元に戻ってくる!

「くっ……………！」

神業めいた反応速度で、背後からの奇襲をよけ、無防備になつた懐に干将を叩きつけ
バキン！

——この一撃をも、奴は打ち砕いた。

だが、それくらいこいつが防げる化け物だと想定していた。

これで倒せればいいという樂觀的思考もあつた。だが最悪を想定しなければこいつを倒す事なんてできないとも考えていた。

異世界召喚なんて大掛かりなことができる奴の人形、これくらいできる筈だと。

時が凍る。1秒もない刹那、互いの状態は無防備。

ボクは攻撃の限界、奴は防御の限界。普通ならこの攻防は互い手詰まり。——だが、この手には先がある。

敵の顔が凍りつく。

——唯名せいめい 別天りきゆう二納メにとしき。

「あ」

限界を超えろッ！その先へ、勝つ為に！

自身の技能^{スキル}、変容で筋力、敏捷を上げる。何も持たない手に双剣を、魔力を込めてよ
り凶悪な武器へと。

「くた、ばれえ——……!!!」

——両雄 共二命ヲ別ツ……!!

その無防備になった体に、左右から双剣を振り抜いた。

「っ、あ——……!!!」

奴は背中から落ちる。このまま落ちても奴の強靱肉体にはダメージはないだろう。

今の一撃は致命傷ものだ。

だがそれは普通の人間ならだ。

奴は神を名乗る者の人形。致命傷だけでは直ぐに再生してしまう。

ならば今すぐに追いかけて心臓か頭を潰して奴を殺さなければならない。

「投影^{トレス・オン}、開始——これで……終わりだア！」

投影したのはなんの変哲もない槍。だがそれを顔に突き刺す。

ズブツ!

右眼を貫き、脳天を貫通する。そのまま地上に落ちる。

「イレ、ギユラー……」

絶命する。

王都侵攻編 後編

三人称 side

「なあにあれえ」

巨大なキノコ雲を目の当たりにして士郎は絶句してしまった。

大きく口を開けてはいないが、半開きになっているのだろう。

『士郎殿、こちらに来てもらえるか。ハジメ殿もこちらに向かつてもらっている』

『ヴェアベルト？わかった』

ヴェアベルトと呼ばれ、彼のところに向かうと、そこにはメルリアンと同じ翼を生やした彼とテイオの背に乗る愛子、そしてハジメがいた。

「3人とも無事だったんだね」

「うむ。そしてあのキノコ雲なのだが……私とテイオ殿の炎ブレスが原因だが、ここまで威力が上がったのは畑山殿の協力のおかげなのだ……」

「「え？」」

「いえ、あの……お二人のブレスの威力を少しでも上げられればと思ったのですが……」（そういえば先生の転職は作農師……農業関連のスキルがあつて……爆発といえばメタ

ンガス……ア……)

「発酵操作……」

「ガス爆発かあ……」

「違うんです！そうじゃないんです！こんなに爆発するなんて思ってたなくて！ただ、半端はいけないと思って！ホントなんです！はっ!?教会の皆さんはっ!?どうになりました!？」

瓦礫の山に目を向けるが、この有様だ。生き残っている人などいないだろう。おそろく殆どが爆死したのだろう。

目を凝らせば至る所に血痕や人の一部のようなものが転がっていた。

愛子の視力が自分達のようによくなってよかったと士郎は内心思っていた。

しかし爆殺したことに変わりはない。その結果に顔を青ざめて蹲りそしてブルブルと震える。

「う……ウプツ……オエエ……」

思わず、嘔吐してしまう。それをヴェアベルトはそんな彼女にそつと寄り添い、静かに抱きしめる。吐瀉物で汚れていたがそれを気にしなかった。

しばらく抱きしめ、頭を撫でる。汚れは再生魔法で消した。

「畑山殿……大丈夫か？」

「は、はい。も、もう大丈夫です。ヴェアベルトさん……」

「そうか……少し離れるぞ……ふう……」

先生から離れたヴェアベルトは力を抜くように息を吐く。すると分離するようにヴェアベルトとメルリアンが現れた。

「それどういった技能なのさ……」

「前にライセン大迷宮の時に説明したとっておきのやつだ」

「人竜一体か……」

テイオが何か現れたのを感じたのか、視線を向けて指摘する。

『皆の者あそこに人がおるのじゃ……』

「なんなのでしょう……」

禿頭の男が現れたのだった。

あの爆発で生き残った人とは思えなかった。すると瓦礫の山の向こうへスーッと消えてしまった。

「おそらく解放者だな」

「ついて来いってことかな？」

士郎達はその後を追う。すると禿頭の男が士郎達を案内する様に姿を見せたり消したりしていた。そうこう後を着いていくと瓦礫の山にたどり着いた。

「ここに何があるんだ？」

禿頭の男は、ただ黙って指を差す。その場所は何の変哲も無い唯の瓦礫の山だったが、男の眼差しは進めと言っているようだ。問答をしても埒があかないと判断した士郎達は、その瓦礫の場所へ踏み込んだ。すると、その瞬間、瓦礫がふわりと浮き上がり、その下の地面が淡く輝きだした。見れば、そこには大迷宮の紋章の一つが描かれていた。

「やはりか……」

そこに立つと周りが淡く輝き、いつのまにか大迷宮の最深部に辿り着いていた。

いつも通りに魔法陣に立ち、神代魔法を習得する。

愛子だけは、初めてだったので頭痛に襲われた。

「魂魄魔法か……魂に干渉……これでミレディはゴーレムに憑依していたのか……」

ハジメは解放者のものであろう手記を手取る。

どうやらこの解放者の名前はラウス・バーンのようだ。

試練の内容は神の力に対して打ち勝つというものらしい。

ここに居るのは皆エヒトの影響下になかったからか、習得することは容易い事だった。

「さて、そろそろみんなと合流しないとね」

「そうだね。そろそろ片もついでるだろうし」

「あつ、そうです！王都が襲われているんですよ？みんな、無事でいてくれれば……」
士郎達は神山を飛び降りて、王都にいる仲間のところに向かう。
そして合流した先で士郎が最初に目にしたのは——

香織の前に割り込み、胸から剣を突き出し、息絶えてしまった、最愛の家族——恵里の姿だった。

悲劇を起こさせはしない

士郎 side

信じられない光景を目の当たりにしている。

手から握っていた干将・莫耶が滑り落ちる。

カランカラン……

何度も目を擦るけど視界に入る世界は変わらない。

なんで

恵里が

胸を剣に貫かれていて

死んでいるんだ？

更には貫かれているだけでなく、何度も滅多刺しにされている。

「邪魔しやがって！ テメエがいなけりゃ！ 香織は！ 俺の物になっていたのによお！」

男が恵里に馬乗りになって刺しながら叫んでいる。

「こうなったらテメエの身体で返してもらわねえと割に合わねえなあ！」

男が恵里の服に手をかける。

自分でも信じられないくらい怒りが湧き上がるのがわかる。それと同時に自身の頭が冷たく冷静になっていくのもわかる。

今は恵里を助ける。

それだけを考えて縮地で恵里を犯そうとする男を蹴飛ばす。

「ガフっ……！」

恵里の身体から剣が抜け落ちる。

士郎は再生魔法を使い、傷を治そうとするのだが――

「なんで治らないんだ……!?!」

傷が塞がらない。再生魔法が弾かれている。

テイオと先生の魂魄魔法により魂は保護しているが、傷が治らない限りは恵里が死んでしまう。

焦りが顔に出る。必死に解決策を模索する。まずは恵里の状態を解析――しようとしたところで剣を突き刺した男が起き上がる。

「そいつはもう死ぬぜ……残念だったなあ……俺が新たに手に入れた力でなあ……キ

を——
そうだこんなことしている場合ではない。今すぐ恵里の傷を癒やし、失われそうな命

すると雫が駆け寄ってくる。

「士郎さん！ 檜山のことは放っておいて今は恵里の治療を！」

「雫……そうだね。こいつなんか構ってられないよね」

返事をして檜山の身体を鎖で拘束して、恵里の治療を行うのだった。

士郎達が来る前に時は遡る。

side 恵里

お兄ちゃん達が上空で戦っている間、僕達は王宮に侵入した魔人族が連れてきた魔物を蹴散らしながらハイリヒ城内に入る。

そこでは鈴が結界を貼り、天之河や坂上くん達が魔物と交戦していた。

雫が一瞬で魔物との距離を縮めたかと思えば、いつのまにか魔物の首が撥ねられていた。

力の差がはつきりとわかってしまう。

だが今、くよくよしている暇はない。

「鈴！無事!？」

「エリリン！来てくれたんだね！鈴達はシズシズの攻撃のおかげで大丈夫だよ」

「そっかあ……よかった……でも王都に魔物がいるんだろう……？それに結界のアーティファクトがあつた筈なのになんで？」

僕自身この2つの疑問しか浮かばない。

アーティファクトが壊されたか、単純に火力で押し切られたかのどちらかでしかない。

しかし火力の線はないと思つている。お兄ちゃんの熾天覆う七つの円環を直ぐに貫通できない白竜のプレスでは王都に貼つている結界は壊せない。

つまり内部犯の可能性が高い。

もちろんあの後さらに強くなったか、まだ別のがいるかもしれないけれど。

「とにかく、みんなと合流しよう。メルド団長もいるだろうし」

「そうだな……ここにいても仕方がねえ……」

天の河の提案に従い、魔物を蹴散らしながら僕達は王国の騎士団とクラスメイトと合流した。

最初は彼らも魔物に囲まれていると思つていたのだが違った。

目に入つて来たのは、王国の広場には謎の黒ローブが立っており、王国の騎士団がクラスメイトを拘束し、押さえつけている光景だった。

操られているのかもしれない……

「な……みんな！」

「なんで王国の騎士団がみんなを……!?!」

騎士団の人をよく見ると正気がないように感じた。

怪しんでいると、天之河が黒ローブに斬りかかる。

しかし、黒ローブはヒラリヒラリと攻撃を避ける。その攻撃を避ける動きが常人離れしているというより、人間には絶対にできない動きで避けていた。関節の動きが特だ。

するとクラスメイトを抑えていない騎士団がこちらに襲いかかる。

槍や剣、大剣など様々武器が襲いかかるが、雫や香織達のようなチートスペックには攻撃が当たらない上に当たったとしても武器が壊れてしまう。

僕や鈴、坂上くん、遠藤くんはあまりの物量に最初は対処ができていたが疲れが目立ち始め、遂には攻撃を防ぎ損ねてしまう。

「くっ……もうダメ……キャア！」

「鈴！」

最初にやられてしまったのは鈴だった。

「谷口！野郎！」

「遠藤くん！突っ込んだらだめ！」

「こうなったらヤケクソだ！オラアアアア！」

立て続けに筋力ステータスの低い遠藤くん、前に出て攻撃して受け続けた坂上くんがやられてしまう。

「暗落！」

闇属性魔法を使い騎士の意識を墮とす。すると騎士はピクリとも動かなくなった。呼吸すらもだ。

「……………どうしたこと……………？」

「恵里？どうしたの？」

「雫……………暗落を使ったら騎士の人が動かなくなったんだ……………」

「攻撃魔法でもないのになんでかしら……………」

僕はふとメルジーネの大迷宮の幽霊を思い出した。

「……………まさか騎士団の人はもう……………死んでるんじゃない……………」

「そんな……………洗脳されているんじゃないの……………!？」

その事実気づいた僕は雫に香織にも伝えるよう頼む。雫は一つ頷き、瞬きする間に

香織の元に辿り着く。

「ガハッ!？」

しかし不意打ちの一撃で僕は壁に飛ばされ叩きつけられる。全身の骨が砕けるような痛みか走る。だが実際に骨が何本かイッたのだろう。内部から突き刺さるような痛みと口から血が垂れる。

「しまった……油断した……ケホッケホッ……」

するとクラスメイトの方から3人——中野、斉藤、近藤が動き出すのが見えた。しかも香織と雫の方に向かっていた。

「死ねえええええええ!」

「ヒヤッハアアアアアアア!」

「ハハハハハハハハハハハ!」

叫びながら攻撃してくる。

しかし雫の刀、香織の銃弾によりその攻撃は防がれ——ることはなかった。雫と香織の2人が少しノックバックしたのだ。

「なっ!？」

そのまま攻撃が続けられる……想定外の攻撃に2人は難なく対応している。しかし2人間には明確な距離が現れる。

(なんでこの3人が参加してるのに檜山のやつが行動してないんだ……うまさか!?)

僕は壁に叩きつけられ、身体の中から発生する激痛に耐え、香織の元に走る。

この時の僕がなんで走り出したのか分からなかった。

兄のように家族で恋人で最愛の存在でもなければ、雫のように恋の仲間でもない、鈴のように親友でもない、友達だけの香織の元に身体は勝手に走り出していた。

脳裏に浮かぶ誰かの言葉――

『恵里……誰かに優しくしてあげるんだよ……それ巡り巡って自分に返ってくる……』

■『はいつもいいことがあるんだよ……』

懐かしいなあ……誰だろう……お兄ちゃんやお義父さん、お義母さんにも言っ
てな
かったけど……

目に写り込む光景がゆっくりになる。

いつのまにか現れていた檜山が香織に剣を突き刺そうとしていて、それを知って対応
のできない香織。そのことに狂気
の笑みを浮かべる檜山。

僕はその2人の間に割り込み、その剣は僕の胸を貫き、心臓をも貫いた。

痛いなあ……死んじゃうのかなあ……今度こそ助からないのかも……まだお兄ち
ゃ
んとしたいことあったのにな……

ズブリ……

狂刃が僕の命の焰を消した。

雫 side

いつの間にか現れた檜山が香織に剣を突き刺そうとしているのを横目で視界に入っていた。

距離が離れていて距離はさほどないのに遠く感じる。香織の元に行きたいのに近藤と斉藤が間に割って入られ彼女の元に向かえない。

そしてその剣は突然割り込んだ恵里の胸を貫く。

朱い血が吹き出し血飛沫が上がる。

「え……恵里イイイイイイ！」

叫んだのは鈴かりリイかはたまた私か——誰のものだったかわからない。

悲鳴が響く。

恵里の口から血が吐き出される。

「あ？なんで香織じゃねえんだよ……クソが……ホントあの兄妹は俺の邪魔しかしねえなあ……クソがよお……」

そうぶつぶつ呟く檜山。

こいつは人の命をなんだと思っているのだろう……私の中の怒りが湧き上がる。すると上から誰かが降りてきた。

白緑の男性にしては長い髪。

両手に握られた白と黒の中華刀。

それだけで士郎さんだとわかった。

彼が恵里の今の姿を見たのだろう。姿が一瞬にてしてかき消え、檜山が吹き飛ぶ。恵里を抱えてすぐに下がり、安全な場所に下ろす。

そして檜山を何度も蹴飛ばす。

その余りの速さに私の目がギリギリ追えるほどだった。

「士郎さんやめて！ソイツにかまってるな、恵里を！」

叫ぶのだが、止まらない。

最後に地面に叩きつけて、頭を踏みつけた。

そして冒頭に至る。

士郎 side

恵里の傷を解析すると、傷の表面に謎の魔力が覆われており、そのせいで回復魔法

や再生魔法が弾かれている。

なので破戒すべき全ての符で魔力を霧散させる。そして恵里の身体は元通りに治った。

「ん…………お兄…………ちゃん…………？」

「よかった…………生きてる…………生きてるよ…………」

ボクは思わず恵里を抱きしめた。

「く、苦しいよお兄ちゃん…………」

「ごめんね…………でも今だけはこうさせて欲しい…………ごめん…………守れなくてごめんね…………」

失われそうになった彼女の命。ボクは守りきれなかった。

あの日の約束が果たせなかった。

檜山のことも許せないが1番許せないのは約束も果たせない自分だ。

「ううん。お兄ちゃんは僕を生き返らせたから大丈夫だよ…………」

恵里はボクのことを許してくれた。そして抱きしめ返してくれた。

「これでダメだったら、別の方法を考えるしかなかったよ…………」

「別の方法？」

「神の使徒の遺体から色々拝借するのさ…………」

すると恵里は興味を示したのか聞き返してきた。
詳しく説明すると。

さつき倒した神の使徒の身体の一部を恵里の体に取り込ませて傷を埋めることだ。
上手くいけば恵里は神の使徒の力も手に入る可能性もあった。

そのことを説明する。

「お兄ちゃん。それ今できる？」

「まあ出来るけど……」

「お願い。それを僕に使って！」

突然何を言い出すんだこの妹は。

「ええ……？」

「お兄ちゃん達の足手まといはもう懲り懲りなんだ……」

恵里の瞳からは悔しさが詰まっていた。

だからボクは――

「わかった。ヴェアベルト、力を貸してくれ」

そう了承した。

恵里の望みを叶えてあげたい。ボクはヴェアベルトに協力を頼む。

「了解した。いくらでも貸そう」

ボクとヴェアベルトは上空へ登り、恵里の魔改造パワーアップを始めるのだった。

さてさて、これから先どうなりますことやら。

恵里の魔改造をボクとヴェアベルトが神山で行なっている間、ハジメ達は自身達の武装の強化や王都侵攻によって損害を受けたところを時間の許す限り復興していた。

ボク達が神山に向かった後、フリードが再び現れたが、ハジメの試作兵器、『ヒュベリオン』で威嚇攻撃。（威嚇攻撃に見えなかったらしい）に撤退し、王国に残っている魔物や魔族は殲滅され生き残りはフリードの命令で王都を離れていったようだ。

恵里の魔改造は3日ほどかかってしまった。

まず1日目はハジメとボクが殺した神の使徒の肉体と技能を恵里に融合させる。この時、恵里の魂は一度肉体から分離している。

そこから微妙な調整を行う。

2日目は恵里の魂を定着させさらに微調整を行う。

今回は上手い具合に調整ができたので元々の予定の3日目に行く予定の実践調整に入れた。

恵里に合う武器を用意して、それを使った戦闘練習をする。

彼女が選んだ武器は二刀流だった。

ボクはそれに合わせて絶対に折れないと言われるデュランダルと竜殺しとして有名なグラムおよびバルムンクを投影して渡した。

4日目に王国に戻るようになった。

「ただいま〜」

と、緊張感のない声で上空から王都に降りるボク。

ドスン！と地面に大きなクレーターを作り着地した。周囲にいた人は軽く吹き飛ばされたが気にしない気にしない。

クレーターを民の叡智で直していると鈴がこちらに走ってくる。

「オニーサン！恵里は！」

「恵里ならそろそろ降りてくるよ」

そう言つて上を指差すと、上空から白銀の翼を羽ばたかせて王都に降りてくる恵里が見えた。

「ただいま、鈴」

「おかえり恵里！」

鈴はそのまま恵里に抱きつく。

恵里は少し驚いた表情を見せるもキチンと受け止める。

「天野先輩。魔改造ってどんな風にしたんですか？」

坂上君の質問はもつともだ。

「とりあえずパツと説明するとステータスと一部の技能だね。後はボク達が習得してる物……これくらいかな？まだ恵里が慣れてないから神の使徒ほどのスペックはないけどね」

魔力の供給を大量に行なっていた器官を再現するのに少々手間取っていて後回しになつている。

元から所持している高速魔力回復に合わせなければならぬので、これから毎日はいタルチェックと平行して行う予定だ。

正直再生魔法を応用して高ピッチで仕上げたからまだまだ荒削りだが、これからの大迷宮で慣らしていけばいいだろう。

ボク達の用意は整い、ボク達がいけない間、王国でも動きがあつた。
まず、檜山達の処遇だ。

彼らは大結界のアーティファクトを破壊して魔人族を攻め入れさせたどころか、王国騎士達を殺して傀儡にした。

天の河が必死に弁明していたが、判決は覆らなかつた。

メルド団長と率いていた騎士たちは致命傷を負つただけで、死には至らなかつたが、恵里に付けられたものと同様の魔法が回復を妨害していたので回復することが出来ず

に生死を彷徨っていた。

そしてこの世界の事だ。

これはボク達が全員揃った時に話す事となっていたので後回しになっていた。

この世界の真実と目的を話す。

「……という事だよ」

話し終えたその時、真つ先に反応したのは天之河だった。

「なんだよ、それ。じゃあ、俺達は、神様の掌の上で踊っていただけだっていうのか？ なら、なんでもっと早く教えてくれなかったんだ！ オルクスで再会したときに伝えることは出来ただろう！」

ボクを非難するような眼と声に正直、苛立ちを感じた。

「あのさあ……何でボクが君に説明しなきゃいけないの？」

「なんだと……」

「仮にあの時君に説明して信じたの？ どうせ説明しても非難するでしょ？」

「だ、だけど何度も説明してくれれば……」

「は？ 君がボクと恵里に言ったこと忘れ訳じゃないよな？ そんな奴に骨を折る必要はないだろ」

「それは今関係ないだろう！」

あの……キレていい？

怒りをぶつけようとした時だった。

隣に座る恵里が立ち上がり叫んだ。

「ふざけるな！あの時、お兄ちゃんにキレたの忘れたのか！あの時、僕はお前が言ったこととにどれだけショック受けたのかわからないの!?家族じゃないだの、別れるだの凄く悲しかったんだよ！僕達が過ぎした日々全てを否定して！ハジメや幸利のことも否定して！もうウンザリなんだよ！」

彼女の怒声が会議室に響いた。

思い切り叫んだのか肩で息をしていた。

今までのことを吐き出したのだろうか……

そのまま椅子に座り込む。

彼女の叫びに天之河は何も言えなくなっていた。

「光輝……流石にあの時の事はあなたに非があるわ」

「な、雫まで……」

幼馴染の1人にも悪いと言われ言葉に詰まる。

「だが、これから一緒にこの世界の神と戦うなら……」

まだこいつは……

「何で君お前を連れて行かないといけないんだよ」

幸利が割り込む。

「それは……人は多い方がいいからだ！」

「お前が俺たちの戦力になるのか？正直お前が入ったところで何もいい方向に傾く気がしないんだよ」

「幸利の言う通り天之河が入ったところで何も変わらないのだ。」

恵里はボクらにはないデバフや死んだ魔物を利用するという唯一点があった。

対して天之河は武力なのだ。

全属性適性もユエが、剣技も雫が、既に上位互換がいるのだ。

とはいえ人数が増えるのは悪いことではない。天之河は武力は弱い訳ではない。ただ上位互換がいるだけなのだから。

「ぐっ……」

「仮に坂上や鈴、遠藤ならまだ連携が取れる仲だ。だがお前は士郎の怒りを買っているんだ。連携も取れないんだよ」

戦力外通告。

幸利の厳しい発言に完全に座り込む。

彼のいう通りボクは天之河を許すつもりはない。

次に口を開いたのは意外な人物だった。

「先輩……グループ分けは俺達でいいから、光輝を連れて行つてくれませんか？」
そう言ったのは坂上くんだった。

「正気か坂上？」

「光輝だつてこのままじゃいけない事はメルド団長にも言われてたんだ……このまま王国に至つて何も変わらないんだ。だからお願いします！」

そう言つて突然、土下座をしたのだ。

「……………わかつたよ。でも寄生しても神代魔法は手に入らないからね？」
「ありがとうございます！」

そうして天之河達が大迷宮攻略についてくることになった。

「皆様は今後どちらに向かわれるのですか？」

次はリリイだった。

「フェアベルゲンだね。次の迷宮はそこにあるから」

「なら帝国領を通るのですね？」

「そうなるね……」

「でしたら私もついて行つても宜しいでしょうか？」

「何でリリイが？」

「今回の王都侵攻で帝国とも話し合わねばならない事が山ほどあります。既に使者と大使の方が帝国に向かわれましたが、会談は早ければ早いほうがいい。皆さんの移動用アーティファクトがあれば帝国まですぐでしょう？それなら、直接私が乗り込んで向こうで話し合っつてしまおうと思ひまして」

「リリイ……前にも思つたけどフットワークが軽いね……」

そう香織が少々微妙な顔をしていた。

突撃少女の香織が言うのかあ……

それから1日かけて準備をして王国を出発した。

教師と竜騎士

1 日目

幸利 side

檜山達の罪状。

あいつらは王国の騎士達を殺した上に、ハイリヒ王国の国宝級アーティファクトを破壊、さらに魔族を手引きしたという。しかもその証拠がボロボロと見つかり、処刑が決まった。

その時に天之河が必死に抗議していたが、ランデルやリイ、国の重鎮達がそれを聞き入れることはなかった。

俺としてはランデルがこの一件の始末に関わっていることに驚いていた。

(そういうえば俺が国の滅びた理由の一つに内側からの裏切りのこと話してたっけな……)

国の滅ぶ理由は様々だが、内部崩壊はよくファンタジー物の作品にはよくあることだ。偶に主人公が内部崩壊を引き起こして大勝利を収めるのもあった。

王妃様はというと王国復興の指揮に入っていた。

俺も国の建物の修繕を行っていたからよく見かけた。

あとはヴェアベルトの正体が魔人族だということ、オルクスにいた魔人族を殺していないことを明かしていた。

天之河が何か言うと思ったが、何も言わなかったのは意外だった。

ただ、疲れた表情をしていたのでおそらく檜山達の件の抗議が理由なのだろう。

疲れたといえばランデルもだった。

まだ10歳の少年王子には大変な仕事だったのか、食事の時間帯にウトウトしていた。

「ランデル……眠そうね……目を擦ってるし」

「リリイもそうだが、まだ幼い2人が政治に関わるのは凄い反面、幼い2人もやらなければならぬという国にも思えちまう」

「そうじゃのう……それだけエヒトに縋っていたり、教会の影響が大きいということなのじゃな……」

「明日、差し入れになんか料理作るか……」

「そうね、それが良いわ。アタシも何かスイーツを作ろうかしら」

「妾も竜人族伝来の菓子を作ろうかの」

「それじゃあ、食堂のキッチンを借りて差し入れを作らせてもらいましょう」

「おう、ランデルに甘い物作ってやるとするか」

「ならアタシはリリイに酸味のある物にしようかしら」

「妾は重鎮達にするかの」

そう言つて俺は厨房の料理人達に頼みに足を運んだ。

優花 s i d e

「ところで優花よ」

「なに？」

「お主はご主人様のことをどう思っておるのじゃ？」

「どうつて？」

「簡単に言うるとご主人様のことを好いとるかということじゃ」

「なつ……／＼／＼」

「そうでないのならば妾はご主人様を攻め続けるのじゃ。それではの」

そう言つてテイオは幸利と同じ方に歩いて行つた。

「あ、アタシは……あいつのこと……」

正直わからない……

アタシはあいつとは良く話すし、この中のメンバーでも一番話している。

あいつと話す時間は楽しいしすぐに時間がすぎる……

「もう！わかんない！」

アタシはモヤモヤしたまま厨房へと向かつた。

2日目

ハジメ side

檜山達の処刑が執り行われた。

僕は実際に見たりした訳ではないのでわからないし興味がなかったけど。

香織を殺そうとしたことは許すつもりもないし、この手で奴らを始末しなかったが
国の建物の修繕したり、武器をちよつと作つてあげたら、王国の錬成師達が弟子にし
てくれと押しかけて来たのは軽く恐怖を抱いた。

弟子入り志願の決め手の理由は神代アーティファクトの結界を直したからだ。

香織とユエがお仕置き（どんなものかは知らない）とリリイが事態の收拾をつけたの

で追われることはなくなっただけ。

あれは本当に気味が悪かった……血走った目で息を荒げたり隠れてるのに見つけてくる。

迷宮の魔物より怖い……

しかも鈴達のアーティファクトのことも聞かれそうになっただし……

その日の夜はまあ、香織とユエの2人に甘えて眠りについた（いつもだけ）。
雫とシアが少し寂しそうにしていたのが錬成師達の次に印象に残っていた。

士郎には恵里の魔改造に集中してて会えないからだろう。

いつ終わるのか僕もわからないので、今は待つしかできない。

上手くいくといいけど……

「ハジメくん？」

「なんだい香織？」

「ずっと窓の外見てるから何かあるのかなって……」

「どうやら、不安が見抜かれていたみたいだ。」

「士郎達が気になってね……」

「パワーアップ、どうなるかな……」

「気長に待つしかないよ……それにリリイ達も心配だ」

「……たしかにまだ私達とは3つしか離れてないのに国の為に動いてるなんて凄く大変だよ」

「厨房借りて何か差し入れ作る？」

「優花ちゃん達に教えて貰おつか」

「2人なら何かしらいい料理知ってるはずだね。何作るか考えよう」

「そうだね。ねえハジメくん」

「どうしたの？」

「ううん、やっぱりなんでもない」

「そっかあ……何かあつたらすぐに言つてよ？」

「ふふ……そうするよおやすみハジメくん」

「うん、おやすみ香織」

3日目

ヴェアベルト side

士郎殿達の同郷の男達の処刑が昨日に行われた。

彼らの遺体は罪人の埋蔵する所に埋蔵しようとしていたのだが、畑山殿がお願いし

て一般人などが属する場所に墓を作ってもらい、祈りを捧げていた。

「焔山殿……」

「……ヴェアベルトさん。その花束は？」

「この国の騎士達にだ」

「騎士の皆さんにですか……」

「顔は知らぬが、話を聞くに、魔物の侵攻などから民を庇い、最前線で戦った者達なのだから。同じような立場の私も敬意を表して、花束を贈りに来させてもらった。最初は止められたがな……」

肩をすくめながら花束を騎士達の石碑の前に置く。

「そうなんですな……」

目の前の彼女は暗い表情だ。

自身の教え子が国にを裏切り、その結果、国に殺されてしまったのだから当然だが、それだけではないだろう。

私は魔族の祈りを心の中で捧げた。

(ブレンイン・ウォリアトズ・ピスフレイル・スリーン)

この祈りの意味は『勇敢なる戦士達よ安らかに眠れ』と簡単な祈りだ。

「私は何一つ護れていないんです……」この世界に召喚された唯一の大人なのに、生徒た

ちを安心させるどころか、不安にさせてしまつて、護るべき生徒に護られて自分は安全な仕事しかさせてもらえない。終いには生徒に助けられて足を引つ張る始末……教師は生徒に道を示して、護らなければならぬのに……それに護ると言いたいのには私は……先日のあの出来事を思い出して、身体の震えと、悪夢を見てしまつて……駄目ですね私……自分やつたことなのに、被害者みたいな言葉を喋つて……」

小さい身体を自分で抱きしめている。

士郎殿から聞いた『セルフハグ』なるものなのだろう。

それだけ追い詰められていることが一目でわかつてしまう。

こんな時はどうしたら良いのだ……

私は軍人、民の為に戦えど、人の心を癒す方法など知らない。そんな私でもできることはあるのだろうか。

そんな時、幼い頃、既に亡き祖母が泣きじやくる自分を抱きしめてくれたことを思い出し、それを実行することにした。

「ふえつ!?!……ヴェアベルトさん?何を?!」

「畑山殿……今ここには私達しかいない……溜め込んでいる物を存分に吐き出すといふ」

「でも私は……」

「大人だからと言って泣くことが駄目なわけではないだろう？ 私が受け止める。だから気にするな……」

彼女は声こそ大きくはないが、声を上げて泣いた。

総本山で教会の連中の爆殺の手助けをしたのにも関わらず、誰も責めなかったこと、無意識の内にそのことの罰を求めていること。

私は彼女に罰を与えることはできない。

だから私は……

「私は……私は……」

「貴女は良くやった……もう自分自身を追い詰める必要はない……それでもダメならば士郎殿達……これからも彼等の教師であつてほしい……。彼等は奈落の底で生きるために必要な物を切り捨ててきた……それこそ、人の生命を奪うことすら、躊躇わなくなった……そんな貴女だからこそ、彼等の失つてしまった物を持ち続けてくれ……私にはできないことだから……耐えきれない時は呼んでほしい。いくらでも話を聞こう」

「……ヴェアベルトさん。なんで貴方はそこまで私によくしてくれるんですか？ 士郎君達の教師であるのは理由としては薄いですし……それに私を初めて助けていただいた時に寂しそうな顔で私を見ていたのも気になって……」

「っ……」

まさかあの時、そんな顔していたのか……

「そうだな……貴女に似て責任を背負いがちな後輩がいてな……責任を背負いすぎて過労死してしまった……そんな彼女に貴女が似ていて放っておけなかったのさ……」

あのことは私の責任だ。彼女が責任を背負いすぎていて私も期待しすぎていた。

そのせいで彼女が死んでしまった……

そんな後輩に似た彼女が潰れて欲しくなかったただけだ。

「……わかりました。……ヴェアベルトさん、今日はありがとうございました」

「少しでも心が楽になったのならばよかった」

「その……私のこと……できればいいので名前で呼んでくれませんか？」

「……わかった。愛子殿」

「……少し照れちゃいますね」

「そうか……それでは私はこのまま土郎殿の所に戻る」

「わかりました。貴方も気をつけてくださいいね」

「ああ……」

そう言つて私は土郎殿の手伝いに戻つた。

新生ハウリア!?

ハジメ side

王国からフェアベルゲンに向かうため、僕は宝物庫から飛空艇『フェルニル』を取り出す。

これには様々な設備が備わっている。

まず鍛錬場、調理場に休憩室、鍛冶場に菜園場などだ。

鍛錬場は感応石などの鉱石を使い、壊れにくく、壊れても再生するのでどんなに激しく戦っても、大丈夫な作りになっている。

調理場は火などは使わず魔力だけで料理することができる。

ただし魔力操作かないと細かい料理は作るの難しい。

休憩室は複数の個室スペースを作り、1人になりたい時、もしくは何人かで過ごしたい時に使う。

菜園場は様々な野菜を育てている。

名前の通りだ。

鍛冶場は完全に僕専用になってるので説明はいらさないだろう。

外壁には大量の砲門が備え付けられており、魔力を通せば魔力弾が放たれ、敵を迎撃することができる。

さらに属性魔法も撃てるし、別の場所からはミサイルも撃てる。他にも色々あるが説明はこれだけにしておく。

フェルニルを作るにあたって、最初は僕や士郎、幸利にヴェアベルトと試行錯誤したので、これを破壊されようものなら僕は多分軽く発狂すると思う。

唐突に昨日の夜にあったことを思い出した。

僕はやる事ほとんど済ませて、部屋に戻ろうとした時、ランデルから話があると言われたので、彼の部屋に向かっている。

夜の王城の通路はろうそくだけの頼りない明かりなので薄暗い。月明かりがなければ真っ暗闇に近いだろう。

まあ僕には暗視があるから何も問題はないけど。

コンコンコン

「ランデル？ 入るよ？」

『ハジメ。鍵を開ける。少し待ってくれ』

ガチャリと鍵の開く音共に扉が開かれる。

寝巻き姿のランデルが現れる。

「夜遅くにすまない」

「まあこんな時間に呼び出されるとは思わなかったから少し驚いたよ」

「中に入ってくれ。こんな話はハジメにしかできぬ……」

彼の部屋に入る。

そういえばランデルの部屋に行くのなんてオルクスで落ちる前以来だな。

「そこに座ってくれ……いい茶葉も手に入ったのでな。優花のよりは及ばないがハジメ達がいらない間、練習したのだ」

彼が注いだ紅茶を一飲みする。

まだ発展途上だが、とてもいい味だ。深みがある。

「それで話って?」

「姉上が帝国に向かわれる……それは、帝国に嫁ぎに行かれるのだ……」

「それはまた突然だね……」

「うむ、魔人族の襲撃もあり、ハイリヒ王国では檜山達の裏切りにより騎士達の大量の損失。このままでは我が国は魔人族に攻め入れられ、滅亡してしまうだろう。ハジメの作ったアーティファクトがあるとはいえ、国民の不安は拭えない。そこで姉上は帝国に嫁ぎ行かれる。前々から形だけとは決まっていた婚約の話をも今回の一件で正式なもの

にするのだ……」

「なるほど……」

「ハジメ……頼みがある。余は無力だ……まだ歳が幼いが故にこのような話には関われぬ……姉上の相手は余り良い話を聞かない男が相手なのだ。出来るならで良い……姉上が助けを求めたのなら助けてはくれないか？」

ランデルは頭を下げた。

正直少し難しいがリリイには落ちる前から良くしてもらっていたので、見捨てる選択はしたくない。

「……わかった。ハイリヒ王国に不利益が被らないようなんとかするよ」

「本当か!？」

「うん。約束するよ」

「そうか……ありがとう……ハジメ……」

ランデルは僕の手を力一杯握る。

「話は終わりだ……今日はもうゆっくり休んでくれ」

「そうするよ。おやすみランデル」

「おやすみだ。ハジメ」

士郎 side

「飛空艇を作るの本当に苦労したよね……」

「まずそもそも重力石の熟成がね……」

生成魔法で作った重力石が一番の難点だった。

「そうだ……ん？アレ？」

ハジメと突然水晶ディスプレイを見ていると気になる映像が流れてきた。

「兎人族と……帝国兵？」

「とりあえずみんな呼んでおこう」

念話で全員に召集をかける。

1分もしないうちに全員集まる。

「な！襲われてるのか！今すぐ助けないと！」

天之河が騒いでいるが無視する。

「シア、あの2人って……」

「へ？……あれ？……まさか……」

映像を拡大すると確認を持つことができた。

「あ……ラナとミナだな……」

「そうね……」

「みんななにのんびり見ているんだ！シアさんは同じ種族だろ！」
「すいません、ちよつと黙ってくださいですか？」

ラナとミナが倒れ込み、開けた谷間で足を止める。

そして帝国兵が武器をペタペタと触りながら近づいてきたが、近くにあつた帝国兵の死体の山を見て、恐喝するように近づいたその時だった。

いつのまにか首を刎ねられていた。

「え？」

「うーむ、また一段と強くなつたなあ……」

「明らかに誘い込む動きしてたのに気づかなかつたのかな？」

そのまま残りの帝国兵を弓矢や小太刀により殺していった。

「なあ清水……兎人族ってみんなシアさんみたいなのか？」

予備知識と目の当たりにした兎人族にあまりにも差がありすぎたのか、坂上くんが幸利に質問した。

「いや？特殊なのはシアだけだぞ？強くしたのは俺たちだが」

「マジかよ……」

「ウサギこわい……」

なんか若干引かれてる気がする。

「サボってはいねーがまだ詰めが甘えな」

幸利は外に出てスカイダイビングをする。

その行動に王国組は目を丸くする中、彼は闇魔法の塊を帝国兵の生き残りや馬車に放つ。

帝国兵はそのまま爆死、空力を使い、着地した。

「士郎さんもしかしたら暴走してかもしれないです……」

「それはないと思うけれど、なんでここにいるかはわからないから一回聞く必要があるね」

ボクも飛び降りる。

クレーターを作らないように着地する。

兎人族達がボクも認識すると、ビシツと敬礼する。

「お久しぶりです、団長！再びお会いできる日を心待ちにしておりました！まさかあのようなものに乗って登場するとは……改めて感服いたしました！それと教官！先程はのご助力感謝致します！」

「気にすんな。お前らならやられることはないからな。こつちも事情が聞きたかったし」

「しかし腕を上げたね……」

「『『『恐縮であります!』』』」

フェルニルから全員降りてきた。ハウリアを知る人は平然としているが、知らない人はドン引きしていた。

「えつと、みんな、久しぶりです!元氣そうだなによりですう。ところで、父様達はどこですか?パル君達だけですか?あと、なんでこんなところで、帝国兵なんて相手に……」
「落ちてきてくたせえ、シアの姉御。一度に聞かれても答えられませんぜ?取り敢えず、今、ここにいるのは俺達六人だけでさあ。色々、事情があるんで、詳しい話は落ち着ける場所に行つてからにしよう。……それと、パル君ではなく『必滅のバルトフェルド』です。お間違いのないようお願いしやすぜ?」

「……え?いま、そこをツツコミます?つていうかいつの間にそんな名前を……ラナさん達も注意して下さいよお」

シアがラナ達に頼もうとしたのが、現実というのは常に予想の斜め上をいくものなのだ。

「……シア。ラナじゃないわ……『疾影のラナインフェリナ』よ」

「!?ラナさん!?何を言つて……」

ハウリアでも、しつかりもののお姉さんといった感じだったラナからの、まさかの返しにシアが頬を引き攣らせる。しかし、ハウリアの猛攻は止まらない。連携による怒涛

の攻撃こそが彼等の強みなのだ。

「私は『空裂のミナステリア』！」

「!？」

「俺は『幻武のヤオゼリアス』！」

「!？」

「僕は『這斬のヨルガンダル』！」

「!？」

「ふっ『霧雨のリキッドブレイク』だ」

「!？」

某スタン○云々の漫画のような香ばしいポーズをとるハウリア族。

遂に畏れていたことが起きてしまった……彼らは厨二病を発症してしまった……

それを恐れたボクと幸利は……

「うわああああああああ！」

どこぞの仮面のライダーのタデイの如く情けない叫び声を上げたのだった。

「遂に発症しやがったアアア！」

「恐れていたことが現実にはイイイイイイ！」

少年二人安静化中

安静化している間にハジメがアルテナと呼ばれているアルフレリックのお孫さんの手足の枷を破壊していた。流石に歩きづらそうだったからどうせだろう。

それから復活したボクと幸利は何故彼らが何故樹海の外で帝国兵と戦っていたのか聞いた。

どうやら樹海を魔族が襲撃してきたらしくなんとかハウリア達が追い返したが、その後には帝国兵が亜人達を攫っていったという。

立て続けの襲撃になすすべもなく攫われてしまったようだ。

しかも攫われた大半が女子供だったのだ。その中には当然、ハウリア以外の兎人族もいた。

攫った理由など考える必要もないだろう。

帝国に向かい、同族を取り戻そうとしたが、カム達は侵入したものの連絡が途絶えてしまったようだ。

そして亜人達を輸送している馬車が出発したのを知り、情報収集も兼ねて奪還を試みたということだ。

「すまない……本当に同族からすまない……」

ヴェアベルトはハウリア達に頭を下げていた。

彼のことは説明しているので、そこまで大きないざこざは起きなかった。

「それにしても帝国や樹海にも魔族は襲撃してるのね……」

「運が悪いというかなんというか、ほとんどがお兄ちゃん達と居合わせてるから失敗してるし……」

「そろそろヴェアベルトは仲間と合流した方が良さそうだぞ?」

「仲間とは定期的に連絡は取り合っている。無事なのは確かだが……些か不安だな……」

「とりあえず捕まっていた連中は樹海に送ろうか。みんなはこのままカム達の情報を集めるんでしょ? 帝国まで送るよ」

「ありがとうございます! 棟梁!」

パル達が一斉に頭を下げた。後ろではシアが何か言いたそうだったが、敢えて彼女から言い出すのを待つことにした。

パル達とリリイを帝国から少し離れた場所に下ろしてボク達は樹海に向かった。

再び足を踏み入れたハルツィナ樹海は、変わらず濃霧が立ち込めていた。

迷わないよう亜人族達に案内してもらいながら進んでいると、大地感知に反応があった。

どうやらシアも何か感じ取ったのかウサミミをびこびこことと揺らしていた。

「士郎さん武装した集団が前から来ます」

この感じだと……あの時の虎かな？

濃霧の中から予想通り虎人族の武装集団がいつだったかと同じように現れた。

「お前達は……あの時の……」

「久しぶりだね。とりあえず、アルフレリックの孫娘達がいるから彼らの案内お願い。助けたのはハウリアだから」

「ア、アルテナ様!? ご無事だったのですか!？」

「はい。彼等にも助けていただきました」

「それはよかったです。アルフレリック様も大変お辛そうでした。早く、元気なお姿を見せて差しあげてください。……お前たちはここに来るときは巫人を助けてからというポリシーでもあるのか？」

「まさか？ 偶々だよ……というかここ来るの2回目だし。それよりもハウリアは何人かいる？」

「む？ ハウリア族の者なら数名、フェアベルゲンにいるぞ。聞いているかもしれないが、襲撃があつてから、数名常駐するようになったんだ」

「そりゃよかつた。じゃあ、さっさとフェアベルゲンに向かうよ」

そうしてフェアベルゲンに辿り着いたのだが、目に入ったのは凄惨な姿だった。

ボク達を魅了した幻想的な自然の美しさと水の都は見る影もなかった。

「酷い……」

「美しいと聞いていたフェアベルゲンが、襲撃でこのようなことに……」

「ふざけてる……」

通りがかったフェアベルゲンの人々がアルテナ達を見つけ信じられないといった表情で硬直し、次いで、喜びを爆発させるように駆け寄ってきた。

傍に人間族がいることに気がついて、一瞬、表情を強ばらせるもののアルテナ達が口々助けられた事を伝えると、警戒心を残しつつも抱き合って喜びをあらわにした。

どんどんと人垣に埋め尽くされていたが、不意に人垣が割れ始める。その先には、フェアベルゲン長老衆の一人アルフレリック・ハイピストがいた。

「お祖父様……」

「おお、おお、アルテナ！よくぞ、無事で……」

アルテナは、目の端に涙を溜めながら一目散に駆け出し祖父であるアルフレリックの胸に勢いよく飛び込んだ。もう二度と会えることはないと思っていた家族の再会に、周囲の人々も涙ぐんで抱きしめ合う二人を眺めている。

しばらく抱き合っていた二人だが、そのうちアルフレリックは、孫娘を離し優しく顔を撫でると、こちらに視線を向けた。その表情は苦笑いが浮かんでいた。

「……とんだ再会になったな、天野士郎。まさか、孫娘を救われるとは思ひもしなかった。縁というのはわからないものだ。……ありがとう、心から感謝する」

「ボクは送り届けただけだよ。感謝するならハウリア族にしてくれ。ボクは、ここにハウリア族がいると聞いて来ただけだから」

「そのハウリア族をあそこまで変えたのもお前さんだろうに。巡り巡って、お前さんのなした事が孫娘のみならず我等をも救った。それが事実だ。この莫大な恩、どう返すべきか迷うところでな、せめて礼くらいは受け取ってくれ」

「わかったよ」

ボクは困ったように肩をすくめた。

ハウリア達は外にいるとのことだったので、アルフレリックの家で休んでいた。

アルテナが淹れたお茶を飲んでゆっくり待つことにした。

その時アルテナがハジメにお茶を渡す時頬を赤く染めていたのはおそらくそういうことだと思ひ何も気にすることはなかった。ユエと香織が一層近くに寄っていたが、お兄さんは知りません。

お茶を一杯飲み終えた頃、ハウリア族の男女が複数人、慌てたようにバタバタと駆け込んできた。

「団長!! お久しぶりですっ!!」

「お待ちしておりましたっ! 団長!!」

「お、お会いできて光栄ですっ! 教官!!」

「うおい! 新入りい! 団長達のご帰還だあ! 他の野郎共に伝えてこい! 三十秒でな
!」

「りよ、了解でありますっ!!」

余りの剣幕に、パル達でハウリアの反応を予想していたはずの天之河達はお茶を勢いよく噴き出した。

ボタボタと垂れるお茶を拭いながら全員がそちらを見ると、複数の兎人族がビシツ!と踵を揃えて直立不動し、見事な敬礼を決めている姿があった。

ボクにも見覚えのない者が何人かおり、先程の言動も踏まえると、どうやらハウリアは他の兎人族の一族を取り込んで自ら訓練を施し勢力を拡大しているようだ。

「あくうん、久しぶりだな。取り敢えず、他の連中がドン引いているから敬礼は止めよう
な」

「「「「「Sir, Yes, Sir!!」」」」」

幸利は顔を手で隠しながら敬礼を止めるよう言う。

樹海全体に響けと言わんばかりに張り上げたボク達への久しぶりの掛け声に、とても

満足そうなハウリア族と、初めて経験した本物の掛け声に「俺達もついに……」と感動しているハウリアでない兎人族達。

ボクはもう気にすることはやめた。もうパルクンから伝染した厨二病パンデミックは収束することはないと諦めた。

「ここに来るまでに、バル達と会って大体の事情は聞いている。中々、活躍したそうだな？ 連中を退けるなんて大したもんだ」

「……「きよ、恐縮でありませう!!」「……」

最後が涙声になっているのはご愛嬌。幸利は、感動に震えるハウリア達にバル達から預かった情報を伝える。すなわち、カム達が帝国へ侵入したらしいという情報を掴んだ事と、自分達も侵入するつもりであること。そして、応援の要請だ。

「なるほど。……『必滅のバルドフェルド』達からの伝言は確かに受け取りました。わざわざ有難うございます、団長」

「……………ねえ、君も……二つ名があつたりするの?」

「は? 俺ですか? ……ふつ、もちろんです。落ちる雷の如く、予測不能かつ迅雷の斬撃を繰り出す! 『雷刃のイオルニクス』! です!」

「……………そっか」

「困みハウリア以外も訓練させてたけど、何人参加できるの?」

「……確か……ハウリア族と懇意にしていた一族と、バントン族を倒した噂が広まったことで訓練志願しに来た奇特な若者達が加わりましたので……実戦可能なのは総勢百二十二名になります」

「なるほど……それなら全員送り届けられるね。今すぐ集めてきて。連れてくから」

「は？はっ！了解であります！直ちに！」

「どうやらボク達が手伝うとは思わなかったようだ。一回間の抜けた反応をしていた。」

「同じ反応していたのはイオだけではなかったようだ。隣に立ち、ウサミミをピンツ！」

と立ててボクを見ていた。

「あ、あの士郎さん？大迷宮に行くんじゃない……」

「カムのこと、気になってたんでしょ？」

「それは……そうですけど……でも……その……」

それでも口籠もるシア。

ボクはシアの頬に手を添える。

「正直言えば、早く大迷宮を攻略したい。でもね、シア。君がそんな調子じゃ、大迷宮の攻略なんてできないよ。それに心配ならそうだと言えればいいんだ。初対面の時の君はどうしたのさ」

「士郎さん……」

「あのね……ボクは君の事を大切に想ってるんだ。だからこそ君の不安くらい払拭してあげたいんだよ。だから君の口から言ってごらん？ちゃんと聞くから」

そう言つて頭を撫でる。

「わたし……父様達が心配ですう……一目でいいから無事なスカを確認したいですう……」

「わかつた……最初からそういえばいいんだよ。君が遠慮なんて何か変なものでも食べたと思つちやつたよ」

「土郎さん!?わたしそこまで無遠慮じゃないですよ!？」

そう言いながらボクの胸をポコポコと叩く彼女は可愛かつた。

「やつぱりお兄ちゃんつてタラシ気質な気がするよ……」

「恵里……今さらよそれは……」

その後周りに見られていたことを自覚したシアは真つ赤に染まつた顔を両手で隠したが、ウサシツポをフリフリと揺らしていたので、気持ちを抑えきれていなかった。

ちようどいいタイミングでイオ達が戻り、準備が整つたようだ。

アルフレリック達の見送りを受けながら、帝国に向けてフェルニルを飛ばした。

帝都

ヘルシャー帝国に初めて訪れたが、なんとというか、雑多だった。

召喚された場所がハイリヒでよかったと思うくらいには、あまり好ましい雰囲気ではなかった。

オマケにナンパしてくる連中は何度もぶっ飛ばしても後を絶たない。

まあここには美少女が勢揃いだから致し方ないが。

「うう、話には聞いていましたが……帝国はやっぱり嫌なところですよ」

「まあ、軍事国家じゃからなあ。軍備が充実しているどころか、住民でさえ、その多くが戦闘者なんじゃ。この程度の粗野な雰囲気は当たり前と言えば当たり前じゃろ。妾も住みたいとは全く思わんがの」

「どうやら、シア達も帝国がお気に召さなかったようだ。」

「っ……………」

「シア、あまり目に入れない方がいい」

「はい……………そうですね……………」

シアの目に入ってしまおうそれは亜人族の奴隷達だ。使えるものは何でも使う主義の

帝国は奴隷売買が非常に盛んらしく、今も、シアが視線を向けている先には値札付きの檻に入れられた亜人族の子供達があり、シアの表情を曇らせている。

ボクも使えるものはなんでも使う主義だがこういうのを見るのは自分としてもいい気分ではない。

「許せないな、同じ人なのに……」

「それはそうだが、今動いても意味がねえからな……」

天之河は見慣れない光景にギリッと歯噛みする。放つて置けば、そのまま突撃でもしそうだ。

坂上くんも居心地悪そうにしているが、落ち着いていた。特に脳筋だった彼がここまですべて変わっているとは思っていなかった。

「そういえばエリリン、皇帝陛下に求婚されてたよね」

「ああ……そんなこともあったねえ……」

鈴からまさかのカミングアウトだった。

恵里が求婚されていたとは思ひもしなかった。たしかに恵里はかわいいし、要領いいし、かわいいし、かわいいし。そういう輩が現れるのは不思議じゃないが……

「明言してないとはいえ、恵里を狙うなんてねえ……どうしよっかなあ……」

「うわあ……土郎、すごい悪い顔してるよ……」

「完全に悪役の面してんぞ……」

「失礼だなあ……2人とも」

ボクは恵里に湧く虫を駆逐しようとしてるだけだよ？

「そんなことより天野先輩。今どこに向かっているんですか？」

「冒険者ギルド。情報収集と言ったらそこでしょ？」

まあファンタジー的にこれが定番だ。

「やっぱり父様達は捕まってしまったのでしょうか……」

「連絡が取れないということはそういうことなのかしら……」

「……若しくは潜入したけど、高い警備レベルで出られなくなったかのどつちか」

ユエの言う通り、帝国の警備レベルは高い。

警戒態勢とまではいかないが嚴重な警備だ。ここまでだとパル達も侵入に難儀するのも納得だ。

再び暗い顔になるシアの頬をムニムニする。恵里も雫も彼女の頭を撫でたりウサミミをモフモフしている。

「シア、捕まっているなら取り返すだけだよ。帝国を潰してでもやるさ」

「勿論僕達も協力するよ」

「みなさん……」

「待つて潰しちゃうの？ねえ？まじなのそれ！」

「諦めろ鈴……先輩はやると言ったらやる人だ……」

「諦めた!? 龍太郎くん!? 諦めちゃうの!?!」

天之河が暴力を受けそうになっている亜人族を助けようと駆け出しそうになったが、ハジメが義手に仕込んだ針で帝国兵を気絶させた。

「天之河くん……自分の正義感を貫きたいなら僕達のいないところでやってくれろ？」

「今のは南雲が……? 迷惑だと? 助けるのが悪いのか?」

「今僕達が帝国にいるのはシアの家族を助けにきただけ。目的の副産物として助けられるならいいけど、無理なら手を出すつもりはないんだ」

「ならあの亜人族を見て何も思わないのか! 今こうしてる時も苦しんでいるんだぞ！」

「じゃあ今彼を助けたらどうなるのさ? 今助かっても後々苛立ちをぶつけられるだけだよ」

「なら、そうしないようなら説得をすれば……」

「あんな天之河、説得でやめるようなら亜人族は奴隷になんかなってないんだよ」

「だったら見捨てるのか! 力ならあるだろう!」

「ハジメが言ってたが、目的を履き違えるなよ……それに帝国の法律に逆らえば犯罪に

だつてなる」

「今、問題起こせば計画がオシヤカになるからやめてよ……」

ボクはそう釘を刺してギルドに入る。それと同時に女性陣に視線が集まるので威圧しながらカウンターに向かう。

気怠げな受付嬢にとりあえず質問する。

「……最近で帝都内で騒動を起こした亜人がいたりしなかつた？」

「……そういうのはあつちで聞いて」

受付嬢の視線の先にはロマンズグレーの初老の男が、グラスを磨いていた。

「マスター、情報が欲しい。……最近で帝都内で騒動を起こした亜人がいたりしなかつた？」

「……ここは酒場だ。ガキが遠足に来る場所じゃない。酒も飲まない奴を相手にする気もない。さっさと出て行け」

「そうだね……ならこの店で一番キツくて質の悪い酒をボトルで頼むよ」

「……吐いたら叩き出すぞ」

マスターは特に断るでもなく背後の棚から一升瓶を取り出しカウンターにゴトリと置く。

ボクはそれの蓋を指先で撫でるように切断する。

指先一つで仕留めてやる。

ルブルレじゃないけどね。

「お兄ちゃん……それ飲むつもり？やめた方がいいよ……」

「エリリンの言う通りだよオニーサン……もう臭いだけで吐きそうだよ」

「飲むならもつといいお酒にしましょう？」

「雫さんの言う通りですよ……士郎さん、どうしてわざわざそんなものを……」

「味わうつもりもないからね……良い酒をガブガブ飲むのはお酒に対して冒瀆さ」

そう言って一気に飲み干し、空になったボトルを『ガンー』とカウンターに叩きつけた。そしてドヤ顔をする。

「……わかった、わかった。お前さんは客だ」

「で、さっきの質問の情報はあるかな？勿論、それ相応の対価は支払うよ」

「対価はさっきの酒代で構わん。……聞きたいのは兎人族のことか？」

「……そうだね。詳しく」

数日前に大捕物があったそうで、その時、兎人族でありながら帝国兵を蹴散らし逃亡を図ったとんでもない集団がいたのだとか、しかし、流石に十数人で百人以上の帝国兵に帝都内で完全包囲されてしまったては逃げ切ることはやはり出来ず、全員捕まり城に連行されたそうだ。

「なるほど……城にか……」

チラリとシアの顔を見たが、やはり彼女の表情は曇っていた。

連行されたということは利用価値があるということだ。

「マスター。言い値を払うと言ったら、帝城の情報、どこまで話せる？」

「……冗談でいい質問じゃないが……その様子を見る限り冗談というわけじゃない

さそうだな……警邏隊の第四隊にネデルという男がいる。元牢番だ」

「ネデルか……わかった、訪ねてみるよ。世話になった、マスター」

しかしあつさり教えてくれたな……教えても無理だと思つたからか？

「土郎さんさつき元牢番の人を紹介してもらつたのは、もしかして……」

「うん。詳しい場所を聞いて、今晚にでも侵入するつもり。今からボクとユエとヴェア

ベルトで情報を仕入れてくるから、みんなはご飯でも食べてて」

「何するつもりなのお兄ちゃん……」

「まああまり公に言えないからなあ……」

数時間して宿屋に戻る。

「ただいま」

「ん、戻った」

「あつさりだったな」

「そりゃあんなことすれば心折れるよ」

「おかえりだ。で、何したんだよ」

エプロン姿の幸利が出迎えてくれた。

「幸利、まあ男の激痛の繰り返しだよ。この香りは……オムライスかな？」

「ヒエツ……なんてことしてんだよって思ったが前にもやってたなユエのやつ……料理は正解だ。調理方法は某赤い弓兵だ。食うか？」

「いる」

少年たち食事中

「ふう……ご馳走様」

「幸利殿の料理は天下一品だな……」

「ん……米の色が私の故郷の料理を思い出すけど、すごい美味しい」

「お前ら大袈裟だ……」

そう言う幸利は頬を掻きながら赤く染めていた。

「ホント手際が良すぎてアタシ見てるだけだったわ」

「それで父様達の情報はどうだったんですか？」

「天野先輩、今更ですけどシアさんの家族が帝城に捕まっているんなら、普通に返してく

れって頼めばいいんじゃないんですか？今ならリリイもいるはずだし……」

「で、対価は？」

「え？」

「対価だよ。カム達は不法入国している上、帝国兵を殺したんだ。しかも、兎人族でありながら包囲されて尚、帝国側にダメージを与えられるという異質な存在。それを、まさか頼んだからって無償で引き渡してくれると思うのか？」

「それは……」

「当然相当な対価を要求するさ。それにリリイの交渉にだって影響が出る可能性だってある」

天の河はそれでも何かしたそうに拳を握った。

「しょうがない……少しでも成功率を上げる為に仕事を与えよう。パツと思いついたものだけどないよりはマシだ。」

「とりあえず作戦実行のために少し編成を考えた。まず救出組はボク、恵里、雫、シア、ユエ、ハジメ、香織。残りは揺動してくれ」

「ぎっくりしすぎじゃねえか？」

「これくらいでいいんだよ。とりあえず、幸利達は帝国に襲撃する役。天の河達はそれを倒す役だ。別に倒さなくていいから。適当に派手な攻撃して爆破するくらいの火力

でいいよ。用は演出さえ派手にすれば問題ないから」

「つまりシヨールをすればいいんだな先輩！」

「簡単に言えばそうなるね。作戦実行は深夜だ。それまで自由行動」

深夜。

ボク達は帝城の前にいる。

幸利達が陽動で帝国兵の大半を引きつけている間に侵入してカム達を助ける。

『こちらら士郎。帝城前についたどうぞ』

『こちらら幸利。準備OKだ。テイオに幻覚魔法をかけて別の化け物に見せて、メルリアンが巨大化して、爆破したら合図だ』

『了解。手筈通り頼むよ』

『まかせろ』

そうして大きな爆破が起きる。

それと同時に侵入。地下牢へと向かう。

中は所々トラップの魔法陣が設置され、しかも効果も悪趣味な物からただ捕らえるだけのものなど色々あったが、全部、破戒すべき全ての符で解除しているのでなんの障害にもならない。

巡回している兵士は恵里の闇魔法や魂魄魔法で意識を奪う。

牢屋の中は異臭が立ち込めていて明らかに清潔とは程遠い場所だ。

ようやくハウリア達がいる牢屋の前に着く。

そこからは余裕有りげな話し声が聞こえた。

「おい、今日は何本逝った？」

「指全部と、アバラが二本だな……お前は？」

「へへっ、俺の勝ちだな。指全部とアバラ三本だけ？」

「はっ、その程度か？俺はアバラ七本と頬骨……それにウサミミを片方だ」

「マジかよっ？お前一体何言ったんだ？あいつ等俺達が使えるかもってんでウサミミには手を出さなかったのに……」

「なくに、いつものように、背後にいる者は誰だ？なんて、見当違いの質問を延々と繰り返しやがるからさ。……言ってみてやったんだよ。「お前の母親だ。俺は息子の様子を見に来ただけの新しい親父だぞ？」ってな」

「うわあ、そりゃあキレるわ……」

「でも、あいつら、ウサミミ落とすなって、たぶん命令受けてるだろ？それに背いたってことは……」

「ああ、確実に処分が下るな。ケケケさまあゝねえぜ！」

覚悟は決まってるな……

「今頃は、族長も盛大に煽ってんだろうな……」

「そうだな。……なあ、せつかくだし族長の怪我の具合で勝負しねえか？」

「お？ いいねえ。じゃあ、俺はウサミミ全損で」

「いや、お前、大穴すぎるだろ？」

「いや、最近の族長、ますます言動が教官に似てきたからなあ。……特に新兵の訓練している時とか……」

「ああ、まるで教官が乗り移ったみたいだよな。あんな罵詈雑言を浴びせられたら……有り得るな……」

「まあ、教官や団長達ならそもそも捕まらねえし、捕まっても今度は内部から何もかも破壊して普通に出てきそうだけだな！」

「むしろ、帝都涙目って感じだろ？ きつと、地図から消えるぜ」

「団長達は容赦ないからな！」

「むしろ鬼だからな！」

「いや、悪魔だろ？」

「なら、魔王の方が似合う」

「おいおい、それじゃあ魔族の魔王と同列みたいじゃないか。団長や教官に比べたら、

あちらさんの魔王なんて虫だよ。虫」

「なら……悪魔的で神懸かってるってことで魔神とか?」

「「「「「それだ!」」」」」

随分と余裕そうだな……なんか、心配が空振りした気分だ……

とりあえずはとつとと助けなれないので、空間魔法を使って、扉を使わず侵入する。

「さつきから言いたい放題だね君ら」

「「「「「え……?だ、団長!」」」」」

「……意外に元氣?」

「見た目、かなり酷いんですが……心配して損した気分になりました……」

こっちはもうハウリア達に呆れ果てている。

「丈夫になったねえ……」

「は、はは……そりや団長や教官に鍛えられましたからね」

「拷問なんて屁でもないですよ……」

「むしろお遊戯かと思っただぜ……」

ゲフツゲフウと血を吐きながら、なお軽口を叩くハウリア達とその言葉に、両隣の恵里とシアから何とも言えない眼差しが、ボクと雫に向けられる。

「久しぶりの再会のところ悪いけど、さっさとここ出るよ」

「「「「「「ありがとうございます！」「」「」「」」」」」」」」

「うん。シアの為だからね。気にしないでいいよ。それとカムの場所は？」

さつきハウリア達が話していた内容から察するにカムはここにいないのは明白だ。

「それなら……」

やはり今の時間は拷問を受けているようで詳しい部屋の位置も教えてくれた。

先に彼らを逃してからカムの救出に向かう。

ボクの命令にゾクゾクしたのは気のせいだと信じよう。

ハジメのゲートキーでパル達がいるところに繋げて移動させる。

サクツと見張りを倒して扉の前に着くと、部屋の中から怒声が聞こえてきた。

しかも聞き覚えのある声だ。

「生ぬるい拳だな！帝国兵も所詮こんなもんか！腰は入ってないわ、骨の一つも砕けてないぞ！だから貴様らは雑魚なんだ！」

「なんでテメエにそんな事言われなきやいけねえんだ！」

「この程度なら子猫の方がマシだ！何から何まで甘いわ！」

「ふざけんな！」

「おいよせ！そんなことしたらそいつが死んじまうぞ！」

「ハン、そつちのお前も雑魚か！そんなだから我々が屈服しないんだ！殺意の一つでも出してしろ！」

「なんだよお！こいつ、ホントに何なんだよお！こんなの兎人族じゃねえだろお！誰か尋問代われよお！」

「もう嫌だあ！こいつ等と話していると頭がおかしくなつちまうよお！」

……なんで帝国兵側がやられてんの？

「ねえ、助ける必要がある？」

「……かえる？」

「……いえ、すみませんが一応、助けてあげて下さい。自力では出てこれられないと思うので……」

シアが在りし日の優しい父親を思い、遠い目をしながらハジメに頼む。実際、威勢はよくてもカムが自力で脱出できる可能性はないので助ける必要があるのだろうけど。

「ふん、口ほどにもないっ。この深淵蠢動の闇狩鬼、カームバンティス・エルファライト・ローデリア・ハウリアの相手をするには、まだ早かったようだな！」

なんかとんでもないのが聞こえてきたんだけど。

「だから、わけわかんねえよ！くそっ、もう嫌だ！こんな狂人がいる場所にこれ以上いられるかっ！俺は家に帰るぞ！」

「待て、ヨハン！仕事だぞ！つていうか、何かそのセリフ、不吉だから止めろよ！」

ドタドタと扉から出てきた帝国兵を一瞬で気絶させて中に入る。

「まさか……団長ですか？」

「そうだよ……ホント遅しくなっちゃってさあ……」

「いや、せつかくの再会に無様を晒しました。しかも帝国のクソ野郎共を罵るのに忙しくて、気配にも気づかないとは……いや、お恥ずかしい」

「……父様、既にそういう問題じゃないと思います。直ぐにでも治療院に行くべきです。もちろん、頭の治療の為に……ていうか、その怪我で何でピンピンしているんですか」
「気合だが？」

「……他の連中はもう逃したから、カムも行くよ。装備も取られてるだろうけど後でまた新しいのあげるから」

「新装備を頂けるので？そいつあ、テンションが上がりますな、ククク」

幸利 side

士郎達が帝城に侵入している間、俺達は姿を変えて陽動を起こしている。

テイオが竜化、メルリアンが巨大化して軽くブレスを吐き軽く小火を起こす。

帝国兵がドンドン集まってくる。魔法やら弓矢やらが飛来してきたり、近くに寄り、

劍などを振るってくる。

『ご主人様よ』

「どうした」

『物足りないのじゃ』

「知るか」

このドMはあまりにも弱い攻撃に不満な声を漏らす。

『これが終わったらお仕置きを御所望するのじゃ』

「後でぶっ叩いてやるよ」

もうこのドM竜には諦めを最近感じている。

俺が原因だから責任は取るつもりだ……

それでも俺に好感を持ってきているのは嬉しいが、どうしたもんか。

『期待して良いのじゃな?』

「ああ……」

『なら、今度の夜、叩くのではなく妾と寝て欲しいのじゃ』

「へ?」

まさかの返しに俺は間の抜けた声を漏らす。

『その……なんじゃ……妾もユ工達が羨ましいのじゃ……』

「……それは少しまっけてくれ……俺の方が問題あるから」
『わかつたのじゃ……』

因みにだがこの会話の間も帝国兵は攻撃してきている。

こちらが余りにも強すぎるが故にダメージが殆どないと、優花とヴェアベルト、メルリアンが相手しているので、攻撃がこちらに來ないのもある。

そうこうしている間に、目的の天之河達が派手な演出で現れる。

「そこまでだ！今度は俺達が相手になる！」

そう言つて天之河は天翔閃を放つ。

ティオに乗っているが軽く衝撃が伝わる。

『勇者と呼ばれるだけはあるのじゃな。ちよつと効いたのじゃ』

「まあ士郎が竜特效乗せたからな聖劍に」

『む？士郎は勇者の事を嫌つていおらんかったか？』

「すぐやられて足引つ張るよりかはマシだろ」

『なるほど……』

「オラア！」

坂上が拳で殴りかかってくる。

ティオはそれを前足で受け止め、吹き飛ばす。

しかし空中でクルクルと回り、壁に着地して再び飛びかかる。それを俺は暗黒弾で撃ち落とそうとするが、拳に弾かれる。

「へえ……やるじゃねえか……テイオ、火炎プレス頼む」

『承知したのじゃ』

テイオが息を吸い込むと猛烈な熱気の火炎が吐き出されるが、余り広がらなかった。

「『聖絶・集』！」

どうやらテイオの口元に鈴の結界が貼られていて、プレスが広がらなかったようだ。

「はあああああ！」

さらに天之河の剣技がテイオを襲う。

しかしテイオの強固な鱗に阻まれ、まともに切ることは出来ていない。

坂上の拳も受け止められる。

結界が突然俺に向かって飛んできた。

「うおっ!？」

仰反るように避けるとそして背後から殺気を感じ即座に杖を取り出して防御する。

受け止めながら弾こうとしたのだが直ぐに離脱される。

さらに炎と氷の飛ぶ斬撃が襲いかかる。

杖で弾くのだが良い音が鳴る。

一度間合いを取ろうとテイオに尻尾での回転攻撃を指示する。

あいつら連携は取れてるな……

すると念話が飛んできた。

『こちら士郎。救出完了した。離脱して』

『了解。合図の技撃つから先に宿屋戻っててくれ』

『了解』

俺は天之河達と決めていた合図の魔法を放つ。

そうして天之河が神威を放ち爆風で姿が見えなくなった所で一気に離脱。宿屋で士郎達と合流した。

ハウリア族への一喝と皇帝への謁見

カム達を救出したボク達は待機していたハウリア達が再会を喜んでいる場面に遭遇した。

カムの姿が目に入ると『族長！』と声を上げて喜びの声をさらに上げた。

再会の喜び合いを終えたカムがこちらに向いた。

「よろしいでしょうか团长？」

「うん。話して」

「まず、何があったのかということですが、簡単に言えば、我々は少々やり過ぎたようです……」

「やりすぎた？」

そう言つて、始まったカムの話を要約すると、こういう事だ。

亜人奴隷補充の為に、疲弊した樹海にやって来た帝国兵を、カム達ハウリア族は相当な数、撃破している。逆にそれが、帝国兵をかなり警戒させたらしい。というのも、単なる戦闘の果ての撃破ではなく味方の姿が次々と消えていき、見つけた時には首を落とされているという暗殺に近い形だったからだ。

正体不明の暗殺特化集団という驚異を前に、帝国はその正体を確かめずにはいられなかった。そこで一計を案じたいらしい。それが帝都での包囲網だ。要は誘い込まれたということである。

カム達も、あつさり罠にはまるといふ失態を犯したわけだが、それは、帝国が直接樹海に踏み込んで来るといふまさかの事態に対する少なくない動揺があつた、としか言いようがない。

または、看過できない程大勢の亜人を捕獲されてしまい頭に血が上つたということや、焦りが隙を生んだということもあるだろう。帝国の襲撃が、樹海を端から焼き払つたり、亜人奴隷に拷問まがいの強制をして霧を突破したりという、非道な方法だつたというのも原因の一つかもしれない。

普段のフェアベルゲンなら、それでも組織的に動いて戦うことは出来ただろうが、おそらく、魔物の襲撃によつて疲弊している情報も掴まれていたのだろう。タイミングも絶妙だつた。

まさに泣きつ面にハチ状態では、カム達も完全には冷静になりきれなかつたのだ。

それでもカム達は応戦して抵抗したが、大勢捕まつてしまつた。

「我等は生け捕りにされ、連日、取り調べを受けていたわけです。あちらさんの興味は主に、ハウリア族が豹変した原因と所持していた装備の居所、そして、フェアベルゲンの

意図つてとこゝろです。どうやら、我等をフェアベルゲンの隠し玉か何かと勘違いしているようで……実は、危うく一族郎党処刑されかけた上、追放処分を受けた関係だとは思いませんいでしょうなあ」

「それもそうだな……むしろそれが想像つく方が無理だ」

「それで、本題は？」

「はっ！本題ですが、我々ハウリア族と新たに家族として向かえ入れた者を合わせた新生ハウリア族は……帝国に戦争を仕掛けます」

彼の発言に場の空気が凍りつく。

シアは何を言っているのか理解が追いついていないようだ。

「何を、何を言っているんですか、父様？私の聞き間違いでしょうか？今、私の家族が帝国と戦争をすると言ったように聞こえたんですが……」

「シア、聞き間違いではない。我等ハウリア族は、帝国に戦争を仕掛ける。確かにそう言った」

「ばっ、ばっ、馬鹿な事を言わないで下さいっ！何を考えているのですかっ！確かに、父様達は強くなりましたけど、たった百人とちよつとなんですよ？それで帝国と戦争？血迷いましたか！同族を奪われた恨みで、まともな判断も出来なくなつたんですね!!」

「シア、そうではない。我等は正気だ。話を……」

「聞くウサミミを持ちません！復讐でないなら、調子に乗ってるんですね？だったら、今すぐ武器を手にとって下さい！帝国の前に私が相手になります。その伸びきった鼻っ柱を叩き折つてくれます！」

そう言つてシアは宝物庫から星砕きを取り出してカムに突きつける。

身体強化も入っているのか、物理的圧力でカムを威圧する。

普段から明るくコミカルな彼女からは想像もできないほどの怒りが現れている。

しかしカムの目を見ると、イカれて言っているわけではなく、一つの覚悟を持った目をしていた。

冷静になれないシアはそれに気付いていないので、一旦彼女を落ち着かせるためにボクは尻尾をモフリだした。

「ひゃわ?! 士郎しゃん、しよこはダメでしゅう〜」

しばらくモフリ、シアが崩れ落ち、四つん這いになる。そのまま頭を撫でる。

「ちよつとは落ち着いた？カムの話はまだ終わつてないんだから、吹っ飛ばすのは最後まで聞いてからにしよう」

「うっ……そうですね……すいません。ちよつと頭に血が上りました。もう大丈夫です。父様もごめんなさい」

「家族を心配することの何が悪い？謝る必要などない。こっちこそ、もう少し言葉に配

慮すべきだったな。……最近どうも、そういう気遣いを忘れがちでなあ。……それにしても、くつくつくつ」

「な、なんですか、父様、その笑いは……」

「いや、お前が幸せそうので何よりだと思っただけだ。……団長には随分と可愛がられているようだな？ うん？ 孫の顔はいつ見られるんだ？」

「なつ、みや、みやごつて……何を言ってるんですか、父様！ そ、そんなまだ、私は……」
カムにからかわれて、顔を真つ赤にしながらチラチラと上目遣いにボクを見るシア。
見ればハウリア達が皆、ニヤニヤとした笑みを浮かべている。本当に、どいつもこいつもいい性格になったものだ。

「で、カム。なんで帝国に戦争を？」

「先程も言った通り、我等兎人族は皇帝の興味を引いてしまいました。それも極めて強い興味を。帝国は実力至上主義を掲げる強欲な者達が集う国で、皇帝も例には漏れませぬ。そして、弱い者は強い者に従うのが当然であるという価値観が性根に染み付いている」

「つまり、皇帝が兎人族狩りでも始めるって言いたいのか？ 殺すんじゃないくて、自分のものにするために？」

「肯定です。尋問を受けているとき、皇帝自らやって来て、『飼ってやる』と言われまし

た。もちろん、その場でツバを吐きかけてやりましたが……」

皇帝の顔にツバを吐いたというカムの言葉に、ハウリア達は「流石、族長だぜ！」と盛り上がり、天之河達は「あの皇帝に!？」と驚愕をあらわにした。

「しかし、逆に気に入られてしまいました。全ての兎人族を捕らえて調教してみるのも面白そうだななどと、それは強欲そうな顔で笑っていました。断言しますが、あの顔は本気です。再び樹海に進撃して、今度はより多くの兎人族を襲うでしょう。また、未だ立て直しきれていないフェアベルゲンでは、次の襲撃には耐え切れない。そこで、もし帝国から見逃す代わりに兎人族の引渡しでも要求されれば……」

「なるほどな。受身に回れば手が回らず、文字通り同族の全てを奪われる……か」

「肯定です。ハウリア族が生き残るだけなら、それほど難しくはない。しかし、我等のせいで、他の兎人族の未来が奪われるのは……耐え難い」

「だけど今いる戦力で帝国が落とせるなんて思っていないでしょ?」

「もちろんです。平原で相対して雄叫び上げながら正面衝突など有り得ません。我等は兎人族、気配の扱いだけはどんな種族にも負けやしません」

そう言って、カムはニヤリと笑った。

「なるほど、暗殺ね」

後ろで雫が納得したように眩く。

「肯定です師範。我等に牙を剥けば、気を抜いた瞬間、闇から刃が翻り首が飛ぶ……それを実践し奴らに恐怖と危機感を植え付けます。いつ、どこから襲われるかわからない、兎人族はそれが出来る種族なのだと力を示します。弱者でも格下でもなく、敵に回すには死を覚悟する必要がある脅威だと認識させます」

「皇帝の一族が、暗殺者に対する対策をしていないと思うか？」

「もちろんしているでしょう。しかし、我等が狙うのは皇帝一族ではなく、彼等の周囲の人間です。流石に、周囲の人間全てにまで嚴重な守りなどないでしょう。昨日、今日、親しくしていた人間が、一人、また一人と消えていく。我等に出来るのは、今のところこれくらいですが、十分効果的かと思いません。最終的に、我等に対する不干渉の方針を取らせることが出来れば十全ですな」

「なんともえげつない策だが、これは長い時間がかかる。その間に報復されるかもしれない。どうしようにも分の悪い賭けである。」

「……父様……みんな……」

シアは、悄然と肩を落とす。帝国兵を敵に回し、絶対監獄ともいうべき帝城の地下牢からも逃走を果たした兎人族を、皇帝は私的興味と公的責務として見逃しはしないだろうと、彼女も察したんだ。

兎人族に残された道は、他の同族を見捨ててハウリア族だけ生き残るか、全員仲良く帝国の玩具になるか、生命を賭して戦うか、そのどれかしかないんだ。

「シア、そんな顔をするな。以前のようにただ怯えて逃げて蔑まれて、結局蹂躪されて、それを仕方ないと甘受することの何と無様なことか……今、こうして戦える、その意志を持つてることが、我等はこの上なく嬉しいのだ」

「でもー」

「シア、我等は生存の権利を勝ち取るために戦う。ただ、生きるためではない。ハウリアとしての矜持をもって生きるためだ。どんなに力を持つとも、ここで引けば、結局、我等は以前と同じ敗者となる。それだけは断じて許容できない」

「父様……」

「前を見るのだ、シア。これ以上、我等を振り返るな。お前は決意したはずだ。ボスと共に外へ出て前へ進むのだと。その決意のまま、真っ直ぐ進め」

カムが、族長としても戦闘集団のリーダーとしてでもなく、一人の父親として娘の背中を押す、自分達のこととこれ以上立ち止まるなど、共に居たいと望んだ相手と前へ進めと。

「なら俺がなんとか「お前は黙ってる」ぶへっ！」

天の河が何か言おうとしたが幸利の裏拳を喰らいぶっ飛ぶ。

「シア、今回ボク達はカム達のためにできることはほとんどない」

「……そう、ですよね」

早とちりするシアのほっぺをムニムニとこねる。やはり柔らかい。

「でも、サポートくらいはできる」

「ふえ？」

カム達の方に向き直る。

「今回の一件はカム達が力を証明しなくちゃならない。だからボクらが戦っても意味はない。だけどね、シアがこんな顔してて何もしないで立ち去るなんてボクの信条に反するんだよ」

「だ、団長……な、なら一体？」

困惑するカム達の前にボクは今、結構嫌な笑顔になっっているだろう。

息を吸い込み、大きく宣言する。

「カム！ハウリア族！シアを泣かせる作戦は全部却下！お前達には一夜で帝国を落とさせる！ハウリア族にはそれが出来ると証明して見せろ！あの一夜から帝国には安心はないと！いつ生命を奪われるか分からない恐怖を骨の髄まで覚えさせろ！」

辺りは静かになる。ハウリア族も硬直し、固唾を飲み込んでいた。

「返事イイイイイ！」

「「「「「は、ハイハイハイハイ！」」」」」」

翌日。

ボク達は天之河の勇者という名目を使い、正面から堂々と帝都へ入った。

がしかし、受け付けの男がシアに目をつけた。

「よお、ウサギの嬢ちゃん。ちよつと聞きてえんだけどよ。……俺の部下はどうしたんだ？」

「部下？……っ……あなたは……」

どうやらあの時、溪谷の時のやつの上司のようだ。

「おかしいよな？俺の部下は誰一人戻って来なかつたつてえのに、何で、お前は生きていて、こんな場所にいるんだ？ああ？」

「うあ……」

シアを追い詰めるようにジリジリと迫るグリッド。

根付いたトラウマはそう簡単には拭いきれない。更には家族が減っていく恐怖がフラッシュバックしているのだろう。

呻き声が漏れている。

ボクは彼女の背中を軽く押し、軽く頬を掴む。

ハツとした顔を見るので大丈夫そうだ。

「あなたの部下の事なんて知ったことじゃないですよ。頭悪そうな方達でしたし、何処かの魔物に喰われでもしたんじゃないですか？あと、私のことであなたに答える事なんて何一つありません」

「……随分と調子に乗ったこと言うじゃねえか。ああ？勇者殿一行と一緒にいるから大丈夫だとも思ってたのか？奴隷ですらないなら、どうせその体で媚でも売ってんだろ？売女如きが、舐めた口を利いてんじゃないやねえぞ」

こいつ……

シアを売女呼ばわりしたこの男に向けて、女性陣から途轍もない怒りのオーラが溢れる。

シアの態度に青筋を浮かべて怒りに表情を歪めつつも、その眼差しに気がついたようでグリッドは誤魔化し笑いをしながら光輝に向けて提案する。

「申し訳ありませんがね、勇者殿。この兎人族は二ヶ月ほど前に行方不明になった部下達について何か知っているようでした、引渡し願えませんかね？兎人族の女が必要なら、他を用意させますんで、ここは一つ——」

そう言い切る前にボクはそいつの顎を掴む。

「オイ……三下」

「あぐつ……!?!」

「受け付けの出番は終わったんだ……さつきと別の客の対応したらどうだ？」

「てめ……」

「言葉がわからないのか？それとも下半身に脳味噌がついてるのか？テメエに使う時間があるとも思ったか？理解ができたならどけ」

『『ミシリ』と顎から音が鳴る。』

骨にヒビは入れていないので、痛みはないが、圧だけは与える。

それでも怒りが収まらないようだが、視線で部下達に何か命令したようだ。

どうやら案内を促されたようだった。

そして何故か今ボク達は皇帝の前にいる。

いや、皇帝に目をつけられているからかもしれない。

だからといってそんなことはどうでもいいけど。

「お前が、天野士郎か？」

「ええ、そうですよ。ボクが天野士郎ですよ。お初にお目にかかります皇帝陛下」

ボクは最大限の笑顔を見せる。

「こんなの学園祭の執事喫茶の時にやったから余裕である。

「似合わねえ喋り方してえねえで、普段通り話しな。俺は、素のお前に興味があるんだ」
「そう？ならそうさせてもらおうよ」

「くく、それでいい」

満足したようにガハルドは笑う。

「恵里、久しいな。俺の妻になる決心はついたか？」

「前言撤回はしません。というか僕の好みじゃないし」

「つれないな。だが、そうでなくては面白くない。元の世界より、俺がいいと言わせてやろう。その澄まし顔が俺への慕情で赤く染まる日が楽しみだ」

「こいつボクのこと無視……いや、恵里の恋人がボクだと思ってるのかな？」

「そんな日が永遠に来るわけないね」

「ほう？何故そんなことが言える？」

ボクは恵里を抱き寄せながらガハルドに宣言する。

「恵里が欲しけりや恋人のボクを超えてからしろってことだよ」

「なるほどなあ……天野士郎、一つ聞かせろ」

「何？」

「俺の恵里はもう抱いたのか？」

「抱いたけど？何か問題でも？それとお前のじゃなくてボクのだからね？」

「そうか……なら奪った時が楽しみな」

「ふうん……」

「いつどうやって消そうかね……」

「まあいい話を変えるぞ。リリアーナ姫からある程度は聞いている。お前が、大迷宮攻略者であり、そこで得た力でアーティファクトを創り出せると……魔人族の軍を一蹴し、二ヶ月かかる道程を僅か二日足らずで走破する、そんなアーティファクトを。真か？」

「そうだね」

「そして、そのアーティファクトを王国や帝国に供与する意思がないというのも？」

「そうだね」

「ふん、一個人が、それだけの力を独占か……そんなことが許されると思っているのか？」

「誰の許しがいる？許さなかったとして、何が出来る？」

ボクはガハルドの背後や周辺の気配が薄いところに目配せする。確実にそこに暗殺系統の連中がいるだろう。

それがわかっていてという視線をガハルドに向ける。

どうやらそれが伝わったのか僅かに動揺したようだ。

「はっはっは、止めだ止め。ぼつちりバレてやがる。こいつは正真正銘の化け物だ。今やり合えば皆殺しにされちまうな！」

「なんで喜んでるのかな……」

「おいおい、俺は『帝国』の頭だぞ？強い奴を見て、心が踊らなきや嘘つてもんだろ？」
「戦闘民族かよ……」

幸利から呆れの声が漏れた。

正直ボクも同じこと考えた。コイツサイ○人と同類だろ。

「それにしても、お前が侍らしている女達もとんでもないな。おい、どこで見つけてきた？こんな女共がいるとわかってりやあ、俺が直接口説きに行つたつてえのに……一人ぐらい寄越せよ」

「馬鹿言わないでくれるかなあ？ド頭カチ割るよ？……いや、テイオならいいか」
「変態の扱いには困つてたしな……」

「っ!?な、なんじゃと……ご、ご主人様め、さり気なく妾を他の男に売りおつたな！はあはあ、何という仕打ち……たまらん！はあはあ」

「ちよつと問題あるが、いい女だろ、外見は」

「すまんが、皇帝にも限界はある。そのヨダレ垂らしている変態は流石に無理だ」

「こ、こやつら、本人を目の前にして好き勝手言いおつて！くううう、んっ、んっ、きつと、このあと陛下に無理矢理連れて行かれて、ご主人様の目の前で嫌がる妾を無理やりい……ハアハア、んっ………下着替えねば」

どうやらガハルドでもドMの扱いは無理のようだ。

冗談でアレは言っただけど、幸利からはあんまり本気度を感じられなかったなあ……まさかね……

「俺としては、そちらの兎人族の方が気になるがね？そんな髪色の兎人族など見た事がない上に、俺の気当たりにもまるで動じない。その気構え、最近捕まえた玩具を思い起こさせるんだが、そのところどうよ？」

玩具という言葉にシアがピクリと反応したが隣にいる雲がシアの手を握る。

「玩具なんて言われてもね……」

「心当たりがないってか？何なら、後で見えるか？実は、何匹かまだ……いてな、女と子供なんだが、これが中々」

「興味ないね」

ガハルドの言葉ははったりだ。カムを通じて、捕まった者全員を連れ出したことは確認済みである。カマをかけているだけだ。

「ほお。そいつらは、超一流レベルの特殊なショートソードや装備も持っていたんだが、

それでも興味ないか、錬成師……?」

「それで?」

作った本人のハジメも既に興味なさげに返答する。

「……そうかい。ところで、昨日、地下牢から脱獄した奴等がいるんだが、この帝城へ易々と侵入し脱出する、そんな真似が出来るアーティファクトや特殊な魔法は知らないか?」

「知らないし。脱獄されたならそれはきつとザル警備だったんだね」

「……はあ……ならいい。聞きたい事はこれで最後だ……神についてどう思う?」

「ボク等の邪魔をするなら消すだけだ」

「あくもうわかったわかった……可愛げのねえガキだな。外見だけなら綺麗なのによ……」

ガハルドがガリガリと頭を掻きながら悪態をつく。しかし、その表情にはやはり何処か楽しげな表情が浮かんでいる。自分に抗う相手というのが実に好みらしい。言葉の端々に含まれたものから、ハウリアとボク達が関係あるのは察しているだろう。

「まあ、最低限、聞きたいことは聞けた……というより分かったからよしとしよう。ああ、そうだ。今夜、リリアーナ姫の歓迎パーティーを開く。是非、出席してくれ。姫と息子の婚約パーティーも兼ねているからな。真実は異なっても、それを知らないの

なら、『勇者』や『神の使徒』の祝福は外聞がいい。頼んだぞ？形だけの勇者君？」

そう言つてガハルドはこちらをひと睨みしてそのまま退室した。

しかしリリイが婚約か……初めて聞いたけど、ハジメだけ何も反応してなかったのは気になるな……もしかして誰かから聞いてたのかな？

「リリイ、婚約つてどういうことだ！一体、何があつたんだ！」

「それは……たとえば、狂つた神の遊戯でも、魔人族が攻めてくれば戦わざるを得ません。我が国の王が亡くなり、その後継が未だ十歳と若く、国の舵取りが十全でない以上、同盟国との関係強化は必要なことです」

「それが、リリイと皇子の結婚ということなのね？」

「はい。お相手は皇太子様ですね。ずっと以前から皇太子様との婚約の話はありました。事実上の婚約者でしたが、今回のパーティーで正式なものとするのです。魔人の侵攻で揺らいでいる今だからこそ、というわけです」

「王国には？協議が必要ではないの？」

「事後承諾ではありませんが、反対はないでしょう。元々、そういう話だったわけですし、それに、今の王国の実質的なトップは私です。ランデルは未だ形だけですし、お母様も前には出ない人ですから。なので、問題ありません。今は何事も迅速さが必要な時なのです」

「……リリイは、その人の事が好きなのか？」

「好き嫌いの話ではないのです。国同士の繋がりのための結婚ですから。ただ、皇太子様には既に幾人も愛人がいらっしやるので、その方達の機嫌を損ねることにならないか胃の痛いところです。私の立場上、他の皇子との結婚というのは釣り合いが取れませんかから、仕方がないのですが……」

「な、なんで、そんな平然としているんだよ！好きでもない上に、そんな奴と結婚なんて、おかしいだろ！」

「光輝さん達から見れば、そうなのかもしれませんが、私は王族で王女ですから。生まれた時から、これが普通のことです」

「普通って……リリイだって、女の子なんだ。ちゃんと好きになった人と結婚したいんじゃないのか？」

そこで言葉を挟んだのがハジメだった。

「そんなに納得できないなら、君が行動すればいいでしょ」

「南雲？」

「リリイがさつきから言ってるけど、納得するしないの問題じゃないんだよ。政略結婚なんて昔の日本でもあったでしょ。それが当然の世界なんだから、僕達の世界の理屈をこの世界に当てはめるのはやめたら？」

「お前はリリイのこと、何とも思わないのか!？」

「なんでそんなこと聞くの?この件で僕らが口出し出来る余地はないんだ。君が納得できないなら、何か一つでも行動したら?まあそれで僕達の邪魔になるようなら止めるけど」

ハジメがそう言うと天之河はギリツと齒を食いしぼり、悔しそうに拳を握っていた。

その後一言二言交わして別の部屋に別れた。

帝国落ちる

ハジメ side

リリイ達と別れた僕達は別室でパーティでの正装に着替えることとなった。

と言っても大抵は士郎が作った服に着替えたから、ここにある服を着るのは天之河達だけ。

ハウリア達は今夜仕掛ける戦争の下準備をしているが、ちよつと面倒事があつたようだけど問題なく計画は進んでいる。

あとは……リリイの方に動かしている、護衛の小型ロボットの方に意識を移す。

流石に着替えの様子を覗くつもりはないので今は音と、気配感知で護衛している。

ランデルの頼みを断るつもりもないし、これは僕個人が受けた頼みだ。僕一人で果たすつもりでいる。

どうやら着替えがちょうど終わったようだ。カメラ機能をオンにする。

1、2分すると男の気配が近づき、ドアをノックもせず開く。

『ほお、今夜のドレスか……まあまあだな』

『……バイアス様。いきなり淑女の部屋に押し入るといっなのは感心致しませんわ』
どうやら中に入ったのはリリーの婚約相手であるバイアスのようだ。

言葉遣いも荒々しく、帝国の人間だというのがよくわかる。

『ああ？俺は、お前の夫だぞ？何、口答えしてんだ？』

『……』

『おい、お前ら全員出て行け』

バイアスがそう言うと、侍女や近衛騎士達が部屋から慌てるように出て行く。

『ふん、飼いだの躰くらい、しっかりやっておけ』

『……飼いだではありません。大切な臣下ですわ』

『……相変わらず反抗的だな？クク、まだ十にも届かないガキの分際で、いつちよ前に俺を睨んだだけのことはある。あの時からな、いつか俺のものにしてやろうと思っていたんだ』

この位置からだどリリーの表情は見えてもバイアスの表情が見えない。しかし悪い顔をしているのは声だけでもわかる。

そしてリリーにズカズカと歩み寄る。そしてリリーを押し倒し、そのまま彼女の胸を驚掴みした。

は？

落ち着け僕。まだだ……今やれば流石にバレル……

そう自分に言い聞かせて怒りを抑えつつ仕留める隙を伺う。

『っ?! いやあ! 痛っ!』

『それなりに育ってんな。まだまだ足りねえが、それなりに美味そうだ』

『や、やめっ』

乱暴にされてリリイの表情が苦痛に歪む。その表情を見て、ますます興奮したように啜うバイアス。

『いくらでも泣き叫んでいいぞ? この部屋は特殊な仕掛けがしてあるから、外には一切音が漏れない。まあ、仮に飼犬共が入ってきたとしても、皇太子である俺に何が出来るわけでもないからな。何なら、処女を散らすところ、奴等に見てもらおうか? くっ、はははっ』
『どうして……こんな……』

リリイの顔が青褪めた。何をされるのか理解してしまっただろう。それで気丈にバイアスを睨む。

『その眼だ。反抗的なその眼を、苦痛に、絶望に、快楽に染め上げてやりたいのさ。俺はな、自分に盾突く奴を蹴って屈服させるのが何より好きなんだ。必死に足掻いていた奴等が、結局何もできなかつたと頭を垂れて跪く姿を見ることが以上に気持ちいいことなどない。この快感を一度でも味わえば、もう病みつきだ。リリアーナ。初めて会ったと

き、品定めする俺を気丈に睨み返してきた時から、いつか滅茶苦茶にしてやりたいと思っていたんだ』

『あなたという人はっ……』

『なあ、リリアーナ。結婚どころか、婚約パーティーの前に純潔を散らしたお前は、どんな顔でパーティーに出るんだ？ 股の痛みに耐えながら、どんな表情で奴等の前に立つんだ？ ああ、楽しみで仕方がねえよ』

バイアスは押し倒したりリリーのドレスを破り彼女の顔に自身の顔を近づける。このままキスするつもりなのだろう。

彼女は羞恥で顔を真っ赤に染め目を瞑る。そして小さな声で

——助けて……——

と、漏らした。

僕はその言葉を待ってましたと言わんばかりの勢いで、バイアスの頸に着地させ、そのまま電撃で痺れさせる。

『ガアッ……な、なにが……』

そのまま前のめりに倒れかかるので、ロボットの掌からゲル素材でできた撚糸を巻きつけそのまま壁に貼り付ける。

『えっ……えっ……？』

戸惑うリリイを他所に任務を終えた小型ロボットを空間魔法で回収する。

その時、リリイが『ハジメさん……ありがとうございます……』

と言っていたが少しくすぐったい気分になった。

回収したロボットをそのまま宝物庫にしまう。

「ハジメくん？」

「香織？どうしたの？」

「ロボット使ってたみたいだけど……」

「ああ……ちよつとリリイがピンチだったからね……」

僕は先程あったことを簡潔に説明した。

香織の表情がとても嫌そうになっていた。

「そういうことなら私にも手伝わせて欲しかったな」

「僕がランデルから個人的に受けたものだからいいよ」

どうせこのパーティーもハウリアの襲撃でお釈迦になるし。

「そっか……」

そのまま僕はパーティー会場に向かった。

士郎 side

日もすっかり落ちきり、月明かりが地上を照らす時間になる。

そんな中パーティー会場で料理を食べている中、ハウリア達の通信が頭の中に響く。着々と準備が進んでいるようだ。

こちらもパーティーにドレスやスーツを着て参加している。

シアはムーンライト色のミニスカートドレスを纏っており、そのスラリと長く引き締まった美脚を惜しげもなく晒している。

雫は空色の生地にはスパンコールを散りばめたノースリーブのドレスで、晒け出された鎖骨から放たれる色気がとても良い。

恵里はメインは薄紫色で肩袖は白のドレスで、二人とは対照的に露出が少ないが、気品に溢れている。

ザワツと声があったので閉じている目を開くとそこには真つ黒なドレスを着て、事務的な表情をするリリイとにが虫を嘔み潰したような表情をする皇太子だった。

二人が登場したが戸惑いの声が過半数を占めており、どう見てもお祝いの場に立っているようではなかった。

「ん？リリイ何かあったの？」

「香織伝でハジメから聞いたんだけど、その皇太子に犯されかけたんだって」

そう雫が言うので、あの皇太子に対して呆れを感じた。

「ええ……パーティー前に何やってんのあの皇太子」

「さあ？下半身に脳味噌がついてるからじやない？」

随分と辛辣だね恵里……あれかな？あの皇帝の息子だからかな？

そう思いながらパーティー進行を眺める。

挨拶回りも終わり、ダンスが始まる。するとやはりと言うべきか、貴族の男達がこちらに視線を向ける。

それも当然でこちらには美少女、美女が勢揃いだ。お近づきになりたいのが丸わかりだ。

しかし当人達はそれぞれの想い人としか踊ろうとしないので、声をかけても無視されているようだ。

リリイもリリイで皇太子と距離をとりながら器用に踊っていた。

「お兄ちゃん、踊ろっか」

「……そうだね。今は踊るか」

そう言って差し出された恵里の手を取り、踊り始める。周りを見ればハジメは香織と、幸利は優花と踊り、残った女性陣は彼女達で踊っていた。

「お兄ちゃん……楽しいね」

「そうだね……中々出来ない経験だから今はこの時間に感謝だ」

「うん！よろしくね僕達の旦那様」

「任せて」

時折足が絡みそうになるが、瞬光や高い敏捷を生かして誤魔化していく。みてくれよりも楽しく踊れば良いの精神だ。

恵里と踊り終えるとボクは雫の手を取り、恵里はシアの手を取り交代する。

「ねえ士郎さん」

「雫？」

「私ね……こうやってお城で踊ることが小さい頃の夢だったのよ」

「そうなんだ……なら思いっきり楽しもう」

「ええ。貴方と踊れて良かったわ。士郎さんは私達にとつての王子様だもの」

「大袈裟だよ……精々ボクは近衛騎士がお似合だよ」

「でもドラク○の中には近衛騎士が王子様だったりするじゃない」

「あれは出自が特殊だからね」

そう話しながらも踊り、恵里とシアが近づくので再び交代する。

「士郎さん……わたし……こうして貴方と恋人になれて、こんな綺麗な場所で踊れるのがすごい幸せですう……」

「でも今だけじゃなくてこれからだよ」

「はーい」

わかりづらいが不安そうな顔をしていたシアもダンスの間は楽しそうにしていたので、よかった。ここだけ帝国には感謝しないとね。

シアと踊り終え、曲も止まり、ガハルドがスピーチを行う。

帝城にいる帝国民が声を開けると同時に窓ガラスが一気に割られ、明かりが消えた。

ハジメ side

パーティーが始まり、リリイとバイアスが現れた時は少し驚いた。明らかにパーティーの趣旨とかけ離れた漆黒のドレスを着ていたからだ。

リリイはこういうのは内心を悟らせないような人だ。

もうどうでもよくなったのだろう。あんなことがあればそうなってしまいうのも仕方がない。

そのまま挨拶回りになりダンスが始まる。

僕は香織とユエと踊り、その後は料理を食べようと思っていたが、リリイがいつの間にか近くに立っていた。

「ハジメさん。……私と踊っていただけませんか？」

「皇太子は放って置いていいの？」

「ええ。皇太子様も愛人の方と踊っていますし」

「……わかったよ。僕で良ければお相手しますよお姫様」

リリイの手を取り、リズムに合わせ踊る。

「恵里達から聞いていたのですが、上手ですね……」

「先に香織達と踊ってたけど案外上手くいくもんだよ」

リリイは顔を上げて一呼吸置いてから顔を上げる。

「……先程はありがとうございました」

「やっぱりそれ？でも僕以外にもできるよ？」

「それでもあの灰色の稲光は貴方でしょう？」

「君に僕の雷見せたっけ？」

「貴方の持つ武器から放たれていましたから」

ドンナー・シュラークか……

覚えてたんだね。まああんだけぶつ放せば記憶にも残るか。

「でも一時凌ぎにしかならないよ？しかも帝国の筆頭があれじゃね……」

「はつきり言いますね」

「それで色々吹っ切れた結果のドレスがそれなの？」

「似合いませんか？」

「似合ってるよ。でもあの桃色のドレスの方が合ってる。真逆にしたのは当てつけ？」
「ええ、妻を暴行するような夫にはこの程度で十分ですから……それより……やっぱりあのゴーレムを通して見えていたのですね。……私のあられもない姿も……ああ、もうお嫁にいけません」

よよよと態とらしく泣くふりをするリリイ。

「小声とはいええ、滅多なことと言わないでよ……それと皇太子からの視線がすごいんだけど」

「いいじゃないですか。今夜が終われば私は皇太子妃です。今くらい、女の子で居させて下さい。それとも、近いうちに暴行されて、愛人達に苛められる哀れな姫の些細なわがままも聞いてくれないのですか？」

「暴行されて、苛められるのは確定なのか……」

「確定ですよ……」

一度ギョツと僕に抱きつくとき表情を隠しながらポツリと、つい零れ落ちたかのような声音で呟いた。

「……もし……もし、『助けて』と言ったらどうしますか？」

その答えは決まっている。

「助けるよ……なによりもランデルの頼みだしね」

「ランデルの？」

「うん。ハイリヒを出る前日の夜にね。それに僕がどうこうするよりも先に今の帝国は終わるし、皇太子もダメだろうなあ……」

「それは……どういうことで……」

リリイがそう言いかける。

彼女は別のお偉いさんと踊る必要があるので途中で分かれる。

「今度は姫さまを落としましたか？ハジメ」

そう揶揄い気味に幸利は僕の肩に手を置く。

「そんなつもりないけどね……それよりも幸利。君、テイオと踊ってたの意外だったんだけど」

「まあな……色々あつたんだよ……」

「ふうん……」

僕は今ニヤついているだろう。あれだけ雑にあしらっていたテイオと踊っていたんだ。彼の心境に何かあつたんだろう。

「なんだよ……」

「別に？」

ガハルドのスピーチが終わり、貴族達が声を上げると同時に窓が割れて灯りが消え

た。

士郎 side

結論から言えばハウリアと帝国の戦争はハウリア達の勝利で終わった。

暗闇をハウリアは縦横無尽に動き回り、帝国の貴族達を無力化し、皇太子を殺し、帝国を屈服させた。

その時リリイはハジメのゲートキーで安全な場所に彼の隣に移動させているのでそこは安心だ。

そしてガハルドに契約をつけさせることにも成功したのだった。

「ヘルシャーの血を絶やしたくなければ、誓約は違えないことだ」

「わかつている」

「明日には誓約の内容を公表し、少なくとも帝都にいる奴隷は明日中に全て解放しろ」

「明日中だと？ 一体、帝都にどれだけの奴隷がいると思って……」

「やれ」

「くそつたれ！ やりやあいんだろう、やりやあ！」

「解放した奴隷は樹海へ向かわせる。ガハルド。貴様はフェアベルゲンまで同行しろ。そして、長老衆の眼前にて誓約を復唱しろ」

「二人でか？普通に殺されるんじゃないのか？」

「我等が無事に送り返す。貴様が死んでは色々と面倒だろう？」

「はあくわかつたよ。お前等が脱獄したときから何となく嫌な予感はしてたんだ。それが、ここまでいいようにやられるとはな……………なあ、俺に、あるいは帝国に、何か恨みでもあつたのかよ、天野士郎」

暗闇の中にいるボクを睨む。

「そうだね…………元々はそんな気はない。でもハウリアの戦争にはボク個人の気持ちは、すこし関係あるし、なんならあんたに恨みはあるよ」

「マジかよ…………でその恨みは？」

「恵里を口説いたことだよ」

「みみつちいな…………」

「なんか言つた？」

「なんでもねえよ…………」

その後は帝国から亜人族奴隷が解放され、元の居場所に帰ることができたのだった。

ガハルドがフェアベルゲンの長老の前で同じ宣言をしたりと色々あつたが無事に終

えることができた。

PS

フェアベルゲンに連れてきたガハルドを帝国に帰す時に色々イタズラしたので、まともに戻ってないとこだけはここに明記しておく。

帝国にたどり着いたガハルドは自身の姿を鏡で見て叫び声を上げた事はボクの知らないことだ。

樹海の大迷宮の試練

帝国から亜人族奴隷を送り届けて、数日。

霧が晴れるまでの間、各々は自己鍛錬をしていた。

士郎は恵里の身体の調整も兼ねて模擬戦をしている。

「はあああああー！」

ガキン！

恵里の握るデュランダルがボクの干将とぶつかり合う。ギリギリと刃が擦れ合う音は互いの武器に負担がかかる。

だが、デュランダルは折れない剣だ。このままだと折れるのはボクの干将の方が折れてしまうが、それをさせまいと、莫耶で切り返す。

「ふっー！」

次いで振り下ろされるバルムンクを莫耶で受け止める。

さらに銀翼から魔弾が放たれるのでそれを熾天覆う七つの円環を遠隔操作で防ぎ、そのまま回し蹴りで恵里を吹っ飛ばす。

「ガハッ……いー！」

容赦がないかもしれないがそれも言ってられないのだ。

くるりと身を翻して着地をした恵里は剣に魔法を纏わせて再び斬りかかる。

ボクは地面から柱を生やして妨害する。

その柱を恵里は次々切り裂き、ボクのところへ向かってくるのだが、ボクは切られた柱から別の柱を生やし、恵里を挟む。しかし、瞬時にそれをバラバラに銀翼で破壊、そのまま突っ込む。

『天鎖』っ！

生成魔法の応用で破壊された岩から鎖を作り恵里を縛る。

普通ならただの硬い鎖だが、恵里の身体を改造するのに使った素材には神性が含まれていた。

なのでこの鎖はそういったモノに強い捕縛能力が発動する。

吊るされた恵里は剣を手放し、遠隔操作で鎖を切る。そしてそのまま拳で殴りがかかってくる。

その拳を受け止め、掴み地面に叩きつける。

「うぐあつ……」

苦悶の声を漏らすも、腕に足を巻き付ける。ボクは腕を振るい、恵里を投げようとす
るが、恵里はすぐに手足を離して距離を取る。

「『火柱』！」

後ろに下がりながら恵里は炎魔法を放つ。

それを対処しようとして拳を構えようとしたがさらに別の魔法が火柱の後ろから放たれていた。

「『炎浪』！」

拳で対処するのをやめ、干将・莫耶を消して別の武器を取り出す。

月と太陽が描かれた軍配を二つ手に持ち、勢いよく振るう。

「風林火山……『風』！」

竜巻が炎の魔法を飲み込み込み炎の竜巻となり恵里に襲いかかる。

「『深渦』っ……！」

恵里は即座に水の竜巻を放ち相殺しようとして試みる、がしかし炎を消すことには成功したものの、竜巻は相殺しきれずもろに喰らう。

「キヤアアアアアア！」

竜巻が消え、恵里は地面に叩きつけられるかと思ったが、背中の銀翼で身体を覆い、上手く防いだようだ。

とはいえ上級魔法クラスの攻撃を受けたので肩で息をするほど消耗していた。

「……ハアツ……ハアツ……お兄ちゃんそれ、鈴に渡した武器？」

「そうだね。まだ恵里は鈴が使ってたの見たことなかっただろうから、一部能力見せておいた方が良さそうだと思うってね」

「そっか……」

数時間模擬戦をした後、恵里の身体の調整と万が一の備えのために改造を施しているが、どうしても最後の調整が未だに上手くいかない。

やはり変成魔法を習得するしか無さそうだ。

「一先ず今できる最高の調整だよ……」

「ありがとうお兄ちゃん」

「最後のさえ出来れば完璧なのにね……」

「無い物ねだりしても仕方ないよ」

恵里の言う通りだ。

「そうだね。今は目先のことに集中しよう」

そう言っただけでボク達は、食堂に向かう。

先程、時計を確認したが、既に夕食の時間だった。

食堂の扉を開けると出来上がった料理を運ぶ幸利の姿が真っ先に目に入った。

「おう、もう出来てるぞ」

「最近料理当番代わってもらってごめんね」

「別に良いぞ。楽しんで作ってるからな」

そう言つて料理を並べに戻つた。

翌日、フェアベルゲンの霧が晴れて、樹海の奥に進めるようになった。

今回の迷宮探索のメンバーに遠藤くんは含まれていない

最初は彼も参加させようと思つていたが、彼の長所を伸ばすのならば、兎人族の所で鍛えた方が効率が良いと考え、カム達に預けることにした。

一抹の不安があるが、流石にそうならないだろうと思ひ、不安を頭の隅に追いやつた。迷宮前に向かう道中、魔物が襲いかかってくるが、それらの対処は全て天之河達に任せている。

このくらいは余裕で倒してもらわないと困るし、ウォーミングアップも兼ねている。

恵里は単独で魔物を撃破している。

「エリリン……もうチートの存在だね……」

「鈴、僕がチートならお兄ちゃん達はなんなのさ」

「え？バグとか？」

「うわあ……否定しきれない」

「あはは……まあ魔物食べてる時点でもうお察しだよね……」

食つたら死ぬもの食べて生き残った時点でバグだと言うのは理解している。

「みなさーん、着きましたよー」

数十分して漸く、大樹の下にたどり着いた。

「それじゃあ、証を窪みに嵌め込むよ」

ボクは宝物庫に保管してある迷宮攻略の証をそれぞれに対応する窪みに嵌め込む。

「よし、あとは再生魔法を使うだけだね。カム達は離れて」

「了解です、団長。ご武運を」

「先輩！みんな気をつけてくれよ！」

そう言つてカム達は自分達の領地に向かつて行つた。

彼らを見届け、見えなくなつたので、香織が再生魔法を使う。

今までの比ではない光が大樹を包み込み、香織の手が触れている場所から、まるで波紋のように何度も光の波が天辺に向かつて走り始めた。

燦然と輝く大樹は、まるで根から水を汲み取るように光を隅々まで行き渡らせ徐々に瑞々しさを取り戻していく

「あ、葉が……」

シアが、刻々と生命力を取り戻していく大樹にうつとりと見蕩れながら頭上の枝にポツポツと付き始めた葉を指差す。まるで、生命の誕生でも見ているかのような、言葉に

出来ない不可思議な感動を覚えながら見つめるボク達の眼前で、大樹は一気に生い茂り、鮮やかな緑を取り戻した。

少し強めの風が大樹をざわめかせ、辺りに葉鳴りを響かせる。と、次の瞬間、突如、正面の幹が裂けるように左右に分かれ大樹に洞が出来上がった。数十人が優に入れる大きな洞だ。

そこに入るが行き止まりで何もなかった。

「お兄ちゃん……」

「これは多分転移するやつだね……」

そして予想通り、足元に魔法陣が現れる。そのまま光に飲み込まれ視界が真っ白になった。

視界が晴れるとそこは森の中だった。

しかもたった一人である。

(いや、いきなりこれ?)

声を上げようとしたのだが声が出なかった。身体にも違和感を感じたので近くの水辺で自身の姿を見る。

そこに写ったのは大きなカマキリの姿だった。

(うわぁ……これは……ないわ……。皆も同じ事になっているのかな?)

— そう考えながら皆を探すのだが、気配すら感じれない。どうやら技能すら使えなくなっているみたいだ。

この状態で魔物がウヨウヨいる場所を歩かなければならないのがキツイ。

恐らく紡がれた絆の道標というのは、まず姿が変わっても信頼できるかどうかも試されているのだろう。

しばらく歩いていると魔物を見かけたので、ゆっくりと見つからないよう移動すると、ハジメ達を見つけた。

その中にはゴブリンやオーガがいた。おそらく誰かがボクのように変化しているのだろう。

ならば何か見抜く方法があるのだろうか。

そう考えボクはハジメ達の前に姿を現した。

それと同時に天之河がボクに斬りかかろうとしてきたが、恵里が天之河をぶっ飛ばした。

「な、何をするんだ!?!」

「それはこっちのセリフだよ!」

「光輝……このカマキリは士郎さんよ」

「な!?それは本当なのか!」

半信半疑の天之河に証明するためにいくつかのボク達しか知らない質問に答えることで証明した。

(それにしてもよくわかったね三人共)

「お兄ちゃんがどんな姿になっても僕達ならすぐにわかるからね」

(?言いたいことわかるの?)

「はい!わたし達には士郎さんの考えてることならわかるのですう!」

(それは嬉しいな……)

「士郎、これ使って」

そう言つて渡された念話石を身につける。

『あーあー……どう?伝わってる?』

「わかるよお兄ちゃん」

『よかつた』

とりあえずは会話ができるので安心した。

「士郎殿、その鎌は切れたりするのか?」

『切れるね。大木は切れないけど』

「戦いには参加でなさそうだな」

『そうだね。今のボクは役立たずな訳だからよろしくね』

「任せてねお兄ちゃん！」

それはそれとしてそこにいる脳筋そうなのは坂上くんなのはわかるけど、ゴブリンはどっちがどっちなのか気になった。

『ねえ、そのゴブリンはどっちがユエでティオなの？』

「ハジメにくつついてるのがユエで幸利にくつついてるのがティオ」

『なるほど……ボクがいない時何があつたの？』

「えつとね……」

士郎が別のところに飛ばされた同時刻。

ハジメ達はユエ達が偽物だと即座に見抜き、偽物を潰していた。

恵里達も容赦なく士郎の偽物を叩き潰していた。

叩き潰されたそれは赤銅色のスライムになり地面へと吸い込まれていった。

「全くタチが悪い……」

「この先も偽物ばかり出てくるのかな……」

「そう考えると厄介というより、この大迷宮の作者の性格の悪さが出てくるわよ……」

「優花の言う通りだ……仲間との絆を信じて本物を探す……まあ糞神も仲間割れとか好

きそうな奴だから試練としては正しいけどな」

そう言つてしばらく進むと、ユエの姿が現れたのだが、その姿はあられも無い姿だった。それを見たハジメと香織は坂上くと天之河の両目を潰す勢いで目潰しを放った。

「ギヤアアアアアアア!?!」

「やりすぎだ馬鹿!」

スパパーン!

真つ先に宝物庫からハリセンを出して叩いたのは幸利だった。

「ごめん……ユエのあんな姿他の奴に見せたくなかったから……」

「だからつてやりすぎだアホ」

そうして進むと今度はティオのあられも無い姿が現れる。

次は幸利がさつきの2人の顔面にグーパーンをぶちかました。

「幸利……」

「すまん……」

その後現れた士郎の偽物も恵里が魔力砲で消しとばしていた。

「て感じかな?」

『2人は災難だったね』

『いや、先輩、災難でしたよホント……』

「見つかるまで、俺たち目隠しさせられましたからね……」

『まあ何はともあれ無事全員合流できてよかった』

そう言つて先に進む。

行き止まりに到着するとそこにはトレントの魔物がいた。

最初は天之河達が相手をする事になった。

『聖絶・散』！

鈴の出す結界がトレントの攻撃を防ぐ。的確なタイミングで防ぐので被害も攻撃の余波も最小限に抑えられているが、あまりにも数が多すぎる。結界にもヒビが入り始める。

「くっ……攻撃が激しい……！」

『光輝！俺たちが鈴の手を開けさせるぞ！』

「龍太郎!?……わかった！」

『鈴！俺と光輝で攻撃を止めるから、お前は有効打を頼む！その隙に一気にたたみかける！』

坂上と天之河が特攻し、攻撃を受け止める。

僅か数秒だが、その数秒が鈴が攻撃へと転じるに充分な時間だった。

「風林火山……『火』！」

鈴が軍配を振るうと無数の火炎弾がトレントに襲いかかる。流石に迷宮の魔物なだけあって、そう簡単に燃えはしなかったが、同じところや、守りの薄いところに火炎弾を飛ばし、炎上させる。

「よし！今だ光輝！神威を頼む！」

「っ！わかった！」

そう言つて天之河は神威の詠唱を始める。

「風林火山……『山』！」

さらに鈴は追撃として軍配を地面に叩きつけて、地中の鉱物を固めて下から突き上げて攻撃する。

浮いたところに坂上が回り込んで、ダブルスレッジハンマーで地面に叩きつけ、バウンドさせる。

「——みんな準備できた！行くぞ！『神威』！」

天之河の渾身の神威がトレント目掛けて放たれる。防御体制すらまともに取れずにモロに食らったトレントはバラバラと崩れ——去ることはなく次の試練の扉に変化した。

全員が扉の中に入ると再び転移の魔法陣が現れ、別の場所へと移動するのだった。

ピ。

目覚まし時計の音が響く。

ボクはそれを手探りで探し当てて止める。

もう既に朝になっており、雀の鳴き声が聞こえてくる。

「まだ、時間に余裕がある……また寝よ……」

そう思い、再び横になろうとしたところだった。

「土郎くん、二度寝はダメだよ?」

そう言つて二度寝を阻止しようとしたのは、幼馴染で恋人の中村恵里だ。

父さんの友人の娘さんで小さい頃から兄妹のように過ごしてきた仲だ。

のよように?」

「まだ時間あるでしょ……」

「そう言つて遅刻しかけたのはどこの誰かな?」

実際遅刻しかけたことがあったので、何も言えなかった。

「わかったよ……」

そう言つて布団から出て、制服に着替える。

朝食を食べ終え登校する。

「士郎さーん早く行きましよう！」

「今日、阿迦菜先生に用事があるんでしよう？早くしないと時間なくなっちゃうわよ」

玄関の戸を開けてすぐ目の前には恵里と同じく恋人の八重樫雫とシア・ハウリアだ。

しすぎは八重樫道場の娘さんで大きな大会にも出ている屈指の実力者だ。ボクもそこで身体を鍛えているが、彼女には及ばない。

シアは海外からの長期留学でこちらに来ていて、この町に親戚が住んでいるので、ここで暮らしている。

恋人3人なんて非常識だと思うが、ボク達が決断した選択だ。

「今日って何かあったっけ阿迦菜先生以外に……」

「何もありません」

「私も今日は剣道の練習のない日だから、放課後は自由よ」

「ならば、あそこ行かない？最近できたゲームセンター。そこにしかない、ぬいぐるみが取れるクレーンゲームあるからさ」

「恵里、それは私に取って欲しいの？」

「バレたか……まあ僕のお金で取ってもらうからいいでしょ？」

雫は呆れたように恵里を見る。

「しょうがないわね……」

そう話している内に学校へ到着する。

いつも通りハジメ達やクラスメイトと話して授業を受けてそれを繰り返す内に放課後になる。

下校途中幼稚園に寄り、リーニヤを迎えに行く。

親御さんがどちらにも忙しいので、ボク達が迎えに行くことになっている。

「おにーちゃん!」

「おかえりリーニヤ。幼稚園は楽しかった?」

「うん!」

「それは良かったね。このまま帰る?それとも僕達と一緒にゲームセンターに行く?」

「行きたい!」

「こら、恵里。それは流石にダメでしょ」

「まあまあ雫。一度聞いてみよう?というわけで士郎くんお願い」

「いや、雫の言う通り許可もらえないでしょ……まあ聞くけどさ」

「こういう所は甘いのがボクだ。正直、ボクもリーニヤと行きたかったのですが、連絡帳から、リーニヤの父親のを探し、電話をする。幸い今の時間は忙しい時間ではない。」

「もしもしシユロムさん?」

電話がつながり、聞き覚えのある声が聞こえた。

『やあ士郎くん。どうしたのかな?』

「リーニヤがゲームセンターに行きたがってて……」

『士郎くん達がいるなら良いよ』

いつもの優しい声で許可をだすシユロムさん。

「分かりました。お忙しい中すみません」

『リーニヤのことよろしくね。それじゃあ切るよ』

「はい。失礼します」

電話を切る。

「リーニヤ、行っても良いってさ」

「やった!」

両手を上げて喜ぶリーニヤ。とても可愛らしい。

一度それぞれの家に戻り、私服に着替えて、合流する。

ゲームセンターに向かい、クレイゲームで景品を取ったり、音ゲーでハイスコア出したたり、楽しんだ。

家に帰り、恵里と一緒に夕食を食べて風呂に入って、布団に入る。

いつもの幸せな日常に終わりを告げる。

幸せ?

これが？

違う。

こんなのは幸せなんかじゃない。

そう思ったボクは飛び起きる。

それに追付いして恵里も目を覚ます。

「士郎くん？」

不思議そうな顔をこちらに向ける。

ああ……ここは幸せだが違う。ここは——理想だ……ボクが……ボクが望んだ、誰も傷ついていない世界だ。

今の恵里は天野恵里であって中村恵里ではないし、ボクのことを士郎くんなんて呼ばない。ましてやリーニャの両親の声なんて知らない。

「ああ……吐きそうだ……ホントの世界で幸せになりたい……」

こんな理想は糞食らえ

「士郎くん、気持ち悪いの？風邪ひいた？」

「ねえ恵里。今幸せ？」

「うん。幸せだよ」

「そっか……」

即答したことでボクは全身に力を込める。

そしてガラスが砕けるようにボクの体が迷宮に入ってきた時の姿に戻る。

「ごめんね恵里、雫、シア……必ず元の世界で抱きしめるから」

そう言ってボクは全身から魔力を放出した。

3人称 side

「ん……は!？」

辺りを見渡すとそこは夢を見る前に入った巨樹の洞と同じような、されど二回りは大きい場所だった。

周りを見ると既にハジメと香織、ユエが目を覚ましていた。他は琥珀のような状態になっていた。

「おはよう士郎。4番目だね」

「真つ先に起きたのはハジメ？」

「うん、その次に香織とユエだった。4番目の士郎くん？」

「誰が寝坊して○カチユウもらったスパー○サラ人だ。それとくん付けで呼ばないで……今すつごい嫌悪感が……」

「夢でなんかあったのか？」

後ろから声がしたので振り向くといつの間にか目を覚ました幸利が後ろで胡座をかいていた。

「幸利……まあ……うん……あんなのを見た自分が嫌になるよ……誰も死の苦難を乗り越えてない世界なんてさ……」

「おう……そりや目に見えて落ち込むわな……」

「そういう幸利くんはどんな夢見たの？」

「ああ……理想は糞食らえって思ったわ……それと俺が天之河の奴をどれだけ嫌いなのかよくわかったしな……」

幸利が見た夢は、優花と、テイオと暮らして、料理を追求するものだった。その上で自分が何でもできる人だったようだ。

「そういうオメーらはどうだったんだよ」

「僕は香織やユエ達と学生生活してた」

「私はハジメくんと同じだね」

「……私はハジメと香織と一緒に王宮で暮らしてた」

「おー地球組はそうなのか。お姫様はやっぱりそういう夢を見るのか」

そう話している内に雫とシアの琥珀が溶け出し地面に吸い込まれていた。

「2人ともおはよう」

「やっぱり夢ね……あんなの士郎さんじゃないわ……」

「士郎さんは過保護でもあそこまで過保護じゃないですう」

「2人ともどんな夢見たの……」

「士郎さんが王子様で、お姫様になった私達と暮らしてたわ……」

「それ絶対ボクじゃない」

「わたしは士郎さん達があウリア族を守ってくれた夢です……それも追い出される前に。自分の今と過去を否定するような世界だったの」

「シアちゃんはそれで戻ってこれたんだね」

「はい！わたしは後ろでもなく前でもなく隣に立っていたいんですう！」

そして次に優花が目を覚ました。それに続いてテイオも目を覚ました。

「ぬがぁー！ご主人様の折檻はそんなに生温くないわァー！一から出直して来るん

「じゃな！」

「「「「「……………」」」」」」

どんな夢を見たか察してしまおう一同。

「ご主人様よおくだいだいま戻ったのじゃ〜！愛でておくれ〜！」

そう言いながら幸利目掛けてル○ンダイブを決めながら飛び込んでくるティオ。

幸利がはたき落とそうとした時、突然後ろからワイヤーがティオの身体に巻きつき、地面に落ちる。

「おはようみんな」

優花だ。手に持ったワイヤーがティオに巻きついていていた。

そしてとても良い笑顔だったのだが、目の奥は何も笑っていないかった。

「おう、優花おはよう……………」

「ちよつとティオと話があるからアタシ離れるわ」

「お、おう……………あんま時間かけんなよ？」

「わかってるわ」

ズルズルとティオを引きずりながら、少し離れた場所まで歩いていった。

優花 side

アタシはテイオを連れて離れた場所に移動していた。

「優花よ、ここで良さそうじゃぞ」

そう言うテイオ。彼女はアタシが話したいことがわかっていているみたいだ。

「お主は夢で何を見たのじゃ？」

「アタシは地球で料理店の娘だったのよ。そこでアタシと幸利とテイオの3人で店を切り盛りしてたわ」

「ほう……」

「しかも、幸利の奥さんとしてね……」

「それについてお主はどう思ったのじゃ？」

「それは……」

正直言えば悪くないどころかすごい嬉しかった……と言うより、アタシは自分が彼のが好きだとあの夢に理解させられた。

あの時モヤモヤしたのは、テイオが幸利に何度もスキンシップをして嫉妬や自分に正直になれていたことが羨ましかったのだ。

「現実でもそうなれたら良いな思ったわ……」

「ならどうするのじゃ……」

「この迷宮の攻略が終わったらちよつと甘えてみるわ……」

振り向いてもらえるよう、今更だけど、行動しようと思った。

「ならば妾と協力せぬか？」

「協力？」

「うむ。ご主人様は妾達を見る目が少し他と違うのじゃ」

「え？」

「妾の感が間違つてなければじゃが、押せばイケると思うのじゃよ」

ふと、今までのことを振り返つてみた。

地球にいた頃から彼とはかなり距離が近かった。というより彼と一緒にいる、というのが普通、の感覚だった。

あの時から彼が自分の家に来た日から徐々に惹かれてたのだろう。

料理が美味しいと言い、趣味が同じで、それでいて一つのことを追求しようとする姿が。

この世界に来てからも料理への熱意は失われず、むしろ燃え上がっていた。この世界特有の食材に目を光らせていたから。

彼がアタシのことをどう思っているかはわからないけど、好意的に想ってくれているのなら、それに乗っかる手はない。

「そうね。一緒に幸利の奴を墮としましょう？」

「ふふふつ……優花も覚悟が決まったようじゃのう」

「ええ……」

覚悟しなさい幸利。

乙女の本気、見せてやるわ！

3人称 side

優花とテイオが十数分して話し合いから戻ってきた。

「おかえり2人とも」

「話し合いは終わった？」

「ええ。少し悩みをぶちまけたただけだから」

そう言った優花の顔は少し晴れていた。

隣にいるテイオも、満足気な顔をしている。

「しかし、残りの連中は目が覚めねえな……」

2人が話し合っている間に誰も目覚めていない。

「……恵里」

士郎は未だに目覚めぬ義妹が心配だった。

今までの生活を振り返り、彼女の実の父親がどれだけ大きな存在なのかはわかってい

る。

その人が生きている夢を見せられているのなら、目覚めるまで時間がかかってしま
う。

だが士郎は恵里が目を覚ますと信じている。

すると恵里の琥珀が溶け始める。

「んにゆう……ふわあ……」

目をパチクリさせてこちらを見る。

「おはよう、恵里」

「おはよう……しr……お兄ちゃん」

「目が覚めて良かったわ」

「うん……」

「それで恵里さんはどんな夢を見たんですか？」

シアがそう聞くと恵里は俯き少ししてから話し始めた。

「地球でお兄ちゃんと暮らしてる夢だったよ。お父さんも生きててね……」

「やっぱり理想的な夢を見せられてたのね……」

「うん……」

そういう恵里の表情は士郎達からは見えなかった。

数分後に鈴が目を覚まし、その次に龍太郎が目を覚ました。

「鈴！」

「……あれ？ここ迷宮？」

「そうだよ。よかった……目を覚ましてくれて……」

「まあ……あまりにも現実離れた夢だったし……」

そう言つて苦笑いをする。

次いで龍太郎も目を覚ましたのだが、天之河だけが目を覚ますことができなかつた。

このまま放置するのもなんなので、強制的に目を覚まさせた。

「……あ？あれ、香織？雫？ここは？俺は、二人と……」

目を覚ました天之河は辺りを見渡す。すぐに理解したのか、自分だけ失敗したことに悔しそうに拳を握つた。

「悪いけど悔しがつてる暇はないからね」

「……ああ、わかつてる」

次のステージへの魔法陣へと足を踏み入れるのだった。

快樂と反転の試練

士郎 side

転移した先でボク達はそれぞれが偽物ではないか確認をし、この先に何かがあるかわからないので、ハジメが小型ロボットで偵察している。

「そういえば、ヴェアベルトはどんな夢を見たの？」

ボクはヴェアベルトが夢を見たのか聞いてなかったので今のうちに聞くことにした。

「む？言わなくともわかるだろうが、全種族が同じ場所で争うことなく生活している世界だったな」

「あー、やっぱりそうなんだね」

「うむ。まあそれのお陰で自分が成し遂げたい世界の形が分かってきてよかったが」

そう言った彼の瞳に固い決意が満ちていた。

「なあハジメ、小型ロボットは何送り出したんだ？」

「えっとね。クノイ〇とナ〇ーとマッド〇ツクだね」

「全部サイバー〇ンス製じゃん…」

「しょうがないじゃん、こういったことに使えるんだから」

あの会社、タイニーオービットより後発だけど技術は全部変態だからなあ。リニア止めたり地下鉄止めたり、姿消すLB〇作ってるのやばいし。

そんなこと考えているうちに小型ロボットが戻ってきた。

戻ってきたそれは全てハジメの宝物庫に収納される。

「ハジメくんどうだった？」

「特に何もなかったね。これは僕達が先に進まないで仕掛けが動かない仕組みなんだと思う」

「だよなあ……当然っちゃ当然か……」

仕掛けでも分かれればよかったが、流星にそう甘くはないか。

そう考えて先に進む。

本当はここら一帯を焼き尽くしたかったが、そんなこととして試練失敗になったら困る。

迷宮の奥へと足を進めているとポツポツと液体が降ってきた。

「ん？雨？」

「おかしいな。迷宮内で雨？」

「鈴、ユエ、念の為結界」

ボクは2人に結界を張るよう指示する。

2人が結界を張ると上から粘性のある乳白色の液体が大量に降り出してきた。

「こりや厄介だな。気配探知に引っかからないって……」

ヴェアベルトが苦言を漏らす。

すると地面から何かが迫ってくる気配を感じ取る。

「足元注意！」

ボクがそう言うと同時に下からも乳白色の液体が飛び出してくる。

「オラア！」

坂上くんが反射的にそれをぶん殴った。

結果、弾け飛び、それが彼の反対側にいた、恵里、鈴、シア、ティオに降りかかる。

特にティオに対して。

「坂上くん……かかったんだけど……」

「悪い……」

「うえ〜ベトベトする〜」

「後で着替えたいですう……」

3人とも嫌そうな顔を作る。

恵里はそれぞれに付着したスライムを分解で消している。

そんな中ティオだけは平然としていた。

さらに現れるスライム。

それぞれは近づけさせないよう魔法などの遠距離攻撃でスライムを吹き飛ばしているが、段々とめんどくさくなってきた。

一応サンプルとして瓶に詰め込んでいる。

「とにかく焼き尽くした方が良さそうだな……」

そう言った途端に、全員が炎属性の攻撃をし始めた。

この時のボクの発言に後悔することになったのは数分後だった。

無尽蔵に現れるスライムをどうにか封殺しようと、ハジメと共に天井や床を全て封印した。

それが正解だったのかそれからはスライムが現れることはなかった。

「これでもうスライムが出てくることは……ユエ?」

ハジメが言葉を途切る。

「はあはあ……ハジメ、何か変……はあはあ、すごく……ハジメが欲しい」

「は? いや、こんな状況下で何を言ってる……ユエ? 一体どうしたの?」

ユエの異変に戸惑い始めたその時、不意に後ろからシアが倒れ込んだ。

「シア? ……って熱ッ?!? どうしたの!?!」

「わかんないです……身体が熱くて……土郎さんが……欲しくて欲しくてたまらない

んですう……」

そう言うシアの瞳は潤み、吐息も熱く、ボクの腕を強く抱きしめて太ももに挟み、スリスリと擦り始めた。

こんなところで突然発情し始めるなんて異常だ。

「この部屋に何か仕掛けが……？」

しかしハジメがこの部屋の仕掛けなどは全て確認していた筈だ。ということは、あのスライムに何かある。

そう思い、先程詰め込んだスライムを解析眼で調べる。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

媚毒スライム

能力：発情化

触れた生物を強制的に発情させる。

気化させると範囲が広がる。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

「うわあ……さつきのスライムかあ……」

先程、燃やしたせいなのだろう。甘い香りが鼻につく。気化しているスライムはこうして効果を発動させるのか。

燃やしたのは悪手だったか……

周りを見ると、鈴が悶え、坂上くんが興奮を抑える為に腕を嘔んだりしている。既に舌は嘔んでいるのか、口からは血が垂れている。だが、呻き声が漏れている。天之河も聖剣で素振りをしていた。

ボクらは毒耐性があるので、効果を無効化していた。

とはいえ、毒耐性が発動しているという感覚が謎にある。

「なあティオ……」

「なんじゃご主人様」

「お前、一番浴びてただろ」

「確かに、妾の体も粘液の効果が發揮されておる。事実、体を駆け巡る快樂に邪魔されて魔法がまともに使えんからの。じゃがのう、舐めてくれるなよ、ご主人様よ。妾を誰だと思っておる」

「ティオ……」

「妾はご主人様の下僕ぞ！この程度の快樂、ご主人様から与えられる痛みという名の快樂に比べれば生温いにも程があるわ!!妾をご主人様以外に尻を振る軽い女と思うてくれるなよお!!」

「そうっすか」

眼をクワツ!!と見開き、拳を天に掲げてそう力説する駄竜に、幸利は汚物を見るような眼差しを向けた。スライム粘液の快楽すら平然とやり過ごしたテイオが、その視線にゾクゾクと体を震わせる。

「流石ですねクラルスさん」

「敬語じゃと!?!」

あ、幸利が敬語になり始めた。

他人扱いにさらに悶え始めるテイオから視線を外して、シアの様子を見る。

「大丈夫?」

「ううっ……かなりキツイですけど、大丈夫です……」

そう言うが、とても辛そうだ。

「……土郎さん、やっぱり抱きしめて貰えませんか? 欲を言うなら恵里さんや雫さんも……っ」

そう言うシアのお願いをボク達は聞き入れ、4人で抱きしめ合った。

しばらくするとシアの身体から熱がスツと消えて、元に戻ったようだ。

「耐え切ったみたいですよ……」

「それじゃあこの試練もクリアかな?」

シアの熱が引いたと同時に毒耐性の効果も消えたので、この試練はクリアとして判断

していいと思う。

「……とりあえず、媚毒効果をモロに受けてた人は着替えようか。簡易的な更衣室は作ったから」

そう言うのと毒耐性のないシア達が着替えるために更衣室に入る。

「この先の試練はどうなんだろうな……」

「ふむ……紡がれた絆……また絆を試すようなことをするのだろうか……いかんせん浮かばんな……」

ヴェアベルトが考える仕草をとるが、浮かばないのか、すぐに武器の手入れに入った。「……」主人様よ。そろそろ妾のことも構って欲しいのじゃが」

その時、幸利の背後からおずおずとした声が掛かる。

変態レベルが天元突破していたが故に、一番スライムの粘液を浴びていたにもかかわらず媚毒効果をあつさり克服していたティオだった。

一足先に着替え終えていたようだ。

幸利はチラリとティオを振り返ると、一言、

「ん？まだいたんですか、クラルスさん」

「ツ！？ご主人様よ。まだ、それをやるのかの？その、確かに、新鮮で気持ちよくはあつたが、やっぱりちよつと……そろそろ、いつもの話し方に戻ってくれてもいいんじゃないよ

「呼び名も、いつも通りでいいんじゃないよ？」

「何を言ってるんです？いつも通りだし、クラルスさんはクラルスさんでしょう？ああ、それ以上、近寄らないで下さい」

「ツ!!!ご主人様よ！悪かったのじゃ！ちよつと、調子に乗りすぎたのじゃ！反省するから元に戻って欲しいのじゃ！」

「……」

泣きべそ掻きながら幸利の足元にカサカサと這い寄って来るティオに、幸利はハイライトの消えた眼差しを向けている。それに少し頬を染めるティオだったが、流石に他人行儀な態度と苗字呼びは堪え難いのか、暴走する様子は見えない。

すると優花が幸利の肩に手を置く。

「流石に可哀想だからやめてあげて……」

しかし幸利は口元を釣り上げる。それを見たティオがビクツと体を震わせた。もしや、ずっとこのままでは？とでも想像したのか……ますます泣きそうな表情になった。

「うう、ご主人様よ……お願いじゃ……ティオと呼んでおくれ」

そう言うとき幸利はため息を零しながら、ティオの頭を撫でた。

「ご、ご主人様……？」

「つたく……お前のその変態っぷりは俺が原因だからな……だが流石に自重してくれよ

「？」

そう言つて撫でるのをやめた。

更衣室から全員が出てきたので、先に進む。

再び転移し、警戒しながら進んでいく。するとカサカサと聞きたくない音が聞こえ始めた。

「なんだこの背筋から鳥肌の立つ音は……」

「うう……嫌な音ですう……」

特に耳のいいシアは嫌悪感を表に出しまくっている。

「僕確認してくるね……」

そう言つてハジメが下を覗き込む。

中々見えないのか、目を凝らして見ようとしている。

突然飛び退いて尻餅はつかなかったが、勢いよく後ろに下がる。

「ハジメ君!？」

「……っ!」

「……ハジメ、どうしたの?」

その表情は青ざめていた。

「悪魔がいる……」

その一言に全員が察した。

「Gかあ……」

黒い悪魔を刺激しないよう、ゆっくりと進んでいく。

「細かくカサカサ聞こえて気持ち悪いですう……」

そう言ったシアは必死にウサミミをペタリと垂らして塞いでいる。頭を抱えるように両手で抑えつつ、しゃがみこんで涙目になっていた。

そんなに距離はないはずなのに、ゆっくりと進んでいるせいなのかすごく時間がかかっている気がする。

そうして、ようやく広い場所に全員がたどり着いたその時だった。

ウゝウゝウゝウゝウゝウゝウゝウゝウゝウゝウゝ!!!

大量の羽ばたき音が響き始めた。

そしてその音の発生源を見てしまった。

悪魔がここに来た

「嫌アアアアアア!!」

「ウワアアアアアアアア!」

「俺のそばに近寄るなあアアアアアアアア!」

「優花っちなんとかして！」

「無理よ！こんな大量なのは！」

「ならトツシー！」

「断る！鈴！お前の結界で圧殺しろお！」

阿鼻叫喚である。

悪魔を押し付け合う光景。

そう言いながらも各自遠距離攻撃で悪魔を殺す。

いやまああれは無理だ。

「なんで、お兄ちゃんは平気そうなの!？」

「いや、ね？流石にあそこまで多いとき、逆にどうでも良くなる」

虚無？違うか。なんて言うんだっけこういうの。諦めてるって感じかな？

「ならないわよ!？」

「雫さんの言う通りですよお!？」

「まあやつぱり無理なものは無理だよ・」

なんか最後の方声が裏返った。

こちらの攻撃を放つても、怖気を震う羽音を響かせた黒い津波はまるで衰えを感じさせずに迫ってくる。海そのものに攻撃しても無意味なのと同じだ。ゴキブリの津波は

「ユエ、重ねて防御お願い」

「……ん、絶対破らせない!」

ユエが鳥肌の浮いた腕を掲げ鈴の『聖絶』に重ねるように自分の『聖絶』を展開した。障壁の外はカサカサと這い回るゴキブリで真っ黒に染まっている。

「何だか、この迷宮に来てからこんなのはつまりですね……」

「今までの大迷宮以上に厄介極まりないの〜ふむ、やはり、他の大迷宮の攻略を前提にしておるだけに、あるいは難易度も数段上に設定されておるのかもしれないな」

「テイオさん? 冷静に分析してないで何とかしないと!」

「恵里、大丈夫よ、問題ないわ。あれは唯の黒ごまだもの黒ごまプリンとか黒ごまふりかけとか、私、結構好きよ。特に黒ごまふりかけしようゆ風味は美味だわ。ご飯がとてもすすむの」

「雫! どうしよう、雫が既に壊れかけてるう!!」

しばらくするといきなり、Gが一斉に引いたのだ。何事かと訝しむボク達の前でGの波は空中で球体を作ると、それを中心に囲むように円環を作り出した。

巨大な円環の外周に更に円環が重ねられ、次には無数の縦列飛行するGが円環のあちこちに並び始める。次第に幾何学的な模様が空中に作り出されるその光景を見て、不味いと感じ、剣を投影して射出するが、それを守るように防がれる。

「おいおいおい、まさか……魔法陣を形成してるのか？」

「チツ……メル！火炎ブレス！」

「キュアアアアアアアアアア！」

各々がそれを阻止するために行動するが、悉く防がれる。

波になって襲いかかるGを殲滅し終わると、既に魔法陣を形成し、さらに発動待機状態になっていた。

「ぐっ……遅かったか……」

魔法陣の中心にGの塊があり、それが形を変える。ムカデのように胴長で尾には針が付いており、足も十本ある。一番前の足などは刃物のように鋭利な指が付いていた。顔面には黒一色の眼がついており、顎は鋭く巨大だ。そして、背中には三対六枚の半透明の羽が付いていた。おそらくボス級の魔物なのだろう。

「士郎！足元！」

ハジメが声を上げる。

下を見るとそこにはもう一つ魔法陣が作られていた。

「しまった！」

「これが狙いか！」

そのまま魔法が発動。

光が全員を包むが、何も襲いかかる様子はない。

光が収まり、自身の身体を確認したが、特に異常はないように見られた。

「特に何も無いね……」

「そうだね恵里」

そう言つて彼女達の方を見て最初に抱いた感情が――

――
嫌悪だった。

3 人称 s i d e

士郎と恵里が互いを見合わせて抱いた感情が嫌悪に変わったのはすぐにわかった。先程足元で発動したものだろう。

周りを見ても嫌悪しか抱かなかった。ただ天之河だけには嫌悪は抱かなかった。そしてボスGには愛おしささえ感じてしまう。

「……お前達を殺したくなる」

「僕も同じ事考えてるのが嫌だけど殺したい」

出てくる言葉は暴言である。

「何言ってるんですか。わたしがみなさんをぶつ殺すんですよ？」

2人の後ろにシアが星砕きを肩に担いで立っていた。

「何言ってるのよ、私がアンタらを斬り殺すのよ」

雫はその隣で刀が構えている。

「なるほど反転化か……」

士郎は発動した魔法の正体にすぐ気づいた。

周りでは違いを睨み合いながらもGを撃破していた。

気づいたと同時に苛立ちすら覚える。

今までの思い出には違和感がないのに、恵里達に嫌悪を抱かされる。

それを弄ばされたことに苛立ちが怒りへと変わる。

「あいつをこの手で殺してやりたい！」

「そうだね。あいつを殺したら次はお前の番だよ」

「名案なのが腹立ちますけど、賛成です」

「さっさと終わらせるわよ」

そう言つて既にハジメ達が攻撃している、ボスGに自分達も攻撃し始める。

『『火焰無双』』

『八重樫流『流水之太刀』』

『『偽・螺旋剣』！』

「うりやア!!」

各々の技や武器を振るい、ボスGやGを攻撃していく。

全てが当たつたのにも関わらず未だに絶命した気配がない。ボスGは相当耐久と生命力があるのだろう。

煙が晴れると、どうやら再生していたのだろう。何処そのナメクジ星人のように再生していた。

「感情に左右されて軍人が務まるか……メル、やれ」

「そんなことで元の世界に帰れるわけねえからな……オラア！」

ヴェアベルトの指示に従い、メルリアンは火炎弾を放つ。幸利は杖に魔力を込めてG

を殲滅する。

攻撃を繰り返していくうちに段々とそれぞれが反転していた感情が元に戻っていた。

「……ようやく、反転化が治ったかな？」

「お兄ちゃん、大丈夫だよ。嫌悪感は無くなって、逆にあのGに嫌悪感しか抱かないから」

「……本当に女性解放者は性格が悪いわね」

「本当ですう……ミレデイですらただウザいだけでしたし」

するとハジメの隣にいたユエから膨大な魔力を感知し、何かを始めるのを感じとり、ボスGから距離をとり、射線を開ける。

「……『神罰之焰』」

そう呟くと同時に、ボスGが蒼く輝く焰に焼き尽くされていった。

しばらくして焰が消えるとそこには何もなくなっていた。

士郎の気配感知やハジメの魔眼鏡にも反応はなかった。

「気配及び、魔力反応なし。ボスGの消滅を確認。戦闘終了だよみんな。お疲れ様」

「ふい……二度と経験したくねえわこれ」

「同感、次やる時は破壊の限りを尽くしてでも止めるわ」

「ふむ……洗脳もしてくるのじゃろうな」

「うむ……フリードの豹変具合も納得だ」

「幸利と優花の2人の表情はかなり黒くなり、怪しい雰囲気を漂わせていた。テイオは

「ハジメ達は試練の方大丈夫そうだね」

「まあ、あの程度で壊されたりなんてしないよ」

「その通りだよハジメくん」

「……ん。問題ない」

そう言った3人に土郎は良かったと安堵した。

「これは私の部下達も踏破することができる可能性がある……」

「鈴達はどうだった？」

そう恵里が鈴達に聞いた。

「うーん……戻ったのかなあ……いつの間にかボスGが嫌になってたかな？」

「俺もだ。……おう、俺もだ」

「坂上……？」

鈴はいつの間にか。龍太郎は戻ったには戻ったが。と言った感じだ。

しかし1人だけ浮かない顔をしていた。

「……………」

天之河だ。

自分1人だけが試練をクリアしていないことに、何か暗いナニカを想像していた。戦後休憩を終えると、天井付近の大樹の枝が『メキメキ』と軋ませながら伸びていく。広場まで伸び切ると、階段へと変化しており、登れと言わんばかりに上へと続いていた。

階段を登り切ると、木の幹に洞窟ができておりその中に転移陣があった。

昇華する魔法

現れた転移陣を踏む。

陣は問題なく起動して、ボクらは眩い光に包まれた。

光が収まり目の前に広がっていたのは——庭園だった。

空気は澄み渡り、体育館程度の大きさのその場所にはチヨロチヨロと流れるいくつもの可愛らしい水路と芝生のような地面、あちこちから突き出すように伸びている比較的小さな樹々、小さな白亜の建物があつた。

そして一番奥には円形の水路で囲まれた小さな島と、その中央に一際大きな樹、その樹の枝が絡みついている石版があつた。

テイオがスタスタと歩いて庭園の淵に行き眼下を覗き込む。

「ご主人様よ。どうやらここは大樹の天辺付近みたいじゃぞ?」

「だが、樹海にこんな高い物なんてなかったはずだ……」

幸利が言ったことはその通りだ。

フェルニルを使い、樹海を訪れた時もそんなものは何もなかった。

「おそらく、空間魔法と魂魄魔法の合わせ技だろう。我々が認識できぬようになってい

るから、なくても不思議に思わなかったのだ」

ヴェアベルトの説明に納得した。

魂魄魔法は魂だけではなく……いや、魂のように不定形で普通は目視できないような物に干渉する魔法なのか。

「あー、闇系統にはそんなのあったな……全く使わねーから想像つかんかったわ」

「いや、闇術師。専門じゃないのかよ」

「龍太郎くん。今までトツシーは闇の塊で魔物を爆殺してたんだから今更だよ」

「使い方がすごいわね……まだアタシ達はそこまで習熟してないから出来ないわ……」

足を進めていくとそこには水路で囲まれた円状の小さな島と、その奥に石版があった。

アーチを渡ると突然、石版が輝き、若草色の魔力が流れ込む。

「水路自体が魔法陣なんだね……」

「陣が描かれるならなんだっていいからね。水路が魔法陣になっても驚かないよ」

そしていつも通り、神代魔法を詰め込まれる。後ろでは2名ほど、呻き声を上げていた。

詰め込みが終わると同時に石版に絡みついた樹がうねり始める。

何事かと身構える。

樹は人の顔を作り上げ、ググツとせり上がり、肩から上だけの女性へと形を変える。変化が終わり閉じていた目を開ける。

「まずは、おめでとうと言わせてもらおうわ。よく、数々の大迷宮とわたくしの、このリューティリス・ハルツィナの用意した試練を乗り越えたわね。あなた達に最大限の敬意を表し、ひどく辛い試練を仕掛けたことを深くお詫び致します。しかし、これもまた必要なこと。他の大迷宮を乗り越えて来たあなた方ならば、神々と我々の関係、過去の悲劇、そして今、起きている何か……全て把握しているはずね？それ故に、揺るがぬ絆と、揺らぎ得る心というものを知って欲しかったのよ。きつと、ここまでたどり着いたあなた達なら、心の強さというものも、逆に、弱さというものも理解したと思う。それが、この先の未来で、あなた達の力になることを切に願っているわ。あなた達が、どんな目的の為に、私の魔法——『昇華魔法』を得ようとしたのかは分からない。どう使おうとも、あなた達の自由だわ。でも、どうか力に溺れることだけはなく、そうなりそうな時は絆の標に縋りなさい。わたくしの与えた神代の魔法『昇華』は、全ての『力』を最低でも一段進化させる。与えた知識の通りに。けれど、この魔法の真価は、もつと別のところにあるわ。昇華魔法は、文字通り全ての『力』を昇華させる。それは神代魔法も例外じゃない。生成魔法、重力魔法、魂魄魔法、変成魔法、空間魔法、再生魔法……これらは理の根幹に作用する強大な力。その全てが一段進化し、更に組み合わせること

で神代魔法を超える魔法に至る。神の御業とも言うべき魔法——『概念魔法』に概念魔法——そのままの意味よ。あらゆる概念をこの世に顕現・作用させる魔法。ただし、この魔法は全ての神代魔法を手に入れたとしても容易に修得することは出来ないわ。なぜなら、概念魔法は理論ではなく極限の意志によって生み出されるものだから。わたくし達、解放者のメンバーでも七人掛りで何十年かけても、たった三つの概念魔法しか生み出すことが出来なかつたわ。もつとも、わたくし達にはそれで十分ではあつただけれど……。その内の一つをあなた達に。名を『導越の羅針盤』——込められた概念は『望んだ場所を指し示す』よ。どこでも、何にでも、望めばその場所へと導いてくれるわ。それが隠されたものでもあつても、あるいは——別の世界であつても。全ての神代魔法を手に入れ、そこに確かな意志があるのなら、あなた達はどこにでも行ける。自由な意志のもと、あなた達の進む未来に幸多からんことを祈っているわ」

リユーテイリスの長い話が終わり、話の最中に現れた台座に置かれている懐中時計——導越の羅針盤をハジメが手に取る。

「ユエ……一応聞くね。昇華魔法と羅針盤を使って空間魔法で世界は越えられる…?」

ユエは導越の羅針盤を使い必死にその可能性を探る。刻み込まれた知識と、間違いなく現代において最高最強の魔法使いとしての知識をフル活用する

「……………いめんやいこ」

「そっか……」

昇華しただけの空間魔法には世界を越える力がなかった。それができれば解放者達もエヒトの所にすぐ向かうことができたのだろう。

「まああわよくばって感じだから」

「うん。帰り道の切符が手に入っただけでも大儲けだよ。ユエちゃんがそんな顔しなくていいよ」

「……ん」

すると庭園の一角に転移の為であろう魔法陣が現れた。

「あの……天野先輩……概念魔法が使えれば……」

「まあ帰れるね。ひとまず全員連れて帰るよ。制限がなければだけど」

「そ、そうか……」

そう言つて天之河は安心したような顔になる。

「とりあえずここを出て、少しゆっくりしましょう」

「そうだな……あのG軍団は軽くトラウマになるわ……二度と見たくねえ……」

「うん……あれは人間が見ていい光景じゃない……恵里達に甘えたいよ」

「僕も香織とユエの2人に癒されたい」

「ふふふ……たつぷり癒やしてあげるからねハジメくん」

「……ん、いっぱいシテあげる」

「いいよ。いつも甘えてるから僕もお兄ちゃんを甘やかしたいし」

「わたしも、膝枕とか色々しますよ！その先だつて！」

「……そうね。私も甘やかしてあげるわ」

「ご主人様よ妾が甘やかすのじゃ」

「アタシも甘やかしてあげるわ」

そんな甘い会話をしながら、ボクらは大樹の迷宮を出るのだった。

暗いナニカを抱える2人に気づくこともなく……

最後の大迷宮と神

雪山に向かうまで

三人称 幸利 side

昇華魔法を手に入れた土郎達は氷雪迷宮に向かう前に休憩を取ることにした。

ハルツィナ樹海の迷宮を攻略し、迷宮を出て数日たったの夜のことだった。

「ハア……」

幸利はフェルニルの甲板のため息を溢した。

迷宮を出てから、テイオのスキンシップが増えたばかりか、優花までもが自身にスキンシップを取るようになってきたことに悩んでいた。

更に言うなら、『付き合っ』と言われた。

どう返事すれば良いか分からず、『少し待ってくれ』と言って、逃げ出してしまった。「いや……アイツらが嫌いじゃねーし……かと言ってなあ……」

幸利自身、彼女達のこととは好きだ。

優花は地球にいた頃から特に仲の良い女子だ。一緒に買い物に行ったり、ウエステリ

アが休みの日は台所を借りて、一緒に料理研究をした。

テイオは自分自身、雑に扱つてる自覚はある。そんな自分を主人と言い、側にいて、未熟な所を歳上らしく修正してくれる。

2人はこんな幸利を好きだと言った。

既に士郎やハジメはハーレムを形成しているので2人と付き合うことは今更なのだろう。

「付き合つたとしても、俺がやっていけるのかなんだよなあ……」

そう愚痴ると、誰かが近づいてくる気配を感じ取った。

「……なんだ、先客がいたのかよ」

「坂上……」

龍太郎だった。

「……俺もそうだが、お前もどうした、こんな所で？」

「……」

幸利は答えなかった。否、答えることが出来なかった。

「まあなんとなく予想はつくぜ。迷宮関連だろ？」

その通りだ。

「ああ……」

「園部もテイオさんもお前にくつついてたからな……流石にわかる」
「だよなあ……」

そう言いながら幸利は顔を手で覆う。

「ま、俺も似たような事でここに来たからな」

「? そうなのか。意外だな」

「脳筋のお前が、そんなこと言うなんてな」

幸利は笑う。そんな反応された龍太郎は不満そうに半目で幸利を見る。

「……で? どうすんだお前は。嫌いじゃねえなら付き合うのが丸いと思うけどな。お前なら上手くやれると思うし」

「そう……だな……覚悟が決まらなかっただけだ。ありがとな坂上」

「おう。なら俺の話も聞いてくれよ」

「良いぜ……だが、似たような理由ってどう言うことだ?」

「……そのなんだ、鈴のやつがな、気になっちまって」

そう言った龍太郎の悩みを聞いた幸利は驚き、目を見開いた。

「お前から恋愛相談が来るとは思わなかったぞ……」

「俺だってこうなるなんて思っても見なかったさ……いつか好きな奴が出来るとは思ってたけどよ……まさか今とは思わなかったぜ……」

頬を染め、恥ずかしそうに頬をかく龍太郎。

「お前と違つてよお……俺はお前と違つてアイツから明確な好意を向けられてないからな……」

「……そうだな。まあ坂上の場合には気長に待ちます待つしかないだろ」

「そうだな……今は気にしてもしやーねえか。清水、お前は頑張れよ」

そう言つて龍太郎は幸利の背中を軽く小突く。

「ああ……ありがとな龍太郎」

幸利は軽く返事をして、甲板から降りる。

「おかえり幸利」

「戻つたかご主人」

寝室に入ると、部屋から出た時と変わらず2人はベッドの上に座つていた。

「ただいま。それでさっきの返事なんだが……」

緊張で喉が張り付くような感じになる。次の言葉が出てこない。一言言うだけなのに。

そんな自分を2人は穏やかな表情で待ち続ける。

背中を押してくれた龍太郎の拳がまだ背中に残る。それに突き動かされたように幸

利は2人を抱きしめて倒れ込む。

「きゃっ……!?!」

「ほえ……?」

「こんな俺だが……よろしく頼む……」

そう言った幸利を2人は抱きしめ返した。

「ええ、こつちこそよろしくね」

「ふふふ……ご主人よ、妾達はどこまでもついていくのじゃ」

そう言われた幸利はそのまま2人を抱きしめて眠るのだった。

因みにそういうことはしませんでした。

三人称士郎 side

「はふう……」

気の抜けた息をシアが漏らす。彼女の隣では雫と恵里が横になって、スヤスヤと寝息を漏らしている。

久々の休暇にタレ切っているようだ。丸々休んだのはエリセンまでだったのもあり、

3人共リラックスしている。

「みなさん、この3日間思いっきり休みましたね士郎さん」

「そりやここまで休みなしだったからね。ぶっ続けで迷宮攻略すればこうもなるさ」
そう言つて士郎はシアの頭を撫でる。

シアは気持ち良さそうな声を出してされるがままに撫でられる。

「士郎さんこそ、ちゃんと休んでますか？」

「うぐっ……」

そう言われ士郎は言葉に詰まる。

彼女言う通り、ここ数日は全く休んでおらず、恵里の身体の調整に付きつきりだったのでまともに休んでいた日はなかった。

ヴェアベルトにも協力してもらっているとは言え、偶にである。

「ほら、士郎さん。横になってください！いつもはわたし達が甘やかされてますが、今日
はわたしが甘やかしてあげます！」

ガバツと身体を起こしたシアは士郎に膝枕をして、頭を撫でる。

「ちよ、シア？」

「ふふん。これでもわたしは一族の年下の子の面倒だつて見てたんですよ？これくらい
できます」

そう言いながら撫でるシアの手つきは優しいものだ。

「それにしても士郎さんの髪つて綺麗ですね……触り心地もいいですし、嫉妬しちゃい

ますう……」

「手入れなんてしてないけどね……多分、ユエと同じで、『完全なる形』のお陰だよ」

「ああ、ユエさんも綺麗でしたね」

「それにボクと違ってちゃんと手入れしているだろうから触り心地はもつといいだろうね。けど……」

途中で言葉を区切り、士郎はシアの髪に触れる。

「ボクは3人の方が好きだよ……」

そう言つて、コトリと寝てしまった。

「えへへ……士郎さん……」

そのままシアも横になって眠りにつくのだった。

短くもしっかりとした休みを取った士郎達は次の目的地、最後の迷宮、シユネー雪原の氷雪洞窟に向かう。

するとヴェアベルトが口を開いた。

「士郎殿。すまないがここから別行動を取らせてくれないだろうか」

「突然……でもないか」

ヴェアベルトは既に氷雪洞窟の神代魔法を習得している。行く意味もないので別行

動を取る方が理に適っている。

「それでどこに行くの？」

「仲間のところに向かおうと思っている」

「場所に目星は……つてそういえばオルクスでカトレアさんに渡してた紙……」

「うむ。それを辿れば仲間に出会える。それに魔族——フリードの奴めが皆の妨害をしない訳がない。それに対抗する為に、人数は多い方がいい」

ヴェアベルトが別行動を取ることに反対はなかった。話はまだ続いた。

「ただ、一つ言わせて貰いたいことがある。人間族の勇者……天之河と言ったな」

「ああ……俺がどうしたんだ」

「キツイ事を言うが、お前は次の迷宮。達成することは不可能に近いと言わざるを得ない」

「な……」

ヴェアベルトから天之河へ暗に『行くことを諦めろ』と言った。

それに納得出来ず反発した。

「どうしてだ……」

「今までの行動や士郎殿達への態度を見て、無理だと判断したまでだ。オルクス迷宮での事を忘れたわけではあるまい」

「っ……」

「普通ならば反省したり、謝ったりするだろう。だが、ハイリヒ王国の救援を終えて、説明をした後、お前はなにをした？ 苛立ちをぶつけたただけだろう。こちらの感情すら無視してな。それに恵里殿がキレたのも当然だ」

立て続けに攻め続けられ、反論すら出来ず、ただただ拳を固く握るだけだった。

「それでも行くと言うのなら私は止めはせんがな」

そう言つてメルリアンを連れてフェルニルの甲板に向かうのだった。

そしてそのまま飛び立つヴェアベルトを見送る。

「で、どうするの？」

「俺は……俺は次こそは達成してみせる！ だから次の迷宮にも行くんだ！」

そう言つた天之河の瞳には焦りが見えた。

「そう言うと思つたぜ光輝……俺も手エ貸すから頑張るぞ」

「龍太郎……」

「あんまり気乗りしないけど、龍太郎くんが手伝うなら鈴も少しだけ手伝つてあげる」

「鈴……」

天之河は少し嬉しそうな顔になり、更にやる気を出すのだった

「それじゃあこのまま冰雪洞窟に向かうよ」

ハジメはフェルニルの操作に集中し始めた。

氷雪洞窟

士郎 side

「うーん、見渡す限り、雲海。このまま飛び込んでモフモフしたくなる気分」

「触ろうとしても触れないのがもどかしいよホント」

「ヴェアベルトからも聞いたが、常に曇天だと空からだとか全くわかんねえなこれ……」

「雲がなくても一面雪景色で余計わからなかったわね……」

「羅針盤がなかったら、見つからなくて彷徨うところでしたねえ……」

ヴェアベルトから聞いた情報通り一面真っ白で鈴が一度、風林火山で吹き飛ばしたのだが地上も雪で覆われており、全くわからなかった。

渓谷にあるのでそれを探しているが、中々見つからない。

羅針盤を頼りに一行は空を進んでいく。

その効力は全員が信用している。なんせ説明をすることはできないが、地球の場所を感じ取ることができたのだから。

「ヴェアベルトが持っていた紙もこれに似たような物なのかもね……」

「確か……仲間の居場所に戻ろうとするから場所がわかるんだっけ」

ヴェアベルトがオルクス迷宮でカトレアに渡した魂の紙の効果を出す。

魂の紙

大元の紙に戻ろうとする性質を持つ。

|||||

たったこれだけの能力で仲間を引き合わせることができる。

ヴェアベルトの部下に降霊術の得意な者がいたのでできたらしい。

そうこうしている内に目的地着いたのか、ハジメがフェルニルを止め、高度を下げていく。

数分で地面にたどり着く。

「ここからは徒歩だね」

外を見れば吹雪が猛烈に荒れ狂い、フェルニルの表面を凍らし、視界を塞いでいく。

「それじゃあ防寒アーティファクト配るよ」

そう言つてボクは首から下げのお守りのような物を配る。全員に行き渡つたのを確認すると外に出る。

フェルニルは宝物庫にしまう。

防寒アーティファクトを使つても寒さを感じることに恐ろしさを覚える。

全員が寒さに凍える中――

「わあ、これが雪ですかあ……シヤクシヤクしてるですうー！ふわっふわですうー！」

そんな中、一人テンションだだ上がりのシア。フードを被ることもなく、それどころか前もきちんと閉めずに全身で吹雪を受け止めると、足を踏み鳴らしたり、手で掬ったりしながら存分に人生初の雪を楽しんでいる。

「シア、あまりはしゃいだら……」「これはもう、ダイブするしかないですよお！」ちよつと!？」

そう言つて雪がこんもり積もった所にダイブするシア。

ボク達は雪から現れるシアを見ることはなかった。

「あああああああゝゝゝ」

そのままクレバスに呑み込まれていったのだ。

「あいつ……」

幸利は呆れ果てた声を漏らす。

「ひいひいひい、シアシアゝゝゝゝ！」

「まったく落ち着きがないんだから……」

そう言いながら雫が飛び降りる。

「なんて言うか、末っ子感がすごいよねえシアつて……」

恵里がそれに続いて翼を広げてゆっくり降りる。

「なんでそんなに落ち着いているんだよ……」

「龍太郎……俺達がおかしいのか？」

この状況についていけない2名。

「シアの耐久力はテイオや士郎の次に高いんだから慌てる必要ないよ。僕達もさつさと行かないと」

そう言つてハジメは香織とユエを抱えて飛び降りる。

「んじゃ……いてきまーす」

「フアラオかな……？」

そう言われながらボクも飛び降りる。

「う、うくくくつ！エリリン！」

「もう、鈴つてば……よしよし」

半泣き状態の鈴とそれを慰める恵里。

ボクが飛び降りた後、テイオに投げ入れられたらしく、落ちている途中で、恵里に助けられたらしい。

「鈴ちゃん。プルプル震えてかわいい……」

「香織……」

ハジメが呆れたような声を漏らしてる……

その時、谷底の壁の向こうから『ドゴオ！ドゴオ！』と壁が砕ける音と「うりやああああ!!」という雄叫びが聞こえてくる。

そして目の前の壁が砕け散るとそこから、「ふう〜」と息を漏らしながら星砕きを担いだシアが現れた。

「いやあく参りました。狡猾な罠でしたね。飛び込んだ矢先に谷底へ真つ逆さまに落ちるなん「シア〜〜〜?」いたたたたた！」

呑気に現れたシアの頬をお仕置きの為に引つ張る。

「まだ迷宮に来たばかりなのにこんなことしてる場合じゃないでしょ」

「はい……しゅみません……」

「お仕置きとしてこのままムニユムニユします」

〜少年ムニユムニユ中だお〜

「それじゃあ行こうか。ユエ、結界お願い」

ボクがユエに頼もうとすると、後ろから、鈴が声を上げた。

「それは鈴にやらせて。ユエさんはこの先の為にも温存してて。『聖絶・界』！」

鈴を中心に結界が張られ、全員を中に余裕で覆える大きさまで広がる。

聖絶・散と消費魔力は変わらないが、受け止める散と違い、こちらは受け流すようなものである。

「……………ん、悪くない」

ユエのお墨付きを貰えたようだ。

昇華魔法で進化した、結界魔法はそれほどまでにすごいようだ。

ボクはそう言ったものを（熾天覆う七つの円環は盾なので違う）使わないので、そこから辺は少しわからない。

そうして進んでいくと、二等辺三角形の縦割れが見えた。

羅針盤からもここが氷雪洞窟だとわかる。

「さて、最終確認。装備品及び、荷物に不備はない？」

全員首を縦に振る。

「よし、それじゃあ迷宮攻略開始だ！」

洞窟内に入り、周囲を警戒し、大地感知の技能も使い、不意打ちも警戒していると、段々と何か大きなものが近づいてくるのがわかった。隣にいるシアのウサミミもピコピコ動かしている。

「土郎さん……………！」

「うん、なんか来てる」

奥から現れたのは――

「「「ギギギギギイ!!」」」

全身が白い体毛で覆われ、灰色の顔の人型の魔物が現れた。

「ビツクフツトか?」

「イエティ……とは違うわね」

「雪の中定番のUMAが出てくるなんて流石異世界……」

ボクが武器を投影しようとすると、天之河達が前に出る。

「(こ)は俺達にやらせてくれ」

「おんぶに抱っこじゃ失敗しちまうかもしれないからね……」

「……どうぞで」

ボクは敢えて天之河達に任せることにした。

『『聖絶・捕』!からの『聖絶・刺』!』

片方の風林火山で脚を掴む結界を出し、もう片方で複数体を結界で串刺しにして動きを止める。

『『獄炎拳』!オラオラア!』

坂上くんは小手から黒みがかった炎を出し、

『天翔閃・雷陣』！』

雷を纏った剣光を放つ。

ビックフットは身動き一つ取ることすら出来ずに、首を刎ねられ、頭を潰され絶命した。

「訓練の成果は出てる……か」

「む？」主人様よ……何をしたのじゃ？」

「魔力操作の練習に付き合っただけだ」

どうやらボクの知らないところで幸利が手ほどきをしていたようだ。

樹海の時よりもレベルアップしているのがよくわかる。

「お疲れ様。さ、進むよ」

軽く労いの言葉をかけて歩みを進めるのだった。

Icing Biohazard

士郎side

鏡のように磨かれた氷の壁が続くこの迷宮はさながら「ミラーハウス」のようだ。

小学生の頃に遊園地のアトラクションで恵里が駆け出して壁に頭をぶつけて半泣きになったのを思い出す。

「お兄ちゃん？変なこと考えてないよね？」

「なんも考えてないよ……」

相変わらず感の鋭い義妹様だこと……

「しっかし、よく魔族の連中はここをクリアしたな……」

「そうね……アタシ達みたいに便利アーティファクトもないのに」

あまりの寒さに恵里が試しに結界の外に放った水魔法は、出た瞬間に凍りつく。おまけにチラつく雪に触れれば、凍傷を負わせる。

「龍太郎結界の外に出るなって……」

「すまん。またやつちまった……」

簡易的な回復魔法を天之河が使う。全属性適正があるのだからできるに越したこと

はないとのこと、天之河には殆どの魔法を頭に詰め込ませた。

「水魔法なんてここじゃ使い物にならないよ……」

「……おまけに炎魔法も発動を阻害される。でも、私達には関係ない」

「それにここに来る時には相当、防寒具を着込んで来たのじゃろうな……妾にはこの寒さは堪えるのじゃ……」

幸利にピツタリくつつくテイオは他の人よりも防寒具を着込んでいる。

竜——というよりも変温動物に近い生態なのかもしれない。

しばらく進んでいくと、氷壁の中に沢山の死体が見え始めた。

「防寒アーティファクトがなかったら僕達も彼等と同じ末路を辿ってたのかもね……」

「死体だらけだね……」

「ああはなりたくねえな……俺なんかこんな目に遭ったら氷れる美女じゃなくて筋肉達磨だぞおい」

「龍太郎くん……w」

眠るよう目を閉じたまま氷の壁の中に埋まっている男の姿があった。まるで、疲れて壁に背を預けながら座り込み、そのまま凍てついてしまったかのようだ。外傷一つ見受けられないので、寒さのせいで意識が飛び、そのまま……ということなのだろう。

「土郎さん、あの死体おかしくないですか？」

「まあ、変に綺麗に埋まつてるね……」

「はい。まるで座り込んでいた場所まで氷の壁がせり出てきたか、座ったままの状態
壁の中に取り込まれたみたいなの……」

「まるで標本ね……」

雫の言う通り、標本——透明なガラスケースに入れられた、博物館に展示されている
旧人類の再現模型のようだ。

「何かされても困るし、念の為砕いておくか……」

そう言いながらボクは偽・螺旋剣を投影し狙撃する。ハジメもドンナー・シユラーク
で破壊していく。

ゴガガガガガガガッ!!

偽・螺旋剣は大きな音を立てて飛んでいき周囲を抉るように真っ直ぐ飛び、最後には
爆散する。

「うわあ……お兄ちゃんやりすぎじゃないこれ？」

少し魔力を込めただけでこれである。全力で放つたらどうなるか分かったもんじや
ない。扱いには充分気をつけねば。

そう考えながら先に進んでいく。

「……またよ」

「おいおい、えらく数が増えてんぞ……」

「多分、ヴェアベルト達が攻略した後にゾロゾロ来たんだろうね。殆どが軍服だよ」

氷壁の中に囚われた魔人族の服装から考察する。中には個人的に挑んだ者もいたのだから私服の防寒具の者もいた。それでも十数人なのだが。

「ふむ。攻略情報があれば行けると踏んだのじゃろうが……やはり、そう簡単にはいかなかったようじゃのう。他のルートのことも考えると、どれだけの者が挑んだのやら」
「でも、国を挙げて挑んだのなら、ヴェアベルトさん達以外にも攻略した人がいる可能性もあるわけだよね……また魔物の軍団が再編成されて……つてことも」

王国の心配をする香織。

「流石にそれは直ぐにはないと思うわ、香織。ハジメのヒュベリオンに警戒して、来ないのと、内通者の可能性は徹底的に潰したし、大結界だつて修復した、兵士達の警戒心も高いのだから」

「そう……だね……雫ちゃん」

それでも不安なもの不安なのだろう。

「……安心してくれ、香織。力を手に入れて狂った神を倒し、人間も魔人も皆、俺が救つて見せる。ここに残つてリリアーナ達も俺が守る。全ての神代魔法を手に入れば、い

「ずれ自力で帰れるからな。俺は、誰も見捨てない」

「……光輝くん」

「実に勇者らしい言葉だが、余りにも軽く聞こえてしまう。ヴェアベルトと同じ事を言っているのに、言葉の重みと世界への理解度が違いすぎる。」

「更に言えば、善意だけでなくナニカ別のモノも混ざっているようにも感じる。」

「まあリイとランドルには防衛兵器でも渡すよ。例えば、ヒュベリオンとか、大陸間弾道ミサイルとか、高速軌道型戦車とか、慣性と重力を無視した戦闘機とか……」

「南雲……国の為っていうのはわかるが……プレゼントするのにそれは流石にないだろ……俺でもわかるぞ？」

「そうだぞ……この世界のパワーバランスの崩れんぞ……」

「知らないよ。僕が個人的に渡すんだから、パワーバランスもクソもない。死んだり侵略されるよりかはマシだよ」

「ンンンンンンンンンンンンまさきに暴論！」

「と何処その陰陽師が言いそうだ。」

「すると、大地感知に気配が引つかかる。しかも四方からだ。」

「士郎さん……っ！」

「うん。全員周囲警戒！四方から気配！」

全員が戦闘体制を取り、襲撃に備える。

暗がりから現れたのは、先程から目にしてた氷漬けにされていた、死体の軍隊だった。

「なるほど……こうして防衛手段と共に試練に組み込んでいく訳か」

「なにせよ、元人だろうと関係ないよ」

「暴れるとするか……」

幸利の言葉を皮切りに戦闘が始まる。

ゾンビが雄叫びを上げて襲い掛かる。

「い、嫌ア！来ないでえ！聖絶・爆散！」

リアルバイオにパニックになった鈴がバリアバーストの散弾をゾンビに向けて放った。

恵里は銀翼の羽を雫は斬撃、シアは星砕きでゾンビを葬り去る。

しかし粉碎したはずのゾンビは氷を使って再生し始める。

「んだこりゃ？」

「再生……とはまた違うね」

「修復に近いな……ミレデイのこのゴーレムみたいなもんか」

「それに魔石がないからどっかで操ってる本体か何かあるみたい」

「それじゃあ一気に突破するから……偽・螺旋剣射出！」

ボクは偽・螺旋剣で一気に道を広げる。何処にいるかは大地感知である程度捕捉している。

偽・螺旋剣で開けた道を全力で進み、後続をハジメが銃撃で粉碎していく。

「ギアアアアアアアア！」

「手！手だけ追ってきてるよ！」

「ああ〜なんかエルデンの指虫だったかに似てんな」

「トツシー!? 思い出さないであれなんとかかしてえ！」

「腕え!? なんてえそんなことするノオ!?」

「士郎さん！助けてデスウ！シツポ！シツポ触られましたア！」

粉碎された死体の一部カサカサとついてくる。樹海でのGの件のせいで余計に悲鳴が上がる。

「う〜む、若いのう。ただの魔物にああまで騒げるとは……」

「……テイオ、ババくさい」

「ふお!?! ひ、酷い言い草じゃ。まあ、実際、年上じゃから、つつい微笑ましく思っつまうことはあるが……ユエもあるじゃろう?」

「……ない。私は永遠の十七歳」

「あれ？ユエって確か二十歳越えてから幽閉されたんじゃ……」

ハジメ、それはアウトだよ……

ハジメに、ユエの名状しがたい眼差しが突き刺さる。溢れでるフロストゾンビを歯牙にも掛けず爆炎に包むハジメだったが、危機感が背筋を駆け抜けたため一瞬で折れた。

「……ユエは永遠の十七歳、間違いない」

「……ん。ハジメと同じ年」

「尻に敷かれてんなおい……」

「妾はご主人様の尻に敷かれないのう」

「後で踏んでやるから今は戦いに集中しろ……」

「ふふふ、言質取ったのじゃ」

羅針盤で大元の所まで走り続けていると、ドーム状の広場に出る。

ゾンビ達を動かしている魔石の場所はここだと羅針盤も示している。

「……この何処にか……」

「お兄ちゃん上！」

恵里の声に釣られて上を見ると、そこには透き通るような氷でできた大鷲が次々と現れた。

すぐさまボクは銃剣・干将・莫耶を取り出して迎撃する。

「ハジメは魔石を！」

「今狙ってる！」

既にハジメはシユラーゲンを取り出して魔石に狙いを定めていた。彼の両隣りでは香織とユエがその邪魔をさせないように、魔法と銃撃で大鷲を破壊していく。

ハジメはシユラーゲンの引き金を引く。そのまま灰色の稲妻を纏った弾丸は真っ直ぐ魔石へと向かう——がしかし、

「かわされた！」

氷壁の中にある魔石が突如動き出して弾丸をかわしたのだ。

「オアシスのスライムと同じみたいね……」

「つーことはこの部屋全部あいつの武器であり防具か。お前ら、不意打ちに気いつけろ」
幸利の言葉通り壁から狼が生み出される。大鷲と同じように全身が氷でできている。

更にゾンビ達もこちらに食い付かんと呻き声を上げて大口を開けている。

多少の撃ち漏らしはあれど、ゾンビの数はみるみる減っていく。

「しつこいぞこいつら……」

「龍太郎、ヤケになるなよ……」

「わかつてらあ……」

すると氷壁の奥の奥からピキピキと音を立ててナニカがこちらに向かつて来ている。目の前の氷壁が魔石の周囲に集まると、そこから巨大な亀が生み出された。

その甲羅は剣山のような氷柱が突き立っており、甲羅から伸びた足は鋭い爪が足下にヒビを入れる。

「なるほど……まずこれが第一の試練ね」

「ボクの偽・螺旋剣を連射すれば、余裕だろうけど……」

ボクは後ろで狼やゾンビを相手にしている、天之河達を見る。

「ん？ならなんでやらないんですか？」

「それじゃあ、アイツらの試練にならないからだよシア」

「なるほどです」

「私がいまに念話で後ろに下がるよう伝えるわ」

「ありがと、雫」

そう納得したシアは後ろに大ジャンプする。それに続いてボクも後ろに移動する。

「天之河。あの亀は君らで討伐してね」

「え？」

「え？、じゃないよ。君らがやしないと試練にならないからね？雑魚はこつちが受け持つ。亀に集中すればいいよ」

「あ、ああ……わかりました……龍太郎！鈴！手を貸してくれ！あのデカイ亀をやっつける！」

「おう！」

「すぐやられないですよ！」

「大丈夫だ！今の俺達ならやれる！」

そう言つて聖剣を構える天之河。

「傷のことは私が回復するから気にしないでいいよ」

後ろで発動待機済みの香織が銃撃でゾンビや狼、大鷲を迎撃しながら伝える。

「香織……助かる！」

どうやら、心配する必要がないようだ。

「大丈夫そうだね」

「ボクらは目の前の雑魚を一掃するとしますか」

そう言つて、ボクは空間魔法と重力魔法の合わせた魔法、『呑空』どんくう（フィーアンと戦つた際に炎を空間に閉じ込めたような時に使つた『圧空』あつくうと同じようなものだが似て非なるものである）を使い、一纏めに圧縮して塵にする魔法。

それを複数展開して天之河達の邪魔をさせないように魔物を塵にしていく。

そうこうするうちに巨大な亀は天之河の一撃で葬り去つたようだ。

こっちも魔物も殲滅し終えたところだった。

「お疲れ様。少し休んだら進むよ」

そう言っつて、身体に付着した氷の破片を払い落とす。

すると天之河が心配そうな顔をしていた。

「??……ああ、ボクらも結構魔物倒したし、試練突破は大丈夫だと思うよ」

「そ、そうか……それならいいんだ」

そう言っつてボクらは通路の先に進んで行き、待ち受けていたのは眼下に広がる、アホのように長い迷路だった。

「うわぁ……」

ボクはげんなりした声を漏らした。

迷路って天国と地獄思い出すよね。

眼下に広がる迷路を見てげんなりした声を出してしまっただが、恐らく全員から同じことを考えているだろう。

「めんどくせえ……」

「幸利、考えないようにしてたんだから言わないでよ……」

「悪い……」

ボクは壁を調べる。

まず、軽く叩く。次に解析眼で調べる。

クソ硬い。おまけに壊しても無駄らしい。試しに思いきり壁を殴る。

ドゴオ！

「お兄ちゃん!?!」

やべつ。突然殴ったから驚かせてしまった。

殴った所は凹みヒビが入ったもののすぐに修復され、何事もなかったように直ってしまった。

「ふーむ。偽・螺旋剣でも無理だねこれ」

「士郎さん……調べるなら一言声をかけてからにして欲しかったわ」

「ごめんね。ボクも殴った後に気づいた」

「心臓に悪いよ……」

ハジメは手に持つ羅針盤を見てゴールを探す。

「どうハジメくん？」

「見つかったよ。ホントこれ便利だね……そりゃミレデイも使わせない訳だ」

羅針盤があればミレデイの所まで一直線である。使わせないのも納得だ。

「てかよ、上から行けば良くね？」

そう言つて坂上くんが飛ぶのでそれを阻止する為にボクは鎖を巻きつけて回収する。

「うおっ!?!せ、先輩!?!」

「坂上くん。そう簡単に進めるわけじゃないよ?」

ボクは鎖をつけた剣を飛ばす。すると、鎖ごと消える。

「え?」

「ほら、何処かに飛ばされて碌な目に遭わないよ」

「ウツス……」

坂上くんが反省したのを見てボク達は歩みを進める。

どんなに入り組んでいたり幾つもの別れ道があつても羅針盤がゴールを指し示すの

で、迷うことなく歩く。

「次、左。その後は右だね」

ハジメの指示に従ってしばらく進んで行くと、それぞれの気配探知に反応があったのか、立ち止まる。

氷でできた鬼のような魔物が現れた。がしかし、

ズバツ！ドパン！ゴギイ！グシヤア……

一瞬で処理される。

その後はトラップや魔物の襲撃が続いた。

「ハジメ、どのくらい進んだのかしら？」

「うーん、迷路だから直線距離は当てにならないよ？一応、入り口からは2キロだね」

「そろそろ休憩したほうが良さそうだな……俺らはともかく天之河達はな……」

「そうだね……適当な場所見つけたら休憩にしよう」

「「賛成」」

更に歩くと両開きの扉がある突き当たりに出くわした。

近くまでより見上げた巨大な扉は、氷だけで作られているとは思えないほど荘厳で美麗だった。茨と薔薇のような花の意匠が細やかに彫られており、四つほど大きな円形の穴が空いている。

「随分とまあ綺麗な裝飾が施された扉だな」

「オスカーの扉とはまた違った感じね」

「そういえば、オスカーとヴァンドゥルは犬猿の仲だったっけ」

「機能が芸術性かで争つてたりしてたりしてな」

「……ミレディに聞けばよかった」

そんなどうでもいいことを話しながら、休憩の準備を始める。ついでに扉も調べる。扉には四つの窪みがあったので、何か嵌め込む物があるのだろう。

宝物庫から、天幕を取り出す。その中には床暖房付きの絨毯、支柱それぞれを結ぶように結界と冷気を遮断する機能が施されているので、実質、室内にいるのと変わらないという優れたものだ。大迷宮内で靴を脱ぐなんて有り得ないので土足で入ることになるのだけど、そこはマイスターハジメ。抜かりはない。部屋の絨毯からコタツの中まで全て『再生魔法』が組み込まれた鉱石の欠片が裏地に貼り付けられており、常時浄化してくれる。それは絨毯に触れている対象にも及び、疲労回復や汚れの浄化機能まで付いている。

「ふわあ、絨毯がふわふわだよ。しかもあつたかい……」

「壁なんてないのに雪も風も入って来ない。結界か……室内と変わらないんだな」

「いやあ、マジで快適じゃねえか！流石、南雲だなあ。物作りに隙がねえ」

そう言っつて、炬燵の中に入っつていく。

既にボクは炬燵に入っつている。膝上に恵里、両隣に雫とシアが座っつている。

「回収はクロスビツトに任せて休憩だ」

炬燵であつたまつてゐる間に回収が終われれば、すぐに進める。

「ご主人様よ……なんじゃこれは……天国じゃぞ……」

「早速テイオが没落したな……」

「仕方ないわよ」

「お兄ちゃん……あつたかいね……」

「シア、気をつけなさい。これは魔物よ……二度と極上の温もりから離れたくなくなる、

呪いがかけられるわ」

「しゅみませんしずくさん……すでにとりこですう……」

既に恋人達は炬燵の魔力に囚われつているようだ。回収が終わつたら出なくてはならないので、少し不安である。

ボクは3人を抱きしめて瞼を閉じた。

少し眠ろう……それくらいは大丈夫なはず……

人の温もりと、炬燵の温もりに包まれてそのまま夢の中に墮ちていつた。

しばらくして、優花特製の鍋を食べながら、ほわほわしている。

「はい、お兄ちゃん。あーん」

「あーむ」

恵里が差し出した、鶏肉を食べる。

「美味しい？」

「美味しい」

「士郎さん。あーん」

「士郎さん、わたしもあーん」

雫からはキノコを、シアからは、野菜を食べさせられる。

うむ、美味しい。

「ほら、3人とも」

ボクは3人にも食べさせる。

幸せそうに頬張る彼女達を見てボクは更にホワホワする。

膨らんでいる頬をついついぶにぶにしてしまう。柔らかそうなほっぺが悪いのでボクは一切悪くない。

ハジメ達も食べさせあっていて、桃色空間を作り出していた。ボクもそれに負けない

ようイチャつくことにする。

「幸利達はというと調理しているの、そこまで大きくイチャついている訳ではないものの、味見の際は食べさせあっていた。」

「ある程度具が減ったらご飯を投入して更に卵を投下、卵雑炊にして食べる。」

「幸利……わかつてるじゃねえか……鍋の締めと言えば麺だが、雑炊……これに限るぜ」「俺が忘れるとでも思ったか龍太郎？」

「いや？むしろ期待してたぜ？それと餅は入れたか？」

「当たり前だろう？」

「クッククッククック……」

不敵な笑みを浮かべてグータツチする幸利と坂上くん。

「なんか最近あの二人、仲良くなったなあ……休憩期間になんかあったのかな？」

「そう思いながら恋人3人を抱きしめて再び眠りに入るのだった。」

「因みに魔物が時折襲って来たけど、自動防御能力で爆散させていました。ハジメに感謝謝またry」

「休憩を終えて、ハジメが休憩中に手に入れた宝珠と普通に手に入れた宝珠を扉に嵌め込む。」

扉は開き次の試練へとボク達を迎え入れる。

「サクサク行つてなんか末恐ろしいな……」

「そうね……」

「しかもこの長い通路。不安を煽るのお……」

無駄に長く曲がり道や別れ道がなく、ずっと真っ直ぐだ。横の氷壁は今までの通路の壁よりも鏡のように磨かれており、それに映るボク達は合わせ鏡のように無数に映る。音も反響しなんだか吸い込まれていきそうだ。

しばらく進んで行くと、突然、天之河が立ち止まり、辺りをキョロキョロと見回した。
「どうした光輝？」

「龍太郎……何か聞こえなかったか？」

「いや……俺には何も……先輩？」

「ボクも聞こえてないよ……シアは？」

この中で一番聴力の高いシアに聞くも彼女も聞こえてないないようで、首を横に振る。

「一応、みんな気をつけて。もしかしたら個別に語りかけてる可能性もある」

そう言つて更に進む。分岐を迷うことなく進むと、再び天之河が立ち止まる。

「っ!? まだだ! やっぱり気のせいじゃない! また聞こえた!」

「光輝、落ち着け！」

また聞こえたようだ。

坂上くんと鈴が困惑したような眼差しを向ける。

「嘘じゃない！今度ははつきり聞こえたじゃないか！『このままでいいのか？』って！」

「いや、光輝くん。鈴には何も聞こえなかったよ？」

「くそっ！誰だっ！どこにいる！コソコソしてないで姿を見せたらどうだっ!!」

「光輝、落ち着けて！」

『自分だけ』という状況に不安を掻き立てられたようで、彼は虚空に向かって怒声を上げる。

「シア」

「いえ、わたしにも全く……」

今回もシアにも聞こえなかったようだ。

「……ハジメ。魔力反応は？」

「ないよ。ゾンビの時もそうだったけど、この迷宮の氷壁はどうも魔力反応を隠蔽する能力でもあるみたいだ。あまり魔眼石はあてにならない」

「ふむ。大迷宮のプレッシャーにでも負けて精神を病んでいる可能性もあるが……それにしては唐突すぎるのう。何らかの干渉を受けていると考えるのが妥当じゃろう」

「でも、シアの耳でも聞こえない上に、ハジメくんも感知できないなら防ぎようがないね」

今も声の主を探そうと必死に周囲を見渡す天之河に声をかける。

「天之河、一旦落ち着いて」

「天野先輩。本当なんだ。確かに、俺は……」

「わかってるよ。君の気のせいで片付けるつもりはない」

「えっ?」

「なんらかの干渉を受けてる訳だよ。ここは心の試練なんだから、そういうった試練だつてあるはず。むしろ真つ先に報告してくれただけありがたいよ」

「ここにいる全員も、声が聞こえるようになるってことだね……」

「そうなるわね……何か聞こえたら、内容含めて報告した方が良さそうね」

「……まだだ。しかも聞き覚えがある……?」

どうやら、誰かの声を真似ているようだ。

こういうのは聞こえないよりも聞こえた方がいい。解決糸口を掴むには実際に体感もしくは見るのが一番だ。

「つ……お兄ちゃん。僕も聞こえた女の声だよ。『嘘つき……』って」

「恵里もか……でもなんで嘘つきなんだ?」

「士郎さん……私も女の声で……『卑怯者……』卑怯者で何が悪いのかしらね」

「チツ……俺もだ。男の声で『抑えるな……』だよ。しかし誰の声だ……？」

「鈴も聞こえた……『目を背けるの？』女の人の声だよ」

「俺もだ……『それでいいのか？』だ。男の声だ」

「それにしても抽象的で、間接的だね」

「みんな聞き覚えがあつた？」

その問いに全員が首を縦に振る。

自分も早く聞こえないと困つたな……。恵里も雫も不安そうだ。

そして遂にボクにも聞こえてくる。

——お前には何も守れない。

——他者の理想で生きてるお前は何も得ることはない。

——欲張りで傲慢だ。

「『これ自分の声だ』」

ハジメに幸利も気づいたようだ。

「だとすると、この声言ってることは……」

「……あるいは、己の心の声……かもしれないの。色々と嫌な記憶が蘇つて来るのじゃ」

「……ですねえ。心の中を土足で踏み荒らされているみたいで凄く気持ち悪いです」

優花が言い渋った事をティオが引き継いで推測を述べ、それに同意するシア。

「なんで先輩達は影響をそんなに受けてないんだ？」

「気にしても仕方ないし、先に進まないで解決出来なさそうだからね」

どんな声が聞こえたか聞かれたので話す。

ハジメは『人殺しが普通の生活なんて出来ると思っているのか？』とか『化け物に居場所があるわけないだろう？』ユエは『また裏切られる』シアは『また、自分の所為で失いますよ？』とティオは『受け入れられることなど有りはせん』、香織は『触れさせたくない。、そうでしょう？』優花は『いつか捨てられる』だそうだ。

「士郎さん達は凶太いので効かないのはわかりました。でもユエさんは……」

「……ん。大丈夫。もう叔父様は私を捨てた訳でも裏切った訳でもない。ハジメと香織が裏切ったりしない。オルクスで充分わかった」

そう言い切るユエ。嬉しそうな表情をハジメと香織が作り、そのまま抱きつく。

「なんでそんなに天野先輩達は平然としてられるんだ……この世界の人々を簡単に切り捨てられるくらい帰りがっている先輩達が、帰っても居場所がないと突きつけられて、どうして平静でいられるんだ！」

「居場所なんざ、自分で作るだけだ。あるないじゃねえんだよ」

「欲は結局は繰り返す。だから僕は一つ一つプロセスが組んで解決していくしかない。

ゲームのプログラムだつてそうだよ」

「2人に言いたい事、言われちゃったけど、迷う暇があるなら先に進む方が良い。辛い事を先送りにするより今やるだけだよ。過去も未来も嫌なら消去法で今が一番。その今すら嫌なら、それを乗り越えて次の今に行く。今はすぐに過ぎて次の今がめくるめくる来るのだからね」

そう自分が信じる事を第一に進んで行く。

少し広い所に出て小休憩を取る。

「これで幾分かはマシになったか？」

幸利は闇魔法と魂魄魔法を使い精神の安定化を狙っている。

「サンキューな幸利。少しはマシになったぜ」

「鈴も少し体が軽くなったよ……」

そう、暗い顔が少し明るくなっている。

が、効果の薄い人もいる。

「ああ。ありがとう、清水。楽になったよ」

天之河は薄らと微笑んで礼を述べるものの、その言葉とは裏腹に声音には重さが含まれている。表情にも、どこことなく影が差しているようだ。

「なら良い。それより、とつとここを抜けたからな……ハジメ、後どんくらいだ？」
「後、1キロくらいだね。そろそろ一気に進もう」

そう言って、重い腰を上げて先に進む準備を軽く済ませる。
すると突然、天之河が叫び声を上げる。

「……壁に、壁に映った俺が笑ったんだ。俺は笑ってないのに……まるで別の誰かみたい……」

「光輝、見間違いないじゃないのね？」

雫は、天之河の言葉に息を呑むと真剣な表情で氷壁に映る天之河と自分に視線を向ける。

だが、当人は、逆にバツと音がしそうな勢いで雫の方に顔を向けた。その表情には苛つきが見て取れる。

「……信じてくれないのか？」

「え？いえ、別に疑ってないわよ？」

「先輩ならすぐ信じるんだろ……」

「光輝？本当に何を言っているのよ？疑ってないって言っているでしょう？」
雫がムツとした表情を作るも直ぐに心配そうな表情になる。

「本当に厄介な試練だな……」

「今のところ動く様子はないけど……さっさと抜けるに限る」

そうして、直ぐにここを抜ける為に急ぎ足で通路を進む。

数十分ほど歩き、ようやくゴールであろう扉に到着する。手前を調べても何もないので、そのまま扉を開けて中に進む。

開けた部屋の中心に行くと同頭上から光が降り注ぐ。

「太陽……?」

迷宮の中なのでそれが擬似的な物であるのは明らかだが、そこから放たれる熱が太陽だと錯覚させる。

「つ………結界展開!」

ボクは嫌な予感を感じとり、直ぐに結界を展開させるよう指示する。

ダイヤモンドダストからレーザーが放たれる。

鈴とユエの結界によってレーザーはシャットアウトされる。

更に現れたゴーレムを破壊する——のだが、天之河の攻撃だけがボクに当たる。

「……また、干渉?」

「い、いや、狙ったつもりはない……なのになんで……」

その後も全員が狙った所と違う所に攻撃をしてしまうことが多発する。

「ご主人様よ、おそらく無意識に攻撃が誘導されておるのじゃ」

「無意識じゃ対処のしようがねえな……」

となると、考えは一つ。

「全員、離れてなるべく近接攻撃を！誰かに当たっても文句言わない!!」

「「「了解」」」」

一旦、全員が距離を取ってゴーレム攻撃する。

離れば仲間を狙うことも少なくなるものの、逆に攻撃が外れるようになる。

拳でゴーレムを一体、破壊すると、ダイヤモンドダストが渦を巻き始める。

それに触れないよう進むのだが、どうやらボク自身を中心に回っているようだ。おまけにレーザーも放たれなかった。

そしていつの間にかゴールであろう通路に導かれていたようだ。

「一人一体つてことか。みんな無事に達成してよ……」

そう心配しながら、通路に入る。

三人称恵里side

「このお！」

近接攻撃を振るうものの明後日の方向に振ってしまう。遠距離攻撃をしても別の場所

その隙を狩るようにゴーレムのハルバードが首目掛けて襲いかかる。

咄嗟に翼を盾にして防ぎ、反撃するが、最低限の動きでかわされてしまう。

「やり辛かったらありやしないよ……」

——本当はそんなこと思っても考えてもいない癖に

「あぐつ……黙って!」

聞こえる声に気を取られて縦での攻撃をモロに喰らう。

——嫌われたくないから、猫を被る

——嫌い嫌い僕のものを取るやつなんて消えてしまえ

「こうなったら……伸びろデュランダル……!」

右手に持つデュランダルの持ち手を伸ばして槍へと形を変えて翼でゴーレムの動きを止める。

「吹っ飛ばええ!!」

勢いよく投擲した槍は真っ直ぐ飛び、ゴーレムを貫き破壊する。自動帰還の効果でデュランダルが手元に戻ってくる。

「はあ……本当にみんなにおんぶに抱っこだよ……」

そう言いながらゴールへと迷宮の声によって暗くなった表情のまま歩く。

既に士郎やハジメ達がクリアしていたようだ。

「お疲れ様、恵里」

そう言つて士郎は恵里の頭を撫でる。

暗い表情をすぐに直して、なんでもないように振る舞う。

「うん、ちよつとゴーレムに苦戦しちゃつた」

「なんにせよ無事でよかつた」

その後、天之河と坂上もゴーレムを倒して通路に入つてくる。

全員が揃つた事を確認した士郎は、片手に魔力を込めて彼を中心にドーム型に魔力膜を広げる。

テイオが先程の試練の前に行つた、精神の安定を図る魔法と士郎自身が持つ完全なる形を回路接続と空間魔法の応用で精神と肉体の両方を癒す。

恵里もそうだが、天之河も相当、負担がかかつていたようで、限界突破を使つていた。坂上はレーザーもなりふり構わず殴り合つていたので一番ボロボロになっていた。

「……天野先輩……俺の攻撃が……悪い」

天之河が癒しの魔力に包まれながら暗い雰囲気ですつぽつぽつと呟く。

「遠慮はいらないつて言つたよ？手こずるくらいなら最初からやればよかつたのに」

「……そうだな。俺の神威が飛んできたはずなのに、お前は汚れ一つついてない。何をしても、お前には痛痒一つ与えられない。だから、俺は……」

「光輝、大丈夫なの？ 何だかおかしいわよ。限界突破の副作用、そんなに辛い？ 少し横になる？」

「……」

雫が宝物庫からクッションを取り出して『使う？』と提案するものの、彼女をチラリと見ると何か恐れるような眼差しを一瞬だけ向けて直ぐに逸らした。首を振って不要を伝え、それから瞑目してしまった。

再び行われた小休憩を終えて先へと進む。

「どうやらあれが出口みたいだね」

羅針盤を持つハジメが言うのだから間違いないだろう。

「……ゲートに似てる。転移系の出口？」

「余り、いい予感はありませんねえ」

「シアよ。大迷宮でいい予感などしたためしが無いじゃろう？」

「あはは、確かに。精神責めは、余り問題ではないですけど鬱陶しいことこの上ないですから、もう勘弁して欲しいですけど……きつと、そうはいかないんでしょうね……はあ」
目に見えてウサミミが垂れ下がる。

物理的攻撃なら、バグキャラ化が著しいシアの敵ではないのだが、じわじわと無意識領域に干渉してくるような精神攻撃は、対策が難しく、振り回されてしまう。

それでも乗り越えようと頑張る彼女の頭を撫でる土郎。それを暗い視線で見つめて
いる事に気づいたものの、誰のものかは、わかっていなかった。

正に光と闇のEndless Battle

士郎side

ゲートを通り、眩い輝きに目を閉じる。光が収まり、瞼を開くと周囲には誰も居らず、自分だけがポツンと立っていた。

「どうやら分断されたようだ。」

「解放者の皆さんは分断するのがお好きなようだね……」

「そう言いながらボクは先に進む。」

「ここも今までと同じでミラーハウスのようにボクが上下左右に映し出される。」

「そして広い部屋に出る。そこにはボクが映っている円柱型の氷柱があった。」

「それをボクはよく観察する。」

「うーん。じっくり自分の姿を見ることはなかったけど、ホント変わったなあ……」

「黒い髪は白緑色になり、セミロングから腰より少し下までのロングになり、瞳は紫色に変色した。」

「エルキドゥというより、キングウだ。」

「突如、聞き慣れた声が響く。」

『女みたいな見た目になったな』

「ま、こうなるよね」

予想通り鏡に映るボクが喋り出した。

ただ違うとすれば――

『流石に予想済みかボク？』

一人称が違うということだろう。

「流れるにそうなると思ったただだよ。自分の心の闇ないし汚い所を見てそれに打ち勝つてコト。その闇をエヒトにつけ込まれない為でしょ？」

『ククク……その通りさ。さあお前はボクを乗り越えられるか？』

鏡のボクの姿が変化し始める。

白緑の髪と着ている黒いコートが灰色へと変わる。

「自分じゃわかんないからね……」

そう言いながら蹴りを放つが鏡のボクも蹴りを放ち、相打ちになる。

適当な剣を投影して切りかかれれば同じ事をされて受け止められる。

「チツ……やり辛さ一番だよ……」

『そりやお互い様だろ？』

余計なこととは考えないで攻撃し続ける方が良いと考え、干将・莫耶を投影し、宙に待

機させる。

氷の床が凹む前にボクとボクがぶつかる。

鏢迫り合い、膝蹴り、切り掛かると見せかけての正拳も全て鏡に殴りかかるように受け止められる。

コートの中の幻想の爆針をばら撒き、地面から鎖を放つが熾天覆う七つの円環で防がれ、接近を許す。

『オラア!』

「がふっ……!」

ボクの正拳突きが鳩尾に当たる。魔力で固めていたとは言え、痛みが突き抜ける。

『しっかしまあ……弱エなあ……』

「……」

『この程度でよくもまあ守るだなんて言えたよホント……いや守れてなんかいいねえかなんせ、一度死なせたもんなあ……』

こいつ……

否定できない。ハイリヒ襲撃の際、恵里を殺された。自分の慢心で彼女に恐ろしい思いをさせた。

結局のところ、ボクは嫌悪する、天之河となんら変わらない。

口だけだ。

さらにボクは偽・螺旋剣を投影して撃ち出す。それを干将・莫耶で切り落とす。

『おまけに、その行動理念は親父の身内を守るといふ、教えを忠実に守っているだけで、そこにお前の感情はない。ただそう学んだから守っている。いや、恵里達は違いかもしれんがな』

ハジメや幸利達を仲間として守ることがなんとなくで守っていると告げられる。

そのことに苛立ち、無造作に回し蹴りを放つ。

『おーおーキレてんなあwまあ所詮は同じ穴の貉なわけだ。檜山を蹴りまくった時も、本当は地球にいた頃から気に食わないから、ようやくぶつ飛ばせるタイミングか来たからボコボコにただけで。恵里達の事も一番に考えてなかったよなあ？ 本当に心配なら、まず鎖で拘束してから恵里の容態を調べるもんなあ？』

畳み掛けるように告げる。

徹底的にやろうとするのは本当にボクだ。そう思うと逆に笑えてくる。

だって逆に言えば、ボク言ってる事全てボクが考えているからだ。檜山をぶちのめした時、雫に諫められたから冷静に恵里を助ける方向に移行できた。

ハジメ達より、恵里の方が優先度が高いのだから当然だ。恋人優先、これ第一なのだから。

それにあの時のボクを否定することは、あの時の不安と恐怖、そしてこの心が抱える、闇がないものだと言うことと同義だ。

ボクは人に闇があることは当然だと思っし、自分だつてそうだとわかつている。

この間も投影武器の射出や斬り合い、地形操作による攻撃の迎撃が行われている。周りは破壊し尽くされ、クレーターもできている。

『ん？は？』

ボクは突然のことに理解出来ず、吹っ飛んだ。

「ようやく掴んだぞ……」

握る左手。

ようやくボクの魂的なものを掴んだ。

《ソウル・グラビティ》

この世界風に言うなら『魂重』だろう。

魂を掴みそれを投げるように左手で重力の方向を操作して壁などに叩きつける。これだけだと魂だけが動くので掴んだ魂をボクの起源で肉体と繋ぎ、繋いだそれごと叩きつける。

煙幕からは無傷のボクが現れる。

『……能力だけは一丁前だな。覚悟も出来ている。だが、オレには決定的に欠けている

モノがある』

一息ついて続きを言う。

『自分自身の意思がない事だ』

告げられたその一言が理解できなかつた。

意思がない？

『その行動理念は親父のもんだろ？家族……引いては身内を守りたいなんて理想はオレ
が親父に抱いたものだ。違うか？』

「……っ違うー！」

その言葉にボクは怒り混じりに斬りかかるも、軽く弾かれ、ボクが投影した胸を偽・螺
旋剣に貫かれる。

「がぶっ……」

激痛。

意識が薄れる。

死にそうなのに何故か子供の頃、父さんの話を思い出した

「家族って言うのは強い繋がりがだが弱い繋がりがなんだ」

「おとうさん、どういうこと？」

「硬いけどちよつとしたことでバラバラになっちゃうってこと」

「みんなときよなら？」

「そうだね。父さんはそんなのは嫌だからね」

「ぼくもはなればなれはやだよ？」

「うん。だから、父さんも母さんもそんなことにならないように過ごしてるんだよ」

「ならばくもがんばる！」

「そつか……でも、本当に大切な人を見つけたら、父さん達よりもその人を大切にするんだよ」

「わかった！」

「ただし、自分の意思でないと、意味はないからね」

「違う……」

胸に突き刺さっている偽・螺旋剣を抜く。口から大量の血を吐き出しながらも傷を修復する。

違う――

ボクはボク自身の意思で恵里達を守る。

そう幼い頃に誓った……

最初は恵里の味方でありたかった。

あの時言った

『彼女を守るって決めたんだ。だから守らなくちゃならないんだ』

この言葉をなかつたことになってしない。

だけど、幼馴染のハジメや、虐められていた雫を見て、狭い範囲だけで満足していら
れなかつた。

世界を救うだなんて大それたことを考えなんてしない。ただ自分の周りにいて、自分
を救ってくれる人を守りたい。

恵里がいたから寂しさが埋まった、雫がいたから揺れなかつた、シアがいたから辛さ
も飲み込めた、ハジメがいたから、幸利が、香織が優花が、ユエが……ボクはこうして
生きているし、救われた。

人は一人でこそ生きては行けるが、独りでは生きていられない。

だからボクは自分を救ってくれる人を救う。

こんなモノは、恵里だけの味方になれば、それ以外を切り捨てると——いや、今も守
りたいと思うもの以外は切り捨てる。自分勝手に自己完結した正義感だ。

天之河あいつの正義感だつて身勝手なものだから、自分の正義感の邪魔になるから、踏み潰し
ているだけだ。

ボクが言ってるのはどこかでボク自身の意思で恵里達を守ろうとしているかの不安だったんだ。

ここで変容を発動させ、一気に勝負を仕掛ける。

ソスタンボイを久しぶりに投影する。

「魔力装填……完了……」

ボクの魔力を纏ったソスタンボイは白緑の魔力を放つ。

ボクもソスタンボイを投影し魔力を込め始める。

「ハアッ！」

互いの剣がぶつかる。

ガキンツ！ギヤリギヤリ……

鏢迫り合いの状態になるが、ボクの方がボクを押し返す。

『ぐっ……何故だ……っ!? 何故力が弱まらないのに、オレはお前に押されている！変容だってボク方が上だぞ！』

「いや……お前はもう弱体化してるだろ。変容でそれを誤魔化してるだけだ」

『ぐっ……』

どうやら凶星のようだ。

「けどボクと違って変容の反動がないのはズルいけどさあ……」

そう言いつつもソスタンボーイに魔力を更に込める。そのまま鏢迫り合いを制する。体制の崩れたボクを逃さないよう、剣に込めた魔力を解き放つ。

「ソスタンボーイ……オーバーロードっ！」

視界を埋め尽くすほどの輝きがボクを飲み込む。

光が収まるとそこには今にも消え去りそうなボクがいた。

『やっぱり折れないよな……』

「当たり前。最初はちよつとヤバかったけどね。父さんとの話を忘れてたらどうなつてたことやら」

『は、はは……そうかよ……と言うかお前、ワザと聞いてただらう？』

「まあね。念の為何を不安に思ってるか確認したかったし」

『イカれた奴だ……だが、これからも折れるんじやねえぞ……』

「肝に銘じておくよ」

満足そうな顔をしてボクは陽炎のように溶けて消えていった。

「さて……他のみんなは大丈夫かな？」

少し心配だが、きつと乗り越えてくれると信じて、いつの間にか現れた通路へと進んで行く。

嘘吐きの独占欲

3人称side

雫は刀の刃を上に向け、前に一度、二度飛ぶ、何をされるかわかった虚像の雫は刀を構える。しかし、それは先読みの技能で違うと判断し、後ろからの攻撃に備えた。

しかし、攻撃は正面から行われた。

雫は三度、縮地で飛び、心臓に向けて3連続の突きを放つ。

「無明三段突き……この道を歩むと決めた時から私は後悔もしていないわ。そうじゃなきゃや土郎さんや恵里達の隣を歩いて行けないもの」

止めを刺した雫は刀を鞘に戻す。

いま彼女が手に持っている刀は菊一文字。新撰組一番隊隊長、沖田総司が使っていた刀の一つだ。

本物の三段突きには及ばすとも、憑依継承で身体を動かし、底上げされた人外の筋力と敏捷で限りなく本物に近づけさせた。

『ふふふ……満足いく答えよ雫……先に進みなさい』

「ええ、ありがとう虚像の私」

虚空に溶けていく虚像の雫を見送った雫は、現れた通路へと進む。

「この通路の先には何が待ち受けているのかしら……」

薄暗い氷の通路を抜けるとそこには胸の部分に穴を開け、かなりの血を流しているであらう士郎が立っていた。

「士郎さん！」

「ん？雫、無事に乗り越えられたみたいだね」

「ええ。士郎さん……その血の量は大丈夫かしら……？」

「大丈夫だよ。ちよつと深手を負ったけど治れば無問題」

「……前から思ってたけど。士郎さんのその終わりよければ全て良しって考え、控えて欲しいわ」

「っ……善処するよ」

「ダメ。約束して。ここには私しかいないけれど恵里とシア、私に約束して」
「う……」

あまりの剣幕に士郎は後ずさる。

彼自身も傷をワザと負うつもりはないのだが、合理的な考えの元、肉を切らせて骨を断つたり身体に大きな負担をかけるような戦い方をする。

オルクスの奈落に落ちた時もそうだ。神水が貴重な物だと言う理由で、自身は使わな

いという選択をとる。

それをこの旅でずっと見てきた雫は流石に看過できなかつたのだ。

「ほら、指切り」

雫は小指を差し出す。

その小指に士郎も自分の小指を絡ませる。

「ゆーびきーりげんまんうーそついたらはーりせんぼんのーますゆーび切った！」

指切りを終えた2人は先に進む。

その際、雫から「手を繋ぎましょう？」という視線を向けられ、それを理解した士郎が指と腕を絡ませて手を繋ぐ。

士郎の右腕は雫の柔らかい象徴に包まれ張り詰めた緊張が少し緩む。

突如『ズガシヤアン！』と碎ける音が通路の先から鳴り響く。

「この音は……」

「間違いなくシアね……」

「相当強い力でぶっ叩いたねこれ」

その通路を通るとそこには星砕きを肩に担いで、胸を張って立つシアの姿だった。

『何を言ってもわたしは弱体化する一方です。貴女にとつてこの試練はすでに乗り越えているのですね』

「そういうことです。士郎さん達が待っている筈なので推し通ります!」
『ふふっいいいでしょう。最後の一撃、存分にっ!!』

シアと虚像のシアが互いにドリユツケンを勢いよく振るい、ぶつかり合い、虚像の方が吹き飛ばす。

そのまま壁に激突し、空気に溶けていく。

「ふう……もうあの頃の弱いわたしではないのです」

（先に逝ってしまった皆も今のわたしを誇りに思ってくれているでしょうか……？）
物思いに耽るシアの視界が突然暗くなる。

「お疲れ様シア」

「ひゃわっ!? 士郎さん!？」

「無事突破できたみたいだね」

シアの頭を撫でる。

嬉しそうにウサミミをピコピコ揺らし、ウサシツポもフリフリする。

「はい!」

「苦戦なく突破できたのはよかったわ」

「その様子だと雫さんもですね」

「ええ。それじゃあ先に進みましょう」

「そうだね……恵里も少し心配だから早めに合流したい」

恵里の身を案じる士郎。内心、とても荒れている。

この迷宮——ハルツィナ樹海以降、彼女の様子がおかしかったのだ。なんでもないよ
うに振る舞うので、聞くに聞けなかった。

「なにもないといいけど……」

「はあつ……ぐつ……」

『はあ……なんで認めないの？……いや認めているからかな？……どんどん僕の力が強
くなってるよ……?』

息を切らし倒れそうになるボロボロの恵里とそれを悠々と眺める虚像の恵里。

『お兄ちゃんに知られたくないもんね。雫とシアが憎い、僕のお兄ちゃんに集る女共
だって』

「五月蠅い……!」

『お兄ちゃんの愛を受け取っていいのは僕だけ。僕とお兄ちゃんだけの世界になればい
いのにね』

虚像から告げられる闇に恵里の中に燦る黒い感情がどんどん膨れ上がる。

『お兄ちゃんもお兄ちゃんだよ。僕以外の女をたらし込むんだし』

「うああ……や……めて……お……願……い……っ……やだあ……っ」

『じゃあ僕がやるの？ならさっさと立ってやっちゃいなよ』

「やだ……やだ……」

涙で目が赤く腫れ、こちらに助けを求める表情を士郎に向ける。

『ああもうわがままだなあ……それともお兄ちゃんに伝えちゃう？』

「ダメ……」

只事ではないことは明らかだ。試練とか関係なしに士郎は恵里の元に縮地で移動し、そのまま抱えて元の場所に戻る。

「恵里……大丈夫じゃなさそうだね……虚像にないを言われたの？」

士郎は恵里に問いかけるも、彼女はなにも答えない——否、答えられない。自分の黒くて醜い自分の本性を知られたくなくて「嫌嫌嫌嫌嫌」としか喋らない。

恵里を落ち着かせる為に士郎は強く抱き締めた。

「ゆっくり深呼吸して……よしよし……大丈夫、大丈夫……ボク達は恵里がどんな子だろうと嫌いになんてならないよ……だから言っごらん……」

それでも恵里は答えない。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいおにーんう!？」

チユ……

謝り続ける恵里の唇を自身の唇で塞ぐ。

「んむ…………んっ…………ん…………ふはっ…………お兄…………ちゃん…………う？」

「落ち着いた？」

「うん…………」

「よかった…………話せる…………無理ならこれ以上は聞かない」

恵里は一度俯くものの覚悟を決めたのか、顔を上げて虚像に言われたことを話す。

士郎は今一度恵里を抱き締める。隣に立っていた雫とシアもだ。

「そっか…………ごめんね…………ボクが不甲斐ないばかりに恵里にそんな思いをさせてたなんて…………」

「ううん、お兄ちゃん達は悪くないよ…………僕が僕が悪い子だから…………」

「そんなことないわよ…………っ！それも好きの形の一つじゃない！」

「そうですね！恵里さんは何にも悪くないです！好きな人に自分を見て貰いたいのは普通のことですよ！」

「…………みんなありがとう…………ふう…………もう大丈夫」

恵里は立ち上がり、虚像へと向き直る。

「お兄ちゃん、雫、シア。見てて、もう負けないから」

「わかった…………いつてらっしやい恵里」

その言葉を皮切りに恵里は駆け出し、バルムンクを振りかぶる。虚像の恵里はデュランダルで受け止めつつ、銀翼の魔弾を放つ。

恵里は氷魔法で相殺する。先程までは魔弾に全ての遠距離攻撃が撃ち負けていたが今度はこちらが撃ち落とし、本体にまで攻撃が及ぶ。

『いきなりなんで……っ！』

「それはもう分かりきってることでしょ？ 僕の心が持ち直したから、僕が攻勢に変わった。もう僕は迷わない……僕が怖いのはお兄ちゃんに捨てられることだから……！」

虚像のデュランダルを弾き、恵里自身が持つバルムンクを心臓に突き刺しそのまま壁まで押しやり礫にする。

そしてデュランダルの持ち手を伸ばして槍にし、クルリと持ち方を変えて構える。

「標的確認……デュランダル・ストライク！」

勢いよくそれを投げる。真っ直ぐ虚像の胴体へと飛び、礫にされた虚像は回避すら出ずに貫かれた。

ズゴオオン……！！

煙が晴れると、下半身が吹き飛び、腹部辺りが抉れた虚像の姿が現れる。

『あくあ、終わりかあ……で、僕？ 今後どうするの？』

「いつも通りお兄ちゃん達と一緒だよ」

『そっか……乗り越えたならいいよ。さっさと先に進めば……』

そう言つて溶けるように消えていった。

「お疲れ様、恵里」

自身の闇に打ち勝つた恵里は士郎の方を向き、小悪魔のような妖艶な笑みを浮かべ――

「につひひくえい！」

チュ……

「なっ！」

「ああ！」

――そのまま士郎にキスをした。

「んむ……♡レロ……♡んちゅ……♡ぶはっ♡」

「え、恵里っ……あ、あんた……！」

「ななな、何してるんですかあ!？」

「んフフ♡もつと自分を曝け出したただだよ♡」

艶のある笑顔でそのまま士郎に抱きつく。

「士郎さん！わたしもキス！キスしたいです！」

「わ、私も！士郎さん！」

「お兄ちゃん♡僕にもね♡？」

「順番だからね？あと恵里はお仕置きだからね。キツいのいくから」
少し賑やかな雰囲気を作りながら通路を進んで行くのだった。

虚像は虚像であるがそれと同時にそれは自分だ。

3人称side

士郎達が恵里と合流した頃。幸利は自身の虚像と話していた。

虚像は地に倒れ、本人はブラッククロッドを肩に乗せ、虚像を見下ろしている。

『そんなお前をアイツらが受け入れてくれると思うのか……』

「俺はお前の言ってることはわかってる。正直、昔の俺の欲望だそれは。テイオや優花と付き合った時に、嬉しい以外に支配欲求みたいなもんはあつたさ。そりやハジメや士郎も持つてるもんだからな。天之河の奴の勇者欲求は流石にあれも昔の俺だが、正直見てて痛々しいわな。ま、根付いたモンは仕方ねえが、それはそれだ」

『……は？』

「だって恋人を奪われたくない、且つ手放したくねーのは当然のことだろ？それに勇者願望なんざどうでもいい。そんな柄じゃねえからな」

『元から乗り越えてたか……』

納得したように軽く笑う虚像。

「当たり前だ。ま、士郎と出会ってなかったらここにいなかったかもしんねーけどな」

『そりやそうだ。もしかしたら殺されたかもな』

「やめろよゾツとする……」

『はははっ……まあ頑張れよ……』

虚像が解けていった。

「通路……ねえ……何が待ち受けてるのやら……」

一方、別の部屋では優花が虚像とぶつかり合っていた。

辺りには苦無や手裏剣、短刀などの投擲物が壁に突き刺さり床に散らばっている。

壁や床にヒビがあり、一部が崩れ落ちていることから戦闘の激しさがわかる。

『本当に彼は貴女を捨てない？』

「どういうこと……」

『だって地球にいた頃、アタシは香織や雫みたいに二代女神なんて呼ばれることもなかった。この世界に来て、テイオが彼に近づいてきた時も周りに一歩劣る容姿が恨めしかったでしょう？』

そう言う虚像を無言で背中に吊るしていた槍で突き刺し、そのまま壁まで押し付ける。

そして腕に纏雷を為て宝物庫から取り出した、金属製の塊を殴り飛ばし、虚像にぶち

当てる。

『ガフツ……』

「……持て離されなくていいわよ。それにアイツを好きになったのはアタシが築いてきた関係からよ」

そう言い切り、溶けかけの虚像にトドメを刺す。

『やっぱり通じないのね……』

虚像は満足そうにトドメの一撃をくらい消滅していった。

「ふう……ダメねアタシ。これじゃあ幸利の奴を信じてないのと一緒じゃない」

ドゴォー！

拳と拳がぶつかり合い、ぶつけ合った当人達が吹き飛ぶ。

「この時点じゃ互角か……」

『開幕殴りかかってくるとか脳筋かよ俺』

「そりやどうも……オラア！」

再び殴りかかる龍太郎だが、今度は空力シユーズで縦横無尽に飛び回り、虚像の目が追いつかなくなると同時に拳を入れ込む。

ドカツ！バキツ！ゴキツ！

『見え見えだッ!』

次の拳を叩き込もうとしたところを回し蹴りで横つ腹を蹴り投げる。そのまま壁に激突する。

だが龍太郎は怪我した気配もなく現れる。

「チツ……こうなりやゴリ押しだアアアア!」

籠手を黒い炎で燃やし、足には電撃を纏わせる。

そこからは殴り殴られ蹴り蹴られの攻防が始まった。

防ぎきれない拳と膝、蹴りが頬、腹、腰、顎にヒットする。

口が切れたのか血を吐き出し、鼻血が垂れる。

『なぜそこまでッ……焦る?俺はこのままなら迷宮は攻略できるだろ……!』

「……ウルセエよ」

『そりや焦るさ……親友の間違いを正す役目を盗られかかっているからな……!』

虚像のコークスクリューブローが龍太郎の鳩尾にクリーンヒットする。

ボキボキボキ……

骨が何本かイカれる。

「グボオア……」

再び壁まで飛ばされる。しかも今度は崩れた壁だ。

そこには鋭利に尖り落ちた氷塊だった。

龍太郎は止まろうと、空力を使うも、勢いを殺すことが出来ずに、背中を串刺しする。
『その焦りこそがお前の不安だ』

虚像がそう言ったものの、龍太郎は俯いたまま動かなくなってしまった。

氷塊を伝つて背中の血が滴り、血溜まりを作る。

数分間、何も無い時間が過ぎる。

ポタツ……ポタツ……

『拍子抜けだな俺……テメエの親友に対する感情はその程度なのかよ』

その言葉にピクリと龍太郎の身体が動く。

ズル……ズル……

ゆつくりと氷塊が突き刺さったまま立ち上がる。

ダメージは大きく、まともに立っていられないほどの激痛が襲いかかる。

「……ゲホっゲボっ！」

咳き込む度に血反吐を吐く。

頭を切っていたのか血で左目の視界が紅く染まる。

「ああそうさ……俺は光輝の間違いを直すツ！これだけは絶対誰にもゆずらねえ！アイツの親友としてだッ！」

拳に魔力を込め先程よりも炎を燃やし走る。

虚像は拳の衝撃波を飛ばし、それを龍太郎は喰らうものの、それで止まるような気迫ではなく、更に炎を燃やし続ける。

「おおおおおおお！」

叫びながら体勢を低くし虚像の拳をかわし、スマッシュを顔面に叩き込む。そのまま地面に叩きつける。燃え沸る炎は消えることなく焰の渦を生み出し、周囲や背中に突き刺さった氷を溶かし始める。

焰が消えるとそこには叩きつけた筈の虚像の姿はなく、拳を地面に立てているだけだった。

「はあっ……はっ……終わったみたいだな……！」

休むことなくフラフラと壁に寄りかかりながら、龍太郎は開いた通路へと向かい歩き始める。

「風林火山……『風』！」

手にした軍配を振るい、巨大な竜巻を巻き起こす。そしてその中に、

「聖絶・『爆』！」

あらかじめ用意していた聖絶で、バリアバーストを放ち、擬似的な氷の竜巻を放った。

全て障壁に阻まれ、全くダメージを与えることができなかった。

「これだけやつてもまだ効いてないの……?」

『風林火山・『林』』

虚像が軍配を地面に突き立て、氷の木を生み出し、攻撃する。聖絶で防御しているのだが、樹氷の鞭の威力にドンドンとヒビが入っていく。

「ううッ……」

更に数が増えていき、そして遂に破られてしまった。

キャッチボールでもするかのように何度も叩き飛ばされる。

最後にその枝で拘束される。

『そろそろ私の話を聞いたら?』

それを聞きたくない鈴は、攻撃を続けようとしたのだが、枝がキツく締め付けており、身動きが取れなかった。

『本当は天之河くんに着いて行くなんで嫌だった。でも龍太郎くんが正すって言うから着いて行った。これ本当は恵里が羨ましかったんだよね?』

「……っ!」

『だって、恵里は支える相手がいて、自分にはいない。恵里は自分を曝け出してるのに、自分はあの時から、別の誰かになろうとしてる。恵里は友達なのかなあ? 憧れだったん

じゃないの？だって憧れは理解から最も遠い感情だもんね」

「うん、さー」

軍配で虚像を殴ろうとしても拘束から抜け出せず必死にもがくだけだった。

鈴は今と違い、昔はひとりぼっちで寂しがり屋、おまけに家に親は中々おらず、使用人と暮らしているような日が多かった。

他のクラスメイトの親が授業参観に来ている中、自分の親だけが出ていなかった。

そんな中、一際目に入るよう少女がいた。

それが恵里だ。

幼い鈴から見ても両親とは全く似ておらず、本当にその家の子なのかと疑うほどだ。

そんな時、恵里がついとうっかり漏らして言葉を聞いてしまった。

「いつもありがとうお義父さん、お義母さん。僕は養子なのに……いつも良くしてくれて」

その後の会話は耳に入らなかった。

血の繋がりのない両親なのに自分と違い、愛されていることが実感できている。

ただ自分が愛されていないとは思ってはいない。

プレゼントなどは考えて選ばれている物だったし、話すことができた時はたくさん話

しをした。

でも、共働きの両親はいつも忙しいので、自分が寝静まった夜に帰ってくる。

そんな彼女が羨ましかったのか、はたまたどうしたら親に構ってもらえるか知りたかったのか、鈴はちよつとした打算目的で彼女に近づいた。

最初は暗い自分から話しかけた所で話が続かず、気不味い空気が流れた。

『なら、大きめのわがまま言ってみたらどうなのさ。僕だつて時折言うよ?』

今まで鈴は大きなわがままを言ったことがなかった。

そんな彼女の一言が衝撃だった。

だから初めてわがままを言った、お父さんとお母さんも最初は驚いたけど、その日からなるべく早く帰って来るようになった。

それからは恵里とよく遊ぶようになり、彼女の一つ上の兄である士郎さんのことを知った。

士郎さんはいろんなことができる、お兄さんなイメージだった。

でもなんでもできる訳じゃない。恵里はそんな彼を支えると言い切っていて、すごくかっこいいと思った。

自分も誰かを支えたいと思うようになった。

「……………うん。違う。鈴は恵里の友達で親友だ」

それは変えようのない事実だ。

憧れから変わって産まれる友情だつてあつていい筈だ。

腕に力を入れて樹氷の拘束を破る。

『なっ……………!?!?』

「聖絶・『浮剣』！10！」

聖絶で作りに出された剣を10本、自身の周囲に浮かせる。

「射出！」

それを勢いよく放つが、虚像の聖絶で防御される。

『くっ……………聖絶・斧！』

虚像も負けじと攻撃をする。

「聖絶・剛腕！」

巨大な腕を作り出し、斧を受け止め、もう一つ腕を作り、虚像の聖絶をなぐる。

聖絶を先程の仕返しと言わんばかりに破壊する。

「オリヤアアアアア！」

バギツバキバキビキツイ…！

『ぐう……………』

無防備になった虚像へと最後の一撃を放つ。

「聖絶・転!」

今まで碎かれてきた聖絶が巻き戻しをしているかのように虚像を囲むように現れる。

『自分のだけじゃなく、鈴の分までか……』

「この聖絶は鈴の物だからね……どっちもやるのは難しいことじゃないよ。今からこれをありったけの魔力で放つよ……」

『なら存分に放つて……乗り越えた君の力を』

「聖絶・爆散!」

聖絶が一気に爆発する。

その威力は虚像だけでなく、放った鈴はすらも吹き飛ばした。

天井は崩れ落ち、壁は原型すらわからないほど壊れ、床には巨大なクレーターが出来上がっていた。

その中心には何もいないことから虚像に勝つことができたようだ。

ただその代償も大きく、全てを攻撃に使った為その後のことを考えていなかった。

吹き飛んだ衝撃で地面を何度もバウンドし壁に勢いよく激突した激痛で鈴は意識を失うのだった。

ゆつさゆつさ心地よい揺れに鈴は目を覚ます。

「んう……………」

「お、目え覚ましたか鈴」

「りゆう……………たろーくん？」

「おう俺だぞ」

「どういう状況……………これ……………」

何故か龍太郎との顔の距離が近いことを不思議に思う。

「……………？……………ツ!?!／／／」

どうやらお姫様抱っこされているようだ。

「おっと、暴れんなよ……………？お前が壁に寄りかかって倒れてるもんだから、起こそうと思っただがよ。中々起きないから運ぶことにしたんだよ。運び方は後でいくらでも文句聞くから今は我慢してくれ。背負うにも背中がズタボロなもんだから、こうやって運んでんだ」

「え？背中？」

進んだ後を見るとそこにはポタポタと赤い点が続いていた。

「ちよつと！龍太郎くん！背中見せて！早く！」

「お、おい！暴れんなって……………」

「暴れるよ！傷！治さないと！回復薬は!？」

「薬はもうねえよ……気合いでなんとかしてるから大丈夫だって……」

「いいから！」

そうやって鈴は龍太郎の腕から降りる。

「カオリンに教えてもらったから、ほら背中診せて」

「お、おう……」

背中に魔力が流れ込む。

背中以外にも肋骨や腕の骨、肩が脱臼していたようだ。

「焦天！何バカみたいに気合いで耐えてんのさ！」

「い、いや……大丈夫だと思ってたから……ゲボバアツ！」

「わアアアア！あり得ないくらい吐血してる！骨、肺に刺さってるよねこれ！」

そのまま回復魔法を続ける鈴。

2、3分ほど経過すると、治療が終わり、立ち上がる鈴。

「……うし、大分マシになったわ。サンキューな鈴」

ニカツと笑いながら口についた血を拭いながら龍太郎は立ち上がる。

その仕草に鈴は何故かドキツとしてしまった。

「それじゃあ行くっか」

「もう歩けんのか？」

「うん」

通路の続きを進んで行くのだった。

今、光と闇が交わりセイバーに見える！

一方、他のメンバーは……

『やっぱり『私』の中での疑いは晴れているのね』

「……当たり前。叔父様は私を逃してくれた。その事実だけで充分。後は真名をハジメと香織に伝えるだけ……かな？」

『ふふふっ……変わったのね『私』。なら行くといいわ。ちゃんと伝えなさいよ私、アレーティアの真名を』

「……ん」

ユエは既に不安だった叔父が逃した理由についても、残っていた遺言が彼女を揺らさない。

叔父と開いてしまった距離を縮めることは今更になつてだが、彼の意を汲むことで縮めたと思っている。

自動再生とて無限ではない事を叔父が知らないはずがない。だからこそあの遺言を信じられる。

それを知った虚像は満足そうに消えていった。

「……虚像が昔の言葉使いなのがちよつと寂しい……今の私はユエ。吸血姫、アレーティア・ガルディエ・ウエスペリオ・アヴァタールはもうあの日、滅んでしまったから」

少し悲しさが胸を割きそうだったが、これからの為に押し流す。

ドパンツ！

シュラーゲンから弾丸が放たれ、虚像の眉間を撃ち抜く。

「居場所を作る……その程度が怖いなら……僕は地球に帰れない……」

『開き直り……でもねえな……ちゃんと乗り越えてやがる……』

「でもまあ……土郎と出会ってなかったら、開き直りだったかもね」

たはは、とハジメは自嘲するように笑う。

『まあいい……進め。それだけでいい。お前は、迷う方が問題だ』

「うん。行つてくるよ」

杖に腹を貫かれ磔にされた虚像とそれに向けて銃を向ける香織。

「ハジメくんが一番は譲らない。だって私はハジメくんの特別でいる為に努力してき

た」

『ならユエ達はどうするの…？』

「ユエもレミアさんもハジメくんのが好きなのはわかってるよ。でもね、特別は渡さない。私のわがままで、独占欲。だって好きな人には自分を見てもらいたいもん」

『吹っ切れてるね…その猪突猛進具合はどうあっても変わらないんだね』

「だから押し通るよ！」

密かに改造していたスヴエート&シーズンで虚像を撃ち抜く。

一度に3発放たれる。それが2丁分で6発だ。

それぞれ、両肩、両足、眉間、心臓にヒットする。

『おめでどう…先に進んで…多分、貴女が会いたい人に会えるから…』

開いた通路遠進むとそこには——同時に通路から部屋に出てきたハジメとユエの相があった。

「香織！ユエ！」

「ハジメ（くん）！」

「2人も無事にクリアできたんだね」

「……ん」

「勿論！」

ワイワイと再会と、クリアできたことを喜び合う。

そしてユエは虚像に約束したこと……自身の真名の全てをハジメと香織に教えた。

「それが私の昔の名前。記憶の片隅に置いておいて欲しい。これはここにいる3人だけの秘密だから」

2人は彼女の名前を忘れないよう魂に刻み込むのだった。

優花が抜けた通路の先は、白と黒の閃光がぶつかり合う部屋だった。

「この炎は……ティオね……」

部屋の様子を伺うと、予想通りティオが虚像の彼女とブレスの撃ち合いをしていた。

『ふふふ、感じるのじゃ。主の憎悪まと憤怒、恐怖と諦念を。何百年経とうとも、忘れ消えることのないあの悲劇の日を、庇護まもしていた者どもから手のひら返しのように裏切られ、侮蔑と畏怖の眼差し、同胞を、両親を殺され、その亡骸を辱められた屈辱』

「……」

虚像がティオに嫌らしい笑みを浮かべ、歴史とくを語る。

優花や皆が知らない、ティオの過去。

王国の図書館で読んだ内容と照らし合わせればこの世界の神が、教会が行った非道が明らかになるであろうことだ。

『あの時は中々に痛快な気分だったのう。聖教教会の総本山を粉微塵に破壊した時じゃ。あの一件の中心は教会であった。怨敵が塵芥となる様は何よりも快感じゃっただろう』

虚像が言うことは真実なのだろう。

『最初に、清水幸利について行こうとしたのも、“使える”と思つたからじゃろう？彼奴らの異常じゃ、それをまとめ上げている天野士郎は特にじゃ。その力に神は必ず目を付けあの時の大迫害のように牙を向ける。さすれば奴らの牙も神へと向き、弑逆の一助になるやもと、そう考えたのじゃろう』

正直に言えば優花はこのことに驚いた。

いつも幸利に被虐趣味を全開に迫ったり、自分の心情を察して解決しようと話を持ちかける理知的で優しい一面ばかりを見ていたため、こんな黒い内面には少しショックを受けた。

だが、テイオはこの部屋に、優花がいることは知っている筈だ。一度こちらに視線を向けたのだから。

だから信じることにした。自分が虚像を打ち破った時と同じように、テイオと少ないが過ごした濃い時間を。

だが彼女の信頼とは逆にテイオの黒い焰はドンドンと弱まっていく。

『人間、巫人、魔人、そして神。あの時、大切なものを奪い去った全てが憎い。じゃが、その憎しみは、怒りは、主にとって抱いて当然のもの。——そう、復讐は、主の正当な権利じゃ!』

虚像の焰がティオの焰を呑み込み始めた。

『妾の手を取れ。さすれば、妾がその復讐を成し遂げさせてやろう。もう、内にくすぶる業火を無理に押さえ込まなくてもよい。良心に苛まれて、復讐の牙を鈍らせることはない。妾が：彼奴らを上手く誘導してやるのじゃ。なに、あの男も、妾を想うておる。一度懐にいられた者には甘い男じゃ。やりようはいくらでもある』

虚像の誘惑がティオへと伸びる——筈だった。

いきなり黒い焰が白い焰を逆に呑み込み始めた。

「我等、己の存する意味を知らず。この身は獣か、あるいは人か。世界の全てに意味あるものとするならば、その答えは何処に。答えなく幾星霜。なればこそ、人か獣か我等は決意をもって魂を掲げる。竜の眼は一路の真実を見抜き、欺瞞と猜疑を打ち破る。竜の爪は鉄の城壁を切り裂き、巢食う悪意を打ち砕く。竜の牙は己の弱さを噛み砕き、憎悪と憤怒を押し流す。仁、失いし時、我等はただの獣なり。されど、理性の剣を振るい続ける限り——我等は竜人である!」

圧倒的な覇気と共にティオの眼がカッと見開く。瞳は縦に割れ獣性を示すものの燦

然と輝く黄金に彩られている。

『……その言葉。お主、制御しておったな?』

虚像は信じられないと言いたげな表情になる。それもそうだろう。強まっていった力が、いきなり弱まったのだから。

「大迷宮の意思よ、感謝するのじゃ。中々、己の本心を客観的に聞くことの出来る機会はない。心とは、広大な海のようなものであるからして、妾自身の気づかぬ内に隙が出来ているかもしれないと利用させてもらったが……存外、収穫はあったのじゃ」

『……じゃが、妾の言ったことは偽りは無い!負の感情がなくなった訳ではないはずじゃ!なぜこうも容易くツ!』

焦る虚像、だがティオは変わらず毅然とした様子でブレスを続ける。

黒い着物と長く艶やかな腰まで届くその黒髪を魔力の奔流にはためかせ、口を開く。

「舐めるな。妾を誰と心得る」

負の感情への疑問なら竜人族の誓いで答えている。

「誇り高き竜人——クラルス族が末裔、ティオ・クラルスなるぞ!」

自分が自分である限り、折れはしない。ただそれだけが答えだ。

そのまま黒い焔が虚像を呑み込み焼き尽くす。

「お疲れ様、ティオ」

「む、優花か。そちらも無事、達成したのじゃな」

「そうね。この先になんかものすごい争いの心配がするけど……」

「ご主人様達が苦戦してるとは思わぬしのう……大方勇者とやらが自分の負を認めずにただを捏ねているのじゃろうな」

ティオですら散々な評価のようだ。

「貴女もそう思うのね……」

「流石にな……しかしこの迷宮の試練は厄介なものじゃ。試練と自分の負を理解出来ぬのなら、あつという間に吞まれてしまうじゃろう。そう考えると士郎は妾と同じような方法で乗り越えていそうなのじゃ」

普段から歳上として行動している士郎ならそうしていそうなのは納得だ。

ただ身内に関しては感情的になるのが玉に瑕だが。

神殿騎士がシアをコケにしたり、天之河が士郎と恵里の家族関係を否定した時など、思い当たるところは様々だ。

そう言ったところはやはりまだ子供のままなのだろう。

「まあティオみたく一気に乗り越えはできないでしょうね。年季の差もあるわ」
「流石にあの歳で妾と同じように乗り越えられたら立つ背がないのじゃが……」

そう言うのだが、実際はその通りだが、多少の躓きはあった。

そうこうして通路を進み、別の部屋に出るのだが、そこでも激しい争いが起きている。その争いの中心にいたのが、伸ばしたブラックロッドを巧みに操り、攻撃を対処している幸利に、黒と白の聖剣を持った天之河が殺し合いをしていた。

幸利が進んだ通路の先にいたのは虚像と罅迫り合いの真つ最中の天之河だった。

「……やっぱ苦戦してるか」

天之河が虚像に押されているのは火を見るよりも明らかだった。

『見ろよ……トータスに来る前は俺よりも下だった奴がもうクリアしてるぞ？』

虚像が幸利の存在に気づき、天之河を煽り始める。

「清水は、俺の見てない所で努力してたんだ……ッ！」

『そんなこと思ってないだろ？ 同じ事をすれば俺の方が強くなれる。俺の方がもっと上手くやれるって』

「黙れッ！ 迷宮の魔物！」

天之河は自身の闇である虚像に怒りをぶつける。

がしかし、軽いなされ蹴飛ばされ、幸利の足下まで転がる。

『そんなんだから香織も雫も取られるんだろう？ 今、俺と手を組めば2人を取り戻せる』
「……黙れッ！ 元々、2人は俺よりも南雲や天野先輩に『お前が過去に失敗したから奪わ

れたんだろ?』違う!」

焦りまくる天之河を見ていられない幸利はかがみ込んで、助言する事にした。

「落ち着け天之河。一度、クズに堕ちかけた俺がクリアできてんだから、普段から良くあろうとしてるお前ができねえわけねえだろ……」

幸利は地球にいた頃の天之河のことは相性が悪いと思っではいるが、幼い頃から正しくあろうとし続けるその精神性だけは認めていた。ただ自分の意思を押し付けたりする所は嫌いだが。

昔の自分はただ自分を害する邪魔な奴を消し、欲望のままに女を襲いたいとすら思うような人間^{クズ}だった。

だからこそ天之河の現状には昔の自分に似ていて同情すら抱いてしまうほどだ。

だが、天之河にとってその言葉は――

「黙れよ……お前に俺の何がわかるツ!!」

神経を逆撫でするように、彼の焦りを怒りへと変貌させるだけだった。

(と……とんそつくりだな……俺ならわかってただろ……こんな事になつたら俺だってキレることくらい……)

そのまま天之河は聖剣で八つ当たりするように幸利へと振るった。

『まずはヒーロータイムの足がかりだ俺。手を取れ。そうすれば清水を殺すことができ

る』

虚像が手^誘を差^惑し出^すす。

天之河はその手を取ってしまふ。虚像は解けるように彼に纏わりつき、左手には右手に握る白の聖剣と正反対の黒い魔剣が握られる。

『さあ！奴を序盤の雑魚のように切り捨ててしまおう！』

「五月蠅い……今使つてやるだけだ！全てが終わつたらお前の番なのを忘れるな！」

白と黒の魔力を放出し辺りを吹き飛ばす。

幸利はその余波に吹き飛ばされることはなかったが距離を取る。

「馬鹿が……闇に吞まれやがったか……」

腰に付けていたブラックロッドを抜き、自身の身長よりも少し長めに伸ばして構える。

天之河が斬りかかるも、幸利は身体強化を施し、攻撃を軽くないです。

「降れ！『火炎時雨』！」

聖剣を振るうと、斬撃の軌跡から炎の弾丸が降り注ぐ。逃場がないほど範囲が広いもの——

『『絶禍』』

幸利が指先に作り出した重力球に吞み込まれる。

「唸れ！『震空波』！」

二つの聖剣で斬りかかり、幸利がブラックロッドで受け止めたと同時に、振動を発生させ、後ろに弾き飛ばす。

「ちっ……！『暗黒球砲』装填！」

弾かれながらも闇魔法を発動・待機させる。

「消し去れ！『白光閃』！」

光魔法のレーザーで待機中の暗黒球を破壊し、追撃をする。

直撃こそしたものの、高い魔力耐性で全くダメージを与えられない。

「『暗黒陣』吹っ飛べ！」

ブラックロッドを構えた時に地面に魔法陣を作っており、そこから闇魔法の衝撃と重力魔法による圧をかける。

少しでも動きを止めるためのだが、天之河はその態勢のまま、黒い聖剣を振るう。

「『天翔閃・邪光』！」

黒い天翔閃が放たれる。

「しまっ……！」

闇魔砲の攻撃に幸利は防御態勢を取り受け止める。直撃したもののダメージだけはないが、後ろの氷壁が崩れ落ち、その威力と彼の魔力耐久が凄まじいことがわかる。

「……ふう。さーて、どうしたもんかね」

幸利なら余裕で避け、反撃し、天之河を黙らせることができるが、彼としては、この迷宮を全員で——特に天之河をクリアさせたいと思っている。

幸利はこの迷宮の試練はただ自分の闇を見せるだけではないと思っている。

闇を見せるだけなら、乗り越える者はまだ多くいるはずだ。これの前の試練でダメになる者もいるだろうが。

おそらく心の闇を強くし、逆に自身の闇を見た本人は闇に付け入れられやすくなっているのだろう。そして仲間と同士討ちさせることで、試練の難易度を上げている。逆に言えば、呑み込まれてから逆転も可能な筈だ。

闇術師であるからこそ幸利は、この迷宮の試練の仕掛けの深い所まで理解していた。

「……やっぱ、俺じゃ無理だろうな。龍太郎辺りが来てくれれば良いが」

そう考えた時だった。

「なんだなんだ！スゲー音が聞こえたぞ！」

叫びながら入って来たのは、クラス一番の脳筋、坂上龍太郎だった。

その後ろには鈴もおり、無事に試練を乗り越えて合流したのだろう。更に別の通路からは優花とティオも来ている。

「トツシー!?!」

「龍太郎！鈴！良いところに来てくれた！」

幸利は大規模な魔法で天之河を吹き飛ばし、重力魔法で拘束する。

「お前ら！手エ貸してくれ！」

そう叫び、説明の為に2人の元に移動する。

「どうした幸利……」

「天之河が虚像に呑まれた……」

「なっ……」

「ええ……」

龍太郎は驚き、鈴は落胆や呆れのような感情を顔に出す。

「案の定呑まれたわねアイツ……」

「俺としてはクリアに導きたいが……俺じゃ無理だ……そこで龍太郎に説得を頼みたくってな。ただアイツの意識の中に入る予定なんだが、さっきから暴れてそれどころじゃねえんだ」

「ご主人様は優しいのじゃな……妾はこのままのしても良いと思うのじゃが」

あのティオですら諦めさせる選択を取っている。それだけ天之河に期待していないということだ。

「俺が抑えれば良いのか」

「いや、抑えるのは鈴に頼みたい。お前は俺と一緒にアイツの意思の中に入る。頼めるか？」

「わかったぜ。無理矢理にでもやってやるさ」

「良いよ。2人がやるなら鈴も手伝うから」

「幸利、アタシ達はどうしたら良い？」

「優花とテイオは何もしなくて大丈夫だ……もし士郎達が来たら状況の説明を頼む」

そう言つて幸利は天之河にかけている重力魔法を解く。

そのまま斬りかかろうとしている天之河を鈴の結界魔法で拘束する。その拘束から逃れようと天之河は必死にもがく。

「龍太郎……俺の肩に触れてろ」

「おう……！」

幸利は杖を地面に突き刺し、魔力を高め、集中する。天之河の意識の根幹を探している。

2人の身体を青紫色の魔力が覆い始める。

「……………掴んだッ！『侵魂』！」

魔法を使った途端、もがいていた天之河と魔法を使った幸利、その肩に触れていた龍太郎の動きがピタリと止まった。

光と闇の切り離し方

幸利の侵魂で天之河の意識の中に入った幸利と龍太郎。

そこで目にしたのは、天之河が意識の中でも虚像と戦っている姿だった。

「クソツ……」

『自分の意識の中に閉じ込めて、完全な一騎打ちをしようとしたみたいだが、無意味に終わったな！なんせお前は俺を超えていないから、身体の主導権は俺にあるんだよ！』

そのまま天之河は切り上げをくらい無防備な状態にされ、そのまま拳の連続攻撃をくらい龍太郎達の足元まで吹っ飛ぶ。

「龍太郎……？それに清水……なんでここに……」

「そりやお前の試練の手伝いに来たんだよ」

「な、なんで……俺は……」

「外の世界の俺たちは固まってるから気にすんな」

「そ、そうか……」

それを聞いた天之河は安心したような表情を作るも、すぐに落ち込んだ表情に戻る。

「だが……俺はここでもダメなんだろうな……くそツ！」

自嘲したように笑い。無力さに空間の地面を叩く。

しかし、幸利は自身の仮説を天之河に話す。諦めさせない為に、彼を信じて。

「天之河は迷宮や試練はどう言うもんだと思ってる?」

「……そりゃあ、クリア出来ないような大きな壁だろう?」

「そうだな。だが、迷宮や試練つてのはクリアさせる為に作られてる。クリアもさせないなら、要塞とかそう言うもんにして入れなくし、入られたとしても出れないようにする筈だ。それにこいつはただの魔法じゃない。人が強くなつて欲しいと設計された魔法の使われた試練だ。確実に攻略するヒントが並べられてる筈だ」

幸利は今までの迷宮を辿ったことを思い出した。オルクスを除く、大迷宮はどこかクリアさせる意思を感じ取っていた。ライセン迷宮では密室に閉じ込めれば自分達をそのままクリアさせないこともできた。グリューエンでは最後の試練は、普通、数が分かつたがクリアあそこは他の迷宮クリアが前提なので、この世界の真実がある程度わかっている筈。ハルツィナはだって仲間さえ信じ続ければクリアできないはずがない。あのボスGが本気で殺しかかるのなら、そもそも個体数を作るのではなく、全部が集結して圧倒的なステータスで自分達を倒せば良いのだから。

今回は殆どが乗り越えることが出来ているメンバーが多く、迷宮側からのヒントのよ

うなものは見受けられなかったが、天之河には与えられているのだろう。

あのまま虚像と戦い続けければ、そのまま負けてしまい、そのまま失敗してしまうのだろう。だが意識の中なら別のはずだ。

鏡に写った自分ならば元々は同じステータスだが、闇が上回るとステータスが上がる仕様はここでは適応されていないのはなんとなくだがわかっている。

「……だが、俺は虚像に」

「いや、ここからアイツを追い出せばいい」

「なるほどな……だが幸利、追い出しただけじゃクリア出来ねえんだろ？」

「そりゃそうだ。現実で倒さなきゃいけねえからな。つーわけで龍太郎は天之河と話し合いをしろ。何を抱えてるか話せ天之河。その間俺がああ虚像を止めてやる」

そう言つて幸利は虚像に重力魔法と空間魔法を同時に発動して、拘束する。

「光輝……お前は……自分が悪者になるのが嫌なんだろ」

「ああ……ずっとやってきたことが間違いだって認めたら俺は……」

「間違えたつていいと思うぜ俺は」

「な、なんで……」

「人間絶対間違ひしか起こさねえだろ？ 本当に悪い奴は……檜山達みたい、反省もしないで間違つたことをし続ける奴らのことだ……」

「間違ったことを……し続ける……」

「ああ……俺だって、光輝に注意されたことだってある……だけどそのお陰で、俺はこうやって立っている。だから今度は俺がお前を止めてやる。それが親友つてもんだろ？」

そう言って手を差し伸べる龍太郎。

だが天之河はその手を掴まず下ろしてしまった。

だから……

龍太郎は……

その手を――

無理矢理掴み

「ちよつ!？」

「いいから立てっ！」

そのまま強引に立ち上がらせるっ！

「早く行くぞー！いつまでもウジウジカッコ悪いことすんなー！いつも前を向いて、俺達を引っ張っていた光輝はどうしたんだよー！」

龍太郎が喝を入れる。

「っ……………」

「最後に聞くぞ……………戦えるか光輝」

その問いに天之河は……………

「ああ……………これ以上……………カッコ悪いことしてたら爺ちゃんに叱られちゃうもんな……………」

パチンと自身の両頬を叩いて気合いを入れ直し、地面に転がっている聖剣を手に取り
る。

「清水！すまない！俺はもう大丈夫だ！正気に戻った！」

「おいコラ！それ全然、安心できねえセリフじゃねえか！」

「えっ!? そうなのか! すまない!」

そう言いながらも幸利は拘束している虚像を解放する。

『へえ……俺を倒しに来たのか……無駄な足掻きするよなあ……清水に倒して貰えばよかっただろ』

「そうかもしれないな……でも……俺は俺の手で『俺』を超えたいんだ!」

そう言つて天之河は聖剣を振りかぶる。

虚像はそれを受け止めようと構えた——しかし攻撃は正面の聖剣ではなく、右から来た炎魔法だった。

『何ッ!?!』

虚像は自分が不意打ちをしたことに反応できずにモロに喰らう。そしてそのまま聖剣による斬撃を喰らう。

「ふっ……!」

『ぐあっ……!』

後ろに吹つ飛ぶ虚像目掛けて、天之河は聖剣に魔力を込めて斬撃を放つ。

『天翔閃・散!』

聖剣を何度も振り、光の斬撃を何度も放つ。

『チッ! 止め! 『光鎧!』!』

すると天之河は手を突き出す。

「止まれ！天翔閃！」

天翔閃を防ごうとした虚像だが、その攻撃が止まり、どうすることもできなくなった。解除して攻撃に戻ろうにもいつ動くかわからない天翔閃に対して光鎧を貼り続ける。

「『天翔閃・貫突』！」

周囲の天翔閃の間を通り、突撃をかまし、光鎧を貫こうとする。

そうはさせまいと光鎧を収束させたい虚像だが、それをしたら止まっている天翔閃が防げないので、更に魔力を込めて防ぐ。

ピシリ……

『ぐっ……』

「そろそろ……外で決着を付けようじゃないか……！」

バキバギイ！

「動けっ！」

光鎧が貫かれ、粉々に砕け散る。

無防備になった虚像を止まっている、天翔閃で追い討ちをかける。煙が晴れるとそこに虚像の姿はなかった。

「ふう……」

「やったな光輝」

「ああ……二人ともありがとう……こんな俺の為に……」

「感謝するのはいいが、まだ終わってねえからな。ここからが本番だからな」

そうここで虚像を倒してもまだ外に追い出しただけであつて、現実で倒さないと意味がない。

「ああ。だけでも俺は負けない。いや、この試練を乗り越える。2人とも見ていくれるか」

それに対して幸利と龍太郎は、

「勿論だぜ。今度こそ一緒にクリアしような」

「お前をクリアさせる為に手を貸してんだ。クリア出来なかつたら半殺しだぞ？」

龍太郎は笑いながら同意し、幸利は半分脅しを入れる。

「てか、ここからどうやって出るんだ幸利？」

「えーつと……」

考え込む。

「おい幸利？」

「悪い。わかんねえ」

「はあああああああああ!?!」

天之河光輝の意識の中で2人の叫び声が響いたのだった。

外では鈴が結界で天之河の動きを封じている。

「幸利達は大丈夫かしら……」

「ご主人様や坂上は問題なからうよ。勇者が問題じゃがのお」

優花とテイオがピクリとも動かない3人の姿を見て様子を伺っている。

すると天之河の身体から黒いモヤのようなモノが溢れ出て、そのまま離れた場所で実体化する。

『ぐっ……まさか追い出されるとは……』

虚像の天之河だった。

「虚像が出たってことは……」

「ご主人様達は成功したようじゃな……」

「でも、3人共動かないよ?」

虚像は力を溜め始める。

すると、3人の身体が同時に反発するように吹き飛ばす。

「何ッ!?!」

そのまま壁に激突してしまう。

壁から龍太郎が立ち上がる。

「おいゴリアー！ 幸利イ！ 出られないからってアレはねーだろ！」

「流石にこれは俺もやらないぞ……」

2人から怒られている幸利。

「アンタ何やったのよ……」

「いやー……天之河の意識の中から出られないから自爆したんだよ」

つまり、爆発オチなんてサイテーである。

「とにかく、天之河、勝ってこい」

「ああ！」

意気揚々と天之河は虚像に斬りかかる。

だが油断はしておらず、しっかりと相手を見て聖剣を振るう。

「火炎旋風脚！」

炎を纏った回し蹴りを虚像の横っ腹に当てる。

その回し蹴りを虚像は喰らったまま掴みそのまま黒い聖剣で突き刺そうとする。

「尖れ！」

足具の脛部分が尖り、虚像の腕に突き刺さる。

それすら構わず突き刺そうとするものの、聖剣を握っていない手で黒い聖剣に裏拳を

当て

「弾けるー！」

弾く。

ハジメが防具に様々なギミックを搭載しており、それを満遍なく使い始める。

『ぐっ……なんであいつの改造を受け入れている！』

「勝てなきゃ意味がないだろう？もう俺は迷わない……勝って、試練を乗り越えるんだ
！」

天の河は、拳で虚像の顔面を殴りそのまま掴まれている逆の足で再び顔面を膝蹴りする。

流石にたまらず虚像は足を離す。

『『天翔閃・邪炎』！』

虚像は黒い炎を纏いながら斬撃を放つ。

「かき消せ『破魔光』！」

掌から放たれた、無色のオーラが黒い聖剣の炎を打ち消す。

『コナクソツ！』

今度は虚像が暴走し始める。

『『限界突破』！』

ステータスを倍加させて切り掛かったのだが易々受け止められてしまう。

『なっ!』

「痛ましいな……これが前までの俺か……本当に先輩達に迷惑かけて……怒りを買って……本当にバカだよ俺は……」

黒い聖剣を逆手に持ちなおした聖剣で受け流し、すれ違い様に渾身の一撃をぶち込む。

「八重樫流刀術……『音刃流し』!」

八重樫流の技で虚像に大きなダメージを与え、更に追撃を始める。

「燃やして浄化しろ『聖炎』!」

白い炎で黒い聖剣をへし折る。そして聖剣を腰溜めに構えて、魔力を貯める。

「トドメだ……我流……『天翔煌刀』あまかけるひかりがたな

魔力が最高潮に輝き出した瞬間に、一気に振り抜き、虚像の胴体を横に真つ二つに切った。

最後の神代魔法

天之河が自身の虚像を両断し、聖剣を腰の鞘に納める。

『……ああ、くそつ俺の負けかよ』

「そうだな。お前は俺に負けたんだ」

『先に進めばいいさ。勝ったんだからな』

そう言つて、虚像は解けて消えていった。

「お疲れさん光輝」

「龍太郎、清水……本当に助かった。ありがとう」

「クリア出来たならいい。先に進むぞ」

幸利へそう言つて先に進む。

天之河の試練を見届けていた仲間達もそれに追付いして先に進む。

氷の通路を抜けるとそこには、既に合流していた士郎達とハジメ達^がいた。

「みんなクリア出来たんだね」

「まあな。ここもクリアしなきゃ帰れねえからな」

「これで全部だよ。これで帰れる物が作れば良いけど……」

「使えるようにならないとそれはわからないからなあ……」

「流石に期待せざるを得ないがな……」

3人で会話していると、天之河が歩み寄り、士郎の前に立つ。

「先輩、南雲……地球やオルクスで迷惑をかけて、本当に申し訳ない……っ！」

士郎とハジメに頭を下げた。

「許されるとは思ってません……これはケジメです」

それに対して士郎は

「……まあいいよ。許す許さないはともかく、これから何もしなければいいし」

そう言つて士郎は先に進むのだった。

「優花さん、テイオさん。あの勇者に何があつたんですか？」

シアが耳打ちで2人に聞くのだが、天之河の精神世界に入つてないので、わからない。

「まあ、あまり詮索するようなことでもないですね」

そう言つてピヨピヨ歩きながら士郎の所まで戻つていった。

「しかしまあ、ここはほんと精神的に追い詰めるものが多いわ……二度とやりたくないわ」

「雫ちゃん……それは全員が同じ事思つてるよ……」

雫が周囲を見ると、全員が同意の視線を送っていた。

「まあそのお陰で僕はこうしてお兄ちゃんにベツタリ甘えられるんだけどネ」

そう言いながら士郎の腕に抱きつき、指を絡ませる恵里。

それなりに膨らんでいる胸を押し付ける。ふにふにと柔らかな温もりが右腕に伝わる。

それを見た雫も恵里とは逆の腕に抱きつく。当然、豊満な胸が押しつけられ、ムニユムニユと押し返されるような感触が伝わる。

「ああーお二人ともいつの間にも腕が空いてない……なら……えいっ！」

そう言ったシアは士郎の背中に抱きつく。雫にも引けを取らない胸が背中に押し当てられ、さらにおんぶされるように、しがみつく。

士郎の身体には柔らかいメロンが4つ、林檎が2つつついている。それで動じる様子がないのは、自身を制御しているからなのか。

彼の視線の向こうではハジメの両隣に香織とユエがピツタリとくつついていた。

そうこうしているうちに、行き止まりに到着した。その行き止まりの水壁には七角形の頂点に各大迷宮の紋章があしらわれた魔法陣が刻まれており、士郎達が近付くと淡く輝き始めた。そして、壁全体が光の膜のようなもので覆われていく。大迷路の出口とよく似た現象だ。

その光の膜に触れると、水面に石を投げられるたように波紋が広がる。

全員が膜の中に入った。

「……分断はされなかったみたいだね」

「みたいだね。それにあそこ」

「ようやく着いたようじゃのう」

「綺麗な神殿ね……」

広い空間に出た。

この迷宮ではほとんど見ることもなかった水もあり、防寒具を脱いでも問題ないことから、ここが最深部であることがわかった。

「士郎、向こうに魔法陣あるみたい」

羅針盤を持つハジメが先導して解放者の住処の中を進む。

中は全てが芸術的な装飾が施されており、相当拘ったのだろう。

そして魔法陣の上に立ち、最後の神代魔法、『変成魔法』を会得したその時だった。

「がっ!?!ぐああああ!?!」

「う、うあああああっ!」

「い、いぎやあああっ」

「……うっうっうっうっ!?!」

「あぐうううっ!？」

「がああああつ!？」

突如、士郎以外のオルクス落下組が苦しみ始めた。そして痛みが引いたのか声が聞こえなくなると同時に倒れてしまった。

「み、みなさん!？」

「と、とりあえずどこか横になれる部屋に運ばないと!」

「……そう、だね」

士郎はフラフラと羅針盤をハジメの手からとり、寝室を探し、全員を寝かせた。

「しかしなんで南雲達が一斉に……」

「……そりゃボク達は迷宮を全てクリアしたからね。概念魔法の知識を一気に詰め込められたら倒れるさ」

「なるほど……ん?なんで天野先輩は大丈夫なんですか?」

「トータスに来て一回目、グリユーエンで二回目、三回目ともなれば流石に慣れる」

そう言ったものの、周りから見れば辛そうである。

「士郎さんも横になった方がいいですよ……」

「……そうするよ」

「それじゃあ僕とシアが抱き枕になってあげるね」

そう言つて士郎は恵里とシアを抱きしめて、雫の隣で仮眠をとり始めるのだった。柔らかな女性特有の感触といい香りに包まれて意識を手放したのだった。

士郎 side

解放者の住処にある寢室のベッドの仮眠から目を覚ます。

ムニユムニユ♡

手のひらに柔らかないモノを感じる。

「柔らかい……?」

確認のためにもう一度触る。

確かに柔らかないモノが手のひら一杯にある。

「あん……♡」

「んっ……♡」

背中に冷や汗が伝う。

ボクはどういう状態で寝た?

恵里とシアを抱きしめて寝た。つまり今、触つて揉んでいるのは、2人のおっ……

「兎に角起きないと……んっ?」

『すう……すう……』と規則正しい寢息を漏らす2人をなんとかして起こそうと、身体を

動かそうとしたのだが、動かなかった。

唯一動かせる首を動かして自分の身体を見ると、そこには恵里の隣で寝ていた雫が、ボクの身体に抱きついていた。

「身動きがとれん……どうしようか……」

「このままイタズラして起こすか？」

「いやいや……今はそんなこと……」

だがしかし、ボクも男である。両手にある柔らかいものを堪能したい気持ちはある。そんな気持ちに蓋をして、腕を揺らす。

「みんな起きて……!」

するとモゾモゾと動き始め、目を覚ます。

「おはよう、お兄ちゃん」

「士郎さんおはようございませう……」

両腕で抱き締めている2人は目を覚ます。

すると彼女達はボクの手がどこにあるか把握してしまった。

「ふーん……お兄ちゃんのエッチ♡」

「そんなにシたいなら言ってくればいいんですよ?♡」

頬を染めながらジリジリと近寄ってくる。

「寝ぼけてたんだから許して……」

そう言って自由になつた両手で雫も起こす。

「ほら雫も起きて……」

しかし起きる気配……いや、動く気配がない。

「雫？」

ボクは彼女の頬を摘む。

「い、いひゃいわ、士郎さん……」

「寝たふりしてないで起きる」

「このままシてもいいのよ？士郎さんのココも硬くなつてるのだし」

「雫まで……どうしてこんなになつてしまつたんだ……」

「お兄ちゃんのせいだよ？ホルアドの宿とか、アンカジの宿屋で僕達にイロイロ

教え込まれちゃつたんだから」

いやまあ……うん……

否定できなかつた。

「とりあえずもう起きよう。みんなも目を覚ましてるだろうし」

そう言つて、部屋から出る。

そこには坂上くんや鈴、天の河がソワソワしながらソファに座っていた。

「先輩！ 零！ 大丈夫ですか！」

真つ先に反応したのは坂上くんだった。

「うん、少し寝たら治ったよ」

そして別の部屋からもハジメ達が出てくる。

「ハジメ達も大丈夫？」

「うん。というか士郎が倒れなかったのは……」

「流石に三回目にもなれば慣れてくるよ」

「ああ……」

そうして全員の無事を確認すると、先程習得した変成魔法と概念魔法の説明をする。

「んで士郎の異様に高い、神代魔法適性はそういうことなんだな」

ボクの技能の殆どが神代魔法に関係が近かったりしたのだ。民の叡智、変容、強化魔

術、大地感知と神代魔法を使えば応用できる物だ。

「なら帰還用のアーティファクトが作れるってことですか」

「そうだね……ニンジンを目の前にぶら下げられた馬みたいないな気持ちなんだ。試さずに

はいられないっ！」

「うん。私達も手伝うよハジメくん！」

「……ん。魔力の細かいコントロールは私たちがする」

「なら3人だけにした方が良さそうだな。オレもオレでなんか作りてえしな」

ハジメ達が入った部屋に入り入り、そう言った幸利はも3人が入った部屋とは別の部屋に入った。

「さーて……ボクもエヒト対策のアーティファクト作らないとね」

それと恵里を連れていく。

「恵里。最後の調整するから来て」

「最後の……？つ！わかった…」

そう言つてボクと恵里は個室に入り、ボクは椅子に座る。

そして恵里は服を脱ぐ。『シユルシユル』と布が擦れる音となる。

「じゃ、早速変成魔法を使うよ」

衣類を脱いで、露わになった背中の素肌に触れ、魔力を流し込む。

「んっ………！」

「よし、これで終わりだね。もう服を着ていいよ」

「ん………」

服を着た恵里はこちらに向き直る。

「お兄ちゃん。ここって広いところあったっけ」

「天之河と坂上くんが鍛錬してるみたいだし、あるんじゃないかな？」

「なら僕も行ってくるよ。新しい技能の練習もしないとだし。後、デュランダルとバルムンクの強化って出来る？」

「そうだね……まだ改造できる余地があるし」

「ならお願い。リクエストとかは特にならないから」

そう言って、彼女は部屋を出る。

「さてと……」

ボクは宝物庫から神水が出し切った神結晶を手取る。

「鉱物ならボクの『民の叡智』で武器とかに形を変えられるはず……」

そう言ってボクは魔力を込めて武器を作るのだった。

恵里 side

僕はお兄ちゃんに剣二刀を預けて、改造が終わるまでの間、広々とした部屋で、ブランチブレードを持って刀を構える雫に斬りかかる。

「ふっー」

「甘いっー」

がむしやらに、だけど、正確に雫の隙や防御の薄い所を突くのだが、中々攻めきれな

い。むしろ攻めているはずの僕が逆に追い詰められている。

魔法などを使えば僕はまだマトモに戦えるのだが、今回は魔法を使わないルールで戦っている。

つまり――

「せいっ!」

雫が刀を握っていない手で正拳を横つ腹に叩き込む。その拳を脛で受け止める。

僕は左手の剣を地面に突き刺し、ぐるりと横に回転し、蹴りを放つのだが、雫は刀を離し、僕の足を掴み、そのままグルグル回し始める。

だがこれは何度もお兄ちゃんにもされた、僕は腕の関節を一度外し、勢いよく伸ばす。

「んな!」

流石に腕を外して刺突を放つことは予想外だったのか、咄嗟に僕の足を手放してしま
う。

勢いよく飛んでいってしまう。身体をぐるりと回して体勢を直そうとしたのだが、

「ぐうっ……!」

外している関節が変に捻れて痛みが走る。それを堪えてなんとか体勢を立て直す。

「士郎さんも士郎さんだけど……恵里、貴女も相当な無茶するのね」

「あはは……でも僕はみんなと比べて、色々しないといけない。使える物はなんでも使

う主義だからね」

外した関節をもとに戻す。

雫の左肩は先程刺突でつけた傷がついている。ただ、その傷は掠った程度なのでダメージなんてない物だし、すぐに治ってしまった。

「やっぱり、雫には勝てないなあ……」

しばらく斬り合っていたので疲れてしまい、休みたかったので、両手をあげて休憩に入るのだった。

士郎 side

ボクは対エヒト戦のアーティファクトを作り終えて、部屋を出る。それでもまだ嫌な予感がモヤモヤしている。

「なん……だろうなこの感覚……」

ユエがエヒトに狙われているのはわかっているので、その対策アーティファクトを優先的に作り、完璧に仕上げ。他にも神性に対しての武器や防具も作ったというのに、まだ不安が拭えない。

「……」でウジウジしてても仕方ない」

そう考えて、ボクは個室から出る。

「士郎。そっちはどうだった？」

「ひとまず、エヒト対策のアーティファクト……ユエのやつは作れた」

ボクは腕輪をハジメに手渡す。

「これをつけていればエヒトはユエの身体を乗っ取れない筈だよ」

「ありがと」

魂魄魔法と空間魔法を使い装備した者にありとあらゆる魔法的干渉を防ぐ。特に精神的な物をだ。

「でこれが、恵里のデユランダルとバルムンク」

「ありがとってお兄ちゃん！」

武器をもらってピヨコピヨコと軽く跳ねる。

かわいいのだが、武器をもらって喜んでるのはなんとというか……まあいいか。

「はい、これが雫の新しい刀とこっちがシアの戦鎚」

雫にはオルクスから出た時に渡した銘のない刀をシアには星砕きを渡した。

「で雫……大分前から渡してた刀の銘なんだけど、良いのが浮かばないから、姫鶴一文字にしたよ。やっぱりボクにネーミングセンスはないからね……」

「ありがと士郎さん……」

「これでエヒト奴をウツサウサにしてやるですう！」

「それでハジメ達は出来たの？」

「うん。帰還用のアーティファクトも完成したし、幸利が召喚防止用のアーティファクトを作ってくれたし」

「帰還準備は万端になった」

「少し僕たちは休ませてもらうよ……」

そして魔力と体力が全快し、次の戦いへの準備を整える。

「忘れ物とかはない？」

ボクが確認を取ると、全員が頷いた。

「ならここを出ても大丈夫そうだね」

そしてショートカットへと向かう。

今回のショートカットはともファンタジー染みている。

「氷の竜か……」

全員がそれに乗り込むと竜は羽ばたき始める。

「太陽の位置からすると北西に向かっているのか……どうやら、親切なことに雪原の境界まで送ってくれるらしいね」

「……ん。ミレディとメイルは見習うべき」

「わたし、解放者って女性の方が悪辣な気がします」

「シア、それはみんな思ってるよ」

その通りである。彼女達と共に生活していた男性解放者達は相当苦勞していたに違いない。

雪原の西は魔人領であり、北は「ライセン大峽谷」、東は「ハルツィナ樹海」だ。北西に進んでいるということは、魔人領にも北大陸にも、どちらにも行きやすい場所に降ろしてくれるということなのだろう。しかも、上空の冷えた空気を余り感じないので、氷竜を媒介に簡易の結界も敷いてくれるようだ。

大迷宮を攻略したあと、極寒の雪原に放り出されるのは勘弁であるが、一部解放者の所業を思えば、「なんとという心配り!」と、ボク達は少々感動してしまった。

魔人族のところへ乗り込み、ユエの叔父に取り憑いている魔王に喧嘩を売りにいく予定でもある。

天之河達もボク達に付いてくるようだ。大物はともかく下っ端連中なら相手のできるので、梅雨払いをしてもらうことにした。

着陸地に近づいてきた。

「……つち。どうやら向こうからお出迎えのようだね」

着陸地点にいたのは大量の魔人族とそれを載せる飛竜や魔改造された魔物そして――

「やはりここに出てきたか。今度こそ貴様達を仕留めくれるわ」
魔人族の将軍フリード、そして本物の神の使徒達だった。

追い詰められた者達と魔王

空と地上一杯のら魔族と神の使徒がこちらを見ている。

「へえ……個人個人じゃ勝てないから物量に変えたんだ」

「フン……貴様らに我々の全力、エヒト様の僕を差し向けるのは甚だ遺憾だが、それで貴様らを葬ることができればいい」

そういうフリードだったが、こちらを少し観察する何かがない事に気づいたような表情に変わる。

「む？ヴェアベルトの奴はいないのか。なんだ、裏切られたのか……クツクツクツ……ハツハツハツ！やはり裏切り者は所詮裏切り者のようだなあ！」

ヴェアベルトがいなくなり、何やら気分が昂ったのか笑い始める。こちらを完全に馬鹿にしているようだ。

「奴がないのなら都合だ。がしかし今回は殺し合いをしに来たわけではない」

「ふーん。んでどんな命令でももらったのかな？ボクらに殺される栄誉？それとも犠牲になつてクソ神が対策を練る為の実験台モルモットになる栄誉？どちらでもボクは構わないよ。

こっちとしても実験体が欲しかったんだよ」

士郎は煽り返した。

それに怒りが湧いてきたのか、額に血管が浮かぶ。が隣のノイントと同じ顔をした神の使徒が制することで落ち着きを取り戻した。

「……寛容なる我が主は、貴様等の厚顔無恥な言動にも目を瞑り、居城へと招いて下さっている。我等は、その迎えだ。あの御方に拝謁できるなど有り得ない幸運。感動に打ち震えるがいい」

「はあ？」

何考えているのかわからない。いきなりこちらを殺さんばかりの戦力を差し向けているのにも関わらず、魔王城への招待をすと言うのだ。

「だったらテメエ一人で来いよ。それともアレか？一人でカミサマの神託を熟するのが怖いからみんなに見守ってもらってるのか？だとしたら、笑えるぜ？」

幸利も煽り始める。

「……挑発には乗らんど。貴様らには我が魔王様の偉大な目的を知ったところで無意味なのだからな」

「……偉大なる目的、か。さて、魔人族はどこまで踊らされているんだろうね」「なにか言ったか？」

「いや別に？魔王様ご立派ご立派と褒めていたところだよ」

「……」

ボソツと呟いたハジメに、耳聴く気がついたフリードが尋ねるが、肩を竦めて軽口を返されて、流石に苛立ったようにこめかみをピクリと痙攣させた。

「まあいいや。エヒトをぶち殺す前のウォーミングアップと行こうか」

「蹂躪だね？ 鼠一匹逃がさないよ」

「とりあえず皆殺しでOK？」

「当然！」

「……ん。招きに応じる理由もない」

「細切れにしてあげるわ」

「ぶっ飛ばして終わりですよ！」

「……殺戮の時間だ」

「どてっ腹に風穴開けてやるわ」

「そも、招き方もなつとらんのじゃ。礼儀知らずには、ちと、お灸を据えてやらねばいかんのう」

士郎は銃剣・干将・莫耶を投影し、狙いを定める。

それに続いてハジメ達も武器を構え、今にも敵を殺さんばかりの圧を放っている。

「これを見ても同じ事が言えるか？」

フリードの前に鏡のようなものが発生して割り込んだ。訝しむ士郎達の前で、それは一瞬ノイズを走らせると、グニヤリと歪んで何処かの風景を映し出した。

空間魔法の一つ。『仙鏡』——遠く離れた場所の光景を空間に投影する魔法だ。

仙鏡に映し出されたのは、荘厳な柱が幾本も立ち、床にはレッドカーペットの敷かれた大きな広間だった。そこからカメラが視点を変えるように映像が動き出す。

見え始めたのは、玉座が置かれている祭壇のような場所。やはり映っている場所は王城——それもおそらく魔王城の謁見の間なのだろう。高い天井に細部まで作り込まれた美しい意匠や調度品の数々が魔王の威容を映像越しにも伝えてくる。映像は更に動き、その視点は玉座の脇へと移っていった。

そうして見え始めたのは、鈍色の金属と輝く赤黒い魔力光で包まれた巨大な檻。当然、中には何かを捕えているわけだ。

「チツ……」

幸利が舌打ちする。

ハジメも苦虫を噛み潰したような顔になる。

天之河達の動揺が1番酷かった。

「そんな……」

「いつの間……!」

仙鏡に映し出されたのはクラスメイト達と愛子、そしてリリアーナ姫だったのだ。

愛子とリリアーナは、大抵の生徒が膝を抱えて不安に表情を歪めている中で、力なく横たわっている生徒の幾人かを必死に介抱しているようだった。よく見れば、その倒れている生徒は永山のパーティメンバーのようだ。他にも、玉井等愛ちゃん護衛隊のメンバーも永山達ほどではないが、苦痛に歪んだ表情で蹲っていた。

ハジメは、咄嗟に羅針盤を取り出し、愛子の居場所を探る。

「……本物か」

「ほう、随分と面白い物を持っているな、少年。探査用のアーティファクトにしては、随分と強力な力を感じるぞ？それで大切な仲間の所在は確かめられたか？」

羅針盤は南大陸の一点を指し示している。それは、愛子が間違いなく魔人領の魔王城にいたということだ。偽物の映像でないことを確信したハジメが舌打ちを漏らすと、フリードは羅針盤に興味を持ちながら、ここに来て初めてあからさまに感情を発露させた。言葉に、たつぷりと優越感が乗せられたのだ。

ハジメの態度から、士郎達も映像が本物だと察したようで苦い表情となる。

「なんとか……できないのか……」

天之河は悔しそうに歯軋りをする。叫ばなくなった辺り、成長しているようだ。

ド。パ。パ。パ。パン！

士郎、ハジメ、香織が銃弾をフリード目掛けて放つ。

だが、その弾丸は神の使徒の大剣に防がれる。

その大剣は粉々に砕け散る。

その隙に、フリードが冷や汗を流しながらも辛うじて表情は変えずに口を開いた。

「……この狂人が。仲間の命が惜しくないのか」

「黙ってたつてどうせ皆殺し対象なんだから足掻くでしよ普通」

「威勢のいいことだ。これだけの使徒様を前にして正気とは思えんが……ここは、もう一枚、カードを切らせてもらおうか」

そう言ったフリードは愛子達を映す映像の視点を切り替えた。どうやら、愛子達を捕えている檻の横に、もう一つ檻があつたようだ。同じ作りではあるが、かなり小さなサイズであるそれは、人を数人捕えるためのものだった。

そこに映し出されていたのは——
ゾワツ！

一瞬、冷たい殺気が辺りを覆う。

殺気を放っているのは士郎、ハジメ、香織、ユエ、シア、雫の迷宮組だった。その中でも士郎とハジメの殺気がフリードに集中していた。

「っ——っ——き、貴様等、あの魚モドキ共がどうなつても、いいのかっ」

フリードが、ともすれば止まってしまいそうな呼吸を意識して行いながら、歪めた表情で警告を口にした。既に、冷静さを装う余裕はない。

フリードが魚モドキと言った、3人の影はリーニヤ、ミュウ、レミアだった。

「お前、人質取ったからって良い気なるなよ……良いか、人質つてのは強者が弱者使うから効果があるんだよ……弱者が使ったところで得られるのは逆鱗だけだ……！」

士郎は濃密な殺気をフリードに向ける。

ふらりと白竜から落ちそうになるものすぐに体勢を立て直す。

「……まあいいよ。招待を受けるよ」

「何？」

「招待を受けてやるって言ったんだよ。二度も言わせないでくれるかな？」

「っ……ふん、最初からそう言えばいいのだ」

繰り返された言葉と同時に、鬼気が徐々に収まっていく。フリードは呼吸を乱しつつも、余裕を取り戻した表情で嘲笑を浮かべた。そうして、気絶した灰竜の群れを變成魔法の一つで叩き起しながら、魔王城へのゲートを開くための呪文を詠唱し始めた。

ユエが首を傾げながらハジメを見上げる。

「……いいの？」

「……うん。クリスタルキーを使えば空間を繋げられるだろうけど、タイムラグが大き

過ぎる。それに、空間転移系の力を保有していることは向こうも承知のはずだよ」

「なにか、対策をしてるかもってことですね」

「万が一があつては困るからのおう。先生殿達と違って、ミュウたちでは、そのタイムラグを自力では稼げんからな」

テイオの言う通り、概念魔法のタイムラグをミュウ達がどうこうはできないのだ。

無理矢理やれば良いのだが、

「……さあ、我等が主の元へ案内しよう。なに、粗相をしなければ、あの半端な生物共と今一度触れ合えることもあるだろう。あんな汚れた生き物のながいいのか理解に苦しむがな」

フリードのゲートが完成し、繋がった空間の向こう側に大きなテラスと眼下の町並みが見えた。どうやら愛子達のいる場所である謁見の間に直接転移するのではなく、王城の上階にある外部分にゲートを開いたようだ。

おそらく、王城の内部においては侵入を禁ずる結果でも敷いてあるのだろう。たとえば、味方であつても直接的な転移は出来ないようになってるに違いない。魔王城の防衛を考えれば当然の措置だ。

フリードの嘲りの言葉を端から聞いていなかったようにスルーしてゲートへ歩みを進めようとした士郎に、鼻白んだような表情になったフリードは、なにかに気がついた

ように口を開いた。

「そうだった。少年、転移の前に武装を解いてもらおうか」

「……」

ただ無言で静かな眼差しを返す士郎に、フリードは遂に優位に立つた愉悦を隠しもせず、嘲笑を交えて言葉を繰り返す。

「聞こえなかつたか？ さつさと武装を解除しろと言ったのだ。ああ、それと、この魔力封じの枷も付けてもらおうか」

それに対して士郎の返事は

「だが断る」

「何？」

「お前は何度も聞き返してくるけど耳が悪いのか？」

「……己の立場を理解できていないのか？ 貴様等に拒否権などない。黙って従わねば、あの醜い母娘が——『調子に乗るな』つ……なんだと？」

「頭も悪いようだな。お前は弱者、ミュウ達に何かしてみろ。この辺り一帯を不毛の大地にしてやるよ」

「なにが目的で招待なんぞしようとしているのか知らないけど、敵の本拠地に丸腰で乗り込むつもりはない。それではなにも出来ずに全て終わってしまうかもしれないから

ね。そんなことになるくらいなら、イチかバチか暴れた方がまだマシだ」

「……あの母娘を見捨てるというのか」

「見捨てない。ただ、ここで武器を失う方が、見捨てることに繋がると考えているだけだ」

「……貴様等は、やはり狂っている」

故に、フリードの抱いた感想はそういうものだった。自分が攻め手に回って優勢になつているときに、相手が拠点を放棄して逆に攻めて来る。しかも、その根幹にあるのが、どちらが先に相手を滅ぼせるか、というチキンレースのようなものだ。確かに、正気を疑っても仕方ないだろう。

「なら、その狂人が暴れないうちにとつと案内しろ。今生きてるのは……これ以上言わなくてもわかるよな？」

幸利は不気味な笑い顔で言う。

フリードは主の御前に武装したままの敵を連れて行くというのは、敬虔な下僕として許容しかねるようだ。

そこへ、今の今まで一言も言葉が発しなかった神の使徒が割り込んでくる。

「……フリード。不毛なことは止めなさい。あの御方は、このような些事を気にしません。むしろ良い余興とさえ思うでしょう。また、我等が控えている限り、万が一はあり

ません。イレギュラーへの拘束は我等の存在そのもので足りません」

「むっ、しかし……」

「私の名はアハトと申します。イレギュラー、あなたとノイントやファイアンの戦闘データは既に解析済みです。二度も、我等に勝てるなどとは思わないことです」

「どうやら今度の神の使徒の名前はアハトというらしい。武装しても無駄だと言いたいのだろう。」

クラスメイト達が囚われている場所に足を踏み入れる。

「パパーーーーー！ママーーーーー！」

リーニヤがこちらに駆け寄ってくる。

「ごめんねリーニヤ。巻き込んだじゃって」

「大丈夫。パパ達ならぜったい助けに来てくれるって信じてた」

「僕達は負けないから。リーニヤ達は待っててね」

「うん！」

士郎と恵里はリーニヤの頭を撫でる。

近くではハジメとミュウ達も同様である。

玉座の背後から声が響いた。

「いつの時代も、いいものだね。親子の絆というものは。私にも経験があるから分かるよ。もつとも、私の場合、姪と叔父という関係だったけれどね」

玉座の後ろの壁がスライドして開く。そこから出て来たのは金髪に紅眼の美丈夫だった。年の頃は初老といったところ。漆黒に金の刺繍があしらわれた質のいい衣服とマントを着ており、髪型はオールバックにしている。

するとハジメとユエ、香織が一瞬目配せをしたのが士郎達の視界に入る。

「……………う、そ……………どう、して……………」

「ユエ?」

「ユエちゃん?」

ハジメの呼び掛けにも気がついた様子なく、酷く動揺したような、有り得ないものを見たような掠れた声を漏らしたのはユエだった。その瞳は大きく見開かれており、真っ直ぐ魔王を貫いている。

ハジメは、明らかに尋常でない様子のユエに再度、声を掛けようとして妙な既視感に襲われた。ユエの金髪と紅眼。それは……………

「やあ、アレーティア……………久しぶりだね。相変わらず、君は小さく可愛らしい」

「……………叔父、さま……………」

ユエの掠れた声音が響く。その瞳は普段になく大きく見開かれ、小さくたおやかな手

は内心の動揺をあらわすが如く小刻みに震えている。

ハジメと香織の呼び掛けに気がつかないという、いつもなら有り得ない有様が、その動揺の深さを示していた。

そんなユエの様子を見て驚愕をあらわにする土郎達を尻目に、金髪紅眼の魔王は殊更優しく微笑みながら再度、土郎達には聞き慣れない名でユエに呼びかけた。

「そうだ、私だよ。アレーティア。驚いているようだね……無理もない。だが、そんな姿も懐かしく愛らしい。三百年前から変わっていないね」

選ばれたのは……

「そうだ、私だよ。アレーティア。驚いているようだね……無理もない。だが、そんな姿も懐かしく愛らしい。三百年前から変わっていないね」

「アルヴ様？」

能面のような表情で、しかし、疑問の呼びかけとわかる抑揚で魔王の名を呼ぶアハト。その様子からすると、まるでユエに対する魔王の態度が予想外の事態であるように見える。それは、使徒だけでなく、フリードも同様らしく僅かに訝しむ表情になっていた。するとアルヴがアハトに手を向ける、その方向にはフリードもいる。

次の瞬間、ユエに似た金色の魔力光が閃光榴弾の如く爆ぜ、一瞬、光で全てを塗り潰した。その光が、逆再生でもしているかのようにデインリードの手に吸い込まれて消えた後には、まるで電源が切れた機械のように崩れ落ちている使徒達の姿があったいきなりの状況に全員が啞然としている。

さらにアハトたちに向けた手を上に掲げると、ドーム状の魔力が広がる。

「ああ、安心して欲しい。盗聴と監視を誤魔化すための結界だよ。私が用意した別の声と光景を見せるというものだ。これで、外にいる使徒達は、ここで起きていることには

気がつかないだろう」

「……なんのつもりだ」

まるで使徒と敵対している者であるような言動に、ハジメがスつと目を細めながら問
い質した。

「南雲ハジメ君、といったね。君の警戒心はもつともだ。だから、回りくどいのは無しに
して、単刀直入に言おう。私、ガーランド魔王国の現魔王にして、元吸血鬼の国アヴァ
タール王国の宰相——デインリード・ガルディア・ウエスペリテイリオ・アヴァタール
は……神に反逆する者だ」

魔王としての威厳を以て発せられた言葉が、広大な謁見の間に凜と響く。その言葉
は、その場にいる者達へ本気で言っていると思わせるだけの力を持つていた。

「うそ……そんなはずはないっ。デイン叔父様は普通の吸血鬼だった！確かに、突出し
て強かったけれど、私のような先祖返りじゃなかったっ！叔父様が、デインリードが生
きているはずがない！」

「アレーティア……動揺しているのだねそれも……当然か。必要なことだったとは言
え、私は君に酷いことをしてしまった。そんな相手がいきなり目の前に現れれば、動揺
しない方がおかしい」

「私をアレーティアと呼ぶなっ！」

ユエが叫びながら、雷龍を放った。それに紛れてハジメと香織の二人もレールガンを打っていたが障壁に無効化されてしまった。

しかし、ボクは叫ぶ理由がわからないが、何故叫んでいるフリをしているのかはわかる。なんせ、既にデインリードの真実を知っている。

だが、彼を乗っ取っているのなら、その真実をも知っているはずだ。それをどこに入れたのかも。いや、知っていてもボク達がか知る為に必要なものがあつて、それをこっちは裏技で知ってしまったのなら、向こうが知っている事を知らないことがわかる。

そしてデインリードの話が始まる。

彼が魔物使いだったこと、先祖返りではないのに何故ここまで生きているのか、自分の正体がデインリードでありアルヴだということ、自身が神に反逆する存在だということ、ユエがエヒトに狙われる理由、ユエが封印される前の王城での話だった。

「……人質は？ 貴方が本当にデイン叔父様なら……私を裏切っていないかったというのなら、どうして」

「こうでもしないと会うことすらしてもらえないと思つてね。それに、いざというときのために彼等を保護するという目的もあつた。怪我に關しては許して欲しい。迎えに行つたのが使徒だったことと、彼女達の手前癒して上げることが出来なくてね。一応、死なせないようにと命じてはいたんだ。これからアレーティア共々、仲間になるかもし

れないのだしね」

「仲間……だど？」

「アレーティア。どうか信じて欲しい。私は、今も昔も、君を愛している。再び見まみえるこの日をどれだけ待ち侘びたか。この三百年、君を忘れた日はなかったよ」

「……おじ、さま……」

「そうだ。君のデイン叔父様だよ。私の可愛いアレーティア。時は来た。どうか、君の力を貸しておくれ、全てを終わらせるために」

「……力を、貸す？」

「共に神を打倒しよう。かつて外敵と背中合わせで戦ったように。エヒト神は既に、この時代を終わらせようとしている。本当に戦わねばならないときまで君を隠しているつもりだったが……僥倖だ。君は昔より遥かに強くなり、そしてこれだけの神代魔法の使い手も揃っている。きっとエヒト神にも届くはずだ」

「……わ、私は……」

デインリードの微笑みは益々深まり、手を差し出し、ユエを迎えるための言葉を紡ごうとした。

「さあ、共に行こう、アレーティ——」

ドパパパパン！ズガアアアン！

ハジメ達が一斉に攻撃したのだった。

「よく回る口だね。いや、作った原稿でも読んでたのかな？」

「既に知ってるから別に話さなくても良いのに、下が肥えてるのかな？かな？」

「そもそも叔父様が解放者のことを信じてないなら私をオルクスに封印したりしない」
そう言う3人は警戒体勢を続ける。

「やると思ってたけど、ここでやるか……クククつやつぱり面白いよみんな」

ボクらも武器を構える。

真実を知らない王国に残っていた組は動揺していたが武器を構えている。

既に Deinriid の真実とアルヴのことを知っているボク達からすれば無駄に時間を食ったが、問題は今のところない。念の為解析眼で確認したが、魂は一つしか見えなかった。

ユエの叔父のことを皆に軽く説明した。

「以上のことから、こいつは敵だ」

「それにこいつがかわいいアレーティアって言うのはイライラしたよ……」

「それを言つて良いのは私たちが Deinriid さん本人だけだよ？」

「二人は嫉妬諸々でぶつ放したのね……」

呆れたように雫が言うが、全員が同意したような顔をしている。

そのことにユエの顔が少し赤くなる。

「……二人が嫉妬……ふふっ」

大変、嬉しそうである。

脳天と胸をぶち抜かれ、全身を雷で焼かれたのにも関わらず Deinリードは動いてい
る。

「しづといな……流石、吸血鬼と言ったところか？」

「肉体を改造しているお陰さ。しかし、何故この男の真実を知ってる？……いや、そんなことはどうでも良い。次善策に移らなければならぬようだな……あのお方に面目が立たないだろう」

「死体を使ってるなんて悪趣味ですう」

「このエヒト様の眷属神たるアルヴが、死んだ後も肉体を使ってやっっているのだ。選ばれたのだぞ？身に余る榮譽だと感動の一つでもしてはどうかね？全く、この男も、死ぬ前にお前を隠したときの記憶も神代魔法の知識も消してしまうとは肉体以外は使えない男よ。生きていると知っていれば、なんとしても引きずり出してやったものを」

「……お前が叔父様を殺したの？」

「ふふ、どうだろうな？」

「……答えろ」

ユエから殺気が噴き出す。紅の瞳が爛々と輝き、手元の蒼炎が煌きを増していく。その青き焰はハルツィナ樹海で見せた焰だった。選別した魂のみを焼き滅ぼすことも出来る凶悪なもの。その脅威は、標的にされている魂そのものが感じ取るはずだ。

「ククク……もしかしたらこの男は生きているかもだぞ?」

「……だとしてもそのまま殺す。叔父様はその身体を使われて、世界を滅ぼされるのを望むはずがない。なら私が終わらせる」

ユエの覚悟が伝わりと同時に魔王城の窓、壁、天井が砕け散る。

外には魔族と魔物、神の使徒達が戦闘体勢で現れた。

「この状況から逃げ延びる事ができるかな?」

流石にこの状況からリーニャ達を守りながらは厳しすぎる。

「……どうしたもんか」

策を何度も頭で練るものの全て失敗してしまう。敵は既に魔法もプレスも発射待機に入っている。結果で防いだところで、四方八方からの長い攻撃には流石に耐えることは不可能な上に、ユエや香織が守りを固めてボクらが攻撃したとしても、神の使徒を複数体を相手するのは正直、無理だ。ゲートキーを使ってワープしたとしよう。流石にこの状況で長距離の移動は流石にキツイ上に、すぐに場所は特定されてしまう。さらに言うならここからのワープしようにも妨害結界が貼られており、ゲートキーそのものが使

「何ッ!?グワア!」

魔族の悲鳴が聞こえた。それと同時に魔法、ブレス攻撃がドンドン減っていく。

その隙にボクは偽・螺旋剣を投影し、結界の発生源であるアルヴの真後ろの魔法石を破壊する。

「今だ!全員散開!」

3人が結界を解除したと同時に全員一斉にゲートキーで安全な場所まで一瞬にしてワープする。

ワープした先は魔王城から少し離れた場所だった。

「ふう……死ぬかと思ったわ………たたく遅えんだよ………ヴェアベルト!」

幸利が叫ぶと上空からこちらに落ちてくる一つの影が見える。

着地する前に一度浮遊して、その勢いを一度殺した。

「すまない。合流できた場所が、ここからかなり遠くてな。だが、フリードの奴の手下よりは数は少し少ないが、練度なら劣っているとは思ってない。とにかくそちらの非戦闘員を安全な場所まで避難させてくれ」

「もう鍵でハイリヒ王城の中に開いたからすぐにも避難できるよ」

「よし、全員、先生とリリイ先導で入って。全員が避難したらボクらはここに残り、奴ら

を迎え撃つ」

ボクは空力を使って上空へと跳んでいく。

それ続いてハジメ達も神の使徒に向かっていく。

「無駄な足掻きはやめなさいイレギュラー」

アハト——いや全員が同じ顔なので全くわからないのでこれから木偶と呼ぼう。

木偶に斬りかかる。連中が使う分解も既に対応している。あれは魔法のようなモノだと考えている。ならばボクの持つ対魔力がそれを防ぐと考え、恵里に一度強力してもらい、実験した。

結果、防ぐことに成功したのだ。

「お前らの分解は既に対応済みだ！」

両手に投影した元の能力が霞みそうになっている干将・莫耶で奴らの大剣を破壊する。そしてその勢いのまま、木偶の頭と胸を突き刺し確実に仕留める。奴らの防御にも分解が関係しているのは初戦で把握している。

そのまま次の木偶に斬りかかる。

数が多いが、それでもやらなきや、ボクらの地球が狙われ、家族が危険に晒されてしまふ。

それだけでもなんとかして防がねばならない。

士郎達は魔族の相手をヴェアベルト達と天之河達に任せて、神の使徒の相手をして
いる。

皆の武器に分解耐性を付与しており、神の使徒の守りを破つてダメージを与えること
が出来ている。

「ハジメ！先にアルヴを討つ！」

「ああ！梅雨払いは香織達に任せる！僕、ユエ、士郎で確実に仕留める！」

士郎達は3人でアルヴのいる神の使徒が守る王城のつぺんまで駆け抜ける。

その間、恵里達が神の使徒の相手をする。鈴、坂上くん、天之河、の3人は魔族の
相手をする。

恵里は神の使徒のスペックを完全に掌握はしていないが、士郎達に並ぶレベルまでは
使いこなしているので苦戦はするが負けることはない。

「『無空』！」

恵里は空気を立方形に切り裂く。そこは完全に切り離される。そこから空気が失わ
れていき、そして最後は窒息して死ぬ。生物として活動している以上空気が無くては死
ぬと考え、真空の空間を作り出した。

しかし神の使徒は口パクで何かを喋ると同時にその空間を破る。

「まともな生き物じゃないんだね……」

どうやら連中、フオーザと同じで空気が無くとも生きれるようだ。

「だったら……『火柱』！『凍獄』！」

恵里は背中から翼から極太の火柱を放ち、使徒の周囲を黒い氷の空気で蝕む。

逃場をなくした使徒は翼で完全にその身体を覆って防御する。

その隙にバルムンクでその翼を切り裂き、デュランダルで剣を破壊、そして両手の剣で首を刎ねる。

「後ろツ！見えてるよツ！『血風』！『弾岩』！」

後ろから襲いかかる2体の神の使徒に向けて紅い風の刃とコークスクリュー回転する岩の弾丸が放たれる。岩を剣で弾き風の刃を翼で無効化する。

「なんだコイツ……聞いてた話より弱い？」

恵里は不審に思った。士郎から聞いた情報だと倒すのに確実に負傷は避けられないはずの相手がほぼ一撃によって葬られている。

周囲を見れば香織や幸利の二人なんか、3体を相手に余裕そうだ。

ブラッククロッドの先端を二又に分け、神の使徒の目に突き刺し、そのまま頭を貫き、ロッドに魔力を通して使徒の頭を爆散させるというエゲツない方法で殺している。

香織は使徒の身体に回復魔法を流し、過剰回復で腐らせ、グズグズになったところを

スヴェートで全身蜂の巣にする。

「思ったより弱い？」

「あと、さつきから喋らねえのが気になる…」

2人も違和感を抱いているが、怪しみながらも確実に神の使徒を殺している。

「さつきから真つ直ぐこつちに向かつてくるだけなのが余計に怪しいわ……」

「ふむ……何かの狙いは……おそらくユエをハジメから引き離そうとしておるのじやろう……」

「ホントね……まるで時間稼ぎ……いえ、距離を離されている？」

「雫……？ 距離を離されていたとしてもユエにはお兄ちゃんのアーツィファクトがあるから問題ないんじゃないの？」

「そうなのよ……でも士郎さんは不安なままだったわ」

「何が不安……なんででしょうか……っ!？」

突如シアのウサミミが『ビクンッ!』と直立する。未来視で何かを視たようだ。それと同時に、ブルブルと身体が震えだす。

「……嘘……っ! 嘘ですッ!! そんな……だって……負けるなんてッ!」

その未来を否定するように、焦る叫び声を上げながら、空中を駆け上がって行く。

周りはシアの行動に戸惑いや驚きを隠せない。その先には誰がいるのか全員わかつ

ているが故に、何故、向かうのかわからない。

「シア…!？」

その時だった。

ハジメのすぐ近くに眩く輝く白い太い柱が落ちてきた。

惠里 side

「お兄ちゃんツ!？」

ハジメの隣で神の使徒と戦っていたお兄ちゃんがいきなり光の柱に呑み込まれた。

さっきのシアが視た未来はこれだったのか。

僕は目の前の神の使徒を殺し、翼を広げ、全速力で光の柱を砕きに向かう。

両手に握る剣を振り回し、魔法を放つのだが、全く効果がない。

「退きなさいッ！あなた達に構っててる場合じゃないのよッ！」

雫が乱暴に刀を振り払い、神の使徒の四肢を刎ね、身体を縦に両断し、光の柱へ斬りかかる。

ガキンツ！

「くっ……!？」

雫の刀が柱に弾かれる。オマケに傷一つ付いていない。

「わたしが行きます！ドリヤアアア！」

ガアアアアア！

シアが星砕きを叩きつけるも、星砕きから腕に衝撃が伝わるだけで、ヒビ一つつかなかった。

「まだ……まだアアア！」

諦めず、今度は星砕きの突起を何度も打ち付ける。

ガアン！ガアン！ガアン！

「ぐうっ……！」

すると背後に神の使徒が現れる。

僕が振り向くと既にそいつは攻撃態勢に入っており、防御も間に合わない。

「『天しゃk「させるかあ！」』

声と共に飛び蹴りを放ち、神の使徒の魔法を止めたのは、黒い魔力のオーラを放つ幸利だった。

それでも次々と現れる神の使徒達。

黒い影が現れ、黒炎を放ち、焼き尽くして行く。さらに銃弾、様々な属性を纏った投擲物が梅雨払いする。

「後ろはまかせろ！」

「お主達は士郎を！」

「ありがとう！2人とも同時に攻撃するよ！」

幸利達が湧いて出てくる神の使徒の相手をしている間に僕達は柱を破壊する為に魔力を溜める。

後ろでは激しい戦闘の音が響く。

「皆さん……大丈夫でしょうか？」

「シア……今は士郎さんを助けることに集中しなさい……」

「……はい」

「今度は僕たちが助ける番だよ……」

確実に僕達は魔力を溜める。漏れないよう、身体に、武器に。

「準備はいい？」

「ええ、問題ないわ」

「今度こそあの柱を破壊してやるですう……っ！」

魔力が溜まり切ったのを感じ取ると、3人同時に柱に向けて、全力の一撃を放つ。

「「ハアアアアアアアアアア！」」

ガギイイイイイイイイイイイイイイイ

!!!!!!

全力の一撃が柱にぶつかり、爆音が鳴り響く。

ギリギリと柱に武器がめり込んでいく。

(貫け……！貫け……っ！)

僕は祈る、攻撃しても傷一つつかない柱を破壊する為に、力を込める。

ピシ……ピシピシッ……！

柱にヒビが入り始める。

「貫け……！貫け……！貫け……！」

叫び声が重なり、魔力が吹き溢れる。

遂に、柱を突き破ることに成功し、白い破片が空気に溶けるよう消える。

「お兄ちゃん！」

僕はすぐにお兄ちゃんの無事を確認する為になりふり構わず、飛びつく。

「大丈夫!? 身体に違和感は? 怪我は?」

その問いに対しての解答は――

「……ふふ、平気だ。むしろ、実に清々しい気分だ」

「えっ……?」

いつもと違う口調で、別の誰かが答えたように聞こえた。

「恵里さん! 離れてください! そいつは……土郎さんじゃないですッ!」

シアが叫び声を上げて、危険だと知らせる。

だが僕にはそれを聞いて行動に移すことができなかった。

ズブシヤア……………!

腹部から背中にかけて何かに貫かれ、緋い鮮血を撒き散らし、茫然としてしまった。

「お……………にい……………ちや……………ん……………?」

霞む意識の中、目の前の兄であろう存在は不適な笑みを浮かべていた。

「恵里!」

雫の気配が近づいてくるのがわかる。無理矢理僕の身体を貫いているモノから抜き、距離を取る。そして宝物庫から試験管を取り出し、栓を開けて、その中身を僕には飲ませる。

「しっかりして! 神水! 飲んで! 早く!」

口の中に入ってくる、爽やかで冷たい液体をゆつくり飲み込む。するとみるみる内に身体が再生していった。

「雫……………助かったよ……………ありがとう……………」

「ええ……………でもなんで……………土郎さんは……………恵里を……………」

その答えはすぐにわかる。

「ふふふふ……………良い気分だ……………イレギュラー。現界したのは一体、いつぶりだろうか……………」

鎖が最後に残したモノは…

「ふふふふ……良い気分だ……イレギュラー。現界したのは一体、いつぶりだろうか……」

士郎の声で別の何かが、喋っている。

恵里の身体を貫いたのは彼女の血で染まっている奴の左手だ。

そして身体の調子を確認しているのか、手を握ったり、首を回したりしている。

「ふむ……我が魂の完全な定着には至っていないが……この程度、なんの問題もない」

恵里達なんて眼中にないのか、ただ辺りを見渡している。

その不意を突こうとシアが星砕きを振り下ろす。

「シアーダメツ!!」

「エヒトの名において命ずる『動くな』」

「ツ……あうツ……」

シアだけに向けられた言葉が彼女の行動を止めてしまった。

力なく崩れ落ちるシアの首をその右手で握る。

「シアを離しなさいッ！」

雫が奴の右手に刀を振り下ろすものの――
ガキンッ！

指先一つで止められてしまう。

そのまま弾き、シアを投げつける。

「雫ちゃん！シアちゃん！」

「この野郎ッ！これでも喰らえ！」

ハジメが弾丸を放つが、悠然と佇む奴の手前の空間でピタリと止まり、触れることすら叶わなかった。

だが止められることすら想定した動きで、一瞬で背後に周り込み、『剛脚』で首を狙ったが。

「エヒトの名において命ずる、『止まれ』。消し飛ぶがいい『霸王の咆哮』」

蹴りを放つ瞬間に身体が固まったハジメを魔力の塊で攻撃する。

「ウワアアアアッ！」

「ハジメくん！／ハジメッ！」

香織とユエの2人が駆け寄る。

魔力の塊だったのか、よかったのか悪かったのかわからないが、大きなダメージを受

しかし、それは全て塵となって消え去る。それに行動

割いていることを利用して優花は次々と物を投げる。

それに合わせて、香織が銃を撃つ。

「無駄な足掻きをする……『虚空の炎害』」

投擲物と弾丸は焼き尽くされ、それと同時に2人の身体から凶々しい紫の炎が発生し、焼き尽くし始める。

「うあ、あ、あ、あ、ああ、ッ!?」

「きゃあああああ!」

そんな犠牲の元、幸利の魔法が発動する。

「まずはテメエの魂を灰にしてやる……『冥界龍』!喰らい尽くせッ!」

回るブラックロッドの中心から黒く紫色に発光し、鋭い牙を生やし、ありとあらゆる物を飲み込んでしまいそうなほど恐ろしい姿の龍がエヒトに向けて襲いかかる。

「ほう……良い魔法だ……よく魔力も練られている、この世界に招かれて、数ヶ月でこれほどの魔法を使うとは……だが我の前では無意味だ。『溶かし堕とす獅子王』」

床が盛り上がり、紅蓮の炎の立髪を持つ獅子が現れる。立髪から放たれる熱気だけでなく、身体からも発せられる熱気だけでも、身体焼き焦げそうなほどだ。床がドロリと融解しているのを見れば誰も触れようと思わないだろうが、直接、身体に触れれば、一

瞬で灰になるだろう。

自身が顕現させた龍があの獅子に通じるのか不安になる。だが諦めればゲームオーバーになってしまう。

そんな思いの中、龍の牙が獅子の顔に突き刺さるが、ボロボロと牙がボロ炭のように崩れ落ち、危険を感じた龍が離れた瞬間、獅子の牙が首に突き刺さり、龍の身体が燃え尽きる。

「クソツ……………」

更に魔法を発動しようと、全身に魔力を回す。黒い魔力の本流とイナヅマが彼の周囲の塵を吹き飛ばしている。

「エヒトの名において命ずる『鎮まれ』。そして『平伏せよ』」

その圧倒的な魔力ですらたった一言で消え失せる。

そして背後を向き、天之河達に指を刺し。

「『捕える悪夢の顕現』」

「ひっ……………」

「うあ……………」

「あ……………あ……………」

天之河達は顔面蒼白となりながら転倒してしまった。そして、まるで自分の首が繋

がっていることを確かめるように首筋を撫でたり、足があるのを見て震える手で感触を確かめたりし始める。だが、感覚がないようで青褪めた顔は元に戻らない。立ち上がることも出来そうになかった。

「我に牙を向く者共よ『跪け』」

そしてこの一言で、全員が跪いてしまった。

しかし、閃光のよう動いた者がいた。

「……『五天龍』！」

ユエだ、エヒトの声によって跪くことなく魔法を行使して攻撃したのだ。五属性の龍

がエヒトに向けてブレスの構えをとる。

「ほう……神言を跳ね除けた訳で……ないな……う？まあよい、その美しい魔法に免じて、相手をしてやろう。確か『大地龍』だったな。では我が改めて名を与えよう『地より来たる命を喰らう龍』」

五天龍に対してエヒトは士郎がかつて、商人達の護衛の時に使った龍に新しく名を与えた龍を呼び出した。

前の姿よりも凶悪な牙を剥き出しにし、禍々しい黒い瞳孔がユエを見抜く。

ユエの龍がそれぞれの属性のブレスを吐き出す。

それに対して、エヒトの龍は強烈な咆哮だけでそのブレスを霧散させる。そしてそのまま牙でユエの龍を喰らい始める。

喰われるものかとユエの龍が嘔みつき返すのだが、自由に形を変える龍が身体から棘を生やし、内側から貫き、五天龍を消滅させる。

「……だったらッ！」

ユエが次なる魔法を放とうとしたのだが、背後から金色の鎖が何も無い空間から現れ、彼女を背中から貫いた。

「……ガフッ……!?な……にが……う？」

「クククッ……貴様の魔法は気品に溢れているな……この身体は貴様等が神代魔法と呼

ぶもの……つまり我が扱う『理法術』の適性が素晴らしいのだがなあ……一つ惜しい点がある。それは魔法への適性がないのだ。このままでは私の魔法の格が下がってしまう……だが貴様の適性さえ写し入れてしまえば完璧だ……」

ズブシヤア……！」

そう言つてユエの身体を縛り、その肉体を素手で貫く。

ユエの身体に金色の線が発光する。

「ガハッ！ぐつぐううッ！」

必死に拘束から抜け出そうと身じろぎするのだが、抜け出せない。

「……ふむ。これで貴様も用済みだ」

エヒトはユエから手を抜き、そのまま鎖を解き、地面に落とす。

発光していた金色の線はなくなっていた。

「ユエツ……！動けッこの身体ッ……」

ハジメユエに駆け寄ろうとするのだが、エヒトに身動きを取ることを封じられ何もできな

「では、ここぞで幕引きとしよう……」

エヒトからあり得ないほどの魔力が溢れる。

誰も阻止することが出来ないことをわかっているエヒトはゆつくりと絶望感を与え

るためにわざとじつくり溜める。

ギンツ！

突然、エヒトの後ろに何者かが、剣を振るう。

「何？まだ動けるイレギュラーがいたのか？」

剣を振ったのは恵里だった。

恵里 side

エヒトに貫かれた身体は治ったのにも関わらず、僕の身体は動かない。

痛みで動かないのか、恐怖で動かないのか、全くわからない。

次々と仲間が傷つき倒れていく。

圧倒的な力の前になす術なく、落ちていく。段々と諦めの空気感が伝わってくる。

奴の言葉により全員の身動きが封じられ、何もできなくなってしまった。

(このまま何しないでやられてたまるか……動け僕の身体ツ……動け……動け動け動け動け……動け動け動け動け！)

僕は必死に身体を動かそうと力を込めていくがピクともしない。

歯軋りが聞こえそうなほど力を込めても動かない。その時だった。

右手の近くに落ちているデュランダルの刀身が輝き始めた。

パキ……パキ……パキパキ……

パリン……

僕の身体の表面を覆っていたナニカがコーティングされていた飴細工が破れるように崩れ落ちる。

「うぐ……ける……う……ならっ！」

僕は全身に魔力回して、奴の背後に跳ぶ。

「喰らえッ！」

バルムンクを振り下ろした。

しかしそれは簡単に防がれてしまった。

「何？まだ動けるイレギュラーがいたのか？」

正直なんで動けるのかわからない。でも動けるのなら僕は必死に足掻く。

お兄ちゃんが助けられるのなら、

この身をいくらでも捧げられる！

「ハアアアアアアアアアア！」

剣を振り、翼の魔弾を撃ち、炎の氷の、風の、土の、水の、雷の魔法を使い奴に攻撃する。

全て相殺されているが、そんなの百も承知だ。そう易々、通じるなんて思っていない。

「っ!?!」

僕は首根っこを掴まれ、ギリギリとゆっくり首を絞められる。

徐々酸素が取り込めなくなっていく、視界がチカチカと明滅する。

「愛する者の手で殺される……実に良い余興だ。クククツ……最後に遺言でも聞いておいてやるぞ? イレギュラー?」

「黙れ……僕は……死ぬ気なんて……一ミリもない……ガアツ……グウウツ」

「そうかではこのまま苦しみながら、愛する者を想いながら死ぬと……ガツ……グアツ

……身体が……動かない……ツ!?!まさか……あり得ん……!?!」

突然奴が苦しみ始めた。

『殺……させるかよ……!?!』

エヒトと同じ声音だけど、愛いとしい声だ。

僕の首を絞める手が離れる。

一気に酸素を吸い込もうとするけどうまく呼吸ができない。

「ゲホツゲホツ!」

「恵里ツ!」

ボロボロの両手になった雫が駆け寄る。その手は青黒く染まり、痛々しい。

「雫……手……それにシアは?」

「恵里さんわたしならここにです……」

星砕きの柄を杖代わりにヨロヨロと歩いて来る。全身が火傷に覆われ、1番熱を浴びた所は焼け爛れており、服もボロボロだ。

「さ、再生魔法かけないと……!」

僕はシアの身体に再生魔法をかけ、火傷だけでも治す。

「ありがとうございます……ですが奴に何が……」

「お兄ちゃんが抵抗してるんだよ……エヒトに乗っ取られないようにね」

エヒトは苦しみながらも撤退していく。

「……アルヴヘイト。我は一度、神域へ戻る。お前の騙りで揺らいだ精神の隙を突いたつもりだったが……やはり開心している場合に比べれば、万全とはいかなかったようだ。我を相手に、信じられんことだが抵抗している。調整が必要だ」

「はっ……ここはこのアルヴヘイトにお任せを」

そう言つて撤退しようとするエヒトの身体に黄金の鎖が巻き付く。

『このまま……ボクごと……封印する……っ!みんなは……早く逃げ……』

お兄ちゃんの声が途切れ途切れに聞こえる。

僕らに逃げるよう指示する。

「お兄ちゃん……お兄ちゃんはどうするの!？」

『ボクは……どうしようかな……とにかく……みんなが……生きること優先して……！』

「おのれ……まだ抵抗するか……ぐっ……なんだこの鎖……！身動きが取れぬツ?」

エヒトは必死に蹴くのだが鎖は神を縛る力を持つ。

当然の結果である。

「フリードよ……我を運べ……解析に時間がかかりそうだ……」

「はっ主の御心のままに」

すると、その頭上から先程降り注いだのと似た光の粒子が今度は舞い上がり、謁見の間の天井の一部を円状に消し去って、直接外へと続く吹き抜けを作り出した。

光の粒子はそのまま天へと登って行き、魔王城の上空で波紋を作りながら巨大な円形のゲートを作り出した。天地を繋ぐ光の粒子で出来た強大な門——まさに神話のような光景だ。おそらく、エヒトの言う神域という場所へ行くための門なのだろう。

エヒトは、掲げた腕を下ろすとふわりと浮き上がり、天井付近から僕達を睥睨した。

「イレギュラー諸君。我は、ここで失礼させてもらおう。可愛らしい抵抗をしている魂に、身の程というものを分からせてやらねばならんでね。それと、いずれはこの世界に花を咲かせようと思う。人で作る真つ赤な花で世界を埋め尽くす。最後の遊戯だ。その後は、是非、異世界で遊んでみようと思っている。もつとも、この場で死ぬお前達

には関係のないことだがね」

そう言つて神域に消えていった。

それに導かれるように残りの魔人族がその光の中に入っていく。

「お兄ちゃん……お兄ちゃああああああん！」

絶望と憎悪の狭間で少女は狂気に踊る

「お兄ちゃん……お兄ちゃああああああん！」

恵里の悲痛な叫び声が響く。兄が、愛する者が遠く、手の届かない所まで行くのを見ているだけなのがどれだけ辛いことか。

遂に光が消え、兄の姿が何処にも無くなってしまう。

「あ……ああ……ああああ………」

ソラから溢れる落ちる光の粒子にフラフラと歩み寄る。

その人の残りカケラを求めるように手を差し出す。

「うわああああああああああああああ！」

恵里は泣き叫んだ。床を殴る。地球にいた頃の肉体なら手の皮が擦り切れ、血塗れになるほど殴る。床にはヒビどころか亀裂を通り越して、砕け散り、階下が見えている。

そんな彼女の前へコツコツと態とらしく足音を立てながらやってきたのは、神の使徒と魔獣を連れたアルヴヘイトだった。

「ククツ。無様なものだな、イレギュラー共。最後に些か問題はあったが、エヒト様はあの器に大変満足されたようだ。それもこれも、お前達が『あれ』に集まり、力を与えて連れて来てくれたおかげだ。礼を言うぞ？」

たつぷりの愉悦と嘲笑を含んだ声音で、ヘドロのようにドス黒い悪意の言葉を吐き出すアルヴヘイト。

それを見た恵里の中で一つの感情がドロリと一雫溢れ始めた。

（今、コイツはなんて言った？あれだと？道具扱いだと？ふざけるな……ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなッ！）

一滴一滴からゴポリ、ゴポリと感情の杯から憎悪が溢れ出す。

「……ら全員……ろして……してやる……」

「うん？ なにかね？ 負け犬の遠吠えか？ ならば最後まで聞いてやろう。このアルヴヘイトの慈悲深さに感謝したまえ」

さらにアルヴヘイトは恵里を煽る。

「お前ら、全員！ 殺して！ この世何処にも存在できないよう消してやる！」

恵里の身体から、あり得ないほどのドス黒い魔力の奔流が溢れ出す。

瓦礫は吹き飛び、壁が完全に崩れ、力無きモノはゴミのように吹き飛ばされてしまう程の勢いだ。

「死ねえエエエエエエ！」

両手に握る剣でアルヴヘイト達に斬りかかる。

「無駄な抵抗はやめなさいイレギュラー」

二人の間に割り込んだ神の使徒は恵里の一撃を受け止めて、回し蹴りによる一撃で吹っ飛ばされる。

「ぐはっ………！」

2 回程バウンドして床をゴロゴロと転がり、そのまま壁にぶつかって止まる。

ゆらりと脱力したように立ち上がったと思えば彼女の身体は震えだす。

「邪魔をするなア！木偶の棒がアアアア！」

ワラワラと魔獣達も集まり、恵里を無力化しようと攻撃や妨害行為を始めるものの、全てバラバラに切り刻まれ、刻まれた肉片は魔石諸共ドロドロに溶け、そのまま恵里に吸収され彼女の新たな力の糧にされる。

あまりにも異様な光景に周囲の仲間達は呆然としていた。

「足りない……足りない足りないイイイイ！」

アルヴヘイトを無視して近くにいる魔獣を殺し、吸収していく。魔獣がいなくなれば、次は神の使徒へと襲いかかる。

それに対して、神の使徒達は複数人で恵里を殺しにかかった。

流石にこの状況ではすぐに切り刻んで吸収することはできなかったが、魔獣を大量に吸収したことにより、ステータスが更に高くなっていく恵里は、神の使徒とまともにやり合っている。

「お前らもぼくのちからの糧となれエえエエエ!!！」

更に魔力の奔流が噴き出す。

手始めに、神の使徒の手首を掴みグシャリと握りつぶす。分解を分解で相殺しながらそのまま腕を引きちぎり、それをドロドロに溶かし——正しく表現するのなら、蕩ける

ように分解し、そのまま自分の身体に流し込み取り込んでいる。

これら全ての工程は彼女の持つ技能だけで行われていた。

神の使徒の『分解』で対象を細かくし、『昇華魔法で情報の抽出、『空間魔法』で対象と自身の境界を曖昧にする、『変成魔法』で自身の身体に融合させる。という事を連続で行なっている。

概念魔法のように神代魔法を使い始めている彼女は、奈落から這い出てきた士郎達とはまた別の化け物になっていた。

「恵里……？」

「恵里ちゃん……ダメだよ……」

ハジメはその光景が理解出来ず。香織は超えてはいけないナニカを感じ取る。

「……………」

「やめろ恵里……戻れなくなるぞツ……………」

ユエは何も言えず。幸利はその行為を止めようと声を上げる。

「……恵里よ。お主は何になる気なのじゃ……」

「恵里ツ……………」

テイオはその結末が不幸だという事が分かりつつも止めることが出来ず、優花は言葉が出てこない。

その間も恵里は神の使徒を殺して周り、吸収していく。

最初のように引きちぎって吸収したり、圧縮して吸収、固く固めた空気で叩き潰し、その肉片と血を足から吸収、どてつ腹を貫き、渦を巻くように吸収、同じよう貫いて、肉を食う。

あまりの異様な光景にアルヴヘイトは見下したような態度が段々と理解不能、怯え、恐怖へと順に変わっていった。

「き、貴様……なんなんだ……貴様は一体なんなんだイレギュラー！」

それに対して何も答えない恵里。否、それよりも神の使徒達を吸収することに夢中のようにうだ。

「あ、アルヴヘイトの名において命ずる！『止まれ』！」

「だマレ？ボクは今、イそがしインだヨ？あトで相手しテやるカラ」

アルヴヘイトの神言を恵里は首だけを向けて無機質な表情で返答する。

壊れたアンドロイドのようでその瞳に光は無く、デロデロと瞳の奥が青黒く狂気に染まっていた。

モノの数分で残りの神の使徒を喰らい尽くした彼女は次の標的をアルヴヘイトに変えた。

それを理解した奴は即座に防御結界を張る。

「アルヴヘイトの名において命ずる！ 『来るなあ』！」

怯えきつた声には何も圧力は乗らない。

「フフフ……キコエナあい……♪」

そのままアルヴヘイトへ飛びかかる。

先程張った結界に阻まれ、直接触れることは叶わなかった。

そのことに安堵したアルヴヘイトはニヤリと笑い、平静を取り戻した——がそれはすぐに終わる。

神の使徒の血で赤黒く染まった恵里の指が結界をミシミシと破ろうと突き刺さっていた。そこから紙を破るように左右に引き裂こうとする。

赤黒い液体が結界を伝って流れ、ポタポタとアルヴヘイトの顔に落ちる。

「ジャ〜ま？ はヤク、コロしてあゲルから抵抗するな？」

結界を破りアルヴヘイトを襲おうと双剣を突き立てようとしたが再び結界を張られ距離を縮めることができなかった。

『爆碎炎』！

破裂する高熱の炎により、恵里は吹き飛ばされる。

その先にはシアと雫が立っていた。

「恵里さんー！」

「恵里ッ！」

彼女の元へ二人は駆け寄るが、ゆらりと蹴飛ばされた時のようにまた立ち上がる。

「ネえ？ シア？ それ、ちよウだい？」

「え……？」

「ヨッセッ！」

「きゃあっ!!」

恵里はシアが杖代わりにしている、星砕きの柄を強引に奪いとる。

肉体に神の使徒を融合してから彼女の得物は剣になっていたが、元々の武器は杖であり、それを使った棒術である。

奪い取った柄をアルヴヘイトの結界に何度も打ちつける。宛ら暴風のような一撃がミシリミシリと結界に当たる度に音を立ててヒビが入る。

「おのれ……神には向かう愚か者が……！ その不敬……我が神力で貴様を殺し、エヒト様の前で辱めることで赦してやろう……！」

アルヴヘイトからあり得ない程の濃密な魔力が放たれる。

赤雷が瓦礫を焼き、空気が震える。

恵里は足元に魔法陣を展開し、吸収した神の使徒の腕を呼び出す。

『天焦がす煉獄』！』

純白の焰が恵里に襲いかかる。狙われている恵里よりも離れているハジメ達にもその熱気が伝わる。その熱気だけで全身が火傷に覆われてしまいそうなほどの焰を恵里は左右の神の使徒の腕で包み込み圧縮する。

手を開くとそこには焰がキューブに圧縮されていた。

「お力えしだよオ？」

そのキューブを握り締め、手を銃の形にして、撃つ。

膨大な熱量を圧縮した熱線はアルヴヘイトが張った結界を簡単に貫きその肩を焼き貫く。

熱エネルギーがなくなるまで乱射する。

「グアツ……おのれ、小癩な真似を……！」

乱射により、アルヴヘイトの肉体からは焼き焦げたような臭いがする。

服は燃えて灰になり、肉体が所々頭になる。

「『凍害』、『絶空』！」

何もかもを凍らす冷気と絶対に切断する風が放たれる。

翼が凍り付き、身体全体を覆っていき、その身体を横に真つ二つに切断される。床に落ち、その身体が砕け散る。

「クククク……流石のイレギュラーも両断され、粉々になってしまえば終わりのようだ

な！クハハハハッ！」

恵里を殺した事で感極まったのか高らかに笑い始める。

次の標的に視線を向ける。

「次の生贄は貴様だ兔。アルヴヘイトの名において命ずる『我の目の前で命を差し出せ』」

アルヴヘイトの神言により、シアはフラフラとアルヴヘイトの元へと歩く。必死に抵抗しているが、腕を横に伸ばし、抵抗できない姿にされる。

彼女の心臓を貫こうと、構えた時だった。

ガシッ！

「？誰だ……我の邪魔をする……ヒッ！」

突如何者かに腕を掴まれた。

掴まれたにして緩く、動かそうにも万力のような力で動かすことができない。

その正体は先程、胴体を上下になき別れにし、アルヴヘイトが殺した筈の恵里の腕だった。

腕だけなら良かっただろう。何せ燃やすなりなんなりするだけで済んだのだから。

アルヴヘイトは足元を見た——見てしまったのだ。赤黒い液体に染まった自身の足元を。その液体が細長く緋い縁取りの黒い布が複数枚、ナニカに覆い被さった、理解を

拒否するような存在に姿を変えていった。

「なん……なんだ貴様ツ……は、離せツ！」

その布が溶けるように地面に落ち、赤黒い靄の様な物が現れる。そこから頭になる人物は元々より伸びた白い髪に藍錆色の瞳で黒いドレスを纏っていた。それと同時に掴んでいる腕の持ち主もわかる。

恵里だった。彼女がどうやって再生したのか、誰も見ていなかった。

「き、貴様……何故……何故、生きているツ！」

「アハア♪しネ」

アルヴヘイトの問いに答えず恵里はそのまま壁へぶん投げる。

「グオアツ……！」

壁に叩きつけられたアルヴヘイトを恵里は先程纏っていた黒い布で手足を拘束する。

それから逃れようと身じろぎするが、びくともしない。

徐々に締め付けられる力が強くなり、手首足首から『ミシミシ』と骨の軋む音が鳴る。

アルヴヘイトが恵里に歩いて来たように彼女も態とらしく『カツーンカツーン』と足音を鳴らしながら歩み寄る。

彼女が近づくと布の締め付けが強くなり、距離が半分くらいになる頃には手首足首はひしゃげていた。

「グアアアアアア！」

さらに胴体にも布が巻かれ、いきなり肋骨、骨盤を締め上げ、恵里が間近に迫った瞬間、粉々に砕かれた。

ふと手足の感覚がないことに気づいた。視線をその移すと——移してしまった、ドロドロに融解した自身の腕がその視界に映る。

「う、うわああアアアア!？」

削られたり斬られたりしたのならまだ理性を保てただろう。だが、溶けている。痛みもなく、緩やかに、砕かれた痛みから逃されるように溶けていたことが何よりも理解を拒んだ。それが恐怖へと変わっていったのだ。

自分もあの魔獣や神の使徒のように、眼前の化け物に取り込まれてしまう恐怖へと。「あ、あつ、ま、待てつ。待てつくれ!の、望みを言えつ!私がどんな望みでも叶えてやる!なんならエヒト様のもとへ取り立ててやってもいい!私が説得すれば、エヒト様も無下にはしないはずっ世界だぞ!お前にも世界を好きに出来る権利が分け与えられるのだ!だからっ!」

しかし身体が溶けていくのは止まらない。

「止せつ止せと言っているだろう!神の命令だぞ!言うことを聞けえつ!いや、待て、わかった!ならば、お前の、いや、貴女様の下僕になります!ですからっ!あの人間を取

「五月蠅ウるさいなア……」

叫ぶアルヴヘイトの口に布を巻く。

「~~~~~ツ！~~~~~ツ！」

「安心アンシンして？ソレハ溶とケタリしナイカラ」

「アハ……」

「アハハハハハハハハッ！アハハハハハハハハハハハハッ！」

狂ったように笑う。

「さっきまで馬鹿ニシてた女オンナにイイ様ように苦しクルめられル気分きぶんはドウ？聞ききたいナア？アッ喋しゃべられなインだったネ！アハハハハハハハハハハハハ！」

このままアルヴヘイトを殺せば、確実に壊れ、狂ってしまうだろう。
彼女を止められるのは士郎しかいないとほとんどの人が感じ取っていた。

「やめてええええ！ママ~~~~~ッ！」

突如恵里の足にしがみついた者がいた。

「リー……ニヤ……？」

自身のことを母親と慕うリーニヤだった。

そもそも何故リーニヤがこの場にいたのか――

「ハジメ！ゲートキー貸して！」

「だけど……この状況でどうするのさ！恵里の前に行くの！？逆に振り返らなよ！」

「違うわ。リーニヤを呼ぶのよ」

「雫ちゃん！それはダメだよ！リーニヤちゃんを危険に晒すなんて！」

「いえ香織さん。わたしは雫さんの案に賛成です」

「……シア!？」

皆がリーニヤを呼ぶことに反対している。

「何故じゃ？あそこに幼子を出せば、あつという間に吹き飛ばされてしまうぞ」
「タイミングは狙うわ」

と言ったことがあった。

僅かに残った正気が自身にしがみついた少女を捉える。

「それいじょうはだめッ！そんなことしたら……ママが……ママがママじゃなくなっちゃう！」

4歳児にすらわかってしまう恵里の狂化を止める為に正気を取り戻させ、人に戻って欲しいと小さな身体の小さな力で抱きしめる。

「リーニヤのママはそんなこわいひとじゃないもん！ママは、とつてもあったかくて、やさしいもん！」

リーニヤは自分が知っている言葉で必死に恵里を引き止める。

彼女の存在が段々と恵里の中で大きくなっていき、ガクリと膝を付く。

恵里の頭がリーニヤの胸辺りにまで下がったので、そのまま頭を撫でる。

「パパもあたまをなでなでするとわらってたよ……だからママも……」

ゆつくりと慈しむようにリーニヤは撫でる。

憎悪と狂気で強張っていた身体から力が抜け落ち、そのまま意識を手放した。

「ハアっ……ハアっ……！」

恵里の意識が無くなったことにより、アルヴヘイトを拘束していた布が解け消える。

これを好機と見て、四肢を溶かされた身体を浮かせて逃げようとした。

ザクッ！

「なに逃げようとしてるのかしら？ アンタには聞くことがたつぷりあるのよ」

アルヴヘイトを刺したのは左手にゲートキーを持ち、姫鶴一文字を持つ雫だった。

「ぐっ……おのれ……アルヴh『ザクッ!!』くくくッ!？」

神言を発動しようとしたが、短刀で喉を突き刺し、声を出させないようにする。

「さてと……シア、こいつの拘束お願い。私は恵里を見てくるわ」

「わかりました」

シアは宝物庫から鎖を引っ張り出し、アルヴヘイトをグルグル巻きにする。

「すう……すう……」

「雫お姉ちゃん……ママ寝ちゃった……」

リーニヤの膝の上ですやすやと規則正しい寝息を溢す恵里を見て雫は先程までの危

うさはないと安心した。

「大丈夫よ。恵里は疲れちゃっただけだから」

神話決戦

反撃の会議

恵里が意識を失い、シアがアルヴヘイトを拘束した。

「さてと……お前には色々聞かなきゃならねえな……」

幸利がブラックロットを右手に持ち、左手にペシペシと当てながら近づく。

「その前にテメエの神言を……あん？」

変成魔法と昇華魔法を使い、アルヴヘイトから厄介な神言を奪おうとしたのだが、神言を持っていなかった。

不思議に思った幸利は、雫に声をかける。

「雫、恵里のステータスプレート見てみてくれるか？」

「？ステータスプレートを？いいけど……」

雫がステータスプレートを見るとステータスが変貌していたりとんでもない物があつたりした。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

天野恵里 17歳 女 レベル ???

天職：降靈術師

筋力：14539

体力：13956

耐力：14032

敏捷：15621

魔力：28056

魔耐：28056

技能・降靈術適性「＋効果上昇」「＋イメージ補強力上昇」「＋範囲効果上昇」「＋消費魔力減少」「＋詠唱省略」「＋魔力効率上昇」「＋連続発動」「＋遅延発動」「＋付加発動」・全属性適性「＋範囲効果上昇」「＋消費魔力減少」「＋詠唱省略」「＋魔力効率上昇」「＋連続発動」「＋発動速度上昇」「＋持続時間上昇」「＋連続発動」「＋複数同時発動」「＋遅延発動」・閥属性適性「＋圧縮発動」「＋放射発動」「＋発動速度上昇」「＋効果上昇」「＋持続時間上昇」「＋連続発動」・「＋複数同時発動」「＋持続時間上昇」「＋消費魔力減少」「＋魔力効率上昇」「＋連続発動」「＋複数同時発動」「＋遅延発動」「＋付加発動」魔力操作「＋魔力放射」「＋魔力圧縮」「＋遠隔操作」「＋魔力吸収」・禁域解放・天歩「＋空力」「＋縮地」「＋豪脚」・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・恐慌耐性・全属性耐性・念話・夜目・遠見・気配感知「＋範囲拡大」「＋特定感知」・魔力感知「＋範囲拡大」「＋特定感知」・熱源感知「＋特定感

知」・高速魔力回復「十瞑想」・空間魔法・再生魔法・魂魄魔法・昇華魔法・変成魔法・言語理解・双大剣術「十二刀流」・分解能力・神言・複合魔法

「うわあ……魔獣と神の使徒を吸収したからかしら……ステータスが恐ろしくなってるわね……」

その上、アルヴヘイトの神言まで奪い取っていたようだ。

「で、どうだった？」

「ステータスが大幅に上昇したのと、神言を習得してたわ」

「やっぱりか……ならこのまま尋問始めるか。ユエ！ハジメ！」

幸利はハジメとユエを呼び、尋問を始める。

「……ん。叔父様の身体で好き勝手やった罰を与える」

「吐くもん全部吐いてから殺してやろうじゃないか」

そんな殺伐とした感情を出しながら、尋問を始めるのだった。

翌日

恵里はハイリヒ王国の一室——召喚された日に与えられた部屋で目を覚ました。

「んう……ここは……？確か僕は……」

記憶が混乱しているが、少しずつ整理していき、10数分で終わる。

「そうだ……お兄ちゃんがエヒトの奴に攫われてそれから……」

少し慌てたものの今、慌てた所で何も変わらない事はわかつていたので、『鎮魂』を使い、無理矢理落ち着く。

そして、暖かさと柔らかさを太ももに感じ、その正体を見ると、リーニヤがスヤスヤと眠っていた。

「ありがとうリーニヤ……君のお陰で僕、正気に戻れたよ」

感謝の言葉を伝える。聞こえていないだろうが、今すぐ口にしたかった。

「んにゆう?……ママ?起きたの!?!」

「うん。おはよう、リーニヤ」

「ママ!おはよう!」

飛びついてくるリーニヤを恵里は優しく受け止める。黒みがかかった髪を梳くように撫でる。

そうこうしていると恵里が目を覚ましたことに気がついたら奈落生還組の雫が勢いよく扉を開ける。

「恵里!目を覚ましたのね!」

「おはよう雫」

「良かった……いつ目を覚ますのか分からなかったから……心配で心配で……」
「あはは……ごめんね雫。それで、僕が意識を失ってからどうなったの?」

雫はアルヴヘイトから聞き出した情報を話し始める。

神域に入るには資格を持つものが開くことで他の人も入ることができる。アルヴヘイトも資格を持っていた筈だが、いつの間にか失われていた。

エヒトは元々トータスの神ではなく、別の世界から来た魔法使いのような存在だと言うこと。どこから現れるのか、神域の情報を吐かせ、ユエによりアルヴヘイトは魂だけになって、魔力電池にされた事。

「資格が失われた?」

「ええ。持っていた筈の資格がないって聞いて、恵里が持つてるのかもって話に今なってるのよ。これ貴女のステータスプレートよ。ステータスもいけど技能欄見てみなさい。驚くわよ」

「?驚くって……ええ……何これ」

神言が追加されていることに戸惑っている。

「アルヴヘイトを吸収しようとしたからかな……」

「みんなそう考えているわ」

「……とりあえず起きたんだから。支度しないと」

「まだ寝ても良いのよ？力の使い過ぎて倒れたのだから」

「ううん。時間は限られてるんだからさっさと決めること決めないと」

「わかったわ。下の大広間で待つてるわ。これから方針会議始めるつもりだったから皆んないるわ」

そう言つて雫は大広間へと歩いていった。

恵里は身支度の為に、宝物庫から衣類を取り出す。すると一枚のリボンが出てきた。深紫色のリボン。一緒に手紙も添えられていた。

『誕生日プレゼントのリボン。本当はもつと良い物を渡すつもりなので、今はこれで我慢して欲しい。』

「お兄ちゃん……」

恵里はそのリボンを髪に結び着けて、大広間へと向かつていった。

身支度を済ませた恵里は階下の大広間へと向かう。

扉を開けたと同時に何者かが恵里に抱きつく。

「恵里！」

鈴だ。

「良かった……目を覚まして……」

「ごめんね鈴。心配かけちゃった」

「ううん。恵里が無事ならいいよ……ん？そのリボンどうしたの？」

「これ？内緒……！」

「ええ、鈴、気になる」

「これは鈴でもダメ」

「ちえーエリリンのケチ」

その後も皆から心配と無事を喜ぶ言葉をかけられる。

大広間にはいつもの迷宮攻略組と数人の魔族と王国騎士達が座っていた。

「それじゃあ、あの時の戦いの疑問と反省、これからの方針を決めようか」

ハジメの一声で会議が始まる。

「まずいつあのクソ神が襲いかかるかだけ……土郎の粘り方からして、1ヶ月半は最低でも耐えると思う」

「南雲よう……それはどう言う理由なんだ？」

「理由としてはまず僕達のアーティファクトが軒並み全部無事なんだよね。多分だけ、最初から全力で抵抗したんじゃないかって、意識を逸らしてたんじゃないかな。その分、僕らはポッコボコにされた訳だけ。むしろこれの方がマシだよ。同じ物作るよりそ

れの改良の方がコスト的にも良いからね。それにエヒトは天の鎖を調べるって言うたから、その時も同じようにして時間を稼ぐはず」

「なるほど……土郎さんならば、そこまで時間を稼げるのですね。ならこちらも王国戦支度を十全にできます。兵士達の方はこちらで」

「我々から通達し、集めるとしよう」

「うん、お願いねリリイ、メルド団長」

「……次、私から。なんでエヒトの神言が効かなかったのか」

ユエが自身に神言が効かなかった事を上げる。

「……多分だけど、土郎が作ってくれたこの腕輪が原因だと思う」

自身の右腕につけられた腕輪を指差す。

「確かエヒトに乗っ取られないように作られた腕輪だっけ？」

「……ん」

「詳しく調べたんだけど、副次的な効果で神言が効かなかったんだと思う」

「南雲、つまり、それを全員装備すれば神言ってやつで操られたりしなくなるんだな」

「そうなるね。ただ全員分は無理かな。最低でも3つ。多めに見積もって神域に行く人数分は揃えたい」

「3つ？ハジ、それってエリリン、シズシズとシアシアの分？」

「うん。3人には士郎を解放する役目をやってもらうつもりだからね」

「で量産するのに必要な素材と技能は大丈夫なのかハジメ」

「問題ないよ。幸い今ある技能で充分だった。あとはエヒト対策の兵器作らなきゃいけないから、香織とユエには兵器製作の手伝いしてもらうけど」

「わかったよハジメ君！」

「……ん。あのクソ神をぶちのめす武器を作ろう」

中々、兵器製作の手伝いができなかつた2人の気合いが入る。

「あとは戦力調達だな……テイオ、里の連中は連れて来れるのか？」

幸利はテイオに戦力の当てがあることをわかつているので連れて来れるか聞く。

「それは可能じゃが、ちと距離があつてのう。空間魔法を使つたらあつという間じゃろうけど、説得ができるかどうか。爺様はともかく少々頭の堅い連中がのう……」

「んなもん。俺が一捻りして納得させてやるよ。悪いが時間はかけてられないからな」
「相変わらずご主人様の強引さは最高じゃ……」

好戦的な笑みを浮かべる幸利に、テイオは蕩けた表情になっている。

「トツシー、竜人族の人達束ねるなんて……竜王にでもなるつもりなの……？」

そんな鈴の一言に反応したのは意外にも優花だった。それに対して幸利は困惑して
いた。

「いいわねそれ……」

「お、おい……優花？」

「だって幸利が王ならアタシ達は王妃になる訳だし……正直そういうのちよつと憧れてたもの……」

「そ、そうか……」

戸惑ったように嬉しいそうな表情を作る。

「んっん！とにかく竜人族の方の説得は俺達でやる」

「あとは僕達だね……正直もつと力をつけておきたいし……」

恵里は少し悩み、『よし』と言い、提案する。

「僕、残りの大迷宮。ライセンとオルクスを攻略する。それで概念魔法も覚える。手札は多いに越したことはないからね」

「なら鈴達も着いていつていい？」

「それは構わないよ」

「それならば、重力魔法を会得していない、者達で行きたいが……」

「流石に大人数はキツイよなアソコ」

ライセン迷宮のウザ&鬼畜トラップを思い出す攻略組。

「少な目の方が良いのか」

「うむ、私の部下を連れて行ってはくれないか？」

「アソコで戦える方法があるなら大丈夫だろ」

「ならば問題ないな。ハイルフ、カトレア、ミハイル、まずは重力魔法を会得してこい」
「了解致しました」

そう言つて3人の魔人族が並ぶ。

恵里達オルクス迷宮の通常ルートを攻略していた組は女性の魔人族を見てどこかであつたような気がして記憶を探る。

「ん……？あつ！その女の人、もしかしてオルクスの時の」

最初に思い出したのは恵里だった。

「正解だよ降霊術師のお嬢さん。あの時はすまなかつた。それと勇者坊ちゃんも。甘さは抜けたかい？」

「……自信持つては言えない。甘さは捨てきれない。でも、それで龍太郎達が傷つくな
ら、俺は切り捨てるつもりでいる」

「……ふーん。及第点か。本番で怖気付くんじやないよ」

そう言つて空いている席に座る。

「彼らは迷宮攻略候補、及び迷宮経験者だ。戦力になることは私が補償する」

全員が納得し、次の話に移ろうとした時だった。

— おいおい、オレ様達も参加させろよ—

聞き覚えのない声が大広間に響く。

「誰？」

— しようがねえなあ—

呆れたような声と共に、恵里の側に置かれていたデュランダルが中に浮き始めた。

「デュ…デュランダルが一人で動き出した？」

「いよいよ！オレ様は絶世の剣デュランダル！オラ！バル！お前もとつとと参加しやがれ！」

— 全く…君という奴は…もつとこう前振りとかあるだろうに—

また見知らぬ声が聞こえてくる。それも恵里の側のバルムンクが動き出す。

『突然の参加すまない。どうもデュランダルの我慢が効かないようだね。私はバルムンク。使い手の剣だ』

「な、なんで君らが喋ったりしてるの…？」

『ん？そりや、創り手に意志を与えられたからな。使い手を守って欲しいって命令だな』

「お兄ちゃんに…？」

『ああ。私達は創り手に使い手を頼まれたからね』

『んでだ。本題入んぞ。オレ達からの話はな。使い手があの時動けたりしたことを話す』

ぜ』

「僕が動けたこと？」

あの時、神言を無理矢理解除したとは言えない。だけど、何か僕とは別の要因があった気がしたのは事実だ。

『そいつはオレ様、デュランダルの方さ。ま、理由は教えねえがな』

「……は？」

『こいつに関しては創り手が話すなって言っただけからな』

「そっかお兄ちゃんと言うなら仕方ないか……」

士郎の頼みということで話せないことに全員、渋々納得した。

「オツケ。後は王国の防衛とかだね——」

その後は色々準備や計画を立てていき会議が終わる頃には太陽は沈みかけ、月が輝き始めていた。

「とまあ。今日の会議はここまでだね。それじゃ明日に向けてゆっくり休むように。解散！」

締め的一声で全員がそれぞれ移動していった。

「そういえばよ、ヴェアベルトって軍の中でどの階級なんだ？」

「私か？ 私の階級は大将だついでに言うとフリードの奴めもな」

「なんで隊長呼びされてんだよ……」

「うーむ、長いこと隊長呼びされていたからな……慣れてしまったのかもしれん」

「そうか……慣れつつ怖いな」

そう言つて2人して小さく笑い合うのだった。

恵里は剣と共に別室に移動していたのだが、誰もそれを見ることはなかった。

「ここで大丈夫？」

『ああ。問題ないぜ使い手』

「それで話つてなに？」

『本来なら話すべきじゃないことなんだがな。こればかりは使い手。知りたいなら、オレ様の能力をよ』

デュランダル of の問いかけに恵里は迷わず頷いた。

「そりやそうだよ。あの光の柱を貫いた時だつて同じだったんだから。お兄ちゃんが助けられる力なのは間違いないんでしょ」

それに対しての返事は、

『YESだ使い手。デュランダルの力は創り手を助けるのに必ず必須になるだろう』

「なら教えて。その為なら僕はなんにだつて捧げられる」

あの日士郎を失った時と同じ覚悟の目をして、二刀に言い切ったのだった。

『なら教えてやるか。オレ様の力はな——奇跡を起こす力だ。それには使い手にはその奇跡と同等の代償が必要だがな』

デュランダルの答えに恵里は——

「なあんだ安いじゃないか」

と言つてのけたのだった。

ライセン迷宮、今度は楽々？

「では自己紹介をさせてもらいましょう。私の名前はハイルフ・シユネー。天職は芸術家です。かの解放者ヴァンドウル・シユネーと同じになりますね」

「あたしは、カトレア・アトマーレ。天職は造形師。よろしく頼むよ」

「俺はミハイル・カルテナント。天職は雷剣士。短い付き合いになるがよろしく頼む」
迷宮攻略に同行する魔族の名前と天職を紹介される。

そしてこちらも自己紹介を済ませて、ハジメから受け取ったゲートキーでライセン迷宮の入り口まで直接ワープする。

「これがあの錬成師のアーティファクト……フリード將軍が警戒を強める訳です……」

「あたしもオルクスで相対したけど、完全に敵対していたら死んでたかもね。隊長様々だよ」

「我ら魔族にも武器を提供すると聞いたが、楽しみになってきたぞ」

ハジメお手製のアーティファクトに魔族の3人は感動していた。

恵里達がライセン迷宮の入り口を見ると、そこにはなにやら文章が書かれた石碑と、

何もない——注意深く見れば長方形に忍者屋敷のからくり扉のように動く扉があった。

石碑を無視して行こうとするとカトレアに止められる。

「その石碑は読まなくて良いの?」

「ああ……ハジメ達からウザいから読まなくていいって言う言われてるから」

「そ、そうかい……ならとつとと進んじやおうか」

扉をぐるりと回して開けて中に入る。

中は綺麗な白い床と壁の一本道が続いていた。

「羅針盤でミレディの場所はわかってるから、一気に進むよ。ただ物理トラップが多いから、そこ気をつけて行かないとね」

「南雲達も物理トラップには殺されかけたつて聞いた……慎重に進まないとな……」

「おまけに魔法も全く使えないときた……俺達は肉弾戦もできるが……カトレアと結界師の……鈴はキツそうだな」

「アハハ……そうですね……」

「あたしらは後ろでちよいちよいと補助するだけになつちまうなんてね……想像以上に魔法が使えない……」

魔法メインの2人は殆ど活躍できないことに気分が下がる。

恵里達は羅針盤の指し示す方向へと進む。

時折、距離を取らされるようなルートを進まされ、気持ち少し焦ってしまふ。刻一と士郎が抵抗が弱まり、いつ完全に乗っ取られてしまうかわからない。そんな不安もありながらゴーレムを倒して遂に最奥まで辿り着いた。

「恵里……羅針盤の反応は？」

「この奥にミレディの反応があるよ……」

「当然……守りも堅い……」

今までよりもゴーレムの数が多い上に、武装も高性能に見える。

「押し通るよー」

恵里の掛け声でゴーレムへと突貫する。

光輝は聖剣でゴーレムを撫で切りに、龍太郎はその拳で粉碎する。それぞれの武器でゴーレムを倒して行く。

ゴーレムの数が少なくなってきたので、恵里は奥の扉に突撃をかます。

一撃で破壊して奥の部屋へと入る。

それに続いて残りのメンバーも奥の部屋に入る。

（入り口の可能性もある……）

全員が部屋の全容を確認する。

最初の部屋にあった石碑はない。情報にあったように、中に浮くブロックが視界に入

る。どうやら最深部に辿り着いたようだ。

「ここがミレディゴーレムのいる……最奥……」

「一体どこに……っ！皆！上だ！」

光輝が上を見上げると落下音と共に何か飛来してくる。

『ミレディゴーレム3号、ただいま参上！♪またまた新しい挑戦者だね！』

現れたのは巨大な甲冑ゴーレムだった。

「そうだよ。ミレディ・ライセン。君の持つ重力魔法を貰いに来た！」

『ふーん……気合いに実力も申し分無さそう……ならミレディさんもちよーつと本気を
出そうかな？』

ミレディがそういうと、バチバチと魔力が溢れ出す。

放たれた威圧風が恵里達に吹き荒れる。

『それにあのクソ野郎が動き始めてるからね……少し急ぎ足で最後の試練をさせてもら
うよ』

先程の登場の時とは違うトーンで棘鉄球のメイスを構える。

「行くよー」

「「「「「応！！」」」」」

恵里は翼を羽ばたかせて飛翔し、目にも止まらない速度で切り付ける。

龍太郎が胸部装甲目掛けて拳の乱打を浴びせる。

ドガガガガガガガガツ！

「オラオラア！くうだあーけえーろおーっ！」

腕に魔力を回して思いっきり殴る。

しかしアザンチウムで出来た装甲にはヒビ一つ入らない。

『ざあんねえん！一昨日来たまえ！』

ミレディゴーレム3号の拳に壁際まで殴り飛ばされそうになるが、鈴の結界が龍太郎を受け止める。地域特有の魔法行使妨害により、数秒程しか展開できない。

龍太郎と入れ替わるように光輝とハイルフが突撃。胸部装甲ではなく、腕の関節へと剣を振るう。

「硬いッ！」

「それもあります、武器に上手く魔力が乗せられていません！厄介な地域ですよ！」
普段から魔力を纏わせて攻撃している、纏う魔力が霧散してしまい、攻撃力がまともに上げることができていない。

下から、カトレアがゴーレムの腰回りから駆け上がり、手を当てる。

彼女の行動を止める為、ゴーレムを出現させて、襲わせようとするが、

「させん！むうん！」

ミハイルがゴーレムの足を掴み、振り回してまとめて破壊する。

「『溶軟』！」

ミレディゴーレム3号の身体がフニャフニャになり始める。

『造形師の戦闘員なんて珍しいね。うーんミレディさんはオー君みたいに錬成は得意じゃないんだよねえ……』

と言いつつも、崩れそうになった身体を直し始める。

だがすぐに直るわけではない。柔らかくなった部分に攻撃を浴びせる。

『ぐっ……ハー君達とは違う戦い方だね……でも……まだまだッ！』

中に浮くブロックが不規則に動き始め、恵里達を襲う。

力技で粉碎する、物理組。冷静に動きを読み取って、かわす魔法組。

ミレディはさらにモーニングスターを振り回し、ブロックを破壊、その破片を重力魔法で散弾の様に飛ばす。

「じゃまあー！」

恵里が翼で岩を吹き飛ばす。

「喰らえー！『翼刃円輪』！」

翼を刃へと変化させ、身体を回転させて、ミレディゴーレム3号の腕を切り裂く。

『わあお。腕が真つ二つ！神の使徒の翼ってそんなこともできたんだっただね』

腕が真つ二つになったが腕の間にいる恵里を挟み、腕を直す。

『さーてこのまま腕を振り回して無事でいられるかなあ？』

ミレディゴーレム3号は恵里を挟んだ腕を振り回す。

『スーパージョーミレディパーンチ!!』

その腕で光輝達を殴ろうとするのだが、ガシリとその腕を3人が掴む。

『ええ!? 掴んじやうの!?!』

龍太郎、ミハイル、光輝の3人が拳を掴みそのままグルグルと振り回す。

「中々の重さとパワーじゃねえか！行くぜ2人とも！」

「ふっ……！貴殿達の力は凄いな！俺も負けていられん！」

「叩きつけるぞ！」

3人が同時に地面に叩き伏せる。

「やああああああ！」

そして龍太郎達が掴んでいる腕を鈴が軍配で切り落とす。縦に別れ、その中から、恵里が現れる。

「うええ……！気持ち悪……！」

「大丈夫、恵里？」

「なんとか……！流石、解放者本人……！隙が全然無い……！お兄ちゃん達は良く勝てたね

……どうやって、あの胸部装甲を貫こうか……」

恵里は今持っている武装や技能で貫けるか考える。

「よし……これしか無いか……!」

「何か決定打があるのか？」

「うん。ただ撃つまでの間、僕は無防備になっちゃうから、みんなで守って欲しいのと、彼女の動きを止めて欲しい」

恵里は作戦を全員に伝える。

「なら私達で動きを止めよう。動きは少し読めてきた」

「なら、俺達が恵里を守るんだな。耐えることなら任せろ!」

「それじゃ作戦開始!」

魔人族組がミレディゴーレム3号に取りつき、人間組は恵里の周り彼女の動向を観察する。

恵里は翼に魔力を回して強度と鋭さを高める。

甲冑ゴーレムが大量に現れて襲いかかる。

「ふっ、せいッ!」

「ふん!そりゃ!」

剣を持つゴーレムを光輝と龍太郎は次々と倒して行く。

槍と盾を持つゴーレムは槍を投げつけるが、

「……『聖絶』！」

鈴の結界により防がれる。

「ぬうん！」

ミハイルが、ミレデイゴーレム3号の足を掴み、グルグル振り回し、上にぶん投げる。重力魔法で体勢を立て直すのだが、上ではハイルフが両の拳を構えて叩きつける。

『おおおう!』

「もう一回緩くなりな！『溶軟』！」

カトレアが再び溶軟を発動して、胸部装甲の強度を下げる。

恵里は魔力が最大にまで高まった瞬間、飛び上がり、螺旋回転し始める。

「『ブレイクスルー』ッ！」

ガリガリとミレデイゴーレム3号の胸部装甲を抉って行く。

それを止めようと恵里を捕まえようとするのだが、手が削れて掴むことすらできない。

かつてハジメのパイルバンカーとシアの一撃で貫通した装甲は、強度がそのままなのもあり、貫くのに相当な力が必要になったが、今回は柔らかいので直ぐに貫いた。

『お見事……!』

ミレディゴーレム3号は瓦解していく。

「倒した……のか？」

「コアを貫いた手応えはあった……だから多分……勝ったよ」

勝利の歓声が部屋に響き渡る。

「つつかれたあー！」

「流石、解放者……強すぎんだろ……」

各々が勝利の余韻に浸っていると、何かがこちらに歩いてきた。

「誰？」

『みんなお疲れ様。ミレディちゃんだよ！』

ニコちゃんマークの様な顔で黄色の合羽のような物を着た小さなゴーレムが拍手をしていた。

『それじゃあ、この私の隠れ家にご案内します！』

指を『パチン！』と鳴らすと、足元の床が動き始める。辿り着いた先は、彼女の最後の部屋だった。

『ほらほら魔法陣に乗った乗った！』

全員が魔法陣に乗ったのを確認すると、魔法陣が輝きだす。

『オツケー。みんな習得したみたいだね……うんうん。二刀流の白髪ちゃんは適正が1

番バツチリだよ。他のみんなも充分使えるけど、そっちの拳闘士君はダメダメみたいだね』

残念ながら龍太郎には適正がなかったようだ。

『そ・れ・と。この2つのアーティファクトをあげるね』

部屋の壁から引き出しが現れる。

『はいこれ。クソ野郎をぶっ飛ばすのに役に立つと思うよ。特にこのナイフは』

「これは？」

『神越の短剣。付与された概念は神殺し。神にしか効果ないからもし乗っ取られた人がいたなら、それは絶対に役に立つよ』

「……ありがとう」

恵里は士郎を助けられるアーティファクトを手にしたことで目に希望の光が灯り出した。

「恵里っ！これなら！」

「うん……！お兄ちゃんを助けられるかもしれない……！」

鈴にもその嬉しさが伝わっていたようだ。

「すいません……ミレディさんはここから出て、エヒトとの戦いに参加してただけませんか？」

光輝がミレデイの力を借りようと、お願いしたのだがミレデイは断った。

『ごめんね。ミレデイさんも参加したいんだけど、ここから出るのにちよつと面倒な仕掛けがあるから。当日まで力を蓄えるつもりだよ』

「そうですね……それなら、決戦の日、よろしくお願いします」

『うんうん。礼儀正しいね。ミレデイさんのポイント高々だよ！それじゃあ、地上に送り返すよ』

ミレデイは先程の足元の魔法陣を組み替えて、転移の魔法陣へと変える。

『それではまた決戦の日まで！』

恵里達は地上へと転移した。

「それじゃあ、王国に戻るよ」

竜人族の里へ

恵里達がライセン迷宮を攻略している中、幸利達は竜人族の里へと赴いている最中だった。

空間魔法やらゲートキーやらを使って一瞬で行けばいいと思うがなるべくテイオの竜化が鈍らないようにと、竜化した状態での移動をしている。ついでに言えば今後の為に竜人族の竜化を知る為にもだ。

「悪いなテイオ。乗せてもらって」

『構わないのじゃ。それに里の場所を知っているのは妾しか居らんしの』

「羅針盤は今恵里達がライセン迷宮攻略の為に使うからね。アタシ達も作ればよかつたわ……」

竜化したテイオの背に乗っている幸利と優花はフェルニルからは感じることできない、空を飛んでいる時に浴びる風に心地よさを感じていた。

「やっぱ、直接飛ぶ方が爽快感があるな……シユタイプに乗って走るのもそうだが、風を感じるのはいいわ」

「そうね。それに直接、雲の中を突っ切っているって言う今の状況もスピード出てい

るってのもあるわ」

『妾の飛行に満足してもらえて良かったのじゃ』

「しかしテイオ。流石の竜人族もこの戦いに参加しないような戦士はいないんだろ？」

『む？それはもちろんじゃよ』

「お前の言う頭の硬い連中ってのはどういう奴等なんだ？」

『むう……それは直接、話したほうが早いじやろう』

百聞は一見にしかずということだろうか。

しばらく飛んでいると山の嶺に火を焚いている煙と建物がひっそりと並んでいるのが見えてきた。

それと同時にテイオは高度をドンドン下げて、速度も落としていく。どうやらあそこが竜人族の里のようだ。

着地する為にテイオは竜化を解除し始めたので、幸利達も背中から離れ、重力魔法の応用でゆっくりと落ちていく。

こちらの存在に気がついたのか、小屋の外にいた一人が周りに知らせるように声を上げた。

「ひ、姫様だ！姫様が帰ってきたぞ!!」

それを皮切りにワラワラと建物から住人が現れ始めた。

「テイオ・クラルスたった今戻ったのじゃ。爺様は何処に？」

「今、こちらに向かつております故、あちらの議事堂へ」

「うむ。その前に妾達は靈廟へ向かうのでな、主らは爺様にその事を伝えておいて欲しいのじゃ」

「かしこまりました。では後程」

そう言つゝ竜人族の男性は議事堂のある方へ向かつていった。

「ご主人様、優花よ。少しだけ妾の所用に着いて来て貰えぬか？」

「構わないぞ。時間はまだあるしな」

「アタシも大丈夫よ。折角の里帰りなんだからテイオの好きにしたらいいわ」

了承を得たテイオは、2人を連れて靈廟へと足を運ぶ。

訪れた靈廟には多くの墓標が建てられており、見たこともない花が捧げられていた。恐らくはこの山、特有の植物なのだろう。

奥まで進んでいくと、一際大きく、匠の意匠が彫られた墓標が建てられていた。

「父上、母上、ただいま戻つたのじゃ」

悲しさを押し殺すように、テイオは帰還の挨拶をした。

幸利は薄々わかつていた。

会議の時、父親ではなく祖父の事を話していたのだから、彼女の両親は既に亡くなつてしまつていたと。実際にその事実を目の当たりにすると、彼女への想いに反応して、幸利の心を締め付けた。

自身の両親は家族は自分の趣味を認めず、公に認められている——それこそ勉強、資格などの人が大抵、好んでやるようなものではない物を押し付けられてきた。

今でこそ、その情熱は料理へと向かい、将来の自炊の為だと言ひ、家族を納得させた。そんな自分は家族が亡くなった時、彼女のように悲しむことができるのだろうか。自身を否定した家族に辟易している自分に。

「幸利?。」

「優花:…どうした?。」

「暗い顔してるけど、大丈夫?。」

「大丈夫だなんでもねえよ。」

何でもない様に振る舞つた。

(今は今だ:…すぐに来る話じゃねえ:…目先の問題に目を向けるべきだな)

幸利は今に目を戻し、テイオの隣で墓の前で一礼し、しゃがみ手を合わせる。優花も同じようにお墓参りの作法をとる。

「初めまして、清水幸利と言います。貴方方の愛娘の恋人としてここにいます。必ず、俺の人生を賭けて彼女を幸せにします。これから先の事をどうか見守っていただけようお願いします」

そう言つて、立ち上がる。

「うし、挨拶はこれでいいよな……」

そう言つて、霊廟から離れる為に足を進める。

「ご主人様……今のは……」

「……お前の両親に直接、挨拶に出来ねえからな。せめて、墓の前で宣言くらいはしておきたかったんだよ。だから今の言葉は嘘偽りない俺の本心だ」

「そうか……」

そう言つて屈んでいるティオの頭を抱き、優しく撫でる。

「後はお前の時間だ。話が済んだら、呼んでくれ」

そう言つて幸利は優花を連れて霊廟を出た。

2人が居なくなり、この場に1人となつたティオは改めて、両親へと祈り、報告する。「父上、母上。妾は遂に自身の伴侶となる殿方を見つけたのじゃ……！心の底から惚れてしもうたのじゃ……」

「幸利……」

「今度はお前がか」

「その……今みたいな挨拶は……」

「勿論、お前の両親にも言うさ……2人を娶るんだからな。恋人2人は日本人としては不義理かも知れねえが、キチンと責任は取る。お前らを好きになっちまったからな」

「そう言い切りニカツと笑う彼の顔はスツキリしていた。」

（そう言う所がアタシとテイオが好きになったのよ……）

しばらくすると、霊廟からテイオが戻ってきた。

「2人とも待たせたのう。さ、議事堂へと行くぞ」

少し涙で赤く腫れた目をしたテイオだったが、2人はそれを気にせず次なる目的を果たす為に進むのだった。

「んじゃ……この里をまとめるとするか」

「そう息巻く幸利。」

里の奥にある、霊廟を除けば一番大きい建物であろう議事堂に足を踏み入れる。

「テイオ・クラルス、たった今、参ったのじゃ」

彼女が議事堂の大広間へと入り、会議室の扉を開ける。

「……姫様よくぞ、無事にお戻りになりました！……」

巨大な円卓に座る、竜人族が一斉に頭を下げた。奥の老人を除いてだが。

「テイオ、此度の務め、よくぞ果たし、戻ったな。そして客人よ。よくぞ我らの隠れ里に参った。私はアドウル・クラルス。この竜人族の族長にして、テイオの祖父だ」

「俺は清水幸利。ハイリヒ王国にいる、邪神討伐の代表の代わりにここへ馳せ参じた」

「ほう……代理とな」

「ああ。貴殿達には邪神を倒す戦力として勧誘してきた次第だ」

「なるほどな……」

「後……」

幸利はテイオの肩を抱き、グイツと寄せる。

「ひゃあ……!?!」

不意に抱き寄せられたことにテイオの頬が紅く染まる。

「あんたの孫娘を頂いた事の報告をしにも来た」

一気に会議室が騒つく。

「ほう……我が孫娘を頂いたとな……つまり幸利君はテイオと交際しているということかな? それにしては隣の少女とも距離が孫娘と変わらないようだが」

アドウルは優花の存在を問い詰める。

自分の孫娘以外にも女がいるのは良い気分はしないだろう。

「彼女も俺の交際相手だ」

「っ…!？」

そう宣言しながら優花の肩も抱くとアドウルの目つきが鋭くなる。

「ふむ……二股をしていると、付き合っている人の身内に堂々と言うのか……」

「ああ、2人は俺の愛しい恋人だからな」

アドウルの目つきが更に鋭くなったが、それでも幸利は目を逸らさず、じっと見返す。

「ふふふっ……認めよう。君達の仲をね」

どうやら彼のお眼鏡に適ったようだ。

すると、1人男性の竜人族が立ち上がり、幸利を指差しながら叫んだ。

「貴様……ッ！誇り高き竜人族の姫を人間如きが頂いただと!？」

「そうだが？」

「認めん……俺は認めないぞ！」

「だつたらどうするんだ？俺としてはテイオの爺様に俺達の仲を認めてもらえれば充分なんだが？」

「ご主人様……」

幸利は彼等を煽り始めた。しかもさらにテイオと密着しながらである。

「よさんか、リスタス」

「いいえ、族長！俺は認めない！」

納得のいかない彼に対して幸利は口を開く。

「ならよ。俺と勝負しようじゃねえか。強いやつがテイオの仲間になるんだろ？」

幸利がブラックロッドを腰から抜き、リスタスと呼ばれた竜人族に向ける。

「良いだろう……貴様ではなく、俺が姫様に相応しい男だと証明してやろう」

「両者準備は良いか？」

「俺はいつでも良いぜ」

「俺もだ」

里の広場にて2人が戦闘態勢を取っている。

審判には族長である、アドウルが両者の中心で手を挙げている。

「それでは……始めッ!!」

リスタスは開始と同時に、竜化し、藍色の竜へと変身する。

『その生意気な面の余裕を無くしてやるッ!』

鋭利な爪で幸利を切り裂こうと振るう。

ピタッ……

その爪は幸利の腕に軽々と受け止められてしまう。

『何ッ!?!』

「この程度か？俺からテイオを奪い取るんじゃないやなかったのか？」

『ほぎげ青二才が!』

爪だけでなく、尻尾も使って幸利を乱打するのだが、ブラックロッドを巧みに使い、弾き、いなして、的確に反撃を入れる。

「凶体がデカくなっただけか!?!」

『おのれッ!』

さらには鋭く尖った牙で噛みつきに来るのだが、その顎門を下から殴り、無理矢理、閉じさせる。

『ぐううッ!……ならばッ!俺の炎を喰らってみろッ!』

蒼い炎が熱線のように圧縮されて放たれる。幸利に直撃し、大爆発を巻き起こす。

爆炎が晴れるとそこにはブラックロッドを高速回転させて、ダメージ一つも喰らっていない幸利が立っていた。

「どうした?これで終いか?だったらこっちから行かせてもらおうぜッ!」

重縮地の如く勢いよくリスタスに接近と同時に、腹部をブラックロッドでかち上げる。

『グハアッ!?!』

彼は竜翼で態勢を整え、幸利を見た。あの細腕で巨体をかち上げたと言う事実には驚いた。

下から自身をかち上げた男が空中を蹴って、駆け上がってくる。

『竜人族に、空中戦を挑むだと……!?』

そのことに再び驚くも、迎撃の為に、蒼炎プレスと風魔法を放つ。

「ぬるい！」

悉く、ブラックロッドに切り裂かれ撃ち落とされる。

『まだまだア!』

更には雷魔法を風魔法に纏わせ、電撃の竜巻を大量に放つ。

「……なら、コイツで喰らってやる。あの時の大敗北を糧にコイツも強くなりたいと言っているからなッ！」

ブラックロッドを伸ばし、回転させて円を作る。その中心から膨大な魔力が吹き荒れ、スパークする。

『『冥界龍』改め、『ヨルムンガンド』!』

黒い蛇のような龍が顕現する。闇魔法に重力魔法、変成魔法の3つを合わせて放つた、生きる魔法だ。

北欧神話の毒蛇の名を冠する龍を呼び出した。それは雷の竜巻を全て喰らい尽くし、

それを自身の魔力へと変換し、濃い壺董色のブレスを吐き出す。

それに対してリスタスも蒼炎ブレスを吐き、押し返そうとするのだが、壺董色のブレスに飲み込まれる。

『グアアアアアッ!』

咄嗟に結界魔法で防御したものの、あつという間に破壊され、リスタスはそのブレスに身を焼かれる。

それでもまだ彼は意識を保っているが、更に絶望が顕現する。

ヨルムンガンドと呼ばれた龍の額に乗り、いつのまにか取り出した2本目のブラックロッドを回し始める。

「まだまだ行くぜッ! 『カンナカムイ』! 『リヴァイアサン』! 『アジ・ダハーカ』!」
雷を纏ったアイヌの白い龍と激流を纏った旧約聖書の蒼い龍、汚濁した呪いを纏うゾロアスター教の赤黒い龍が現れる。

今、幸利は自身にはない筈の適正属性の龍すら呼び出していた。

白い龍は雷撃ブレスを、蒼い龍は激流ブレスを、赤黒い龍は呪いのブレスを一斉に吐き出す。

リスタスも巧みな飛行技術でブレスを紙一重で交わしていくものの、蛇のような体軀を使い、うねるように追い詰めていき、崖側で飛行を止めてしまった。

「4種プレス、一斉掃射！」

闇、雷、激流、呪いのプレスがリスタスを襲い包み込む。

結果、ボロボロになり意識を失い、竜化が解けたリスタスは地上へと墜落していった。

「よつと……これで俺がテイオの伴侶であることに不満はないか？」

勝利した幸利はこの戦いを見届けていた彼等に圧倒的な存在感を表す。

2本の杖を持ち、4種の龍を従える彼の姿は――

「竜王……」

1人の竜人族が呟いた。

「伝承に記されている通りだ……我ら竜人だけでなく、異界の龍すら従える者……まさ

しく竜王様だ……」

「は？」

「「「竜王様万歳ッ！」」」

歓声と共に幸利を称賛する声が竜人族の隠れ里中に響きわたる。

幸利は意識のないリスタスに近づき、手を出し再生魔法を使う。

『『絶象』……なああんた……こつ酷くやつちまつたが……大丈夫か？』

「……ああ、大丈夫だ。貴様は……強いのだな。こつも圧倒的だと、認めざるを得ない。

姫様のこと……頼んだぞ。竜王様？」

「うげえ……あんたもそう呼ぶのかよ」

「フン……その強さを恨むんだな」

「……嫌味かよ」

諦めたように幸利は項垂れた。

「ふふつ……鈴の言う通り竜王になっちゃったわね」

「お前な……他人事だと思つて……つたく、この世界に来て何度、腹を括ったことやら……」

深呼吸をして幸利は4体の龍を背に召喚。闇魔法を放ち、壁を崩し高台を創り、宣言する。

「聞け！里に住まう竜人族よ！此度の邪神討伐決戦、俺が竜人族を束ねる伝承の竜王としてこの戦いを勝利へと導こう！我が名は清水幸利！現代に現れし伝説なり！」

後ろの太陽が更に神々しさに拍車をかける。

「「ウオオオオオオ!!」」

その夜――

テイオオの婚約祝いが軽く行われ、竜人族にエヒトとの戦いにおいての、役割や他に参

加が確定している国やメンバーの説明を終え与えられた部屋で睡眠に入ろうとしていた。因みに布団は里の人が気を利かせていたのか、とても大きかった。

「ねえ幸利。貴方の適正って闇属性よね？」

「そうだが？」

「ならなんで、他の属性の龍魔法を使ってるのよ……」

「それなんだがな？俺ら全属性耐性つてのあるだろ？アレを变成魔法でちよいちよいと弄つてたんだよ。そしたら全属性適正を獲得したんだよ。ほら、能力者は自身と似たような物はレジストでできるって言うだろう？……しかもこれ、奇跡的に成功したから2度とできねえ……」

「あんた……知らない間にそんな事してたの……」

優花は少し呆れたような顔をしたものの、そんな所が彼らしいと思い、そのまま抱きついた。

「暖かい……ねえ幸利……」

「どうした？」

「貴方は何処にも行かないわよね……いつの間にか消えてるなんて事ないよね？」

何かに怯えるように優花は幸利を抱き締める力を徐々に強める。

「何言ってるんだお前は……俺は基本的に何処にも行かねえよ……お前達が離れないよ

うに、俺もお前達から離れない」

「それなら……それなら良いのよ……」

すると寝室の襖をティオが開けて入ってくる。

「ご主人様よ、爺様が話があるとのことじゃ。向かってくれぬか？」

「わかった。優花一回離してくれ」

「うん……」

「で、ティオ。アドウルさんは何処に」

「妾の住んでいた家じゃ。会議の後に軽く里を案内したが、覚えておるか？」

「覚えてるから大丈夫だ。んじや行ってくる」

そう言つて幸利は空間魔法でアドウルの部屋の前にワープして行つた。

「アドウルさん……幸利です」

『おお、来てくれたか。入ってくれ』

彼の部屋に入るとそこには書齋のように本棚が並んでおり、その殆どが歴史書や魔法書だった。

机で書類の処理をやめたアドウルは椅子から立ち、幸利の元へ歩み寄り、ソファに座るよう促す。

「幸利くん。ティオには色々なモノを見せて上げてくれて本当にありがとう。あの子は

隠れ里での生に飽いていた。竜人の矜持と自身の立場から掟を忠実に守ってきたが……やり場のない暗く重いものを抱え続けて、心は乾いていたに違いない。半ば無理やり此度の任務に就いたのも、無意識に『何か』を求めたからだろう。テイオは、その『何か』を見つけたのだ。そして、嬉しそうに笑っている。昔、里中を振り回しては怒られていたお転婆な頃を思い出したよ」

そう言つてアドウルは幸利の手を両手で固く握る。

ただ昔からずつと真面目だと思つていた彼にとつては意外だった。まさかテイオがお転婆だとは思わなかつた。

自分はお転婆とは違うが親に対して反抗的だった。だからこそ、自分と似たような所があると知つたことで、不思議な嬉しさが出てきた。

彼女のようなお嬢様も1人のヒトだということだ。

「私はテイオの選んだ伴侶が君で良かった。これからも彼女をよろしく頼む」
「勿論です」

幸利は過去のお転婆が気になりその話を聞くことにした。

「テイオのお転婆つてどんなのがあつたんですか？」

「ほう……気になるのかね？」

「ええ……とつても」

アドウルは少し悩む素振りを見せると、何か思い出しのか離し始めた。

「テイオが竜化の特訓の時の話なのだが。あの子はあつさりと竜化に成功して、空を飛び回つてな。里の建物を荒らして、オルナ、母親に怒られおつたのだよ。他には魔法の特訓で始めて出来た魔法を里の者達に見せびらかしたり、里の同年代の子供達と泥まみれになるまで遊んだり例えば幸利君が昼間に実力を認めさせたりスタスタもだ……ああ……懐かしい……すまない……こう歳を取ると涙もろくなってしまうな」

「はははっ……意外ですね。あのテイオがそんな幼少時代を送っていたなんて……」
「まだまだあるが聞かかね？」

「勿論」

それから数十分、昔のお転婆お嬢様の話を聞き続けた。

「少し話し過ぎたようだな……そろそろ今日はゆっくり寝てくれ」

「そうします。おやすみなさい、アドウルさん」

「おやすみ幸利君」

アドウルとの会話を済ませて幸利は再び寝室へとワープした。

「ただいま戻ったぞ」

寝室を視界に入れるとそこには浴衣姿の優花とテイオが本を読んでいた。

「む、戻ったのじゃな」

「ああ、アドウルさんと少し話したただだからなすぐ終わった。テイオの事をよろしくだとき」

「爺様……」

「それと、お前、昔は結構やんちゃしてたんだな」

悪戯つ子のような顔でテイオの昔話を聞いた事を話す。

「な、ななな、何故その事をご主人様が……!?ま、まままま、まさか爺様が……」

「EXACTLY! その通りでございます! ま、公に話すつもりはねえよ。竜人族と俺達の秘密だ。そろそろ寝ようぜ。ふわあ……眠いしな」

目もシヨボシヨボしているのか、目を擦る。

「ほら、寝ましよう? 幸利はアタシとテイオが挟んで抱き締めるから」

幸利は浴衣に着替えて布団に入る。

優花とテイオの暖かく柔らかい身体に包まれて重たくなった瞼を閉じる。

「ふふふ……こう眠ってる姿は可愛く見えるわね……」

「そうじゃのう……普段、鋭い目つきなのもあって、寝ている時が安らいでおるようじゃ」

眠る幸利の頬に2人はキスをしてそのまま眠るのだった。

オルクス迷宮攻略！

「幸利達が竜人族の里から戻ってきたと同時に恵里達がライセン迷宮から帰還して来ていた。」

「お、恵里達も戻って来たのか」

「うん。そつちも目的は達成出来たの？」

「当然な。そつちもってことは」

「こつちもバツチリ習得して来たよ」

互いに目的達成した事を報告する。

「俺はこれから自己強化諸々に入る。それでなんだが、龍太郎と天之河を借りてくぞ？」

「お、俺？」

「俺もなのか…」

唐突に名前を呼ばれた2人は何故自分かという表情になっている。

「まず、天之河には魔法を俺が教える。ユエセンサーに色々教わったから色々な色々伝授してやるよ」

「わかった…よろしく頼む」

「おう。んで龍太郎、お前に弱点を与えるかもしれないやつだな。ハジメもお前の強化案はあるがあつちは多芸方面。俺は一芸特化になつてる。どうする?どつちの魔改造にするかはお前の選択に任せる」

幸利はどう強化するのか龍太郎に選択を委ねた。

彼は悩む事なく、声を出した。

「幸利……お前の案で頼む。南雲には兵器製作に集中して欲しいしな」

「オーケーだ。んじや着いてきてくれ」

幸利達は王都へ向かうのだった。

「さてと僕達は休憩しないかね……」

それから数日後

幸利達が王都から戻り、ホルアドの広場でオルクス攻略のメンバーと合流した。

今回の攻略メンバーは以前のメンバー＋シア＆ヴェアベルトである。

つまるところシアも概念魔法を覚えて、土郎救出の概念を作るという事だ。

「龍太郎、どんな魔改造を受けたんだ?」

「うーんとだな……まずテイオさんと同じように竜化の技能を貰ったのと、その竜化自体を改造した変化、ヴェアベルトさん達魔族の性質、魔法の適正を貰ったって所だな」

龍太郎が簡潔に魔改造の説明をする。

「炎、氷、風の魔法が使えるようになったからな。期待はあんますんなよ？元々魔法使うわけじゃないし、使いすぎるとガス欠になっちゃうからな。で、光輝はどうなんだよ？」
「氷雪の迷宮の時よりもつとあらゆる属性の魔法が上手く使えるようにはなった。これで足手纏いはおさらばできれば良いが……」

「上手くいつてなによりだぜ。これからオルクスで慣らしてくしかねえわけだ」
手応えは両者あるようだ。

「んじゃ準備が良いならオルクスに行つてこい。今のお前達なら余裕だろうがな。ティオの改造を続けなといけなからな」

幸利はそう言つて王都に戻り、ティオの魔改造の続きをしに行つた。

「それじゃあ、オルクス攻略出発だよ！」

羅針盤を手持つ恵里の掛け声に全員が声を上げて叫んだのだった。

一行はオルクス迷宮内を進み、以前発動したトラップを再発動させ、その上でベヒモスのいた橋を落ちていった。(ベヒモスとトラウムソルジャーは跡形もなく消し飛ばした)

さらには事前情報もあり、苦戦する要素が皆無に等しかった。

龍太郎と光輝が幸利によって会得した力を慣らすためにも先陣を切って魔物を倒していくので、出番が殆ど持っていてかかれていた。

「圧倒的じゃないか我が軍は……」

「これで僕達、神代魔法会得出来なかつたら恨むよ」

と言うものの彼女達もキチンと魔物を倒しているのです、問題はない筈だ。

90層に辿り着き、気配感知にこの層にいるはずの無い魔物の気配を恵里は感じ取った。

「キュツ！モキュツ！キュウツ！」

「う……さぎ……」

「アレって蹴りウサギ……だよね……？」

現れたのは真オルクス第一層に住み着いている蹴りウサギ（仮称）だった。

今更警戒するような魔物ではないので鈴が真っ先に近づいた。

「ウサギさん……なんでここに居るのかな？」

蹴りウサギはキュウキュウ鳴くだけだったので、念話石を使い意思疎通を計った。

『ウチは王様に会いに来たんやで。ほしたらあんた達がおつたんや』

「王……様？」

『せやせや。片腕で次々と敵をノした王様に会いにここまで来たんや』

関西弁で喋るのは置いておいてこのウサギが会いたいと言う人物はおそらくハジメだろう。

ハジメ達のように弱者が成り上がっているウサギは戦力としては充分だと判断し、彼に会わせる代わりに自身の使い魔にする交渉を始めた。

「なら、鈴達に着いていく？ウサギさん？これからの試練に打ち勝てばもつと強くなれるし、君の会いたい人に会えるよ？」

悩むそぶりを見せるウサギ。

さらに鈴は衣食住やら1日3食おやつ付きやらなんやらのセールストークをし始める。

その中で一際反応が良かったのは、『ステータスアップ』だった。

『なんやて!?!もつと強うなれるんか?!』

食い入るようにウサギが身を乗り出す。

結果、ウサギは鈴の従魔になったのだった。

安全地帯でウサギの魔改造を終えて、遂に最終フロアの最奥の扉の前へと辿り着いた。

「ハジメの攻略本によると、ヒュドラは七つ首でそれぞれ色に合った属性攻撃をしてく

る。特に銀色の首は威力のやばいブレスを吐上に身体を蝕む毒素も持つてる」

「魔力耐性で毒への抵抗力は上がるが、トップクラスに高い幸利殿でさえ苦しんでいる。極力喰らわないようにする事だ」

「ですが、本来ならここは最後に到達するべき迷宮なので、事前情報と全く違うヒュドラが出てくるかもしれませんねえ……」

どんなヒュドラが出てきても良いように心構えをし、覚悟を決めて扉を開ける。

一瞬、真つ暗闇に包まれた部屋だったが、すぐに明るくなり、視界が開けると奥には巨大な魔法陣が現れ、そこからヒュドラが出現する。

現れたのは、七つ首の姿だった。

「最初から全力か！ だったら俺も強化形態で相手してやるぜッ！」

そう言って、龍太郎は魔力を全身に纏う。と身体に変化が現れ出した。

皮膚が全て竜の肌へと変化し、竜の翼が生え、爪が鋭く尖る。

「オオオオオオオ！」

雄叫びで空気が震える。

「りゅ、龍太郎……くん？」

『竜鱗化』……身体を竜に近づけさせて身体能力を倍加させる……つて幸利から説明さ

れたけど……ドンドン力が溢れて来やがる……！』

溢れる魔力の奔流に髪が暴れる。

「黒い首と白い首から仕留めるよ。精神攻撃と回復されるのは面倒だからね」

事前情報を基に組み立てた作戦を実行に移す。

黒い首と白い首を集中して攻撃する。

黄色い首が攻撃を防ぐ為に右往左往し白い首を鈴の結界斬撃と龍太郎の竜化手刀により真つ先に刎ねる事に成功する。

「そんなもの……効かないッ！『土傀儡』！」

黒いモヤのようなモノを振り払ってカトレアが短剣で切り掛かり、地面からゴーレムを作り、赤い首のブレスを受け止める。

さらにシアが黒い首を星砕きで叩き潰し、青い首がメルリアンの氷結ブレスの撃ち合いでいる間にヴェアベルトがハジメによって強化された腰の剣により叩き切られる。

時折、銀の首が蝕毒のブレスを吐き出すが、恵里が的確に指示を出し、余裕を持って交わすことが出来ている。

ミハイルの雷斬撃により緑の首も刎ねて、銀の首に全員で総攻撃を仕掛けようとした時だった。

「な、なんだッ！いきなり！」

「なんの光イ!？」

「『聖絶・剛』！」

「『絶界』！」

「阻め！『光鎧・重鎧』！」

全員が防御魔法などを発動し、ブレスを受け止めるものの、ピシピシと結界が割れていく。

「全員！割れた瞬間にその場から素早く移動！直撃だけでも避けて！」

遂に耐えきれず割れると判断した恵里は直撃避けを指示し、その場から離脱する。

光輝は光鎧を一気に広げて離脱。ヴェアベルト達は空間魔法でワープ。シア恵里は恵里の分解で隙間を作り、そこを走り抜ける。鈴と龍太郎は鈴の聖絶でブレスを押し返し、割れる瞬間に、龍太郎が鈴を抱えて回避した。

「みんな一斉攻撃！」

攻撃の隙を付き、カウンターを仕掛ける。

「うりやアアアアアアア！」

シアは星砕きでヒュドラの首を2本叩き潰し、柄の根本でもう一本貫く。

「デュランダル！僕の魔力を喰らえ！バルムンク！魔力を放て！」

「おつシャア！オレ達の出番だぞバル！」

「貯めた魔力、うっかり放つんじゃないぞ！」

『ハッ！バルこそ狙い外すんじやねえぞ！』

二刀は言い合いながらも恵里の指示をこなしている。

『デュランダル・オーバードライブ』！『バルムンク・バーストブレイク』！

魔力を圧縮したデュランダルで元が黄色の硬化した首、2本纏めて刎ね、魔力を暴走放出したバルムンクでさらに3本切り裂く。

「ウサギさん！」

鈴は先程スカウトした蹴りウサギに飛び蹴りをしてもらうよう指示し、それに続くように龍太郎が螺旋回転しながら突っ込む。

ヒュドラが風のブレスを吐き出すが、結界に防がれ無防備な状態で元緑の頭2本を2人に貫かれる。

しかしその間に3本首が再生する。

「ミハイル！カトレア！2本落とせ！」

「了解！！」

カトレアは巨大な手を床から作りヒュドラの首2本を絞める。ミハイルが格好の的になった首を刎ねる。

「『神威龍・五天』！」

光輝は5種の白+αの白い龍を作り出し、ブレスを相殺して残った2本の龍で1本、

首を消し飛ばす。

「メル！『圧縮氷弾』連射！」

メルリアンが圧縮された氷の弾丸を吐き出し2本の首を蜂の巣にする。

そしてヴェアベルトの斬撃でさらにもう1本切る。

残り3本になったのだが、再び3本再生してしまう。

「確実に減って来てる筈なのに再生されてキリがないよ……」

「おう……この姿でいるのも疲れて来たぜ……」

「魔力どころか体力も底をつくぞ……っ！」

半端な攻撃では倒すことができないので全員が一撃で屠る為に全力で攻撃している為、消耗が激しい。

特に竜鱗化している龍太郎や消費魔力の多い技を使っている光輝やカトレア達も疲労が目に見えている。鈴は結界を複数展開し、ブレスを受け流しているが何度も割れてしまっているせいで張り直して魔力を失っていく。

「お兄ちゃん達は確か一瞬で刎ね飛ばした……なら僕らは……」

鈴に負担をかける事になるが、彼女を信頼しての判断だ。

「鈴！頼みがある！」

「エリリン!？」

恵里は鈴に作戦の詳細を説明した。

「鈴には無茶をさせるかもしれない。だけど頼める…?」

それに対して鈴は、

「まっかせて!」

大丈夫だと、うなづくのだった。

そこからは恵里の指示で、全員が鈴を中心に同じ場所に集まり、彼女の結界で守られる。その間に魔力を貯め、確実に仕留める為の準備に入る。

その間もヒュドラは大量の首から強烈なブレスを吐き出す。

「くうっ……………」

結界を維持する鈴からは苦しそうな声を漏らす。

「鈴っ……………」

「光輝っ…………俺達は魔力を貯めるんだ!」

魔力を貯め続ける。

そして魔力が最高潮に溜まった瞬間だった。

「キヤアアアアアアア!」

結界が割れて鈴が壁際に吹き飛ぶ。

『鈴のことは気にしないで行って!』

自身の身を顧みず攻撃するよう叫ぶ。

その声に全員が応えるように全力攻撃をし始めた。

「『竜王拳・剛』！」

龍太郎は地面に強烈な一撃を放ち床を隆起させて首の下を貫き、身動きの取れなくなつた首をもう一撃で粉碎する。

「纏え聖剣！『神威龍・咆哮』！」

神威を龍のカタチにして聖剣に纏わせた光輝は突きの構えを取りそのまま一撃必殺の神威を放つ。

「まとめて掴んでやるよ！ミハイル！」

「おう！『螺旋雷豪剣』！」

カトレアがゴーレムの腕で首をまとめて掴みそれをミハイルが螺旋状の雷の斬撃で一気に焼き切る。

「『人竜一体』！そして『荒爪乱舞』！」

メルリアンと人一体となつたヴェアベルトが縦横無尽に首を刈り取る。

「これで止めだあアアアアア！」

そしてラスト2本になつたヒュドラを恵里はデュランダルとバルムンクに魔力を溢れるほど込め、重ねて振り下ろした。

「はあああああああああー！」

胴体まで切り裂いた事により、ヒュドラの絶命が確定した。

「勝ったのか……?」

「勝つただげ光輝……」

ヒュドラを倒した事に放心している光輝をやり切った顔をしながら壁際で気絶した鈴を抱える龍太郎が、呼びかける。

「これで試練達成……か……本来の難易度はこれなのだろうな……」

「あたし達は2番目だと言うのにキツくないかい?」

「仕方ないぞカトレア……俺達は2番目だが、隊長達が最後になってしまったからな

……」

魔族に2人も疲弊し切っていた。

「それじゃあ皆さん、隠れ家に行きましょうか」

そう言つてシアがズンズン進み、その後ろを恵里がついて行く。それを見て残りのメンバーも続くのだった。

オスカー・オルクスの隠れ家にて、恵里、シアヴェアベルトの3人は生成魔法と概念魔法を習得し、隠れ家の布団で一日中休むのだった。

「んうっ……確か僕達は概念魔法で覚えさせられて……」

「恵里さんも覚えられたんですね……！」

「シア……うん覚えたよ。後は雫と一緒に神越の短剣に概念魔法を更に付与してお兄ちゃんを解放する、究極の短剣にできるようになったんだね」

「はい……！」

2人は喜びを噛み締める。

コンコンと扉を誰かがノックするので恵里は返事をして入っても良いことを告げる。

「エリリン！シアシア！目が覚めたんだね！」

「おお……2人も目を覚ましたか」

入って来たのは鈴とヴェアベルトの2人だった。

「うん。ここで休み終わったら、雫を呼んで3人で概念魔法を作る」

「目標が近くなってるのは良いことだと。だが無茶だけはしないようにな」

今回、習得した生成魔法の適正は恵里とカトレアの2人が高かった。

それ以外のメンバーの適正は軒並みダメだった。

反撃準備の休憩

反撃会議の翌日、ハジメは王国の何部屋かを自身の工房へと改造し、そこで香織とユエのサポートを受けて兵器開発に勤しんでいたが、3日目は休憩として1人、王都を回っていた。

香織とユエとも回ろうと思っていたのだが、2人はやる事があるとレミア達を誘おうとしたのだが、海人族がフェアベルゲンの亜人族との交流があるので結果、1人で回る事になったのだった。

「買い歩きを異世界でするのは新鮮……なのかな？」

幸利達がフューレンで買い歩きをしたのを思い出していた。

当の彼は竜人族の里で竜人族への協力要請に向かっている。

奈落から生還した彼等はいくら食べても太らない——特に余剰カロリーなんかは全て魔力に返還されているので脂肪がつくことはない。その事を知った香織達が大喜びしたので懐かしい。

鳥の串焼きを食べていると、フードを被った人とぶつかってしまった。

「おっと……すいません、大丈夫ですか？」

「いえ、私は大丈夫ですよハジメさん」

いきなり自分の名前を呼ばれた事に、警戒をしたのだがフードの中の顔を見て、警戒を直ぐに解いた。

「リリイ？」

「はい、こんにちはですね」

「事務処理はどうしたの？」

最終決戦に向けての書類処理などの仕事があると聞いていたが王都がお忍びしに来るほどの余裕でもあるのだろうか。

「えっと……その……ランデルやお母様から少しは休めと言われてしまいました……」

山のような書類を処理していたが、流石に家族に心配されたのか息抜きをするように言われたようだ。

「それでなんですけど……一緒に回ってもよろしいでしょうか？」

「それは構わないよ」

ハジメとしては1人で回るつもりだったが、リリアーナと回るのも良いと考え、2人で買い歩きをする事にした。

「リリイのオススメに従うよ。僕はこの街を知らないからね」

「ふふふっ……良いですよ。私の好きなお店に案内しますね」

そう言ったりリリーはハジメの手を引き、先導していく。

最初に入ったのは、軽食屋だった。

彼女が頼んだのは地球で言うサンドイッチ。挟まれていたのは肉厚な豚肉に水々しいレタスにトマトだった。

「オススメですよこれ。お忍びの時は決まって食べるくらいなので、ハジメさんもどうです?」

彼女にも勧められ、ハジメも同じ物を頼み口に運び思いきりかぶりつく。

レタスがシャキシャキと音を立てる。

「うまつ……」

パンの柔らかさ、レタスとトマトの水々しさ、肉厚な豚肉から溢れる肉汁がハジメの口内を埋め尽くす。さっぱりとした酸味は肉のしつこい油味を抑えることでくどさをなくしていく。

「肉の歯応えもいいし、パンがふわふわだし……これはリリーがお勧めするわけだ……」
「ふふふつ……気に入ってもらえてよかったです」

次に向かったのは洋服屋だった。

この世界に来て恋人達にプレゼントすることがなかったハジメとしては丁度良かったので、進んで入る。

「服屋と言えばブルツクの服屋がなんかイロモノ粹だとか何とかって聞いたね」
「ブルツクの町ですか？」

「うん。香織達が服を買いに行つた時にね。なんでも容姿がすごかつたとか」

「ブルツクの町は個性的な人が集まる町と聞いていますから、そう言つた方もいるのでしようね」

「……個性的ねえ……」

遠い目をしながら、服を選ぶ。

するとリリアーナがハジメの服を引っ張るので、彼女の方に視線を向ける。

「どうしたのリリィ？」

「…あの…ハジメさん。一着でいいので、私に似合うと思う服を見繕つてくれませんか？」

「それは構わないけど」

そう言つてハジメは服を選ぶ。

手に取つたのは白を基調としたフリルの上に花のように開いた黒い縁取りの裾、胸元は黒いリボンのついたドレスだ。

「これなんかどうかかな？」

「これですね……試着してきますね」

ドレスを受け取った彼女は試着室に入り数分して、カーテンを開ける。

「どう……でしようか……？」

照れくさそうに顔を背けながらリリアーナは試着した感想を聞いた。

「うん、似合ってるよ。やっぱり青も良かったけど、リライならこつちの方がしっくりきたよ」

幼さがまだ残る彼女にぴったりだった。

「ありがとうございます……」

再び試着室に戻り、お忍びの格好に着替え、ハジメの選んだ服を手に取り、会計に向かおうとした。

「服一着くらい僕が払うよ」

「で、ですが……」

「こう言うのは男が払うって相場が決まってるのさ」

そう言ったハジメはリリアーナから服を受け取り、会計を済ませるのだった。

「何から何まで……」

「リライは気にしなくて良いよ」

そう言ったものの、リリアーナは困ったような表情でハジメを見つめていた。

「それじゃあ次はどこに行こっか」

それから街中で最初のように買い食いをしたり、装飾品など見て周り、時には野良猫に怒られたりしているうちに気付けば日はすっかり落ちかけ、橙に染まっていた。

「結構遊んだね」

「そうですね……」

「そろそろ戻らないと。流石にリリイが怒られちゃうしね」

「……まで遅くまで遊んではルルアリア王妃に咎められてしまうだろう。」

「ええ、私も満足しました」

リリアーナはハジメの手を取り、王城へと歩く。

その手を握る力はハジメからすればなんともないが、それでも彼女にとっては離したくないように力強く握っていた。

「ハジメさん……最後に時間をいただけますか？」

彼女の表情はハジメからは見えなかったが、何か覚悟を決めた気配を感じ取っていた。

そんな彼女の覚悟を無碍にできないので、彼も了承する。

「いいよ」

リリアーナは城の屋上の一番高い所までハジメを案内する。

到着する頃には沈み掛けていた太陽は沈み、月は浮かび、輝いていた。夜風が頬を撫でる。

手摺りに手をかけていたリリアーナはハジメの方に向き直り、頬を赤く染めて口を開いた。

「ハジメさん……私は貴方をお慕いしています。堅い覚悟と強い優しさに惹かれました……どうか……側室の末席でも良いので……私も側に居させて貰えませんか？」

「……リリイ」

彼女が告白してくることにハジメは薄々勘づいていた。

だからこそ、返事をずっと考えていた。

最初にユエ、次にレミアと恋人が増えていく事に自分のクズさに呆れていた。

この世界に召喚されて仲良くなった女の子だ。錬成師だと言うだけで国の大半に無能だと侮られた彼を彼女は士郎の話があれど認めてくれたことなど、ハジメは好感を感じていた。

「返事はいつでも構いません……」

リリアーナがハジメの横を通り過ぎようとした時、彼女の手を握り、引き留めた。

「ハジメさん……？」

「リリイ……返事。今応えるよ」

「っ……はいっ！」

一呼吸置き、リリアーナの両手を握り、彼女の碧眼をしっかりと魔物を喰らって変色した赤眼で見つめる。

「恋人を複数持つクズな男で良ければ……よろしく、リリアーナ・S・Bハイリヒ王女様」
ハジメはリリアーナを迎え入れるのだった。

リリアーナを彼女の寝室まで送り届けた後、自分も寝ようと寝室に向かおうとした時だった。

「ハ・ジ・メく〜ん」

いきなり香織が後ろに現れる。

「香織……」

「リリイも恋人にしちやつたんだ〜」

嫉妬のような声だが、それにしては嬉しさが滲み出ている笑顔だった。

「まあリリイなら私もユエ達も反対しないよ。ハジメくんの生存を信じてくれてたことが好感持てるし、律儀に私達に君が好きだって報告したし」

「そうなんだ……」

「ふふっ……もう夜も遅いから寝よ？ユエとレミアさん達も待ってるし」

そのまま自室へと戻り次の日に備えるのだった。

鎖を解き放つ魔法

オルクス迷宮から帰還した攻略部隊は丸一日の休息を終えて、地上へと戻ってきた。
「みんな……成果はどうだった？」

そう香織が問いかけると、恵理とシアの2人が2人でピースサインを向ける。

「バツチリですう！」

「パーペキにコンプリート！」

そのことにワツと雫が香織の後ろから飛び出して2人に抱きつく。

「良かった……信じていたけど……ヒュドラの真の力がどんな物かわからないから……いくらみんなでも無事じゃないかつたらどうしようか不安で……」

「心配性に拍車がかかってない雫？ 僕達はちゃんと帰ってきたからさ、ちやつちや個室に入って、概念魔法作っちゃおう？」

「そうですよ！ 土郎さんを助けて、エヒトの奴をウツサウサにしてやるです！」

恵理とシアは雫の手を引いて個室へと向かった。

用意するのはミレディから託された神越の短剣を台座に置く。

「雫、シア……準備は良い？」

「ええ……大丈夫よ」

「問題ないです」

「それじゃ始めるよ」

短剣の上に3人の手を重ね、魔力を中心に束ねる。紫、水色、白の魔力が混ざり溶け合う。

その魔力にはそれぞれ違う形だが強い士郎への想いと起源が込められている。

士郎に助けられた時、愛された時、横に並んで戦った時、出かけた時など色々な想い出が浮かび混ざり、共有される。

それぞれの知らない士郎の姿、行動、言葉が魂に記憶されていく。

3人の起源、恵里は執着、雫は断絶、シアは不屈。

その起源を短剣に付与される。

「「っ……!?!」」

いきなり自身の魂に刻み込まれた知らない士郎に驚いた。

「「ふふふっ……!」」

3人は笑った。それと同時に魔力の奔流が激しくも優しく渦巻いていき、短剣に集約していく。

『カタカタ』と震える短剣。込められる魔力に耐えている。元からある概念魔法にもう一つ新たに概念魔法が生まれようと産声を上げている。短剣も彼女達の想いに応えようと溢れる魔力受け止める。

光が部屋を埋め尽くし、扉の隙間、窓からもその途轍もない光が溢れ、外にいた、ハジメ達はその部屋の扉に集まる。

「大丈夫かな……」

「大丈夫だと思っぜ。ハジメ達も同じだったからな」

ハジメ達がクリスタルキーを作った時も魔力の奔流が同じように吹き荒れていた。製作を待っていた側は大丈夫だと感じていた。

「……光が収まった」

それと同時に香織、ユエ、鈴の三人が勢いよく扉を開く。

「うっ……」

「くっ……」

「あう……」

仰向けに倒れる3人を見て、それぞれが背負ってベッドに寝かせる。

「これは……なんだ……？」

神越の短剣だったものを手に取ったハジメはステータスプレートを見たがバグった

のか文字化けした文が現れただけだった。

逾樊妙縛ヨ蛻

逾械r譚ユ縛。縲ココ縛九i蛻? j髪「縛吝?縲

諡才諡励☆縲臥「譚丞袖縲

諧帙∪縛工縛?・械T縛ゆj縲√◎縛ヨ莠コ縛九i蝶輔髪「縛励◆縛??縛工縲峨h縲

雁シキ縛上→縲九?

「読め……読めない……?」

言語理解の技能があるハジメが読めなかった。

「香織これ読める?」

「え?……なにこれ……言語理解でも読めない?」

「うん……昇華魔法も試したけどダメだったみたいで……」

どうやっても解読ができないのだった。

「んう……」

先に目を覚ましたのは恵里だった。

「なんか最近、気絶してばっかだな僕……そうだ！概念魔法！」
慌てて短剣を探す。

その間に雫とシアの2人も目を覚ます。

「恵里？」

「どうしたんですか……？」

「あ、おはよう2人とも……概念魔法がどうなったか確かめないと……」
恵里の慌てていた姿に納得した2人も短剣を探す。

外に出ようと扉に手をかけようとした途端――

『ドガシヤア！』

扉が勢いよく開く。結果、恵里の形に穴の空いた扉が出来上がった。

「痛い……」

「あ……ごめんね恵里……目が覚めたんだね……」

開けたのは鈴だった。

「うん……それで短剣はどこにあるの？」

「今、ハジが保管してる」

そう言うので、ハジメのいるところにある短剣を取りに行く。

「3人共起きたんだね。短剣はそこにあるよ……ただステータスプレートには文字化けしててわかんなかったんだよね……」

そう聞いた恵里は短剣を自身のステータスプレートで見る。柄は鎖の形を刃は刀の美しい刃紋、ウサミミの鏝へとヒ首の短剣はいつのまにか姿形が変わっていた。

|||||

神断の刃

神を断ち、人から切り離す刃

抵抗すら無意味。

望まない神であり、その人から引き離したいのならより強くなる。

|||||

「表示されたよ?」

「え?嘘?!?」

その内容を説明する。

「なるほど……」

「元の性能に私たちの想いを乗せたわ……絶対エヒトから士郎さんを切り離すわ……」

「切り離れたところをぶつ潰してやるです……」

「そのまま分解して存在を消す」

全員が3人の殺意の波動に圧倒されていた。

「お兄ちゃんを助ける為の概念魔法は作れたけど、攻め込むのはいつになるの？」

「明後日だね……今度はこっちから仕掛けるよ。不意打ちには不意打ちで返してやるさ」

「おっけ。で、ハジメ達の方はどうなの？」

「そうだね……代表的なのはミュウとリーニャの為に作った護衛LBXのサイズアップ&強化と武器の強化くらいだね。後は参加人数分の武器防具」

すると後ろから『ガシャンガシャン』と音を立てながら近づいてくる。

振り向くとそこには青い盾と銀の槍を持ち、緋いマントを纏う古代ギリシヤの英雄の名を持つアキレス、青と白の槍と盾を持ち、紺色のマントを纏うギリシヤの楽園の名を持つエルシオン。戦闘機が人型に変形したようなボディに双頭槍にエネルギーで構築された盾をもうオーディーン。明るい青と白のボディで鎌状の二刀流の怪物殺しの名を持つペルセウス。黄色の刃の槍と盾、緑色のビームサーベルの二刀流の空を飛んだ勇気の英雄の名を持つイカロス兄弟だった。

「もう隠しもしないんだね」

「……まできたらね……しかもいつのまにか意思があるみたいでさ……」

そう言うアキレス達が声？を出した。

『オレはアキレス！ミュウ嬢とリーニヤ嬢達を守る盾であり矛だ！』

『私はエルシオン。この槍にかけてお嬢様達を守ると誓おう』

『我はオーデイン。大神の名において彼女達を守ろう』

『僕はペルセウス。騎士の誇りに誓おう、神の使徒の首を刎ね尽くす！』

『『我らイカロス兄弟、この身が砕けようとも彼女達の刃となろう』』

「城の守りは彼らと王国兵士や亜人族、魔族に任せることになる。指揮はリリイとヴェアベルト、メルド団長と面白皇帝に任せることに」

「面白……ああガハルドね」

そう納得する恵里。

「それとユエと同じ腕輪が3つだね。なんとか3人分作れた」

ハジメの手から受け取り、腕につける。

「そして劣化版なら僕達の分もあるから、問題はない」

「それにトツシーにウサギさん……イナバを強くしてもらったしオルクスでお供にして保管してた虫もいるから相当な戦力になるよ」

「物量も申し分ないけど……やっぱり不安なのは否めない……本当に勝てるのか……暗い気分がどうしても晴れない」

「だがやるしかねえさ光輝。負けたら何もかもが終わっちゃう……」

装備や人員などが充実しているのにも関わらず、不安な空気が立ち込める。

「あの時のお兄ちゃんも同じだったんだらうな……」

氷雪洞窟での士郎のことを思い出す。

「だがこの戦いが邪神との最後の戦い……最終戦争になるだろう。気を引き締めてかからねばなるまい」

この2日は全員が英気を養う為に、休息を取るのだった。

そして最終戦争……後に『ディオスオピチュアリー』と呼ばれる戦争が幕を開けるのだった。

神話を創造するのは我々自身だ

概念魔法完成から2日後——恵里達は戦争の準備を終えて、神域のある場所の前に立っていた。

「作戦の最終確認だよ。突入隊……主に僕達が神域に突入して、お兄ちゃんの救出。地上には残ったクラスメイト、王国、帝国の兵士、世界中の冒険者、亜人の戦士に魔族の軍人、竜人族の人達にはおそらく地上を襲ってくる神本の使徒個の相手をする」

「地上の面子にもアーティファクトを作ったからそう簡単には負けないはず。士郎を救出して、その後に残った地上の神の使徒を一層する……」

「んで俺たちは恵里達を邪神の前までノーダメージかつ消耗無しに届けて邪魔をさせないのが役目だ」

それぞれの役目を確認した各々は深呼吸をした後、恵里はクリスタルキーを目の前に差し込む。

そして回すとすんなり開いた。抵抗されると思っていただけ彼女にとっては意外だったが、アルヴの資格を強奪していたことを思い出した。

「みんな……覚悟は良い？」

「『『『『出来てる！』』』』」

そのまま扉を開いて突入した。

眩い光に目が眩む。光が収まれば、そこには極彩色で彩られた世界。

不思議な色彩の空間には、白垂の通路が一本、真っ直ぐに先へと伸びていた。否、通路というよりは、ダム壁の天辺のように、巨大な直線状の壁の上と表現するのが正しいだろう。

「なんか……ぐわぐわしてて気持ち悪いいな……」

平行感覚が狂いそうになる気分になる空間に龍太郎が嫌な顔をする。

するとシアのウサミミが反応する。

「砲撃来ますー！」

警戒の不意を突かれた形で襲いかかった。逃げ場など残さないという意味が明確に伝わってくる隙間一つない死の流星群。

「集まれー！」

ハジメの怒号が飛び、全員が、反射的に彼の傍に寄るのと同時に、ハジメは宝物庫から巨大な盾を取り出した。そして、虚空に出現したそれを地面に突き立てながら魔力を注ぎ込む。

すると、『ガシユン！ガシユン！』と音を立てて、大盾の内側から金属板がスライドし

ながら飛び出してきた。それは瞬く間にハジメ達を覆ってドームを形成する。鱗のよ
うな無数の金属板が連なった可変式の大盾『アイディオン』。

最後の金属板がスライドし、完全にハジメ達を覆った瞬間、遂に、全方位からの閃光
が到達した。衝撃はほとんどない。まるでレーザーのように、アイディオンを表面から
塵にしていく。明らかに、使徒による分解能力だった。

そんなものは銀の光を見た瞬間に分かりきっていたこと。だからこそ、ハジメは、こ
のアイディオンによる全方位防衛を選択したのだ。

「分解するだろうけど……生憎そいつはもう対策済みだ！」

再生魔法が付与された復元石の上に士郎が残した対魔力を付与している盾は分解を
無力化していた。

一瞬でビルを分解する使徒の攻撃はたった2つの技能で無力化されてしまっていた
のだ。

アイディオンにかかる圧力が消えたと同時に香織とユエが銃撃と魔法攻撃を開始す
る。

第二の攻撃を始めようとしていた使徒達の脳天は撃ち抜かれ、胴体は消し飛んでい
た。

「何？」

理解する間もなく数人の使徒が絶命した。

「ここは僕達3人で受け持つ」

「みんなは先に行つて！」

「……殲滅したら追いつく」

そう言う3人を信じて恵里達は先に進む。

「さてと……こーゆー状況つてさ、足止めして大半削つてやられるのがお約束だよね」

「……ハジメは負けるの？」

「まさか？ここには回復チート、魔法の天才がいるんだよ？」

「さつさと蹴散らしてとは言えないけどね」

「そりや士郎が相手みたいなのだからね……100パーやばいのくるよ」

彼が乗つ取られているが故にこちらの事前情報、性格などが筒抜けになっている。そ

の理由がハジメ達の警戒レベルをMAXまで引き上げる。

「一瞬でイレギュラーに倒されるなんて我らの汚点ですね」

「ですが我々3人で相手をしなければならぬのもまた事実」

「イレギュラーを殺し、先に進んだイレギュラーも倒すようにしましょう」

3人の神の使徒が突如現れ、大剣を差し向ける。

「やっば別格が来るか……」

「どうするハジメくん」

「マンツーマンでひとまず相手しよう」

「……ん」

そう言つて3人はそれぞれに向かつて飛んでいく。

ドンナー・シユラークの改良型ツェアシユテールング・マサーカーの銃口から弾丸が顔面に向けて撃ち込まれる。

それを双大剣で使徒は防ぐ。

視界が一瞬でも自身から外れた瞬間、2丁をぶん投げて宝物庫から新しい銃を取り出す。

アオスロットウング、シユラーゲンを改良した狙撃銃だ。

ツェアシユテールング・マサーカーよりも高威力の弾丸が双大剣の一振りを貫き破壊する……がしかし時が遡るように直つてしまう。

「自動修復か……厄介な武器だこと……」
オートリペア

そう言いつつも多装填ロケットランチャー・フェアニツヒトウングで乱れ撃ちし、攻撃の隙を与えない。

「どうせこれでも効いてないんだろうね……」

煙が晴れると、ハジメの言う通り無傷の使徒が現れる。

「この程度ですかイレギュラー？」

「いや？」

「そうですか。ならばこちらの番です」

使徒が急接近する。咄嗟にハジメは重縮地で後ろに距離を取ろうとするが、数コンマ遅く、腕と脇腹にかすり傷が生まれる。

「チツ……！」

アオスロットウングで鏑迫り合い状態になる。

ギヤリギヤリと音が鳴る。

「何故抗い、諦めないのですか？ 負けることがわかっているのに無意味な戦いでしょう」

「それはこっちのセリフだ……しつこいんだけど？」

すると使徒の背後に向けて銃撃するも、翼によって打ち落とされる。

「？ 何かしましたか？」

「ウザ……感情ホントに無いの？」

使徒の背後には先程投げたツエアシユテールング・マサーカーが空中に浮遊していた。

更にハジメはクロス・ヴェットを4つ宝物庫から取り出し、炸裂弾をぶっ放す。

ガガガンッ！

「甘い……」

「くっ……！」

防がれるどころが全てかわされてしまい、接近を許す。

「しまっ……ぐぐっ……！」

剣撃と翼の乱れ撃ちをハジメは紙一重でかわし、アオスロットウングでいなしていくものの、徐々に被弾が増えていき、袖がボロボロになつて頭になった肌からは血が流れることなく、傷口が分解されていた。

「おや？我々の分解は対策したのでは？」

「うるさ……全く……やり辛さがあの時と段違いだよ……」

ハジメは宝物庫にある武装でどうするか考えていた。

一方、香織は使徒に対して攻めあぐねていた。

回復に関してはスペシャリストの彼女だが、攻めに関しては他の奈落組メンバーには一歩二歩劣っている。

「やっぱりハジメくんの救援待つ……ううん、私だけで倒さないと……ユエには負けられない……」

銀翼の魔弾を結界で防ぎつつ、銃で反撃しているが、全くと言っていいほどダメージ

を与えられていない。

「やはり貴女は他のイレギュラーと違い、攻撃は脅威になり得ませんね…その回復は脅威ですが…：…いずれは回復する力もなくなりただの的になるだけでしよう」

「そうかな？ 貴女達が知らないだけで私にはやれることあるかもよ？」

そう言いながら光魔法を収束し、レーザーのようにして放つもあつさり無効化される。

「っ……っ？」

すると後ろに引き寄せられる感覚が身体に伝わる。

後ろを見ると、巨大な竜巻が発生していた。

(嘘っ!? 発生の予兆すらなかったのに!?)

吸い込まれて仕舞えば少くないダメージを受けるのは明白だ。

空力でその場から離脱しようとしたのだが、使徒がこちらに向けて大量の岩を飛ばしてくる。

細かい動きで避けるのだが、後ろの竜巻にどんどん引き寄せられていく。

「落ちなさい、イレギュラー」

純白の落雷が香織に突き刺さる。

「ぶアアアアア!?!」

身体が痺れてしまい、竜巻にそのまま呑み込まれてしまった。

「キヤアアアアアアアアア！」

弱者ならば、ボロ雑巾になるどころか細切れになり死に絶えるほどの真空の刃。金剛により耐え切る香織だが大ダメージを受ける。

しかし、彼女の高いヒーリング能力は一瞬で傷で消す。

「この程度じゃ私は倒せないよ」

「そのようですね。生きのいいサンドバッグだと思えば、少しは我が主も満足させることができません」

妙に嗜虐的な表情へと使徒の顔が変わる。そのことに若干の不気味さを覚えてしまう。

「お返し行くよー！」

ドパパパパパン！ドパパパパパン！

スヴェートから銃弾が一齐に放たれる。使徒は防ぎ避けようと行動したのだが、来るはずの弾丸は当たらず彼女の目の前や離れた所で異変を起こしていた。

「これは……」

止まった弾丸の周囲がひび割れており、使徒の周囲を囲っている。

唯のこけおどしだと判断し、彼女は香織目掛けて突っ込もうとしたその時だった。

見えない壁に阻まれ、思うように動くことができなかった。

香織が放ったのは空間に楔を打ち込む弾丸だった。

「はあっ！」

更に弾丸を打ち込んで使徒の腕を破壊する。

「次で仕留める！」

そう言つて香織は脚、反対の腕、頭と順番に破壊し確実に殺す為に胴体をもガラスを割るように粉々にする。

香織は勝つたと判断した。

「ハジメくんとユエの加勢に……？」

2人の加勢に向かおうとしたのだが、嫌な予感がして破片をじつと見る。

破片が集まり、人のカタチをとっていく。

「面白い手でしたが、無意味です」

「……流石にズルじゃない？」

これで倒せない使徒に怒りを通り越して、呆れを覚えてしまう。

長期戦を覚悟しなければならないようだ。

「緋槍……！」

炎の槍をユエは放つが、銀の魔弾に全て貫かれそのまま彼女に飛来する。

「聖絶……」

結界で完璧に防ぐ。

近接戦はほとんどと言っていていいほどしないユエは、接近されればほぼダメージを受けてしまう。

自動再生のある彼女にとって多少のダメージはあつてないようなものだが、魔力を食うのであまりダメージは受けたくはない。

「凍雨……雷鳴閃……」

氷柱の雨と雷の閃光が使徒を貫こうと向かう。

「その程度では無駄に魔力を消費するだけでは？」

牽制程度の威力とは言え、そこまで低い威力なわけではない。

使徒の双大剣と翼の防御が硬いのだ。

「そつちこそ、防戦一方で攻めて来ないけど……？」

「そうですね。貴女も我が主が狙う肉体の一つでしたので、手加減するよう命令がありました。ですが……既に必要ありませんでしたね」

そう言う而使徒の身体から魔力が吹き荒れた。

残像がブレるほどの速度でユエに接近し、双大剣術でユエを切り刻む。

「くっ……」

凄まじい剣撃にユエは致命傷を避け、結界を巧みに使い、攻撃を受け流し、反撃を決めるも、つけた傷がすぐに癒えてしまう。

「ふっ……」

「ガハッ……!?!」

剣撃や魔法を捌き反撃を入れることに集中し過ぎたせいか、意識の外から迫る蹴りに対応しきれず、モロに横っ腹に喰らってしまふ。

だが一瞬でも反応できたのか、薄い結界で防御することはできた。

「ぶっ……」

口に溜まる血液を吐き出す。どうやら一度、内臓が傷ついたようだ。

(チマチマやつてもキリがない……一気到大技で消し飛ばすしかない……)

その方法がないわけではないが、問題が2つあった。

(そもそもそれをするだけの隙がない……そしてその魔法の名前がない……)

大魔法を唱える為に時間がかかる上に雷龍のように簡素な名前では目の前の使徒を殺すことは叶わない。

どうしたものかと考えるのだった。

地上の猛戦

恵里達が神域に向かった頃、地上は神域での戦いと違い静寂が辺りを包んでいた。

「……静かですな」

リリアーナは何も起こらないことに、不気味さを覚えていた。

『だが、警戒を解くわけにはいかん。確実に地上を一掃する何かがあるはずだ』

念話石端末からヴェアベルトからの声が聞こえる。

すると、空にヒビが入り窓ガラスが割れるように砕け散り、情報にあつた通りの姿の使徒が現れる。

『使徒出現！総員戦闘体制！』

伝令からの声を皮切りに、地上待機組は持つ武器を抜刀し詠唱を始める。

「一体一人で相手をするなよ！袋叩きにして確実に仕留めろ！」

士郎によって面白ピエロ姿に改造されてしまったガハルドが基本指示を出し、自身と部下複数人で使徒一人を取り囲み袋叩きにして確実に殺す。

帝国兵が勇猛果敢に攻め込むのを見たハイリヒ王国の兵士達も負けじと突っ込む。

「帝国兵に遅れを取るな——！」

「我らもガハルド陛下に続け！」

「真の戦士の名を知らしめるのだー！」

かき集められた冒険者達も一つのギルドパーティで使徒を囲んでいる。

近接戦で使徒を仕留める中、空中から使徒による砲撃の不意打が行われる。

しかしそれは杞憂に終わる。

「大結界起動！」

リリアーナの声により、強固な半球状の結界が展開され、砲撃が完璧にシャットアウトされる。

大容量魔力タンクのお陰で、結界を維持する魔力は尽きることはない。

「聖歌隊！あなた達の歌で、御使いを自称する人形共を墮して差し上げて下さい！」

覇墮の聖歌により使徒の力を半分以上落とす。

恵里から伝えられた使徒の動きを停止させる

人間の戦士達が使徒を確実に仕留める中、ヴェアベルト率いる魔人竜騎士組も空中で使徒を竜のブレスで消しとばしている。

竜人族も3人1組で使徒を仕留めていき、順調にことが運んでいる。

亜人族も地上で使徒を袋叩きにしていた。（特にハウリア達兎人族が）

「順調ですな……」

「そうですね……不安が絶えませんが……」

そう不安がるリリアーナと愛子。その背後では、機械騎士達がミュウ達を護るように立っていた。

『まだ、オレ達の出番はないみたいだな』

『ああ、人間達が犠牲なく戦えている。私達が見守るだけでいられるのは安心していられる』

『だが、我らのリーダーが敵のようなものだろうか？このままというわけにはいかないであろうよ……』

槍の騎士達は相手の出方を伺っていた。

そんな心配を他所に、戦況は地上の戦士達優勢で進んでいる。

「お前らっ……このまま押し切って、天野士郎を見返してやるぞー！」

ガハルドが更に攻めの姿勢を取る。

帝国兵も気合いを入れて使徒の攻略に入る。

ハジメお手製のアーティファクトによる戦力増強で被害なく戦えているのが大きい。

「よし……勝てる……勝てるぞー！」

地上の一人が声を上げた。

誰もがそう思った。あの士郎やハジメが苦戦した相手を倒すことができたのだ。

勝ちが見えたと思っても仕方がないだろう。

しかし、戦況がグラリと揺らぐ。

「ツ!?空が……また……割れる?……」

リリアーナは再びヒビの入った空を視界に入れる。

更に増援が来ると、身構える。

遂に割れて、ガラス片のような物が散らばり、開いた虚空から現れたのは、若干赤味がかかった白い髪の竜騎士だった。

「なんだ……あれ?」

一人の冒険者がつぶやくと同時に純白の閃光に包まれ消失する。

「何が起きた!?!」

叫んだ地上の戦士一人を皮切りにまた一人また一人と消えていく。

言いようもない恐怖が戦場を包む。

ただ一人気づいていた男がいた。

「まさか……既に改造が完了していたのか……つ! 魔人竜騎士部隊! 敵の増援部隊を狙え!!」

ヴェアベルトの指示に従い、魔人族の竜騎士は自身の騎乗する相棒竜に最大プレスを放たせる。

「魔人天使兵とでも言う姿か……」

そして一番奥で指示を出しているであろう、3つ首竜に騎乗している1人に突撃した時だった。その3つ首に乗る魔人天使兵の顔を見た彼の表情が驚愕に染まる。

「……何故、お前が生きている……ッ！『カイラナ・シユバリオ』!!」

ヴェアベルトは戸惑いながら斬りかかる。

「何故？何故も何も私は死んでなどいないぞ？裏切り者のお前に殺されたことなぞ一度もな」

対するカイラナは何を言っているのか理解のできない表情のままハルバードで受け止める。

ヴェアベルトはあの時、仕留め損ねたのかと思ったがそれはないとすぐに否定する。

確実にあの時の彼女は絶命していたのを彼は確認した上に火葬までして死体すらも残さなかったのだ。

「何者なんだ……!?!お前は一体……!」

「何者も何も私はお前に教えを乞うた弟子の1人、カイラナ・シユバリオだが？」

「戯言を！お前はオレが殺した筈だ！」

感情が先回りしているのか、ヴェアベルトの攻撃に全て無駄な力が入り、悠々と受け流されてしまう。

『ヴェア！オチツク！』

メルリアンは一喝入れる為に氷ブレスで頭を冷やす。それにより昇っていた血が段々と下がっていった。

「メル……………っ！すまない……………冷静でいられなかった……………」

『イイ……………ワタシモ最初ハ動揺シタ。でも臭イはカイラナト、バルデイス、同ジダッタ』
「やはり本物なのか…?!」

カイラナの飛竜バルデイスもクローンなのかと更に驚愕する。

意思を持つ魔物のクローンは作ることが不可能なのだ。

『ウウン……………違ウ。臭イハ同ジダケド、ナルマデ？ミタイナノガ違ウ』

「過程が？どういうこと……………っ?!まさか……………？いや……………そうか……………」

ヴェアベルトは一つの研究を思い出した。

それは彼が変成魔法を手に入れてか数ヶ月が経過した頃のことだ。

「……………魔物を強くして引き連れても殺されては意味もないな」

そう言ったのは、まだ離別する前のフリードだった。

「そうだな。殺されぬよう立ち回るのが基本だが……………何か良い妙案がないものか……………」

2人が悩んでいると、1人の魔人族が手を上げた。

「む？何か案があるのかカトレア」

「はい。魔物を一匹強化したらその魔物の遺伝子情報などを複製して培養、そこから一から急成長させるのはどうでしょうか」

つまりはクローン技術で魔物の大量生産するということだ。

「なるほど……同じ魔物に同じ強化を施すより、その強化した魔物自体を複製する方が簡単だな……」

「まずはその技術を習得しなくてはな……」

そこからは研究が加速していき、遂にクローン方法による魔物の量産に成功し、魔族と人間族の戦争の天秤が魔族に傾くのがあった。

「ここにいるカイラナはこれだけでなく……控えているというわけか……」

だとしてもヴェアベルトは全てを殺すつもりでいた。

「この数の使徒を見ていると、クローン技術には邪神の手がかかっていたのか……」

神の使徒の余りの多さに自身の国でそのことが応用されていたと判断した。

「弟子の過ちは師が清算しよう……」

ヴェアベルトとメルリアンが一体化する。

『『人竜一体』！』

背中から竜翼が生え、爪も伸びて体内器官が変質する。

「出ましたね……奥の手。ですが軽く捻り潰してあげましょう」

（この姿は既に共有されているのか……）

王国で再会した時には知らなかった人竜一体を今回は知られていた。

ヴェアベルトは爪で刺しにかかるが、軽々いなされ、ハルバードの持ち手の部分で脇腹を殴られる。

「ぐっ……」

骨が折れたわけでは無さそうだが、ヒビ程度入っただろう。しつかりと痛みを感じ取ってしまい、多少だが動きが悪くなっている。

（その多少が……決定的な差になっている……!）

再生魔法を発動し、自然治癒を加速させてヒビを治す。

ヴェアベルトは防戦一方になり、魔力の消費も激しくなっていく。

「ふふふっ……師を超えるのは弟子の勤め。今ここで貴方を超えて、新世界で新たな魔族の歴史を創るのです！人間族や亜人族など不用だということを理解しなさい！」

バルデイスの右の首から吹雪プレスが放たれる。

メリリアンの擬竜の鱗によりプレスのダメージは大幅カットされているので、効いていない。

「ふふふつ足を止めましたね？」

不敵な笑みを浮かべたカイラナは左の首に火炎弾を吐かせる。

「やはりかっ！」

それを読んでいたヴェアベルトは吹雪プレスから離脱して火炎弾をかわす。

「カアアアアッ！」

そのまま冷凍光線をバルデイスの真ん中の首に向けて放つ。

「バルデイス！溶かしなさい！」

真ん中首からは熱光線が放たれ、ヴェアベルトの冷凍光線とぶつかり合い蒸気爆発が起きる。

「チイツ……！」

蒸気に紛れて攻撃されることを避ける為に急上昇し、警戒をしようとした彼の目に映ったのは、

「あははっ……定石通り動きましたね？師匠？」

ハルバードの穂先を向けるカイラナの姿だった。

グサッ！！

「ガハッ……ぐっ……！」

そのまま腹を貫かれ、地に落ちていってしまった。

(ああ……ここで終わりなのか……くそ……私は……オレは……何も……できないのか……)

段々と意識が暗くなり、一体化したメルリアンとも別れ、遠目から青紫のオーラを纏った何かが飛来するのが最後に見た光景だった。

王国司令要塞で戦いを見守っていた愛子は空から青白く光るモノが落ちてくるのを見てしまった。

「アレは……まさか……」

戦況報告のためにハジメお手製の双眼鏡を使い、落ちてきたモノを確認する。

写し出されたのは、腹を貫かれ自由落下するヴェアベルトの姿だった。

「っ!? ヴェアベルトさん!」

愛子は慌てて要塞を降りようとするが、

『何をしている畑山愛子』

オーデインンによって止められる。

「オーデインンさん……通してください!」

『あの男の下に向かって何ができる』

「傷なら治せます! 魔力も譲渡できます!」

『それはお前でなくとも良いだろう？』

「それでもです！私は彼を助けたいんです！寂しい目をしていて誰にも助けを求めない彼に……！」

愛子はオーディーンの赤い眼を見つめ返す。

『仕方ない……アキレス、エルシオン、ペルセウス、イカロス兄弟。この場はお前達に任せるぞ』

根負けしたオーディーンはアキレス達に要塞の守護を任せ、愛子と共にヴェアベルトの元へ向かうことにした。

『おう。アンタはセンチの護衛すんだろ？』

『うむ。ここまで言われてしまえばな……』

「それでは……」

そのまま要塞を降りて彼の下へ行こうとするとオーディーンは愛子を担ぎ上げる。

『貴女の足では遅い。我に乗ると良い。音速を超えて送り届けよう』

そのまま飛行形態に変形。その背に愛子に乗せ、飛び立った。

あまりの速度に愛子は吹き飛ばされそうだったが、必死にしがみつく。

「くうううう……！」

『あまり喋るなよ……舌を噛む。』

「は、はいいいい……！」

『ムーやはりこちらを狙うか……だが……遅い！』

オーディーンに向かつて使徒や魔人天使兵が集まる。オーディーンは蒼く輝くのオーラを纏い、紫色のエネルギーを放出して突進。使徒達の胴体を容易く貫き、攻撃魔法やブレスを華麗に避け、仕留める。

『畑山愛子！無事か!?』

「な、なんとか……！」

『よし……目的地までまもなくだ！飛行形態解除！人型に移行、これより護衛と殲滅を開始する！』

人型に戻ったオーディーンはヴェアベルトを受け止め、地上に2人を下ろす。

双頭槍とビームシールドを起動。人型のまま飛び立ち、敵兵へと攻撃し始める。

「グアツ！」

「ギャアッ！」

あつという間に胴体を真っ二つにし首を刎ね、心臓を貫く。

「我等がこんなにもアツサリ……ふざけるなあ！」

魔人天使兵の数人がオーディーンに向かつて突撃しながら飛竜に火炎放射を吐かせ

『貴様らの身体、我が神槍で貫いてみせよう!』

オーディーンは全身から橙色のオーラを纏い更に高く飛ぶ。そして双頭槍に赤いエネルギーを集中し、巨大な炎のドリルと化す。そしてそれを魔人天使兵に向け放つ。

「グワアアアアアアアアアア!」

地上では横たわるヴェアベルトに愛子が必死に止血をしている。

「ヴェアベルトさん!……しつかりしてください!」

意識のないヴェアベルトを起こそうと声をかけるが、ピクリとも動かない。

貫かれた腹の傷はそこまで大きくはないが、背中まで貫通しており、夥しいほどの血が地面に広がる。

「神水がありますから!お願いです!目を……いえ……口を開けてください!」

試験管に入った神水を飲ませようとなんとか口を開けようとしますが、固く閉ざされ開けることがかなわない。

「こうなったら……ングツ!」

愛子は試験管の神水を口含み、そのままヴェアベルトの唇に自身の唇を重ね、無理矢理、神水を飲ませた。

「……ぐつ……ハッ!?……生きて……いるのか……傷もない……」

「ヴェアベルトさん……よかった……目を覚まして……」

「愛子殿……何故ここにいる!? 要塞で戦況報告をしていたのではないのか!」

「貴方が落ちていくのを見て……居ても立っても居られずに……ここまで来てしまいました……ですが後悔はしていません。貴方と言う一つの命を助けられたのですから」

「……」

ニコリと微笑む愛子。その笑顔にヴェアベルトは後輩の姿を重ねてしまった。

命を慈しみ、全種族の和平を真つ先に願ったのも彼女だった。

(そうだったな……ラティス……私は……君の墓の前で誓ったことを諦めようとしていた……ダメな上司で師匠だ……)

フラフラと立ち上がる。

「ふう……愛子殿……すまない……私は……諦めようとしていた……だがもう諦めるのを諦めよう……私は私の夢を……望みを叶えるために……」

再び剣を構え、上で飛んでいるメルリアンを見る。満身創痕ながらも果敢にブレスの撃ち合いをしている。

「メル……」

「キュアアアアン!」

ヴェアベルトの呼び声にメルリアンは撃ち合いから急下降し、彼の横に着陸する。

『ダイジヨウブ?』

「ああ。これからだ……！」

再び闘志を瞳に宿し、メルリアンに騎乗、再び空中戦へと向かった。

『もう、傷は平気か？』

「問題ない」

『そうか……では露払いはこの我に任せよ』

「頼む……！」

陰陽の竜と騎士

ハジメ達が使徒と地上が混成部隊と戦いを繰り広げる中、恵里を先頭に神域の奥へと進んでいく。

道中神獣が襲いかかって来たものの全て、恵里と幸利の手によって洗脳されていた。

「まさか戦力アップに使われるとは思わねえだろうな邪神のやつも」

「僕はともかく幸利が洗脳なんて意外だからね。でもよく洗脳魔法使えるよね……なんか別のナニカが作用してる感じあるけど……何したの？」

「感が鋭いなお前……気が向いたら説明する」

そう言いつつ先を進んでいくのだが、歴史的建造物のようなものが並んでいることに、嫌な気分になっている。

「今だに光景が気味悪すぎる……」

「さっきのところにもあつたけど、建物をそのままこの世界に持ってきて保存してるのを見ると……まるで標本だね……」

「言い得て妙ね……コレクションにしてから何度も滅ぼしてるのかしら……どう言ったとしても最低よ……」

「抗わなければわたし達の時代もコレと同じ事になっていたと思うと……怖いですう……」

人が長い刻をかけて建てた建造物も文明の利器も博物館のように保管されているのを見てこの時代も、地球も同じ目に遭ってしまうと想像しただけで、恐怖と怒りが湧き上がる。

「っ！全員その場から離れて!!」

何かに気づいた優花が声を上げる。その声に従い全員一瞬で退避する。

全員が立っていた場所に、極太の極光が降り注いだ。

「この極光プレスは……」

幸利は何度も見たその光に、それを放った敵もわかった。

「ここにいれば貴様達が来ると思っていたぞ……クククツ……」

そう言っただけで現れたフリードの姿は今までと違い、ノイントのような白銀の髪に白い肌、魔族特有の金色の瞳は白く染まり、正気を宿していなかった。

「そこまで堕ちたのか……もう魔族はどうでもいいのか？」

「フン……我が同胞はすでに地上へと進行している。残った脆弱な者共を根絶やしにするためにな」

「ならそれは無理ね。地上はハジメのアーティファクトで強化された戦士がいるもの」

「強がりはやせ。まあよい……その人間族2人と兎人族は見逃してやろう。私の背後には転移の光がある。飛び込めば我が主の元に飛ぶ。我が主はそのまま通せとのことだ。まとめて絶望するのだな。貴様らの最愛の結末を」

背後にある石柱が輝き始める。コレが転移の光のようだ。

どうやらエヒトはこの状況でも勝ちを確信しているようだ。

「ふーん……そんなに余裕なんだ……零、シア行くよ。そのアホは幸利達に任せる」

そう言つて恵里達はフリードの横を通り転移の光へ飛び込んでいき、3人の姿が見えなくなると光は消えてしまった。

「さて……貴様らはこの私が遊んでやる」

「逆だ……」

幸利は腰のロッドを抜き、一瞬で間合いを詰めて振り下ろした。

フリードは腕で受け止め、幸利を睨む。

「俺達がテメエで遊ぶんだよ……!」

くると踵落としを脳天に放つ。しかし手応えが全く感じられず、何か硬い板に阻まれた感触が伝わる。

「私の空間魔法がそのままだと思ふなよ?」

「小手調べ如きで良い気になつてゐるなお前……」

フリードは腰から剣を二刀抜き放ち、振りかぶる。

左の唐竹割を受け止め、右の胴切りをロッドを持たない側で柄を受け止めて防ぐ。

背中の銀翼で突き刺しにかかるが身体を細かく捻り、かすり傷に抑える。

幸利の背後から魔法弾が放たれるものの、銀翼から舞い散る羽根で作られた魔弾に撃ち抜かれ、魔法弾を放った光輝に向かっている。

「やっぱり牽制程度じゃ相殺できないか……！」

魔弾を切り落としながらぼやく。

「とはいえ俺達じゃ足手纏いどころか、利用されかねねえ……！」

「貴様らに当てる時間はないので……使徒の方に遊んでもらうといい」

背後の転移の光が再び放たれ、使徒が2人現れる。

「チツ……！」

「強化された使徒の力にあの人間族はどこまで耐えられるのかな？」

ニヤニヤと不敵に笑うフリードに軽くイライラが走る。この程度ではペースを乱すことはない。

「出し惜しみしてたらダメだな……速攻でケリつけてやる」

ロッドを回し魔法陣を作り、竜人族の里で呼び出した竜を4体呼び出す。

「ヨルムンガンド！カンナカムイ！リヴァイアサン！アジ・ダハーカ！」

黒の毒龍、白の雷龍、蒼の海龍、赤黒い呪龍が幸利の背後に現れる。

『キシヤアアアアアアアアアアア!!』

現れた龍

「灰竜よ！消し飛ばせ！」

「ヨルムンガンド！犯し尽くせ！」

無数の極光ブレスと毒のブレスがぶつかり合う。

「カンナカムイ！焼き尽くせ！」

毒のブレスを後押しするように雷を纏う小金色のブレスを吐く。

「リヴァイアサン！灰竜を粉碎しろ！」

更にブレスを吐きっぱなしで隙だらけの灰竜へ高圧の水流レーザーや水弾を放ち首を刎ねたり、胴体を撃ち抜く。

灰竜の数が減り、拮抗していたブレスを撃ち合いはヨルムンガンドとカンナカムイの有利へと傾いた。

「アジ・ダハーカ！呪え！」

穢れた呪いのブレスがフリードへと向かう。更に灰竜のブレスを超えた毒と雷ブレスが襲いかかる。

「フッ……」

それに対してフリードは、

パチン！

指を鳴らしたただけでかき消してしまった。

「この程度、我が愛龍の人間をかけさせる必要もない」

「言つてやがれ……ティオ！」

「承知なのじゃー！」

幸利の声にティオは竜化し、彼をその背に乗せて飛翔する。彼等を守るように幸利の呼び出した4龍が集まる。

「フフフツ……貴様はこの手で潰してやりたかつたのだ……ヴェアベルトの奴なぞどうでもよい……貴様を殺すことで我が胸の苛立ちも消えるというものよ」

「俺に拘るとか小せえ奴だな……ティオ、行くぞツ！獄炎プレスだー！」

『応ー！』

幸利の命令にティオは黒い焰を放とうと口に熱エネルギーを込める。

「ならばウラノス！お前のプレスを見せよ！」

「アジ・ダハーカ！」

再び撃ち合いになると思いきや、アジ・ダハーカがいきなり呪いのプレスを吐き出した。

「逃げたか……やれ！」

極光ブレスは圧倒的な威力で呪いのブレスをかき消して、アジ・ダハーカをも消し去った。

「チツ……『テイオいいか……俺からいいと言うまでブレスを溜め続けろ……お前の呼吸は俺がカバーする』」

『うむ……』

幸利は空間魔法を併用し、ブレスを溜め続ける彼女の呼吸を自身にまとめて行っている。

その分、吸い込む空気も多くなり、彼の肺活量が試されている。

(思った以上に辛いな……ッ！竜化したからか……?)

いくらこの世界に召喚されて強くなったとはいえ、2人分、ましてや片側は竜化の影響での呼吸はインドア派の彼にはキツかった。

呼吸の隙を突かれ、腹を殴られる。

「グハッ！」

「どうした？急に隙だらけになったぞ？」

呼吸が止まり、テイオから少し苦しそうな雰囲気を感じ取る。

『ご主人様！』

「『お前は気にせず焔を溜めろ！』ヨルムンガンドオ！リヴァイアサンツ！その牙で喰らい尽くせエー！」

「無駄だツ！」

2体の噛みつきはウラノスの爪に阻まれ、その顎門を強引に開き裂かれる。

「俺の魔力が尽きない限りコイツらも不滅なんだよ！」

再びこの世界に龍が呼び出される。

(悪い……だが頼む……お前達の力が必要なんだ……！)

やられても再び呼び出す龍に申し訳なきを感じつつもフリードを倒す為策を練る。

「なら幾たびでも殺すまで」

龍同士の睨み合いが続くことになる。

どちらが動くかタイミングと間合いを測っている。この間も幸利は大きく呼吸をしている。

「せああああつ！」

幸利が先に仕掛ける。

杖を交差するように振り下ろし、肩甲骨を砕きにかかる。

「型も何もないか……」

「あつたり前だ……！《重弾》」

幸利の背後から重力球が無数に放たれ、フリードの鎧へと直撃する。

「《重積》！」

振るうロッドの先端付近に重力魔法を付与し、一撃の威力を重くしていく。何回か鎧には当たるものの、傷一つつかない。

重力球を自身の杖に当て、重積の重さを更に上げる。

重くなりすぎて振れなくなりそうなので、身体強化を発動させ、攻撃速度を上げる。

黒い重力の圧力がフリードを襲い、召喚された龍の攻撃もあり、周囲の灰竜達を蹴散らし着々と追い詰めていく。

「フフフツ……我が竜はまだまだいるぞる」

後ろの石柱から更に増援が現れる。

『ご主人様！溜まったのじゃ！いつでも良いぞ！』

『なら今だ！今の奴は得意気になってる！少しは顔色変える筈だ！』

テイオブレスだけでは無理だが、僅かでもダメージが入れば良いと思つた判断だ。

極限まで濃縮された黒い焰はフリードへと向かい、周囲の灰竜を巻き込み、彼の乗るウラノス諸共焼き尽くす。

「『黒炎呪縛』！」

更に幸利は黒炎に闇魔法を付与する。

火力は変わらないがフリードを呑み込み、焼き続けている。

「逃さねえぞ？ 『重牢縛鎖』！」

焰の中に重力球を束ねた鎖が放たれる。

しばらくすると、流石に限界が来たのか、ティオのブレスが止まり、その跡から煙に包まれ、所々、燃えているフリードが現れる。

「ぐっ……」

「流石に効いたか……」

『ふふん妾の焰とご主人様の闇魔法ならば行けるようじゃのう……じゃが奥の手は隠しておるようじゃの……』

「ああ……こっから一気に畳み掛けるぞ！ 手札を一つ切るぞ！」

幸利は右手を構える。その手の甲には赤い紋様が三画描かれていた。その紋様は翼のような形の間に槍のような形をしている。

『黒竜令呪』シユバルツドラッヘを持って、我が伴侶たる竜女に命ずる！ 我がカンナカムイとリヴァイアサンの力を取り込め！」

そう命ずると、白と蒼の龍が渦巻きティオへとまとわりつく。

彼女の黒い竜翼は白くなり、尾は蒼く変色している。

『ご主人様の魔力が妾の身体に満ちていくのじゃ……』

『それプラス俺と龍が受けたダメージがフィードバックする』

『ご主人様から受けた痛みじゃないから気持ち悪いだけなのじゃ……』

『……………』

フラグになりそうな発言が出そうになったので幸利は黙り込んでしまった。

使徒の相手を優花達がしていた。

「アタシがメイン火力でトドメの一撃を叩き込むわ……残りのみんなはサポートお願い」

この中で最も火力の高い優花を主軸にして立ち回ることになる。それは勿論、相手も承知だろう。

「任せて。鈴達がゆうかりんのこと守るから」

「肉壁は2人いるから安心してくれ」

「邪魔はさせねえさ」

鈴達は自身の持てる力をかけて守り隙を作ると気合を入れる。全身に魔力を回し、ステータスを上昇させ、突撃する。

「『竜鱗化』！」

更にオルクスで使った強化で使徒とのスペック差を埋めにかかる。

「獄炎拳！」

黒い焰で両手を包み、使徒に殴りかかるのだが、マトモに拳が入らず、受け流され、耐久の高さ故にまぐれ当たりだとしても大して効いていないようだった。

「まだまだア！『極竜爪』！」

人より少し伸びた爪が更に長く鋭く固く変化し、獄炎拳の焰を纏う。今度は拳での打撃ではなく、手刀による斬撃へと変更する。

「『神刀裂破』！」

黒い焰の内側から黄色く魔力が輝く。

「ぜえあつ！」

手刀を振ると斬撃破が使徒の後ろにある高い建物を切り裂く。続けて腕を振るものの、大剣に全て捌かれてしまう。

「チツ……光輝！」

「ああ！」

入れ替わるように、光輝が白い光を纏った聖剣で斬りかかる。

不意打ち気味に決まったものの、使徒の服に薄い切り傷が付くだけで、攻撃が通じていない。

そのことに焦りが出るものの、自身の役目を熟すために、意識を戻す。

使徒を呑み込んだ龍が建物の壁にぶつかり爆散する。

煙が晴れ、現れた使徒の口には一筋の血の痕があった。

「はあ……はあ……邪神の作り物でも流れる血もあるし、色も朱いんだな……」

「少し効きました……流石は勇者の資格を認められただけはありますね」

「それはどうも……そろそろ終わりだろ？」

そう言う光輝は首を傾ける。その後ろから紅く輝く閃光が飛んでくるのが、使徒の視界に入る。

「『聖絶・重縛』！」

魔力を高め、気配を完全にシャットアウトしていた鈴が使徒の動きを封じる。

「あっさりやられてよねー！」

軍配を構える彼女はすぐにも親友の応援へ向かいたいようだ。

回避を封じられた使徒の胸を貫いた。

「貫いたけどどう……」

胸に大きく穴の開いた使徒を見て優花は警戒を続ける。

「……………」

じつと見つめる。すると使徒の身体がピクリと動き出す。

「っ！まだ生きてるわー！」

全員が距離を一瞬で取る。

鈴は結界による拘束を弱めずにいる。

「そろそろ終わりにするとしましょう」

バチバチと白銀の稲光が発生し、それを放出すると、拘束している結界を破壊し、凄まじい威圧感が放たれる。

「……本気で潰しに行きます」

限界突破のような圧が光輝達に向けられる。

「……前回のようにには行かないのね」

完全に消し炭にしないと殺せないと判断し、その方法を模索することになったのだ。た。

不死鳥は2度舞う

ヴェアベルトが再びカイラナとの戦いに戻った頃、王国では機械の戦士達が動き始めていた。

使徒の群れが王国へと向かってくる。

『さてと、そろそろオレ達の出番か……』

アキレスは大きめの穂先が特徴的なアキレスランスを使徒に向ける。

『1番槍はいただくぜ!』

赤いマントをはためかせながら、使徒に槍を突き刺し、地へと墮とす。

『さーて……とつととかかかってこい!』

黄色のカメラアイが発光する。

「人間如きが作った人形に我々が負けるか!」

その挑発に、魔人天使兵は乗ってしまい、アキレスへと魔法を放つ。

大きな爆発音が戦場に響く。

『この程度か……』

アキレスシールドを振るい、煙を吹き飛ばして現れたのは無傷のアキレスの姿だった。

『コイツを喰らいな!』

アキレスは槍を回しながら、青いエネルギーを溜める。

『ライトニングランスッ!』

槍を魔人天使兵に向けて突き出すと、エネルギー波を放つ。

そのエネルギー波は魔人天使兵の身体を貫く。

魔人天使兵はそれでもアキレスに攻撃を仕掛けるも、盾に防がれ槍に貫かれ、真つ二つを切られる。

『オレの前では貴様らは雑魚同然と知れ』

脚部に生成魔法で付与された、空力で魔人天使兵や使徒を見下しながら、そう宣言した。

『流石、アキレス……見事な暴れっぷりだな』

『そろそろ僕達も行きますよッ!』

感心するエルシオンの隣に立っているペルセウスが鎌状の剣、ペルセウスソードを持って地上を駆け抜ける。

残像が見える程の速度で走る。

地上で抗戦している魔人天使兵の首を正面、背後からすれ違い様に刈り取る。

「な、なんて速さだ……」

あまりの速度に冒険者は呆然としていた。

その油断を狙った使徒が大剣を振り下ろす。

「し、しまっ！」

咄嗟に右手の剣で防ごうと構える。『ガキンツ』と音が鳴ったものの、衝撃が来ないことに疑問を抱き、視線を上げる。

『ここは戦場ですよ？しっかり闘争心を燃やしてて下さい！』

「すまない、助かった」

冒険者は別の敵へと走っていった。

『さて、アキレスさんも撃ちましたし、僕も撃ちますよお！』

ペルセウスソードに青く光るエネルギーが溢れる。

『みなさん！僕の前から離れて下さい！コスモスラーツシュ！』

両手の剣を掲げて、一度飛び上がり、そのまま振り下ろすと、エネルギーの斬撃が地を走り、天使兵と使徒を飲み込んでいく。

斬撃の跡には何も残っていなかった。

『まだまだ行けますよ!』

再びペルセウスは戦場を駆け抜けた。

一方、要塞では使徒による魔法攻撃を受けていた。

ハジメによつて強化された大結界と覇墮の聖歌でそう簡単に割れることはないが、それもいつまで保つかかわからない。

「反撃の砲撃! 放てーっ!」

リリアーナの号令により、ハジメお手製のグレネードランチャーから大量の弾が放たれる。

1発では使徒にダメージを与えられないが、何十発も当てさえすればかなりのダメージになる。

すると煙の中から3体の使徒が飛び出してくる。

「小賢しい結界ですが、流石に我々には無意味です」

大剣により遂に結界を破壊されてしまった。

「近接攻撃はダメでしたか……総員侵入した使徒を優先的に落として下さい!」

侵入した使徒へ集中砲火するものの、大剣に防がれ、遂に接近を許してしまう。

「まずは貴女からです」

「っ……」

リリアーナへ凶刃が振り下ろされようとした、後ろにいたエルシオンが、大剣をエルシオンハルバードで受け止める。

『それをさせない為に私がここにいる』

「ならば、貴方から破壊します」

「そうか。ではイカロス。あの飛んでる連中を頼むぞ。私はコイツらを始末する」

「了解しました」

イカロスは目にも止まらない速度で割れた結界の穴を飛び出していった。

「たかが2機で我等を倒せると思いですか？」

『むしろその程度の性能で私達が倒せると考えている貴様の脳が楽園だと思っている』

「まず、貴方をスクラップにして、あの2機も同じようにしてあげましょう」

『すまないが、今は護ることを前提にしている。数分もすれば今いる貴様の仲間は死ぬぞっっ。』

するとエルシオンの身体が黄色く発光し、球状にバリアのオーラが現れる。

『奥の手は取って置くものだが、私のは切っても問題はない。貴様の攻撃は無力化するのだからな』

「何をしたかは知りませんが、光ったところで押し返す力が変わっていないのは明白。

このまま破壊します」

背後から別の使徒が切りかかる。それを反対の手に持つエルシオンシールドで受け止める。ガラ空きになった身体に3体目の使徒の大剣が突き刺さろうとした。

「?」

しかしそれは、エルシオンのボディを貫くどころか、傷すらつかなかった。

近距離ではなく、遠距離攻撃に切り替えて、多種多様な魔法攻撃を放つ。

が、球状のバリアに弾き返される。

『Kモード。近距離攻撃を無効にし、遠距離攻撃を弾く。しばらくは私に付き合ってもらうぞ?』

そう言つてハルバードを突きつける。

ちなみに気配を極限まで消した使徒に気づいた1人の人間族と兎人族がそれよりも気配を消して首を刎ねていた。

結界を飛び出したイカロス兄弟はオーティーン同様、空を飛び回り、使徒や魔人天使兵を蹴散らしている。

『そろそろアレをする頃合いだなフォース』

『そうですね……いつでも準備はできています』

『では……行くぞ！ウエポンフォーム！』

イカロス・ゼロは自身に掛けられている制限を一時的に解除し、背中の羽と尾を刃とする形に上半身と下半身を分離、イカロス・フォースの両手に収まる。

『まとめて切り裂くツ！00ソードダブルゼロ』

イカロス・フォースはグルグルと高速回転した後、何度もそれを振り回す。すると斬撃が飛び回り、使徒や天使兵の首を刎ね、胴体を亡き別れにする。

『これで終わりだと良いんですが……』

地上には無惨に堕ちた敵の死骸が彼方此方にある。

要塞の方から、光の槍が空に向かって放たれたのを確認し今、ここで殆どの敵兵が沈黙したことになる。

『あとはヴェアベルトが決着をつけるだけだ』

「これで止めだッ！」

ヴェアベルトの剣が11人目のカイラナを殺した。

「ここまでやつても倒れないとは……貴方、本当に化け物になりましたね……」

「世界を変えるのなら化け物になるのも致し方ないだろう」

「ならば私も常識を超えよう……集え！我が同胞よ！汝らの無念……私がここで今晴ら

し、世界に変革を確約しよう！私と共に神に勝利を！」

12人目のカイラナの元に地上に堕ちた自身の死体、魔人天使兵、神の使徒の死骸が集まる。

そして光輝き始め、数秒の間、視界が眩む。

「何が……!?!」

ヴェアベルト達の目とカメラに写ったのは山のように大きくなったカイラナ・シユバリオの姿だった。

「ふふふ……的がデカくなってしまいましたでしたがその程度、些細なことです。地上を叩き潰し、エヒト神への手向としましょう」

地上から、魔法攻撃が大量に飛来するが、全く効いている様子はない。

「無駄です。私にはもういかなる攻撃もダメージにはなり得ません……諦めて死んで下さい」

カイラナは掌に魔力の塊を生成、彼女にとってバスケットボール程の大きさになった途端、それを地上に叩きつける。

「ぐわアアアアアアアアアア！」

「ギアアアアアアアアアアアアアアアア！」

地上の戦士達の悲鳴が響く。

「ぐっ……地上の戦士に告ぐ！今すぐ退避しろオ！魔人竜騎士部隊！攻撃に当たるな！」

ヴェアベルトが叫びながら冒険者、兵士達に撤退命令を魔人竜騎士には回避命令を出す。

『畑山愛子！急いで要塞へ戻るぞッ！』

「は、はい！」

オーディーンに愛子は乗り込み、要塞へと戻る。

『おお、オーディーン……愛子……』

「エルシオンさん……一体アレは……」

『創り手の知識から察するに超魔合成とでも言うべき姿だろう。【超魔天使】とでも仮称しておこう』

超魔天使と化したカイラナはこちらへと歩いていく。

「まだあの姿に慣れていない所を突くしかあるまい……」

『ふむ……イカロス兄弟よ。もう一方のファンクションで攻撃してみてくださいんか……』

『承った。フォース行くぞ』

『はい……！』

イカロス兄弟が再び空へ飛ぶ。

先程とは逆で、フォースの方が制限を解除し、一振りの大剣へと変形し、羽の外側が緑色に輝く。

『これでどの程度効くのかはわからん……だがやってみないとわからないというのもまた事実！喰らえッ！メテオブレイカーッ！』

フォースのブースター部分の推進力とゼロ自身のブースターで加速して、カイラナの身体を右肩から脇腹にかけて切り裂く。

『どうだ……なっ……!?』

確かに切り裂いた手答えはゼロに伝わっていた上に傷もできていた。しかし、カイラナへ与えたダメージは確かにあった。

「今、何かしましたか？」

それを気にも止めずに背中の中翼から羽の魔弾を放つ。

『オーデイン！ペルセウス！出し惜しみはもう無しだ！エネルギーが切れるまで攻撃するぞっ！』

そう言ったアキレス身体が金色に輝く。

『アドバンスドVモード!!』

『そうだな……これが最終バトルになるか……』

オーデインの身体も金色に輝く。

『エクストリーム
X モード!』

『僕も行きます!』

ペルセウスは青白く輝き、背中に光の翼が現れる。

『ストライク
STモード!』

3機はカイラナに向かって飛ぶ。

ペルセウスがSTモードを発動し圧倒的な速度で切り掛かる。彼が駆けた跡には火花が飛び散る。

『どこが弱点だ……!』

ペルセウスは闇雲に切り掛かりながらも弱点を探る。

『鬱陶しい小蠅ですね……』

『しまった!』

ペルセウスはカイラナの掌にはたき落とされる。

『ペルセウス!野郎!』

アキレスはカイラナの周囲を残像を残しながら跳ね回り、槍を突き続ける。

『喰らえ!ライトスピア!』

ライトニングランスとは違うエネルギー衝撃波を放つ。

命中した部分から煙が出ているものの全く効いていない。

別の方向からは、オーディーンがリタイエイターに紫色のエネルギーが集まり、光の長い槍へと変化し、それを横一文字に振るう。そこから無数の光弾が放たれる。

『グロリアスレイ！』

全弾命中したがこちらも軽く服を焼くだけだった。

カイラナの周囲に大量の魔法陣が展開され、そこから火炎弾が放たれる。

それに向かってオーディーンはリタイエイターを持つ手ごと高速回転させて雷のエネルギーを発生させ、螺旋状に空中で収束し雷球が生まれる。

飛び上がり、雷球に向かって突撃し、雷エネルギーを纏い強烈な突きを繰り出す。

『超プラズマバースト！』

火炎弾を蹴散らしてカイラナの心臓目掛けて突き進む。

『オオオオオオオッ！』

大きな爆発が巻き起こる。

かつて怒り、哀しみ、憎しみに吞まれた炎の悪魔モンスターを貫いた一撃は誰もが、此度も貫いたと確信した。

煙が晴れて見えたのは片手で受け止められるオーディーンの姿だった。

『なっ……ぐっ……』

バキィッ！

巨大な拳に殴り飛ばされ、要塞を越えその後ろのハイリヒ城の城壁に激突する。

『オーデイン！』

「アキレス殿！前を！」

『チツ！』

鋭い蹴りがアキレスを襲う。

咄嗟にアキレスシールドを前に出して防御し、アキレスランスを地面に突き立て、後退しないようにするが、強烈な一撃に盾はガラスのように砕け散り、槍も先端部分からひしゃげてしまった。

その間に火炎弾だけでなく氷結弾などの多数の属性弾が降り注ぐ。

要塞に降り注いだ物はエルシオンのKモードで弾き返される。

『どうしたものか……』

攻撃が悉く無効化されているのをみて、他の手を考えていると、突如カイラナが大きく息を吸い込む。

『マズイ！耳を塞げ！』

A h h

大響音が地上に響く。

「ううううッ……！」

「耳が……!!」

「鼓膜どころか三半規管すらイカれそうです……!!」

山のような巨体の口から放たれる音爆弾は小さい地上の人間の耳を破壊して脳すらイカれさせる威力を持っていた。

ハジメの再生アーティファクトで壊れた鼓膜はすぐに再生されている。ので死人は出していない。

『やってくれる……!』

城壁の瓦礫の中から、オーディーンが飛び出す。

『やはり最終ファンクションを放つしかねえか……!』

アキレスはオーディーンと共に一度要塞に戻る。

武器を失ったアキレス。このままステゴロで殴りかかりに行きそうな気合いだ。一方、全身がボロボロになって、所々スパークしているオーディーン。

それと入れ替わるように竜化した竜人族と魔人竜騎士がブレス攻撃を始める。

「メル!熱光線だ!」

メルリアンの口から何度目かわからない熱光線が放たれる。

「鬱陶しい……!」

両腕と翼で空を飛ぶ竜人族と魔人竜騎士が次々と落とされていき、地面のシミにされ

る。

「蟻が喧しい……！」

足踏みをすれば地が割れ隆起した大地が地上を走る戦士達の体制を崩し、割れた隙間に落ちていく。

そんな中、1人の人間族が1人の兎人族を助けていた。それを見ていた一部の冒険者も助け始める。

『ペルセウス準備はいいか？』

『すみません……剣がもう……』

とっておきのファンクションを放つ為にペルセウスに聞いたが、彼の持つペルセウスソードにヒビが入り、刃こぼれを起こしており、ファンクションに耐えることができなくなってしまう。

『くっ……』

『さっきの攻撃を防いだ時に……それよりも、オーディーンさん……身体が……』

『問題無い。自己修復で治す』

オーディーンオートリペアの身体が緑色に淡く発光し、ヒビが徐々に埋まっていく。

『オーディーン……どうすんだ……流石に槍じゃ長すぎるぜ……』

ゼロランスとエルシオンハルバードで代用は不可能だった。長過ぎる上に刃の部分

が足りない。

『もう一度だフォース！ウエポンフォーム！』

そう言つてイカロス・ゼロが飛翔し、上半身と下半身を分離し再び双剣へと変形する。それを見たカイラナは00ソードを撃たせぬ為にイカロス・フォースを魔法で狙い撃ちにする。

『引つかりましたね！』

イカロス・フォースは更に陽動としてコスモスラッシュを上回るエネルギーをフォースセイバーに集める。あまりのエネルギー量に持ち上げる力をより一層込める。持ち上げたそれはイカロス・フォースを柄とする大剣のようだ。

『ビッグバンスラッシュ!!』

「くっ…小癩な真似を！」

腕を振り、ビッグバンスラッシュを受け止める。

更に追い討ちを放つべくエルシオンが背中純白の翼を広げる。エルシオンハルバードを横に持ち、手の部分から青白いエネルギーを発生させ十字架を作り出す。交差点にエルシオンハルバードを投げつける。

ビッグバンスラッシュを受け止めている腕を両断し、胸に突き刺さる。

双剣はイカロス・フォースの手ではなくアキレスの手に渡る。

『オーディーン……行けるか?』

『無論だ……お前こそ大丈夫か?』

『あつたりまえだ……』

オーディーンが飛び上がり、飛行形態に変形。その上にアキレスが乗る。

乗ったのを確認すると

ブースターから一気にエネルギーを放出する。

2機の周囲がイカロス・ゼロが変形した双剣から放たれるエネルギーに覆われていく。そしてそれは不死鳥のような形へと変わり突撃する。

『ダブルレイウイング!!』

2機の突撃を片手で受け止める。

『オオオオオオオツ!!』

片手では受け止めきれず、徐々に押され始める。

「おのれ……!」

遂には腕を貫き、ドテツ腹に風穴を開ける。おまけの一撃で翼を切り落とす。

「この程度……再生で問題なく活動できる……!」

『不死鳥は1羽じゃねえ』

『貴様に引導を渡すのは我等ではないから……』

ダブルレイウイングよりも紅く輝く光を不死鳥がカイラナの胸部めがけて突撃する。両腕の再生はされておらず、翼は刈り取られ唯一残った防御手段は結界のみとなった彼女の守りを容易く破壊、胸に突き刺さったままのエルシオンハルバードを掴む。魔力を込めて放出する。

「今度こそ……眠れ、2番目の我が弟子、カイラナ・シュバリオ……」

心臓を貫き、2つの風穴が開けられる。そしてそのまま地上目掛けて降下する。身体を左右に分けられ、上位存在ほどの再生力を持たないカイラナは縮み、元の大きさに戻る。

吸収した他の死骸は現れなかった。

「私は負けたのか……」

「ああ、お前は我々多種族連合に負けたのだよ……」

「そうか……今になって間違っていることを思い知らされた……いや、思い出した……と
いう方が……正しいな……」

「やはり洗脳されていたか……」

「フリード將軍は……深く洗脳されて……いる。私のように……目を……覚ますことは
……ないでしょうね……」

「そうか……」

「師匠……魔人族の……トータスの……未来を……お願いします……」

「勿論だ……お前にも一番弟子のラティス・アトマールにも誓うさ」

「そうですね……あの世で彼女に伝えますよ……」

そう言つてカイラナは瞳を閉じて息絶えた。

ヴェアベルトは強い疲労感に襲われ、座り込む。

「ヴェアベルトさーん！」

愛子が彼の元に走る。

「愛子。無事だったか」

「はい。エルシオンさんのKモードで」

「そうか。流石エルシオン殿だな」

「後は……神域に行った彼らを待つだけですわ……」

「うむ……必ず、戻ってくるだろう……」

そんな2人をメルリアンが護るように座り込んでいた。

要塞の隅っここでは背中合わせに座る者もいた。

創り癒し破壊する

地上で激戦が起きている頃、神域でも激しく争いが行われていた。

「そろそろ、死ねよッ！」

ハジメはツエアシユテールングとマサーカーから変成魔法を付与したりピングバレットを放ち使徒の心臓を目掛けて襲いかかる。

「狙いがわかりやすすぎます」

「そりゃ狙ってるからねッ！」

ハジメは宝物庫から大量の砲門を展開する。

「派手に吹き飛べエッ！」

色鮮やかな弾幕が使徒の周囲に着弾する。

爆炎の中から、使徒が高速で飛び出し、ハジメに向けて大剣を振り下ろす。

それをツエアシユテールングで防ごうと大剣に銃身を向ける。

「ガハッ…!？」

腹部と背中に激痛が走る。

意識を痛みに移すと腹部には何も刺さっておらず、背中にも何も刺さっていない。

「何が……」

ハジメはその場を空力と縮地で飛び退こうとするのだが、背中の痛んだ所から何か貫通したのか、身体に穴が空く。さらに傷は分解されている。

「グフツ……何……が……」

魔眼鏡で辺りを見渡すものの、何も写らない。

自身の周りに銃弾を放つと、見えない何かに弾かれる。

（何かが浮いている？なんか見たことあるぞこれ……）

「理解する間もなく殺して差し上げます」

ハジメは全身に金剛で防御しながら、強引に何かの包囲を突破するが身体の至る所が切り裂かれ、更に一箇所貫かれる。

「ぐうっ……ゲホッ……」（包囲を抜けたはいいけど目が……）

貫いていた何かは抜けたが、右の魔眼鏡を貫き眼球に細い何か突き刺さる。

それを掴み、抜いて投げ捨てる。しかし、傷の表面からじわじわと分解されて行く。

「クソツ……！ガアツ！」

ハジメは目に指を突き刺し、眼球を取り出す。ブチブチと音を立てて視神経を引き千切り、眼球を投げ捨てる。

目の孔からボタボタで多量の血液が溢れ落ちる。

「ハアっ……ハアっ……!」

「……簡単に眼球を捨てるとは。合理的とは言え、異常ですよ」

「はっ! ジワジワ分解されるのに対応するくらいなら原因を取り除く方が良いよ」

ハジメは片目のまま、銃を乱射する。

宝物庫からも砲身だけを出しながら、使徒の周囲を砲撃する。

直接攻撃するのではなく、逃げ道を制限し、更に宝物庫から追加の兵器を取り出してばら撒く。

「弾けろ!!」

ズガガガガアン!!と大爆発の連鎖が使徒を襲い、火傷や切り傷などを付ける。

だが、煙幕の中から傷を回復しながら、拳を振りかぶる使徒が現れる。

ハジメは銃撃しながら、拳をいなし、躲し、蹴りを蹴りで受け止め、頭突きで反撃する。

「片目になりながらもよく私と戦いますね」

「大変だと思ふのならとつとと死んでくれない?」

「お断りします」

右目だけになった彼の視界は、遠近感を掴むことに苦労している。

基本的に中々遠距離の戦闘を得意とするハジメにとって、この視界はかなり辛いもの

となっていた。

「チツ……『限界突破』！」

灰色のオーラを纏い、瞬光で攻撃をいなしつつ、反撃の銃撃を浴びせる。

『炎害豪雨』

天から黒い焰が降り注ぐ。その火の粉一つ一つが着弾すると火柱を上げる。

「クロス・ヴェルト！」

クロス・ヴェルトの結界で防ぐ。

何度も火柱を受け止め、ヒビが入っていく。

流石に防ぎきれないと判断し、火柱の無いところを結界から飛び出して突き抜ける。

僅かに火が燃え移るものの、すぐに消火して射程外に逃れる。

「オラオラオラオラオラオラア！」

メツエライ・デザストルを撃ち放ち、火の粉を相殺する。

使徒の魔法の発動が終わると、それと同時に再び接近戦遠仕掛けに来る。

使徒から振るわれる拳と蹴りの乱舞には当然、分解が発生しており、受け止めるだけでも着実に削られる。

ハジメも馬鹿正直に真正面から戦う気は更々ない。宝物庫を経由して至る所から砲撃をし、使い捨ての刀剣ゴキを射出して、自身にとって優位な距離を取り続ける。

刀剣は彼方此方に弾かれ、自身からもかなり遠くまで飛んでいく。

ふとハジメは自身の弾かれた武器や血液を見て思いついた。

「試す価値はある……か」

ハジメは血液で溢れる右目の孔を塞いでいる瞼を開き、血液を手に溜めてそれを空間魔法を付与した銃弾で穴を開けそこに溢し、孔にも同じように溢す。

その後、刀剣を放ち、使徒を狙い、ものすごい勢いで飛んでいくが、躲される。

最後に仕込みを進めて行く為に、一度地上へ降りて駆け抜ける。

「何をしているのです?」

「ないしょ」

地点地点に宝石を捨てて行く。

大量の宝石を捨て終え、再び空中に跳ぶ。銃撃を再開し、使徒の動きを止める。

ゴブゴブと止めどなく溢れる血を左手に溜め、その血を錬成し、使徒に向けて投げつける。

「むっ……」

使徒は鬱陶しそうに振り払う。

振り払うついでに建物を倒壊させる。

「チッ……」

ハジメはフェアニツヒトウングで落ちてくる建物を破壊し、破片をメツエライ・デザストルで消し飛ばす。

それでも破壊対応の出来なかった建物は避ける。

ハジメの走った後に点々と落ちている血から高密度の魔力が溢れ、突然鋭い棘が使徒に向けて一斉に伸び始める。

「邪魔です」

淡々と血の棘を破壊しながらハジメへと距離を縮めて行く。

『破壊拳』

使徒の黒い拳撃がハジメの義手を粉々に破壊する。

無いはずの左腕の骨が粉々に砕け散る痛みが走る。

「……………かかったなあ阿呆が！」

激痛を堪えたハジメの方から距離を縮め、砕け散った義手を錬成で魔力で繋ぎ合わせた左腕で頭を掴み、アイアंकローでミシミシと握り、右手で付着した血液を錬成する。

『血液錬成！技名を付けるなら吸血鬼王ヴラド・ヘルランズの地獄槍！』

血を錬成し、鋭く凶悪な棘へと作り変え使徒の身体を串刺しにする。

「錬成！」

義手の破片が使徒の身体に纏わりつく。ギチギチと使徒の身体を締め上げる。骨を

軋ませ、血肉が潰れ、破片の端が食い込み、出血する。

「何のつもりですか」

「わからない？ 攻撃を当てたためだ！」

「無駄なことを……私に致命傷は致命傷にならないことを理解できていないのですか？」

「理解しているさ。身内にもいるからね……だから勝ち誇ったまま消失しちゃいな……」

音も無く使徒の脳天を光が貫く。

「……バルス・ヒュベリオン。ヘリオス・イレイザー！」

荒廃した世界の至る所から純白の光線が使徒に向けて襲いかかる。

「破片一欠片からでも再生するなら消し去ってしまえば良いだけの話……」

ハジメは宝物庫から最後の兵器を取り出す。全身が真っ黒にコーティングされた巨大な砲身が使徒に向けられている。

『フォーリン・エンゲル』天使の見た目したお前にはピツタリだね」

黒いエネルギーがすでに溜まっており、紫電が迸っている。

「これで消え去れええええええええ!!」

叫び声と共に放たれたエネルギー光線は使徒を呑み込み焼き尽くす。

(これ……は……我々の……分解……?)

ハジメは分解を解析済みだったが故にエネルギー光線に分解を組み合わせて放っていた。

再生する身体は、分解によりドンドン消えていき、絶命の叫び声を上げることができずに、エネルギー光線が消えた後には何も残っていないかった。

「……生体反応は気配感知にない……終わった……」

ハジメはドサリと前のめりに倒れる。

「なーんか厨二病みたいな名前の発言出ちゃった……まあいつか……あれ?……身体が重……それに……なんだか少し眠い……」

使徒を倒し、気が抜けたのか、全身から力も抜けていきその場にうつ伏せで倒れてしまふ。

「力が……香織……ユエ……ごめん……手伝えないや……」

ハジメの意識は暗く沈んでいった。

香織は銃撃と光魔法のレーザーを使い分け、至近距離でぶっ放し、格闘戦を仕掛けていた。

(決定打がかけてて倒しきれない……倒す方法ならある、接近してる今なら……)

香織はニコンフェ・スヴェートの銃口を密着させ弾丸打ち込む。

スヴェートは既に破壊されていたが、旧式の予備分だった為そこまで慌てることはなかったが破壊された隙を突かれ、頸動脈を切られた。

打ち込んだ弾丸は使徒の身体の中に留まり、魔力を吸収し始める。

「……猪口才な……」

埋まった弾丸を取り出し、投げ捨てる。

「せえいー」

香織は回し蹴りで使徒の顛顛を狙うが、受け止められ、ぶった斬られる。

傷は使徒同様、彼女も即時回復し、戦闘を続ける。

「……『聖光剣・多連蒼』！」

蒼く光る光の剣が香織の周囲に現れると。

「『護封剣』！」

使徒の周囲に8つの聖光剣を放ち、結界を張り、一時的に封印する。

表情がここまで全く変わらないことに不気味さを感じる。

「ふう……ふう……ふう……」

魔力を空気中から吸収し始める。

「ガフツ……!」

グリグリと大剣を動かして、傷を弄ぶ。

すると、彼方から無数の刀剣が飛来する。香織の近くに何本か突き刺さり、使徒に向けられて来たものは、翼によって破壊される。

「これって……」

突き刺さっている武器を見て誰の物かすぐにわかった。そして何故それがここにあるのか。

杖をぶん投げて大剣を破壊、銃をしまい、近くの刀剣を握る。

「八重樫流抜刀術……『登龍』!」

突き刺さっている刀を抜きながら切り上げる。そして飛び上がった状態で 回し蹴りから、もう一本の刀による横薙ぎを繰り出す。

「何ツ!?!」

「雫ちゃん……貴女の剣……借りるよ!八重樫流……『霞穿』!」

神速の突きを三連続それを右手と左手の刀で何度も繰り出す。

「八重樫流……『叢雲』!」

右薙、袈裟斬り、唐竹割り、逆袈裟斬り、左薙と刀を振る。

親友の剣術をずっと見て来た香織は見様見真似で振ることができた。

「これでお終い！」

過剰聖典を昇華魔法を更に上乗せの上乗せで崩れるスピードを早める。

「あ……あ……」

使徒はボロボロになって死んだ。

「いくら再生できても、細胞組織が死ねば再生しなくなるもんね。草木に水をあげ過ぎると根腐れする。読んだ本に載ってたし」

刀を宝物庫にしまい、ユエとハジメの元へと走っていった。

ユエは追い詰められていた。

他の2人と違い、彼女が相手にしている使徒がユエを殺すために作り出されていた。

「魔術師型……やり辛い……」

双大剣での攻撃頻度が少ないのと、翼での魔法陣生成や魔法攻撃が多いことから目の前の使徒は魔術師型だと判断した。

魔法も相殺していたが、徐々に押されていき、弾いたり、受け流すことも出来なくなってきた。

『『灰獄蒼槍』』

灰色の水槍が降り注ぐ。

「蒼天・連槍」！」

蒼い炎の槍で相殺しようとするものの貫かれてしまい、聖絶で防御することしか出来なかった。

「闇焰豪鬼」

黒い焰の二本角の鬼が産み出され、その手に持つ金棒を肩に乗せ、威圧するように睨みつける。

「輝水堕龍」

光り輝く白い龍も現れ、鋭い牙と何もかもを貫きそうな眼光をユエに向けて飛ばす。

「つー」「五天悪鬼」！」

五色の魔法を纏う蝙蝠の羽を生やした鬼を呼び出す。

「無属英神」！」

透明なエネルギーで生成された、槍を持つ神兵が現れる。

互いの鬼が咆哮を上げてぶつかると、

焰の拳と氷の拳がぶつかり合うと、拳が弾ける。風の拳と焰の拳がぶつかれば、風の拳により黒い焰の鬼は宙に舞い上がる。

『ゴアアアアアアアア！』

ユエの鬼が咆哮と共に雷のレーザーを吐き出し、使徒の鬼の胸を貫く。核を破壊できたようで、魔力が霧散していった。

一方で龍と神兵の戦いは龍が優勢だった。

『キシヤアアアアアアアアアア!!』

白い破壊光線が龍の口から放たれ、神兵がラウンドシールドで受け流す。

透明ではあるものの、空間の揺らぎで神兵の姿は誰でも見ることはできる。

神兵の槍を龍が身体をうねうねと躲し、巻きつけてへし折り、そのまま勢いで神兵の身体にも巻きつき締め上げる。

『……………っー』

氷神兵は翼を広げて、魔弾を放ち龍の身体を撃ち抜いていく。

龍は神兵の頭はその顎門で暗い突き、潰す。

頭を潰されたことで、神兵の身体からだらりと力が抜け落ち、消滅する。

「……まで良く相手になりますね」

「……舐めるな」

「ですが……これで終わりにしましょう……我が主よこの力を使う事をお赦してください。『天焦がす破壊の龍』」

橙の焔を纏う龍が現れる。焔の熱気で着ている服から煙が上がり、龍の周囲が歪んで

いる。

ユエの着ている服はそう簡単に燃えるものではないのにも関わらず、燃えそうになっている。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

咆哮ですら、熱気で周囲の建物が崩れ落ち灰になる。

「お前……この魔法……!」

「貴女の思う通りです。これは我が主から唯一許された魔法……美しいでしょう……」

焔の中心にいる龍の鱗は闇のように真っ黒で牙は形は不揃いで歪ながらも、喰らい付いた物を切り裂きながら噛み砕けば骨すら砂にされるだろう。

「悪趣味……」

「この素晴らしい龍がわからないとは……貴女には物を見る目はないようですね」

失望したような言葉を吐き、ユエを睨む。

「龍よ。喰らいなさい」

雄叫びを上げてユエに向かってその顎門を開き、加速して噛み付く。

近づくだけで熱気によるダメージを受けるので、動きを見せる前に龍から距離を取る。

「『五天龍・血彗』!」

五色の龍が緋いオーラを纏って現れる。

「その程度の龍で我が龍に叶うとでも？」

使徒の呼び出した龍にユエの呼び出した龍が喰らい付き、氷と風の属性ブレスを吐き出して橙色の焰を消そうとする。

「引きちぎりなさい」

使徒の龍の爪がユエの龍の炎龍の顎門をこじ開け、そのまま下顎を引きちぎり、雷龍の身体を三枚おろしにする。

残った三色龍もブレスにより焼き尽くされ、消滅する。

「っ……」

「これで終幕です」

ユエの眼前で首が三つに分かれ、赫い焰が溜まる。溢れ出る熱量に服が燃える。

「くっ……！ 『水星龍』！」

深い蒼色の龍がユエを護るように蟠を巻く。

ブレスが水星龍にぶつかり、大爆発を起こす。爆風により建物の壁に飛ばされ、いくつかを貫通し、めり込んだ。

「ガハッ……」

自動再生で傷を再生するものの、魔力が枯渇しているのか治りが遅い。

今までの傷や攻防で魔力を消費しすぎたようだ。

ふと、上からポタポタと何かが垂れてくる。使徒の攻撃かと思ったが、違うようで、垂れてきていたのは赤い液体——血だった。

誰の血かと一瞬警戒したが、匂いでハジメのものだと分かった。

「……なんで」

見上げると穴が空いており、

何故ここに彼が血を垂れ流しているのかはわからないが、失った魔力を取り戻す為に、その血を摂取する。

摂取した血から濃密な魔力を吸収し、血液そのものも魔力へと転換。

愛する彼からの血はユエの思考をクリアにしていく。

「……そっか。何も新しい名前を考える必要なんてない」

ユエは腕を切り、振り回し血液で大きな円を描く。

「……吸血姫よ、未練を持たず、役目を見つけられず死せし姫よ、我が声が届くのならば、ことわり理を超えて、我が前にその姿を晒せ、共に邪なる敵を蹴散らせ——アレーティア吸血龍姫」

魔法陣から、金色の立髪と紅い瞳、白い角、青い身体、黒い爪の巨大な龍が現れる。

『よく呼び出してくれました』

「……喋るの?」

『もしや無意識にですか?』

「…もしかして、変成魔法と魂魄魔法も込めてた?」

『ええ。ワタシは意志を持った、生ける魔法。貴女の、貴女だけの龍です。尤もワタシは貴女ですけれども』

魔法龍の名前に過去アブレイティアの名前充てたことが原因のようで、口調も過去の自分になっていた。

「なら、私のしたいことわかるよね」

『勿論。さっさとアレを倒してハジメ様と合流しましょう』

ユエは吸血龍姫に乗り、空へと駆け上がる。雲のような物を突き抜けた所に連中がいた。

「まだ落ちていなかったのですか」

「……当たり前前。そんな悪趣味な龍を倒して、ハジメの元に行く」

『本当に悪趣味な龍。余計に負けられません』

「魔法が喋った?」

「お前と違って道具として扱っている訳じゃない」

『ふふふ…仲間を除いて一番頼られた魔法ですから』

吸血龍姫は嬉しそうに笑う。

「魔法にある価値は道具として使うことだけです」

『なら見せてあげる（あげましょう）。私（ワタシ）達とお前との決定的な格の差を』
使徒の龍が吠える。吸血龍姫は黙る。涼しそうに流している。

「負け犬の遠吠え……ワタシ切り裂いて」

吸血龍姫は尻尾を高速で回し、真空波を飛ばす。使徒の龍は切り刻まれていき、魔力が漏れ始める。

「焼き尽くしなさい」

再び三つ首になり赫い焰ブレスを吐き出す。

『この程度、火もいらナイわ』

息を吸い込み吐き出すだけで、焰が逸れる。

「くっ……」

「本当の龍の焰に見せてやろう」

吸血龍姫からノータイムノーモーションで火焰ブレスが放たれ、使徒の龍を焼き尽くしていく。

「凍てつけ」

『温度差攻撃……良いわ！』

氷ブレスによる追撃で黒い鱗が割れてパラパラと落ちていく。

そのまま螺旋回転しながら、突撃する。

そのまま貫かれるような龍ではないようで、吸血龍姫の頭を掴む。

『掴むだけなら問題ないわ』

ユエが立髪に隠れたのを確認し、爆破ブレスを放ち、手を破壊する。

そのまま回転して、貫通させて、使徒の龍は霧散していった。

「後はお前だけ」

『伯父さまの仇……まずは貴女からよ』

吸血龍姫はその顎門で喰らい付き、そのまま火炎ブレスを口内に溜め込み、焼き尽くす。

牙から出ている使徒の身体を掴み上へ投げ飛ばしブレスの狙いを定める。

「そのまま死ぬ」

『木偶の棒には相応しい結末を』

溜め込んだブレスは真っ白に輝き、龍を失った使徒は翼を前に覆い被せ、防御する。

翼は一気に燃え上がり、手に持つ双大剣すら溶かす。

全身真っ黒焦げになるが、ユエを上回る再生能力で元に戻っていく。

「ついで……」

『生き汚いのはあの邪神にそっくりね』

吸血龍姫は口から消滅プレスを放ち、再生仕切る前に使徒は消え去っていった。

「終わり……」

『そうね……私、お疲れ様』

「ワタシこそ。助けてくれてありがとう」

『さ、急いでハジメ様と合流しないと』

そのまま吸血龍姫に乗ったままハジメの元へ飛んでいく。

「ユエちゃん」

下の方から一人の少女の声が聞こえる。

「香織……」

「勝ったんだね！」

「当然。ちよつと厄介だったけど」

『香織様もお疲れ様』

「ふえ？もしかしてユエの乗ってる龍が喋ったの……？」

「……ん」

ユエが喋った龍について説明する。

「そうなんだ……」

『今後ともよろしくお願いね？』

「うん！」

さらにしばらく飛んで行き、ハジメの気配の元に辿り着き、ハジメの元に駆け寄る。
そこで彼女達が目にしたのは――

うつ伏せに倒れ大量の血液を流し、左腕の義手が失われたハジメの姿だった。

「『ハジメ（くん／様）！！』」

慌てて駆け寄、血の出所を探す。

「右目が……！『絶象』！」

再生魔法で右目を治そうとするが、傷が塞がるだけで眼球が戻ることはなかった。
「そんな……！」

他の傷は治っていくが眼球だけは再生しなかった。

「……ごめんさい。治らない」

「香織は悪くない……ハジメをここまで痛めつけた使徒の所為」

ハジメの身体がピクリと動く。閉じられていた左の瞼が開く。

「つく……僕は……香織……？ユエ……？」

「ハジメ（くん）!!」

意識を取り戻した彼に抱きつく。

「イタタタツ……」

「……ごめんね！」

「2人とも無事だったんだね……」

「うん……でもハジメ……右目……」

「あはは……油断しちゃった」

そう言つて、申し訳なさそうに謝る。

「義手も予備の出さないとね……後で義眼も作らないと……」

「私達も手伝うよ！」

「……ん」

「ありがと……2人も休もう？」

「……そうだね。このまま加勢に行っても足手纏いになるだけだし」
しばらく休息を取ることとなった。

呪いの使い方

幸利達の戦争は激しさを増していった。

「使役した魔獣もこれで最後か……」

道中洗脳した魔獣は灰竜との削り合いでほぼ全滅してしまった。

『ご主人様……どうするのじや……』

『へッ……倒す策は正直あんまないし、確実性を持たせるなら……死にかけるしかないな……』

幾つかの策を練り、どう上手く成功させるか頭の中で想像するのだが、上手くいく確率、その後のリスクを当てると、どれも最善とは言い難い。

恐らくは最善なんでものは既に過ぎ去っているのだろう。

『死にかける……それはご主人様がかの？』

『当たり前だ……お前にはそこまでの負担はかけさせたくない……いくらドMのお前でもこれは流石に男として……恋人として、やりたくない』

幸利は呪いに塗れた赤黒い竜を見る。

今、シュバルツドラッヘ黒竜令呪でカンナカムイとりヴァイアサンの力を取り込ませている彼女にこれ

以上の負担をかけられない。その上、アジ・ダハーカは呪いの塊のようなものだ。この竜を呼び出すのに、世界に散らばる恨み、怨念、憎悪などの負の感情を集め、自分の呪いおまじないを込めて作り上げたものを取り込まさせるのは、危険だと判断した。

「とにかく、今はローリスクでやるしかねえ訳だ！」

幸利は洗脳した魔獣を一斉に襲わせる。

「何度も同じ手を使うとは……万策尽きたか？」

灰竜のプレスにより魔獣は一気に焼け死ぬ。

辺りには焦げたような臭いと肉の腐った臭いが充満し、不快な気分させられる。

これまでの戦いで死んだ魔獣と灰竜の合わせた数は最早億を超えていると考えていいだろう。

「（これがダメなら覚悟決めるか）……アジ・ダハーカ！『呪怨念墮戒砲』！」

辺りから黒紫のオーラが立ち上り、アジ・ダハーカの口内で溜められているプレスに集まる。

1秒、1秒と時が進むことに放たれるオーラが強くなる。

「む、流石にそれを放たれては堪らん……ウラノス！」

流石にフリードも看過できないと判断し、愛竜であるウラノスに妨害の為に極光プレスを放たせる。

突如、現れたウラノスの顔が、幸利の身体に喰らいつく。

「しまっ……！」

そしてそのまま幸利ごとウラノスの首が元に戻り、フリードの前に連れてこられる。「ククク……こうもされれば貴様と言えども何もできまい」

ブラックロッドは除外されたのか、手元になく、魔力を放とうと力を込めるが、ウラノスの牙が身体に沈み込み、激痛が集中を乱し、抵抗を妨げる。

『主人様を離せッ！』

焦ったように、テイオが飛びかかる。

「フツ……もう遅い……ウラノス！ トドメを刺せ！」

テイオの方に首を向けて極光ブレスを吐き出す。

喰らい付かれた幸利ごとブレス吐き出した為、彼の無防備な身体ごとテイオを呑み込み、分解されていく。

「ガアああああああアアアア！」

ブレスを吐き終えたウラノスは幸利を外壁に叩きつける。

同じようにブレスを喰らったテイオは幸利ほどダメージを受けておらず、直ぐに彼の下へ飛び寄る。

『主人様……！今すぐ再生魔法で治療を……！』

外壁に叩きつけられた彼の肉体は、あちこちが焼け爛れており、煙を上げており、そこから徐々に分解が進んでいる。

「やめろテイオ……」

『何故じゃ……このままで……いくらご主人様と言えども死ぬのじゃぞッ！』

いつのまにか竜化を解き、両手に魔力を込める。

「そこまで柔じゃねえぞ？」

普段とは違い、焦る様子のテイオに幸利は違和感を抱いた。

同年代が焦る中落ち着かせようと、年長者としての余裕を見せる彼女からは想像もできなかつた。

否、そうではないと押し付けたのだろう。

幸利はふと、アドウルとの談笑を思い出す。

「幸利くん……」

「なんですか？」

楽しくテイオの昔話をしていたアドウルの顔が少し険しくなる。

「……テイオのことを本気で愛してくれるのなら、私から一つお願いがある」

「俺にできることなら聞きますよ」

「ありがとう……」

アドウルは幸利の手を握る。

「彼女から、離れないでいてくれるかな？……あの子は君達が思っているほど、人から引き離されるのに強くない……目の前で両親の遺体を辱められたのが引きずっているんだ……」

両親の墓の前で涙を溢していた、テイオを思い出す。

「だからか……この竜人族の姫君として、ただひたすら努力と研鑽を積み重ねて……いつの日か本当になりたいことを隠してしまったんだ……あの子の祖父として情け無い限りだ……」

辛そうに、自罰的に声が震えている。

「君にこの事を話すのは……多分、テイオの人生を、固めてしまった事への後悔から逃れようとしているのかもしれない……」

「でもアンタは……テイオをここまで育て上げたんだろ？……それが嫌ならテイオはもつと違うやつになってた筈だ……だから自信を持つてください」

「幸利くん……そう言ってもらえると助かるよ……」

嬉しそうにアドウルは笑うのだった。

「ご主人様……頼む……傷を治すのじゃ……これ以上妾の前から大切な人が消え失せるのは嫌じゃ……」

泣きそうになるティオは、幸利の身体を治そうと再生魔法を行使しようと手を重ねる。

だが、幸利はその手を掴み、退ける。

「ご主人様？何を……」

「つたく……やめろって言うのがわかんねえのか駄竜さんよ……傷を治すのは今じゃない……後で良い」

そう言つてティオ頭をクシヤクシヤと撫でる。そのまま自身の胸元に抱き寄せる。

「俺からお前に2画目の『黒竜令呪』を持つて命ずる。俺の為に、魔力を溜めて、次の指しを待て」

「な……」

黒竜令呪は正しく発動し、ティオの魔力が強制的に溜め込まれる。既に一度発動していた黒竜令呪の一片片翼が消えており、今の発動でもう片翼が消える。

令呪命令に反発して彼女は再生魔法を幸利にかけようと意識するが、身体が動かない。

黒竜令呪。

幸利がテイオ専用に作り出した外部強化魔法にして、強力おまじないな呪い。

彼自身の起源《支配》によりその拘束力は聖杯戦争で現れる令呪よりも強力な物になっている。

この起源によって彼は伝説とも言える竜を召喚し、使役する事ができている。

「待つんじゃない！」

テイオの静止を無視して幸利は跳んでいく。

既に傷の癒えたフリードが待ち構えている。

「あの竜人族は良いのか？」

「ああ、お前は俺一人で充分だ」

「頭がイカれでもしたか？」

「さあな。……それにあいつにやった強化が俺にもできないわけがないだろう？こい！」

「ヨルムンガンド！アジ・ダハーカ！」

黒い蛇のような竜と赤黒い龍が幸利に纏わりつき赤黒い球体を作る。魔力がドンドンと増幅し、ドクンドクンと心臓が鼓動するように脈動している。

「何をするつもりか知らぬが、そう易々させる訳にはいかん！」

魔法を打ち込むと球体にヒビが入る。ヒビが入るだけであった。

「ぐっ中々に固い……」

次の魔法を放とうとした途端、球体は自ら割れた。

「ハア……」

紫色の息を漏らし、深緑色の悪魔のような羽を生やし、その羽には、蛇のような目、腰から伸びる尾も蛇のようだった。全身には刺青が現れている。

「なんだその姿は……いや、怖気つく訳にはいかんウラノス！」

フリードはウラノスに竜巻を巻き起こさせる。

『『氷河天焼』！』

蒼い魔力が竜巻に注ぎ込まれ、冷たい空気が溢れ、辺一体がブリザードで包まれる。

その中に幸利は突っ込んだ。

「この程度で俺は死なねえよー」

「何ッ!?!」

まさかの凶行にフリードが困惑したような声を出す。

気温が超低温に下がる。風で傷が切り裂かれ、そこから凍りつき、血液の流れが悪くなり、意識が落ちそうになる。

「フツ……いくら貴様とて、この低温には耐えられまい。そろそろ暖かくしてやろう」

竜巻が晴れ現れたのは、血が凍り全身もポロポロになった姿の幸利だ。

「おら……もつと……いやあ……」

「『獄炎監牢』！」

紫の棘のついた牢屋が幸利を取り囲み、一気に縮み身体に突き刺さる。

「グオア……」

焔が消えた後も幸利は空に立っていた。

「貴様……なんのつもりだ？」

「……さあてな？」

不気味な笑みを浮かべる幸利。

下で悲鳴を上げる竜人族の姫君のことすら、見えていない。呪いと猛毒が身体中を駆け巡り、彼の頭は激しい頭痛と激痛が走っている。

フリードは両手を天に掲げて、振り下ろす。

ザンツ！

「幸利イイイイイイ！」

後ろから真紅の槍を構えて優花が一直線に飛んで来ていた。

使徒との戦いは優花達が優勢で進んでいた。

消耗も少なく、再生の治りも悪くなっていた。

「香織から回復魔法を教わって正解だった……再生することを止められる！」

光輝の回復魔法を付与した聖剣の一撃が当たることにより、使徒の再生が弱まっている。

すると別方向からとんでもない程の魔力が溢れ出るのを感じ取った。

「この魔力……しかも乱れてる……幸利……!？」

恋人の魔力に異常事態が起きていることに優花に不安が生まれる。

「ゆうかりん……トツシーのそこに行つて」

結界を維持しながら鈴が言う。

「ツ……でもここは離れられない」

使徒の相手から離れることができない、かと言って幸利が心配な彼女は迷っていた。

「園部……死にかけるかもしれないねえが……幸利の方が死にそうだ。だからよ、アイツのこと助けに行つてこいって」

龍太郎も加勢するよう促す。

「……わかった。本当に不味かったら念話石で呼んで」

そう言つて優花は駆け足で幸利の元へ跳んで行った。

「さて……そろそろやるか……」

龍太郎は全身に力を込める。

「オオオオオオオオ！」

獣のような雄叫びを上げて、肉体を変化させていく。

上半身の服は破裂し盛り上がった赤い竜の鱗に包まれ、黒い竜の翼が生える。

「幸利にはあんま使うなって言われてるけど……アイツも無茶してるからおあいこだ

……」

竜魔人化。

竜鱗化よりも遥かにステータスの上がり幅が大きく、特に攻撃力が高くなる。魔力も高まり、属性耐性も上昇する。

しかし一方で、無理矢理上げられたステータスの反動が解除時に襲いかかる。

龍太郎は使徒に向かって使徒を殴り始める。

「短期決戦か……『限界突破・天戒』！」

霸潰とは違う限界突破を発動し、光輝も使徒に聖剣を振るう。

「『天翔閃・咆哮』！」

閃光の砲撃が使徒に直撃、さらに追い討ちをかける。

「『火炎時雨・豪炎』！」

聖剣の一振りで大量の火炎弾幕が張られる。

火炎弾は使徒の周囲を覆い尽くし、逃げ場をなくす。

「吹き飛びやがれッ！」

火炎弾幕が着弾したと同時に龍太郎の拳が使徒のボディに、顎に顔面に叩き込まれる。

「女の顔殴るのはあんまい気分じゃねえな……」

そう言いつつも拳を止めずに殴り続ける。

その背後から銀翼が降り注ぐ。

『聖完絶』！

銀翼が龍太郎を覆った結界の前に防がれる。

それを破ろうと大剣を振り回すが、後退するだけで龍太郎に直接ダメージを入れることができなかった。

「鈴がいる限り、攻撃は通じないよー」

『幻楼影岩』

視界に入れることすら困難なほどの速度で岩石弾が飛び交う。

『聖絶・天在』！

鈴の小さな結界が龍太郎を的確に守る。

魔力コストを削減し、それぞれが一回限りだが、絶対の防御結界が対象の周囲に自動で現れる。

「ふう……フッ！」

龍太郎は翼に魔力を集中させ、炎と氷の魔法エネルギーを溜める。

(イメージ、イメージ……グツとやってギューンとして……)

ユエから教わった使い方で、魔法を発動する。

「放つ時はドカーンと!!」

考えるな感じろの理論で説明された龍太郎は感覚派な彼にも意外と合致し、慣れない魔法を発動することができた。

「『炎皇』! 『氷帝』!」

炎の砲撃と氷の砲撃が使徒の翼を貫く。

「……遊びは終わりです」

貫いた翼は再生し、鋭利な武器へと変わっていた。

龍太郎へ急接近、双大剣と翼により斬撃の乱舞を放つ。

「龍太郎!」

龍太郎への攻撃を止める為に光輝は聖剣で翼を切り落とそうとするが硬質化した翼に刃が通らない。

「くっ!」

両者に攻撃は結界に阻まれ入ってはいないが、結界を後ろで張っている鈴に脂汗が浮かんでいる。

聖絶・天在は攻撃を受ける場所をある程度予測しながら聖絶を一瞬だけ展開する。

それを何度も繰り返している為、魔力だけでなくそれを処理する脳にかなりの負担がかかる。

「チツ……このままじゃ……鈴の奴が……」

龍太郎達も攻撃を逸らし、鈴への負担を軽減しようと必死だ。

「1発逆転は光輝だ………それを通すには俺がやらなくちゃならねえ……」

龍太郎は手を重ね、指と指を重ねる。重ねたまま攻撃を防ぎつつ、魔力を溜める。

「もう……無理……」

数千回の攻撃を防いだ鈴の脳が処理落ちを起こし、意識が落ち、建物の屋上に落下する。

「これで終幕です」

使徒は双大剣を重ねエネルギーを纏わせて振り下ろそうとしたその時だった。

「ああ………これで終わりだ！『竜魔気砲』！」

重ねていた手を開く。それは竜の口が開かれたようで、無属性の魔力砲が解き放たれる。

「なっ………！」

至近距離で大爆発を起こし、互いに吹き飛ばす。

「うぐあつ……光輝イイ！」

「ああ！『聖煌剣気・絶断』！」

眩く輝く聖剣を高速で振るい、翼を切る。

バランスを崩して、落ちかけた使徒はすぐさま翼を再生しようとするが、一向に再生しない。

「何故再生しない……？」

「再生はしない？……いや、再生の必要がないからだ！」

聖煌剣気・絶断。

聖剣に付与された空間魔法を光魔法で強化し、切った対象はダメージを受けることはないが、切られた部位は概念的に切り離され、あるのにないものとされる。

「はアアアア!!」

続け様に四肢を切る。

「これでトドメだツ!!」

聖煌剣気・絶断を解除し、聖剣の魔力を解放する。

「『神威鳳龍・天皇』!!」

聖剣から目視することすら困難なほど煌めく、美しい虹色の鳥の翼を持つ龍が放たれ、使徒を呑み込み消し去った。

「はっ……ハアツ……終わった……」

光輝はヨロヨロと龍太郎達の元に歩み寄る。

そこには結界を張り尽くして気絶するように眠る鈴を膝枕している龍太郎がいた。

「おつかれ光輝……ナイスドメ」

「龍太郎こそ、よくあそこで大きな隙を作ってくれたよ……」

「いやー……流石に無茶だったけどな……お陰で身体がガツタガタだぜ……」

「それじゃあ少し休むか……」

「そうだな……」

フリードの振り下ろした両腕は、幸利の両腕を撥ね飛ばしていた。

「うガアアアアアアアア！」

両腕を撥ね飛ばされたことによる大激痛、ボタバタとこぼれ落ちる血、朦朧とする意識が加速する。

「ご主人様ア!!」

いてもたってもいられずティオは幸利の近く目掛けて飛ぶ。

その間に幸利は口を三日月型に歪め笑った。

「……………仕掛け完了だバーカ！」

幸利の身体全身に描かれた刺青が青く輝く。

「……………逆しまに死ね！『偽^{フェイク}写^{スナップ}し記^{レコード}す万象^{ユニバース}！』」

突如、フリードの身体が崩れ落ちる。

「何……………が……………腕も動かん……………貴様……………何をした……………！」

「……………言った所でどうすることもできねえからネタバラシしてやるよ。俺の傷をテメエに写したんだよ！俺も死にそうなままだからな！」

「ならば貴様はどうすることも出来んわけか……………ウラノス！トドメを「先に死ぬのはテメエだ阿呆。優花ア！トドメ刺しちまえ！」何っ!？」

幸利のいた場所の後ろから真紅の槍を構えた優花が、電気を溜めながら突撃してくる。

「幸利アンタこれ終わったらガチ説教よ！自由な時間なんて1秒も上げないから!!」

優花は幸利に激怒しながら、小刀を空中でばら撒き、それを殴る蹴るなどして、フリードの身体を削っていく。

「ぐわアアアア！」

四肢と下半身も無くなり、ウラノスは蜂の巣にされ、残ったフリードの肉体にとどめ

の真紅槍が落とされる。

「消え去れエエエエエエ！」

紅い電撃がフリードを呑み込み、灰に変えて倒すことに成功した。

「勝つたは良いけど、このまま落ちてくんだけどどうしよ」

幸利はそのまま落下していく。

「ああー……ティオー！助けてー！」

そう言うのと、2画目の黒竜令呪が発動しティオがものすごい勢いで飛び、幸利を包み込む。

「おおく助かった〜」

そう言うって、ティオに身を委ねるながら、取り込んだヨルムンガンドとアジ・ダハーを身体から出す。

「今、腕も何もかも治すからの……！『絶象』！」

幸利の切り落とされた腕をくつつけて治し、ボロボロになった肉体も完全に癒えた。

「あ、あ、あ、く疲れたわ。寝るからお守りよろしく〜」

そう言うって眠り落ちた。

「なあ!?寝おつた……」

寝落ちた幸利を抱えて安全な場所にティオは降りる。

その隣にブチギレたままの優花が、着地する。

「ティオ、そのバカ起こすわよ」

「じゃな……ここまで心配かけた此奴を少しは反省させねばなるまいて」

そう言つて、ティオは強めに幸利の頬を叩こうとするのだが、治ったばかりの腕に受け止められる。

「……何だよ」

「何だよじゃないわよ!!アタシ言つたよね?いなくならないでつて!なのにアンタは死にそんな怪我負つて、拳句の果てには無防備で落下して……おまけにティオの回復すら拒否して!どれだけ心配させれば良いの!」

「……確実に倒す方法がこれだったから仕方がないだろ」

罰が悪そうに優花から顔を背ける。その顔をティオが無理矢理直して2人が視界に入る。

「ご主人様……妾、言つたじやろ?大切な人が目の前から消え失せるのは嫌じやと。なのに……なんであんな無茶を通したのじや。確実に倒す方法だったなら、他にも方法があるのじやろ?何故かそれを試そうとせんかったのじや?どんな理由があるのか言うてみい?」

「怒らないか?」

「怒る!!」!

「じゃあ言わな「言わなかったら説教じゃ済まさないわよ」……お前らに負担をかけたくなかったただけだ」

『ブチツ』と何かが2つ切れる音が聞こえた気がした。

「精神的に負担が来たわよ!!!／のじゃ!!!この大馬鹿幸利!!!／者!!!」

大粒の涙を浮かべながら2人は大激怒。流石に幸利も言い訳する気も起きなかった。

「ごめん……」

小さな声で幸利は謝るのだが、その程度で許すほど2人の怒りは軽くなかった。

「アンタさあ、もしかしてその自己犠牲、士郎さんに影響されたわけじゃないわよね?」

「……ピュ〜ピュ〜」

口笛を鳴らして誤魔化そうとする。

「……」

そのまま優花とテイオはその唇を2人がかりで塞ぐ。

「ピュ〜ピュ〜んむう!?!」

唐突な口付けに抵抗できずに2人に口内を貪られる。

歯茎は舌で撫でられた後、3つの舌が複雑に絡み合う。狭い口内では逃げ場なんて物

はなく、好き放題される。

「んううう！んぐっ！んううう！」

力の抜けた身体はビクビクと動くだけで、2人の口付けは続く。

3分が経過したところで、一度顔が離れる。

「ぶハアツ……いきなり何すんだお前ら……！」

「アンタが全く反省しないからアタシ達でお仕置きするわ」

「待て！ここ敵陣の真っ只中だぞ!？」

「知らんのじゃ。お主はしばらく妾達の愛を受け止め続ける他ないからの。自分の身を心配することを優先したらどうじゃ？」

「おい！やめツんむう!？」

幸利が全力で抵抗する中、2人の口付けはしばらく続くのだった。

愛する者を取り戻せ

仲間達の戦いが行われている頃、恵里達はフリードの背後の石柱に飛び込んで、エヒトのいる空間を進んでいった。

「不気味なほど静かで綺麗な一本道ね……」

雫は通路内の光景について、一言溢す。

「基本こういう道って狭み撃ちにするのが敵の戦略だけど……今回は様式美なんだろうね」

「どういう事ですか？」

シアの問いに恵里は不快感を抱きながら答える。

「僕達なんかどうとでもできるって事。それだけの自信がエヒト邪神にはあるって訳」

「……妙にイラついてきました」

「同感ね、さつさとぶつ飛ばして士郎さんを取り返すわよ」

奴の自信に2人は軽くイラつき始めた。

さらにはしばらく進むと階段が見つかる。

「これは……」

「RPGあるあるのラスボス前の階段だね……」

「つまりこの先に士郎さんがいるということですね……」

階段の上は強い光が差し込んでおり、目を開けていられなかった。

「ぐっ……」

「目が……」

そこを抜けた先は、どこまでも白かった周囲の全てが見渡す限りただひたすら白い空間で距離感がまるで掴めない。地面を踏む感触は確かに返ってくるのに、視線を向ければそこに地面があると認識することが困難で、そのままどこまでも落ちていってしまいうさだ。

光が収まり、視界がクリアになると、目の前には彼女たちの求めて止まない男の姿があった。

「ようこそ。我が領域に」

声は変わっていないが、それから漏れ出る本性は邪悪な物で、3人は顔を少し歪ませている。

「お兄ちゃんの声で喋らないでくれるかな？声が良いけど、お前の魂が腐り切って腹立つから」

「まあそう言うな。お前たちに一つ選択をやろうと、フリードの奴にここまで通させた

のだからな」

ニマニマとイヤらしく笑いながら、エヒトは手を恵里達に差し出す。

「私の妻となれ。お前たちにその権利を与えよう」

ズガンツ!!

「ん？何かしら？冗談言うならもつと面白い物と言って欲しいわ」

考える間すらなく雫は短刀をエヒトに投げつけた。

顔の横を通り、背後の空間に突き刺さる。

「……わたし達が愛しているのは士郎さんであつて、オメーじやねえーですう！」

シアが真横から星砕き・V2を振り抜き、エヒトの身体が大きく吹っ飛ぶ。

「……クククツ我が嫌と言ふことか。ならば、無理矢理にでも手籠めにするのも一興よ」

そう言つて、エヒトは手に、白と黒の双剣を作り出す。

「お前がソレを使うな！」

士郎がよく使う『干将・莫耶』をエヒトが投影したことに苛立ちを込めつつ、急接近

しデュランダルを振り下ろす。

鋭く磨かれた岩が燃え盛りながら背中を貫こうと降り注ぐ。

「うりやああああ!!」

その岩をシアが星砕きで全て叩き落とすのだが、砕けた破片から再び炎が発生し、二

人に襲いかかる。

「鬱陶しいー！」

恵里は剣先に重力球を展開し岩片を圧縮する。

「ほう……対応するか。ならばこれはどうだ？」

指をパチンと鳴らすと、背後の光から、ヒトのような形をしたナニカが大量に現れる。

そのナニカは二刀の中華刀を構え一斉に襲いかかる。

「即興で強化したから、どこまで落とせるかわからないけどやるしかないよね……」

恵里は空間を切り裂いて、黒く染まった獣を呼び出した。

口から紫色の瘴気を漏らし、涎を溢している姿は凶々しい。こいつらを恵里は内心、

フエンリル・リツパーと呼んでいる。

「……クククツ、私の神獣を變成魔法で強化したのか。良かろう。光の使徒よ相手をし

てやれ」

「喉笛を喰いちぎれ！」

光の使徒は中華刀を、フエンリル・リツパーは牙をメインに攻撃する。

光で構成された刀は牙に砕かれ、魔力として吸収し、吐き出すことで、本体を粉碎する。

反対に光の使徒は刀で牙を受け止め、足を刎ねて縦に両断する。

暗黒レーザーで光の使徒を貫き、撃ち落とす。

「落としても落としてもキリがない……!」

「当たり前だ。我が光輝より生まれし使徒はいくらでも召喚する事ができる。貴様のよ
うな消耗品とは訳が違う」

余裕そうなエヒトを無視して雫が刀を振るい、光の使徒の首を次々刎ね飛ばす。

「ここは私が受け持つわ!二人は奴を!」

「フェンリル・リップパー!滅・変異抜刀牙!」

1匹のフェンリル・リップパーはドリルのように回転しながらエヒトに向かって喰らい
つく。その開いた顎の軌跡が十字型に見える。

「ふむ、犬にしては見事な大道芸だな……」

そう言い、自身に喰らい付こうとするフェンリル・リップパーの上顎と下顎を掴み、食
卓でパンを千切るように、上下に引き千切る。

「烈・幻夢抜刀牙!」

もう1匹のフェンリル・リップパーが渦を巻きながら、横から喰らい付く。無数に分裂
し、牙を身体に突き立て、そのまま喰い千切ろうとするものの身体から棘を生やし、フェ
ンリル・リップパー達の頭を貫く。

「無駄だ。我が身体は全身が武器。迂闊に触れば死ぬ」

「隙だらけですう！」

上空から星砕きをシアが叩きつける。『ガゴオン!!』とかなりの衝撃がエヒトの頭に入ったと彼女の握るソレから伝わる手がたえた。た。

「中々やるようだが、所詮兎は兎。弱小な存在が我に傷などつけることは叶わぬよ」

身体強化レベルVIにより1ー15倍に上がった筋力と敏捷による一撃は下手すると地形を跡形もなく粉碎し、地図の書き換えすら必須の威力だ。

（土郎さんの肉体を加味してもおっそろしい硬さしてます……）

「ふむ……ソレにしては想定よりはやるようだな」

「ガハッ！」

エヒトは上段回し蹴りをシアの脇腹に1発入れて、反対方向で光の使徒の相手をしてる雫へ、シユートする。

とんでもない勢いで飛んでいくシア。普通であれば雫に激突し、彼女諸共壁へと沈む筈だ。

しかし、シアの身体がゆっくりと半透明に透けていくのを視界にエヒトは捉えた。

そして、雫や光の使徒をすり抜け、あわや壁に激突する寸前で勢いを殺し切った。

「ほう……魔力を持たぬ筈の亜人が面白いことをするではないか。やはり殺すには惜しいイレギュラーの1人よ……」

シアは『半転移』という、回避技を会得していた。

特訓期間が一ヶ月もあつたお陰で、自在に発動できるようになつていた。

エヒトが感心している背後から回転しながら一匹の狼が首を刈り取るように突っ込んで来た。

「絶・天狼抜刀牙！」

首を一閃する。刎ね飛ばされた首は宙を漂う。

「意識の外からか、面白い一撃を放つ犬だな……」

右手で頭をキャッチしたエヒトはか2度目の感心を覚えた。

「しかし、愛する者の首を刎ねるとは、些か遠慮がないな？」

「人の身体好き勝手するお前に言われたくないね！」

そのまま剣を振り下ろし、追撃する。

刎ねられた首を上に移させ指先で受け止める。

「さて、そろそろこちらも遊ばせてもらおうか」

首を元に戻したエヒトは不気味に笑いながら、三体に分身した。

「んなツ!？」

「まずはこれだ『地に捕らえられし怨念の怒り』」

恵里の下から紫色の熱エネルギーが噴火するように溢れる。

る。

「『猛き創世の巨人』……」

空間が揺らぐと、歪な体型の巨人が現れ、虚空から黄金に輝く槌を呼び出す。

ソレを横に振り回し恵里の身体を殴り飛ばす。

「グアアアッ！」

「『黒鉄の雲よ』」

吹き飛んだ先には、漆よりも黒い雲が恵里を包み込む。エヒトが開いた掌を握ると、

白金色に輝く雷が彼女の肉体を貫き、焼き尽くす。

「アッ、アッ、アッ、アッ！」

「良い悲鳴だ……む？」

恵里を詰ることに愉しんでいたエヒトは背後からの2人の気配を攻撃される瞬間ま

で無視していた。

「これでもダメですか!？」

シアが星砕き・V2の柄を突き立て、その間に雫が恵里を捕らえている黒雲を一闪し、未だ痺れている彼女を連れ戻す。

「恵里大丈夫？」

「……問題ないよ。それにしても厄介すぎる」

エヒトの魔法をある程度吸収して、回復に回していたようで、ダメージはある程度抑えられているようだ。

それでも大ダメージを負ったのは間違いない。

「そう言えばイレギュラーよ。アルヴヘイトをどのようにして仕留めたのだ？あれも一応は、神性を持つ我が眷属だ。いくらお前達と言えど、そう簡単に討たれるとは思えないのだがな」

「ああ、あのみつともなく命乞いをしたエセ野郎？そいつなら今、人類の為に身を……うん、魂を粉にして頑張ってるよ。初めて人の為に活躍してるし、今頃は大号泣でもしてるんじゃないかな？」

「ほう、みつともなく命乞いとな……」

「お前に見せても喜ぶだけだから良いけどさ……」

「隠すことはない。分かっているぞ。概念魔法を発動したのだろうか？お前達にとつてあの時は極限と言える状況だった。まさか、アルヴヘイトを打倒し得るほどに強力な概念を生み出すなど、我にとつても予想外ではあつたが……大方、『神殺し』の概念でも作り出したのだろうか？そして、その切り札を懐に忍ばせて、これならばと希望を抱きながら……まで来た。ふふふ、可愛いものだ」

「そうだね、お前を倒す剣なら作つたよ！ソレにお兄ちゃんを助ける力もね！」

そう言い切りながら、バルムンクの斬撃と多種多様な最上位魔法でエヒトを攻撃する。

更に、雫とシアが宝物庫から複数の魔法を込めたカプセル状の弾を雨霰のように降り注がせ、起爆する。

「ククク……面白い……もつと我を愉しませよ！」

彼女達の弾幕はエヒトが開いた光の亀裂から降り注ぐ流星に撃ち落とされている。

エヒトの分身体が雫達に大剣と拳で襲う。

「甘いわー！」

「返り討ちにしてやるですう！」

拳は姫鶴一文字によって切り落とし、大剣を戦鎚で砕く。

切り落とした拳は再生され、大剣の破片は、短刀へと姿を変えてシアへドラクエ襲いかかる。

「物量ばつかでうざいですう!!」

短刀は半転移で回避し、分身体を直接、弾幕で消し飛ばす。

雫もヒットアンドアウェイを繰り返すことで、分身体の隙を突いて殺すことに成功する。

どうやら分身体は不死身ではないようだ。

光の使徒達は恵里のフェンリル・リツパーに抑えられているので妨害はないと考えて良いだろう。

「ククク……ここまでできていても諦めないとは……しかし、この身体の持ち主はまだお前達を待っている、そう思っているのか。ならば絶望を教えてやろう」

エヒトは指を順番に立てる。

「まず一つ、お前達の持つ、概念魔法は我に通用などしない。二つ、この身体の持ち主の魂は既に声も出せない。三つ、お前達はここから出ることにすら叶わないと言うことだ」

エヒトが宣言する。恵里達は

「バー……カ！誰がお前の話なんか信じるんもかよ！」

「士郎さんは生きていますし、わたし達は帰ります」

「アンタ如きに私達の想いが通じない訳がないでしょう！」

そう言うって恵里は闘志を燃やし、魔力を本格的に放出し始めた。

「そろそろわたしもこれを飲む時が来たようですね……」

シアは宝物庫から、錠剤を取り出し飲み込む。

『ズクン、ズクン』と彼女の心臓の鼓動が大きく激しくなっていく。

「はああああああっ!!!」

シアの身体から途轍もない程の力が溢れ出た。

服用した錠剤は、士郎の作成した『現人神薬』と言う増強剤だ。

士郎の強化魔術を薬に詰め込み、飲んだ者の基礎ステータスをザツと10倍に引き上げる。反動として肉体へのダメージが入る。キチンと鍛錬をしていなければ、五体が吹き飛ぶ。

「士郎さんに訓練メニューを熟すよう言われていなければこの薬も使えなかったですね……身体から力が溢れ出るです……」

（それと同時に身体中がギチギチと激痛も上げてます……長期戦は不可能と考えましよう……）

その上でで身体強化レベル・Xを発動して一気に全開状態へと達する。

恵里と雫も、限界突破の魔強化版を発動する。

「『限界突破・天神』！」

「『限界突破・獄神』！」

白と黒の濃密な魔力がお互いから吹き上げ、周囲の死体の残骸が消し飛ぶ。

「さて第二ラウンド開始だよ！」

愛はきつと届くから。

現人神薬と身体強化でステータスを強化したシアと限界突破でブーストした恵里と
雫は、特に突撃する訳もなく、弾幕を張ると言う行動に出た。

「『天狐の怒りは我が怒り、悪神裁く蒼き焰』！」


銀翼から魔弾を撃ちつつ、恵里はエヒト達のような魔法を放つ。彼女はこの魔法を神
言魔法と仮称しており、神言を解析したが故に恵里自身も扱えるようになった。

放つ魔法に魂魄魔法を付与し、そのうち魂を持った魔法を神言で改造する。
これでエヒトに対抗している。

九尾の狐は尾の先から蒼い焰を放射し、エヒトを狙っている。

「『神楼吹雪』」

桜の花吹雪が焰を掻き消し狐をも吹き飛ばす。

「『 煥牢栓』」

ネットリとした黒い固まりが恵里を包み込み、圧縮しようと縮んでいく。

「ううううりやああああああー！」

下からかち上げるようにシアが星砕き・V2を振り上げるのだが、エヒトはびくともしない。

「……その程度のパワーで我に通じる訳かなろうよ『天空から降り注ぐ浄化の雨』」

ぽつりぽつりと水滴が降り注ぎ、徐々に強くなつていく。雨粒に当たったところからシアの身体が光の粒子へと消えていく。

「……そんなの効かねえです！」

シアは自身の身体に再生魔法を纏わせエヒトの魔法を無効化する。

「これならどうですか！」

宝物庫から手袋を取り出しそれを履く。更に星砕き・V2の柄の先に、鎖がついた鉄球を装着し、それをぶつ叩きエヒトにぶつけ、鎖を掴む。

「『錬成』ですう！」

シアの履いた手袋から青く光り鉄球が形を変え、棘が生えエヒトを貫く。

「もいっちょ『錬成』！」

棘が枝別れし体内を蹂躪し、全身を貫く。紅い鮮血が純白の世界を染める。

「ククク……まさか兎風情が、魔法を使い、我に傷を与えるとは……面白い！」

どろりとエヒトの身体が溶け、歪に伸びた棘が残り、鉄球が重力に引かれるようにブリリと落ちる。

「逃さねえですよー！」

鎖を引つ張り、鉄球を戻しグルグルと高速で回し、エヒトに向けて何度も投げつける。時には鎖で薙ぎ払い、絡めとろうともする。何度も避けられ弾かれようともめげずに攻撃をやめない。

シアの身体は刻一刻と限界へと進んでいる。時間をかけてしまえば動けなくなるのは必然だ。

「さあ……これでも喰らうと良い！『破摧戦争』！」

天が破裂した。

降り注ぐ赤、赤、赤、赤。

シアの未来視に写ったのは押しつぶされる自分、恵里、雫。

「洒落せえですよー！」

シアは鎖を腕に巻き付けて、鉄球を自身の元に引き戻す。

鉄球に魔力を込める。鉄球はググツと丸まったダンゴムシが元に戻るよう開いて、盾へと形を変えた。

「そんなもん吸収して……！」

次々と降る隕石を受け止め吸収する。

盾を前に押し出し、吸収した隕石を撃ち返した。

「お前にお返しですー！」

その盾から、隕石が同じ勢いでエヒトに向かって撃ち出される。

「『圧空』……よもや、我が隕石を撃ち返すとは……」

「隙だらけよー！」

背後から雫が刀で斬りつける。

最速の抜刀術から立て続けに型を連続して放つことで、息を吐かせぬ猛攻を仕掛けている。

「八重樫流……『燦々』！『空蝉』！『海月』！『日和』！」

その連撃もエヒトには避けられてしまった。

「『白妙』！『星霜』！『暁闇』！『叢雲』！『神』！「斬れると思ったか小娘が」きゃあッ
!?!」

手首を掴まれ、腹部に肘打ちを喰らう。後ろに下がってダメージを軽減しようとするも、掴まれた手首を引き戻され拳の連打を浴びる。

殴り飛ばされる度に引き戻されるので、ダメージを逃がすことができない。

「離……しな……さいー！」

片手を振り払い、手刀でエヒトの腕を斬り落とし斬撃を飛ばして距離を取る。

「『舞い散る空は星の礫』！」

雫の遙か後ろからキラキラと輝く光弾がエヒトに『ドドドドツ』と当たり。数メートル後退した。

「はあ……はあ……！」

息を軽く切らした恵里が使い捨ての手榴弾を大量に投げつける。

「我は神ぞ。いくら、我を攻撃しようとも我が身体は元に戻るだけだというに……わかないなお前達イレギュラーは」

「……残念だけど……僕達に諦めるって選択肢は……ないんだよ

「むしろアンタが諦めて士郎さんを解放してくれないかしら？」

「それこそ無理だ。この身体は既に我のモノだ。返す返さない以前の話よ」
手を胸に当て堂々と言つてのける。

「我がどうしようと勝手だろう？」

「ふざけたこと吐かしますね……」

エヒトは左手に白弓を手に投影し、右手に螺旋状の刀身の剣を投影する。
「では、まずはこれだ『螺旋の暴風』」

矢をつがえるように剣を添え、撃ち出す。

偽・螺旋剣の周囲を捻じ曲げるように彼女達を襲う。

「ふざけた真似してくるよホント！」

「ではどんどん行くぞ……！」

次々と偽・螺旋剣が飛来し空間が次々と歪んでいく。結界魔法による防御も空間魔法で別の場所に飛ばすことも不可能な一矢。

大きく余裕を持つて回避することしか出来ない一撃を繰り返される。

「フハハハハハ！ そんな避け方をすればこうなることは当然だろう！」

大きく避ければ、恵里達は互いに距離を取ってしまう。

「生き血を啜れ『吸血獵劍』！」

複数投影された歪な形の剣が弓から放たれ、彼女達を追いかけていく。

「チッ！」

恵里は舌を噛み、ワザと出血させ、石壁に吐き出して目標を逸らす。他の赤原獵犬も同じ地点に着弾し、それをバルムンクやデュランダルでへし折ることで彼女達を追いかけることはなかった。

「これも凌ぐか…… お前達という存在はイレギュラーだ。フリードの出現でバランスが崩れかけた遊戯を更に愉快なものにする為、異世界から力ある者を呼び込んだというのに…… 元本命を歯牙にもかけぬ強者になるとはな」

「……元本命ってあの勇者のこと？」

「その通りさ。昔と違って、現代にはフリードに対抗できる人材がいなかったのな。」

まさか、吸血姫の他に竜人まで生きていたとは思わなかったのだよ。どちらも上手く隠れたものだ……この世界に良い駒がないのなら別の世界から調達するしかあるまい」

「……別の世界ね」

「そうだ。もつとも、お前達の世界に繋がったのは全くの偶然ではある。どうせならと、私の器と成り得る者、親和性の高い者を探した結果だ。神の身なれど、世界の境界を越えることは容易くない。まして、器なき身では「神域」の外で直接干渉することもままならんほどだ。結果として、どうにか上の世界から引き摺り落とすことには成功したわけだが……お前のようなイレギュラーを含む、おまげが多数付いて来てしまった」

つまるところ光輝はユエ同様、器の候補だったようだ。

「だがまあ、その元本命よりもより良い器が紛れ込んでいたのは幸運だった。我が理法術に天賦の才がある上に魔力を使うことで無から有を生成するような魔法を使えるなんて思いもよらんかったからな」

士郎の肉体は光輝、ユエ以上にエヒトの理想だったようだ。

「エヒトルジュエ……お前は一体何者だ……」

「愚問だ。当然、我は神である」

「……違う……訳では無いね……でも違う。お前は元は人間。この世界の人間たちによつて祭り上げられて、神性を得た神だ。違う？ 違うなら間違いを指摘して欲しいな」

恵里は自身の、推察をエヒトに向ける。

奴は、肩を震わせ、そして顔を上げて笑い始めた。

「く、ククク……ハハハハハッ！どうも貴様らイレギュラーは我を楽しませてくれる

……概ね正解と言っておこう」

拍手しながら答える。

「なら、私達がアンタを倒せない理由はないわね……！」

雫は姫鶴一文字を構え、宝物庫からもう一振りの刀、菊一文字を取り出す。

「……土郎さん……必ず助けるから……待つて……」

そう言つて背後に向かつて突つ込む。

「馬鹿の一つ覚えのように突撃を……」

「馬鹿はそつちよー！」

背中から交差した切り傷が現れ、出血する。

エヒトは回避した筈の斬撃が背中に命中していることに若干の驚きを見せる。

「なるほど……斬撃を停滞させていたのか……チャチな小細工だ」

アツサリと見破られたものの、雫は立て続けに斬撃を繰り返す。

「全くこの身体の魂は既に消えたと言うのに」

「そんなの信じる訳ねーですよ！これでも喰らうです！」

塔を破壊し、野球のノックのように星砕きで打ちまくる。飛んでいく岩は炎や氷、雷、風と言った属性を纏って四方八方から飛んでいく。

「岩石弾とはこう言うモノだ！『五天隕』！」

シアの飛ばした岩石弾がエヒトの呼び出した隕石弾に無惨に砕かれてしまう。

その隕石は鉄球盾で反射した時よりも小さいものの数が多く、対処し切れるものではなかった。

「ならそれを利用するまでです！」

星砕きで隕石を打ち返そうとするが、あまりの重量にシアの腕が悲鳴を上げる。

「ぐうううウウウツ……！」

星砕きからもミシミシと音を立てている。

「こうなりや球蹴りですウウウツ！」

隕石一つを蹴り飛ばし、隕石一つを隕石で相殺するが、たかが二つ撃ち落とした所で数百の隕石に対しては焼け石だ。

「『消失k……うわあああ！』」

恵里が隕石を消そうと空間魔法の神言魔法を使おうとした瞬間、恵里の周りが急激に捻じ曲がり、圧縮された空気が破裂するように、吹き飛んだ。

（しまった……！……さっきの偽・螺旋剣で捻れた空間が……！）

偽・螺旋剣で捻じ曲がった空間に空間操作を妨害され、反発した次元に恵里が巻き込まれてしまった。

なんとか雫も二刀で隕石を斬っているが大きさ、数に押し負けている。

防ぐ手段を失った恵里とシアは隕石に潰されてしまう。

「やはり、我が力の前ではこの程度か……」

エヒトは失望したように隕石群の着弾地点から目を逸らし、後を去ろうとした。しかし気配感知に3つの反応があり、振り返る。

「何?……あの状況から生きているだど?」

ポロポロになっっているとはいえ、五体満足の3人が隕石の残骸の上で息を切らして立っていた。

「貴様ら何をした……空間は捻れ、まともな回避も防御もできぬ筈だ……」

「避けたに決まっていますよ……このクソヤロー……」

「それが出来ぬから聞いているのだイレギュラー!」

「当たらなかつた……それだけよ……言ってもわからないのね……単細胞かしら?」

「神を愚弄するとは……まさか兎……貴様か!」

「あつたりー……」

「馬鹿な!? 貴様らの周囲は空間魔法はまともに行使出来ぬ筈だ!」

「確かに……わたしだけなら自身に反転移を行使するので影響はありません。ですが、恵里さん達にも使うのなら周囲の空間に使わなければなりません」

「けど気づいちちゃったんだよね……僕。シアに触れていればそんなことしなくてもいいんじゃないかって。おまけに捻れた空間には空間魔法の爆弾をぶつけてそれなりに元に戻したし。捻れた空間は一度暴走させれば元に戻る……さらにコレ使えば……この方法はより確実になる」

恵里の手にジャラジャラと巻かれている金色に輝く鎖が巻かれていた。

「その鎖は……」

「お前……この鎖のことなーんにもわかってないもんね……」

士郎の鎖だ。

「ぐっ……」

そうエヒトは鎖の情報を全く持っていなかった。

恵里達は士郎がエヒトに自身の技能の情報を全て理解させないようになっていることを信じていた。特にこの天の鎖の情報を。

仮に知っていたとしても精々鎖としての能力と神性持ちに対する特効だけだろうと。

「……何故だ。何故我はこの鎖を使わなかった？」

エヒトも自身の選択肢の中に鎖を使うと言う判断が一度たりとも出てこなかった。

確実に潰すのであれば、思考する中で確実にこの便利な鎖は出るのは必然だと言うのに。

「そして今確信に変わった」

「「お兄ちゃん／士郎さんの魂はまだ生きてるって!!」」

彼女達の瞳に宿る闘志が再び燃え上がる。愛する者を取り戻そうと死ぬほど足掻いてやると。

「もう良い……貴様らは不要だ……！いい加減不快だ……！イレギュラーを許容しようとしたのが間違いだった……！」

エヒトの顔が嫌悪感で歪む。恵里達が、自身が奪った身体の持ち主の魂が自身の魂の底から憎悪する。それが顔に浮き出る。

バチバチと魔力がスパークし、身体全体を走る。

「全力で捻り潰してくれるわ……！貴様らがこのエヒトルジュエに二度と齒向かうことが出来ぬようになあ！」

おそらく変容を使ったのだろう。明らかに放たられる威圧感、オーラが違う。おまけに士郎の変容と違って時間制限なんてものはないと考えていい。

「まずは貴様だ兎イ！」

恵里と雫を蹴散らし、シア目掛けて蹴りを放つ。

キレていながらも冷静ではあるようで、シアの未来視に反応する間を与えずに、体術の乱舞を始める。

「ぐううううっ！」

鉄球盾で乱舞を耐え続ける。

腕に衝撃が伝わり、ミシミシと骨にヒビが入っていく。

「実験動物風情が！魔法も使えないゴミがッ！身体の候補になりもしない種族が魔力を持っただけの失敗作だと言うのに……！神である我に楯突くなぞッ！思い上がりも甚だしい！」

「わたし達亜人族がお前に造られただとかそんなのわたし達が負ける理由にならねえですよッ！」

盾で拳を打ち払い、後頭部目掛けて蹴りを放つ。

「見えているわッ！」

脚を掴み叩きつける。そのまま振り回し柱に向けてハンマー投げの様に投げ飛ばす。柱にめり込んだシアの頭を掴み何度も打ちつけ、持ち上げてその腹を殴り、ぶっ飛ばす。

「ゲホッゲホッ……うう……」

「そろそろ殺してやろう……『深淵より生まれし虚像の龍』！その獣畜生を喰らい尽く

せー」

ドロドロ粘性が高く触れたモノを溶かす涎を撒き散らしながら顎門を開き、シアの頭を噛み砕こうと喰らいつく。

ゴリゴリと頭蓋骨が音を上げている。

「やめろー！ー！ー！」

透明な魔力の塊に拘束されていた恵里が拘束を分解しバルムンクで首を切り落とし、緩んだ顎門にいるシアを雫が担ぎ、その場を離脱する。

「すみません……助かりました……」

「……」からが本番みたいだね……」

神々しいオーラから一転して邪悪で禍々しいオーラを見せ、ギョロリと憎悪に塗れた瞳が三人を睨む。

気圧されそうな程威圧感が三人を貫く。

真つ先に動いたのはエヒトだった。

光を帯びた投影剣が雫の刀と鏢迫り合いになる。

分解耐性を持った二刀で光の投影剣をへし折ろうと叩きつける。

「八重樫二刀流……『叢雨』！」

横から2回、その後上下に1回ずつ振り、交差する様に切り落とす。

「無駄だ！我が剣は不壊なり！」

そんなこともお構いなしに雫は刀を振り、エヒトの意識を引かせる。

「イレギュラー！貴様は後で始末してやる……！」

「もう少し私と踊ってもらわよ……！」

しばらくエヒトと斬り合っていると、エヒトは魔法陣を展開する。

属性は魔力感知からして炎系と判断した。

「灰になれ！『灰國の祭壇』！」

雫が炎に包まれると同時に、エヒトの周りも赤の縁取りの黒の細長い布で覆われていく。

「な、なんだこの布は!？」

「引つかかってくれてありがとう……『暗澹の反霊衣』！」

暗視があっても見えない闇がエヒトの視界に広がる。

トンと背中にな小さな手が触れる。

「グオア!？」

「出て行け……お兄ちゃんの身体から！」

口から何かを吐き出そうとえずく。

魔力を流して、効果を強くさせる。

「フンッ！」

「ガハッ!？」

恵里は肘打ちを頬に喰らい、布の壁にぶつかり、首根っこを掴み魔力を流し込む。

「まず1人……自分の魔法で死ぬ……」

「ガアアア……！ウグッ……アガアアッ……」

恵里の視界がどんどん薄くなり、意識が落ち始める。

吐き気と共に自分が出てくる様な感覚を覚えていく。

「ゼアアアア!!」

布が切り裂かれ、首根っこを掴んでいる手首を切り落とそうとするが、硬質化した手首に弾かれる。

「だったら……『聖煌剣気・絶断』！」

光輝も神の使徒に使った、物理防御を完全に無視した一撃で斬り、間一髪救出に成功する。

「ゲホッゲホッ……ゲホッゲホッ！」

咳をする度に視界が晴れて、意識も鮮明になって、危機を脱したことを認識する。

「失敗した……?」

「うん……これじゃあもう僕達のアレしか方法はないね……」

そう言つて右手に握つているデュランダルをチラリと見る。
ほんのりと金色に光を帯び、出番を今か今かと待つている。

「何をしようと無駄なことを……！ 貴様らの神殺しの概念も通用するものか！」

エヒトと再び鏢迫り合いが始まるかに思えたが、光の投影剣は雫の刀に両断される。

「何ッ!？」

首を刎ねようとしたが、紙一重でかわされる。

エヒトの警戒が雫に集中していく。

「物理的防御は意味を為さぬか……」

エヒトは無形の魔法を次々と放つ。

「『黒衣の筒』！」

恵里がその魔法を布で受け止め、吸収していく。

「限界突破の時間はまだまだ大丈夫。続けていくよ雫！」

願いの対価は……

恵里と雫は剣を鞘に収めて隕石の残骸の上を走る。

上からはエヒトからの弾幕が降り注いでいる。

「走ったところで無駄だ！我が流星からは逃れることなど出来ぬわ！」

自身の上昇した敏捷にモノを言わして、駆け回る。

当たりそうな光弾は拳や蹴りで弾く。

「……結構キツイね」

「怒りに任せて攻撃してる……そのうち明確な隙が生まれるわ……」

「うん……」

互いに顔を見合わせる。恵里は鞘に収めたデュランダルに魔力と祈りを込める。仄かに金色に光る。

『捻れ狂え、我が視線』！』

恵里が睨んだ先が渦を巻くように捻れる。弾幕はそこに吸い込まれるように集約する。

『『圧空』！』

吸い込まれた弾幕を空間魔法の箱で閉じ込める。

「お返しー！」

箱を破壊して閉じ込めた弾幕を撃ち返す。

同威力の弾幕が相殺し、辺りが爆煙に包まれる。

「(ハッ)から一気に仕掛けるー！」

雫が空中を駆け上がり、エヒトに急接近、そのまま格闘戦を仕掛ける。殴る蹴るを繰り返すが、やはり当たらないか当たっても全く通用していない。

恵里も挟み撃ちするように広げた翼でエヒトの周りを覆って、使い捨ての槍で突き続ける。

「鬱陶しいぞ貴様ら……！」

攻撃を捌いているエヒトのイライラがどんどん溜まっていき、動きが単調になっていく。

攻撃の威力は強くなるがムラが増している。

「(ハッ)ッー！」

「見えているわ小娘がー！」

硬質化した裏拳に菊一文字がへし折られる。

破片がダイヤモンドダストのようにキラキラと散らばる。

「そりゃ見える位置から行ったからね！」

雫は高速回転し、自身を中心とする竜巻を発生させ、刀の破片による細かい斬撃を起す。

「……小娘にしてはよく足掻いたと褒めてやろう。だが死ぬ」

エヒトが彼女を睨むと、回転している身体が硬直し、身体の末端からパキパキと石化していく。

石化耐性すら貫通しているようだ。

「そのまま砂になるがいい……」

徐々に石化している身体を注視している雫を見るとほくそ笑む。まるで自分と同じようにだ。

背後からとてつもない速度で何かが羽交締めしてくる。短い水色の髪の少女が揺らいだ空間から現れる。

「漸く隙を晒しましたね！」

「兎……貴様何処にいたっ！」

「ずっとお前の後ろですよ。兎人族が誇る気配の操作を舐めんじゃねーですよ！」

シアはエヒトの背後にずっと立っていたのだ。どんなにエヒトが激しく動いたとしても真後ろに立ち続け、必ず訪れるであろう好機イキンスを辛抱強く待ち続けた。

「これでこの戦いは終わりです！」

シアは神断の刃をエヒトの首、頸動脈の辺りに突き刺す。

「くっ……ククク……フハハハハ!! 貴様達の奥の手は我には通用しなかったようだな！」

3人の想いを込めた概念が何も効果を発揮することがなかった。

「そんな……こと……ある筈が……ない……ですよ……」

突如シアの身体から力が抜けていく。

現人神葉が効果を失い、身体強化も出来なくなつて、そのまま落ちる。

エヒトは落ちるシアの耳を掴みぶら下げる。

「うあ……」

再度背後から人影が現れる。

それに対して、エヒトはシアを振り回して対処しようする。

人影はエヒトの手から彼女を取り戻し、石化を解除した雫の隣へと転移する。

「雫さん……」

「まだ諦めるには早いわよ……」

エヒトの真正面に白髪の少女が突っ込んでいく。

「これで終わりだアアアア!!」

エヒトの腹部に黄金に輝くデュランダルが突き刺さる。魔法文字がエヒトと恵里の周囲を覆い、グルグルと回転し2人を縛るように巻き付く。

デュランダルを握る手と反対の手で、神断の刃を掴み、心からの願いを吼える。

「……デュランダル！ 応えろ！ 僕の雫のシアの……皆のお兄ちゃんを返して！」
辺りが眩い光に包まれる。

「どうなったの……？」

恵里とエヒトが重力を無視したように浮遊している。

ピクリとエヒトの身体が動く。そして恵里の身体を抱き締めた。

雫もシアもそのことに何も不安や焦りを抱くことはなかった。

「……お兄ちゃん？」

「そうだよ……ボクだよ……全く……無茶をして……おまけにデュランダルのそれを使うなんて……デュランダル？ なんで恵里に伝えたの？ ダメだつて言ったよね？」

声色から伝わる、彼の困ったような感情。

エヒトではなく、士郎が身体に戻ったのだ。

『だったら油断しないであの邪神に身体を取られなければ良かった話だろ？ だからオレ様は悪くない』

「それを言われると耳が痛いね……」

デュランダルの能力、それは奇跡を起こす力。この剣は元来、折れないという奇跡を内包しており、自身の何かを捧げることで望んだ奇跡すらも引き起こす。

宙に浮遊したままのデュランダルの軽く怒られている土郎は、恵里に向き直り、肩を掴み彼女の瞳に視線を合わせる。

「恵里、代償は何？」

「ごめんねお兄ちゃん。僕もわからない……」

「そっか……」

恵里自身も何が代償なのかもわかっていなかった。

それもそうだ。恵里が捧げたのは自身の記憶だ。いつからいつまでの記憶なのかが全くわからない。『記憶』がなくなっているのだ思い出せる訳もなかった。何故なら元から無いものとして扱われている。

「土郎さん!!」

後ろから雫とシアが飛びつく。バランスを崩す事なく、土郎はその背中で受け止める。2人は大泣きしていて、今着ている白い服が、涙と鼻水でぐしょぐしょになる。

「本当に……本物の土郎さんなのね……うん……わかる……土郎さんの心が……」

「うん。君達の恋人の天野土郎だよ」

「よかった……よかったです……！わたし達の土郎さんだ……あつたかい……アイツと

違ってちゃんと優しい血が巡ってる……」

「シアもお疲れ様……似合ってるとは言え長かった髪がこんなになるまで……ありがとう
うって言えば良いのかな？」

エヒトの呼び出した黒龍の顎門に噛み砕かれそうになった時に彼女の髪が溶けてしま
まったようだ。

「えへへ……そのうち髪は伸びますので、大丈夫です」

隕石の残骸に降りて、現状を確認する。

「恵里抜いて良いこれ？」

「あ、ごめんね」

突き刺さったままのデュランダルに意識を移す。

刺さっているものそこから血は出ていないようで、士郎自身にも痛みは生じてい
ない。

「後は、ボクの中にいたエヒトがどうなったのかだね……」

「普通に消えたのでは無いですか？」

「この空間はエヒトが魂だけで生きれる空間だ。ここどこかにいるはずだ」

『その通りだイレギュラー共！』

上空から声が響く。

見上げると、光が人の形をしたナニカがいた。

『殺す！殺すつ殺すつ殺してやるぞつイレギュラーツツ！』

怒りに染まったエヒトの叫び声が神域に響き渡る。

空気が震え、隕石の残骸がピシピシとひび割れていく。

「うるさいな……ガキの癩癩じゃあるまいし……」

「長く生きすぎて、何度も転生したみたいになつたんじゃない？」

「あー確かに恵里の言う通りだね」

いつもの調子に戻ったのか、兄妹してエヒトを煽り始める。

『良いだろう……そこまでして死に急ぎたいようだな……』

足元が崩れ落ち、開いた大きな穴から士郎達は神域から放り出された。

一方でハジメ達は神域の奥へと進んでいたが、エヒトが士郎の身体から追い出された頃、彼らの居る空間にも異変が訪れていた。

「ハジメ君……なんかおかしくない？」

「うん……」

何か異様な空気を感じ取る。

「もしかしたら士郎を助け出したのかもしれない」

ユエがそう推察すると、奥の方で何か人影が3人分、おまけに固まっているようだ。魔力的に幸利達のものだ。

そつと近寄ると優花とテイオの2人が幸利に覆い被さってキスをしていた。

「3人共敵陣で何してるの？」

ハジメが呆れたような声で問いかける。

「んっ……あ、ハジメ」

「あ、じゃないよ……全く」

「しようがないじゃない。幸利が死にかけに行つたんだから。今それのお仕置き中よ」
「とりあえず、それは後にしてとつとと行くよ」

ハジメがそう促した途端、周囲の建物が崩れ落ち、何処かへと吸い込まれていく。

テイオも幸利から離れて様子を伺う。

「とにかく神域から出た方が良さそうだね……」

そう言つて離れた位置にいる光輝達の元に転移する。

「南雲……」

「3人共無事だね」

鎧は所々砕けた光輝と上半身裸の龍太郎、その彼に膝枕をされている鈴に、龍太郎の頭の上で毛繕いをするウサギ——イナバがいた。

「ああ……けどかなりボロボロだけどな」

「生きてるからベストだよ。それよりもイナバが血塗れなんだけど」

「使徒に勝った後、疲れすぎて動けない時に、魔獣が来て全部イナバが蹴り殺したんだよ……」

「ワオ……」

自分が褒められていると気づいたのか、イナバは魔獣の死骸の上でキュウ！と小さな前足を天に掲げて勝利のポーズを取る。

「さてと、ここから出るから集まって」

そう言い、クリスタルキーでゲートを開き地上へと転移する。

「ハジメさん！」

転移した先でハジメは金髪の少女——リリアーナが飛びついてくる。

「リリイ！無事だったんだね」

「はい……地上に残った反逆の戦士達の尽力で私たちは無事でした……ですが……」
リリイは何かを堪えるように顔を俯ける。

要塞の下から見える大地は、割れており、所々にクレーターが出来ている。

「犠牲者は出ちゃったか……」

「はい……私がおっと正確な指揮を取れば被害は出なかったはず……」

「結果論だよ。リリイは最善を尽くそうとしたんだ。それで良いじゃないか」

ハジメはリリイの頭を撫でながら抱きしめる。そのまま彼女は小さく声を漏らしながら泣いた。

「パパッ！」

「ミュウ……！」

「おかえりなさい！」

「うん……ただいま」

それぞれが帰還した彼等と会話していると、空から黒い塊が落ちてくる。

金色の鎖に巻かれた人が4人。人の頭からウサミミが生えている。

「アレは士郎達だ！」

「意識はあるのか!？」

周囲が慌てていると、4人の影はフワリと浮き上がりゆっくりと地上へと降りていく。

「士郎……！」

「ただいまみんな……心配かけてごめんね？」

「ホントだ士郎……自分だけ犠牲になろうとしやがって……」「それはアンタもでしょうが！」ぬおっ?!?おい優花!?離せッ！」

士郎に説教くさく言おうとした幸利だったが、自身が彼女2人に同様の理由で説教されてるので、人のことが言えないと優花に頭を胸に埋められて連れて行かれた。

「エヒトはどうなったんだ？」

「邪神はまだ生きてるしこれからが本番だよ……とりあえず相手は僕がするから……みんなは安全なところに避難して。ころそこ迷宮組。サラッと参加しようとしな。特にハジメ、君右目ないんだから」

「……けどさ」

「この戦いが終わったら治すから、今は休んでて」

「わかった……負けないでよ？」

「当然……もう油断はしないし、絶対アイツは消し飛ばす」

そう言つて士郎は飛び立ってしまい、姿が薄つすらしか見えなくなつた。

「ひとまず、安全な所まで僕がクリスタルキーでゲート開くよ」

ハジメが王都へと避難し、人数を確認する。

「3人足りんだけど……」

「雫ちゃん達だね……」

「……仕方ない。私もハジメが残つて闘うなら私も行く」

「そうだね……私もいつちやうよ」

ユエと香織は3人の行動に納得していた。

一方で、目が隠れた少年が次の戦いの為に備えており、そんな彼を1人の兎人族の女性が見守っていたのは誰一人気づくこともなかった。

「……で、わかってたけどさ。3人とも残ったんだね」

「あつたりまえじゃん」

「……まで来て、戦わない選択なんて無いわよ」

「あの野郎を消し飛ばすまで終わりでは無いですからね」

気合いを入れなおして、恵里達は武器を構える。

士郎は頭の中に浮かぶ光景に意識を半分傾けていた。

（澄み渡る雲ひとつない青空……青く生えわたる緑の大地……それに対して、焼け焦げたような赤黒い空……火の粉舞う火の海に包まれた市街地……これがなんなのか……）

「お兄ちゃん……?」

「ん?」

「上……エヒトが来たよ」

見上げると、岩片が超圧縮されて人型に固められておりエヒトの魂がガタガタになっているのか、バランス悪く型取られており、レオナルド・ダ・ヴィンチがキレそうなほ

ど歪だ。

素材となったものは神域にあった建物の残骸だろうか、ガラスらしき破片の輝きや木片、鉄屑が見える。

『貴様ら……我への侮辱……我が計画の妨害……！幾多の屈辱……決して許さぬ……！』

怒りのオーラが表情のない岩面からでもわかるほど溢れ出ている。

「五月蠅いな……許さないんだつたらとつとかかかって来なよ」

『最悪の結末を貴様らに与えてやろう……』

空間が揺らぐとそこからエヒトと同じ形をした岩人形が産まれる。

「怒り狂っても自分の大好きな数攻めは変わらないんですね」

「仕方ないわよ。長い間ずっとボツチだったんだから」

シアと雫は憐れむような目で岩人形を見る。

数を増やしていき、球体のように土郎達を包囲している。

「ボクはエヒトを直接やる。3人は増えたカスをお願い」

「了解(ですう)!!」

土郎がエヒトに真っ先に空中を駆け上がりソスタンボイを投影して切りかかる。

エヒトは今までとは打って変わって禍々しい靄がかかった剣を生成し、受け太刀する。

『貴様の魂を完全に消し去ってから、改めてその身体を我が手中に入れてやろう！』
「もう二度と彼女達と離れるのはごめんだよ」

「ん。なんで地球に来た時にすぐ食べなかつたのかわからない」

「優花お姉ちゃん!もつと食べたいの!」

「ミュウ……食べ過ぎたら、パパ達にあげる分なくなるよ?」

「そうよ。リーニヤの言う通りだから、また今度にしましょう?」

「これを使って菓子を作ればご主人様達も喜ぶじやろうな……」

「はいはい。チョコに感動してるとこ悪いけど、さっさと作るわよまずチョコを細かく刻んでちょうだい」

優花主導の元でチョコ作りが始まった。

「で、僕達はあげる人わかつてるけど鈴は誰にあげるんだい?」

このメンツの中で明確に、誰かと付き合っている話を聞いていないのである。

「うえ!?!」

「だって、鈴からはそんな気配感じなかつたからさ」

「う……言わなきゃダメ?」

「そーだなー……気になるなあ」

「わ、わかつたよう……りゆ、龍太郎くんだよ……」

鈴が恥ずかしがりながら答える。

「鈴、貴女、龍太郎といつの間?」

「えつとね……地球に戻ってから……龍太郎くんから告白されたの……」
「あの脳筋さんもやるもんですね」

鈴の恋模様には反応を示した所で、調理に意識を向ける。

この時、誰もが優花の料理スキルが有れば、指導も完璧だと、思われていた。

1時間が経過した……

「ユエ！直接鍋にチョコ入れない!!焦げる!」

直でチョコを溶かそうとする、吸血姫。

そう、ミユウ達以外を除けばユエが1番壊滅的であった。

思えばオルクス大迷宮でユエが料理した結果、悲惨な結末になっていた事を思い出したのだった。

「ユエさん!チョコの中に何を入れたんですか!一口サイズの鶏肉!絶対合わないですって!果物が合うならいける?何言ってるんですか?」

「ユエ……ハジメの為にアレンジするのは良いわ……それをするのは料理スキルがシアクラスになってからよ……」

そう言つて優花はユエの指導をメインに始めるのだった。

それからしばらくして。

「づ、づがれだ……」

ユエの指導にかかりつきりなつた優花は自分のチョコを作る前に消沈してしまつていた。

メンタルが折れかけていた。

得意分野でここまで苦戦したのは初めてだった。

「優花さん……大丈夫ですか?」

「大丈夫よ……少ししたらアタシも作るから……冷えて固まつたら完成よ。また明日呼ぶからみんな帰つて大丈夫よ」

そう言つて全員が帰宅し、優花は自身のチョコ制作に勤しむのであった。

一方で、男性陣はというと。

「バレンタインも近い事ですし、こっちからも何かプレゼントしようか」

「そうだね。逆チョコつてのもあるし」

「士郎の家で作るか。オレの家と言いたいところだが、家族がめんどくさい。特に兄貴なんか『バレンタインなんぞに現を抜かしているなんて馬鹿か?』つて言われかねん。オレだけなら兎も角、お前らまで不快な気分になられるのは困る」

幸利の家の設備もそうだが、家族側の問題があつた。

異世界に飛ばされてから戻つてきて、完全に見切られていた。

「とりあえず僕の家で作ろつか。それなりにキッチンが広いし」

結果ハジメ達の家で作ることとなった。

道中で板チョコを買い、南雲家へと訪れた。

「お邪魔します」

「いらつしやい。キッチンが空いてるから好きにして良いからね」

と、ハジメの母、南雲董が出迎えた。

「ありがとうございます」

礼を言ってから靴を脱ぎ、キッチンへと向かう。

「んで……何作るんだ？オレはマカロンとか作るが……」

「ボクは、ドーナツ、マフィン、バウムクーヘンだね。バウムクーヘン作る機械は投影して魔力で動かせば如何とでもなる」

「僕はカップケーキだね」

「おっけ。んじゃ作るか」

士郎が専用機を投影し、調理が進む。

久しぶりの本格的な菓子作りに3人はかなり時間をかけた。

ハジメが最終決戦の準備期間中に作ったアーティファクト、アークリスタルのおかげで、実際の時間はそこまで経っていない。

「うし、できたな」

「明後日に渡すだけだね」

「包装は投影したから問題なし」

「流石の投影だな……」

出来上がった完成品を包み、特別製の宝物庫に収納し、バレンタインを迎える。

士郎組 side

少し遠くの街の高台で3人は向かい合っていた。

リーニヤにはハート型のチョコリングを渡し、天野家の両親に預けている。

「さて、お兄ちゃん。今日は地球に戻ってから、初めてのバレンタインです」

「私達の手作りチョコ、どうぞ!」

「わたし達の想いを込めたチョコを食べてください!」

3人から渡されたチョコレート、恵里はチョコでデコレーションされたカップケーキ。雫はフルーツにチョコをかけてスプレーチョコで飾った物。シアがハート型のチョコだった。

「ありがとう3人も。で、これがボクからだね。恵里にはドーナツ、雫にはマフィン、シアにはバウムクーヘンだよ」

包装されたお菓子を交換する。

恵里は手渡されたドーナツを見て、土郎の瞳を見る。

「ねえお兄ちゃん。これの意味わかってるよね？」

「当然。理由含めて渡したからね」

「そっかあ……フフツ……」

恵里は嬉しそうにドーナツの入った袋で顔を隠す。

「確かに私達、個人個人に合わせているのね……」

「あのみなさん……わたしだけわからないのですが……」

「シアのだけ、中に紙いれてあるからそれで意味もそこでわかるよ」

異世界出身のシアだけ、意味を知らないのです。土郎は中にある手紙を入れていた。

その手紙を読んだ彼女はとても嬉しそうな顔を見せた。

お互いの菓子を食べ終えた土郎達はソファの上で寛ぐ。

「それじゃあ、お菓子食べた後は……何を食べるかわかるよね？」

恵里は色っぽく、土郎に尋ねる。

「良いの？」

「むしろ土郎さんが来なかつたら私達から行ったわよ」

「ベッドに行きましよう？わたし達も準備は既にしてますよ？」

3人に連れられ、長い夜を過ごすこととなった。

ハジメ組 side

ハジメは洒落た箱に詰められたカップケーキを持って香織達に呼ばれた街のホテルに向かつていた。

「ハジメくん!」

入り口付近で香織が手を大きく振りながら笑顔で自身の存在をアピールしている。

隣で小さくユエが手を振っている。リリアーナは緊張しているのかモジモジしている。そんな彼女とは真逆にレミアは余裕のある笑みを浮かべている。

「それじゃあ中に入ろっか」

ホテルでチェックインを済ませて、予約していた一室に入る。この部屋で数日過ごすのである。

「あなた。まずは私とミュウからよ」

レミアから渡されたのは弾丸の形をした複数のチョコだった。

「ミュウと話して私達で作れる形且つ、貴方のイメージに合う物がこれよ」

弾丸チョコを一つ口に運ぶ。

最初は普通のチョコだと思っていたが、パキッと噛み砕くとパチパチと何かが弾ける。

「!?パチパチする……!」

「ふふふ……ミユウの提案で、中にぱちぱちきやんでいー?というのを入れてみたんです」

「良い刺激で美味しいよ。ありがとう」

次に渡してきたのはリリアーナだった。

「私のはこちらです……あまり凝った物は作れませんでした……」

渡されたのはパンの間にチョコクリームをたっぷり塗った、サンドイッチだった。

「この世界でランチパックというのがあったので、それを参考にしました……お口に合えば良いのですが……」

リリアーナからのチョコを食べる。

柔らかいパンととろけたチョコの甘さが懐かしい。よくスーパーで手頃な菓子パンとして良く食べていた。

「美味しいよりリイ。でもサンドイッチなのは珍しいね」

「はい……実は、ハジメさんと王都でデートした際にサンドイッチを食べたのを思い出して……簡単に作れる物だったので」

「なるほど……ありがとう」

「次は私。はい」

ユエが手渡したのはチョコでコーティングされた果物。チョコフォンデュだ。

「私は料理下手だから……私は一番簡単な物にした……来年はもつと凝った物を作る」
それを一口食べる。

果物の甘さと酸味をチョコで底上げしたり、補ったりしている。

「美味しい……来年も楽しみにしてるよ」

「ん……」

最後は香織だ。

「はい！ハジメ君！私のチョコだよ！」

香織が取り出したのは色とりどりのマカロンだった。

「おお……あむ……美味っ……」

「ふふん……！自信も当然あるからね」

そのまま全員から貰ったチョコを食べ切る。

満足したハジメは、自分の作ったお菓子を宝物庫から取り出す。

「はい、これカップケーキ流石に僕も凝った物は作れないから簡単な飾り付けだけになっちゃった。料理と物作りは違うからね……」

そう言つてそれぞれに渡す。ミュウには両親に渡すように頼んでいる。

「かわいい……」

「食べてもよろしいでしょうか」

「勿論」

各々がハジメのカップケーキを食べる。

表情を見るに大丈夫そうだった。

「ご馳走様……美味しかったよハジメ君」

「それは良かった……」

「さてと……今日から数日はここで過ごす………この意味がわからないハジメじゃないでしょ？」

「こちらも長い夜になりそうだった。」

幸利組 side

幸利達も遠出しており、3人で買い物をし、その帰りに、夜景が綺麗な高台に優花とテイオに連れられて眺めていた。

「結構綺麗だな……」

「そうね。昔来た時と変わらない景色で良かったわ」

「自然が減った地球が故にここまで綺麗に見えるのかもしれないのう……」

しばらく夜景を眺めてから、幸利が宝物庫の中からマカロンを取り出す。

「これがオレのバレンタインだ」

そう言つて、二人にマカロンを渡す。

箱を開け、マカロンのの上を見るとそこには、それぞれの顔が精巧に描かれていた。

「ハジメのアワークリスタルで時間は余裕だったからな……」

「流石ね……アタシのチョコも結構凝つたけどここまでじゃないわよ……」

「うむ……これを見ると自信がなくなつてしまうのじゃ……」

そう言いながらも、2人はお菓子を渡す。

受け取つたお菓子は幸利のそれに劣らないほどのホワイトチョコなどで装飾されたチョコとマロングラッセだった。

「いやいや……お前の方がすごいだろ……」

彼も驚いたような表情を見せる。

お互いに渡したお菓子を口へと運ぶ。両者共に美味しそうな表情を浮かべるので、満足したようだ。

それからは何もなく、家へと戻るのだった。

「おっと……悪い悪い……」

「もう……いきなりだから驚いちやったよ……」

「いやー……本命チョコなんかもらったの初めてだから……嬉しすぎてさ……」

「あははっ……鈴も本気の本命チョコなんて作るの初めてだからさ……食べて感想聞かせてよ」

「おう……んじや……いただきます……」

袋から取り出し出てきたのは、ちよつと形が崩れた焼きチョコだった。

「どう……?」

「……」

「龍太郎くん……?」

チョコを口に入れてから何も喋らない。

「美味しいツ!!」

「わあツ!」

「すげーうめえ……」

龍太郎の口に合ったようで、鈴は心の底から安心して喜んだ。

「もう……食べてから何も言わないから怖かったんだよ?」

「済まんかった。幸利の奴と飯の食い歩きしてる時、めちやくちや味わうように食って

たからさ。それに倣って俺も味わうように長く確かめながら食う事にしたんだよ」

「そっか……」

「流石、俺の彼女だ」

「えへへ……」

異世界で遅れて恋人になった2人はこの後も買い物デートに出かけるのだった。

神の終焉

紫色の気味が悪い空間で4人が戦っている。

斬り合いの最中に士郎と恵里達が分断される。

ソスタンボイは吹き飛ばされ、相手の剣も虚空に消えたので士郎がいつものように干将・莫耶を投影するのだが、普段とは違う感覚が掌に伝わる。

チラリと二刀を見るのだが、形は変わっていない。

(なんだ……なんだこの違和感は……)

『戦いの最中に考え事か!』

「そもそもお前の所為だけどね!」

エヒトは虚空から光る岩の剣を取り出して、鏢迫り合いを始める。

ゴツゴツとした岩の剣の刀身に干将・莫耶の刃が削られていく。

(チツ……耐久は向こうが上かッ!)

士郎は鏢迫り合いでは不利と悟り、エヒトの腹を蹴飛ばし、二刀を投げつけ、壊れた幻想で距離を取る。

投げつけた二刀は岩石剣を粉碎し、エヒトの周りを大きく吹き飛ばす。

『ならばこれだ……』

エヒトが虚空から黒い十字架のような棒を出現させ、短い方をバランス悪く肥大化した右腕で掴みこちらに殴りかかってくる。

「ぐっ……」

新たな剣を投影する間もなく、士郎は右腕を金剛と強化魔術で硬質化して受け止める。

しかし、あっさりと腕を両断されてしまう。

「斬撃……取り回しは剣か……」

腕を再生も出来ずに士郎に斬りまくるエヒトは、何かを焦っているようだった。

彼を達磨状態にしようと執拗に残っている四肢を狙う。

「しつこいなあ……」

士郎は空間魔法で境界線を作り、一時的に距離を取ろうとするがエヒトはずらした境界線を一瞬で元に戻して、攻撃を続ける。

空中に刀剣を投影し、射出したり、その場で壊れた幻想をして時間を稼ぎ、再びソスタンボイを投影して黒い棒の剣を受け太刀する。

「流星にデュランダルの不壊の概念は貫けないか……」

ギリギリと剣同士が軋み合う。

互いの背後から魔弾が放たれ、それを避けつつ吹き飛ばしにかかる。

「チツ……！」

エヒトが剣先を士郎に突き付けると、虚空から、黒い岩の人形が現れ殴りかかってくる。

「邪魔ア！」

全て切り伏せ、残骸を掴み投げつけ、振り回して人形同士をぶつけて破壊する。

複数の残像が士郎へと剣や拳、槍や斧などで襲いかかる。

本物を見極めながらその攻撃を防ぐが、徐々に分身の数は増えていき、対処しきれずに斬撃を横つ腹に喰らい、腰から下が亡き別れになる。

エヒトは上半身を執拗に攻撃し、ズタボロになったところで、心臓に左手を突き刺す。

『これで私の身体が戻る……』

肉体が得られると思ったその瞬間に士郎の上半身が融解し、エヒトに絡みつく。

「お前ならそつち狙うよな！」

下半身から上半身を再生した士郎が、銃剣による一斉射撃でエヒトの依代を蜂の巣にする。

『小癩な真似を……まあ良い……その程度で戻っては興奮めよ……』

エヒトの依代は穴だらけの身体を直様修復する。

周囲に大量の魔力反応が士郎の感知技能に反応した。

「げっ……そういうことするんだ……」

虚空から現れたのは竜の顔面の骨を模った魔力大砲だった。

既に魔力が溜め込まれており、いつでも砲撃が可能な状態だった。

『消えよ……』

一斉砲撃を喰らう前に後ろへと跳び、防御するべき範囲を前方に絞り、その上で熾天覆う七つの円環を展開してガードする。

背後からは渦を巻きながら迫り来る、炎と純粹な魔力の塊

熾天覆う七つの円環を徐々に縮めていき、魔力の塊とぶつかるその一瞬に横へと避けて相殺する。

『ならばこれはどうだ？』

拘束を吹き飛ばしたエヒトは自身の身体から岩の触手のようなモノを生やし、鞭のように振るわせる。

四方八方からくる岩触手をソスタンボイで切り落とすのだが、切り落としたところから再生する上に、切り落とした先端がホーミング弾のように攻撃してくる。

「鬱陶しい……」

触手を髪の毛の先から発生させた、重力球に吸収させる。

重力を調整し、超小型惑星のようなモノを作り出す。

「惑星ストラーイック!!!」

士郎は岩石の惑星を投影した真つ黒なバットでホームランを打ちエヒトのどてつ腹にぶちかます。

そのまま同様の素材で出来たエヒトの身体を呑み込む。

惑星を爆散させてエヒトの魂を探す。

『我が依代は無限にある。その程度で我を殺すなど、不可能だ』

別の歪な人形が現れる。

「ならこれでまとめて消し飛ばしてやる……」

士郎は偽・螺旋剣を複数投影し、剣の柄頭を殴り、エヒトに向けて飛ばす。

『ククク……それではこちらはコレだ』

エヒトは業火球を掌に作り出し、そこから倍々に増やし、巨大化させていく。

その熱量は、かつて魔族の城でアルヴが作り出したモノよりも遥かに勝るモノだ。

「ならこっちは科学のお時間だ!」

士郎は再び重力魔法で業火球を吸い込む。

焔が消失し、残った熱だけが、視界を揺らす。

重力球を解除し、再び剣を投影して何度目かの空間姫大揺れするほどの斬り合いを始めるのだった。

一方で恵里達は、神の使徒や不完全な魔人天使兵、魔獣達を無双ゲームの如く蹴散らしていた。

「雑魚ばっかだけどキリがない！」

「おまけに喋らないから不気味ですう！」

神の使徒は地上を裏で操作する為に喋るノイント達と違い、無機質な顔のまま襲いかかり、未完成のまま呼び出された魔人天使兵はグズグスになった腕だったり足、顔などをボタボタと溢しながら武器を振り回している。

「ゾンビみたいになつた魔人族もなりかけなのか、気持ち悪いわね……」

背後、正面、真上、真下と空間が揺らぎ、そこから数えきれぬ程の敵が現れる。

『黒よ光なき世界よりも暗い黒よ、我が手に集まれ。全てを呑み込む大砲となれ。暗雲重煌体』！」

重力魔法と闇魔法を濃密に固め、放出する。

煌体に触れるだけでなく、一定の範囲にいる物体も煌体の中核へと呑み込まれ、圧縮されるように消えていく。

「これだけやっても……ですよね……」

上空がガラスが割れたように穴が開き、ワラワラと湧いてくる。

「これがゲームのレベル上げ作業なら万々歳なのに……これは地球の神様がゲームキャラの気持ちを分かれて言っているのかしら」

ウンザリしたように雫が現れる木偶人形を重力魔法で引き寄せてまとめて切り捨てる。

「何を言っているかわかりませんが、とにかく飽きたつてことはわかりました」

そうこう数十分木偶人形とやり合っていると、突然恵里達が戦っている空間が大きく揺れ、不安定になる。

「な、なんですか!？」

「……僕達が何かしたわけじゃない……お兄ちゃんの所からだね」

「今すぐにも加勢に行きたいけれども……この量を倒し切れないわ……」

3人で丁度良くインターバルを挟みながら、神の使徒達を無双ゲームしているので抑えているが、一人でも欠ければ形勢逆転されてしまう。

するとピシリと背後の空間から何者かが飛び出してくる。

「オラアアアア！」

金色に輝く左腕で目の前の木偶人形を粉碎する。

「ハジメ？」

「どうやら間に合ったみたいだね……」

壊された義手から新たな義手を装備し、魔眼のような魔石を取り付けたハジメが金色の立髪たちげの龍に乗って参戦してきた。

「王国で待機してたんじゃないんですか!？」

「してたよ？でもさ、このまま待つてるなんて性に合わないんだよね」

『地上の皆様、ハジメ様にこの戦いの参戦を頼まりましたからね』

「そんなこつたらうと思った……でもその義手はどうしたのさ」

「これ？天之河の聖剣を素材にして作った」

「光輝が？」

光輝が聖剣を渡したことに雫は驚いた。

地球にいた頃からハジメを目の敵とまではいかないが、親しくしようとすらしなかった彼が、半身とも言える剣を差し出したのだ。

「士郎達大丈夫かな……」

「負けることはねえだろうけど……苦戦だけは免れないだろ」

「誰が応援に行った方がいいだろうな……」

誰が参戦するか、この場の全員がハジメを視線で選んでいた。

「南雲……コイツで義手を作れないか?」

光輝は淡く光る聖剣をハジメに差し出す。

そんな彼をハジメはギョツとしたような顔で見る。

「……俺はもうこれ以上は戦えない……仮に戦えたとしても、確実に足手纏いだ。だから、お前にコイツを託す……」

「……わかった。借りるよ」

ハジメは聖剣を受け取り、アワークリスタル内で錬成を始める。

(イメージしろ……この聖剣を使って最適な扱いができる義手を……)

ハジメの脳内にとある人物が浮かび上がる。

隻腕の騎士、国王の側で戦い続けた一人の男。

聖剣が変形し、自身が改造した無骨な義手と違い、美しい意匠の義手が自身の左腕になつていた。

「できた……これ……名前もアレだね……『アガートラム銀色の腕』……前の義手と用法は違うけど、

今はこれがピッタリだ」

完成した白銀の義手は聖剣からの決戦への意志を感じる。

「ハジメ……その目じゃキツいだろ……コイツを付けてけ」

幸利がハジメの右目穴に何かを埋め込む。

「ちよつ幸利!?……右目の視界が……」

「オレもくたびれちまったからな……後は頼めるか?」

「任せて……確実に勝ってくるから」

するとレミアに連れ添って幼女2人がハジメの元に駆け寄る。

「パパ、頑張つてね」

「うん……!」

「ハジメお兄ちゃん……パパ達をおねがい!」

「任せて」

「あなた……生きて戻つて来てくださいね?」

「勿論だよ」

「……ハジメ!アレーティア呼んだ!」

「こつちも空間繋いだわ」

「よし……行つてきます!」

そう言つて、ハジメはユエの召喚したアレーティアに乗つて優花の開いたゲートに飛び込んで行つた。

「これで誰か一人は士郎の所に参加できるでしょ？」

「そうね……恵里、後はお願いでできるかしら」

「そうですね。ここは恵里さんが行くべきです。わたしや雫さんは近接がメインなので。全距離こなせて、この場の誰よりもあの人のことを知っている貴女に」

二人は恵里に士郎の事を託すことにしたのだった。

「わかった……ここは任せるよ3人共」

士郎の元へ、恵里は飛んで行った。

「んじゃ……第二ラウンド開始と行こうか！」

銀色の腕に魔力を流し込み、義手から魔力の剣が現れる。

「どっせえええええい！」

義手を横一文字に振り、神の使徒達を消滅させる。

さらにはアレーティアの高熱ブレスで追い討ちがかかる。

「おおう……えっぐ……」

あまりの出力にドン引きしていた。

「自分でやっておいて引かないで……」

「いやだつて……ここまで行くとは……」

「ちゃんと聖剣だったんですね、勇者の聖剣は。それにそれユエさんの魔法ですか？」

『そうよ。ユエが私を呼んだのよ』

「うえ!? 喋った!？」

「魂魄魔法かしら……?」

『その通りよ。ほら、前を向いて。来るわよ』

アレーティアが再びブレスを吐きながら伝え、戦闘を再開する。

恵里はクリスタルキーを使い、士郎の元へととぶ。

「お兄ちゃん!」

エヒトであろう複数の岩人形と斬り合っている彼の背後の一体を粉碎する。

「恵里!?! なんでここに!」

「ハジメが来たから、誰か一人こっちに来れるようになっただけ」

「また、みんなして無茶するんだから……」

「ブーメラン複数刺してあげようか?」

「ゴメンナサイ……」

二人して話していると、岩人形からピシリと何かが割れる音がした。

『我を無視するでないわ!』

「無視はしないよ……!と」

攻撃をかわしつつ岩人形を破壊する。

「お兄ちゃん、コイツら全部エヒトなの？」

「いや……一体一体はそこまでかな。大体はワンパンできるからね。ただ数が多いのは事実」

「僕達のところにもいたようなのと同じだね……」

「なるほど……撃ち漏らしがあつたわけではないと……」

「ところでお兄ちゃん……試したいことがありますうだけど……」

「あ、わかっちゃう？」

「何年妹兼恋人やつてると思ってるのさ」

「そう言う恵里にはに cand だように笑い、念話で伝えた。

「おっけ。任せて」

恵里は銀翼を大きく広げて、岩人形の群れに突撃しつつ、空から隕石を落とす。

「『望むはボクらの自由……思がままに世界を歩こう。広く青く澄み渡れ、美しき空は何処までも！』」

詠唱を始めた士郎の周りで白緑色の魔力が取り巻く。

『何をするつもりか知らぬが……させぬぞ！』

エヒトが士郎目掛けて、レーザーを放つが、それを熾天覆う七つの円環で防ぐ。

七枚の花弁の盾はミシミシと音を立てて割れていく。

「邪魔させるかあ！」

恵里が岩人形を蹴散らしながら銀翼を掲げ、魔力を込めて螺旋回転しながら突撃する。

「こんのお！『ブレイクスルー』！」

別のレーザーを恵里に向けて撃つが、それを貫いてエヒトにぶち当たる。

『グオア！おのれ小娘如きが！』

士郎に向けられていたレーザーは明後日の方向に向かって行った。

『人形如きでは足止めにもならぬか！』

その間にも士郎の詠唱は続く。

『ボクらを害する者よ……その身を戦火の名残へ堕ちろ……燃えろ、灰も残さず、抵抗の余地すら与えられぬまま滅びゆけ！』

3人の視界が純白に染まり、世界が塗り替えられる。

ドロドロとした空間が一瞬にして切り替わる。

「わあ……広い……それに風も気持ちいい……」

「そうだね……これがボクの心象風景……なのかな？」

恵里の視界には士郎が夢で見たであろう景色が広がっていた。

『き、貴様等の目は狂っているのか!?なんだこの地獄のような世界は！』

エヒトは狼狽えたように叫ぶ。

「お兄ちゃん……アイツどうしたの？」

「さてね……（多分……アレが見てるのは……火の海に囲まれた世界なんだろうな）」

エヒトは視界に広がる火の海を見て一つのトラウマを刺激したのか、焦るように魔法を展開——した筈だった。

『何っ！』

魔力が集まらない。

それどころか身体を巡る魔力すらおかしい。

武装しようにも剣すら出すことができない。

『天雷！天灼！何故だ！何故、魔法が使えぬ！』

ボロっ……

身体の表面の石が落ちる。

一つならまだ自然に落ちたと思っただろう。

一つまた一つと崩れ落ちていく。

『ひっ！』

身体の末端から崩れていく。

指が、掌が無くなっていく。

『やめろ……やめろ……やめてくれ……』

再構築しようにも魔力操作ができない為に崩れていくのを感じることしかできなかった。

頭部もなくなり遂には胴体も崩れた。

頭になる光球。エヒトの魂本体。

『ぎぎまらーよぐもわががらだをー！』

駄々をこねた子供のように叫ぶ。

「漸くお出ましたね……これでお前も終わりだエヒト！」

士郎は両手を前に突き出し、剣を握る動作を見せる。

握る手には青いグリップが、柄頭には紫色の宝玉、金色の鏝、白銀の刀身。刀身には

白緑のオーラを纏っている。

『『下天の聖剣』……これがボクが作れる最強の剣……神造兵装までとはいかないから

……疑似聖剣だね』

握る剣から放たれる威圧感にエヒトは本能的な恐怖を覚えた。

アレで斬られてしまえば終わる。死ぬと。

『嫌だ……死にたくない……嫌だア！』

エヒトは自身のメンツも捨てたようになりふり構わず魂のまま逃げ出した。

『我は生きたかった！私は唯一生き残った者としてぼくの世界が編み出した魔法が如何に素晴らしいか！』

「逃がさないよ……」

鎖を呼び出し、手の形に変形させ、エヒトの魂を捉える。

『離せっ！離せ！離してくれえ！』

「もう十分わかったよ、お前達の理法術は……」

ザンツ！

エヒトの魂を疑似聖剣で縦に一刀両断した。

真つ二つに割れた光球はサラサラと砂になるように崩れていく。

『あ、ああ……我は死ぬのか……』

「ああ、終わりだ邪神」

『ククク……死ぬなら神らしくプライドを保って死ねばよかったな……生に縋ろうと必死になった我はさぞかし滑稽だっただろう』

「どうだろうね……死にたくないのは人間誰しも思うでしょ。ボク達だってそうだし」

『人間……人間か……我は神になった言うのに……』

「格としては神にはなっただろうね。本質は強欲な人間のままだったけど」

『強欲な人間か……フフフ……』

「結局は何がしたかったんだお前は」

『わからぬ……最初は滅びゆく我が故郷から逃げ延びるだけの筈だったのだがなあ……』

「記憶で見たよ」

『乗っ取った時に見たのか』

「そうだね」

士郎は身体を乗っ取られている時にエヒトの記憶の一部を見ていた。

『……まあ我はやりすぎたのだろうな……今更こんな事を言ったところでだが』

「そうだな……地獄でたっぷり反省したらいいさ」

『そうさせてもらおう……そうだ人間』

「なに？」

『貴様の名は何と言う』

いきなり名前を聞かれたことに驚いた。

「天野士郎……ただの人間だった化け物さ」

あっさりと教えた。

『天野士郎……一つお前に教えておく……この空間……我が支えているのだが……』

「?」

『我が消えれば我もわからぬところに飲み込まれるぞ』

「は?」

『ククク……間抜けなその面を拝めただけでも満……足……だ……』

エヒトはその言葉を最後に、完全に消えていった。

それと同時に士郎の固有結界も解除され、崩れゆく空間へと戻る。

「どうする、お兄ちゃん」

「さーてね……」

一周回って冷静になった兄妹はどうするか脳を回転させる。

その時、正面から何か割って入ろうとしていた。

『ちよあー……! 絶妙なタイミングで現れるう、美少女戦士、ミレデイ・ライセンたん☆

ここに参上! 私を呼んだのは君達かな? かな?』

何か出てきた。

「うわ……」

『ちよつと? うわはないんじゃないかな☆しーくん』

「ミ、ミレデイ?」

『久しぶりだね、えーちゃん』

「ど、どうも……」

いきなり現れた珍物に動揺を隠すことができていない。

『ま、いつか。ここから早く出ないといけないわけだし。ウサギちゃん達も外に放り投げてきたばっかだし☆』

「シア達は無事なんだね」

既にこの空間から脱出していることに安心した。

『それとコレあげるよ。劣化してるとはいえこんな不安定な空間でないと碌に使えない不良品だけど脱出には十分なはずだから。後、サービスで回復薬だ！矢の能力を発動させるくらいには回復するはずだよん！それ飲んだら二人共さつさとゴー！ゴー！あとはお姉さんにまっかせなさい☆』

そう言つて界越の矢を渡す。

「ミレデイはどうするの？ここに残つてこれを止めるの？」

『その通り！超奥義☆な魔法で消しちゃうつもりだからさ。こんなほつといたら地上諸共アボン☆だし』

「そつか……なら任せるよ。行こう恵里」

「お兄ちゃん……わかった」

士郎はミレデイがここで死ぬつもりなのを理解していた。

恵里も何も言わなかった。

「ミレディ・ライセン…貴女の魔法はボク達の旅に大きく貢献してくれました」

「うん……短い間だったけど、一番汎用性があったね」

『当然だよーなんだってこの私の魔法だもん。ありがとうねみんな私の魔法を正しいことのために使ってくれて』

照れたようにクネクネと身体を動かす。

「……ミレディ・ライセン。あなたに敬意を。幾星霜の時を経て、尚、傷一つないその意志の強さ、紛れもなく天下一品だ。オスカー・オルクス。ナイズ・グリユーエン。メイ・メルジーネ。ラウス・バーン。リユーテイリス・ハルツイナ。ヴァンドウル・シユネー。あなたの大切な人達共々、ボクは決して忘れない」

「……うん。なに一つ、あなた達が足掻いた軌跡は無駄じゃなかった。必ず、後世に伝える」

『二人共……な、なんだよお。なんか、もうっ、なにも言えないでしょ！そんなこと言われたらー！ほら、本当に限界だから！さっさと帰れ、帰れ！』

更に気持ち悪くクネクネと身体を回す。

士郎達は界越の矢に魔力を込める。

「さようなら世界の守護者様」

「来世があつたら会おうね？僕たち長生きだから」

そう言つて二人は空間を飛び出していった。

『世界の守護者、ね。むず痒いなあ。最後の最後に、あれは反則……報われた、なんて思つちやつたじゃんか。それに来世かあ……フフフ、いつそみんな一緒だつたらいいなあ……』

ミレディは振り返つた視線の先に写る解放者仲間達の姿だつた。

『みんな……ただいまく！』

全てを呑み込むブラックホールが世界を吸い込んでいた。

ただいまと言える場所

地上ではエヒトとの最後の決戦の行方を待っていた。

紫色に激んだ空を誰もが見上げ、戦士達の無事を祈るように手を握っていた。

「……」

空が一際大きく輝く。

すると人影が三つほど現れる。

一人は長髪を揺らし、一人はウサミミを生やし、最後の一人は片腕を輝かせている。

三人は金色の立髪の龍に乗っている。

「あれは……ハジメ君達だ！」

真つ先に声を上げたのは香織だった。

三人は着陸する場所を探していた。

「……り〜！……え〜！」

ハジメの声が聞こえてくる。

「こっちこっち！」

龍は手を振る香織の元へと向かってくる。

「ただいま、香織、ユエ」

『香織様、ユエ。戻ったわ』

「…ん、お帰り」

「無事でよかったよ」

恋人達は抱きしめ合い、無事を喜び合う。

「シズシズ、オニーサンとエリリンは…?」

「二人なら大丈夫よ。」

「そうですね！あの二人ですから、いちやっついて帰ってきますよ」

二人の安否を不安に思う鈴と反対に、無事だと信じている雫とシア。

待つこと一時間。澱んだ空が突然、なくなり、数十分経つと割れ、人影が二つ落ちてくる。

「士郎さん達ですう！」

ウサミミで落下する音を聞き取ったシアが、空を指差す。

「あー……どうする恵里?」

「魔力も尽きて何もできないよ…?」

無重力落下している二人は、ゲートを開くのに魔力を使い果たし、空を飛ぶことすら

出来ずにいた。

恵里の背中の銀翼は力を失っており、輝きも失っていた。

「そういえばお兄ちゃん。僕、スカイダイビングしてみたかったんだよね」

「それはよかったけど……恵里、ちよつと口塞ぐよ?」

「ふえ?……んむっ!?!」

士郎は恵里の唇を塞ぎ、互いの体液——唾液を交換して魔力の回復を図った。

「……ふう。コレで少しは回復……恵里?」

「……あわわ、お兄ちゃん……!……こ、こんな、アニメみたいなキスして!」

顔を真っ赤に染めて、グルグル目になって混乱していた。

「ほら、落ち着いて、魔法の準備して?」

「……ううう」

二人は手を重ねて魔法を発動する。

一つは重力、二つは風、三つは土、四つは水、五つは氷。

5種類の魔法をかけ合わせ、生み出された物は、

「『雲海』」

白くふわふわとした広範囲の雲海が広がる。

ボーン!と雲に落ちる。

本来雲を構成するのは大気中の水分や氷なのだが、自身等が乗る為に土や重力魔法を使っている。

「コレ、黄色だったら筋斗雲だね」

「染めちゃう？」

「いやいいかな。また落ちるんだし」

「そうだね。魔力も回復し始めてるから、翼も動かせるよ」

そう言つて、座りながら背の翼を広げる。

「それじゃあ降りよっか」

そのまま雲からゆっくりと飛び降りる。

地上で大勢の人が手を振っていたり声上げている。その中から二人がこちらに跳んでくる。

「士郎さーん！ 恵里ーん！」

「士郎さーん！ 恵里さーん！」

ポニーテールとウサミミ少女だ。

「雫！ シア！」

二人が腕を広げているので、士郎達は二人に向かって飛び、抱き締める。

「お二人共お帰りなさいですう！」

「信じてだけけど、ちょっと怖かったわ」

「ただいま」

「あはは、心配かけてごめんね」

そのまま四人で笑い合って地上に降り立った。

「みんな、ただいま！」

「「「お帰り！」」」

地上の戦士達全員が出迎える。

ボロボロになった戦士達だが怪我は殆どなく、香織達の魔法で傷は癒やされていた。

「パパアーーーーー！ママアーーーーー！」

降り立った2人に少女が突撃してくる。

「ただいまリーニャ」

「ただいま」

「おかえりなさい！」

ふにぶにの頬をスリスリと寄せる。

「心配かけてごめんね」

「心配だったけど必ず戻ってくるって信じてた」

親子の再会を噛み締めていると、ハジメが呆れながらも心配した顔で歩いてくる。

「真つ逆さまに落ちてくるから驚いたよ……」

「あはは……脱出に魔力使い切っちゃったからね……そうだハジメ、ちよつと右目失礼するよ」

士郎はハジメの魔眼石を媒介に、魔力を込め始める。

「どう?」

鏡を見せながらハジメに聞く。

「うわっ……目が治ってる……」

「嘘!?!」

ハジメの目が目の色以外元に戻っていた。

「……治せる魔力があるなら、雲作らなくても良かったんじゃないの?」

「うーんとね。今こうして地に足がついてるから、地面に溶け込んだ魔力を吸い上げて回復は相当早いんだ」

「……なるほど」

「全く、無茶ばかりしやがって……」

「そつちもでしょ? 両腕斬られたって聞いたけど」

「げっ……いつの間にか知ったんだ……兎に角だ無事戻ってきてよかった。ほら、向こうでみんながお待ちだ!」

幸利に背を押されて、皆の所に送られ、揉みくちやにされる。

人間族、亜人族、竜人族、魔人族の戦士達に振り回されて、肩を組まれ、色々された。日が暮れる頃には宴が開かれた。

国中から集まった料理人達が料理対決をしたり、腕っ節に自身のある男達が腕相撲をしたり、組み木を中心に男女ペアになって踊ったりと、一晩中大戦の勝利に酔いしれていた。

「ヴェアベルトさん……隣……いいでしょうか？」

「愛子殿か……構わないぞ」

グラスに入った酒を飲み干して、暇を持て余したように踊る大衆を見ていた彼の隣に座る。

「こうして、この世界の人々が同じ釜の飯を食べているのを見ると……諦めずに戦って良かったと思える」

「そうですね……」

「愛子殿の世界はどうだ？……争いとは無縁と聞いているが」

「私達のですか……」

返答に困ってしまう。

日本では大きく人種差別は行われてはいないが世界規模で見ると、トータスと変わら
ない。

それを正直に話すか迷っている。

「……私が住んでいる国では殆どないです。ただ地球規模だと、戦争も差別も絶えませ
ん」

嘘はつけなかった。

「…そうか。だが我々の世界がこうなれた。だからそちらもいつかはなくなるだろう
さ」

「そうですね……」

「そうだ」

「どうしましたか?」

するとヴェアベルトが立ち上がり、愛子の手を取り、燃える組み木の元へ連れて行く。

「この際だ、私達も踊ろうか……!」

「ええ!? わ、私踊りは!」

「大丈夫! 私に合わせれば良い!」

二人は大衆の中に混ざり踊る。

ぎこちない動きで焦るようにヴェアベルトについてくる愛子とそんな彼女を余裕を

持つてリードする。

「ぐうおおおおお……愛子お……」

「くそお……あの魔族の男めえ……」

「オレたちの愛子……」

悔しそうに踊る二人を遠目に見ているのは、かつてウルにて彼女の護衛を務めていた神殿騎士だった。

彼らも最終決戦を戦い抜いたのだ。

戦い抜いたのだが、その活躍は愛子の耳に届くことは殆どなかった。

踊りに彼女を誘おうとしたのだが、ちょうど目の前でヴェアベルトに連れて行かれていた。

「愛ちゃん、あの人といい感じだね……」

「そうだね……しかも愛ちゃんも満更でも無さそう」

「……このまま付き合っちゃったりしてな」

相川の一言に神殿騎士が反応し、愛子を誘おうと立ち上がるが、妙子の鞭によって拘束され、そのまま犬神家のように頭から地面に埋められた。

「全く。人の恋路に茶々出すやつは馬に蹴られて死ねばいいんだよ」

冷めた目で間抜けな姿の彼等を見る。

その間に愛子達は、大衆から離れており、誰もいない所へと移動していた。

「愛子殿？」

「ここなら誰もいませんね……」

「それはそうだが……こんな所まで来てどうしたのだ？」

愛子は深呼吸を何度もしてバクバクと高鳴る心臓の鼓動を胸に手を当てて落ち着かせる。

「ヴェアベルトさん……私は貴方のことが好きです。私の事を貴方の心の片隅に置くだけで大丈夫です……」

儂く笑う彼女は、そのままヴェアベルトの隣に座る。

彼もまた座る。そして彼女の肩を抱いて、返事を返す。

「……私は貴女の住む世界に着いて行くことはできない。簡単に会う事もできないだろう。それでも私の事を想って……くれるのだろうか」

ヴェアベルトは愛子の顎に手を添えて、そのまま唇を塞ぐのだった。

同時刻、誰もいないハイリヒ王国の屋上で、土郎と恵里は2人きりで夜空を眺めていた。

雫とシアの2人は踊り疲れたのか少し離れたところでスヤスヤと眠っている。その

2人の間でリーニヤが寝ている。

「すごいねお兄ちゃん……満天の星空」

「……そうだね」

星空に感動する恵里と対照的に何か暗いモノを抱えたいのか、ぎこちなく笑っている。

「それでお兄ちゃん……伝えなきゃいけないことって何？」

「……報告事項みたいなモノだね。まず右腕だね」

差し出された右腕は、転移する前と違い、浅黒く焼けていた。

「……投影焼けしてるって聞いたけど、ここまで進んでたの!？」

「うーん……最初に投影焼けしたのは、オルクスのヒュドラ相手に是、射殺す百頭した時かな……流石に人間の身体でヘラクレスの絶技を再現したから……」

「でもそれで焼けたことあった？」

「特にそんなことはなかったね。ただエヒトにトドメを刺す時は大丈夫だったんだけど、夜になってからかな……右腕が熱く焼けるような感覚がして、見たら右腕全部が焼けてた。おまけに前髪もメッシュ見たくなっただけ……」

月明かりだけとはいえ、暗視能力もあるので色がはつきりと眼に映る。

トータスに来る前は黒かった髪も変わってしまった。元に戻す事もできない。

「お兄ちゃん……」

「まあ一度アレを投影したし、今後は大丈夫だと思っけど」

「そっか……まあ僕も似たようなモノだけどね……」

恵里の髪は真つ白に色が抜け落ちており、元の色に戻そうと再生魔法を使ったのだが、効果が現れなかった。

兄妹2人は髪色が戻らなくなってしまった。

「お兄ちゃんとお揃いだね」

「先に言われちゃった」

投影焼けで褐色に変色した右手に白い肌の手が重なり、指を絡めて手を繋ぐ。

そのまま士郎の胸に転がり抱きつく。

「ねえ……お兄ちゃん……多分僕たち簡単に死ねないよね……」

「そうだね……」

士郎はエヒトに身体を弄られ、恵里は魔物や天使、神を取り込んだ。

その影響が寿命という概念を失ってしまった。大昔の人類が望んだ擬似的な永遠の命を、手に入れていた。

互いに詳しく調べなくても本能でわかっていた。

「ずっと……地球が、太陽系が、銀河が——宇宙が終わっても僕と一緒に居てくれます

か？」

顔を埋めて問う。

「当たり前だよ……ボクは恵里を絶対に離さない……ねえ恵里、顔を上げて？」

「うん……」

潤んだ瞳と上気した頬、小さな唇。ふわふわとした白い髪をゆつくりと手櫛で梳くように撫でる。

「ふわあ……お兄ちゃんのそれ好き……」

「昔から何かあったらいつも頼んできたよね……」

「うん……お兄ちゃんがあの日、僕の事を見つけてくれた日から頭を撫でてくれた時からずっと好き」

思い出されるあの日の事件。

その日が2人を結びつけたのだろう。

「んむう……れる……」

何度したかもわからないキスをする。

舌が絡み合う度に、2人が深く、広く、概念的に繋がっていく。

この時、起源の『鎖』と『執着』が混ざり合って、2人を引き離す事が出来なくなっていた。

離れたとしても、必ず再会が確約されていた。
神であろうと、悪魔であろうと何者も2人を邪魔をすることはできない。